静岡県掛川市

向山遺跡発掘調査の記録

1994年3月

掛川市教育委員会
株式会社 川島デベロップ
静 岡 人 類 史 研 究 所

静岡県掛川市

向山遺跡発掘調査の記録

1994年3月

掛川市教育委員会
株式会社 川島デベロップ
静 岡 人 類 史 研 究 所

序

静岡県掛川市教育委員会
教育長　大西　珠枝

掛川市域は自然に恵まれた、往古より人が住み着き歴史が重ねられてきた地域であり、いたるところにその生活の歩みが記された遺跡が残されています。私たちの今日の繁栄は、先人たちのたゆまぬ努力と労苦の上に築かれていることを思うと、はるか昔にこの地に生き、その足跡を留めた先人たちに畏敬の念を抱かずにいられません。

昭和25年に文化財保護法が施行されて以来、多くの方々の努力により国民の文化財に対する理解が深まり、その保存・活用がはかられているのは喜ばしいことです。特に遺跡や遺物は人類共有の大切な宝として、子孫に継承すべきもので、私たちはそれらの文化財を責任をもって愛護する義務を負っているといえます。

しかし、現代に生きる私たちの生活のために、遺跡が姿を変えたり、消滅したりすることが多いのも事実です。その場合には、事前に発掘調査を実施し、記録保存というかたちで掛川市の古代史解明やこれからの文化財行政などに役立つようにしています。

このたび、工場用地造成に先立ち、用地内に所在する埋蔵文化財である向山遺跡について、静岡県教育委員会の指導を得て、掛川市教育委員会が調査主体者となり、静岡人類史研究所が発掘調査を担当して遺跡調査が実施されました。

調査の結果、弥生時代後期の方形周溝墓や近世の荼毘墓・土壙墓などを検出し、地方史解明の貴重な史料を得ることができました。これらは今後の埋蔵文化財への理解、郷土史の史料となることはもとより、生涯学習宣言都市掛川市の潤いのあるまちづくりに用されるよう切に願っています。

最後にこの調査報告書作成に際し、静岡県教育委員会、事業主、地元の皆様はじめ関係の皆様には当初より深いご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

例　　言

1．本報告書は掛川市岡津字向山に計画されている工場用地造成予定地内に存在する向山遺跡の発掘調査記録である。

2．本調査は株式会社川島デベロップの委託により、掛川市教育委員会が調査主体者となり、静岡人類史研究所が調査を担当して実施したものである。

3．調査にあたっては、静岡県教育委員会文化課および掛川市教育委員会の指導のもとに「向山遺跡発掘調査連絡会」を設置し、連絡会において発掘方法・工程等の協議を行いながら調査を進行した。

「向山遺跡発掘調査連絡会」の構成は以下の通りである。

・調査主体者	掛川市教育委員会教育長	大西　珠枝
・調査指導機関	静岡県教育委員会文化課主席指導主事	佐藤　達雄
	静岡県教育委員会文化課指導主事	五島　康司
・調査事務局	掛川市教育委員会社会教育課課長	榛葉　　稔
	掛川市教育委員会社会教育課文化係長	沢村　久雄
	掛川市教育委員会社会教育課主任	松本　一男
・調査担当者	静岡人類史研究所所長	森　　威史
	静岡人類史研究所調査部長	片平　　剛
・開発計画者	株式会社川島デベロップ代表取締役	氏原　　功

4．発掘調査は、平成５年６月３日より平成５年９月15日まで実施した。また、遺物の整理と報告書の原稿作成は、平成５年９月16日より平成６年１月17日まで実施した。

5．遺物の実測およびトレースは小金澤保雄・大倉妙子・杉山里英子・北原比査子が、図表の作成は片平剛・小金澤保雄が行った。写真撮影は仲澤正人が行い、空中写真の撮影は株式会社東日に委託した。

6．原稿の執筆は、松本一男（掛川市教育委員会、第Ⅰ章）、仲澤正人（第Ⅱ章）、小金澤保雄（第Ⅲ章、第Ⅳ章第３節－３～５、第４節、付表）、片平　剛（第Ⅳ章第１節、第２節、第３節－１・２）、森　威史（第Ⅴ章）が担当し、編集は森　威史が行った。

7．本調査における図面・写真・遺物・コンピュータのデータはすべて掛川市教育委員会で保管している。

8．発掘調査および遺物整理の参加者

・調査員

森　威史(静岡人類史研究所所長)　　片平　剛(静岡人類史研究所調査部長)

小金澤保雄(静岡人類史研究所主任研究員)　仲澤正人(静岡人類史研究所学芸員)

・発掘調査作業員

宮崎昭太郎　伊東みさえ　伊藤正夫　岩本登五郎　山崎祐代　村松幸雄　安田小作　堀内藤一　杉山弘　久保港市　野沢けい　鈴木良彦　中村万平

・遺物整理

小金澤保雄　大倉妙子　杉山里英子

9．本書における遺構・遺物の表示は以下の通りである。

① 遺構挿図の縮尺

各遺構の縮尺はバースケールで示した。

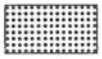
② 遺構挿図の方位

特に示さない限り図の上が北（磁北）を示す。

③ スクリーントーンおよびシンボルマーク

i．スクリーントーン

　撹乱層　 　地山層(黄褐色砂礫層)

 　土器の施釉部分

ii．シンボルマーク

シンボルマークに付した数字は遺物番号である。

o　土器　　△　人骨片

○　銭貨　　●　礫(棺座石を含む)

◇　鉄製品　　□　竹製品

×　石製品

④ 遺物挿図の縮尺

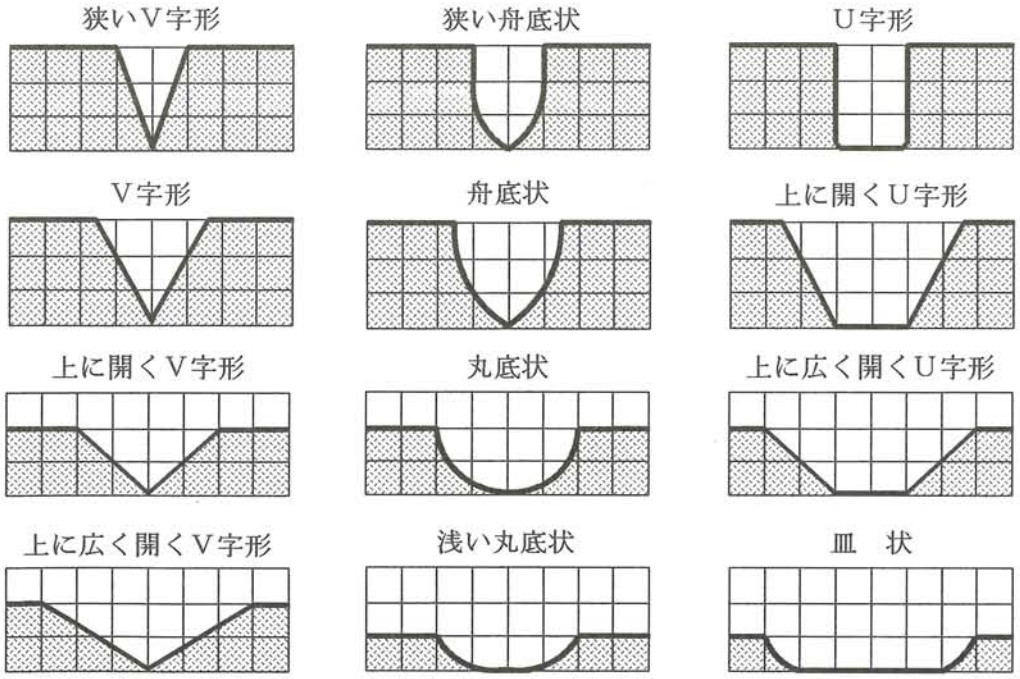
土器・鉄製品・石製品の実測図の縮尺はバースケールで表示した。銭貨の拓影は実物大である。

⑤ 写真図版の縮尺

土器・鉄製品・石製品・銭貨・人骨片の縮尺は任意である。

⑥ 断面図の水糸レベルは海抜高を示し、単位はメートルである。

⑦ 遺構の断面形状(長径または長軸に対する断面)の表現は下の図に基づくものである。



目　　次

序　　掛川市教育委員会教育長　大西　珠枝
例言
目次

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境
　第１節　遺跡の立地 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 7
第Ⅲ章　発掘調査の概要
　第１節　調査方法 …… 9
　第２節　発掘調査の経過 …… 11
　第３節　遺跡の層序 …… 15
第Ⅳ章　発掘調査の結果
　第１節　遺構の概要 …… 17
　第２節　溝状遺構
　　１．方形周溝墓と遺物 …… 19
　　２．溝状遺構と遺物 …… 30
　第３節　穴状遺構
　　１．柱穴状遺構と遺物 …… 65
　　２．土坑と遺物 …… 88
　　３．土壙墓と遺物 …… 159
　　４．荼毘墓と遺物 …… 195
　　５．火葬墓と遺物 …… 225
　第４節　表土層からの出土遺物 …… 227
第Ⅴ章　調査の成果と課題 …… 232
付表１　土器観察表 …… 238
付表２　鉄釘計測表 …… 244

写真図版

挿図目次

図Ⅱ－１－１　向山遺跡の位置図 …… 2
図Ⅱ－１－２　向山遺跡周辺の地形区分図 …… 2
図Ⅱ－１－３　向山遺跡周辺の地質区分図 …… 4
図Ⅱ－２－１　向山遺跡周辺の遺跡分布図 …… 6
図Ⅲ－１－１　調査対象地域の地形とグリッド設定図 …… 8
図Ⅲ－２－１　発掘調査の経過図（１） …… 10
図Ⅲ－２－２　発掘調査の経過図（２） …… 12
図Ⅲ－３－１　調査区北側の層序模式図 …… 14
図Ⅳ－１－１　遺構分布図 …… 16
図Ⅳ－２－１　方形周溝墓の分布図 …… 18
図Ⅳ－２－２　第１号方形周溝墓の平面および断面図 …… 20
図Ⅳ－２－３　第２号方形周溝墓の平面および断面図 …… 22
図Ⅳ－２－４　西溝(第33号溝)から出土した土器片の拓影 …… 23
図Ⅳ－２－５　主体部の平面および断面図 …… 24
図Ⅳ－２－６　主体部の覆土内から出土した土器片の拓影 …… 25
図Ⅳ－２－７　封土内の遺物分布図 …… 26
図Ⅳ－２－８　封土から出土した土器片の拓影 …… 27
図Ⅳ－２－９　第３号方形周溝墓の平面および断面図 …… 28
図Ⅳ－２－10　南溝(第25号溝)の遺物出土状況図 …… 28
図Ⅳ－２－11　南溝から出土した弥生土器 …… 29
図Ⅳ－２－12　溝状遺構の分布図 …… 30
図Ⅳ－２－13　第１号溝の平面および断面図 …… 31
図Ⅳ－２－14　第２号溝の平面および断面図 …… 32
図Ⅳ－２－15　第３号溝の平面および断面図 …… 33
図Ⅳ－２－16　第４号溝の平面および断面図 …… 34
図Ⅳ－２－17　第５号溝の平面および断面図 …… 34
図Ⅳ－２－18　第６号溝の平面および断面図 …… 36
図Ⅳ－２－19　第７号溝の平面および断面図 …… 36
図Ⅳ－２－20　第８号溝の平面および断面図 …… 38
図Ⅳ－２－21　第10号溝の平面および断面図 …… 38
図Ⅳ－２－22　第11号溝の平面および断面図 …… 40
図Ⅳ－２－23　第12号溝の平面および断面図 …… 40
図Ⅳ－２－24　第13号溝の平面および断面図 …… 42
図Ⅳ－２－25　第14号溝の平面および断面図 …… 42
図Ⅳ－２－26　第15号溝の平面および断面図 …… 44
図Ⅳ－２－27　第18・19号溝の平面および断面図 …… 45
図Ⅳ－２－28　第20号溝の平面および断面図 …… 46
図Ⅳ－２－29　第21号溝の平面および断面図 …… 46
図Ⅳ－２－30　第22号溝の平面および断面図 …… 48
図Ⅳ－２－31　第22号溝から出土した銭貨 …… 48
図Ⅳ－２－32　第23号溝の平面および断面図 …… 49
図Ⅳ－２－33　第28号溝の平面および断面図 …… 50
図Ⅳ－２－34　第29号溝の平面および断面図 …… 51
図Ⅳ－２－35　第31号溝の平面および断面図 …… 52
図Ⅳ－２－36　第32号溝の平面および断面図 …… 52
図Ⅳ－２－37　第34号溝の平面および断面図 …… 54
図Ⅳ－２－38　第35号溝の平面および断面図 …… 54
図Ⅳ－２－39　第34号溝から出土した弥生土器 …… 55
図Ⅳ－２－40　第36号溝の平面および断面図 …… 56

図Ⅳ－２－41　第37号溝の平面および断面図 …… 56
図Ⅳ－２－42　第38号溝の平面および断面図 …… 58
図Ⅳ－２－43　第39号溝の平面および断面図 …… 58
図Ⅳ－２－44　第39号溝から出土した土師器片 …… 59
図Ⅳ－２－45　第40号溝の平面および断面図 …… 60
図Ⅳ－２－46　第41号溝の平面および断面図 …… 60
図Ⅳ－２－47　第42号溝の平面および断面図 …… 62
図Ⅳ－２－48　第43号溝の平面および断面図 …… 62
図Ⅳ－３－１　柱穴状遺構の分布図 …… 64
図Ⅳ－３－２　第１～８号柱穴(掘立柱建物跡)の平面および断面図 …… 66
図Ⅳ－３－３　第９・10号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 68
図Ⅳ－３－４　第11・12号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 69
図Ⅳ－３－５　第13号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 70
図Ⅳ－３－６　第14号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 70
図Ⅳ－３－７　第15・16号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 71
図Ⅳ－３－８　第17号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 72
図Ⅳ－３－９　第18号柱穴状遺構の平面および断面 …… 72
図Ⅳ－３－10　第19・20号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 73
図Ⅳ－３－11　第21・22号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 74
図Ⅳ－３－12　第23号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 75
図Ⅳ－３－13　第24号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 75
図Ⅳ－３－14　第25・26号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 76
図Ⅳ－３－15　第27号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 76
図Ⅳ－３－16　第28・29・30号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 78
図Ⅳ－３－17　第29号柱穴状遺構からの出土した土師器片 …… 79
図Ⅳ－３－18　第31・32号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 80
図Ⅳ－３－19　第33号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 80
図Ⅳ－３－20　第32号柱穴状遺構から出土した土師器片 …… 81
図Ⅳ－３－21　第34・35号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 82
図Ⅳ－３－22　第36・37号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 82
図Ⅳ－３－23　第34号柱穴状遺構から出土した陶質土器 …… 83
図Ⅳ－３－24　第38号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 84
図Ⅳ－３－25　第39号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 84
図Ⅳ－３－26　第40号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 85
図Ⅳ－３－27　第41号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 85
図Ⅳ－３－28　第42号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 86
図Ⅳ－３－29　第43号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 86
図Ⅳ－３－30　第44号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 87
図Ⅳ－３－31　第45・46号柱穴状遺構の平面および断面図 …… 87
図Ⅳ－３－32　土坑の分布図 …… 88
図Ⅳ－３－33　第１号土坑の平面および断面図 …… 89
図Ⅳ－３－34　第２号土坑の平面および断面図 …… 90
図Ⅳ－３－35　第３号土坑の平面および断面図 …… 90
図Ⅳ－３－36　第４号土坑の平面および断面図 …… 92
図Ⅳ－３－37　第５号土坑の平面および断面図 …… 92
図Ⅳ－３－38　第６号土坑の平面および断面図 …… 94
図Ⅳ－３－39　第７号土坑の平面および断面図 …… 94
図Ⅳ－３－40　第８号土坑の平面および断面図 …… 96
図Ⅳ－３－41　第９号土坑の平面および断面図 …… 96
図Ⅳ－３－42　第10号土坑の平面および断面図 …… 98
図Ⅳ－３－43　第11号土坑の平面および断面図 …… 98
図Ⅳ－３－44　第12号土坑の平面および断面図 …… 100

図Ⅳ－３－45　第13号土坑の平面および断面図 …… 100
図Ⅳ－３－46　第14号土坑の平面および断面図 …… 102
図Ⅳ－３－47　第15号土坑の平面および断面図 …… 102
図Ⅳ－３－48　第16号土坑の平面および断面図 …… 104
図Ⅳ－３－49　第17号土坑の平面および断面図 …… 104
図Ⅳ－３－50　第18号土坑の平面および断面図 …… 106
図Ⅳ－３－51　第19号土坑の平面および断面図 …… 106
図Ⅳ－３－52　第20号土坑の平面および断面図 …… 108
図Ⅳ－３－53　第21号土坑の平面および断面図 …… 108
図Ⅳ－３－54　第22号土坑の平面および断面図 …… 110
図Ⅳ－３－55　第23号土坑の平面および断面図 …… 110
図Ⅳ－４－56　第24号土坑の平面および断面図 …… 112
図Ⅳ－３－57　第25号土坑の平面および断面図 …… 112
図Ⅳ－３－58　第26号土坑の平面および断面図 …… 114
図Ⅳ－３－59　第27号土坑の平面および断面図 …… 114
図Ⅳ－３－60　第28号土坑の平面および断面図 …… 116
図Ⅳ－３－61　第29号土坑の平面および断面図 …… 116
図Ⅳ－３－62　第30号土坑の平面および断面図 …… 118
図Ⅳ－３－63　第31号土坑の平面および断面図 …… 118
図Ⅳ－３－64　第32号土坑の平面および断面図 …… 120
図Ⅳ－３－65　第33号土坑の平面および断面図 …… 120
図Ⅳ－３－66　第34号土坑の平面および断面図 …… 122
図Ⅳ－３－67　第35号土坑の平面および断面図 …… 122
図Ⅳ－３－68　第36号土坑の平面および断面図 …… 124
図Ⅳ－３－69　第37号土坑の平面および断面図 …… 124
図Ⅳ－３－70　第37号土坑から出土した陶器 …… 125
図Ⅳ－３－71　第38号土坑の平面および断面図 …… 126
図Ⅳ－３－72　第39号土坑の平面および断面図 …… 126
図Ⅳ－３－73　第40号土坑の平面および断面図 …… 128
図Ⅳ－３－74　第41号土坑の平面および断面図 …… 128
図Ⅳ－３－75　第41号土坑から出土した石製品の破片 …… 129
図Ⅳ－３－76　第42号土坑の平面および断面図 …… 130
図Ⅳ－３－77　第43号土坑の平面および断面図 …… 130
図Ⅳ－３－78　第44号土坑の平面および断面図 …… 130
図Ⅳ－３－79　第45号土坑の平面および断面図 …… 132
図Ⅳ－３－80　第46号土坑の平面および断面図 …… 132
図Ⅳ－３－81　第46号土坑の遺物の出土状況図 …… 132
図Ⅳ－３－82　第46号土坑から出土した土師器の口縁部 …… 133
図Ⅳ－３－83　第47号土坑の平面および断面図 …… 134
図Ⅳ－３－84　第48号土坑の平面および断面図 …… 134
図Ⅳ－３－85　第49号土坑の平面および断面図 …… 134
図Ⅳ－３－86　第50号土坑の平面および断面図 …… 136
図Ⅳ－３－87　第51号土坑の平面および断面図 …… 136
図Ⅳ－３－88　第52号土坑の平面および断面図 …… 138
図Ⅳ－３－89　第53号土坑の平面および断面図 …… 138
図Ⅳ－３－90　第54号土坑の平面および断面図 …… 140
図Ⅳ－３－91　第55号土坑の平面および断面図 …… 140
図Ⅳ－３－92　第56号土坑の平面および断面図 …… 142
図Ⅳ－３－93　第57号土坑の平面および断面図 …… 142
図Ⅳ－３－94　第57号土坑から出土した陶質土器の蓋部 …… 143
図Ⅳ－３－95　第58・59号土坑の平面および断面図 …… 144
図Ⅳ－３－96　第60号土坑の平面および断面図 …… 144

図Ⅳ－３－ 97　第61号土坑の平面および断面図 …… 146
図Ⅳ－３－ 98　第62号土坑の平面および断面図 …… 146
図Ⅳ－３－ 99　第62号土坑から出土した土師器の口縁部 …… 147
図Ⅳ－３－100　第63号土坑の平面および断面図 …… 148
図Ⅳ－３－101　第64号土坑の平面および断面図 …… 148
図Ⅳ－３－102　第65号土坑の平面および断面図 …… 150
図Ⅳ－３－103　第66号土坑の平面および断面図 …… 150
図Ⅳ－３－104　第67号土坑の平面および断面図 …… 152
図Ⅳ－３－105　第68号土坑の平面および断面図 …… 152
図Ⅳ－３－106　第69号土坑の平面および断面図 …… 154
図Ⅳ－３－107　第70号土坑の平面および断面図 …… 154
図Ⅳ－３－108　第71号土坑の平面および断面図 …… 156
図Ⅳ－３－109　第72号土坑の平面および断面図 …… 156
図Ⅳ－３－110　第72号土坑の遺物出土状況図 …… 156
図Ⅳ－３－111　第71号土坑から出土した遺物 …… 157
図Ⅳ－３－112　第72号土坑から出土した遺物 …… 157
図Ⅳ－３－113　土壙墓の分布図 …… 158
図Ⅳ－３－114　第１号土壙墓の平面および断面図 …… 160
図Ⅳ－３－115　第１号土壙墓の遺物分布図 …… 160
図Ⅳ－３－116　第１号土壙墓の遺物出土状況図 …… 161
図Ⅳ－３－117　第１号土壙墓から出土した遺物 …… 162
図Ⅳ－３－118　第２号土壙墓の平面および断面図 …… 164
図Ⅳ－３－119　第２号土壙墓の遺物分布図 …… 164
図Ⅳ－３－120　第２号土壙墓の遺物出土状況図 …… 166
図Ⅳ－３－121　第２号土壙墓から出土した遺物 …… 166
図Ⅳ－３－122　第３号土壙墓の平面および断面図 …… 168
図Ⅳ－３－123　第３号土壙墓から出土した遺物 …… 168
図Ⅳ－３－124　第４号土壙墓の平面および断面図 …… 170
図Ⅳ－３－125　第４号土壙墓の遺物分布図 …… 170
図Ⅳ－３－126　第４号土壙墓から出土した遺物 …… 171
図Ⅳ－３－127　第５号土壙墓の平面および断面図 …… 172
図Ⅳ－３－128　第５号土壙墓の遺物分布図 …… 172
図Ⅳ－３－129　第５号土壙墓の遺物出土状況図 …… 174
図Ⅳ－３－130　第５号土壙墓から出土した遺物 …… 174
図Ⅳ－３－131　第６号土壙墓の平面および断面図 …… 176
図Ⅳ－３－132　第６号土壙墓の遺物分布図 …… 176
図Ⅳ－３－133　第６号土壙墓の遺物出土状況図 …… 177
図Ⅳ－３－134　第７号土壙墓の平面および断面図 …… 178
図Ⅳ－３－135　第７号土壙墓の遺物分布図 …… 178
図Ⅳ－３－136　第７号土壙墓から出土した遺物 …… 180
図Ⅳ－３－137　第８号土壙墓の平面および断面図 …… 182
図Ⅳ－３－138　第８号土壙墓の遺物出土状況図 …… 182
図Ⅳ－３－139　第８号土壙墓から出土した遺物 …… 183
図Ⅳ－３－140　第９号土壙墓の平面および断面図 …… 184
図Ⅳ－３－141　第９号土壙墓から出土した遺物 …… 185
図Ⅳ－３－142　第10号土壙墓の平面および断面図 …… 186
図Ⅳ－３－143　第11号土壙墓の平面および断面図 …… 187
図Ⅳ－３－144　第11号土壙墓から出土した遺物 …… 187
図Ⅳ－３－145　第12号土壙墓の平面および断面図 …… 188
図Ⅳ－３－146　第12号土壙墓の遺物出土状況図 …… 188
図Ⅳ－３－147　第12号土壙墓から出土した遺物 …… 189
図Ⅳ－３－148　第13号土壙墓の平面および断面図 …… 190

図Ⅳ－３－149　第13号土壙墓の遺物分布図 …… 190
図Ⅳ－３－150　第13号土壙墓の遺物出土状況図 …… 191
図Ⅳ－３－151　第13号土壙墓から出土した遺物 …… 192
図Ⅳ－３－152　荼毘墓・火葬墓の分布図 …… 194
図Ⅳ－３－153　第１号荼毘墓の平面および断面図 …… 196
図Ⅳ－３－154　第２号荼毘墓の平面および断面図 …… 197
図Ⅳ－３－155　第２号荼毘墓の遺物出土状況図 …… 198
図Ⅳ－３－156　第２号荼毘墓から出土した遺物 …… 198
図Ⅳ－３－157　第３号荼毘墓の平面および断面図 …… 199
図Ⅳ－３－158　第３号荼毘墓から出土した遺物 …… 199
図Ⅳ－３－159　第４号荼毘墓の平面および断面図 …… 200
図Ⅳ－３－160　第４号荼毘墓の遺物分布図 …… 200
図Ⅳ－３－161　第４号荼毘墓の遺物出土状況図 …… 201
図Ⅳ－３－162　第４号荼毘墓から出土した遺物 …… 202
図Ⅳ－３－163　第５号荼毘墓の平面および断面図 …… 203
図Ⅳ－３－164　第５号荼毘墓から出土した遺物 …… 203
図Ⅳ－３－165　第６号荼毘墓の平面および断面図 …… 204
図Ⅳ－３－166　第６号荼毘墓の遺物分布図 …… 204
図Ⅳ－３－167　第６号荼毘墓の遺物出土状況図 …… 205
図Ⅳ－３－168　第６号荼毘墓から出土した遺物（１） …… 206
図Ⅳ－３－169　第６号荼毘墓から出土した遺物（２） …… 208
図Ⅳ－３－170　第７号荼毘墓の平面および断面図 …… 210
図Ⅳ－３－171　第７号荼毘墓の遺物分布図 …… 210
図Ⅳ－３－172　第７号荼毘墓底部の礫の出土状況図 …… 212
図Ⅳ－３－173　第７号荼毘墓の遺物出土状況図 …… 212
図Ⅳ－３－174　第７号荼毘墓から出土した遺物 …… 213
図Ⅳ－３－175　第８号荼毘墓の平面および断面図 …… 214
図Ⅳ－３－176　第８号荼毘墓の遺物分布図 …… 214
図Ⅳ－３－177　第８号荼毘墓から出土した遺物 …… 215
図Ⅳ－３－178　第９号荼毘墓の平面および断面図 …… 216
図Ⅳ－３－179　第９号荼毘墓の遺物出土状況図 …… 216
図Ⅳ－３－180　第９号荼毘墓から出土した遺物 …… 217
図Ⅳ－３－181　第10号荼毘墓の平面および断面図 …… 218
図Ⅳ－３－182　第11号荼毘墓の平面および断面図 …… 219
図Ⅳ－３－183　第11号荼毘墓から出土した遺物 …… 219
図Ⅳ－３－184　第12号荼毘墓の平面および断面図 …… 220
図Ⅳ－３－185　第12号荼毘墓の遺物分布図 …… 220
図Ⅳ－３－186　第12号荼毘墓の遺物出土状況図 …… 221
図Ⅳ－３－187　第12号荼毘墓から出土した遺物 …… 222
図Ⅳ－３－188　第１号火葬墓の平面および断面図 …… 224
図Ⅳ－３－189　第１号火葬墓の遺物出土状況図 …… 224
図Ⅳ－３－190　第１号火葬墓から出土した遺物 …… 225
図Ⅳ－４－　1　表土層から出土した遺物（１） …… 226
図Ⅳ－４－　2　表土層から出土した遺物（２） …… 228
図Ⅳ－４－　3　表土層から出土した遺物（３） …… 230

表目次

表Ⅴ－２－１　土壙墓一覧表 …… 234
表Ⅴ－２－２　荼毘墓一覧表 …… 236

写真図版目次

1.遺跡全景(南方上空から)
2.第８号溝完掘状況(東から)
3.第16号溝完掘状況(西から)
4.第36号溝完掘状況(西から)
5.第27号土坑完掘状況(東から)
6.第35号土坑完掘状況(西から)
7.第36・37号土坑完掘状況(南西から)
8.第１号方形周溝墓完掘状況(西から)
9.第２号方形周溝墓完掘状況(南から)
10.第２号方形周溝墓主体部完掘状況(西から)
11.第３号方形周溝墓完掘状況(南から)
12.第３号方形周溝墓遺物出土状況(南溝)
13.第１号掘立柱建物跡完掘状況(南から)
14.第２号土壙墓完掘状況(北から)
15.第２号土壙墓遺物出土状況
16.第４号土壙墓完掘状況(南から)
17.第４号土壙墓遺物出土状況
18.第５号土壙墓完掘状況(南から)
19.第５号土壙墓遺物出土状況
20.第６号土壙墓完掘状況(東から)
21.第６号土壙墓遺物出土状況
22.第７号土壙墓完掘状況(西から)
23.第７号土壙墓遺物出土状況
24.第８号土壙墓完掘状況(東から)
25.第９号土壙墓完掘状況(東から)
26.第12号土壙墓完掘状況(東から)
27.第12号土壙墓遺物出土状況
28.第13号土壙墓完掘状況(南から)
29.第13号土壙墓遺物出土状況
30.第２号荼毘墓完掘状況(東から)
31.第４号荼毘墓完掘状況(北から)
32.第６号荼毘墓完掘状況(南から)
33.第６号荼毘墓遺物出土状況
34.第７号荼毘墓完掘状況(南から)
35.第７号荼毘墓遺物出土状況
36.第９号荼毘墓完掘状況(南から)
37.第９号荼毘墓遺物出土状況
38.第12号荼毘墓完掘状況(南から)
39.第12号荼毘墓遺物出土状況
40.第１号火葬墓完掘状況(東から)
41.第１号火葬墓遺物出土状況
42.第３号方形周溝墓出土遺物
43.第35号溝出土遺物
44.第37号土坑出土遺物
45.第41号土坑出土遺物
46.第１号土壙墓出土遺物(1)
47.第１号土壙墓出土遺物(2)
48.第２号土壙墓出土遺物
49.第３号土壙墓出土遺物
50.第４号土壙墓出土遺物
51.第５号土壙墓出土遺物
52.第６号土壙墓出土遺物
53.第７号土壙墓出土遺物
54.第８号土壙墓出土遺物
55.第９号土壙墓出土遺物
56.第12号土壙墓出土遺物
57.第３号荼毘墓出土遺物
58.第４号荼毘墓出土遺物
59.第６号荼毘墓出土遺物
60.第７号荼毘墓出土遺物
61.第12号荼毘墓出土遺物
62.第１号火葬墓出土遺物
63.表土層出土遺物(1)
64.表土層出土遺物(2)

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

向山遺跡が所在する岡津原は、掛川市西域を南北に流れる原野谷川の東側に位置する河岸段丘をもつ丘陵で、市街地から車でおよそ10分程の距離にある。岡津原からは、市の西域に広がる平野部を一望でき、見るからに遺跡立地に適した地形景観を示している。

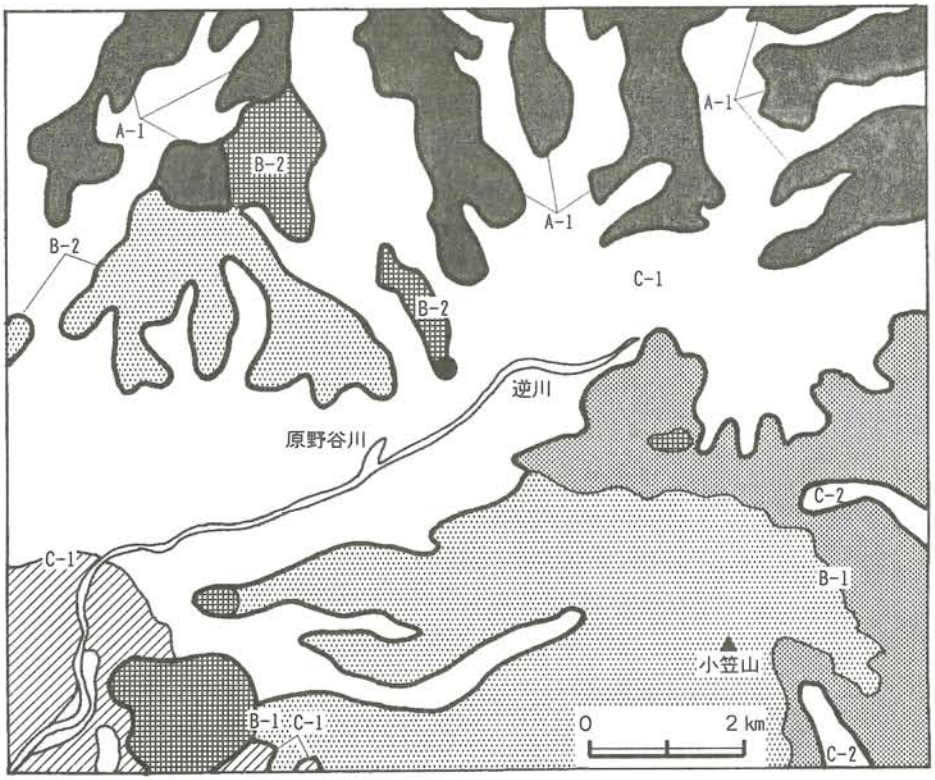
ここに所在する遺跡は、縄文時代早期・中期の土器散布地、弥生時代中期・後期～古墳時代前期の集落跡、古墳時代中期の古墳、古墳時代後期の横穴群などがあり、これらは重複して発見されることが多い。この多くの遺跡の中でも「画文帯階段式神獣鏡」を出土した「岡津奥の原古墳」は特に有名である。

これまでに行われた周辺地での発掘調査には、昭和41年から昭和42年にかけて実施した東名高速道路建設に伴う「岡津横穴群」、「西岡津古墳」、「向山古墳１号墳」、「向山古墳２号墳」等がある。岡津原一帯は農業振興地域に指定されていることから、それ以後特に大きな開発行為もなく、同時にそれに伴う発掘調査もなかった。

平成４年６月になって、今回調査の対象となった地点を申請地として、工場棟の建設敷地造成を目的とした掛川市土地利用事前協議申出書が提出された。申請地に「向山遺跡」が所在することから、掛川市教育委員会と土地利用申請者株式会社川島デベロップ（掛川市）との間で遺跡の取り扱いについての協議が始まった。協議では、まず「遺跡所在確認調査」を実施して遺跡の所在状況を確認し、その結果に基づいて土地利用上の遺跡の取り扱いを決めることとなった（平成４年８月３日付 掛教第403号受付「確認調査依頼書」に基づき、平成５年１月11日～13日実施）。その結果、「向山遺跡」が所在することは明らかとなり、土地利用計画において遺跡の消滅が免れない状況であることを確認した。そこで、やむなき措置として本発掘調査を実施し、「向山遺跡」を記録として保存することとなった。

本発掘調査の実施については、申請者から掛川市教育委員会に依頼があったが、即応できないことから、静岡人類史研究所に依頼し実施することとなった（「向山遺跡発掘調査に関する協定書」平成５年６月３日締結）。現地発掘調査については、調査主体の掛川市教育委員会、調査指導機関の静岡県教育委員会、調査実施機関の静岡人類史研究所、調査事務局の掛川市教育委員会、事業者の株式会社川島デベロップにより構成する「向山遺跡発掘調査連絡会」を設置し、実施した。連絡会は月１回開催し、発掘調査の進捗状況の報告、遺構・遺物の検出状況を踏まえ発掘調査方法の検討、次月における調査の進め方・予定について、事業者側からの意向・要望について等を議題として討議した。そして最終的には４回の連絡会を行い、現地作業を終えるに至った。

図Ⅱ－１－１　向山遺跡の位置図



凡　例

A　赤石山地
　－１　志太・春野山地

B　遠州台地・丘陵地
　－１　小笠山丘陵地
　－２　袋井丘陵地

C　遠州平地
　－１　太田川平野
　－２　菊川平野

● 向山遺跡

山麓地

大起伏丘陵地

小起伏丘陵地

砂礫台地(低地)・段丘地

扇状地性低地

三角州性低地

資料：土地分類図（静岡県）、1991年

図Ⅱ－１－２　向山遺跡周辺の地形区分図

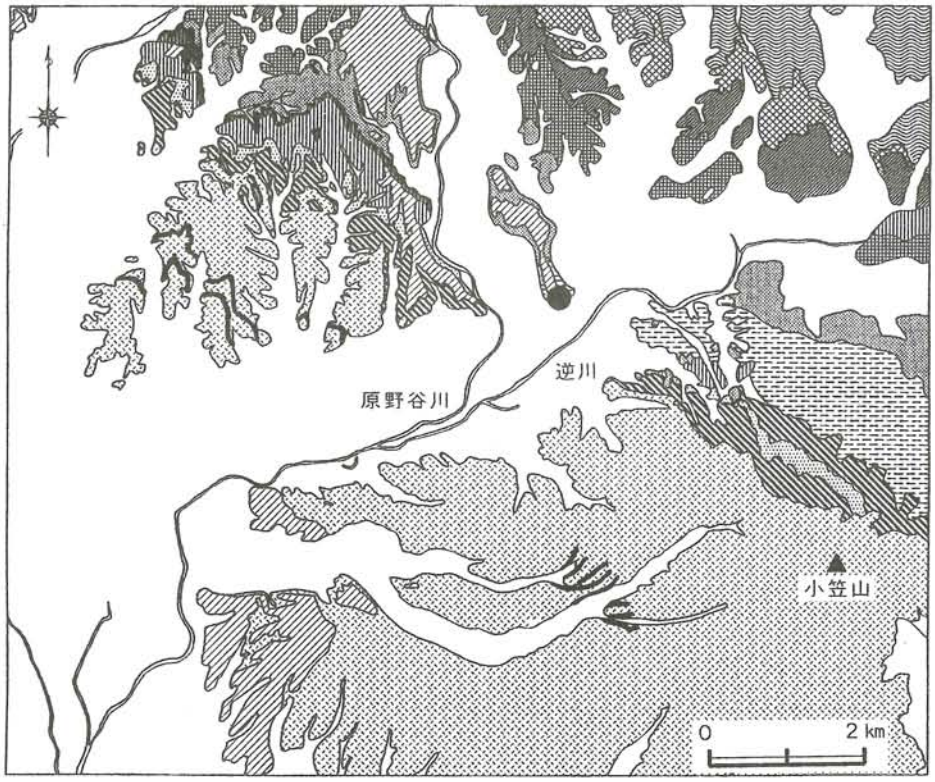
第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の立地

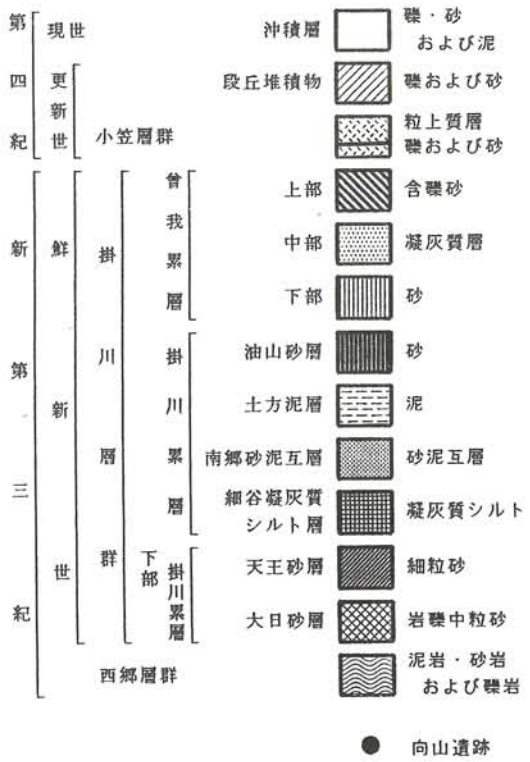
向山遺跡は掛川市の南西部に位置しており、遺跡の北側は東名高速道路が東西方向に走り、東側は垂木川が北東から南西方向に流下している。

向山遺跡の周辺の地形は図Ⅱ－１－２に示す通り、北側は起伏量（地表の起伏の程度を示す。単位面積内の最高点と最低点の高度差）が 100m以下の山麓地である志太・春野山地と起伏量 100m以下の袋井丘陵地が分布している。遺跡の南側には小笠山（山頂の標高約 264m）があり、山頂を通る地質の境界線(北西－南東方向)から東部は起伏量200～100mの大起伏丘陵地で、西部は起伏量が 100m以下の小起伏丘陵地である小笠山丘陵地が広がっている。

これらの地域は開折が進み、扇状地性の低地や三角州性の低地によって埋められている。また、逆川、原野谷川などによって形成された扇状地性の低地（太田川平野ともいわれている）が広範囲に分布している。



凡　例



資料：日本地質図大系　中部地方、1991年

図Ⅱ－１－３　向山遺跡周辺の地質区分図

向山遺跡の周辺の地質は図Ⅱ－１－３に示す通り、北側は新第三紀の掛川層群と西郷層群、第四紀更新世の小笠層群などが分布する。向山遺跡は扇状地に分布する沖積層（礫・砂および泥）によって囲まれる第四紀更新世の段丘堆積物からなっている。段丘堆積物は砂(上層部)と礫(下層部)で占められる。礫種は砂岩で、その径は５～ 200mmを占めしている。

一方、南側には掛川層群の掛川累層(土方泥層と南郷砂泥互層)と曾我累層および小笠層群が広く分布しているが、小笠山の山頂を北西－南東方向に通る地質境界線で大きく区分される。

北西－南東線の西部には礫層を主とする小笠層群がみられ、東部には掛川累層と小笠山を支える基盤の部分である曾我累層が見られる。新第三紀鮮新世の曾我累層は礫、砂層を主とし、泥層をはさむ地層であるため、この地層の違いは丘陵の地形に反映され、侵食されやすい西部の小笠層群が小起伏丘陵地となり、侵食されにくい東部の掛川累層・曾我累層が大起伏丘陵地となっている。

向山遺跡は扇状地性の低地に囲まれた砂礫段丘地(袋井丘陵地という)の南端に位置している。

図Ⅱ－２－１　向山遺跡周辺の遺跡分布図

第２節　歴史的環境

向山遺跡は袋井丘陵地の中の岡津丘陵と呼ばれる低地性の段丘地上に位置する。その周辺は原野谷川、逆川、家代川、垂木川などに沿った扇状地性低地である。この丘陵地や低地には古墳時代の遺跡が多く、特に古墳や横穴が群集している(図Ⅱ－２－１)。

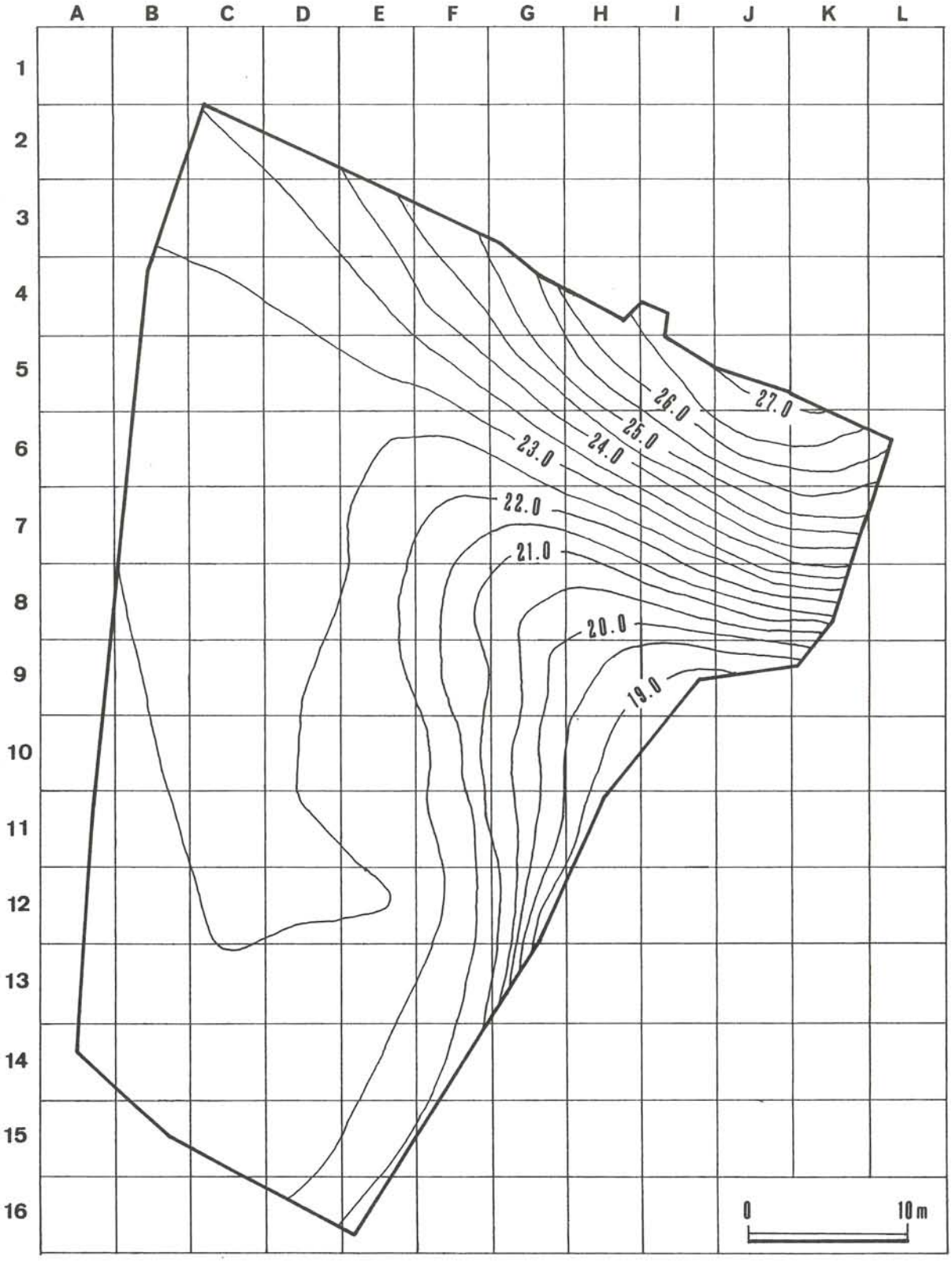
縄文時代から弥生・古墳時代の複合遺跡として、岡津原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、黒田遺跡があげられる。これらの遺跡の内容については明確にされていないが、岡津原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は向山遺跡の西～北西方向の丘陵地に立地しており、縄文土器や弥生土器、土師器や須恵器などが出土している。黒田遺跡は岡津丘陵の東側に接する扇状地性低地に立地し、この遺跡からも縄文土器・弥生土器・土師器が出土している。

弥生時代の遺跡としては原川遺跡がある。原川遺跡は原野谷川が形成した自然堤防上に立地するもので、その初現は弥生時代初頭とされており、それ以後幾度かの断絶を経ながら近世までに至る複合遺跡である。確認された集落址は、中遠地方における最初の農耕集落と考えられている。また、多様な土器棺墓も発見され、当時の墓制を解明するに新たな資料となっている。同遺跡からは古墳時代の竪穴住居跡も確認されており、大集落の可能性がある。中～近世に関しても、旧東海道の存在から交易、その他の面において重要な位置をしめていたことがうかがえる。このほか、弥生時代の遺跡として篠場遺跡が、弥生時代～古墳時代の遺跡として沢田遺跡・細田遺跡・前坪遺跡が、弥生時代～古代にかけての遺跡として大池遺跡・曽我後遺跡・領家遺跡・平野遺跡が、弥生時代～平安時代の遺跡として梅橋北遺跡があげられる。これらの遺跡はいずれも垂木川と逆川に沿った沖積平野部に立地している。

古墳時代になると岡津丘陵上には中・後期の遺物が散布する岡津原Ⅴ遺跡が分布し、それに重なる様に北側から庚申塚古墳(円墳)・奥ノ原古墳(円墳)・堀田古墳(円墳)・西岡津古墳が点在し、その東側に八幡平古墳群(円墳５基)・東ノ山古墳(円墳)・岡津横穴群(Ａ群：８基、Ｂ群：16基)・ワゴ横穴群(５基)・向山古墳群(円墳４基)と、丘陵上はほとんど古墳と横穴によって占められている。

向山遺跡に隣接する岡津横穴群からは土師器、須恵器、鉄刀、刀子などが出土しており、向山古墳群の２号墳からは鉄剣・銅鏡・合子が確認されている。また、岡津丘陵下の南側の沖積平野部には古墳時代から古代にかけての遺物が散布する三ツ池遺跡・善光寺遺跡・コリトリ遺跡が分布している。

以上のように、向山遺跡の周辺は縄文時代から平安時代に至る複合遺跡がみられ、断片的ではあるがこの地における人々の営みが継続していたことを物語っている。



図Ⅲ－１－１　調査対象地域の地形とグリッド設定図

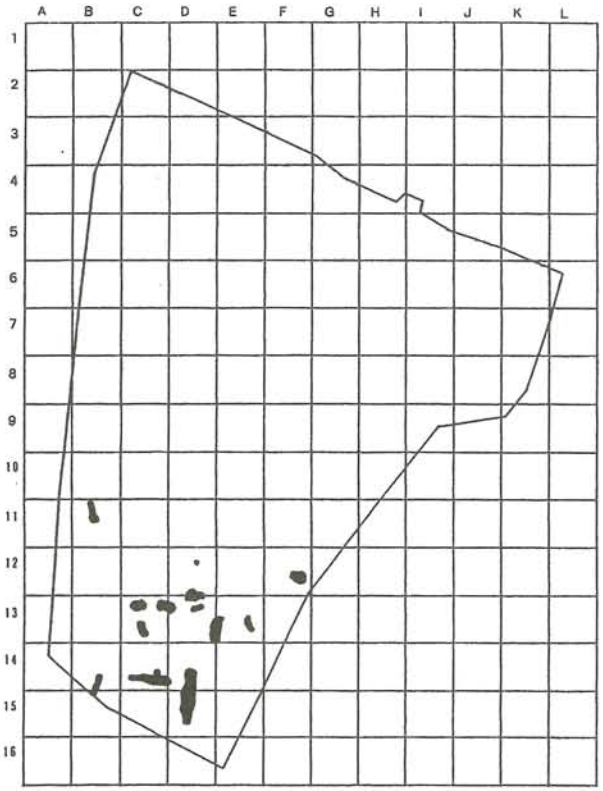
第Ⅲ章　発掘調査の概要

第１節　調査方法

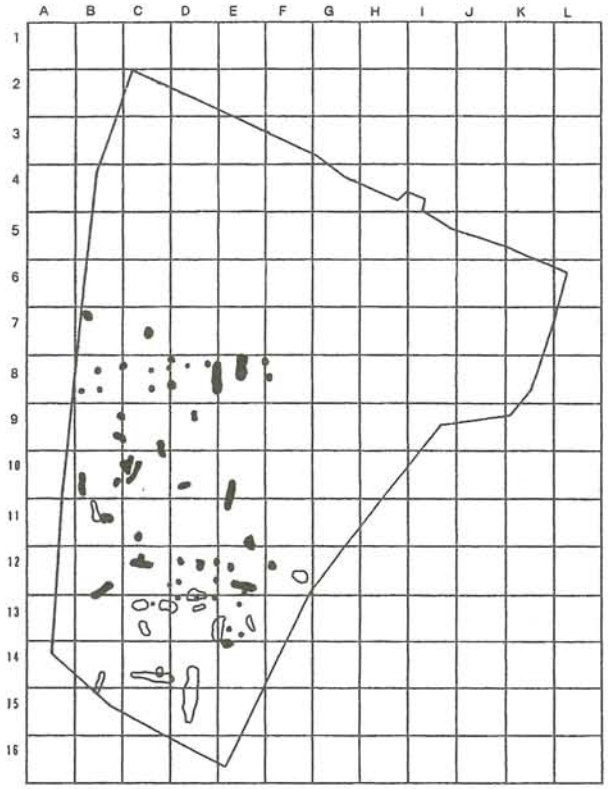
事前の試掘調査において、丘陵上に本遺跡が立地し、包含層が存在しないことが確認されていることから、遺構の確認面である黄褐色砂礫層を覆う表土層を重機によって除去した後、調査区全体に５ｍ×５ｍのグリッドを設定し、東西方向にＡ～Ｌ、南北方向に１～17の番号を付し、地形測量を行なった。

次に、作業員により遺構の確認面の全面精査を行い、遺構の分布の概略を把握した後、個々の遺構について確認・精査を行った。

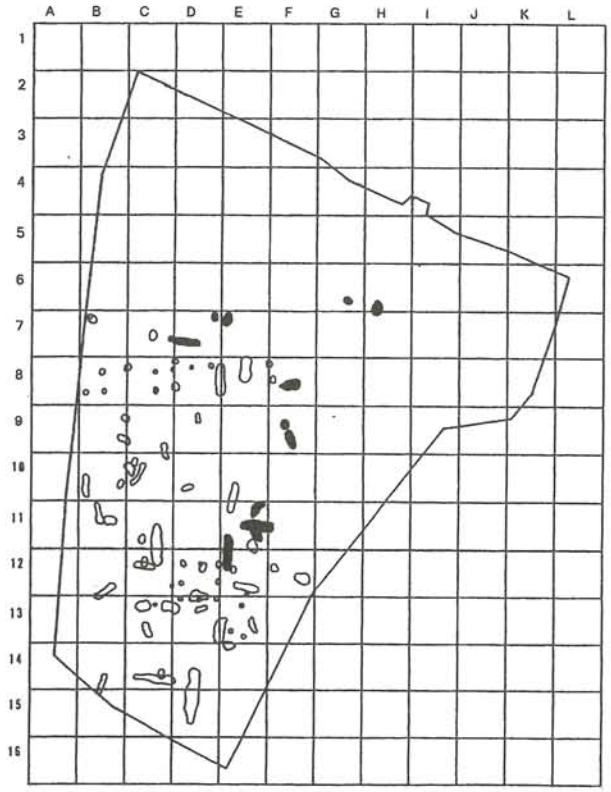
確認・精査された遺構および遺物は、実測図を作成し、写真撮影を行った。なお、遺構および遺物の記録にはパーソナルコンピュータと光波測距儀を利用したトータルステーション・システム（遺跡図形処理システムソフト）を導入した。



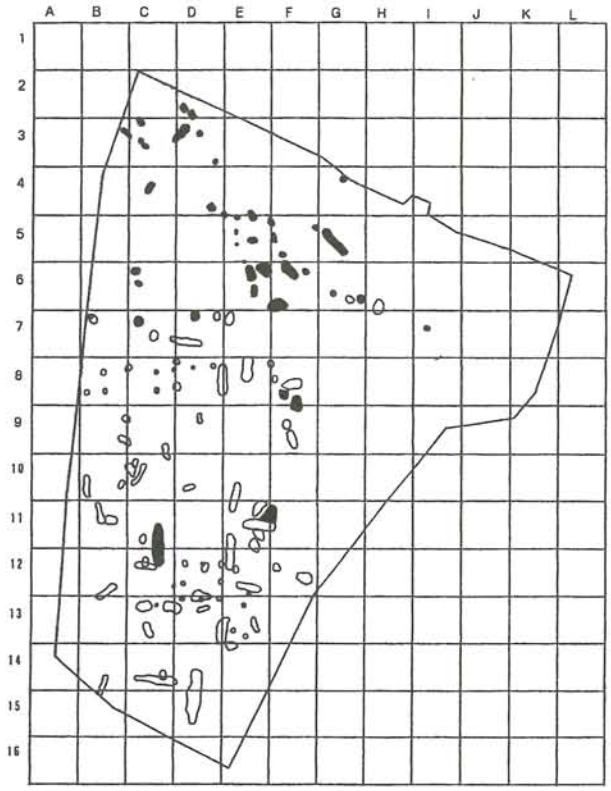
５月13日～６月11日



６月14日～６月25日



６月28日～７月９日



７月12日～７月23日

凡　例

期間中に調査を終了した遺構　　調査済の遺構

図Ⅲ－２－１　発掘調査の経過図（１）

第２節　発掘調査の経過

向山遺跡の現地調査(準備および発掘調査)は平成５年５月13日より同年９月17日まで実施した。以下にその経過を略記する。

５月13日(木)　重機２台による表土層の除去作業を行う。また、発掘調査の開始にともない、事務所を開設する。

５月14日(金)　重機による表土層の除去作業をほぼ終了する。数十基の遺構が確認される。

５月17日(月)　調査区のグリッドを設定し、ベンチ・マーク(標高23.175m)を設定する。同時に作業員を動員し、表土層を除去した面の精査を開始する。

５月21日(金)　表土層を除去した面の精査を終了し、地形測量を行う。

５月24日(月)　精査により判明した遺構の概要を知るために、個々の遺構にマーキングをし、分布状況を記録した。この結果、約 250個所の遺構と思われるものが確認される。

５月31日(月)　個々の遺構の精査を開始する。

６月３日(木)　第１回発掘調査連絡会が現場事務所で行われ、発掘調査の体制や今後の予定などについての話し合いが持たれる。

６月11日(金)　第１・２・３・４号土坑、第１号荼毘墓、第１・２・３・４・５・36・37号溝の精査を終了する。

６月18日(金)　第５・８・９・10・11・12・13・14・15・17号土坑、第６・７・８・９・10・11・12・38号溝、第２号荼毘墓、第１・２・３・４・５・６・７・８・９・10・11・12号ピットの精査を終了する。
第１～８号ピットは配置関係から掘立柱建物の柱穴と確認されたため、掘立柱建物跡とする。

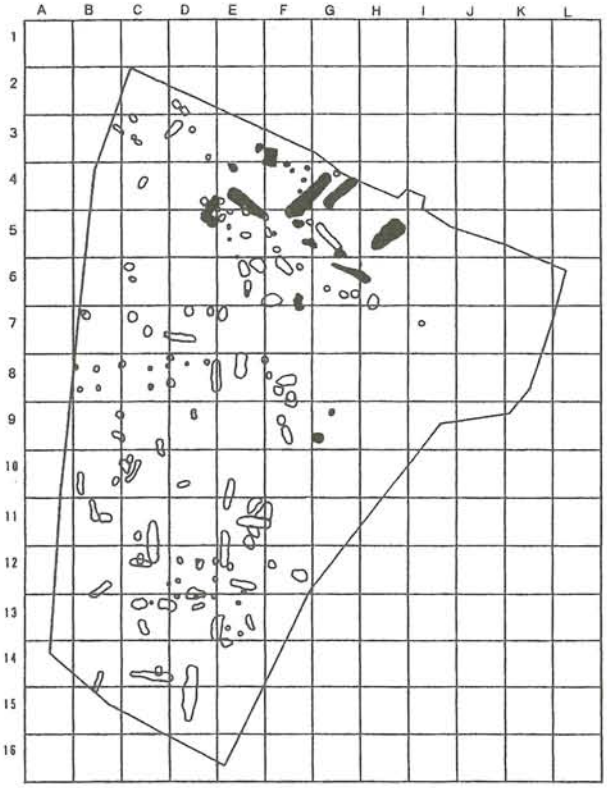
６月25日(金)　第６・７・16・18・19・20・21号土坑、第13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・24・36・37号ピット、第３・４・５号荼毘墓、第13・14・15号溝の精査を終了する。

７月２日(金)　第22号土坑、第16・17・18・19号溝の精査を終了する。
第９・16・17号溝の配置などから、この溝状遺構を第１号方形周溝墓とする。

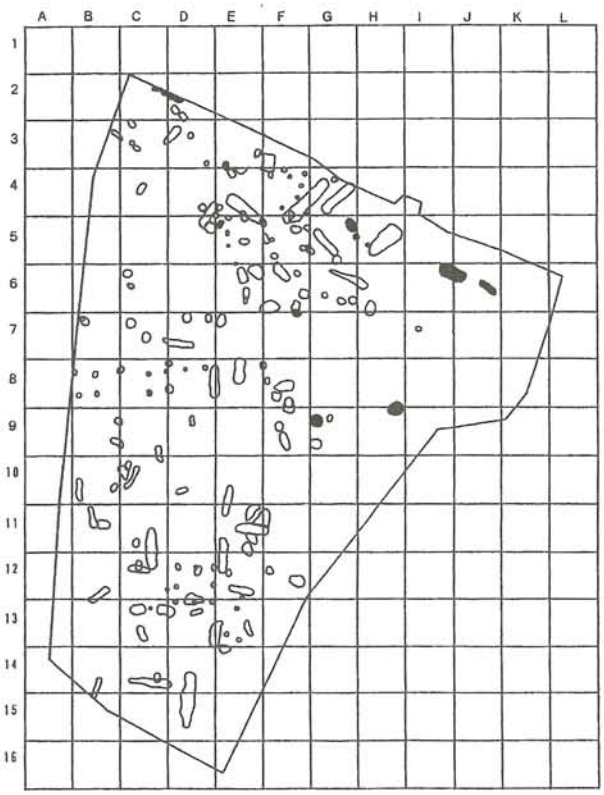
７月９日(金)　第20・22号溝、第23・24・25・26号土坑、第１・３・11号土壙墓の精査を終了する。また、第２回発掘調査連絡会が現場事務所で行われ、これまでの調査経過と成果の報告および今後の予定についての話し合いが持たれる。

７月16日(金)　第21・39号溝、第６・７・９号荼毘墓、第２号土壙墓、第27号土坑、第39号ピットの精査を終了する。

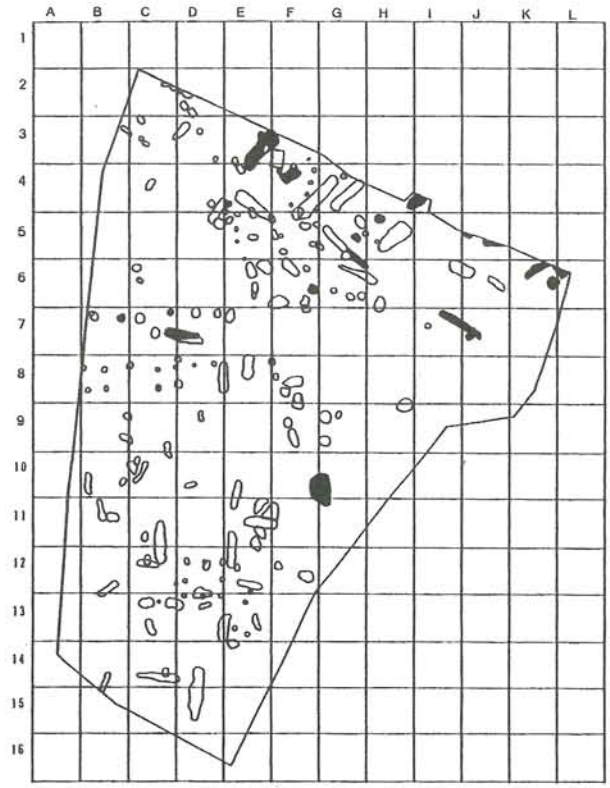
７月23日(金)　第25号溝より土器が一括して出土する。この溝は第２号方形周溝墓の南溝と思われる。第28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45号土坑、第23・25・40号溝、第25・26・27・38・40・43・44号ピット、第８号荼毘墓、第１号火葬墓（蔵骨器を２点並べて埋葬したもの）、第４・12号土壙墓の精査を終了する。



７月26日～８月６日



８月９日～８月27日



８月30日～９月２日

凡　例

期間中に調査を終了した遺構　　調査済の遺構

図Ⅲ－２－２　発掘調査の経過図（２）

７月30日(金)　第46・50・72号土坑、第28・29・30・31・32・33・41号ピット、第10号茶毘墓、第24・26・27・28・29・31号溝、第５号土壙墓の精査を終了する。
調査区の北側に位置する溝状遺構の配置などから、第24・27・33号溝を第２号方形周溝墓とする。主体部は周溝墓のほぼ中心付近に認められる。

８月３日(火)　第３回発掘調査連絡会が行われ、これまでの経過と成果ならびに今後の予定につての話し合いが持たれる。

８月６日(金)　第48・49・52・53・54・55号土坑、第７・８・13号土壙墓、第30・32号溝、第23・42号ピットの精査を終了する。
第２周溝墓の東側に隣接する溝状遺構の配置などから、第25・26・30号溝を第３号方形周溝墓とする。主体部は確認されない。

８月９日(月)　第２号方形周溝墓の主体部の精査を開始する。

８月13日(金)　第51・56・57・58・59号土坑、第45・46号ピット、第11・12号茶毘墓、第９号土壙墓の精査を終了する。

８月20日(金)　第１号方形周溝墓の配置、エレーベーションなどの記録を行う。第６号土壙墓、第61・62・70号土坑の精査を終了する。

８月27日(金)　主体部が確認された第２号方形周溝墓の精査を終了する。また、第33・34・41・42号溝、第63・65・67・68・69号土坑の精査も終了する。
調査区北側の地層断面を記録すると同時に、調査区の北側に伸びる遺構の確認を行う。この際に、北壁面から土器が出土したが、東名高速道路の敷地のため、これより北側の精査は行わないこととする。

８月30日(月)　第66号土坑の精査を終了する。

８月31日(火)　第47・64・71号土坑、第35・43号溝、第10号土壙墓の精査を終了する。
第４回連絡会が行われ、これまでの経過と成果の報告、ならびに調査終了の具体的スケジュールについて話し合いが持たれる。

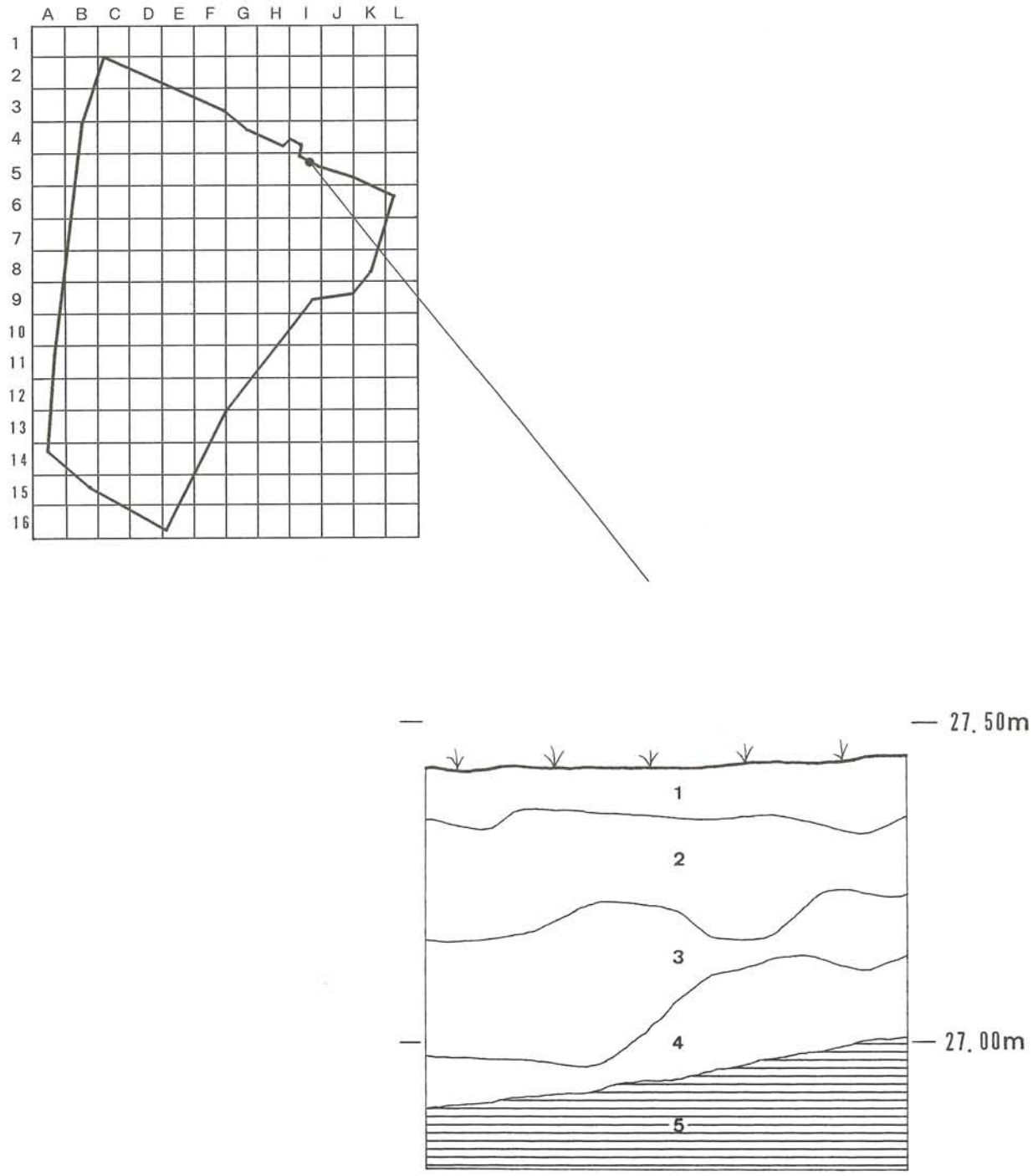
９月１日(水)　第34・35号ピットの精査を終了する。
(株)東日によりラジコンヘリコプターを使用して遺跡全体の航空写真撮影が行われる。

９月２日(木)　第60号土坑の記録、ならびに第２号方形周溝墓封土の精査を終了する。

９月６日(月)　第２号周溝墓の主体部の覆土、第11号茶毘墓の覆土の洗浄調査を開始する。

９月14日(金)　第２号周溝墓の主体部の覆土、第11号茶毘墓の覆土の洗浄調査を終了する。

９月17日(金)　発掘調査に関する全ての作業を無事に終了し、現場事務所を閉鎖する。



図Ⅲ－３－１　調査区北側の層序模式図

第３節　遺跡の層序

向山遺跡は砂礫からなる段丘の南端部に位置するが、茶畑などとして利用されていたため、遺跡の基盤となる地層の上部はかなり削平されており、いわゆる包含層が存在しない遺跡である。

図Ⅲ－３－１に調査区北側における層序とその位置を示した。第１層から第４層は表土層で、遺構の確認面は第５層の上面である。各層の状況は以下の通りである。

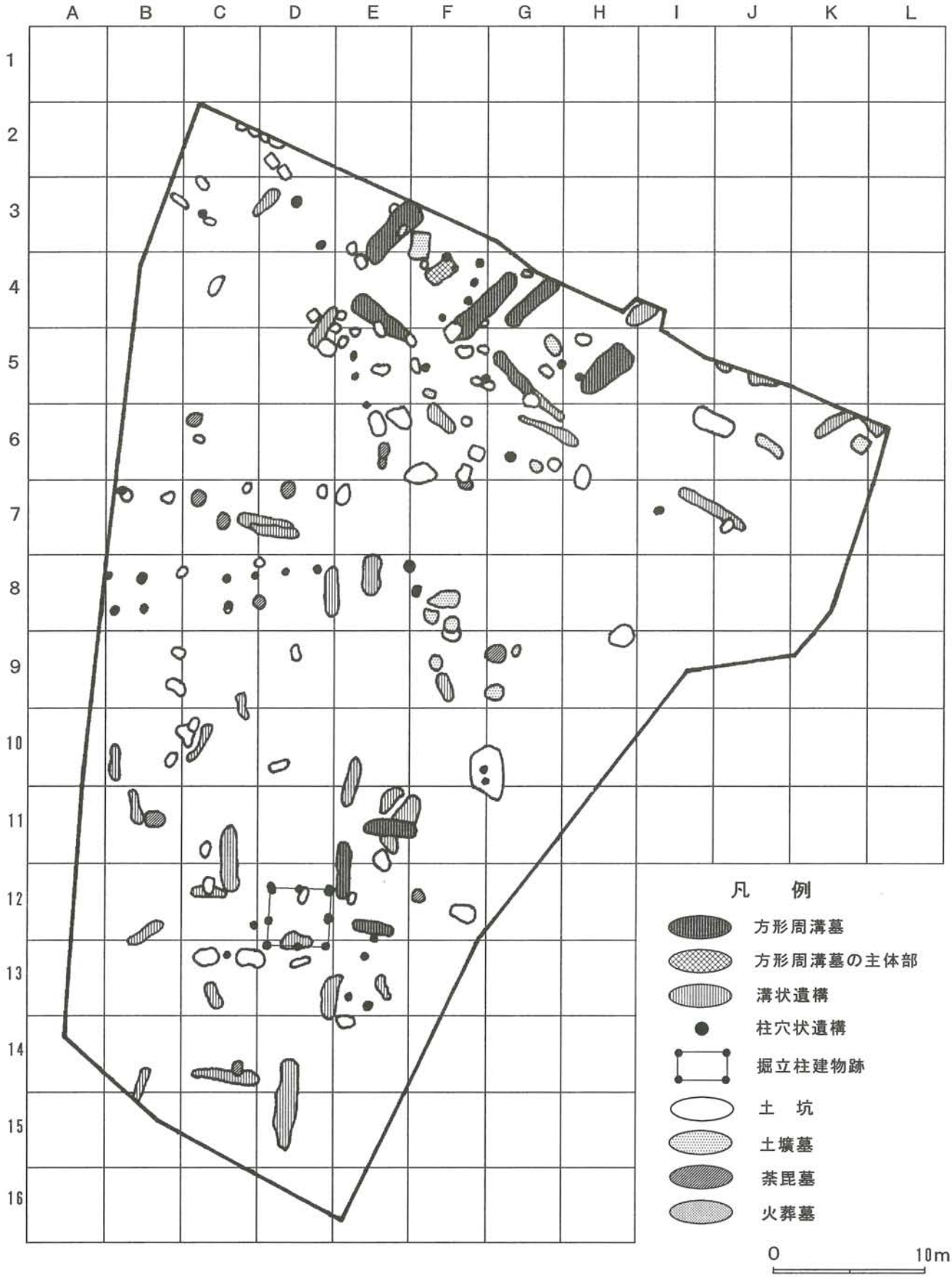
第１層　暗褐色土層　現在の耕作土で、締りも粘性も弱く、径 0.3～10cm大の礫をやや多く含んでいる。層厚は６～12cmある。

第２層　暗褐色土層　第１層に比べてやや明るい色を呈する。締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.3～５cm大の礫を多く含み、黄褐色土のブッロクをやや多く含んでいる。層厚は９～20cmある。

第３層　明茶褐色土層　締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.2～５cm大の礫をやや多く含んでいる。層厚は３～25cmある。

第４層　茶褐色土層　締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.2～５cm大の礫を多く含んでいる。層厚は４～16cmある。

第５層　黄褐色砂礫層　この層の上面が遺構の確認面で、いわゆる遺跡の基盤層である。礫は径 0.5～20cm大の砂岩から成り、形状は楕円形や不整楕円形(じゃがいも状)で亜角礫を呈している。淘汰は悪く、崩れ易い。層厚は約 160cmあり、上面部より深さ１ｍと 1.5ｍのところに黒色に変色した層(層厚１～５cm)が帯状に挟まっている。


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
凡　例
方形周溝墓
方形周溝墓の主体部
溝状遺構
柱穴状遺構
掘立柱建物跡
土　坑
土壙墓
荼毘墓
火葬墓
0
10m

図Ⅳ－１－１　遺構分布図

第Ⅳ章　発掘調査の結果

第１節　遺構の概要

今回の調査では、溝状遺構が43条(方形周溝墓３基の溝９条を含む)、穴状遺構は柱穴状遺構が46基(このうち掘立柱建物跡の８基を含む)、土坑が72基、土壙墓が13基、荼毘（だび)墓が12基、火葬墓が１基の計144基・合計187基の遺構が確認されている。

１．溝状遺構

確認された43条のうち、第９・16・17号が第１号方形周溝墓を形成し、第24・27・33号が第２号方形周溝墓を、第25・26・30号が第３号方形周溝墓を形成している。第２号方形周溝墓からは、主体部と思われる掘り込みと封土の一部が確認されたが、第１号および第３号方形周溝墓からは、主体部も封土も確認されなかった。

丘陵の平坦部に分布している溝は、長軸方向が南北を指している溝が多くみられ、北側斜面に分布している溝は、長軸方向が東西を指している溝が多くみられる傾向がある。平面形状では、隅丸長方形や楕円形が多く確認されている。

２．穴状遺構

① 柱穴状遺構

平面形状がほぼ円形を呈する、いわゆる柱穴状(ピット)を呈する遺構で、46基が確認された。そのうち、第１～８号ピットが掘立柱建物跡を形成している。その他は直線状にならんでいるピット列が11例確認されている。

② 土坑

地山を掘り込んだ穴状遺構で、平面形状では楕円形や円形を呈するものが多く確認されているが、長軸の方向や規模などにバラツキがあり、明確な分類はできない。72基が確認されている。

③ 土壙墓

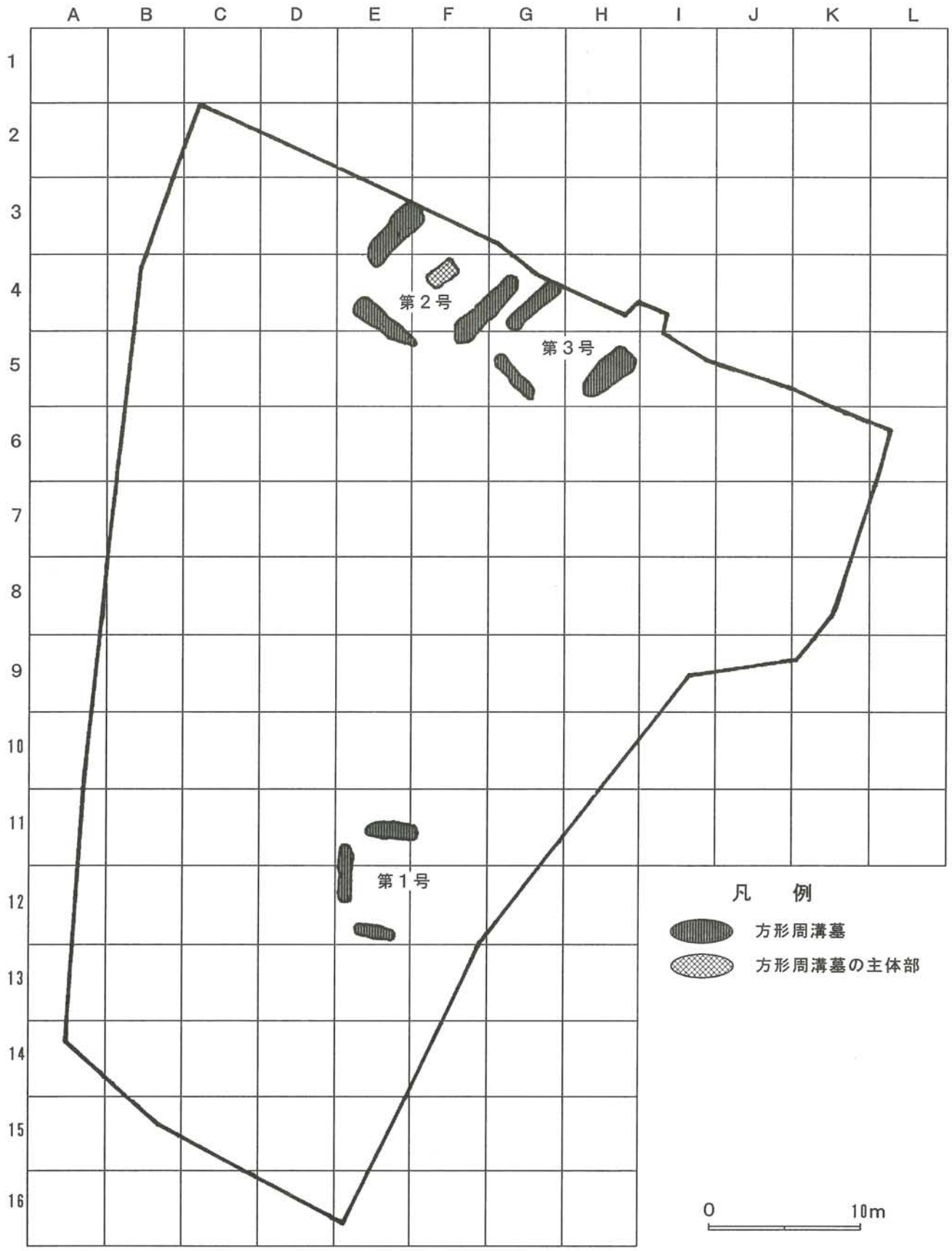
穴状遺構のうち、覆土の中に炭化物を少量含み、出土遺物として供献物のいわゆる「かわらけ」土器や銭貨などが出土するもので、人骨片が出土しないものもあるが第６号土壙墓のように供献物がなく、頭骨や大腿骨など、人骨片だけが出土しているものもある。平面形状では、楕円形が多い。13基が確認されている。

④ 荼毘墓

荼毘墓とは土坑内で遺骸を荼毘に付し、そのまま埋葬したと考えられる遺構で、覆土に炭化物や焼土が多く含まれ、その多くは層を形成している。中には土坑の壁面が焼土化したものも認められる。出土した遺物のうち、人骨片は白色の細片や粉状が多く、銭貨のなかには熱により変形したり数枚が熔着して出土するものある。土坑の平面形状では、楕円形が多い。12基が確認されている。

⑤ 火葬墓

遺骸を火葬してから蔵骨器に納め、その蔵骨器を土坑に埋葬した遺構で、供献物は出土していない。表土層から地山層を少し掘り込んだ処から１基が確認されている。



図Ⅳ－２－１　方形周溝墓の分布図

第２節　溝状遺構

１．方形周溝墓と遺物

調査区の南側中央部の中央に１基、北側中央部に隣接して２基の計３基が確認された。

第１号方形周溝墓は東溝が削平されて存在せず、主体部も確認されなかった。遺物は西溝から土器の細片が出土しているだけである。

第２号方形周溝墓は、北溝が調査区外に存在すると考えられる。この方形周溝墓からは、主体部と思われる土壙と封土の一部が確認された。ただし、周溝からは遺物は確認されず、主体部からも流入と思われる土器の細片が１点出土しただけである。しかし、封土からは弥生時代の土器片が数十点出土している。

第３号方形周溝墓は、主体部も封土も確認されなかったが、南溝の底から弥生時代中期後半の土器が出土している。

第１号方形周溝墓

調査区の中央よりやや南側で、Ｅ－11・12～Ｆ－11・12グリッドに位置し、北溝(第17号溝)、西溝(第16号溝)、南溝(第９号溝)が確認された。全体に開墾などで上部がかなり削平されており、東溝が確認されなかったのは、東側がさらに削平されて低くなっているためではないかと考えられる。したがって、全体がどのような形状でどの程度の規模であったかは不明であるが、南北の溝の距離が約 7.5ｍを計り、東西の溝の距離もほぼ同様の方形周溝墓と考えられる。なお、主体部は確認されなかった。

・北溝(第17号溝)

北溝(第17号溝)は南側中央部で第20号溝を切り、東北部で第21号溝を切っている。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。長さ 349cm、最大幅 111cm、深さは最深部が42cmあり、長軸の方向はN-85°-W を指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～８cm大の礫をやや多く含んでいる。第３層は暗褐色土で、締りも粘性も共にやや強く、径 0.5～６cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されていない。

・西溝(第16号溝)

西溝(第16号溝)の平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いために明確ではないが、丸底状を呈している。長さ 375cm、最大幅87cm、深さは最深部が17cmあり、長軸の方向はN-2°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径１～15cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は土器の細片が覆土中から１点出土したが、時代を確定できるものではなかった。

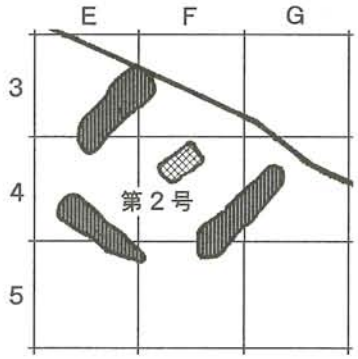
・南溝(第９号溝)

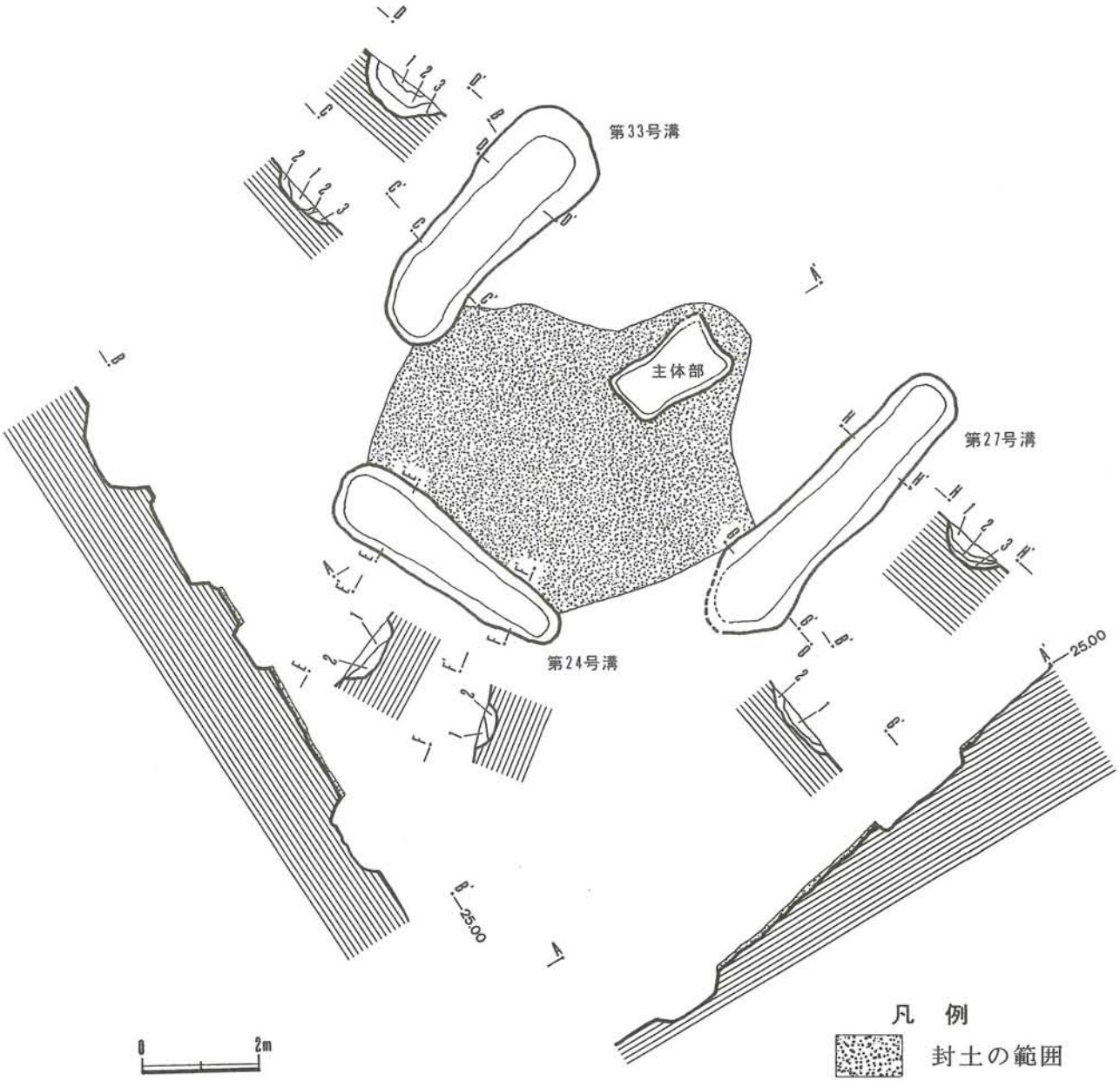
南溝(第９号溝)の平面形状は隅丸長方形で、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。長さ 268cm、最大幅79cm、深さは最深部が19cmあり、長軸の方向はN-77°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りは強く、粘性は弱い。径１～３cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径３～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されていない。

各溝の基盤層は黄褐色を呈し、この層の大部分は径３～８cm大の礫や砂によって占められている。





図Ⅳ－２－３　第２号方形周溝墓の平面および断面図

第２号方形周溝墓

調査区の北部で、Ｅ－３～５、Ｆ－３～５、Ｇ－３～４グリッド内の南向きの斜面上に位置し、東側の第３号方形周溝墓に隣接している。西溝(第33号溝)、南溝(第24号溝)、東溝(第27号溝)および主体部と考えられる土壙と封土の一部が確認された。なお、北溝は調査区外に位置すると推定される。全体に開墾などで上部がかなり削平されており、全体がどのような形状で、どの程度の規模であったかは不明であるが、東西の溝の距離は約 9.2ｍを計り、南北の溝の距離もほぼ同様と推定される。

・西溝(第33号溝)

西溝(第33号溝)の平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。長さ 478cm、最大幅 176cm、深さは最深部が58cmあり、長軸の方向はN-43°-E を指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.3～７cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は黒褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.3～20cm大の礫をやや多く含んでいる。第３層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.3～４cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は覆土の上位から土器の小さな破片(遺物No.449) が１点と細片が３点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。遺物No.449 の土器片には突帯が２条横走りしている。

図Ⅳ－２－４　西溝(第33号溝)から出土した土器片(遺物No.449) の拓影(縮尺：1/2)

・南溝(第24号溝)

南溝(第24号溝)の平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。長さ 454cm、最大幅 130cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-55°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径 0.5～10cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.5～２cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

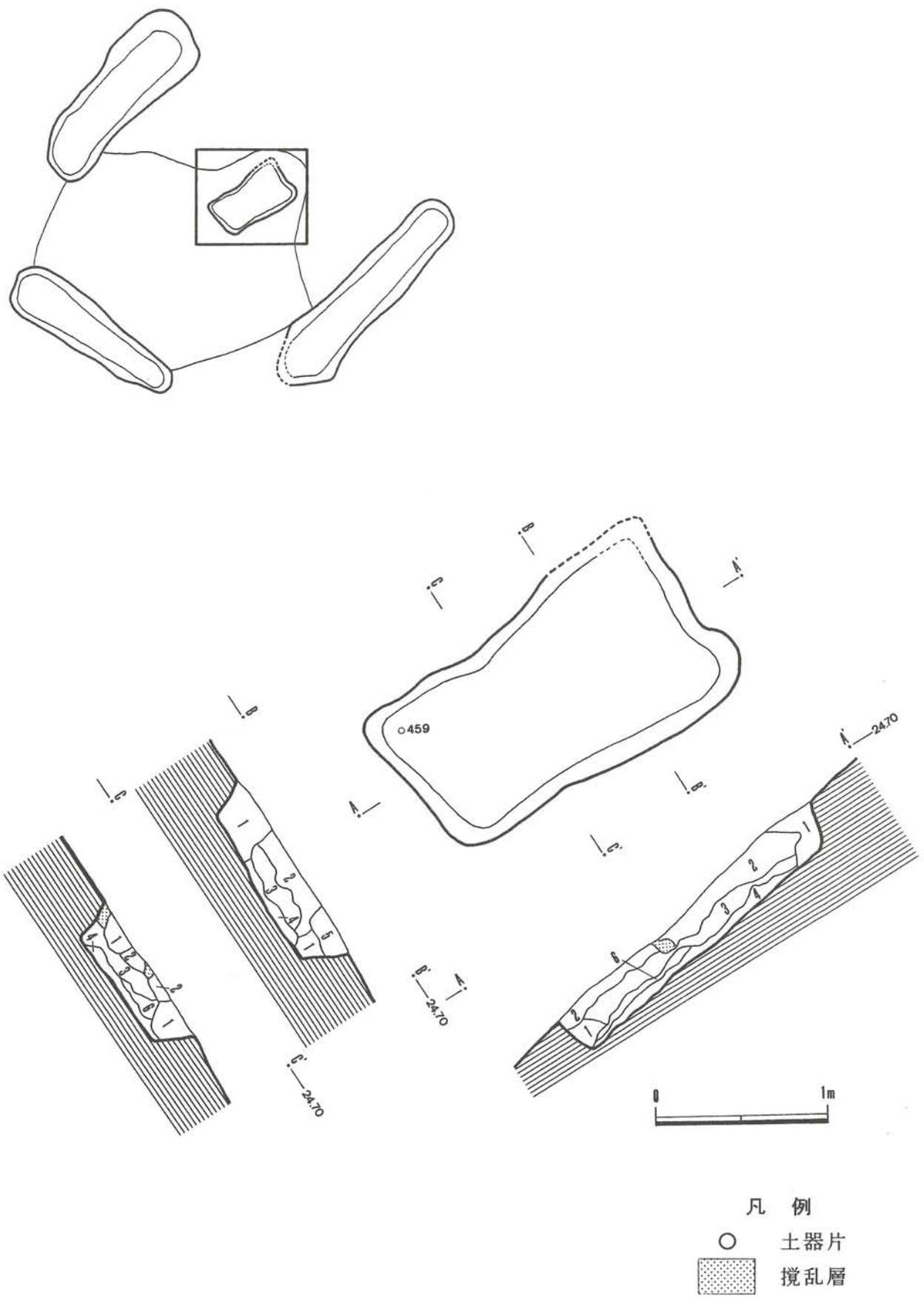
遺物は確認されなかった。

・東溝(第27号溝)

東溝(第27号溝)の平面形状は隅丸長方形で、断面形状は丸底状を呈している。南西部分を49号土坑により切られているため、長さは推定で 580cm、最大幅 154cm、深さは最深部が40cmあり、長軸の方向はN-46°-E を指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締りは強く、粘性は弱い。径１～３cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径３～５cm大の礫をやや多く含んでいる。第３層は暗黄褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.5～５cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は覆土の上位から土器の細片が３点出土したが、時代を確定できるものではなかった。

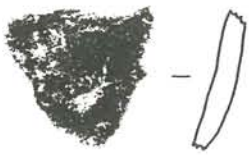


図Ⅳ－２－５　主体部の平面および断面図

主体部と考えられる土壙の平面形状は隅丸長方形で、断面形状はＵ字形を呈している。長さ 190cm、最大幅 115cm、深さは最深部が28cmあり、長軸の方向はN-59°-E を指している。北部を第32号ピットによって切られている。

覆土は６層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～７cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～７cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第３層は暗黄褐色土で、第２層よりやや明るい色をしており、締りは強く粘性はやや弱い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土ブロックを多く含んでいる。第４層は黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。第５層は暗褐色土で、第１層より暗い色をしており、締りはやや強く粘性はやや弱い。径 0.5cm大の礫をやや多く含んでいる。第６層は褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径１cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は覆土中に流入したと思われる土器の破片(遺物No.459)が１点出土しているが、主体部の年代を確定できる遺物ではない。



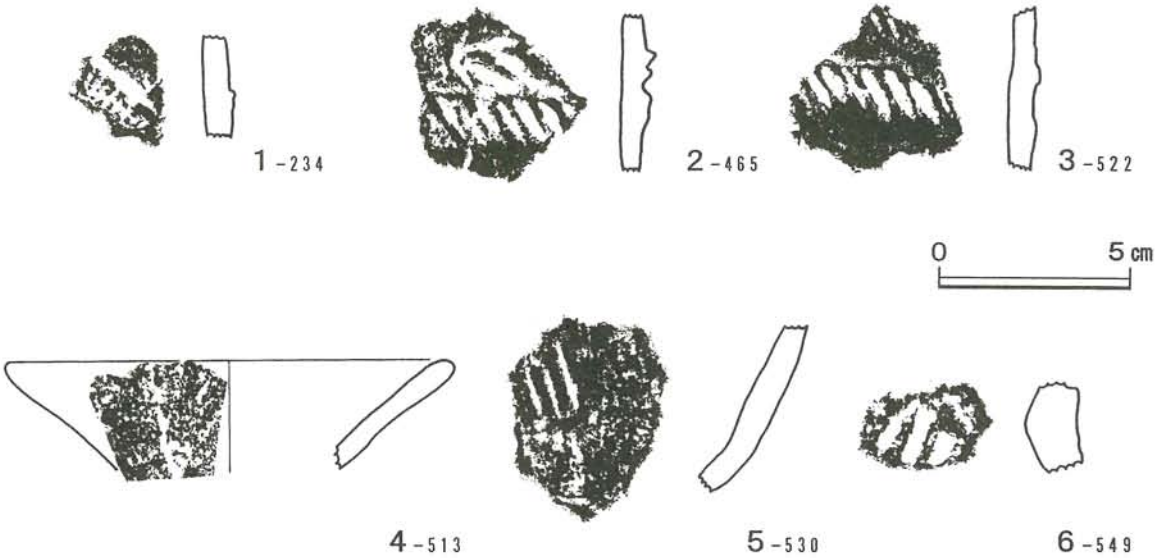
図Ⅳ－２－６　主体部の覆土内から出土した土器片(遺物No.459)の拓影(縮尺：1/2)

凡　例

○　土器片

図Ⅳ－２－７　封土内の遺物分布図

なお、主体部から南西部にかけて、厚さ20～30cmほどの封土と思われる暗褐色～暗黄褐色土の盛土が分布しており、その中から弥生時代後期の土器片（遺物No.234、遺物No.465、遺物No.513、遺物No.522、遺物No.530、遺物No.549）などの遺物が88点出土している。



図Ⅳ－２－８　封土から出土した土器片の拓影(縮尺：1/2)

１(遺物No.234）は、連続した刺突紋と沈線紋が斜方向に施紋され、内面はハケ調整が施されている。

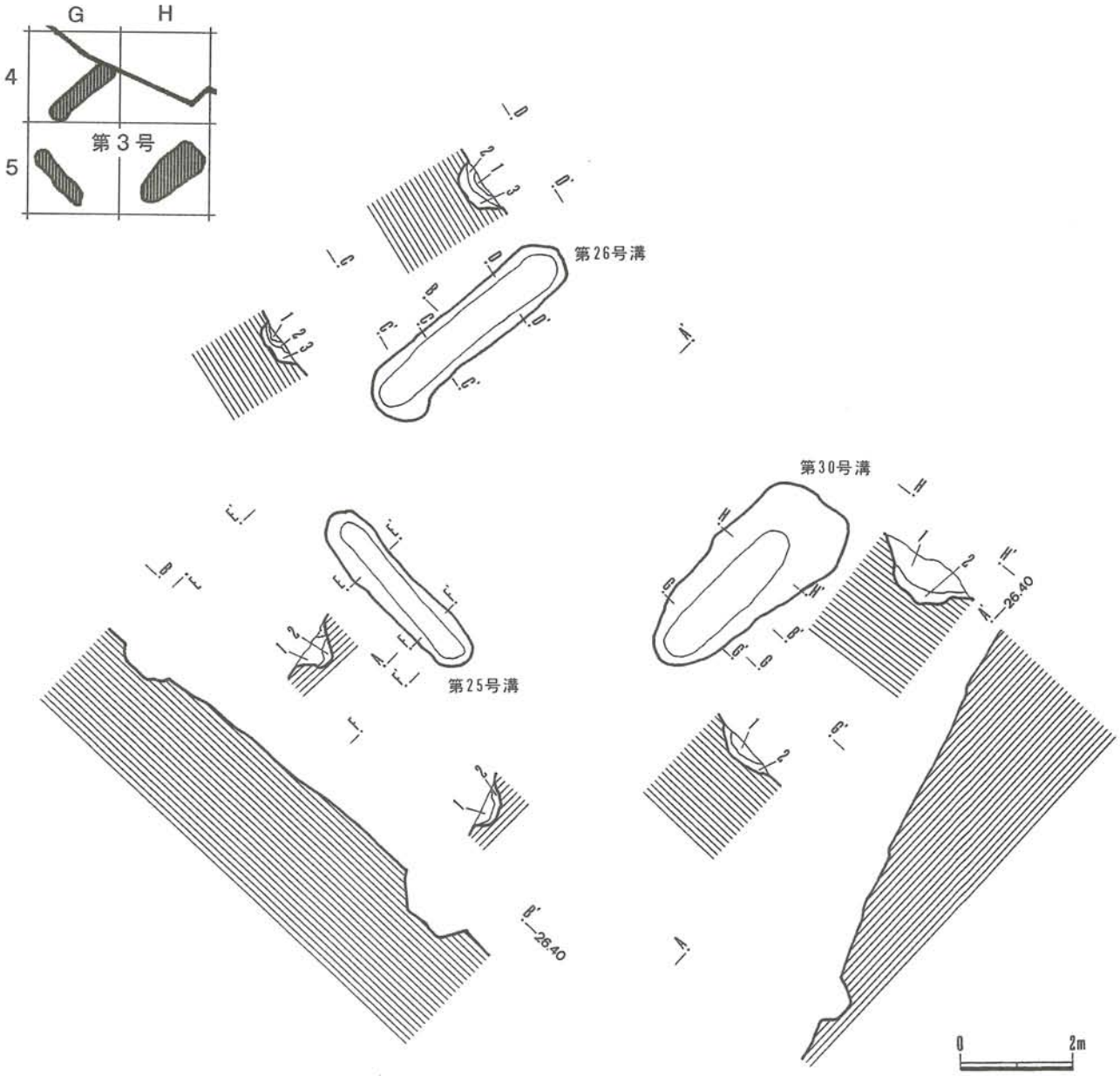
２(遺物No.465)と３(遺物No.522)は、連続した刺突紋が横方向に２段施紋され、内面はナデ調整が施されている。ただし３(遺物No.522）のナデ調整は粗い。

４(遺物No.513）は口縁部の破片で、内・外面ともにナデ調整が施されており、指頭痕がみられる。

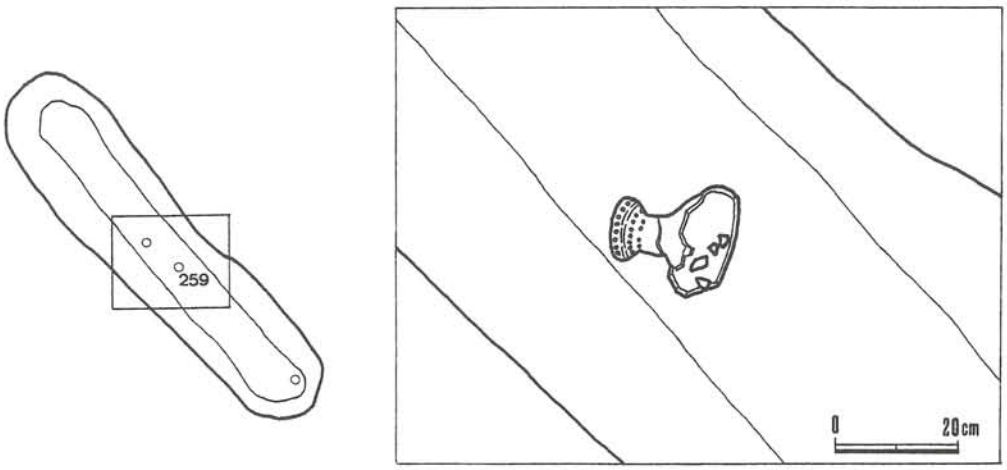
５(遺物No.530）は、内・外面ともに粗いヘラ調整が施されているのが顕著にみられる。

６(遺物No.549）は刺突紋が施されており、内面に稜がみられる。

これらの遺物は弥生時代後期のものと判断される。



図Ⅳ－２－９　第３号方形周溝墓の平面および断面図



図Ⅳ－２－10　南溝（第25号溝）の遺物（遺物No.259）出土状況図

第３号方形周溝墓

調査区の北部で、Ｇ－４～５、Ｈ－４～５グリッド内の南向きの斜面上に位置し、西側の第２号方形周溝墓と隣接している。西溝(第26号溝)、南溝(第25号溝)、東溝(第30号溝)が確認されているが、北溝は調査区外に位置すると推定される。

全体に開墾等で上部がかなり削平されており、全体がどのような形状でどの程度の規模であったかは不明であるが、東西の溝の距離は約８ｍを計り、南北の溝もほぼ同様の距離と推定される。なお、主体部は確認されなかった。

・西溝(第26号溝)

西溝(第26号溝)の平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。長さ 424cm、最大幅 110cm、深さは最深部が38cmあり、長軸の方向はN-48°-E を指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～10cm大の礫をやや多く含んでいる。第３層は黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径１～12cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土のブロックと炭化物を少量含んでいる。

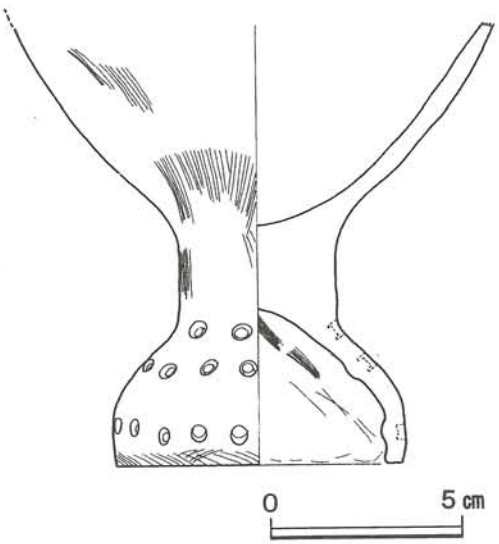
遺物は確認されなかった。

・南溝(第25号溝)

南溝(第25号溝)の平面形状は不整楕円形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ 350cm、最大幅80cm、深さは最深部が43cmあり、長軸の方向はN-43°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径 0.5～７cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径 0.5～７cm大の礫と黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は、溝の底面から弥生土器(遺物No.259) が出土している。その他、覆土中から土器の細片が２点出土したが、土器の年代を確定できるものではなかった。



図Ⅳ－２－11　南溝から出土した弥生土器(遺物No.259)

・東溝(第30号溝)

東溝(第30号溝)の平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。長さ 400cm、最大幅 183cm、深さは最深部が83cmあり、長軸の方向はN-46°-E を指している。

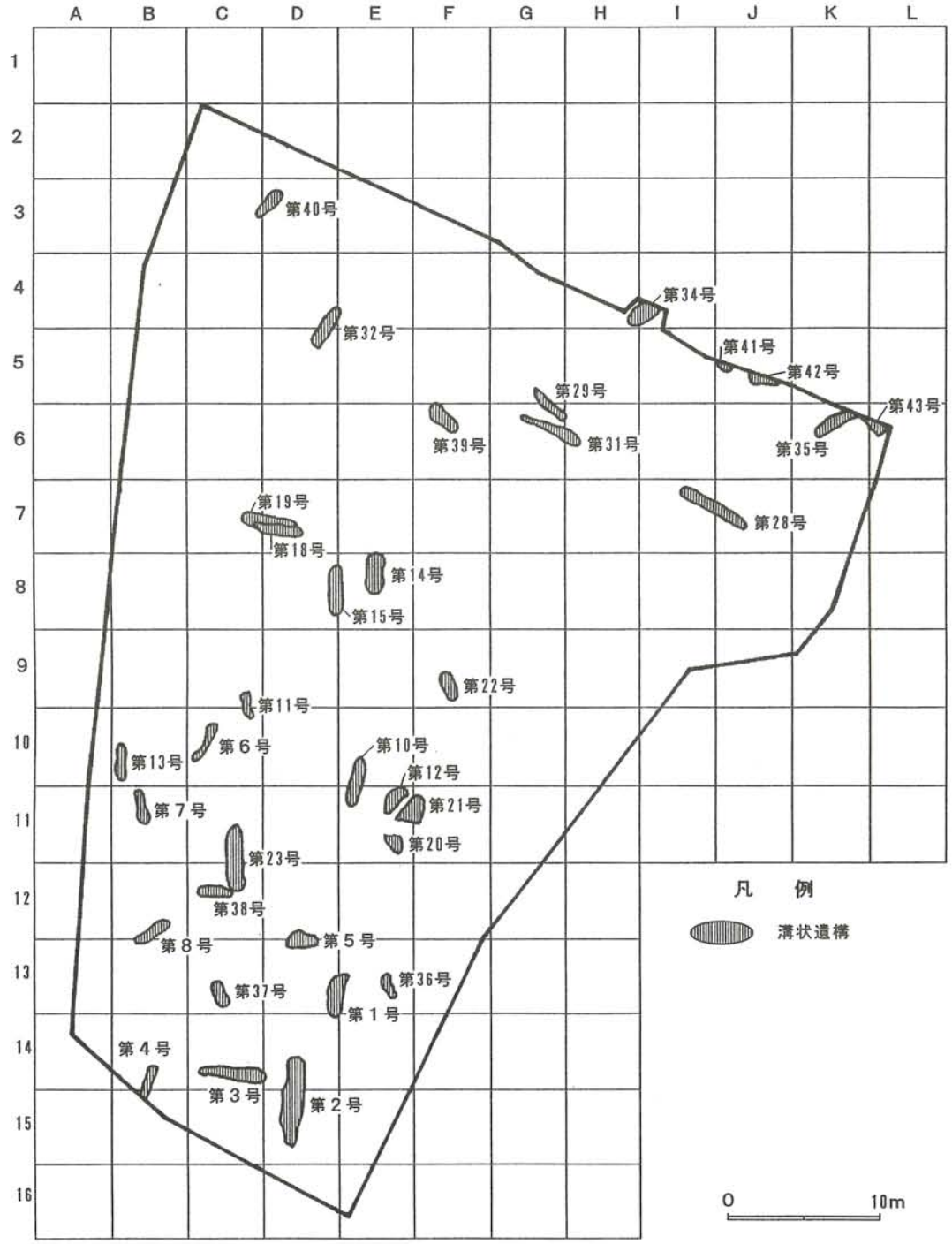
覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で、締りも粘性も弱く、径 0.3～12cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性も弱い。径 0.3～15cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

南溝から出土している土器から判断すると弥生時代中期後半の方形周溝墓と推定される。

２．溝状遺構と遺物

溝状遺構は調査区の南側の平坦部と北側斜面に分布しているが、平坦部に比較的多く分布している。確認された総数は43条で、平面形状は隅丸長方形・不整隅丸長方形が24条で約56％を占めており、楕円形・不整楕円形が14条で約33％である。平均的な大きさは長さ314cm、最大幅81cm、深さは最深部で25cmある。平坦部に分布している溝は長軸方向が南北を指す溝が多く、北側斜面に分布している溝は長軸方向が東西を指す溝が多い。しかし、ほとんどの溝内から遺物は出土しておらず、時代や性格を確定するのは困難である。



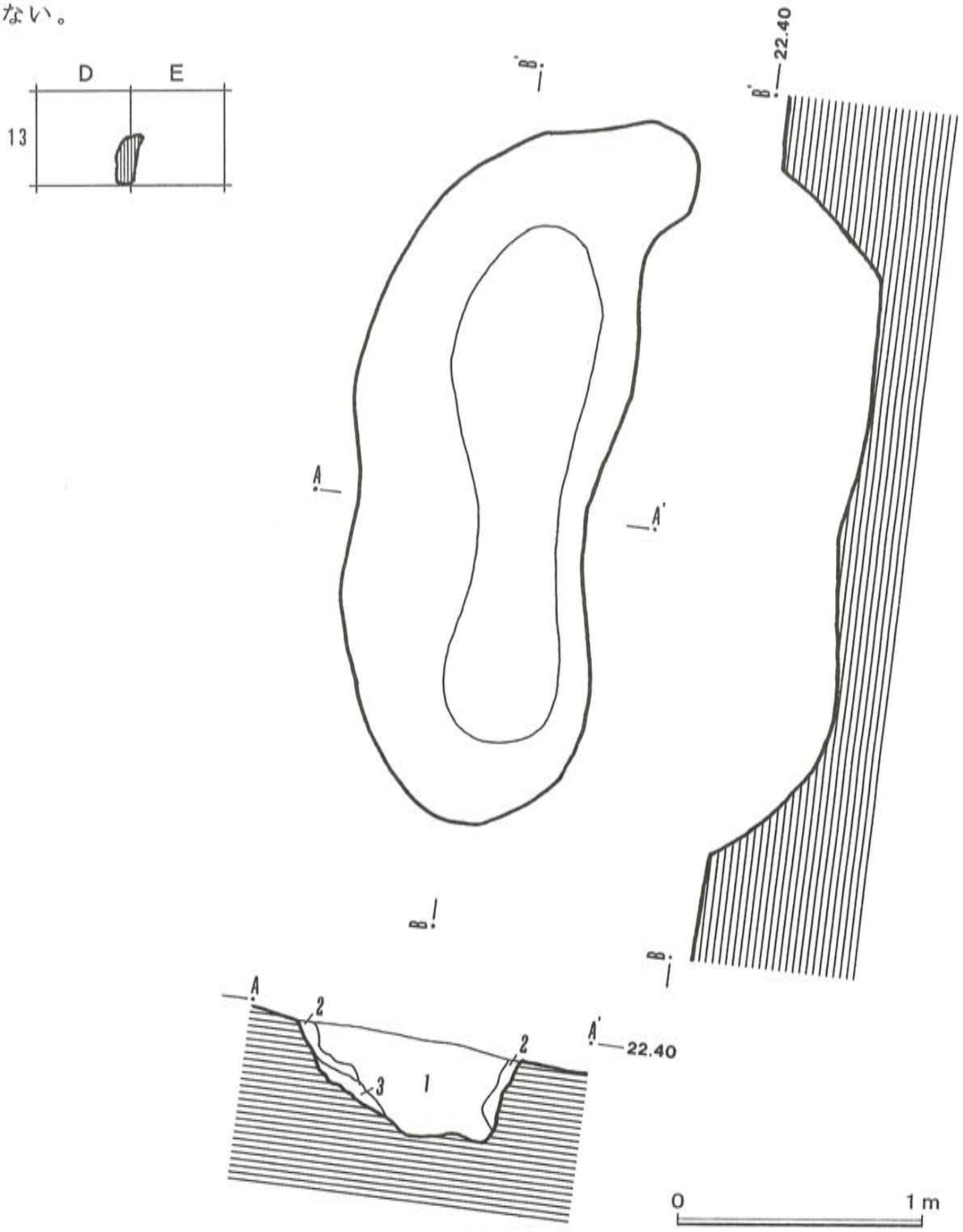
図Ⅳ－２－12　溝状遺構の分布図

第１号溝

Ｄ－13～Ｅ－13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、断面形状はＵ字形を呈すると思われるが西側の壁面は緩やかに立ち上がっている。長さ 280cm、最大幅 108cm、深さは最深部が44cmあり、長軸の方向はＮ－7°－Ｅ を指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～３cm大の礫・炭化物・暗黄褐色土のブロックを少量含んでいる。第２層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～２cm大の礫と黒色土のブロックを少量含んでいる。第３層は暗黄褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は覆土(第１層)から土器の細片が１点出土しているが、時代を確定できるものではない。



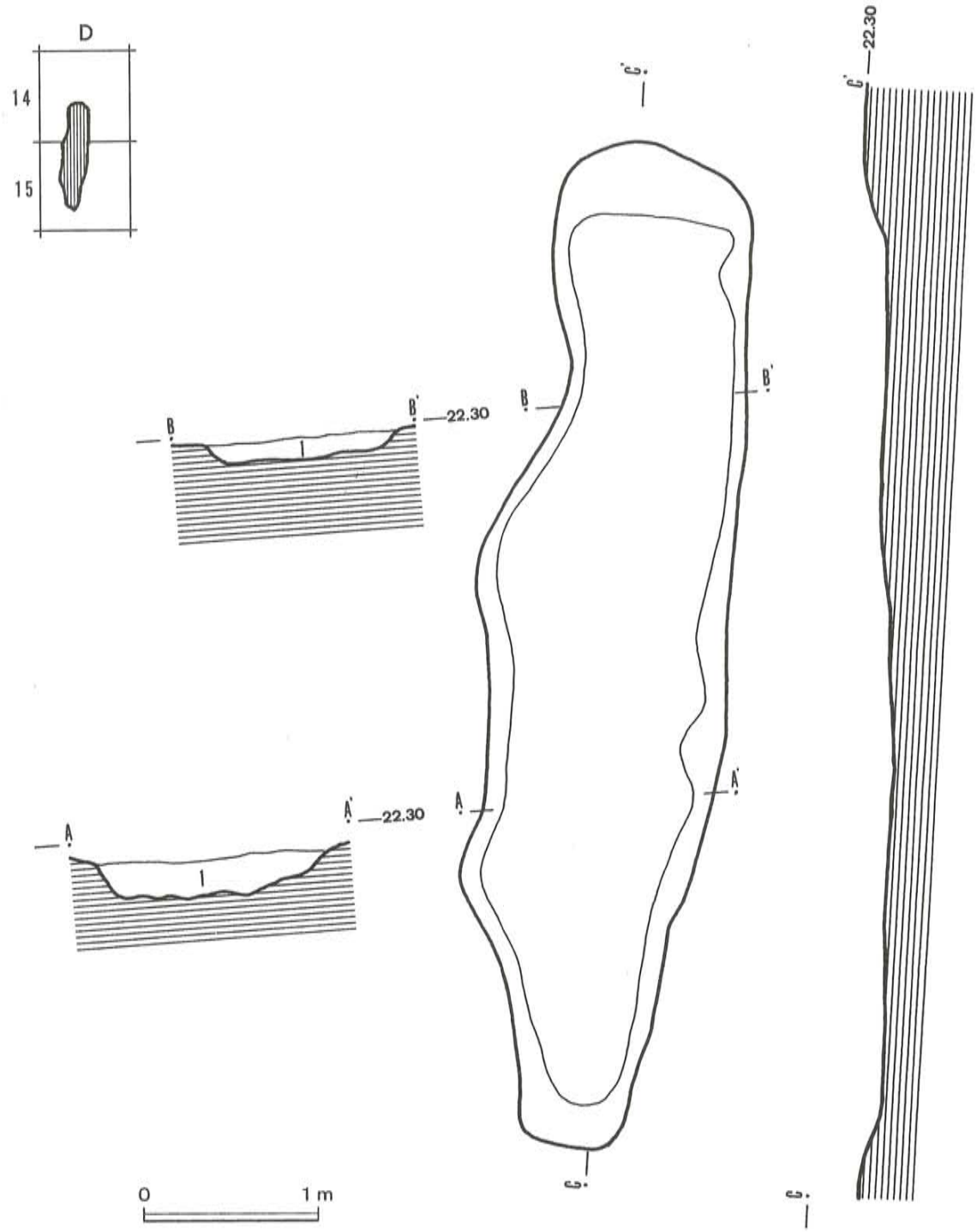
図Ⅳ－２－13　第１号溝の平面および断面図

第２号溝

Ｄ－14～15グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが上に開くＵ字形を呈している。長さ 586cm、最大幅 146cm、深さは最深部が22cmあり、長軸の方向はＮ－５°－Ｅ を指している。

覆土は黒褐色土が１層で、締りはやや強く、粘性は強い。径１～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

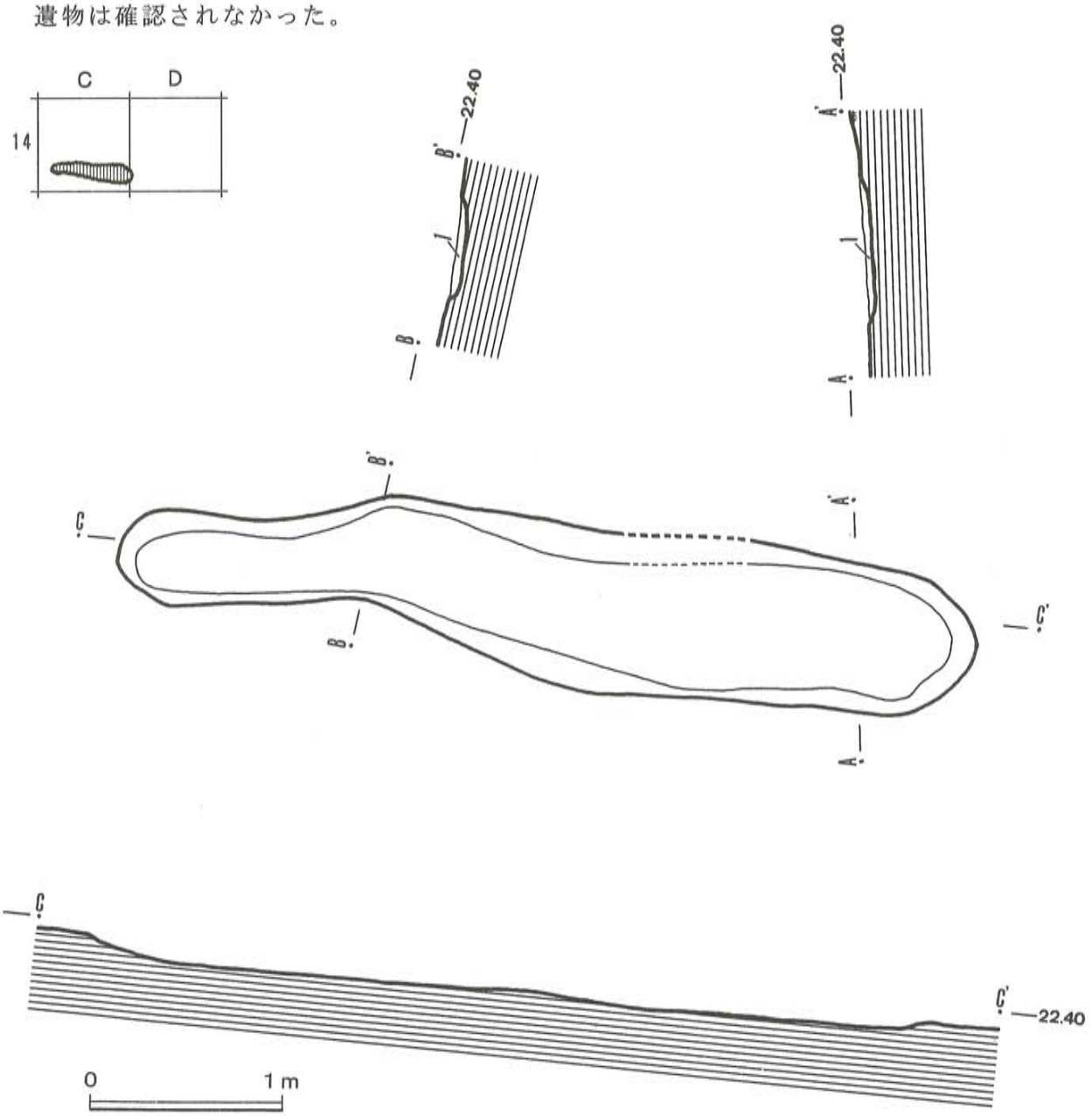


図Ⅳ－２－14　第２号溝の平面および断面図

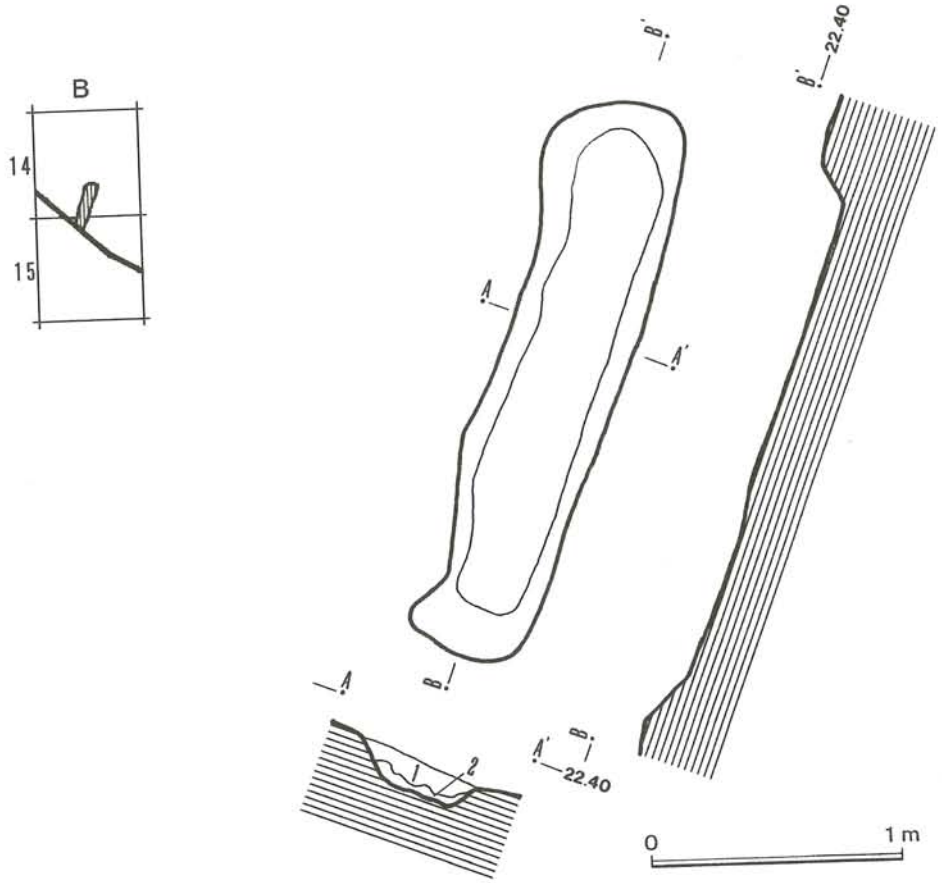
第３号溝

Ｃ－14～Ｄ－14グリッド内に位置し、溝の東北部を第１号茶毘墓に切られている。平面形状は不整楕円形で、断面形状は浅いため定かではないが上に開くＵ字形を呈している。長さ 452cm、最大幅84cm、深さは最深部が10cmあり、長軸の方向はN-82°-W を指している。

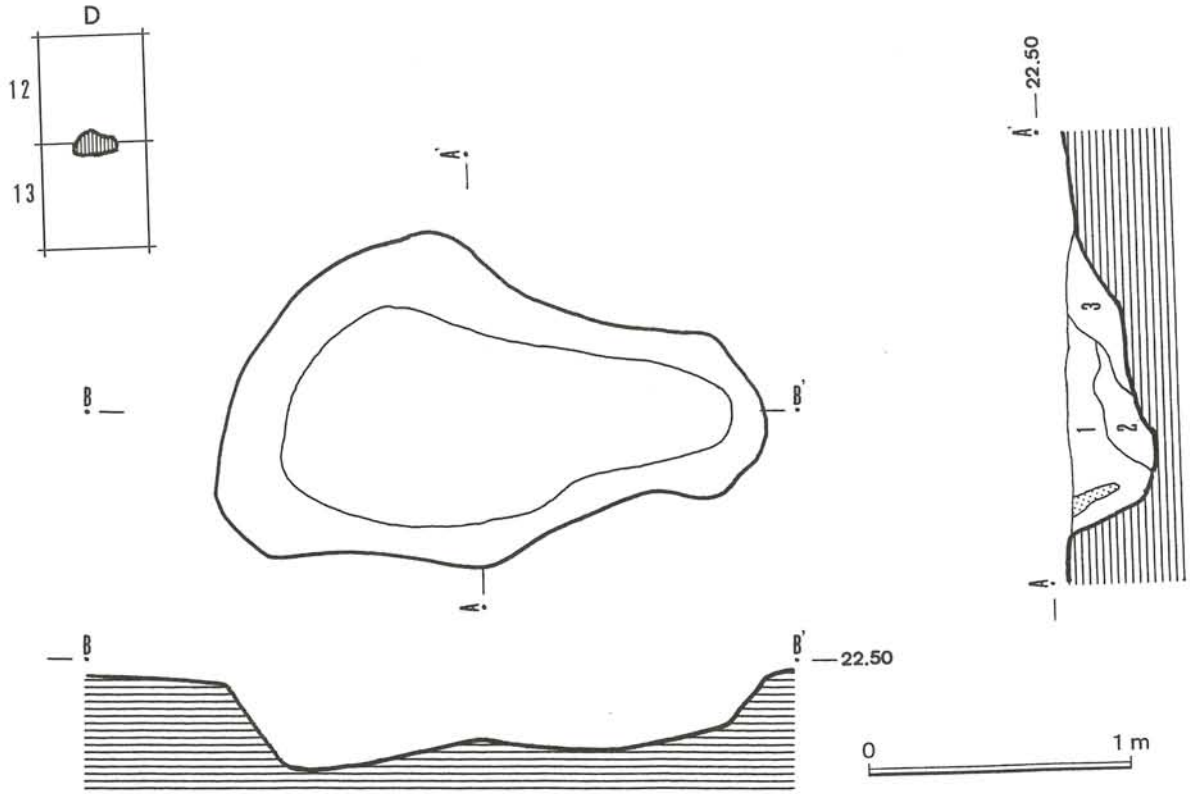
覆土は黒褐色土が１層で、締りも粘性もやや強く、径１～３cm大の礫を多く含んでいる。遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－２－15　第３号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－16　第４号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－17　第５号溝の平面および断面図

第４号溝

Ｂ－14～15グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いため定かではないが上に開くＵ字形を呈している。長さ 228cm、最大幅55cm、深さは最深部が15cmあり、長軸の方向はN-21°-E を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径１～３cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径１～２cm大の礫と黄橙色土のブロックを少量含んでいる。

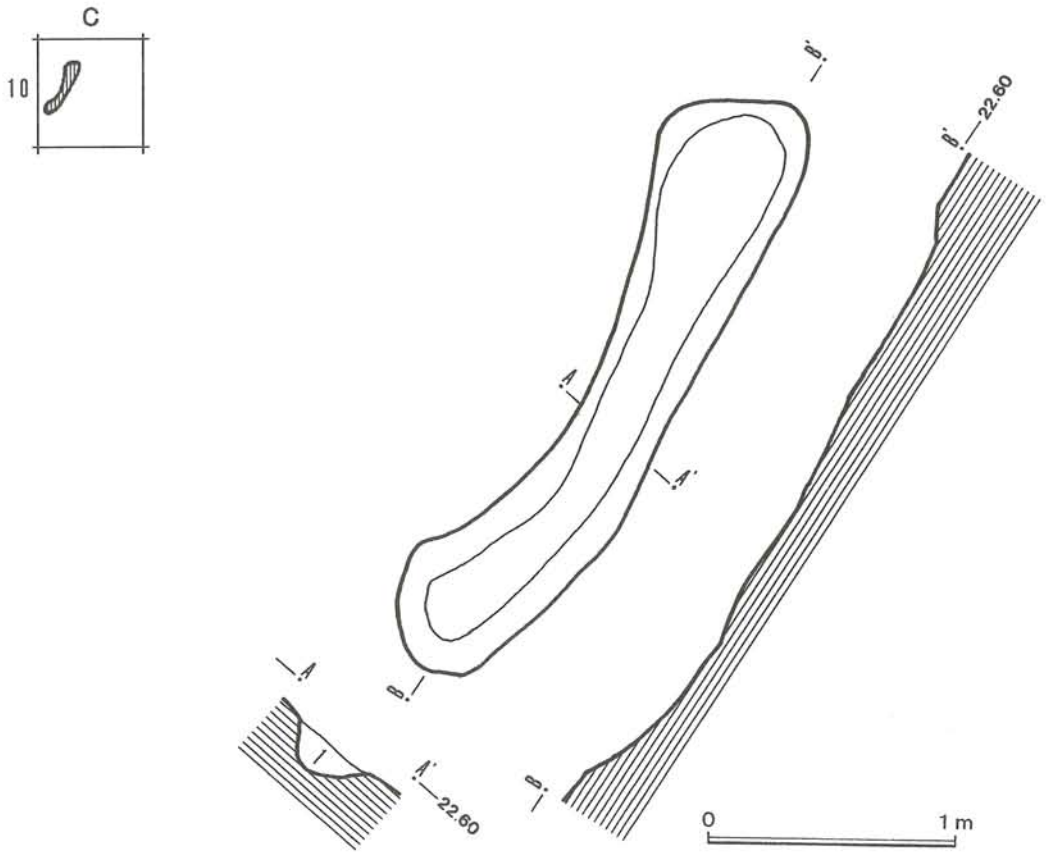
遺物は覆土(第１層)から土器の細片が２点出土しているが、時代を確定できるものではない。

第５号溝

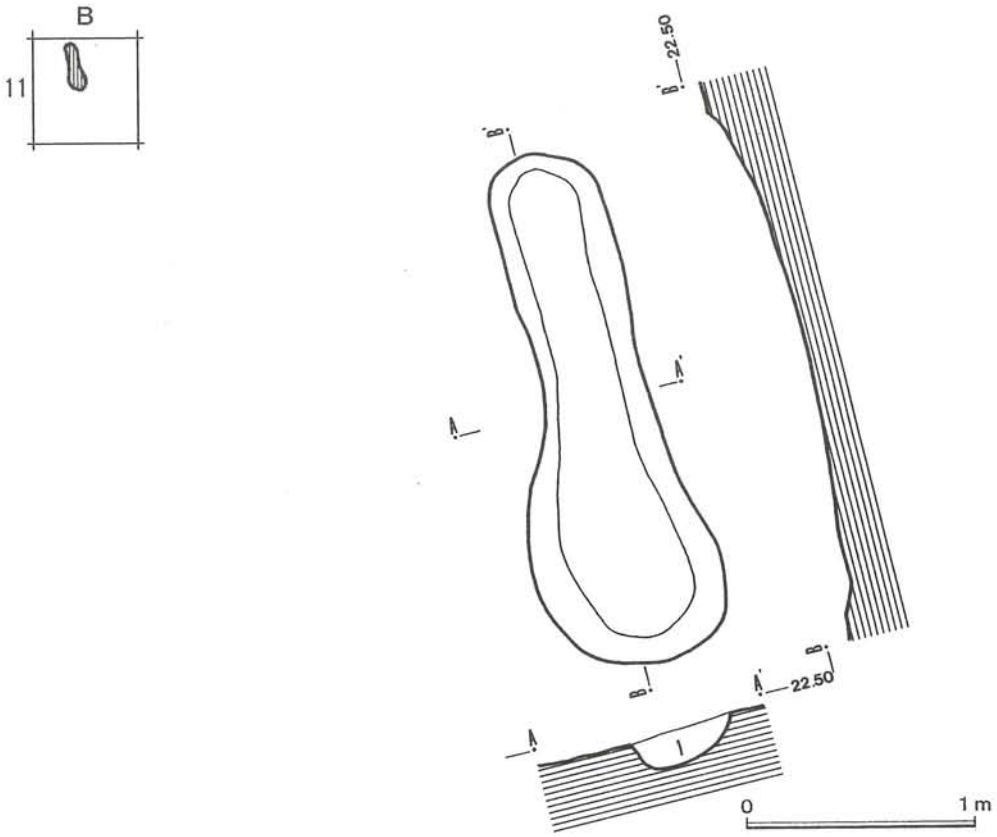
Ｄ－12～13グリッド内に位置し、溝の中央部南側で第８号ピットを切っている。平面形状は不整楕円形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ 198cm、最大幅 121cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-88°-W を指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫を少量含んでいる。第２層は黒褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。第３層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－２－18　第６号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－19　第７号溝の平面および断面図

第６号溝

Ｃ－10グリッド内に位置し、平面形状は不整隅丸長方形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ 258cm、最大幅59cm、深さは最深部が17cmあり、長軸の方向はN-27°-E を指している。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～６cm大の礫をやや多く含んでいる。

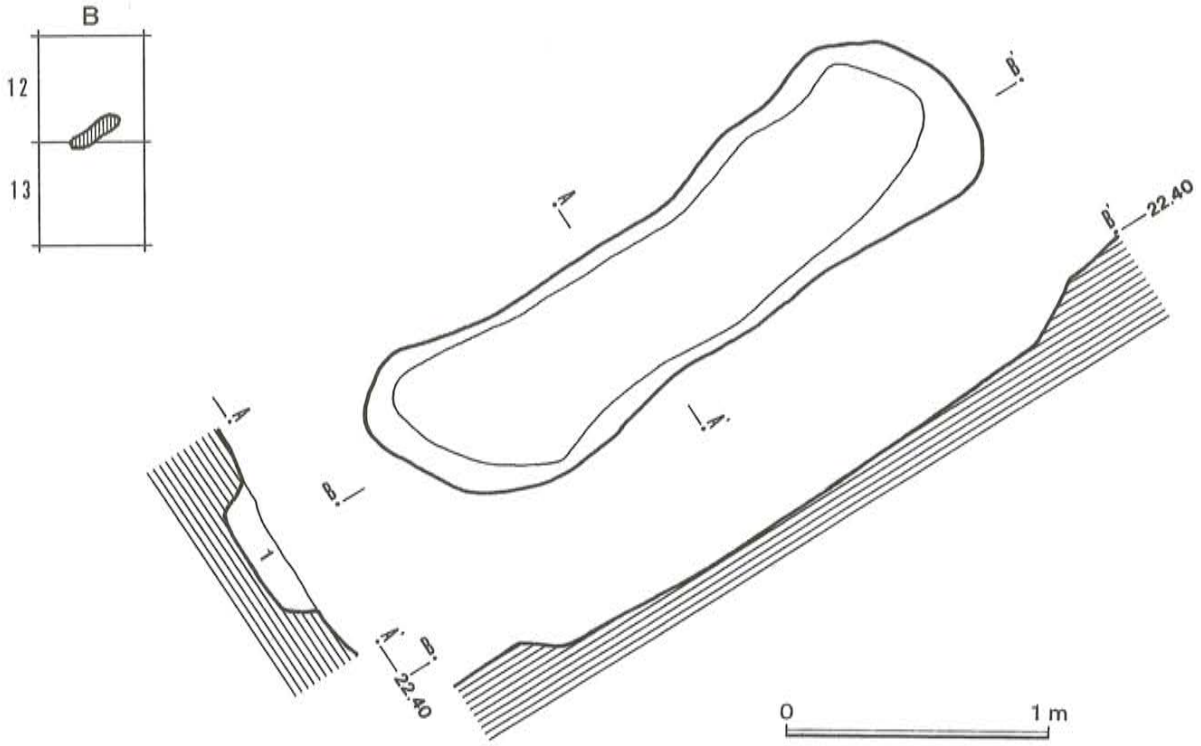
遺物は確認されなかった。

第７号溝

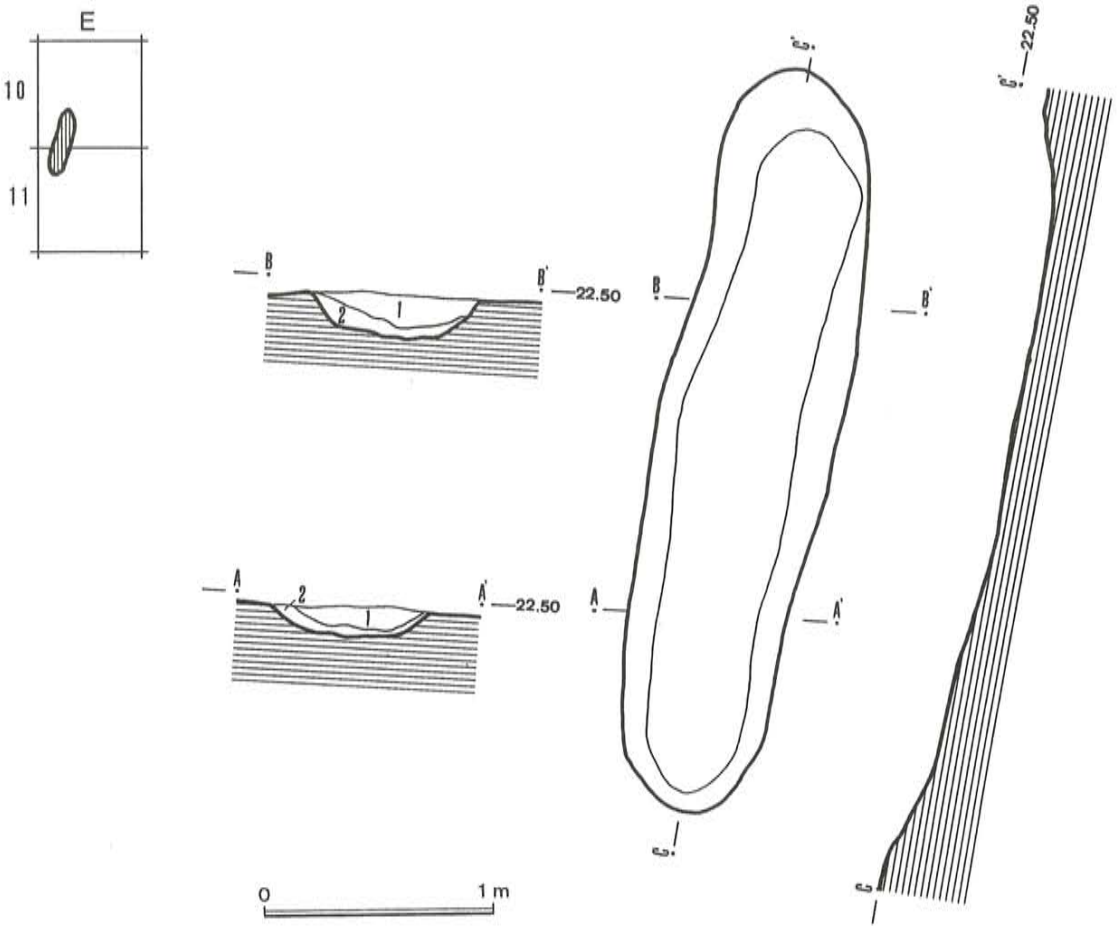
Ｂ－11グリッド内に位置し、平面形状は不整隅丸長方形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ 226cm、最大幅80cm、深さは最深部が15cmあり、長軸の方向はN-12°-W を指している。

覆土は暗褐色土が１層で、締りも粘性も弱く、径２～３cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－２－20　第８号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－21　第10号溝の平面および断面図

第８号溝

Ｂ－12～13グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。長さ 252cm、最大幅74cm、深さは最深部が16cmあり、長軸の方向はN-58'-E を指している。

覆土は黒色土が１層で締りはやや弱く、粘性は強い。径 0.5～10cm大の礫を含んでいる。

遺物は覆土の中位から土器の細片が３点出土しているが、時代を確定できるものではない。

第９号溝

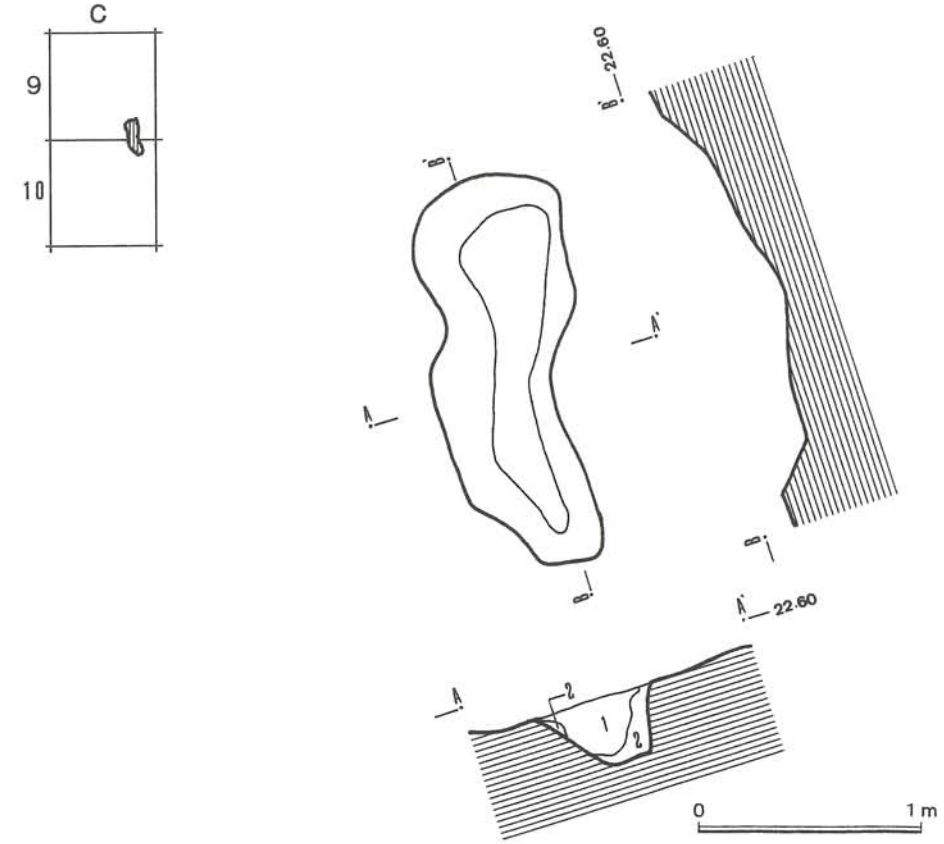
第１号方形周溝墓の南溝にあたる。

第10号溝

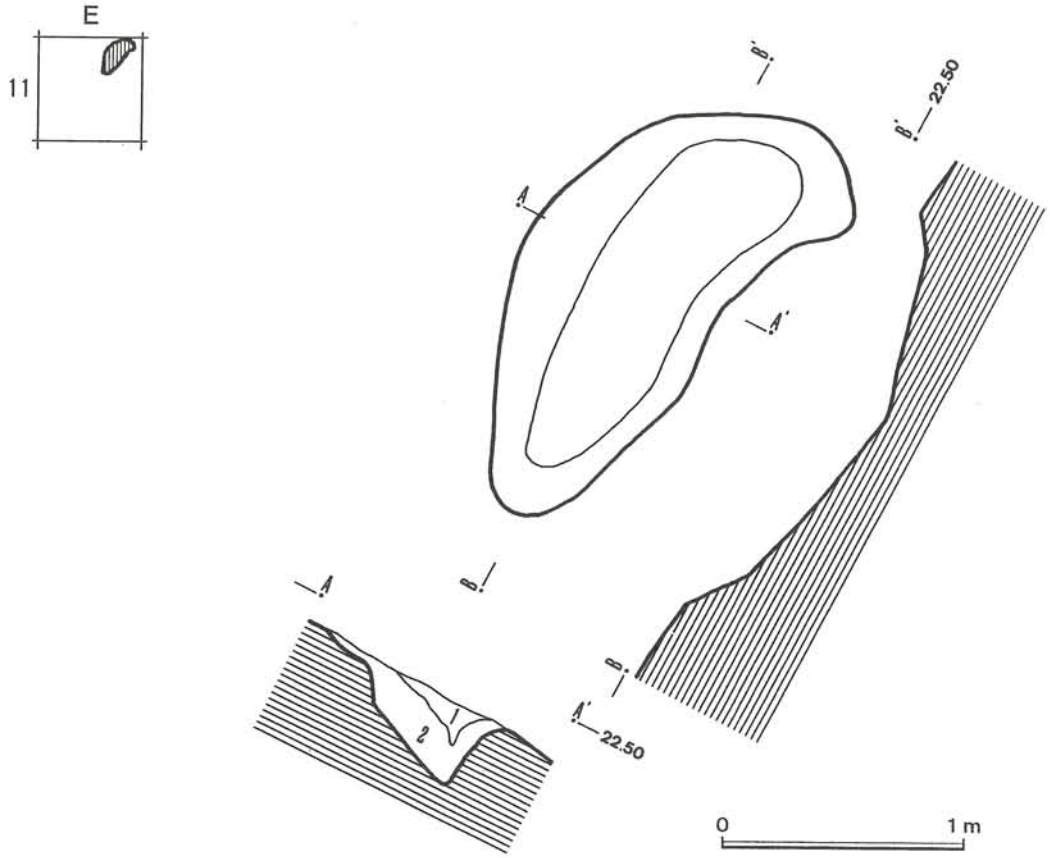
Ｅ－10～11グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。長さ 325cm、最大幅78cm、深さは最深部が18cmあり、長軸の方向はN-11'-E を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～６cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。第２層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径１cm大の礫と暗黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

遺物は溝の底面から土器の細片が１点出土しているが、時代を確定できるものではない。



図Ⅳ－２－22　第11号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－23　第12号溝の平面および断面図

第11号溝

Ｃ－９～10グリッド内に位置し、平面形状は不整隅丸長方形で、断面形状はやや上に開くＵ字形を呈するが、西側の壁面は緩やかに立ち上がっている。長さ 175cm、最大幅67cm、深さは最深部が31cmあり、長軸の方向はN-15°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～４cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～３cm大の礫を少量含んでいる。

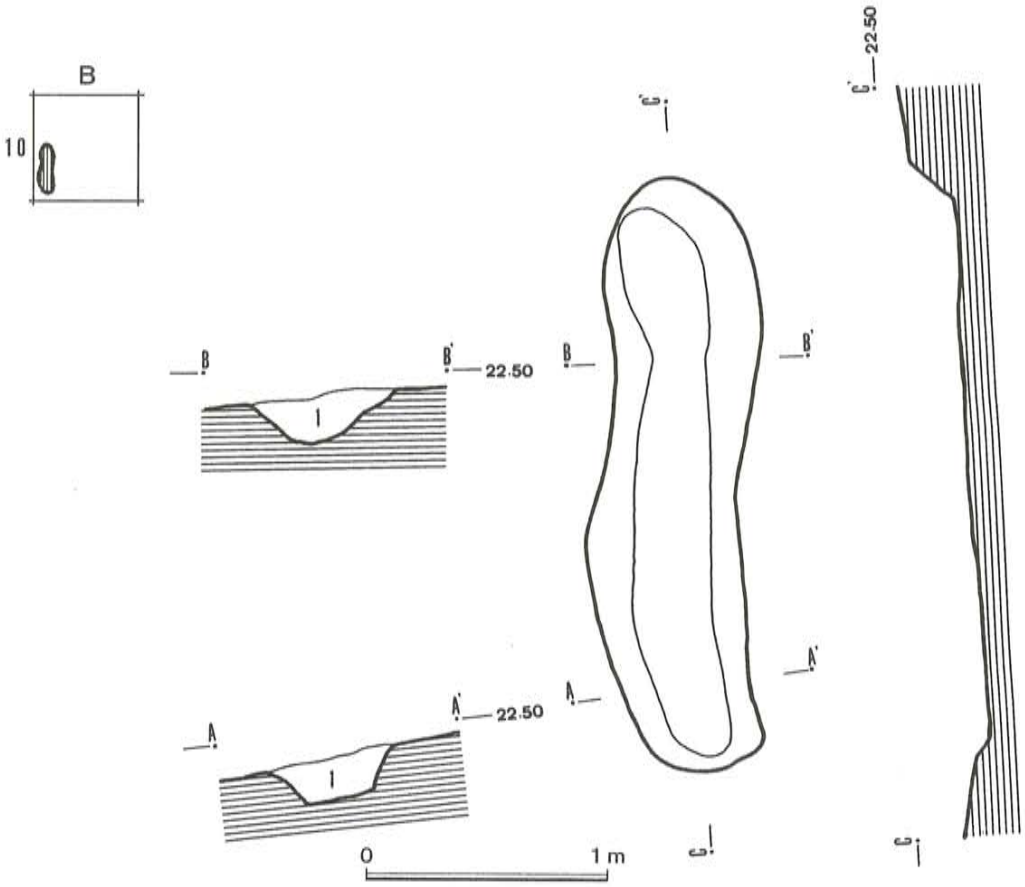
遺物は確認されなかった。

第12号溝

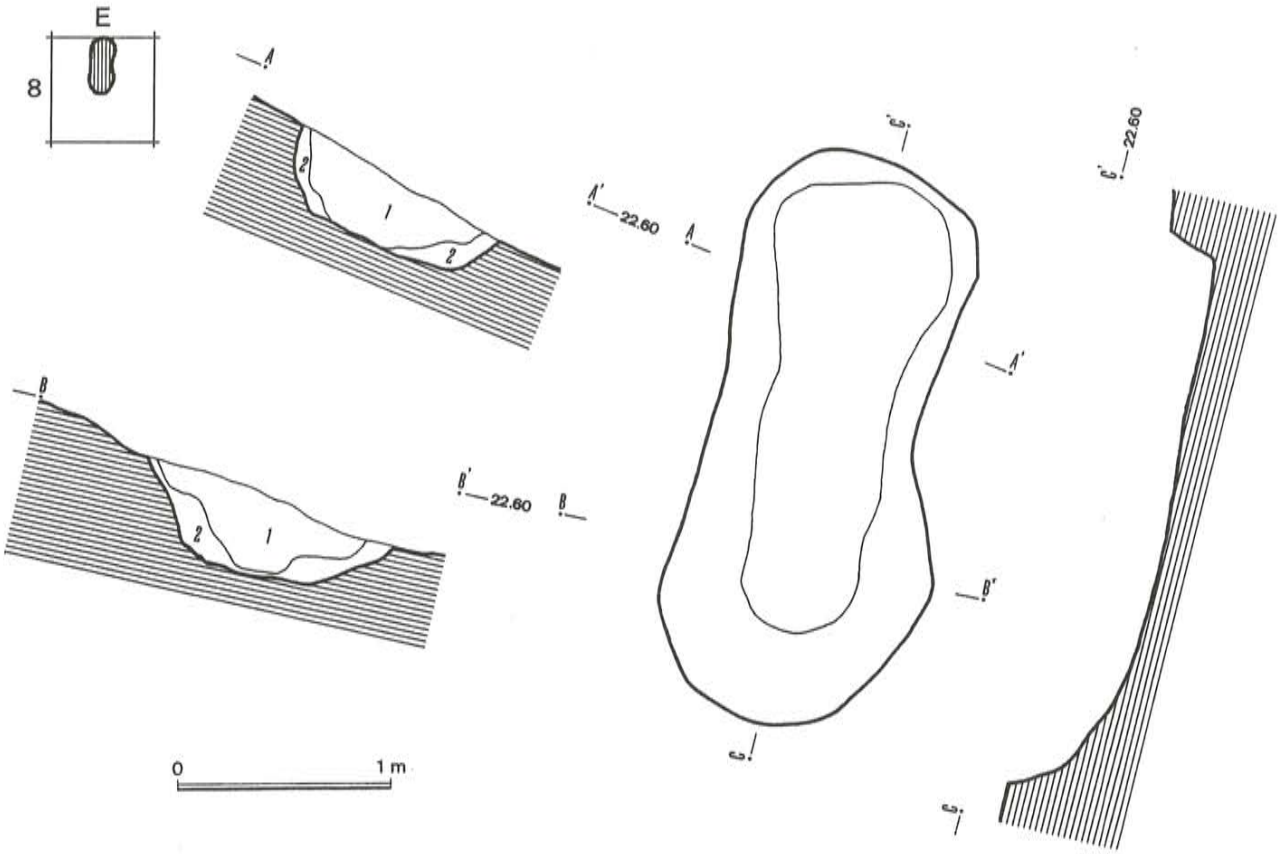
Ｅ－11グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、断面形状は西北側壁面が緩やかに立ち上がるＶ字形を呈している。長さ 189cm、最大幅75cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-32°-E を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径２～３cm大の礫を多く含んでいる。第２層は黒色土で、締りも粘性もやや弱く、径４～８cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－２－24　第13号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－25　第14号溝の平面および断面図

第13号溝

Ｂ－10グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は丸底状から上に開くＵ字形を呈している。長さ 241cm、最大幅63cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-4°-W を指している。

覆土は暗褐色土が１層で締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.5 ～10cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第14号溝

Ｅ－８グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は丸底状から上に広く開くＵ字形を呈している。長さ 268cm、最大幅 120cm、深さは最深部が40cmあり、長軸の方向はN-2°-E を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で、締りも粘性もやや強く、径５～15cm大の礫を多く含んでいる。第２層は明黒褐色土で、締りも粘性も強く、径５～10cm大の礫をやや多く含んでいる。

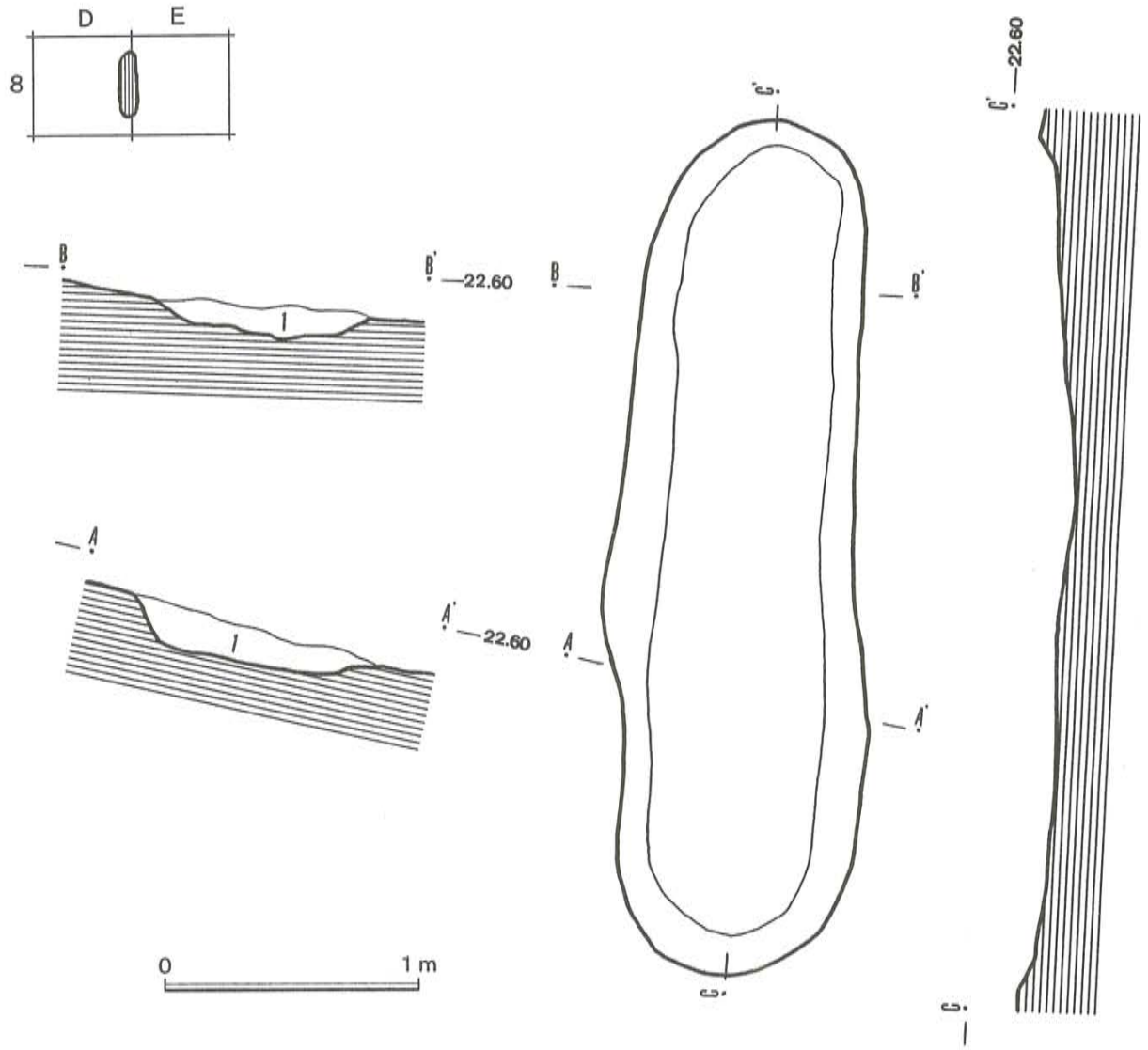
遺物は溝の底面から土器の細片が１点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。

第15号溝

Ｄ～Ｅ８グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが、上に広く開くＵ字形を呈していると思われる。長さ 334cm、最大幅99cm、深さは最深部が18cmあり、長軸の方向はＮ－１°－Ｅ を指している。

覆土は黒褐色土が１層で締りは弱く、粘性は強い。径 0.5～12cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－２－26　第15号溝の平面および断面図

第16号溝

第１号方形周溝墓の西溝にあたる。

第17号溝

第１号方形周溝墓の北溝にあたる。第20・21号溝を切っている。

第18・19号溝

Ｃ～Ｄ－７グリッド内に位置し、第19号溝の南側を第18号溝が切っている。

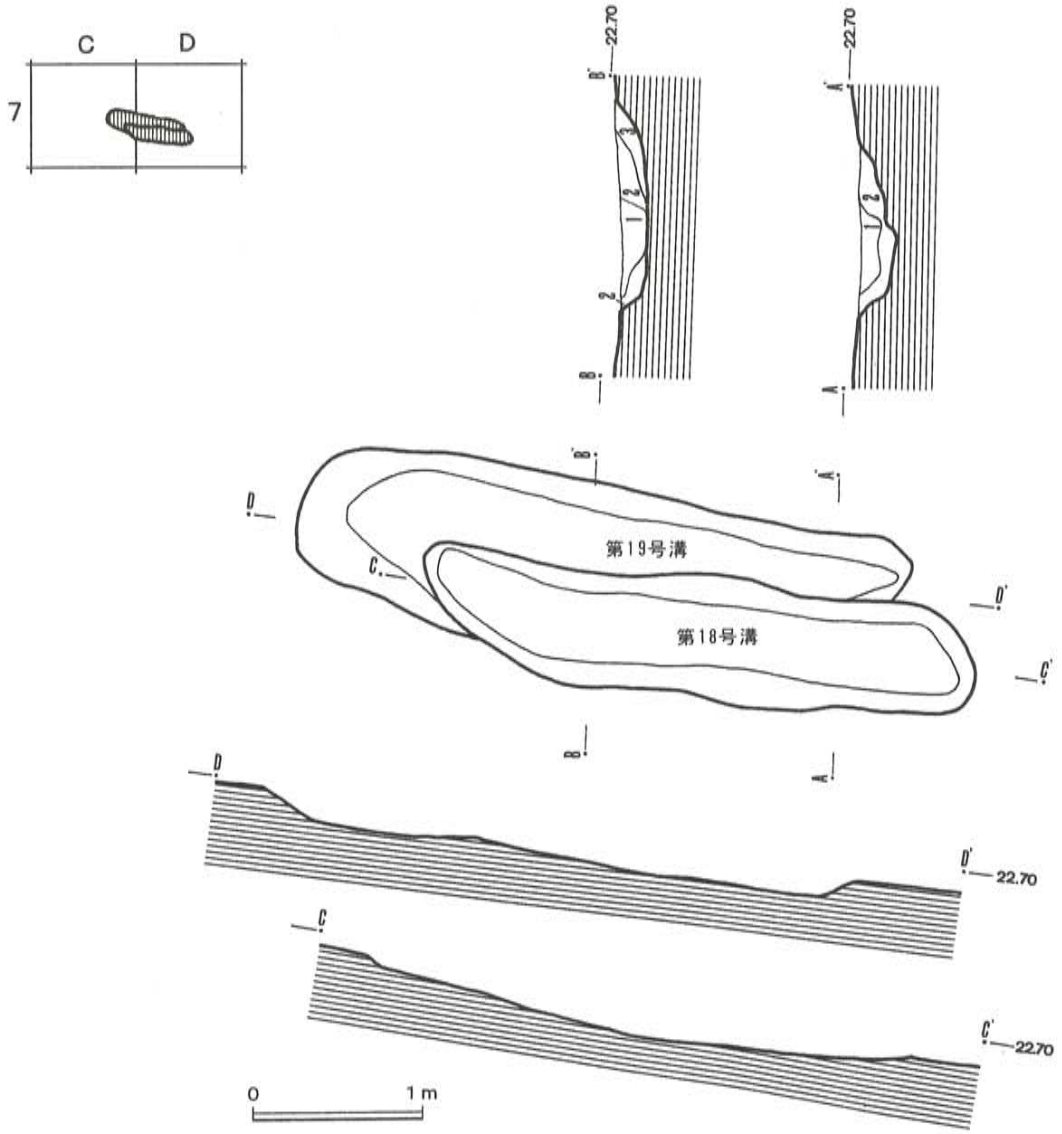
第18号溝の平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが、上に広く開くＵ字形を呈していると思われる。長さ 328cm、最大幅76cm、深さは最深部が17cmあり、長軸の方向はN-80°-Wを指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～６cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は黒褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径２～７cm大の礫をやや多く含んでいる。

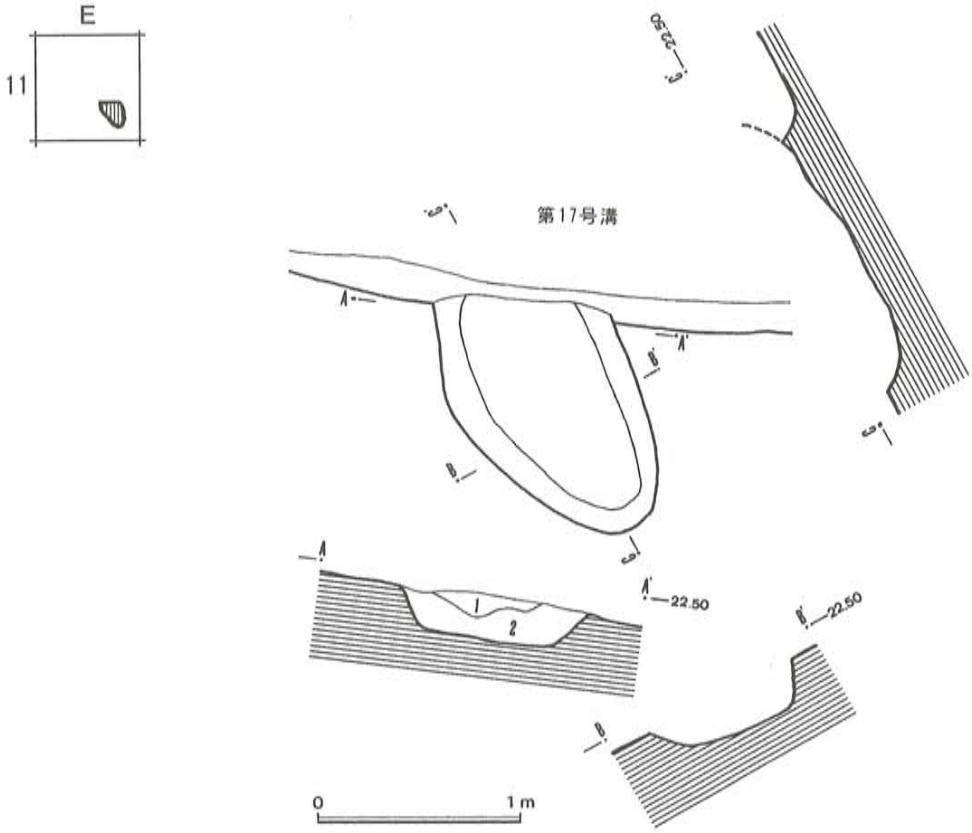
第19号溝の平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが、上に広く開くＵ字形を呈していると思われる。長さ 365cm、最大幅 101cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-82°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は第18号溝の第２層と同じである。第２層は断面Ｂ－Ｂ'の第３層に相当する暗褐色土で、締りも粘性も強く、径１cm大の礫を少量含んでいる。

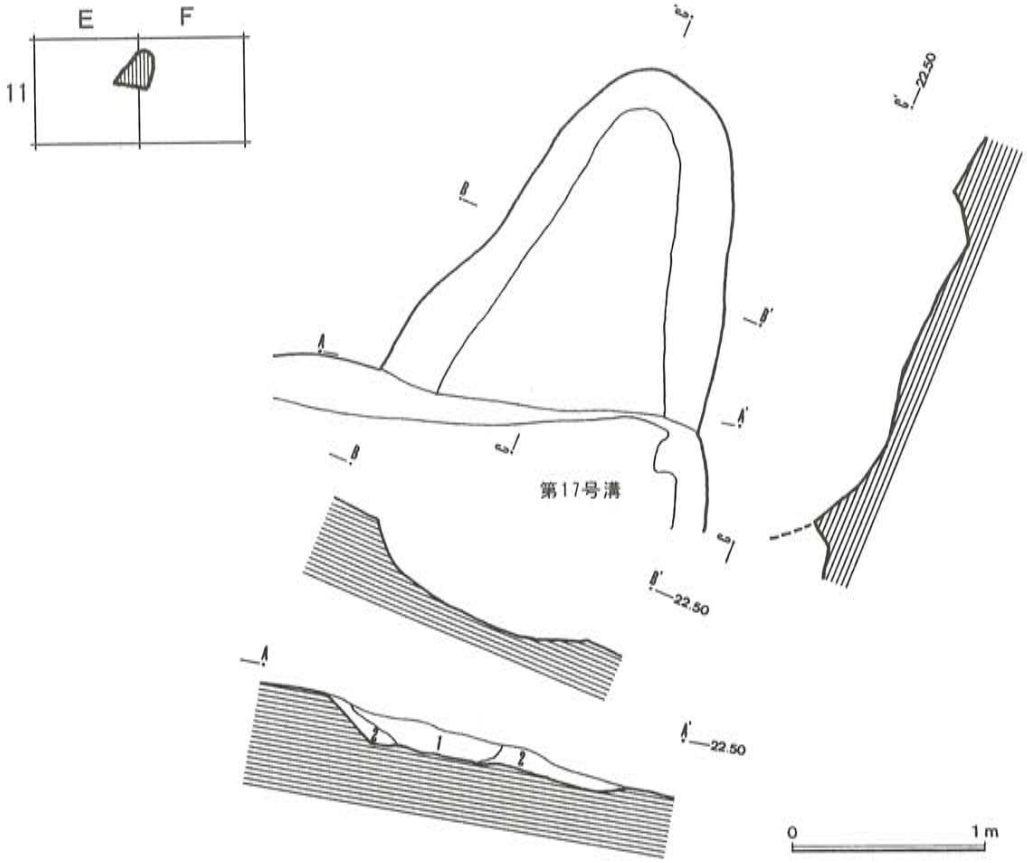
第18号溝・第19号溝とも遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－２－27　第18・19号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－28　第20号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－29　第21号溝の平面および断面図

第20号溝

Ｅ－11グリッド内に位置し、溝の北側を第１号方形周溝墓の北溝にあたる第17号溝によって切られている。溝の平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。長さは推定 160cm、最大幅92cm、深さは最深部が22cmあり、長軸の方向はN-30°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～６cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は覆土の上位から土器の細片が１点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。

第21号溝

Ｅ－11～Ｆ－11グリッド内に位置し、溝の南側を第１号方形周溝墓の北溝にあたる第17号溝によって切られている。溝の平面形状は不整楕円形で、断面形状は丸底状を呈している。長さは推定 240cm、最大幅 160cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-23°-Eを指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～６cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

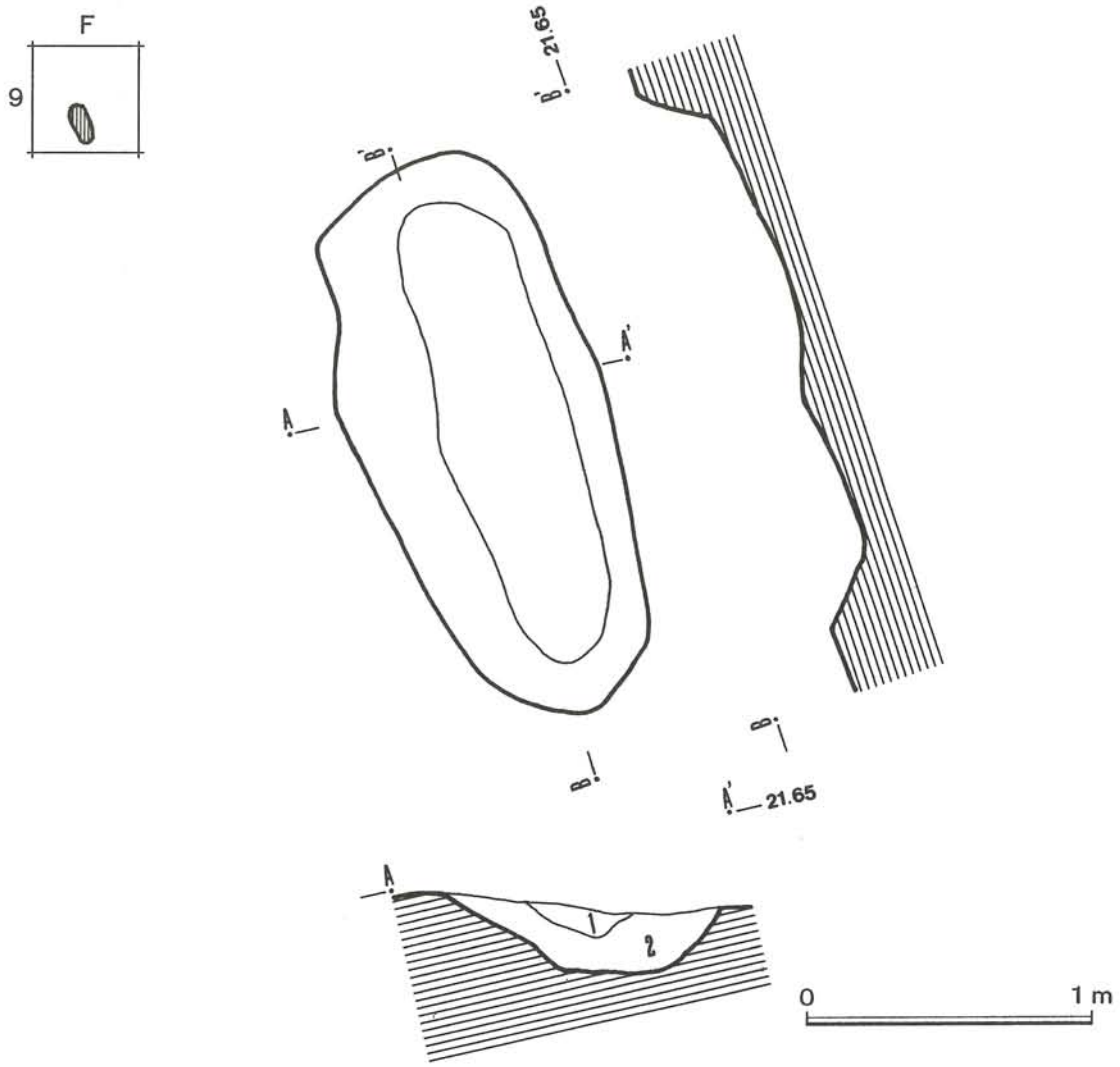
遺物は確認されなかった。

第22号溝

Ｆ－９グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ 198cm、最大幅90cm、深さは最深部が28cmあり、長軸の方向はN-19°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りも粘性もやや弱く、径 0.3～６cm大の礫を多く含んでいる。第２層は暗茶褐色土で締りも粘性もやや弱く、径 0.3～６cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は第１層から欠損した銭貨「寛永通寶」（遺物No.126）が１点出土しているが、流入したものと思われ、溝の時代を確定するものではない。



図Ⅳ－２－30　第22号溝の平面および断面図

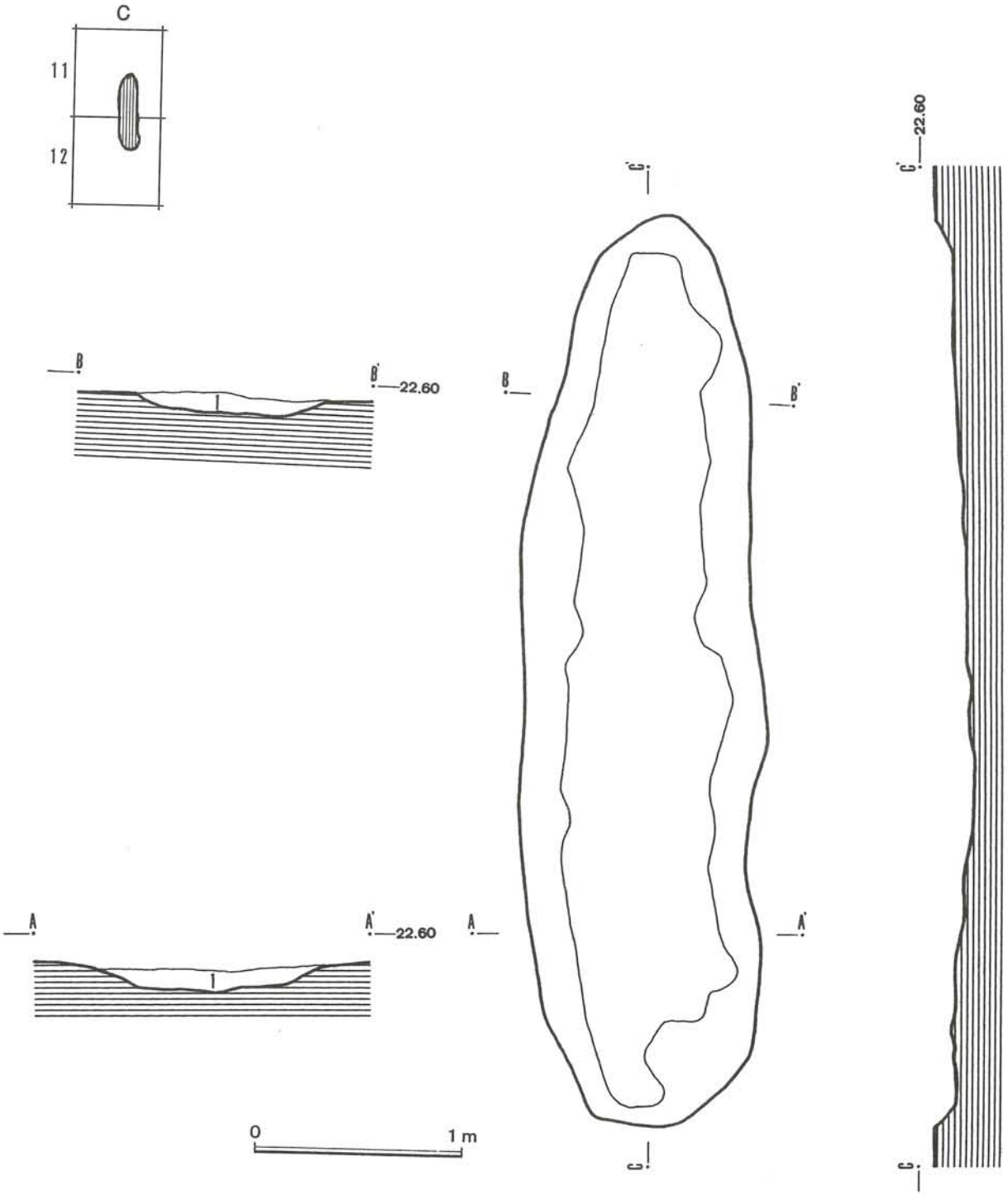
図Ⅳ－２－31　第22号溝から出土した銭貨「寛永通寶」（遺物No.126）

第23号溝

Ｃ－11～12グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いため定かではないが上に広く開くＵ字形を呈していると思われる。長さ 439cm、最大幅 118cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はＮ－Ｓ を指している。

覆土は黒褐色土が１層で、締りはやや弱く、粘性は強い。径 0.5～７cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－２－32　第23号溝の平面および断面図

第24号溝

第２号方形周溝墓の南溝にあたる。

第25号溝

第３号方形周溝墓の南溝にあたる。

第26号溝

第３号方形周溝墓の西溝にあたる。

第27号溝

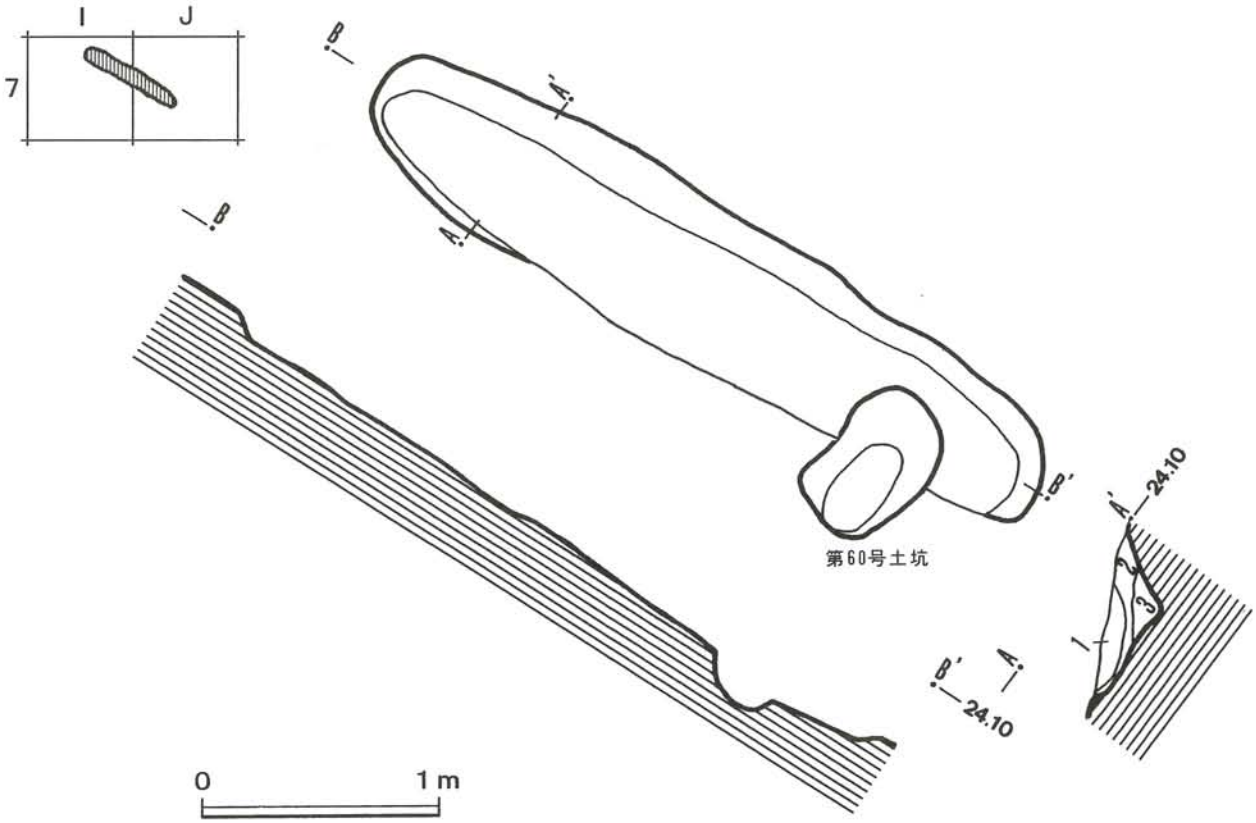
第２号方形周溝墓の東溝にあたる。

第28号溝

Ｉ－７～Ｊ－７グリッド内に位置し、傾斜面に沿っているため、南西側が削平されており、さらに南東部を第60号土坑によって切られている。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は南西側が削平されているため定かではないが、上に開くＵ字形を呈していると思われる。長さ 497cm、最大幅96cm、深さは最深部が38cmあり、長軸の方向はN-59°-W を指している。

覆土は３層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5～７cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5～４cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土のブロックを含んでいる。第３層は黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



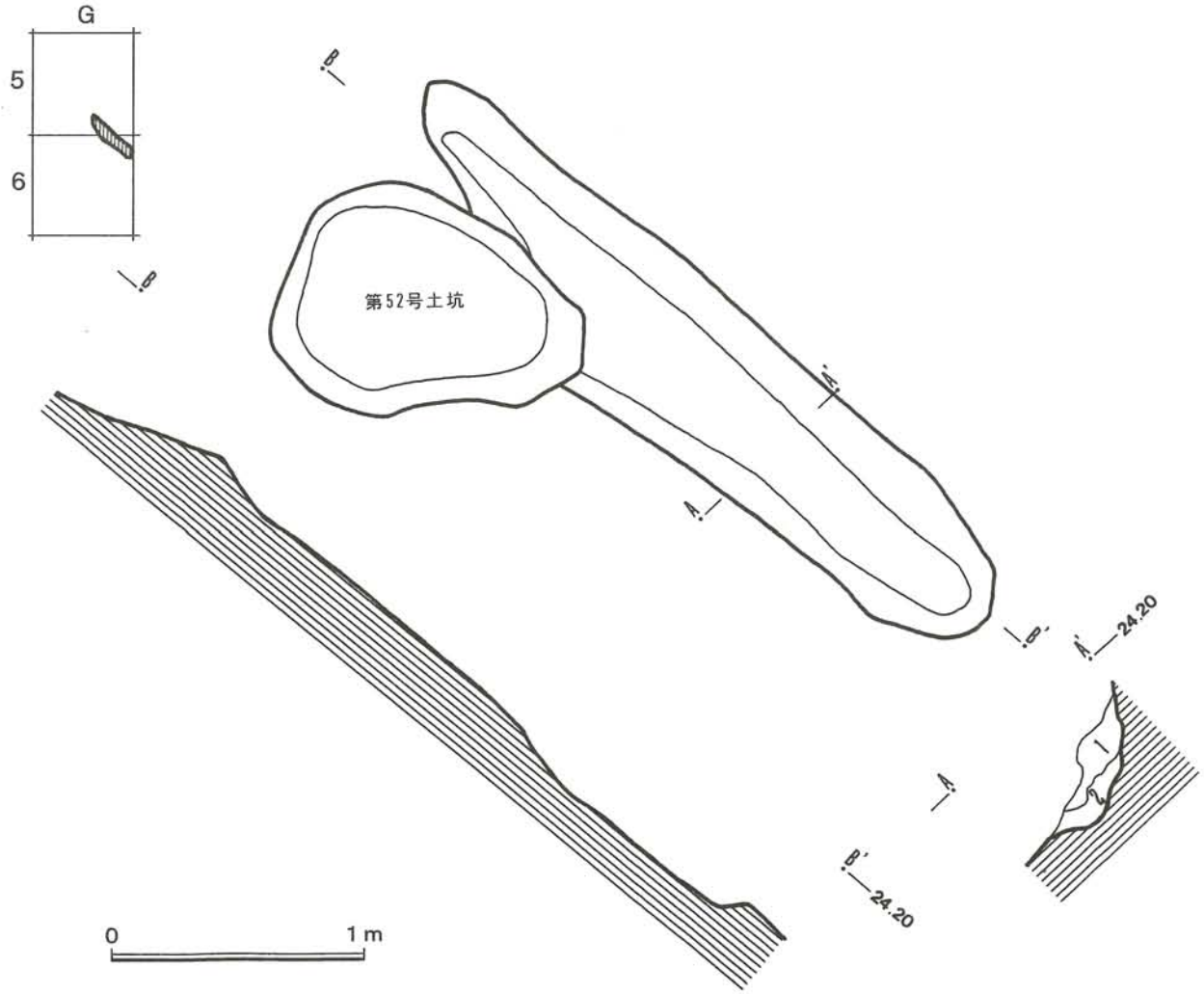
図Ⅳ－２－33　第28号溝の平面および断面図

第29号溝

Ｇ－５～６グリッド内に位置し、北西部を第52号土坑により切られている。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いため定かではないが丸底状を呈していると思われる。長さ295cm、最大幅60cm、深さは最深部が19cmあり、長軸の方向はN-47°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗黄褐色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径 0.3～５cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は黄褐色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。

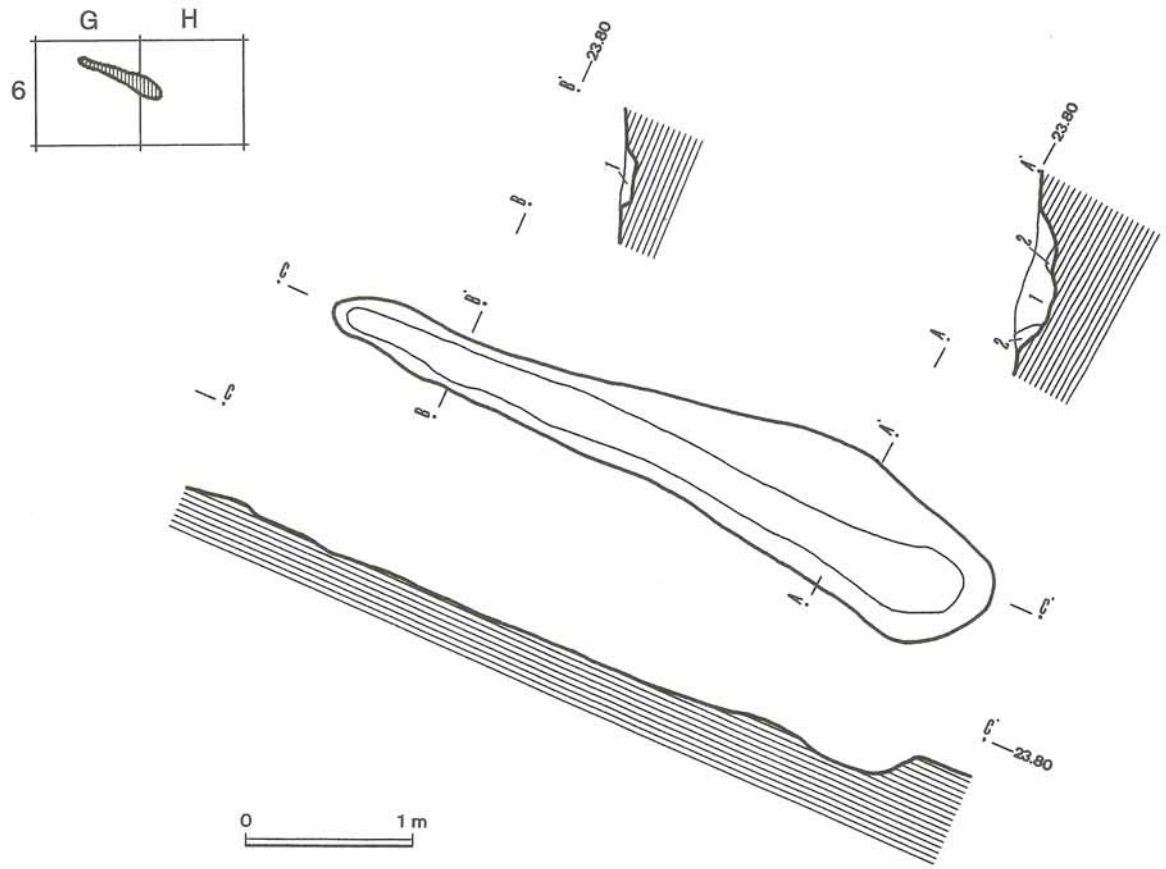
遺物は確認されなかった。



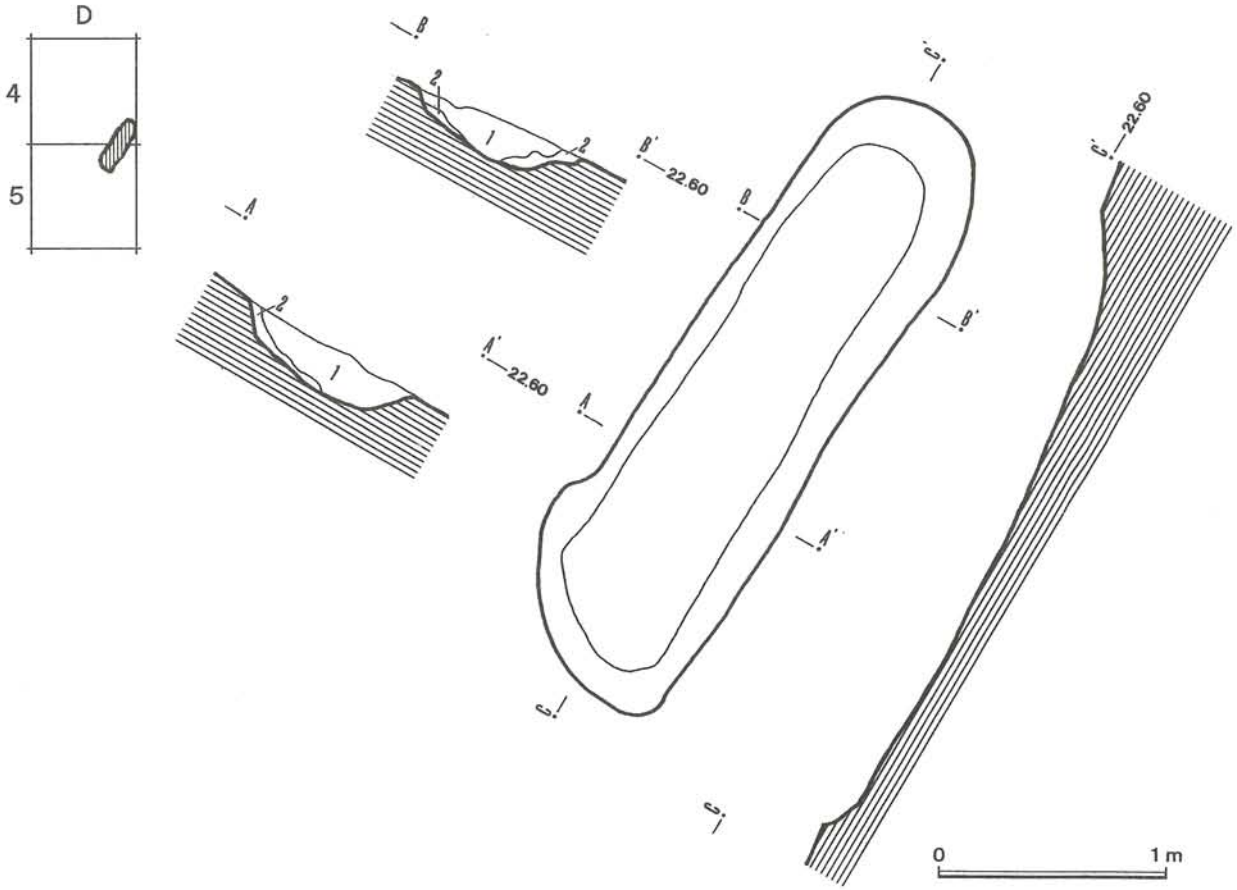
図Ⅳ－２－34　第29号溝の平面および断面図

第30号溝

第３号方形周溝墓の東溝にあたる。



図Ⅳ－２－35　第31号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－36　第32号溝の平面および断面図

第31号溝

Ｇ－６～Ｈ－６グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いため定かではないが丸底状を呈していると思われる。長さ 430cm、最大幅82cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-68°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りも粘性もやや弱く、径 0.5～10cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5～３cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は覆土の第１層から土器の細片が１点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。

第32号溝

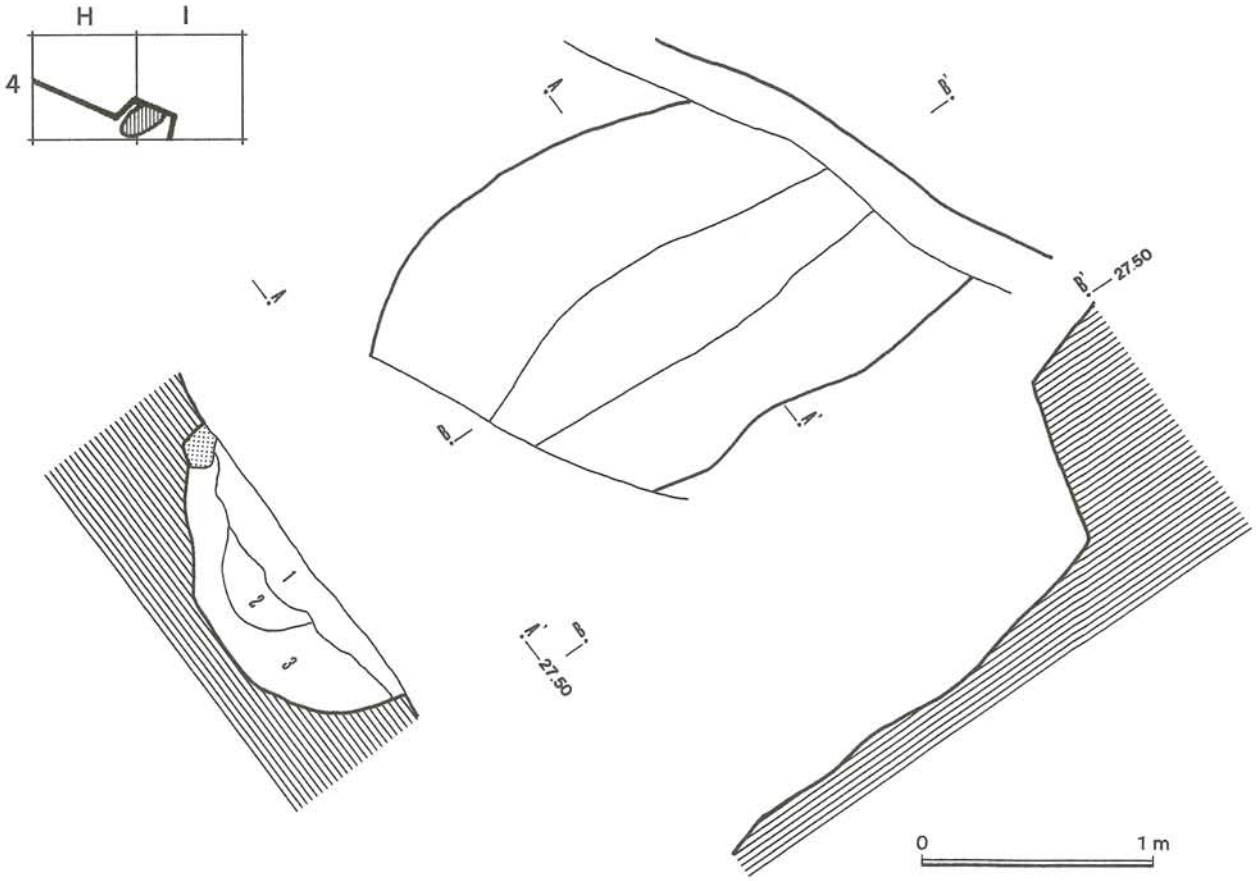
Ｄ－４～５グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いため定かではないが丸底状を呈していると思われる。長さ 295cm、最大幅87cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-30°-E を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径１～４cm大の礫を少量含んでいる。第２層は黒褐色土で、締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

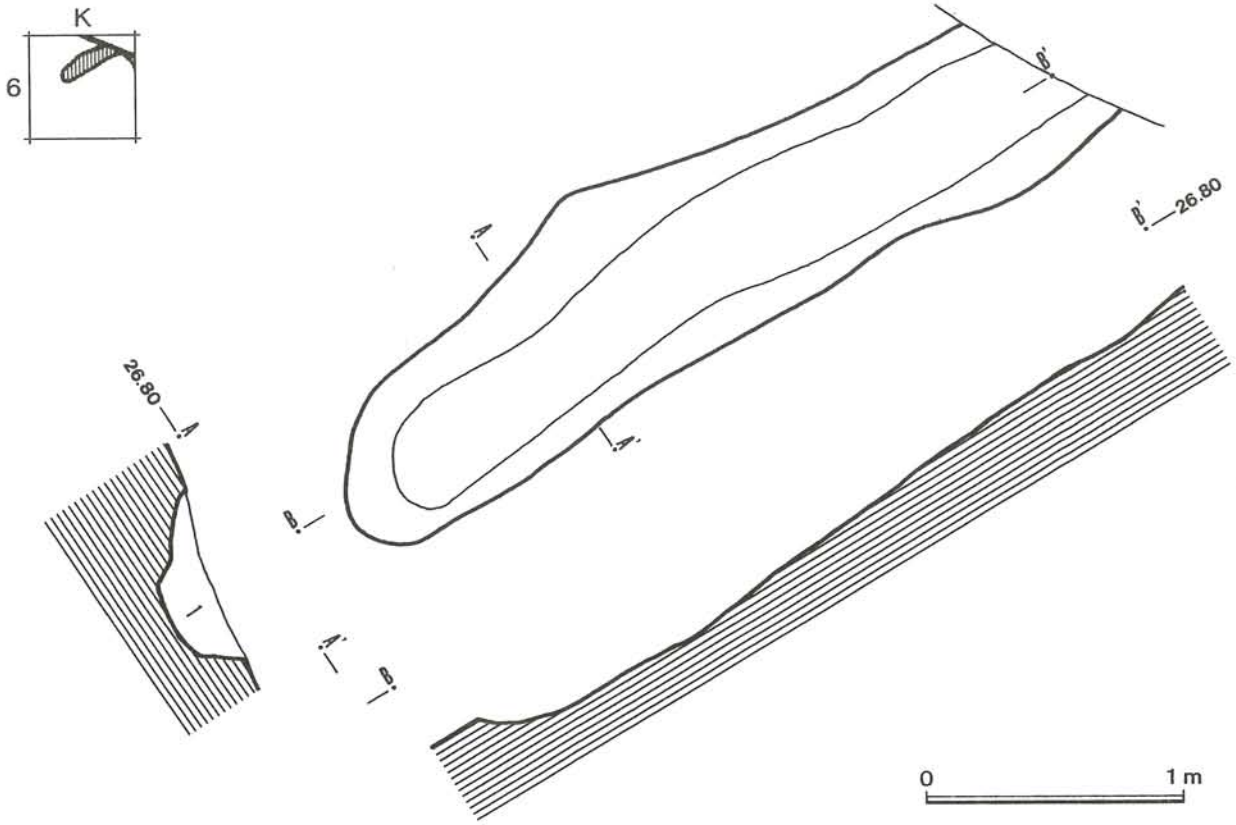
遺物は確認されなかった。

第33号溝

第２号方形周溝墓の西溝にあたる。



図Ⅳ－２－37　第34号溝の平面および断面図



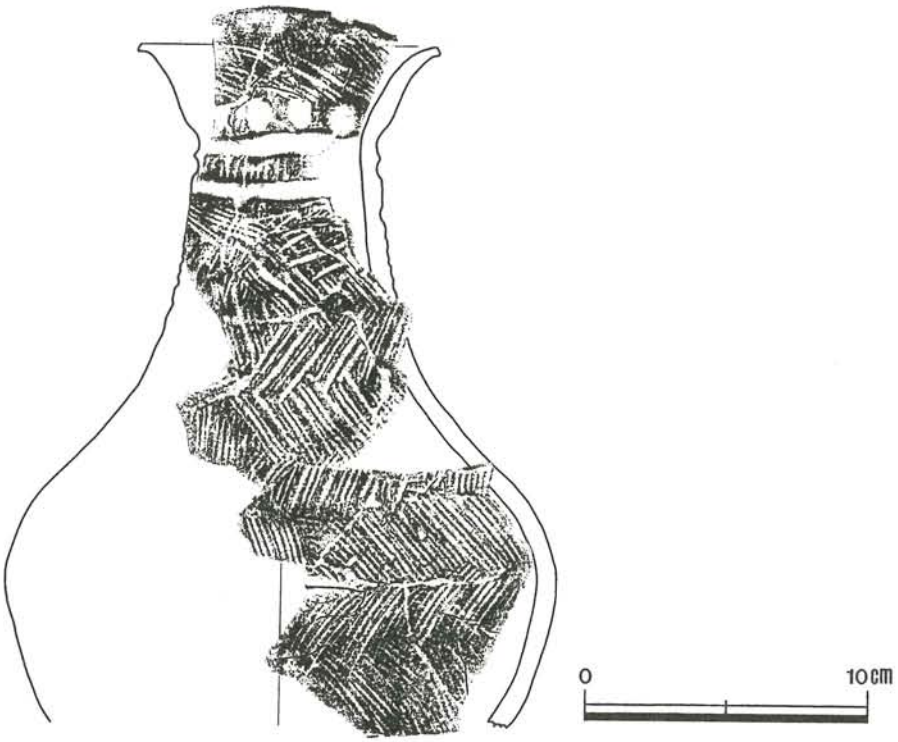
図Ⅳ－２－38　第35号溝の平面および断面図

第34号溝

Ｈ－４～Ｉ－４グリッド内に位置し、北東側は調査区外に延長し、南西側は傾斜面に沿って削平されているため平面形状は不明であるが、確認されている部分の長さは 184cmあり、長軸の方向はN-55°-E を指している。溝の断面形状は丸底状を呈し、最大幅 155cm、深さは最深部が50cmある。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径 0.5～６cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。第３層は暗褐色土で、締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～７cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は第２層から弥生土器(遺物No.422) が出土している。



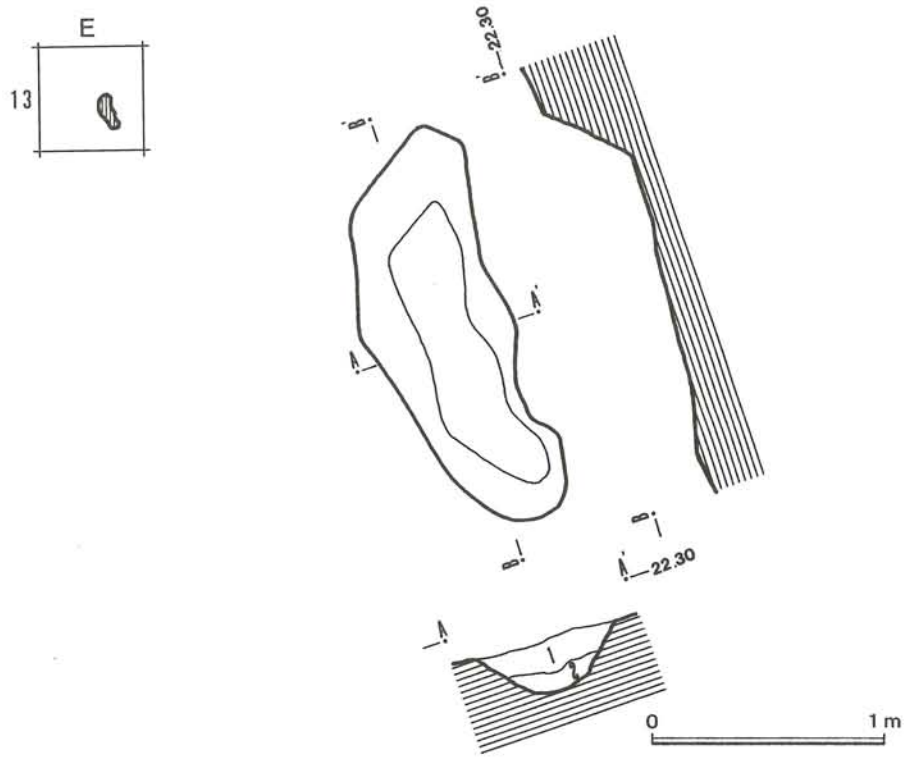
図Ⅳ－２－39　第34号溝から出土した弥生土器(遺物No.422)

第35号溝

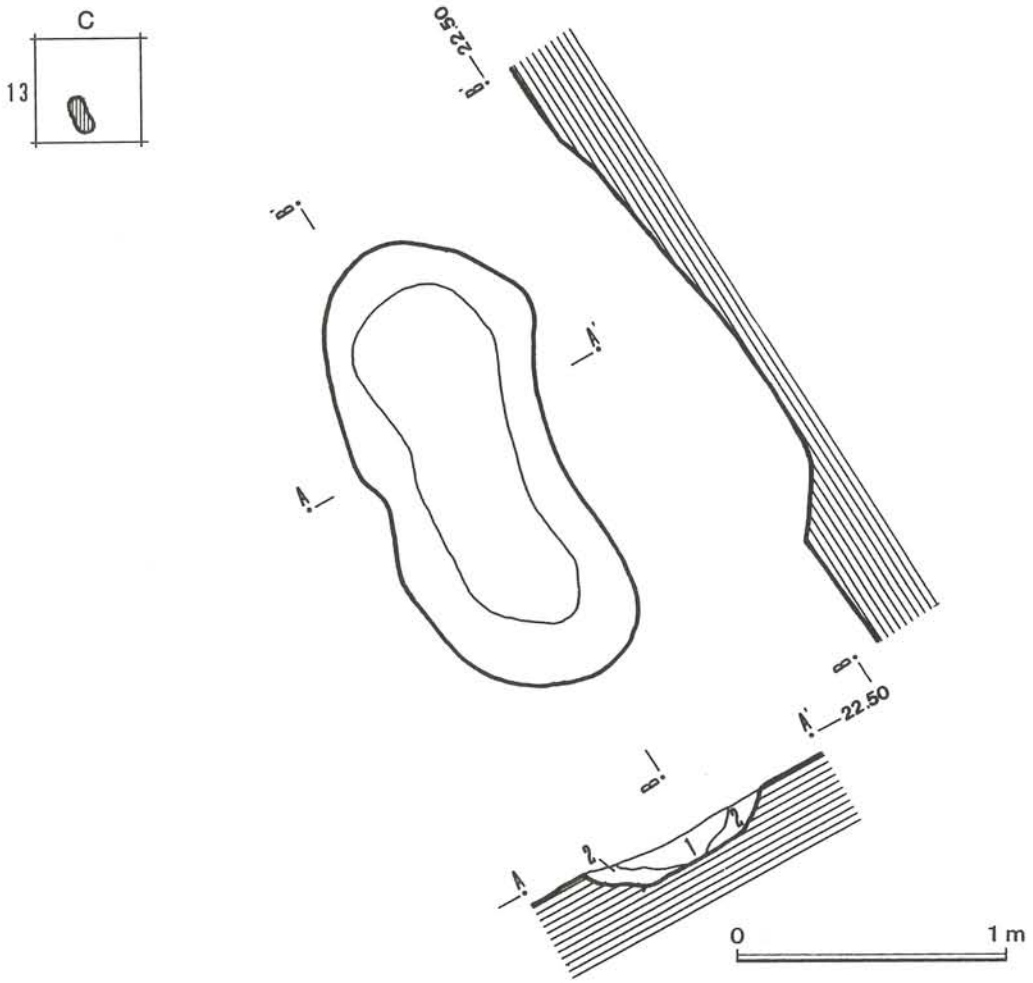
Ｋ－６グリッド内に位置し、北東側は調査区外に延びている。平面形状は隅丸長方形を呈していると思われ、確認されている部分の長さは 316cmあり、長軸の方向はN-60°-E を指している。断面形状は丸底状を呈し、最大幅80cm、深さは最深部が20cmある。

覆土は黒褐色土が１層で、締りも粘性もやや弱く、径 0.3～５cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－２－40　第36号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－41　第37号溝の平面および断面図

第36号溝

Ｅ－13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ 167cm、最大幅62cm、深さは最深部が22cmあり、長軸の方向はN-17°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～７cm大の礫を多く含んでいる。第２層も第１層と同様に黒褐色土で締りはやや強く、粘性は弱いが、径 0.5～７cm大の礫を少量と暗黄褐色のブロックをやや多く含んでいる。

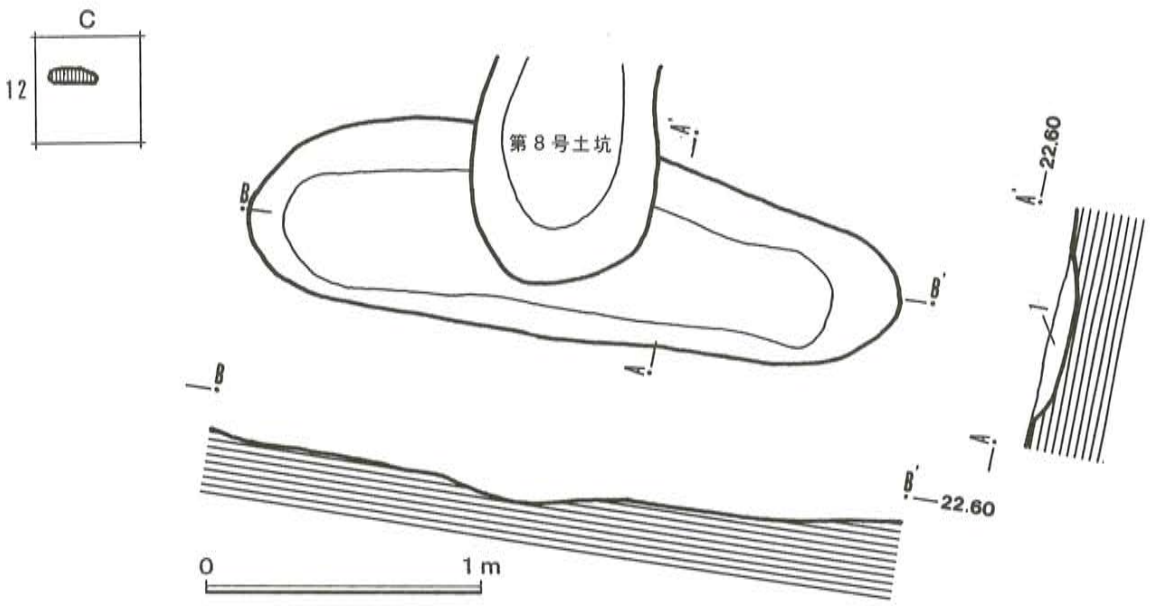
遺物は確認されなかった。

第37号溝

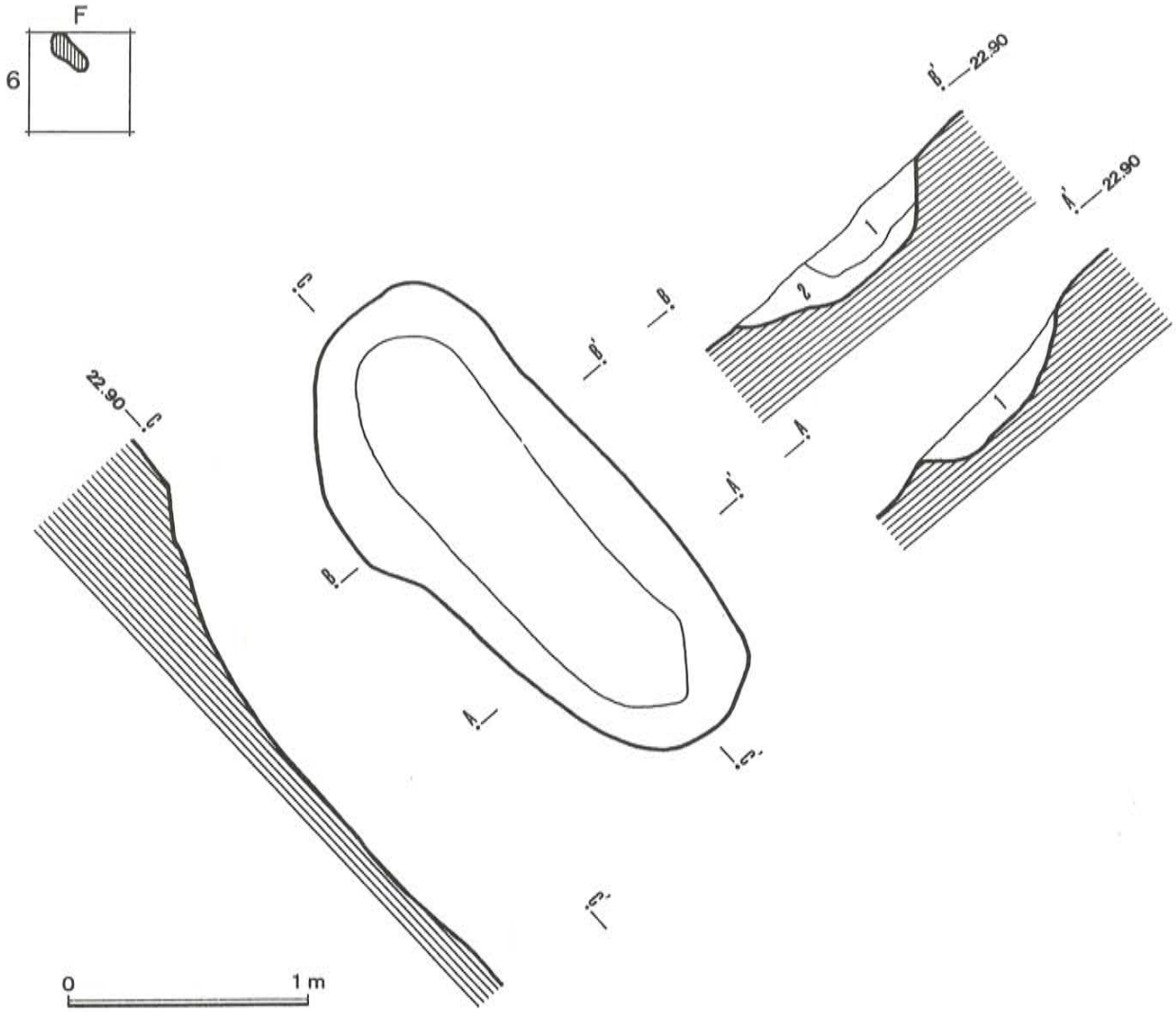
Ｃ－13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、断面形状は浅いため定かではないがＵ字形を呈していると思われる。長さ 175cm、最大幅81cm、深さは最深部が18cmあり、長軸の方向はN-28°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径１～４cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～７cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－２－42　第38号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－43　第39号溝の平面および断面図

第38号溝

Ｃ－12グリッド内に位置し、中央部北側を第８号土坑により切られている。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが丸底状を呈していると思われる。長さ234cm、最大幅70cm、深さは最深部が11cmあり、長軸の方向はN-84°-W を指している。

覆土は黒褐色土が１層で、締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

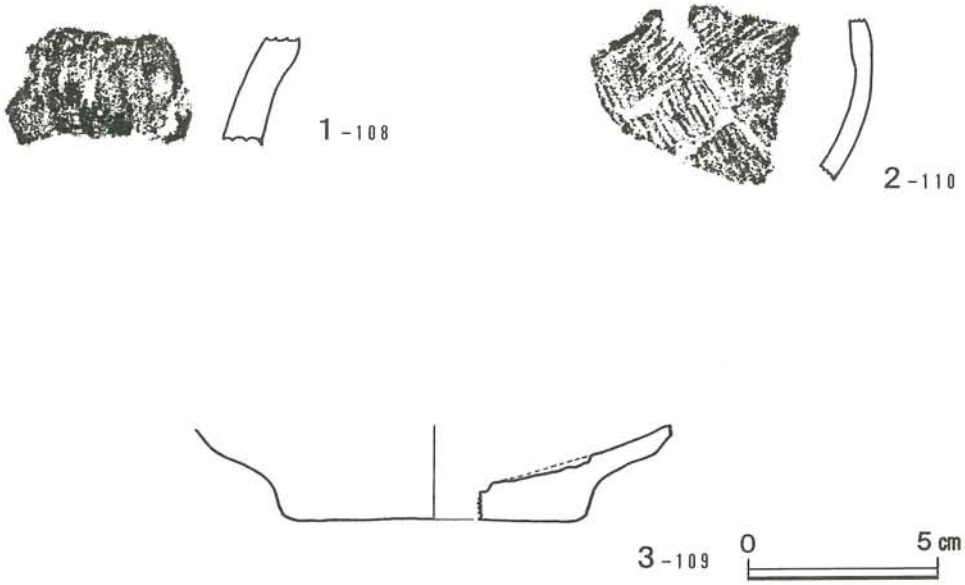
遺物は確認されなかった。

第39号溝

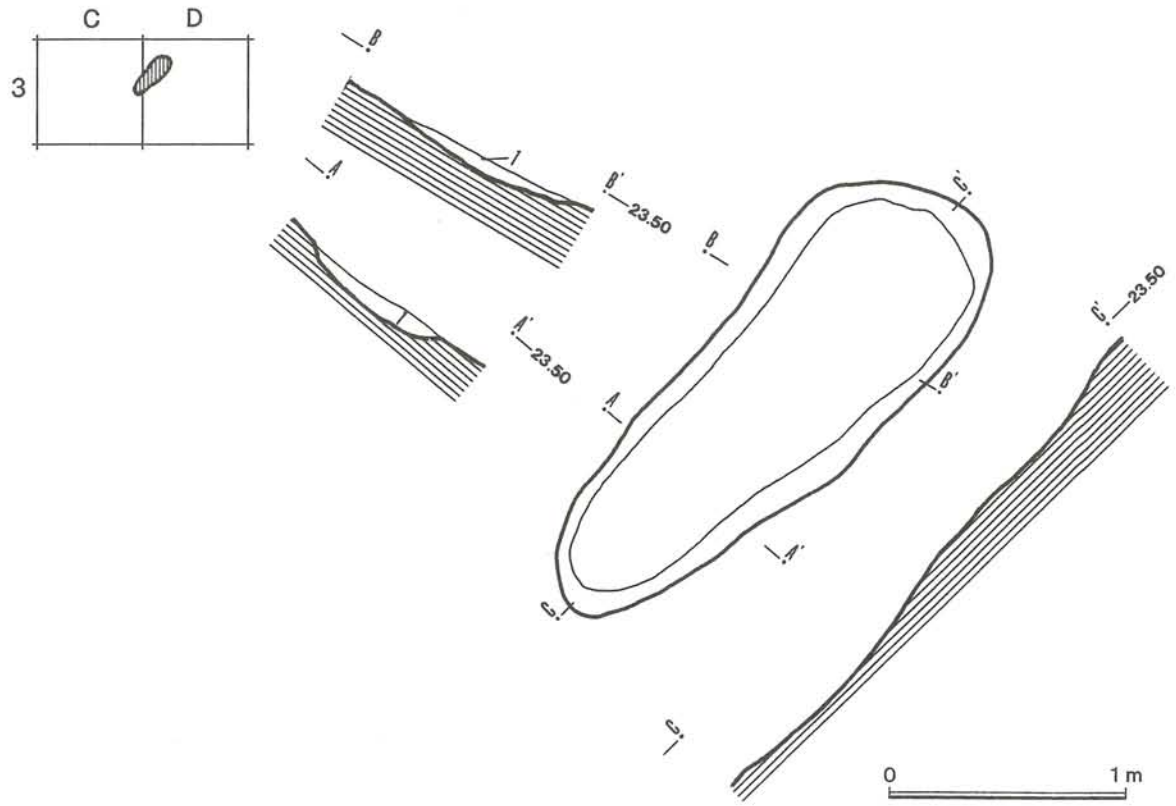
Ｆ－６グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ 227cm、最大幅 102cm、深さは最深部が24cmあり、長軸の方向はN-44°-W を指している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5～８cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

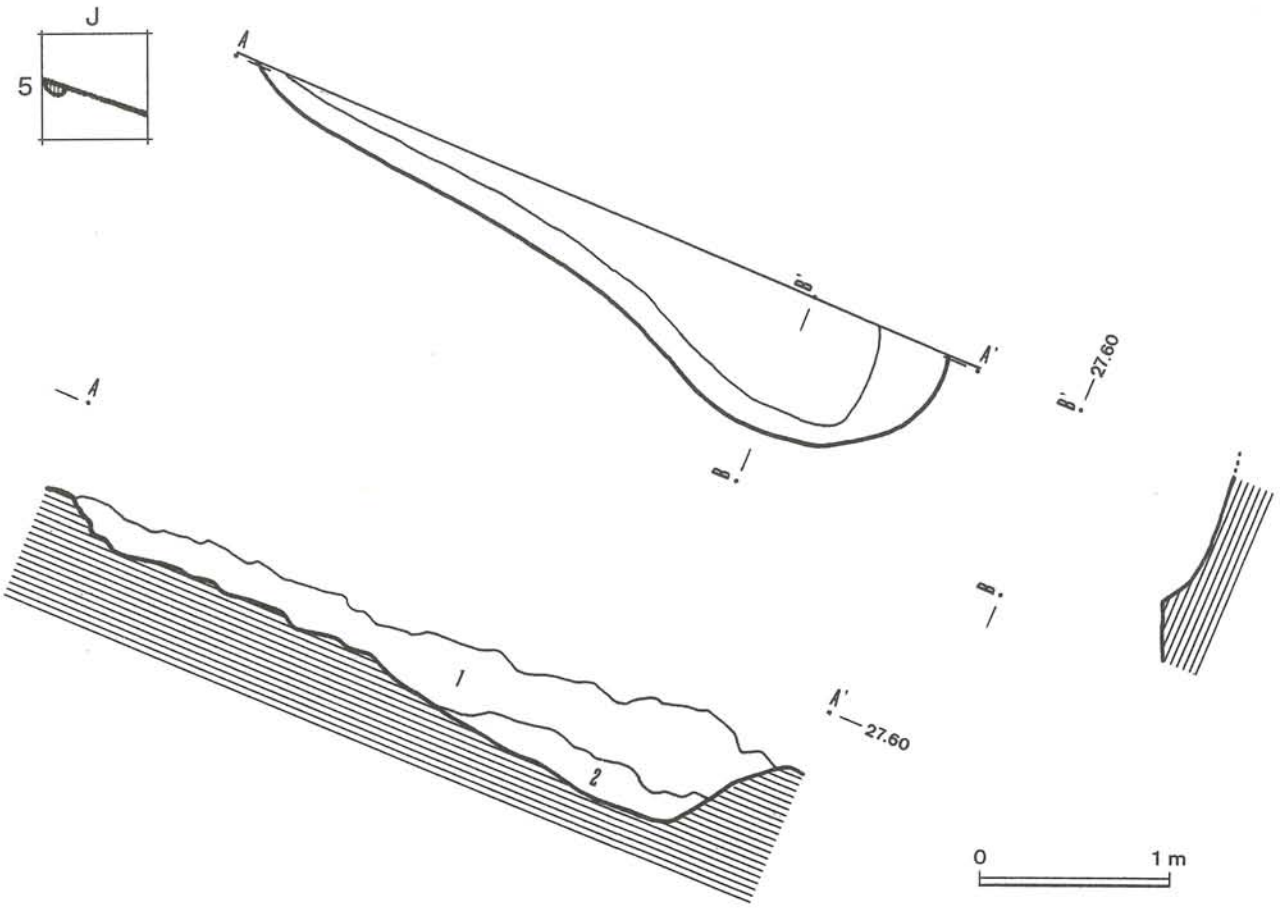
遺物は土師器の破片が第１層から３点出土している。そのうちの２点は胴部の破片（遺物No.108、遺物No.110）で、１点は底部の破片(遺物No.109）である。



図Ⅳ－２－44　第39号溝から出土した土師器片



図Ⅳ－２－45　第40号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－46　第41号溝の平面および断面図

第40号溝

Ｃ－３～Ｄ－３グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが丸底状を呈していると思われる。長さ 235cm、最大幅87cm、深さは最深部が８cmあり、長軸の方向はN-43°-E を指している。

覆土は黒色土が１層で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～３cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

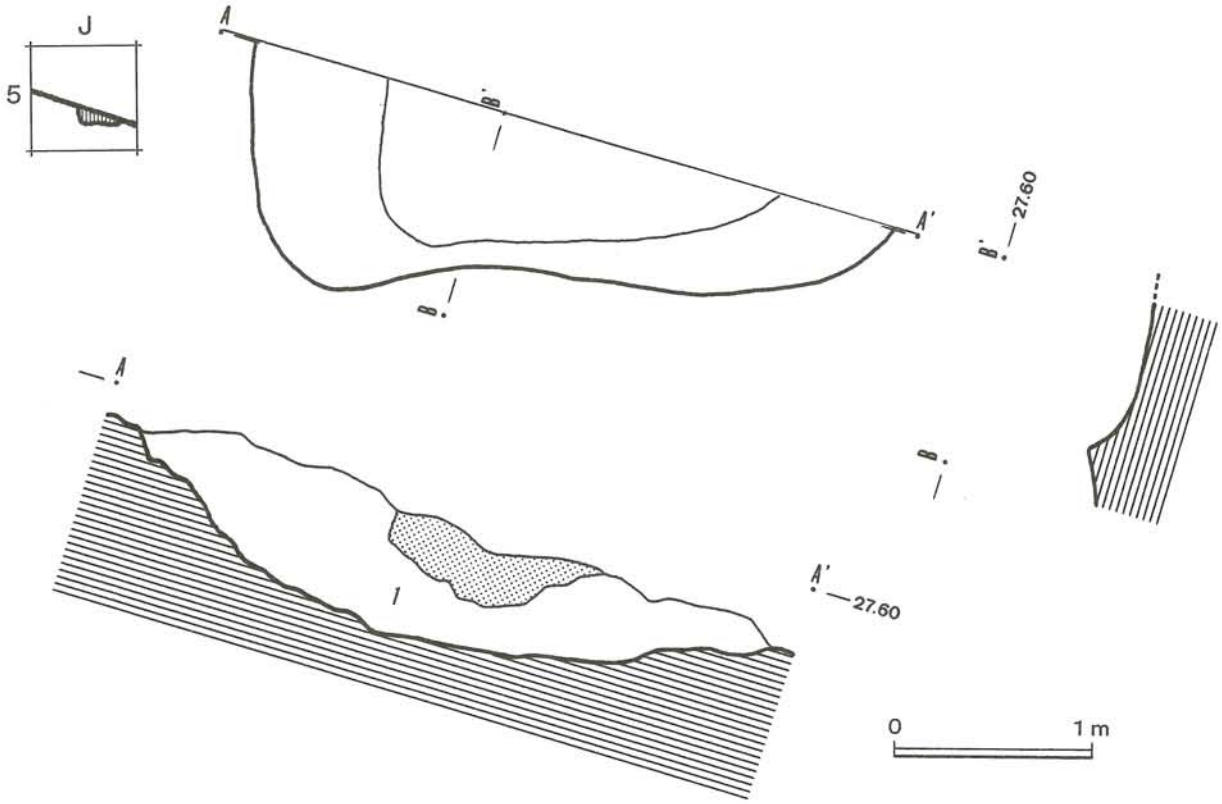
遺物は確認されなかった。

第41号溝

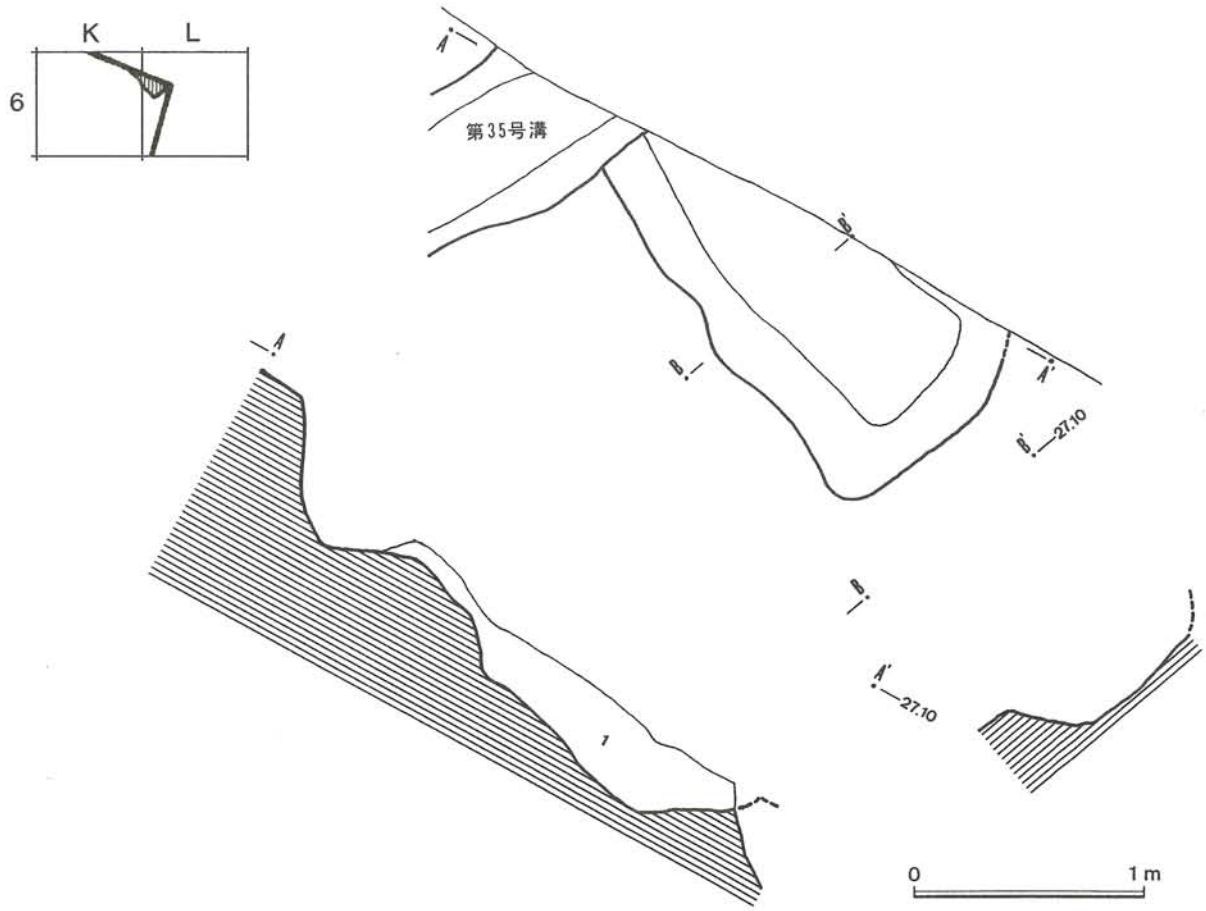
Ｊ－５グリッド内に位置し、北側は調査区外に延びているため平面形状など規模は不明であるが、確認されている深さは最深部が47cmある。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りも粘性もやや弱く、径 0.3～６cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層も黒褐色土であるが締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.3～４cm大の礫を含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－２－47　第42号溝の平面および断面図



図Ⅳ－２－48　第43号溝の平面および断面図

第42号溝

Ｊ－５グリッド内に位置し、北側は調査区外に延びているため平面形状など規模は不明であるが、確認されている深さは最深部が46㎝ある。

覆土は黒褐色土が１層で、締りも粘性もやや弱く、径 0.3～６㎝大の礫をやや多く含んでいる。

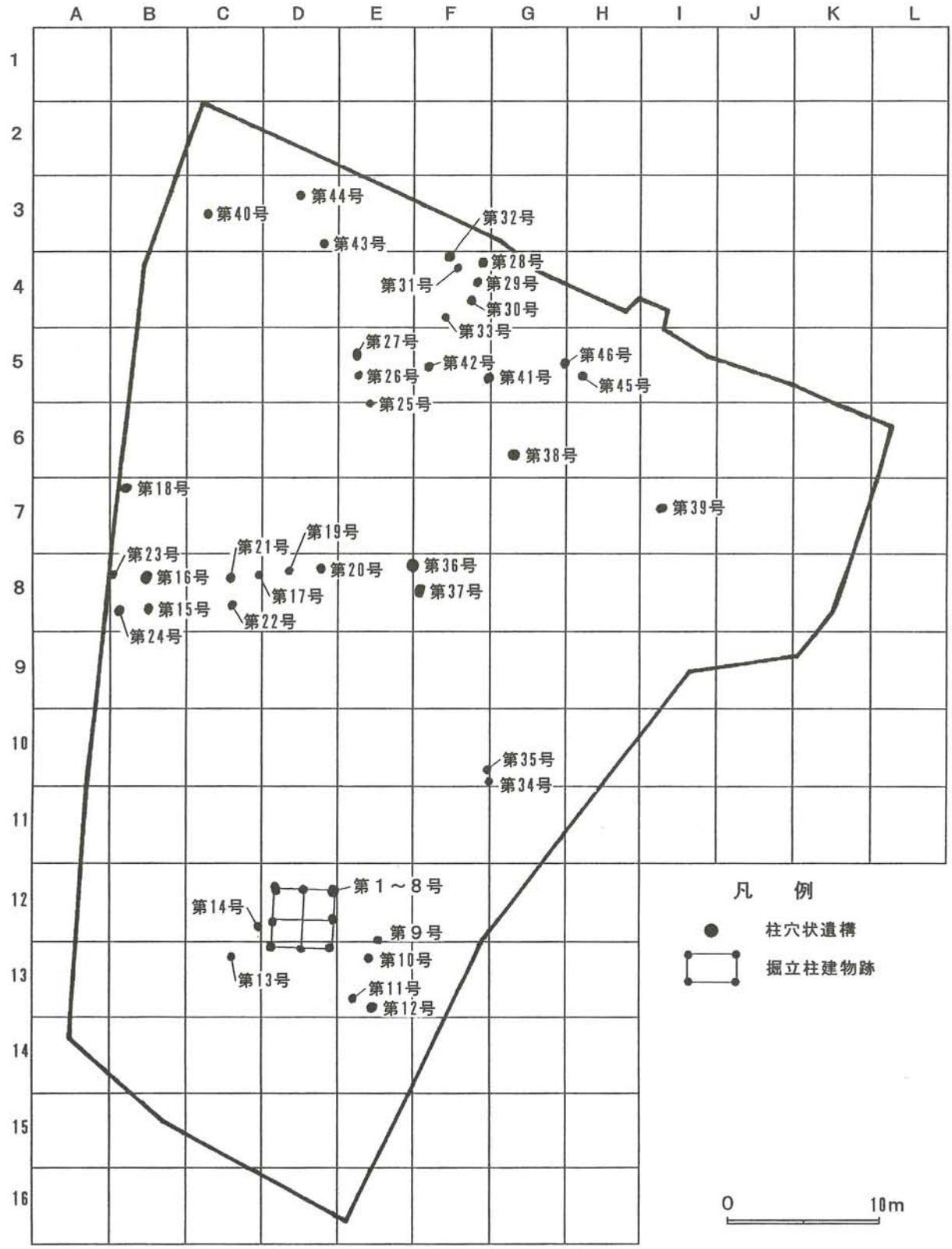
遺物は確認されなかった。

第43号溝

Ｋ－５～Ｌ－５グリッド内に位置し、西側は第35号溝に切られ、北側は調査区外に延びているため平面形状など規模は不明であるが、確認されている深さは最深部が31㎝ある。

覆土は黒褐色土が１層で、締りも粘性もやや弱く、径 0.5～４㎝大の礫を多く含んでいるが、径２㎝大の礫が大半を占めている。

遺物は確認されなかった。

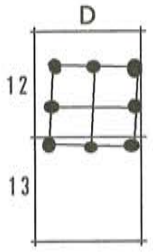


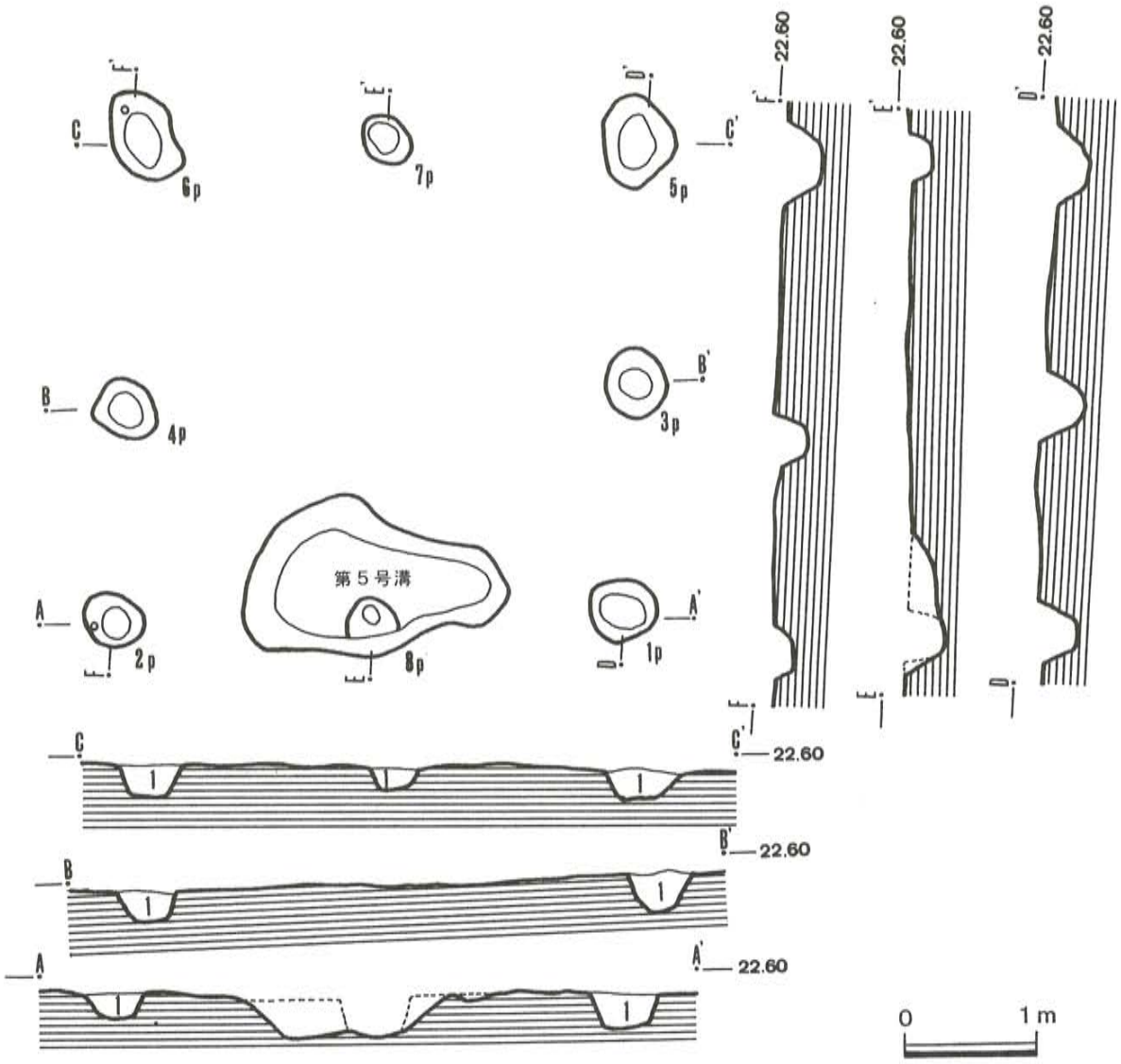
図Ⅳ－３－１　柱穴状遺構の分布図

第３節　穴状遺構

１．柱穴状遺構と遺物

柱穴状遺構は調査区の南側平坦部と中央西側平坦部、北側斜面の中央部に分布しており、確認された46基の平均的な大きさは長径が50cm、短径は41cm、深さは21cmである。そのうち第１～８号柱穴が掘立柱建物跡を形成している。その他、直線的にならんで確認されたピット列が11例ある。しかし、ほとんどの柱穴状遺構からは遺物が出土しておらず、時代や性格を確定することはできない。





図Ⅳ－３－２　第１～８号柱穴（掘立柱建物跡）の平面および断面図

第１～８号柱穴(掘立柱建物跡)

調査区の南側平坦部でＤ－12～13グリッド内に位置し、第１号ピットから第８号ピットの配置などによって２間×２間の建物跡が想定された。建物跡は南北 360～ 370㎝、東西 380～ 390㎝の方形のプランをなし、方位は東辺のピット列でN-2°-E を指している。各ピットの状況から第１～６号ピットの６本が主柱と推定され、第７・８号ピットの２本が棟持柱と推定される。

第１号ピットの平面形状は不整円形で、長径54㎝、短径48㎝、深さは最深部が26㎝あり、断面形状は上にやや開くＵ字形を呈している。覆土は黒色土が１層で締りも粘性もやや強く、径１～２㎝大の礫を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。

第２号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径48㎝、短径40㎝、深さは最深部が19㎝あり、断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。覆土は黒色土が１層で締りも粘性もやや強く、径１～７㎝大の礫を少量含んでいる。遺物は覆土から土器の細片が１点出土したが、時代を確定できるものではなかった。

第３号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径55㎝、短径46㎝、深さは最深部が33㎝あり、断面形状は丸底状を呈している。覆土は黒色土が１層で締りも粘性もやや強い。遺物は確認されなかった。

第４号ピットの平面形状は不整円形で、長径52㎝、短径43㎝、深さは最深部が26㎝あり、断面形状は第２号ピットと同様に上に広く開くＵ字形を呈している。覆土は黒色土が１層で締りも粘性もやや強く、径１～２㎝大の礫を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。

第５号ピットの平面形状は不整円形で、長径73㎝、短径54㎝、深さは最深部が24㎝あり、断面形状は第２号ピットと同様に上に広く開くＵ字形を呈している。覆土は黒色土が１層で締りも粘性もやや強い。遺物は確認されなかった。

第６号ピットの平面形状は不整楕円形で、長径74㎝、短径48㎝、深さは最深部が24㎝あり、断面形状は第１号ピットと同様に上にやや開くＵ字形を呈している。覆土は黒色土が１層で締りも粘性もやや強い。遺物は覆土から土器の細片が１点出土したが、時代を確定できるものではない。

第７号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径41㎝、短径33㎝、深さは最深部が18㎝あり、断面形状は第３号ピットと同様に丸底状を呈している。覆土は黒色土が１層で締りも粘性もやや強い。遺物は確認されなかった。

第８号ピットは第５号溝によって切られており、その規模は定かではないが、平面形状はほぼ円形を呈し、長径は推定38㎝、短径は推定36㎝、深さは現状の最深部が６㎝ある。断面形状はも定かではないが第３号ピットと同様に丸底状を呈するものと思われる。覆土は黒色土が１層で締りも粘性もやや強い。遺物は確認されなかった。

第９・10号柱穴状遺構

Ｅ－12～13グリッド内に位置し、ピット間の距離は 125cmを計り、方位はN-29°-E を指している。

第９号ピットの平面形状はほぼ円形を呈し、長径45cm、短径37cm、深さは最深部が17cmある。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

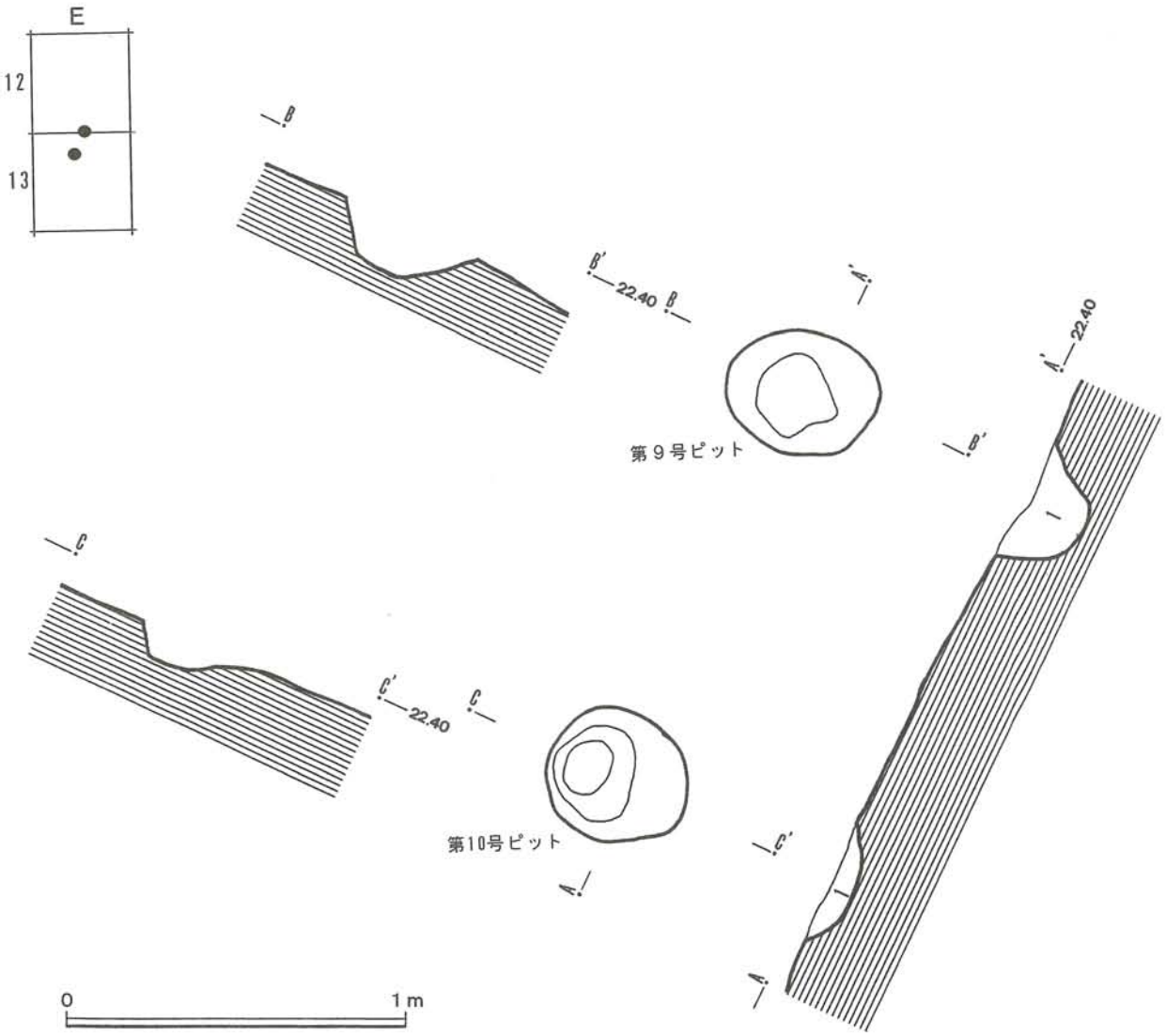
覆土は黒色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～８cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第10号ピットの平面形状はほぼ円形を呈し、長径43cm、短径39cm、深さは最深部が９cmある。断面形状は浅いため定かではないが上に広く開くＵ字形を呈していると思われる。

覆土は黒色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～８cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－３　第９・10号柱穴状遺構の平面および断面図

第11・12号柱穴状遺構

Ｅ－13グリッド内に位置し、ピット間の距離は 156cmを計り、方位はN-67°-W を指している。

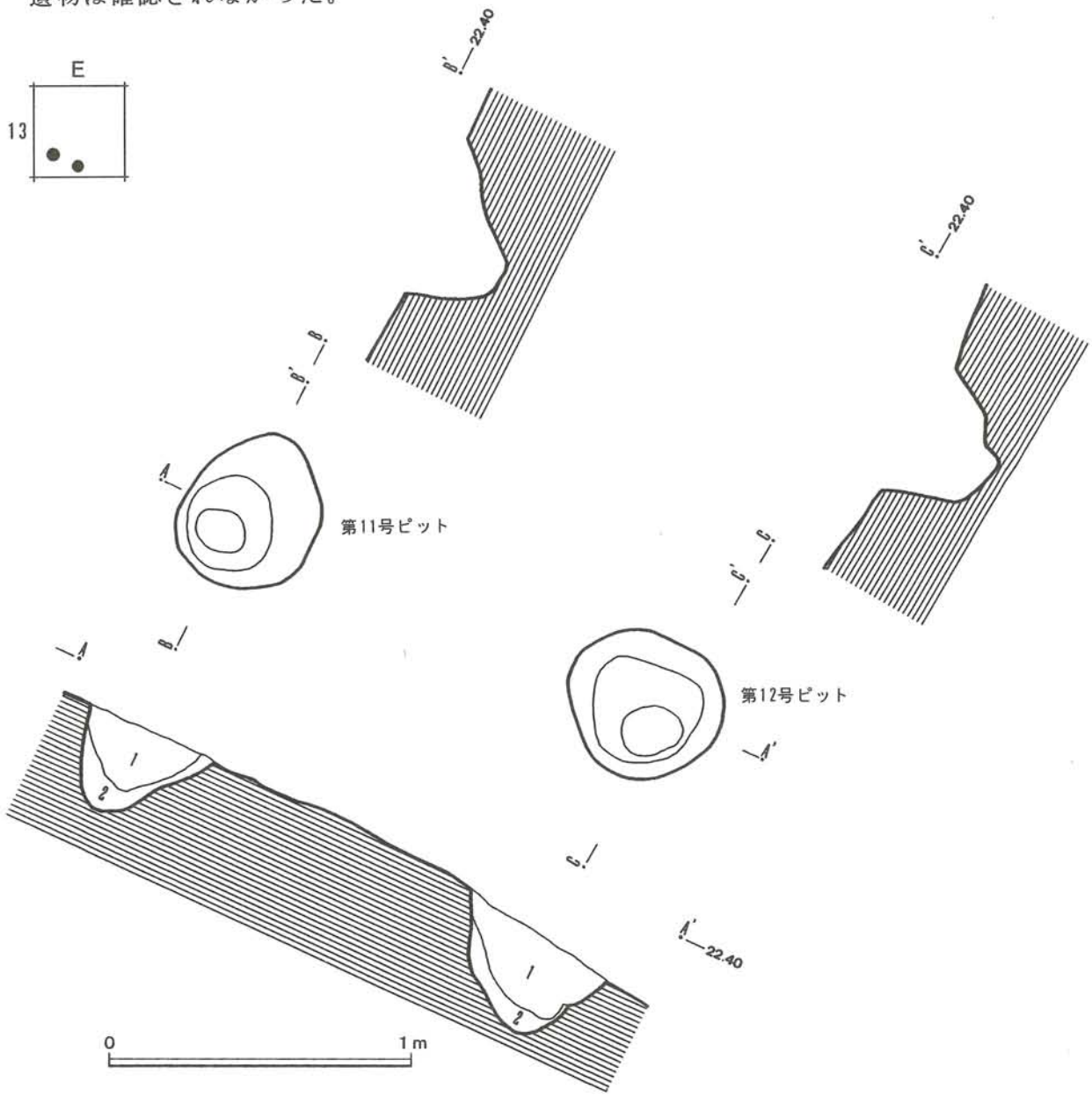
第11号ピットの平面形状はほぼ円形を呈し、長径54cm、短径45cm、深さは最深部が31cmある。断面形状は丸底のＶ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～３cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗褐色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は覆土の上位から土器の細片が１点出土したが、時代を確定できるものではない。

第12号ピットの平面形状はほぼ円形を呈し、長径54cm、短径48cm、深さは最深部が33cmある。断面形状も覆土も第11号ピットと同様である。

遺物は確認されなかった。



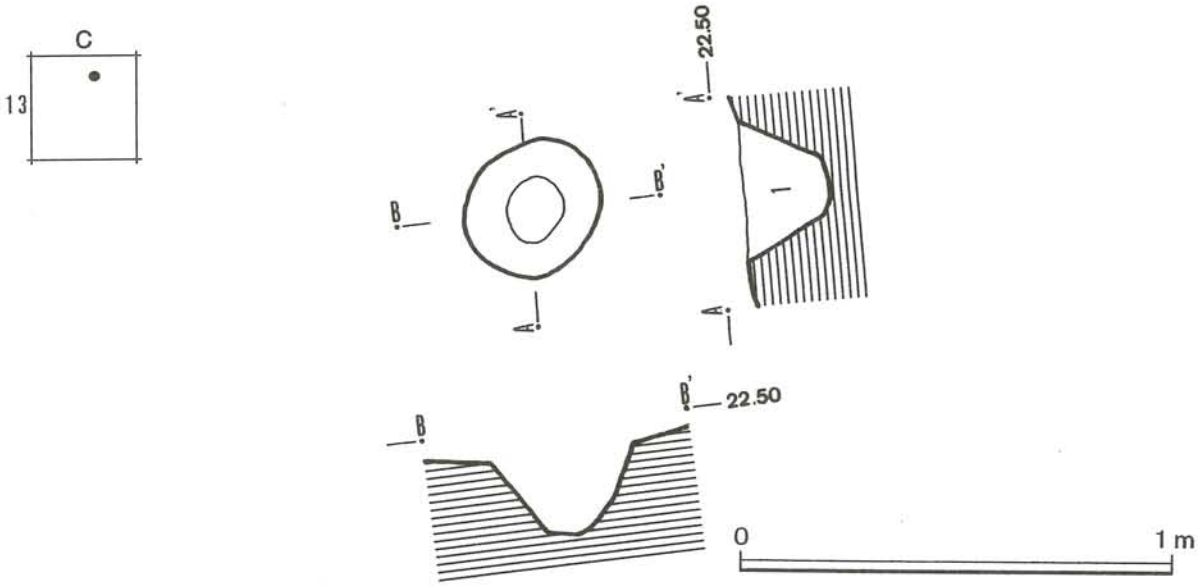
図Ⅳ－３－４　第11・12号柱穴状遺構の平面および断面図

第13号柱穴状遺構

Ｃ－13グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形を呈しており、長径33cm、短径30cm、深さは最深部が20cmある。断面形状は丸底のＶ字形を呈している。

覆土は明褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径３～４cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



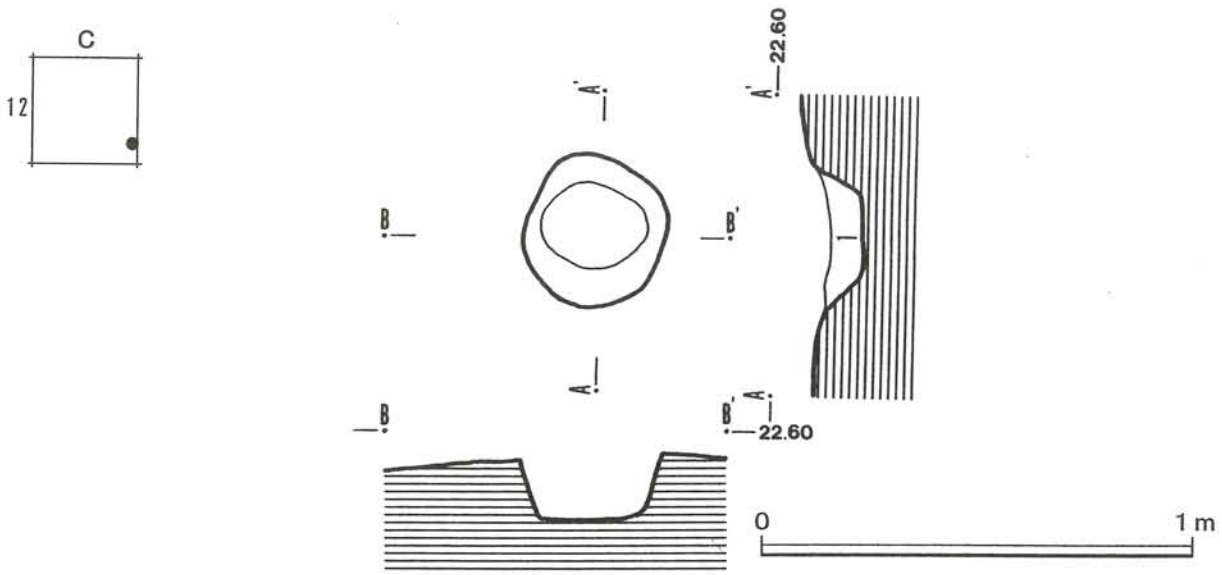
図Ⅳ－３－５　第13号柱穴状遺構の平面および断面図

第14号柱穴状遺構

Ｃ－12グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形を呈しており、長径35cm、短径33cm、深さは最深部が15cmある。断面形状はＵ字形を呈している。

覆土は黒褐色土が１層で締りも粘性もやや強く、径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－６　第14号柱穴状遺構の平面および断面図

第15・16号柱穴状遺構

Ｂ－８グリッド内に位置し、ピット間の距離は 200cmを計り、方位はN-2°-W を指している。

第15号ピットの平面形状は楕円形を呈しており、長径60cm、短径42cm、深さは最深部が21cmある。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

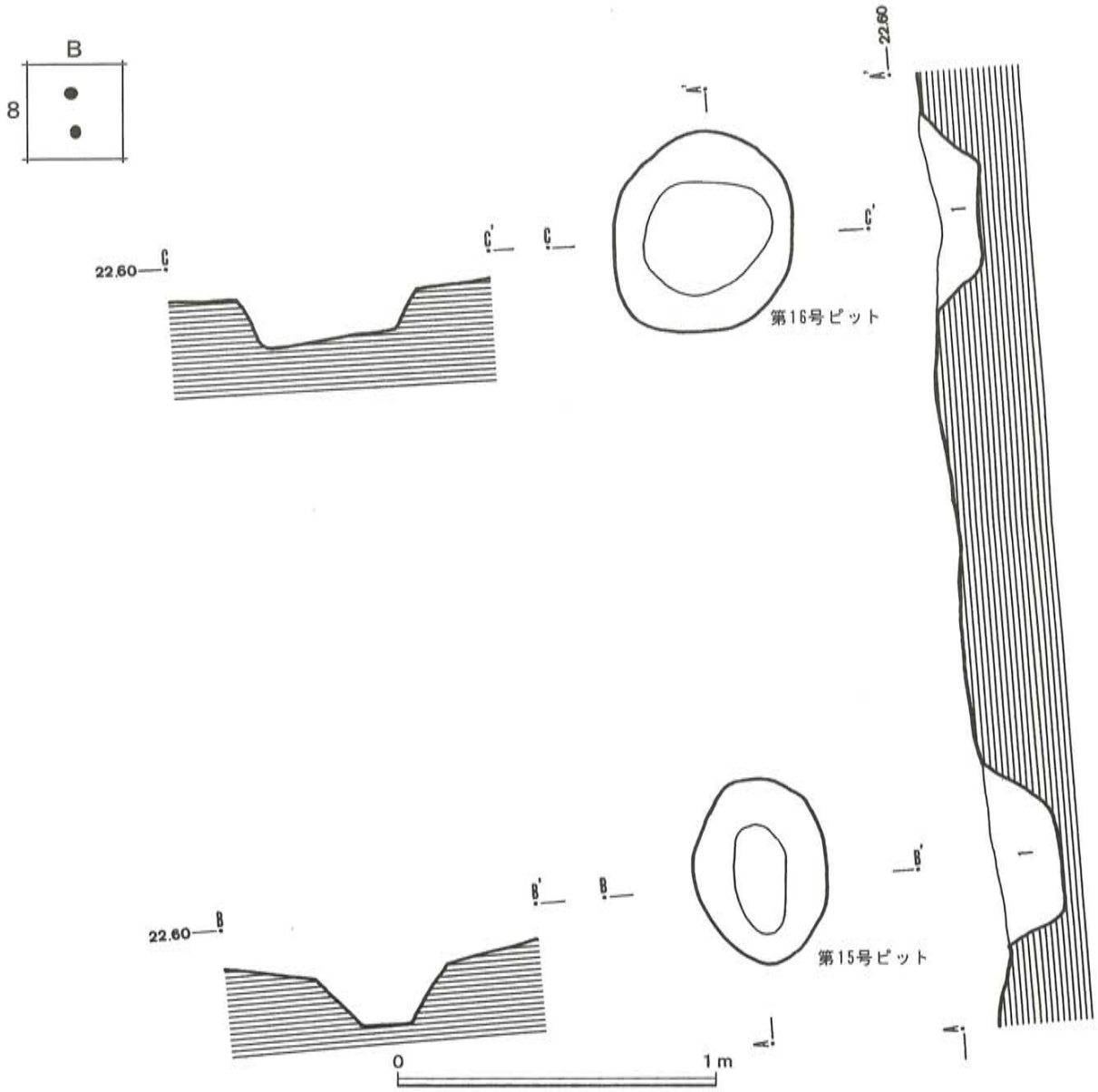
覆土は暗褐色土が１層で締りはやや強く、粘性は弱い。径２～４cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第16号ピットの平面形状はほぼ円形を呈しており、長径65cm、短径58cm、深さは最深部が16cmある。断面形状は第15号ピットと同様に、上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土も第15号ピットと同様である。

遺物は確認されなかった。

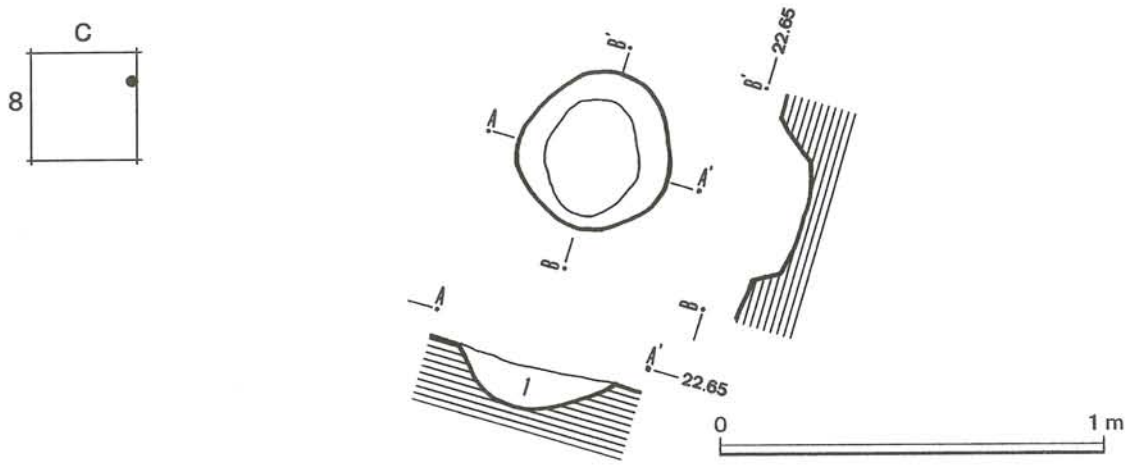


図Ⅳ－３－７　第15・16号柱穴状遺構の平面および断面図

第17号柱穴状遺構

Ｃ－８グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形を呈しており、長径43cm、短径40cm、深さは最深部が11cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は黒褐色土が１層で締りはやや強く、粘性は弱い。径２～３cm大の礫を少量含んでいる。　遺物は確認されなかった。

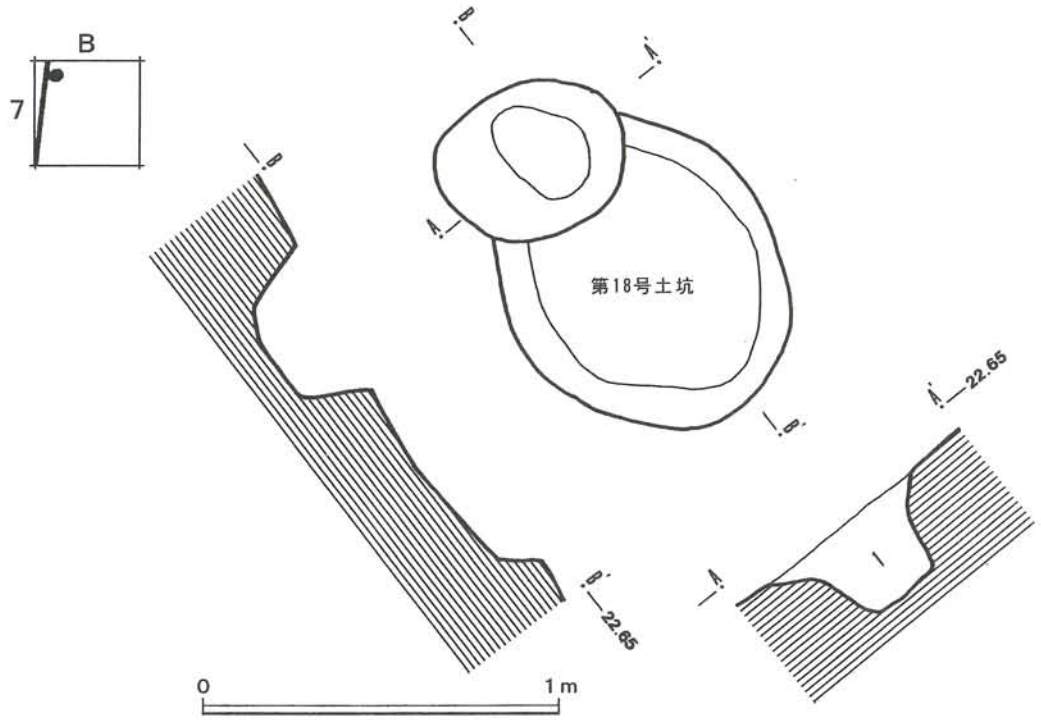


図Ⅳ－３－８　第17号柱穴状遺構の平面および断面図

第18号柱穴状遺構

Ｂ－７グリッド内に位置し、第18号土坑を切っている。平面形状はほぼ円形を呈しており、長径54cm、短径44cm、深さは最深部が22cmある。断面形状はＵ字形を呈し、上部が漏斗状に開いている。

覆土は暗褐色土が１層で締りはやや弱く、粘性は強い。径２～４cm大の礫を多く含んでいる。　遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－９　第18号柱穴状遺構の平面および断面

第19・20号柱穴状遺構

Ｄ－８グリッド内に位置し、ピット間の距離は 210cmを計り、方位はN-86°-E を指している。

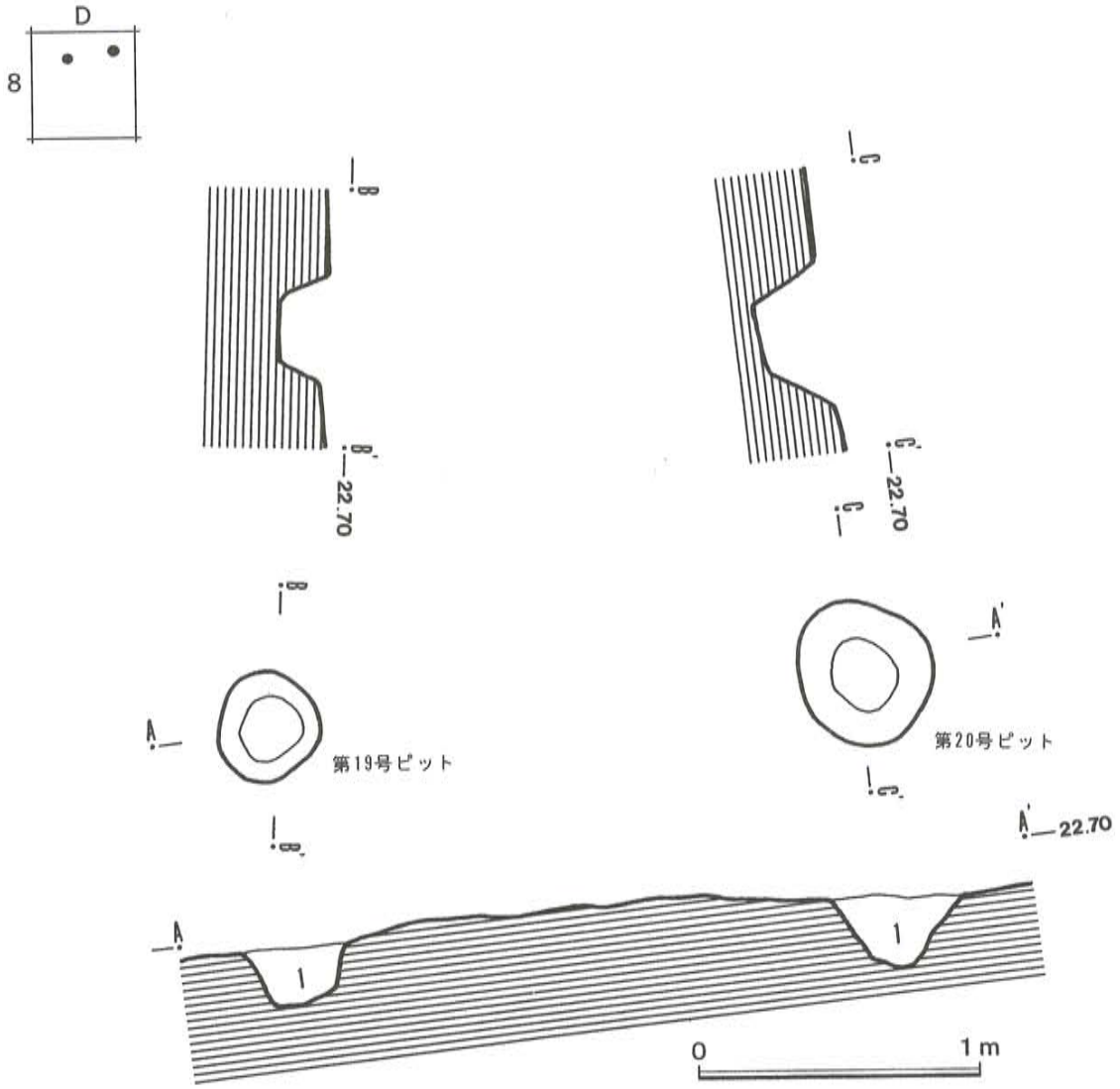
第19号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径39cm、短径35cm、深さは最深部が20cmある。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は黒褐色土が１層で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径２～４cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第20号ピットの平面形状もほぼ円形で、長径52cm、短径48cm、深さは最深部が26cmある。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は第19号ピットと同様で、底面に近い覆土中から土器の細片が出土しているが、時代を確定できるものではない。



図Ⅳ－３－10　第19・20号柱穴状遺構の平面および断面図

第21・22号柱穴状遺構

Ｃ－８グリッド内に位置し、ピット間の距離は 188cmを計り、方位はN－1°－E とほぼ南北を指している。なお、第22号ピットは第６号土坑を切っている。

第21号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径43cm、短径40cm、深さは最深部が25cmある。断面形状はやや丸底の上に開くＵ字形を呈している。

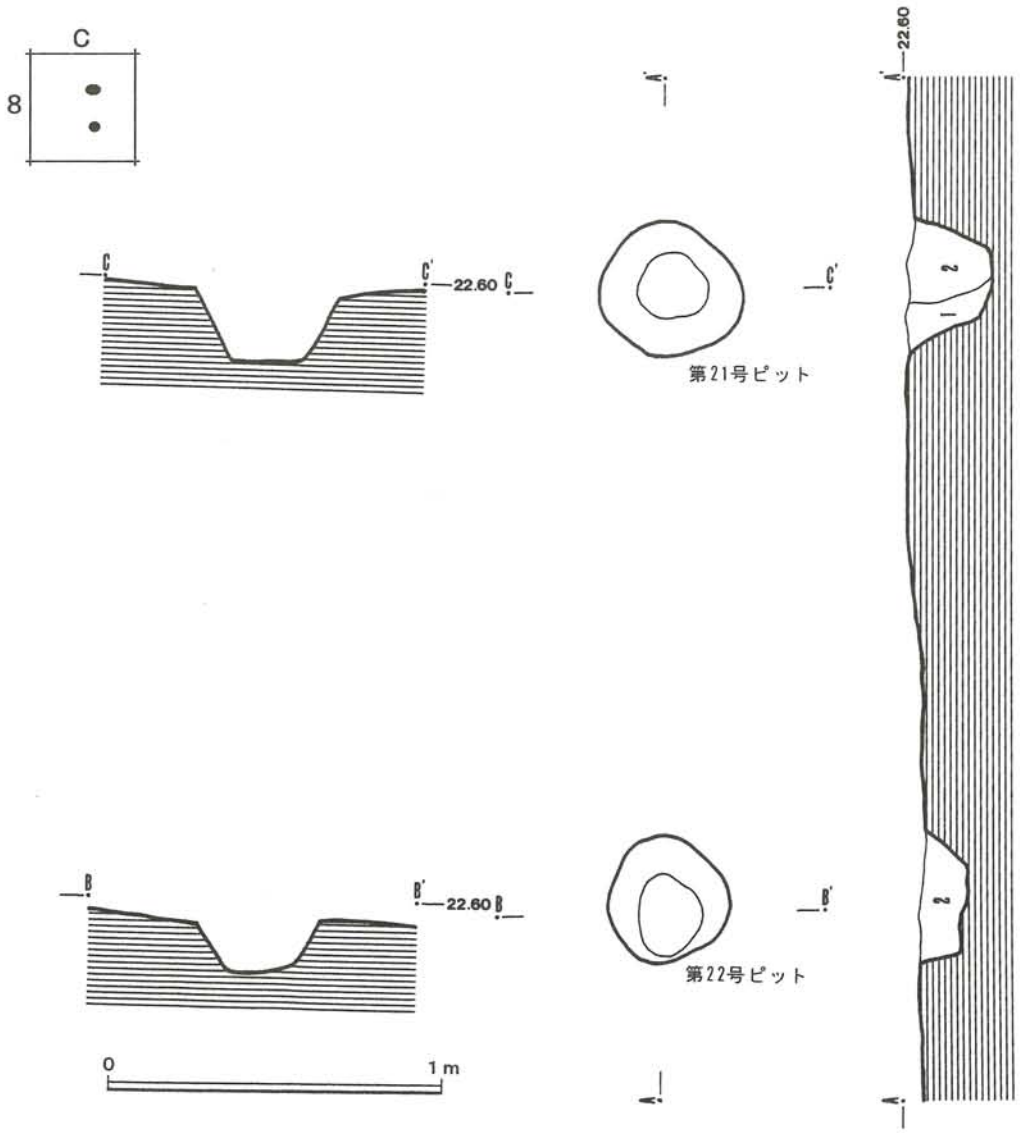
覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りも粘性も強く、径 0.5～７cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第22号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径38cm、短径37cm、深さは最深部が14cmある。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

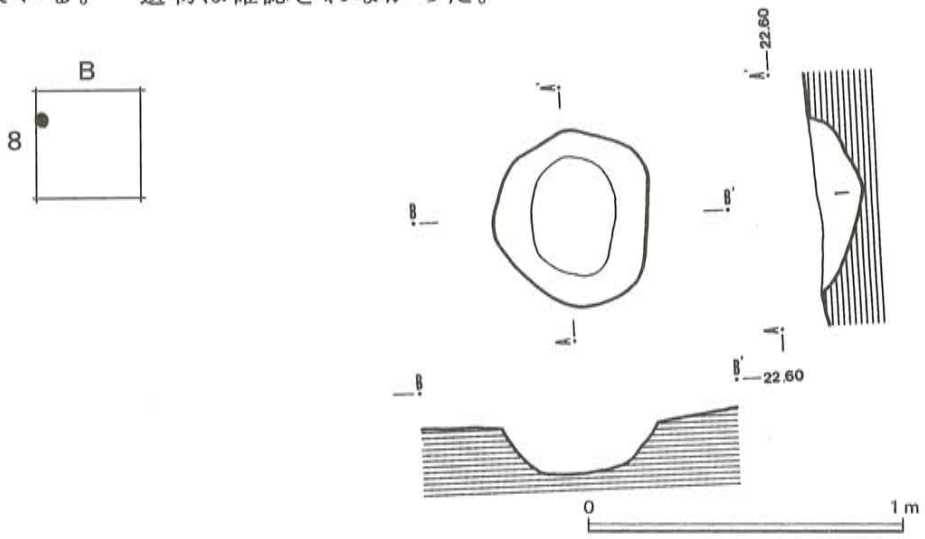


図Ⅳ－３－11　第21・22号柱穴状遺構の平面および断面図

第23号柱穴状遺構

Ｂ－８グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径57cm、短径49cm、深さは最深部が15cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りは弱く、粘性はやや弱い。径 0.5～３cm大の礫を多く含んでいる。　遺物は確認されなかった。

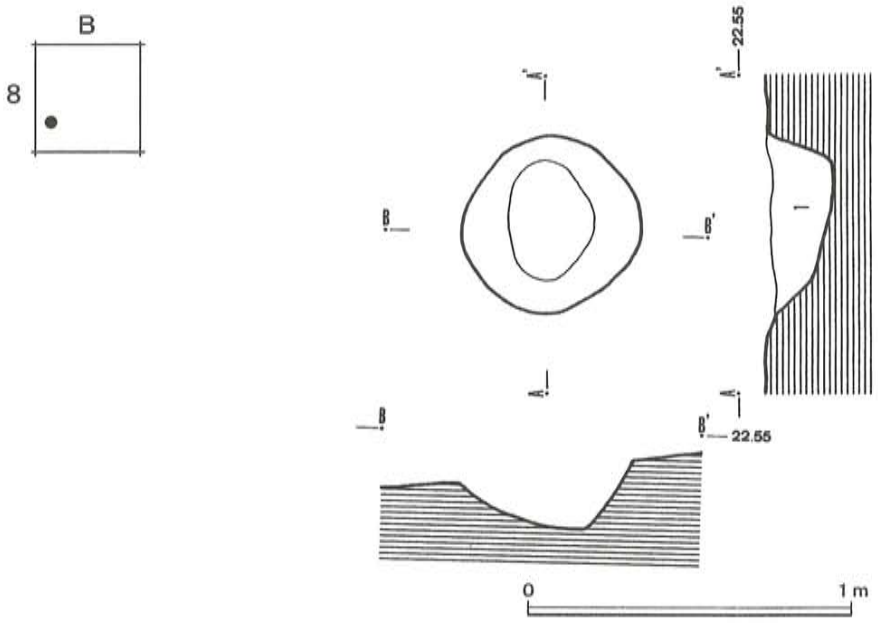


図Ⅳ－３－12　第23号柱穴状遺構の平面および断面図

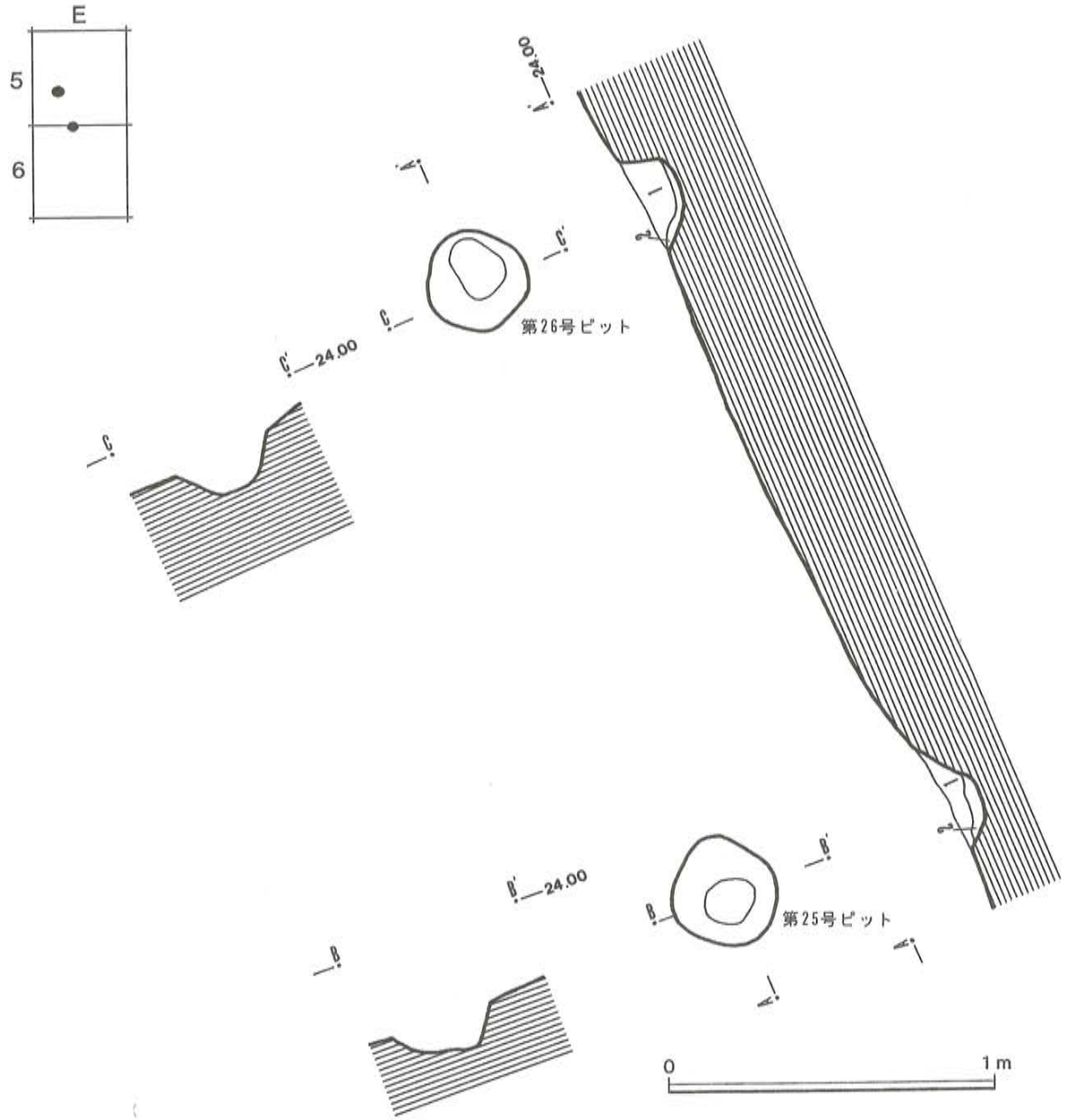
第24号柱穴状遺構

Ｂ－８グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径56cm、短径54cm、深さは最深部が19cmある。断面形状は上に開くＵ字形を呈しているが南西側の壁面は緩やかに立ち上がっている。

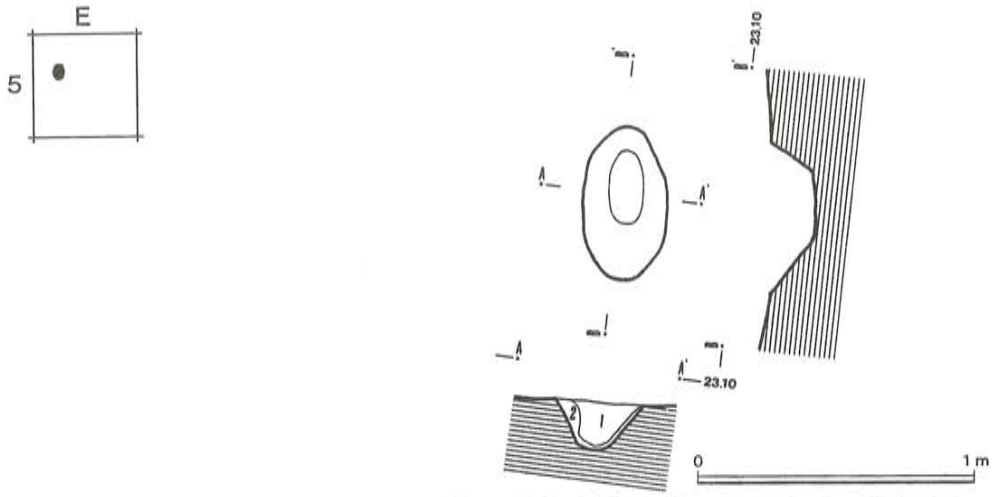
覆土は黒褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～７cm大の礫をやや多く含んでいる。　遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－13　第24号柱穴状遺構の平面および断面図



図Ⅳ－３－14　第25・26号柱穴状遺構の平面および断面図



図Ⅳ－３－15　第27号柱穴状遺構の平面および断面図

第25・26号柱穴状遺構

Ｅ－５～６グリッド内に位置し、ピット間の距離は 208cmを計り、方位はN-23°-W を指している。

第25号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径35cm、短径33cm、深さは最深部が12cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第26号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径32cm、短径31cm、深さは最深部が13cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は第25号ピットの覆土と同様である。

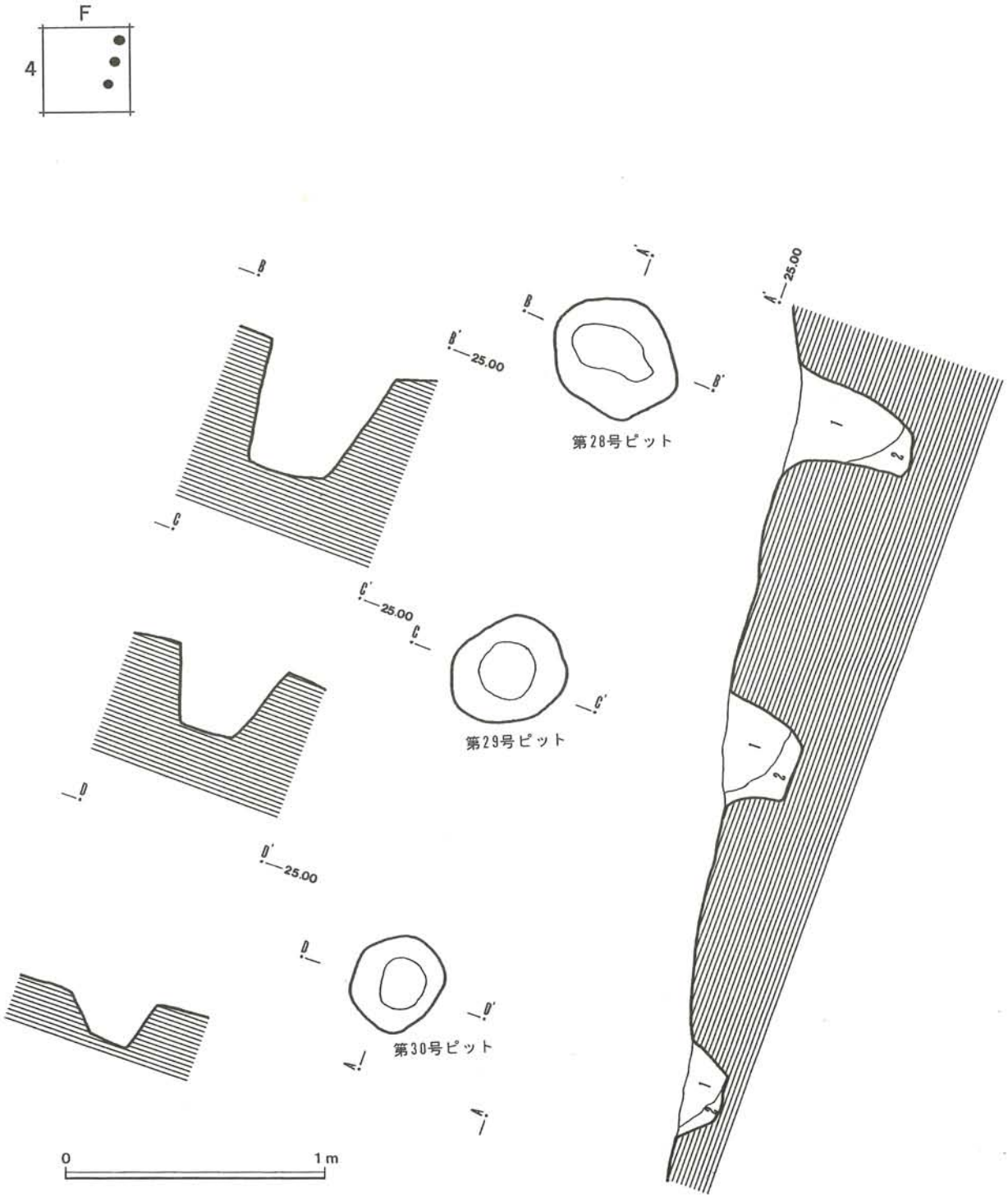
遺物は確認されなかった。

第27号柱穴状遺構

Ｅ－５グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長径55cm、短径30cm、深さは最深部が17cmある。断面形状は丸底状のＶ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～１cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－16　第28・29・30号柱穴状遺構の平面および断面図

第28・29・30号柱穴状遺構

Ｆ－４グリッド内に位置し、各ピット間の距離は 130cmを計り、方位はN-17°-E を指している。ピットの配列が斜面に従ってあるため深さが異なるが、ピットの底の標高に極端な差はない。

第28号ピットの平面形状は不整円形で、長径52cm、短径43cm、深さは最深部が47cmある。断面形状はＵ字形を呈している。

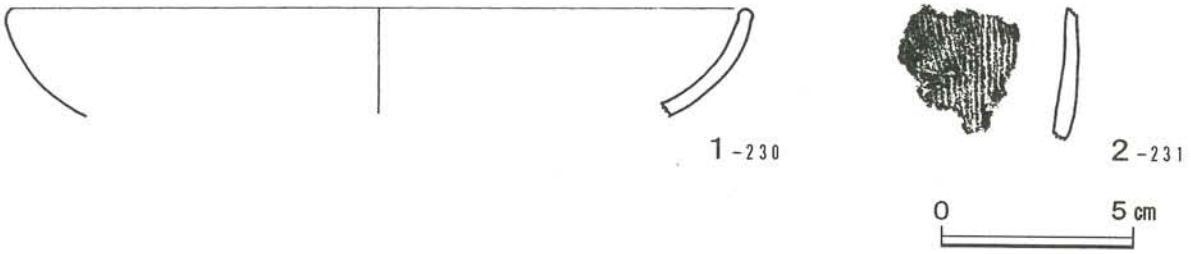
覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は覆土の第１層上位から土器の細片が２点出土したが、時代を確定できるものではない。

第29号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径46cm、短径38cm、深さは最深部が31cmある。断面形状はＵ字形を呈している。

覆土は第28号ピットと同様で２層からなっている。

遺物は覆土の第１層上位から土師器の口縁部の破片１(遺物No.230)と胴部の破片２(遺物No.231)が出土している。

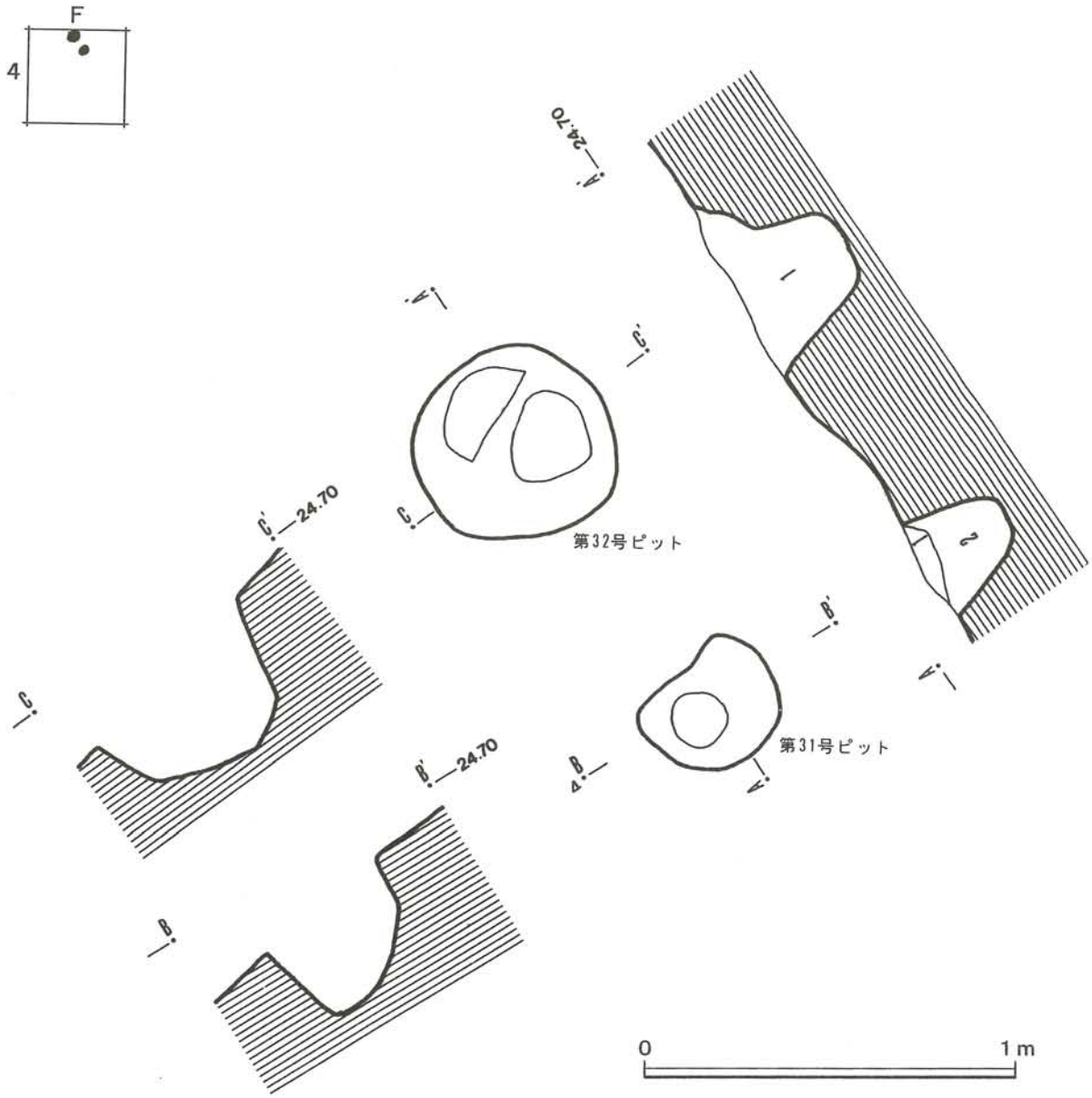


図Ⅳ－３－17　第29号柱穴状遺構からの出土した土師器片

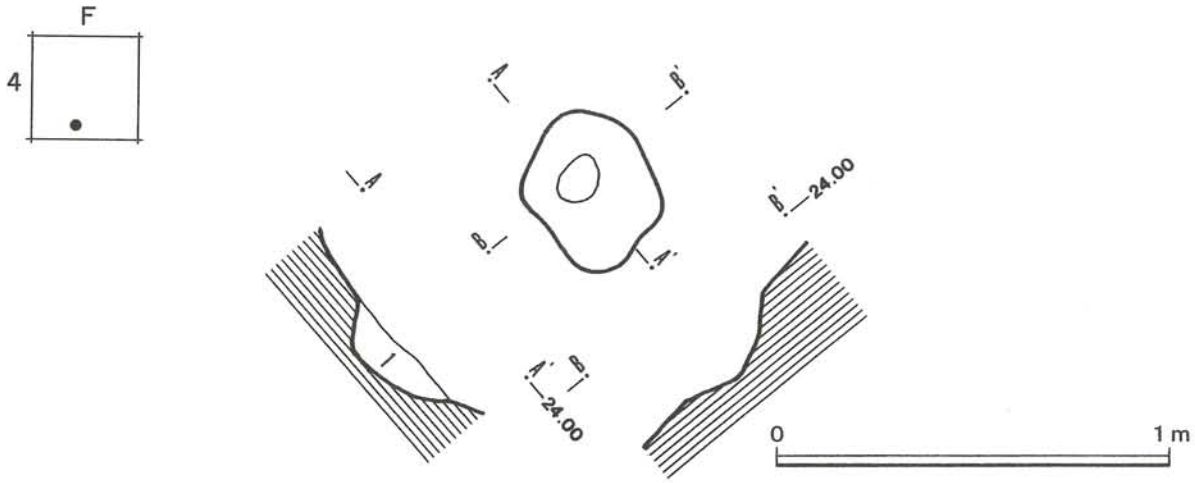
第30号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径38cm、短径35cm、深さは最深部が19cmある。断面形状はＵ字形を呈している。

覆土は第28号ピットと同様で２層からなっている。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－18　第31・32号柱穴状遺構の平面および断面図



図Ⅳ－３－19　第33号柱穴状遺構の平面および断面図

第31・32号柱穴状遺構

Ｆ－４グリッド内に位置し、ピット間の距離は90cmを計り、方位はN-29°-W を指している。

第31号ピットの平面形状は不整円形で、長径39cm、短径35cm、深さは最深部が28cmある。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

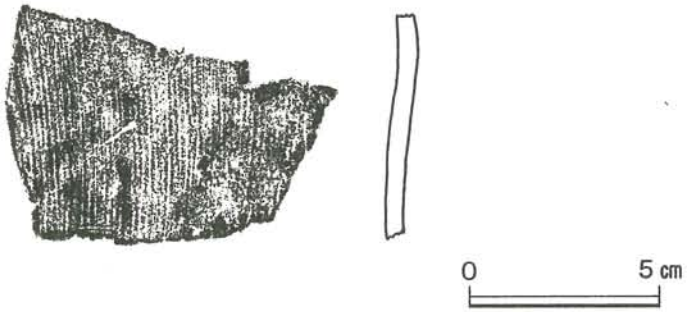
覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性やや弱い。径 0.5～７cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で、締りは強く、粘性はやや弱い。径 0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第32号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径56cm、短径53cm、深さは最深部が32cmある。断面形状は上に開くＵ字形を呈し、北西側に小段がある。

覆土は暗褐色土が１層で、締りも粘性もやや強く、径 0.5～７cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は覆土上位から土師器の破片(遺物No.288) など５点が出土している。



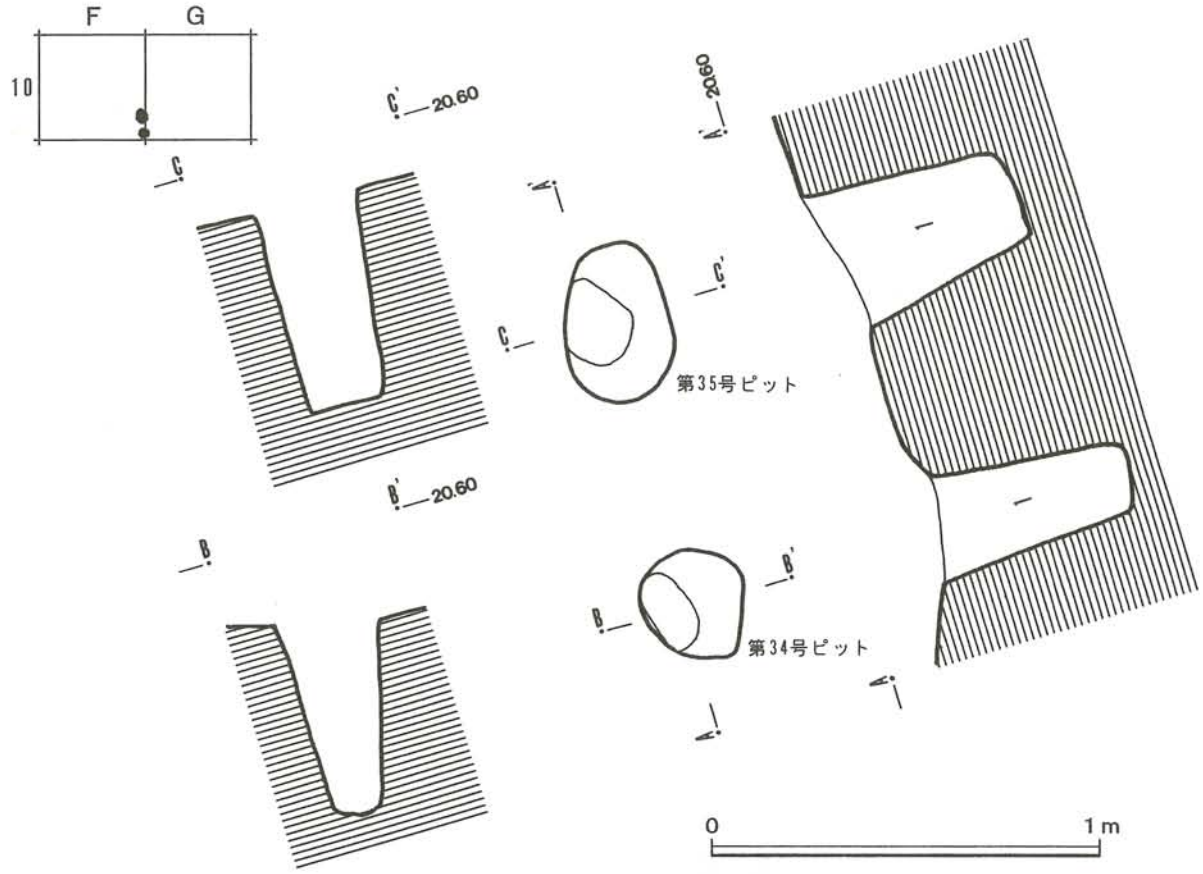
図Ⅳ－３－20　第32号柱穴状遺構から出土した土師器片(遺物No.288)

第33号柱穴状遺構

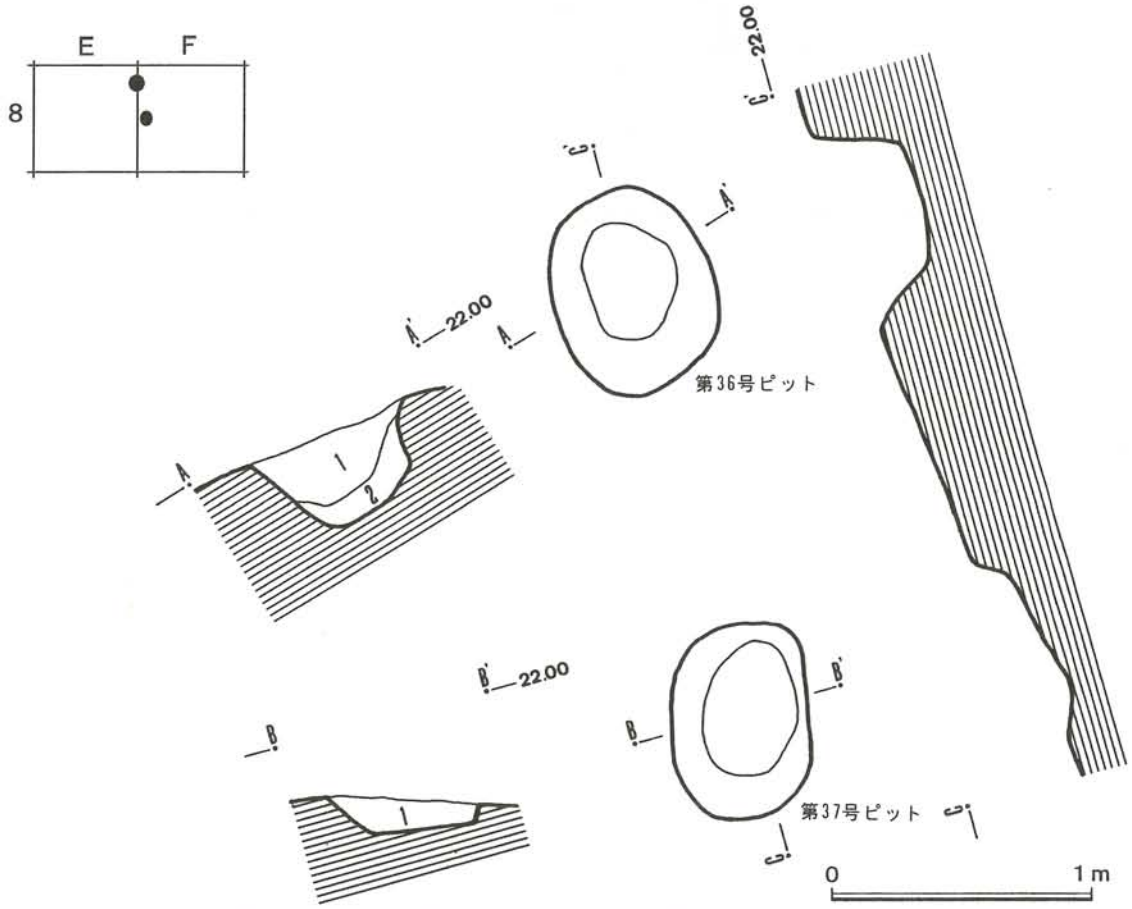
Ｆ－４グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径41cm、短径34cm、深さは最深部が10cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性はやや強い。径１～３cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－21　第34・35号柱穴状遺構の平面および断面図



図Ⅳ－３－22　第36・37号柱穴状遺構の平面および断面図

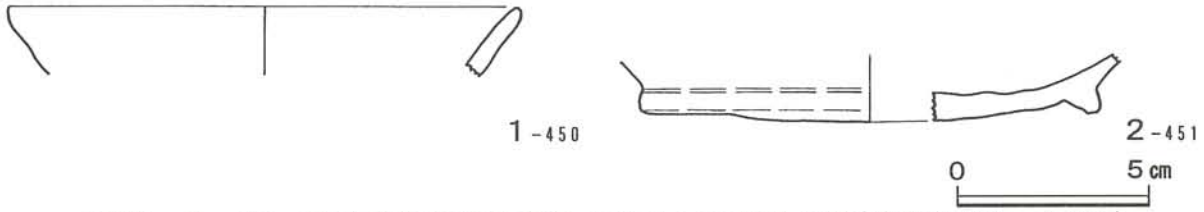
第34・35号柱穴状遺構

Ｆ－10～Ｇ－10グリッド内に位置し、ピット間の距離は76cmを計り、方位はN-14°- Eを指している。これらのピットは第66号土坑を切っている。

第34号ピットの平面形状は不整円形で、長径31cm、短径28cm、深さは最深部が51cmと深い。断面形状はＵ字形を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～３cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は覆土上位から土器片が５点出土しているが、そのうちの２点は陶質土器の口縁部（遺物No.450）と底部（遺物No.451）の破片である。



図Ⅳ－３－23　第34号柱穴状遺構から出土した陶質土器（遺物No.450、No.451）

第35号ピットの平面形状は不整楕円形で、長径41cm、短径28cm、深さは最深部が53cmと深い。断面形状はＵ字形を呈している。

覆土は第34号ピットと同じ暗褐色土が１層である。

遺物は覆土上位から土器の細片が２点出土したが、時代を確定できるものではなかった。

第36・37号柱穴状遺構

Ｅ－８～Ｆ－８グリッド内に位置し、ピット間の距離は 170cmを計り、方位はN-16°-Wを指している。

第36号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径80cm、短径63cmで、深さは最深部が35cmある。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径２～７cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は明黒褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径５～10cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第37号ピットの平面形状は楕円形で、長径76cm、短径53cmで、深さは最深部が14cmある。断面形状は浅いため定かではないが上に広く開くＵ字形を呈していると思われる。

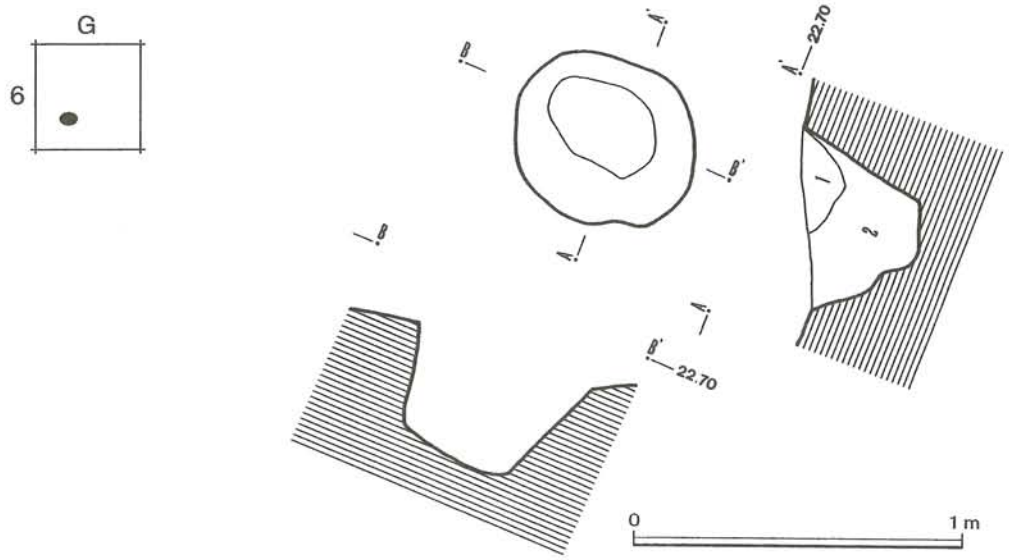
覆土は黒褐色土が１層で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径１～３cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第38号柱穴状遺構

Ｇ－６グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径59cm、短径53cm、深さは最深部が38cmある。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りも粘性もやや強く、黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。黄褐色土の小さなブロックを多く含んでいる。　遺物は確認されなかった。

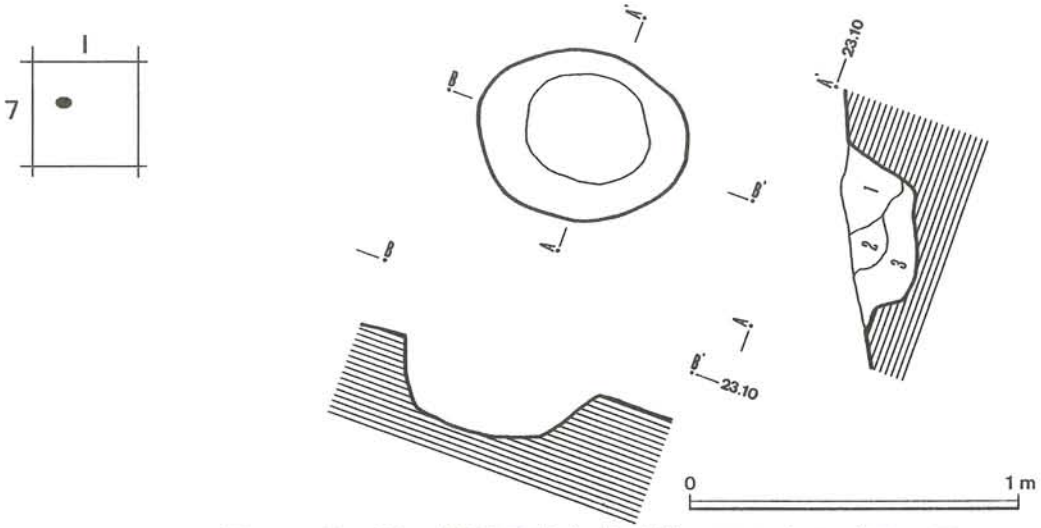


図Ⅳ－３－24　第38号柱穴状遺構の平面および断面図

第39号柱穴状遺構

Ｉ－７グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長径65cm、短径51cm、深さは最深部が23cmある。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

覆土は３層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。黄褐色土の小さなブロックを少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。黄褐色土の小さなブロックを少量含んでいる。第３層は黄褐色土で締りも粘性も弱く、黄褐色土の小さなブロックを多く含んでいる。　遺物は確認されなかった。

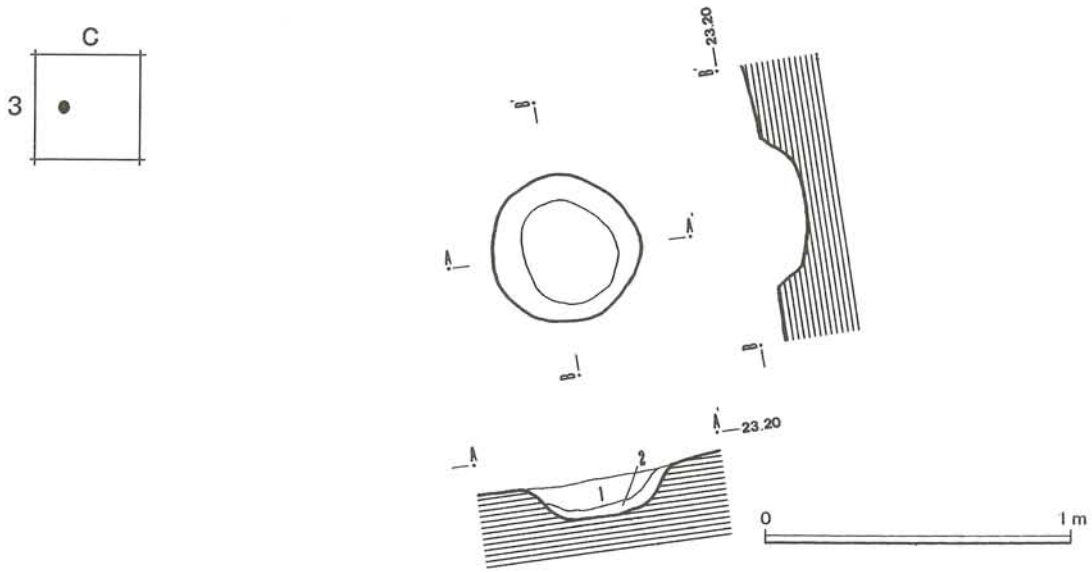


図Ⅳ－３－25　第39号柱穴状遺構の平面および断面図

第40号柱穴状遺構

Ｃ－３グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長径49cm、短径48cm、深さは最深部が13cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径１～４cm大の礫を少量含み、炭化物や焼土の粒を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径１cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックや炭化物を含んでいる。　遺物は確認されなかった。

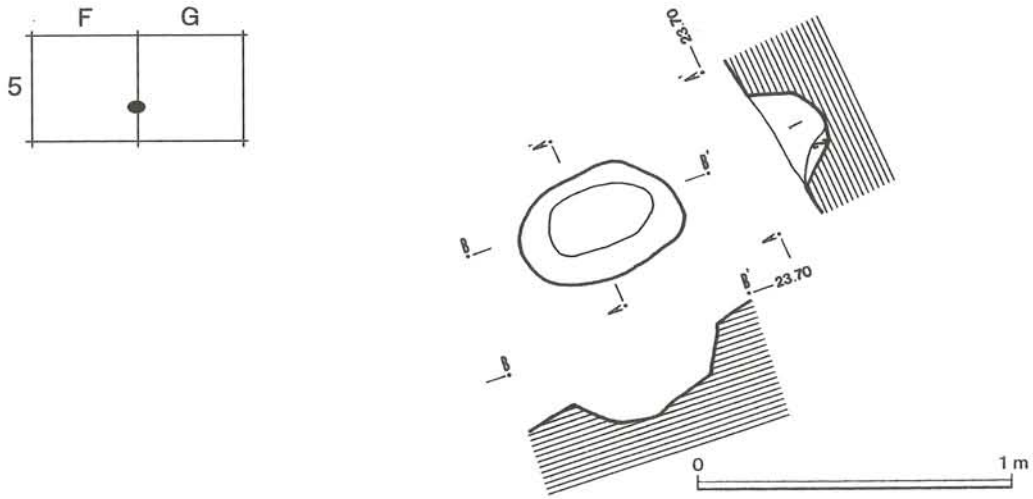


図Ⅳ－３－26　第40号柱穴状遺構の平面および断面図

第41号柱穴状遺構

Ｆ～Ｇ－５グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長径53cm、短径35cm、深さは最深部が16cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～２cm大の礫と黄褐色土ブロックを少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～１cm大の礫を少量含んでいる。　遺物は確認されなかった。

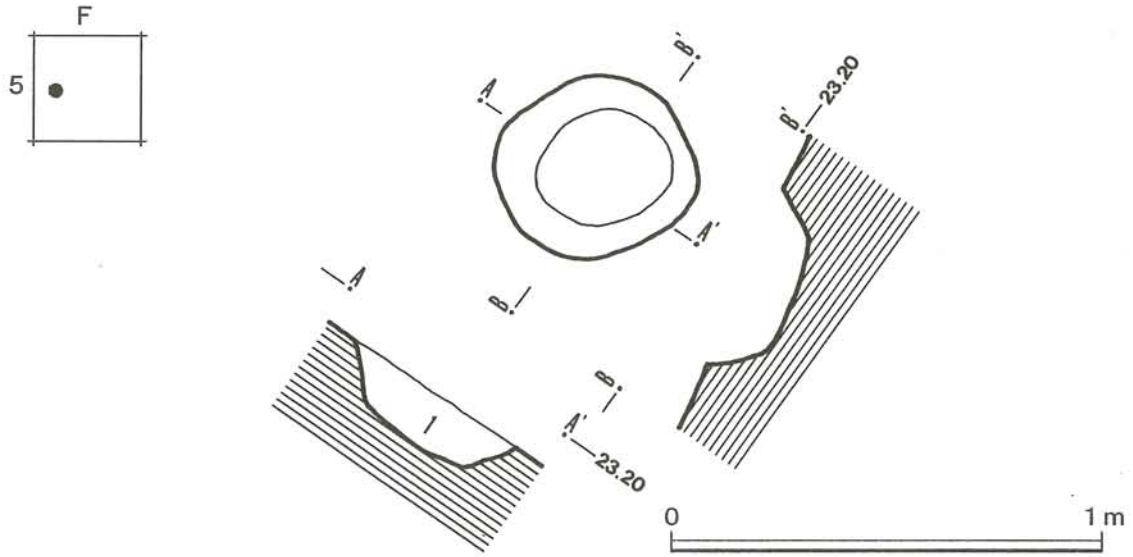


図Ⅳ－３－27　第41号柱穴状遺構の平面および断面図

第42号柱穴状遺構

Ｆ－５グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径48cm、短径43cm、深さは最深部が13cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～３cm大の礫をやや多く含んでいる。　遺物は確認されなかった。

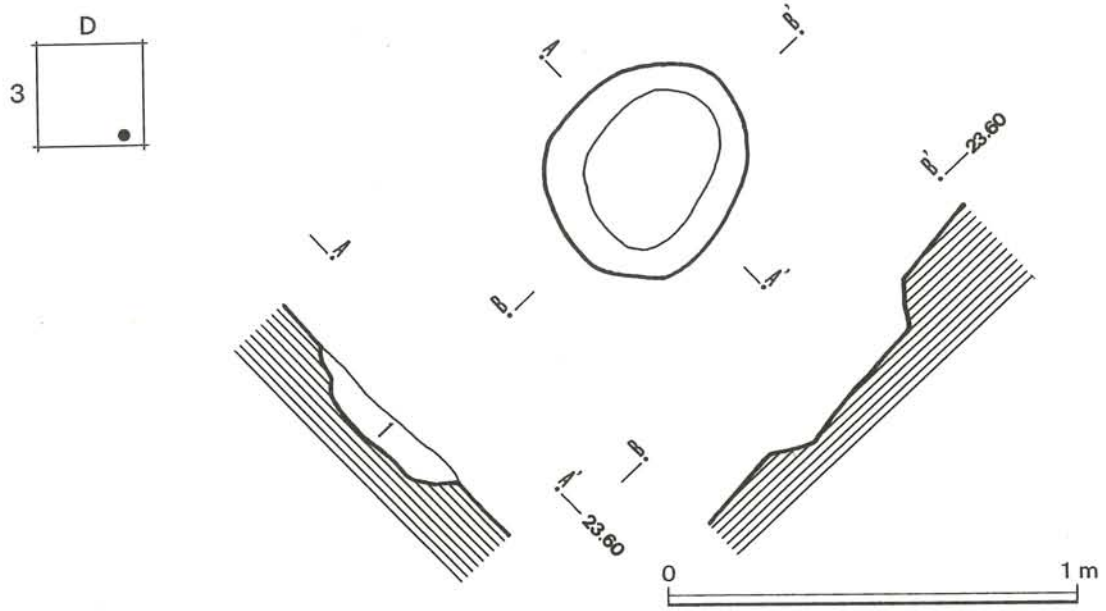


図Ⅳ－３－28　第42号柱穴状遺構の平面および断面図

第43号柱穴状遺構

Ｄ－３グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径56cm、短径47cm、深さは最深部が９cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫と炭化物を少量含んでいる。　遺物は確認されなかった。



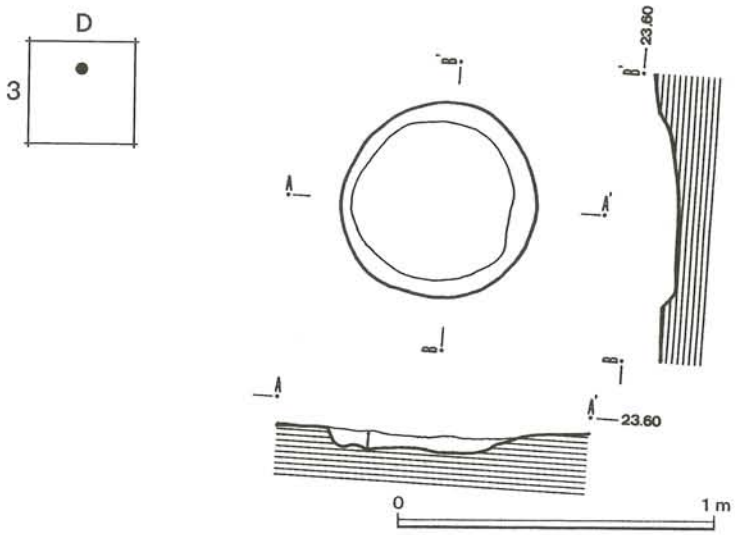
図Ⅳ－３－29　第43号柱穴状遺構の平面および断面図

第44号柱穴状遺構

Ｄ－３グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径64cm、短径60cm、深さは最深部が６cmある。断面形状は浅いため定かではないが、Ｕ字形を呈していると思われる。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫と炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－30　第44号柱穴状遺構の平面および断面図

第45・46号柱穴状遺構

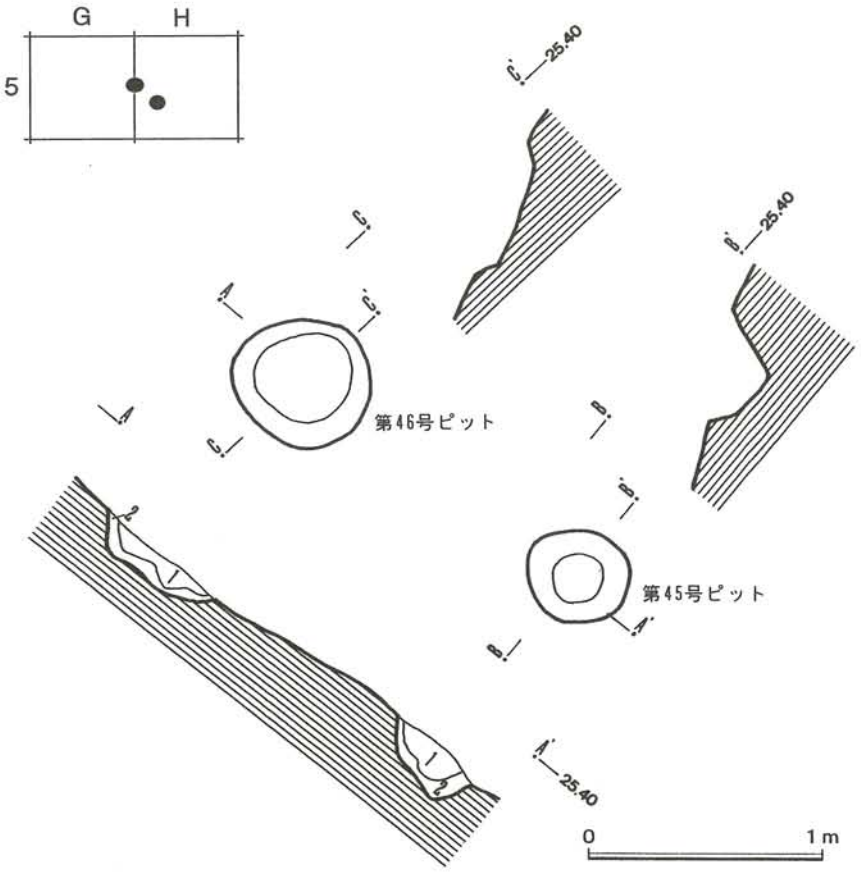
Ｇ－５～Ｈ－５グリッド内に位置し、ピット間の距離は 150cmを計り、方位はN-54°-Wを指している。

第45号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径46cm、短径42cmで、深さは最深部が24cmある。断面形状は上に開くＵ字形を呈していると思われる。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は黄褐色土で締りも粘性もやや強い。径 0.5～２cm大の礫をやや多く含み、暗褐色土のブロックを少量含んでいる。遺物は確認されなかった。

第46号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径62cm、短径56cmで、深さは最深部が13cmある。断面形状は丸底状を呈している。

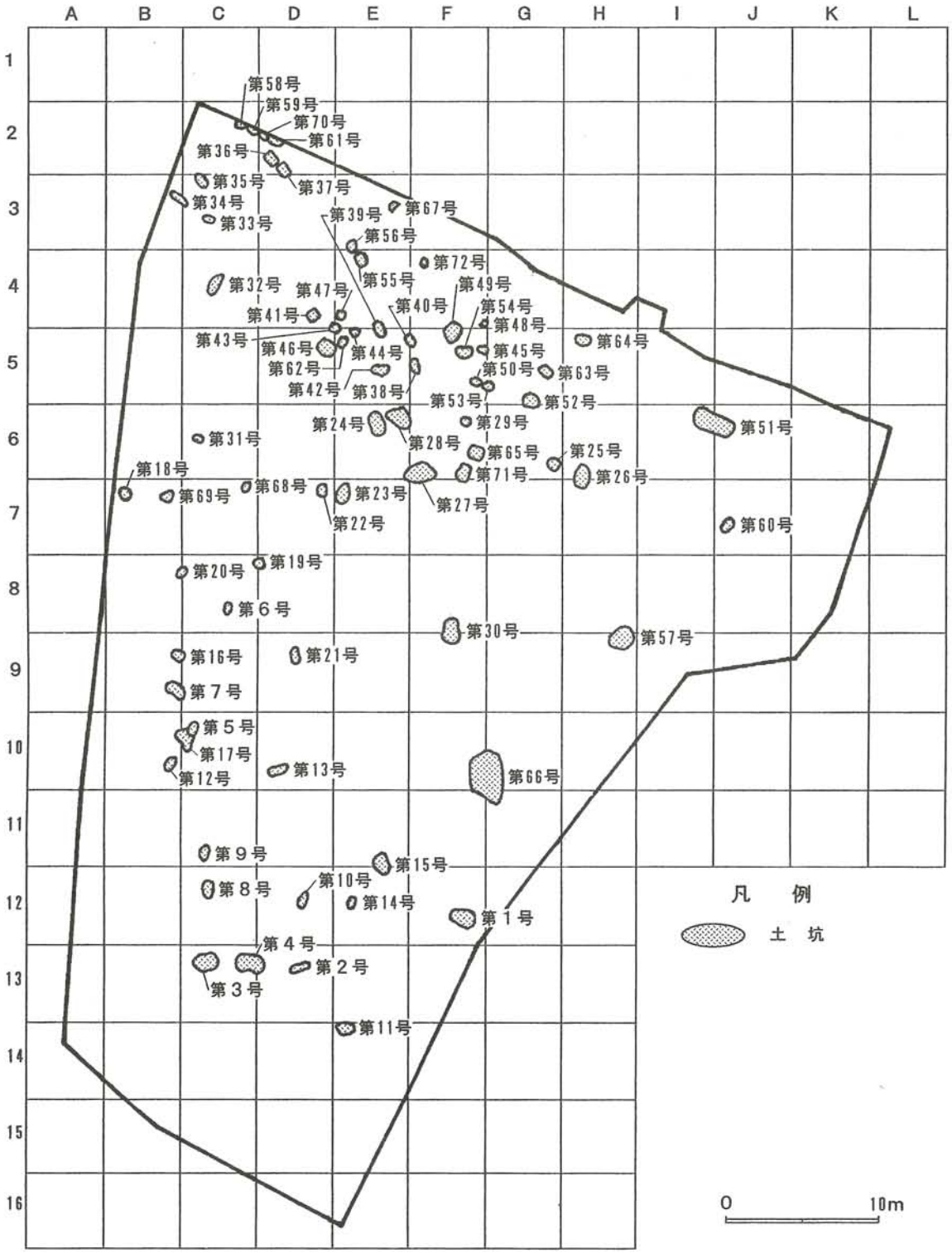
覆土は第45号ピットと同じである。遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－31　第45・46号柱穴状遺構の平面および断面図

２．土坑と遺物

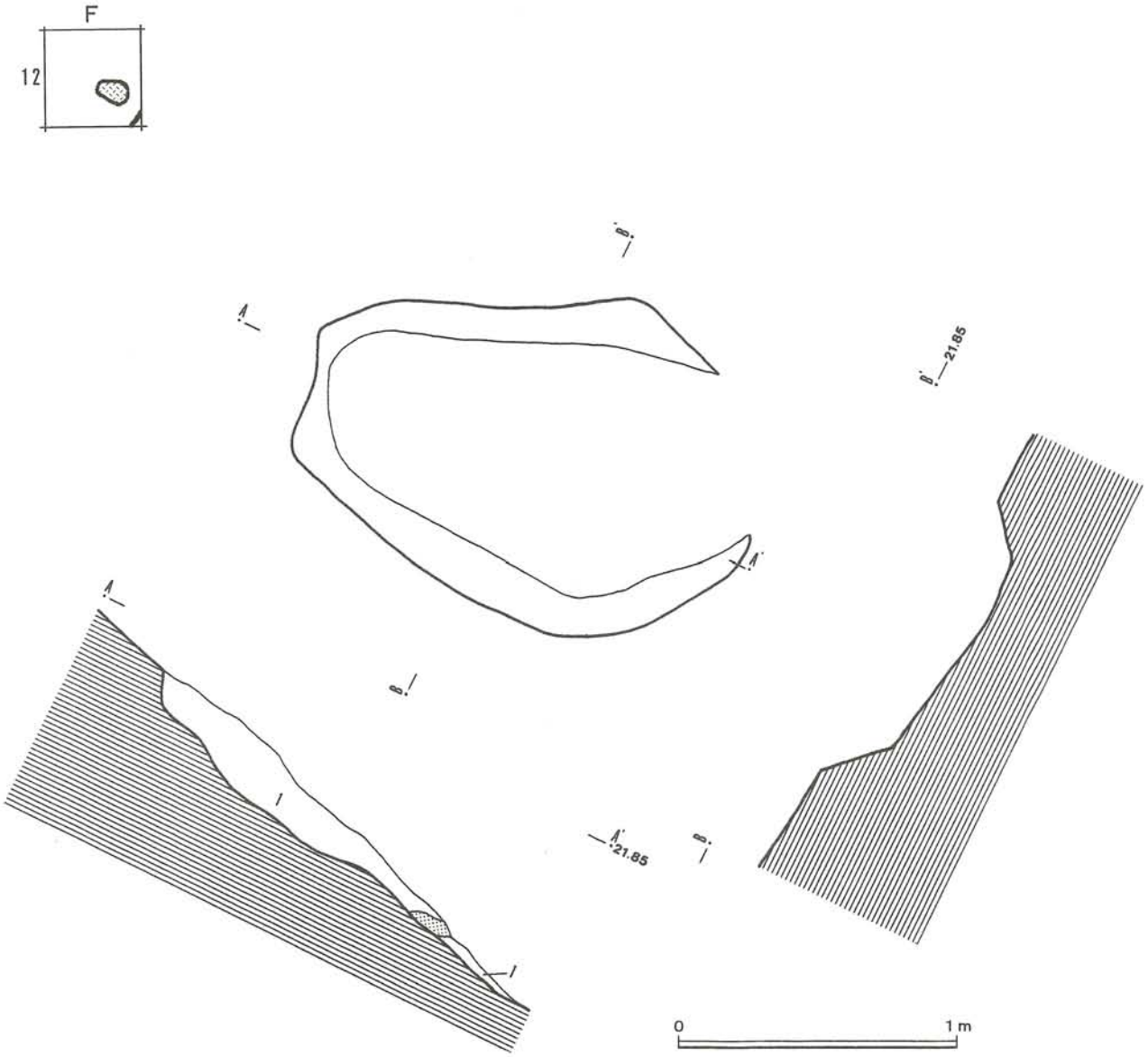
土坑は調査区内の全域に分布しており、72基が確認された。平面形状でみると、楕円形・不整楕円形が37基で約51％を占めているが、長軸の方向や規模などに統一性はみられない。円形・不整円形は15基で約21％を占めているが、規模や深さに統一性はみられない。遺物が出土した土坑は11基あるが、ほとんどが土器の細片で、土坑が掘られた時代や性格を確定できるものではなかった。



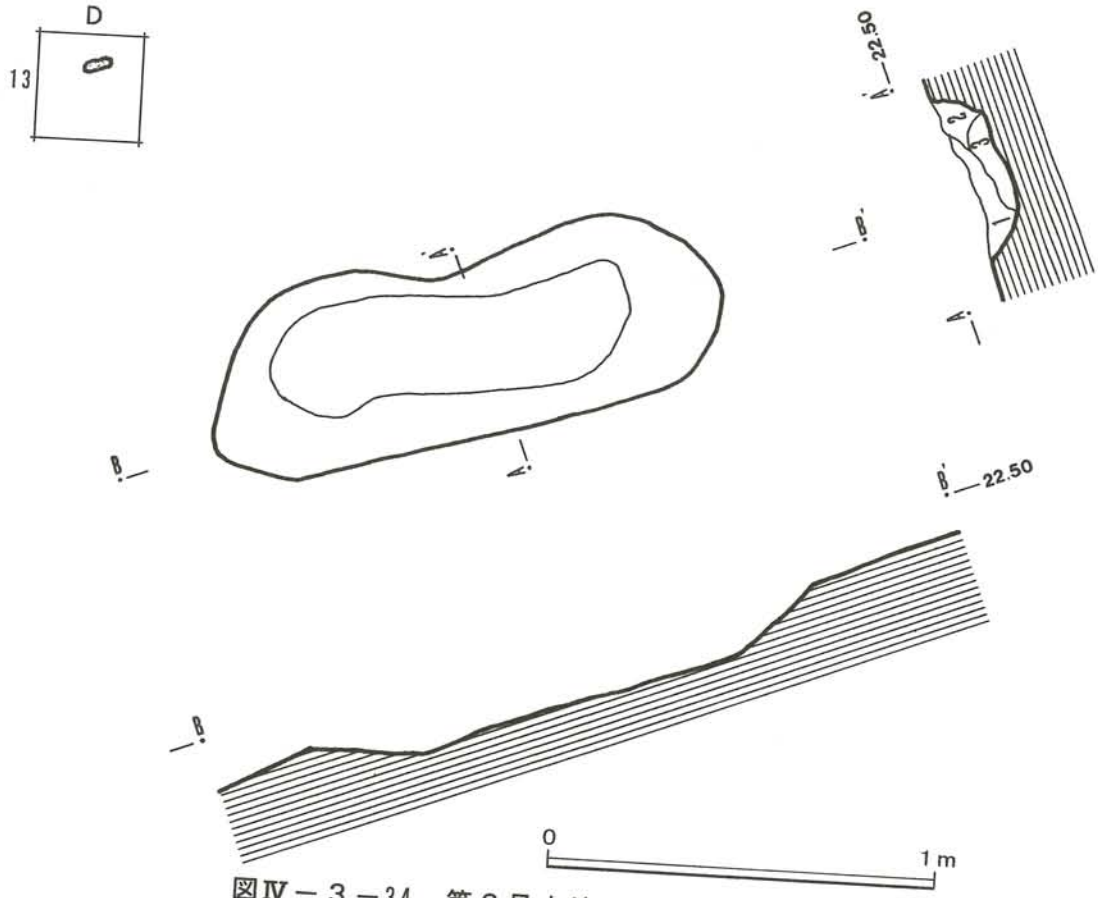
図Ⅳ－３－32　土坑の分布図

第１号土坑

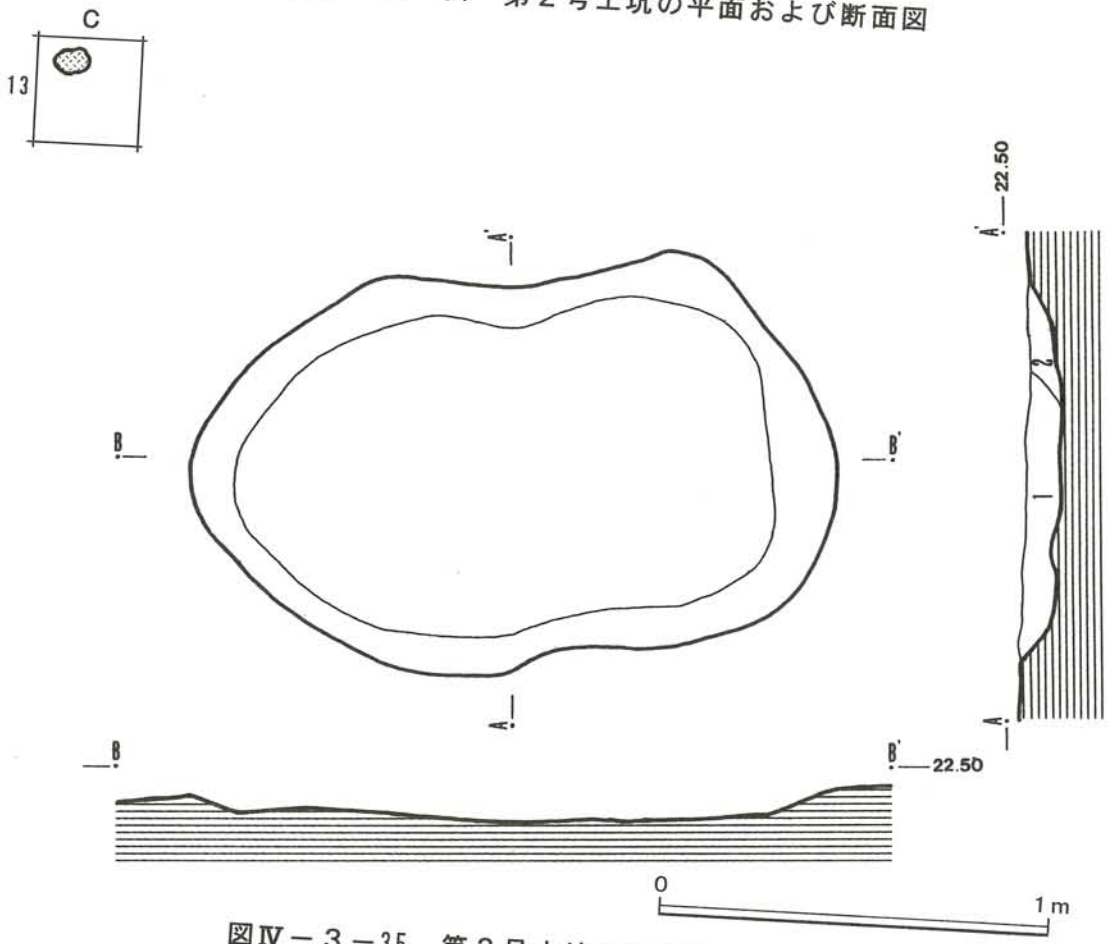
Ｆ－12グリッド内に位置し、東側は削平されている。平面形状は不整楕円形で、長径が166cm、最大幅 121cm、深さは最深部が21cmあり、長軸の方向はN-70°-W を指している。土坑の底面は東側に緩やかに傾斜し、断面形状は上が広く開いたＵ字形を呈すると思われる。覆土は黒色土が１層で締りは強く、粘性はない。径１～11cm大の礫を多く含んでいる。一部に撹乱層がみられる。遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－33　第１号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－34　第２号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－35　第３号土坑の平面および断面図

第２号土坑

Ｄ－13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 134cm、最大幅48cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-20°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが丸底状を呈している。。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りは強く、粘性はない。径 0.5～２cm大の礫を含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はない。径 0.5～３cm大の礫を少量含んでいる。第３層は黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径１～３cm大の礫をやや多く含んでいる。

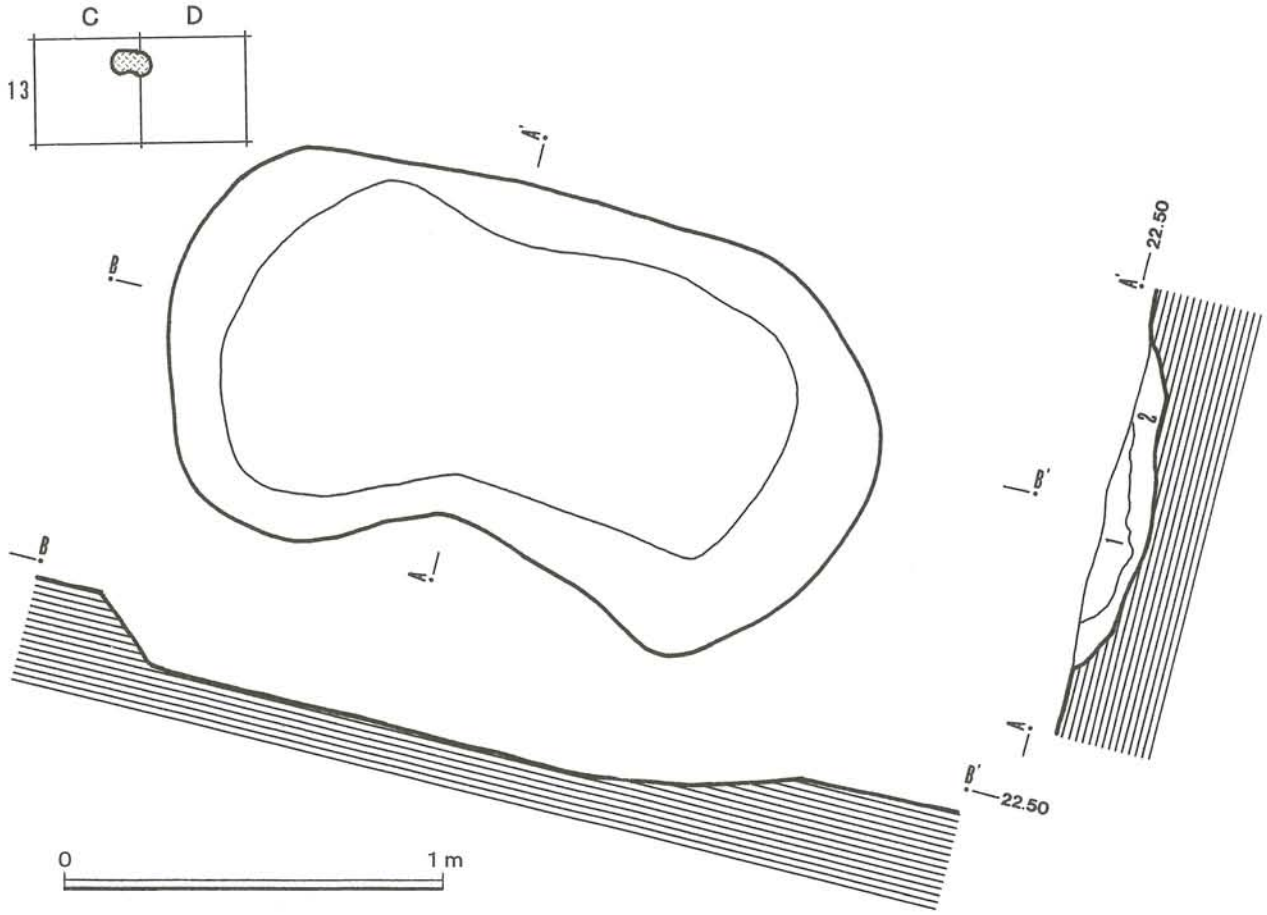
遺物は確認されなかった。

第３号土坑

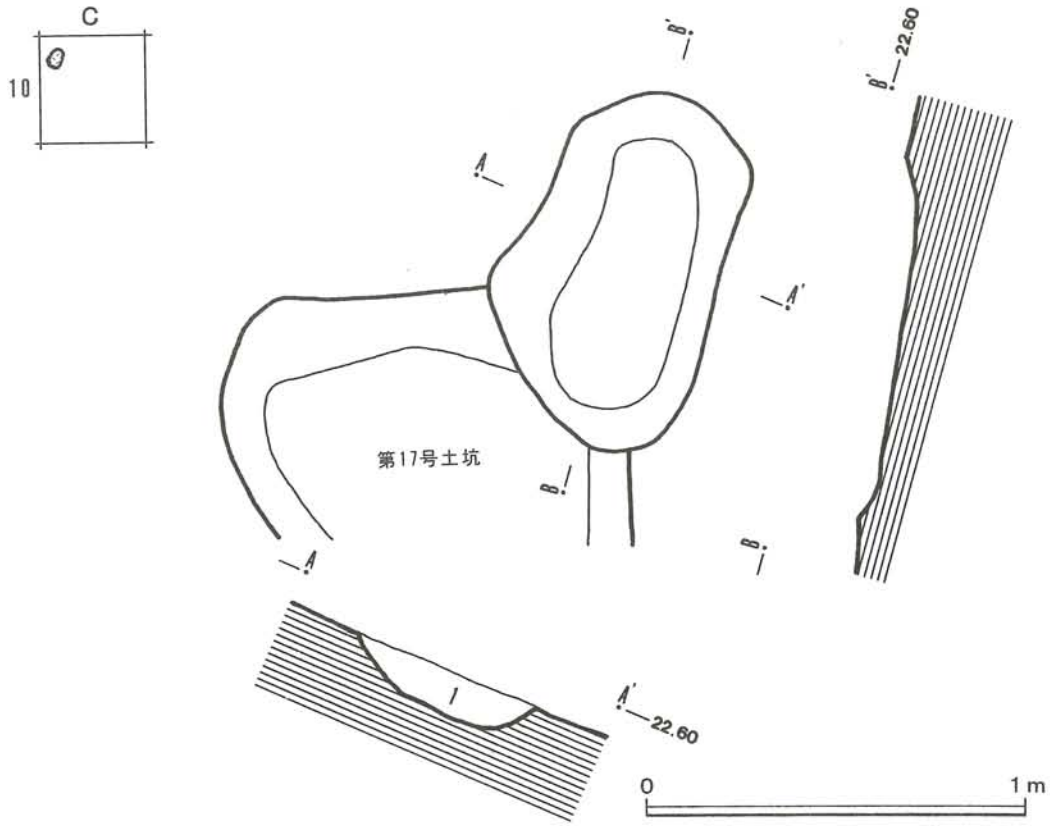
Ｃ－13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 166cm、最大幅 102cm、深さは最深部が９cmと浅く、長軸の方向はN-84°-E 東西を指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りは弱く、粘性はない。径 0.5～１cm大の礫を多く含んでいる。第２層は黄褐色土で締りは強く、粘性はない。径 0.5～７cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－36　第４号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－37　第５号土坑の平面および断面図

第４号土坑

Ｃ～Ｄ－13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 190㎝、最大幅 109㎝、深さは最深部が15㎝と浅く、長軸の方向はN-77°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径１～４㎝大の礫を少量含んでいる。第２層は黒褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5～５㎝大の礫を多く含んでいる。

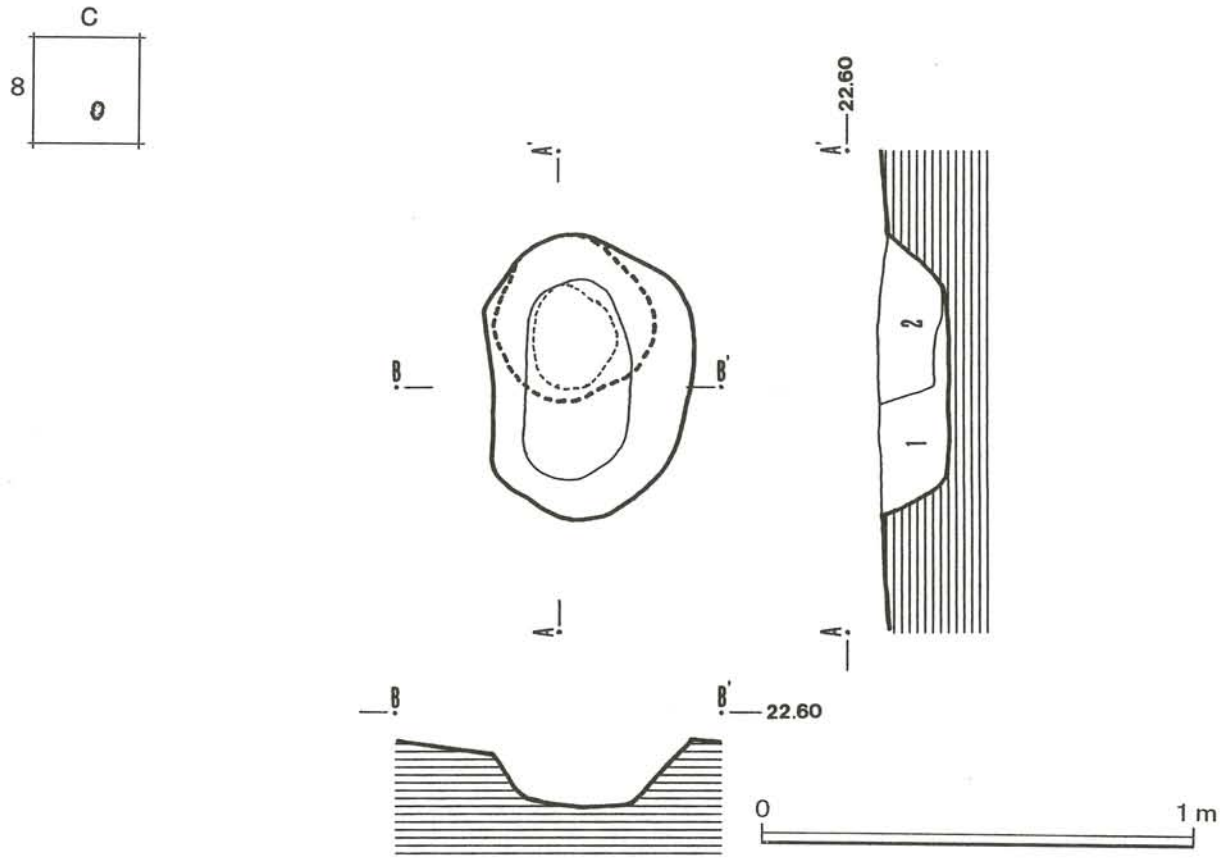
遺物は底面から土器の細片が１点出土したが、時代を推定できるものではなかった。

第５号土坑

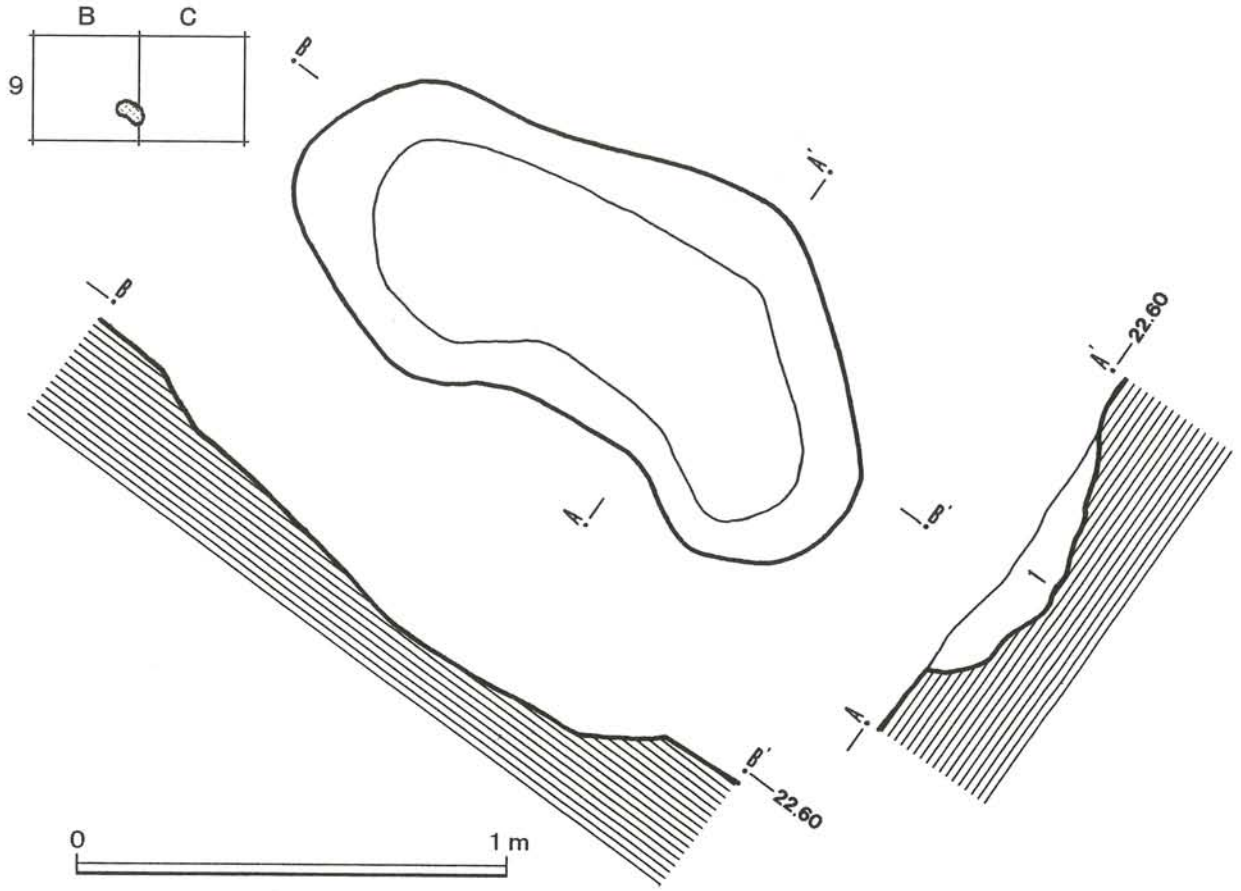
Ｃ－10グリッド内に位置し、南部分が第17号土坑の北東部を切っている。平面形状は不整楕円形で、長さ95㎝、最大幅59㎝、深さは最深部が12㎝と浅く、長軸の方向はN-15°-Eを指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は丸底状を呈している。

覆土は黒褐色土が１層で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～７㎝大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－38　第６号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－39　第７号土坑の平面および断面図

第６号土坑

Ｃ－８グリッド内に位置し、北側は第22号ピットが切っている。平面形状は楕円形で、長さ67cm、最大幅49cm、深さは最深部が16cmあり、長軸の方向はN－S（南北）を指している。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられるが、そのうちの第２層は第22号ピットの覆土である。第６号土坑の覆土は第１層の暗褐色土で、締りは強く、粘性はない。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

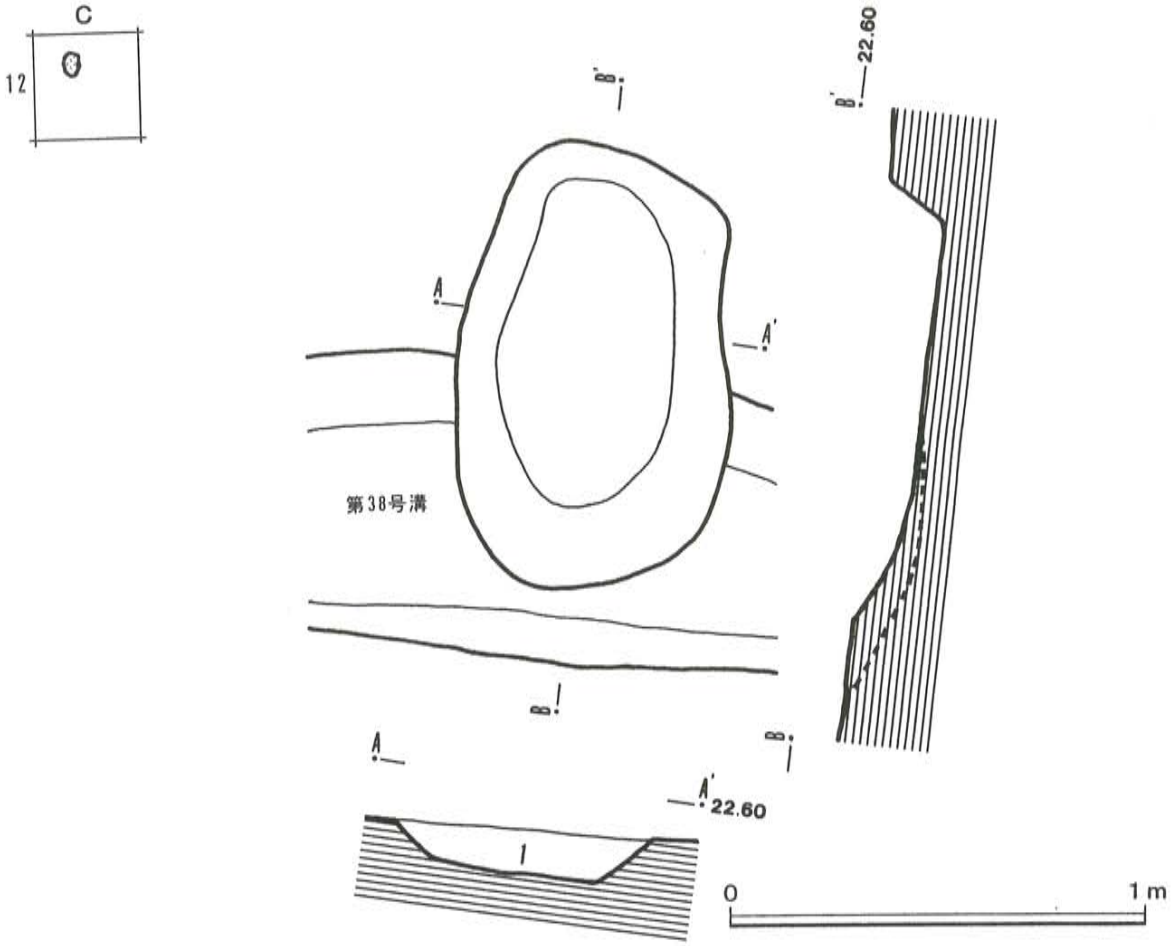
遺物は確認されなかった。

第７号土坑

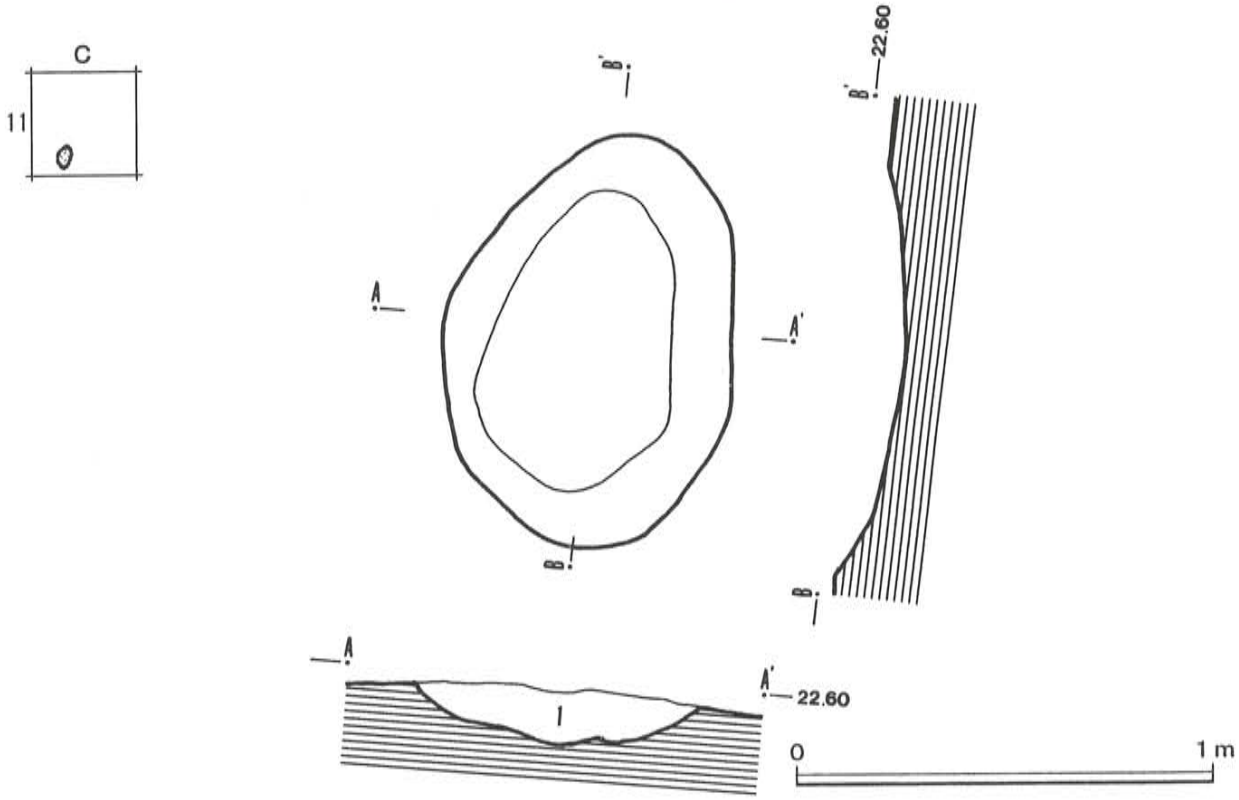
Ｂ～Ｃ－９グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 151cm、最大幅66cm、深さは最深部が16cmと浅く、長軸の方向はN-57°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で、締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5～１cm大の礫を多く含み、炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－40　第８号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－41　第９号土坑の平面および断面図

第８号土坑

Ｃ－12グリッド内に位置しており、第38号溝の中央部を切っている。平面形状は不整楕円形で、長さ 107cm、最大幅67cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸の方向はN－S を指している。断面形状は浅いため定かではないが、上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は暗褐色土の１層からなり、締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～６cm大の礫を多く含んでいる。

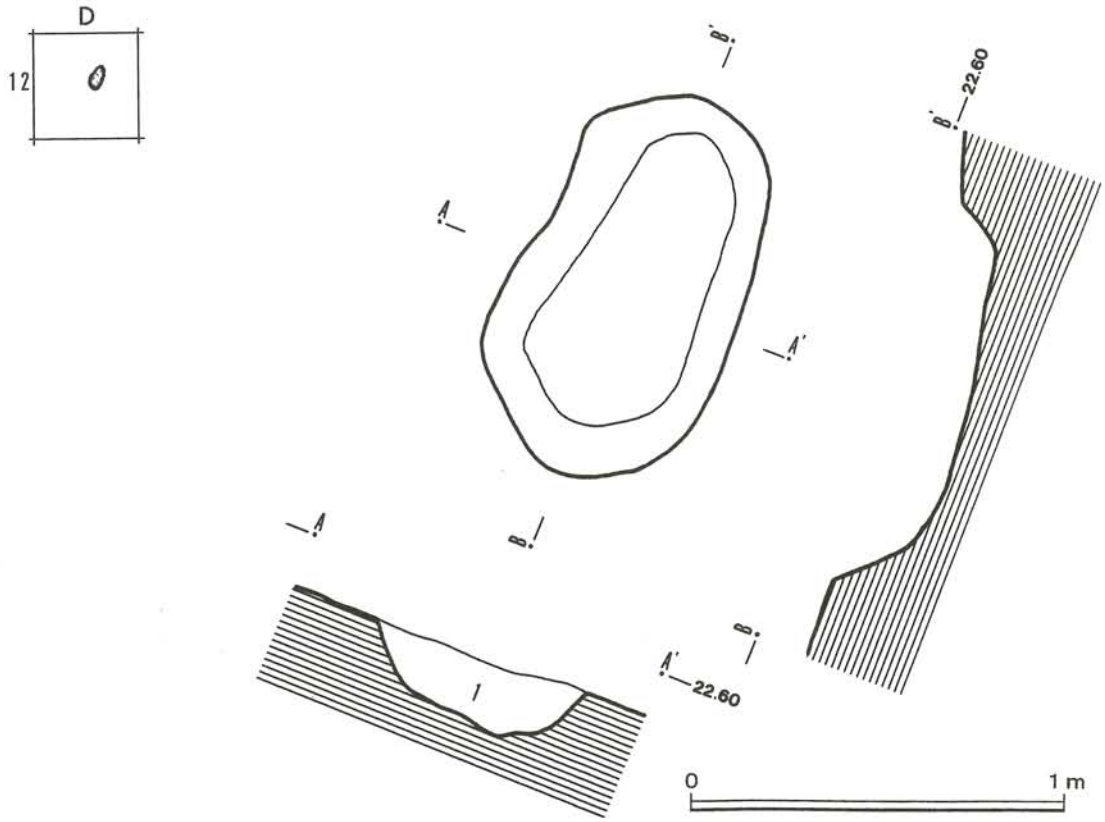
遺物は確認されなかった。

第９号土坑

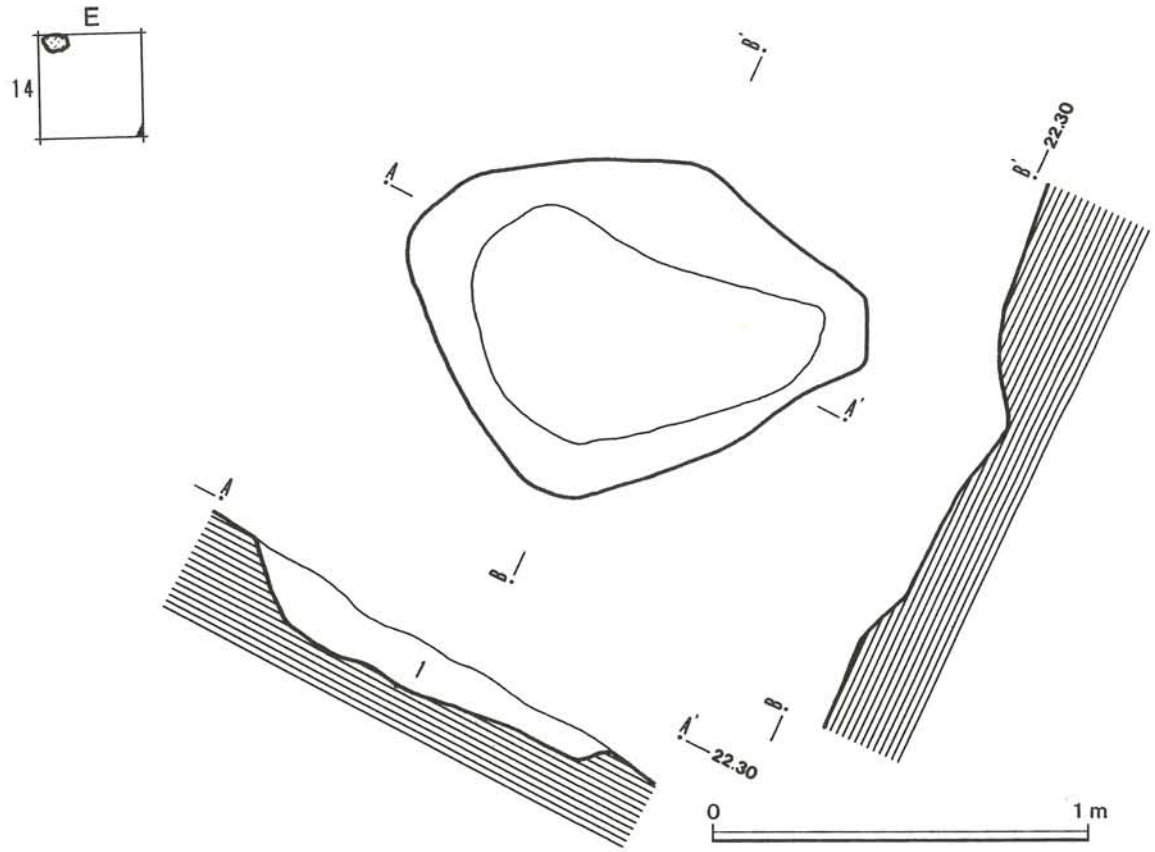
Ｃ－11グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ 100cm、最大幅69cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-12°-E を指している。断面形状は浅いため定かではないが、丸底状を呈している。

覆土は黒褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫を多く含み、炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－42　第10号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－43　第11号土坑の平面および断面図

第10号土坑

Ｄ－12グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ 106cm、最大幅63cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-21°-E を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は黒褐色土が１層で、締りも粘性もやや強く、径 0.5～２cm大の礫を多く含んでいる。

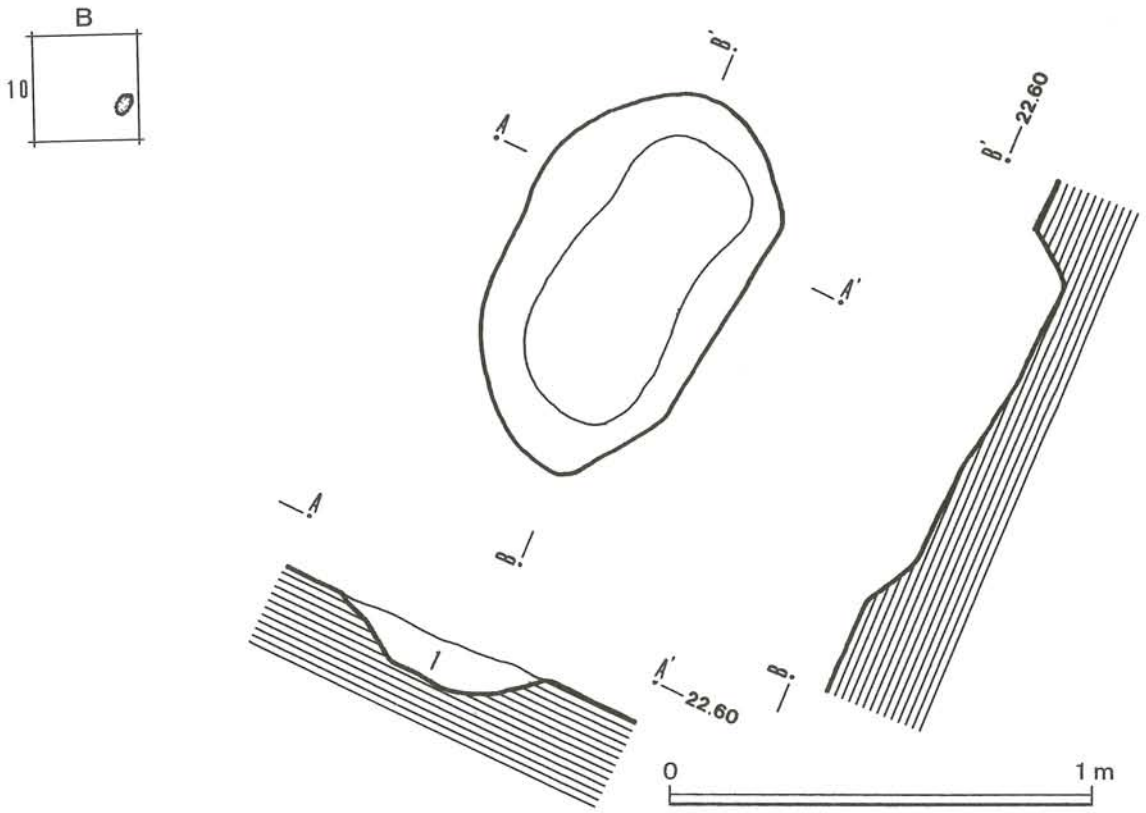
遺物は確認されなかった。

第11号土坑

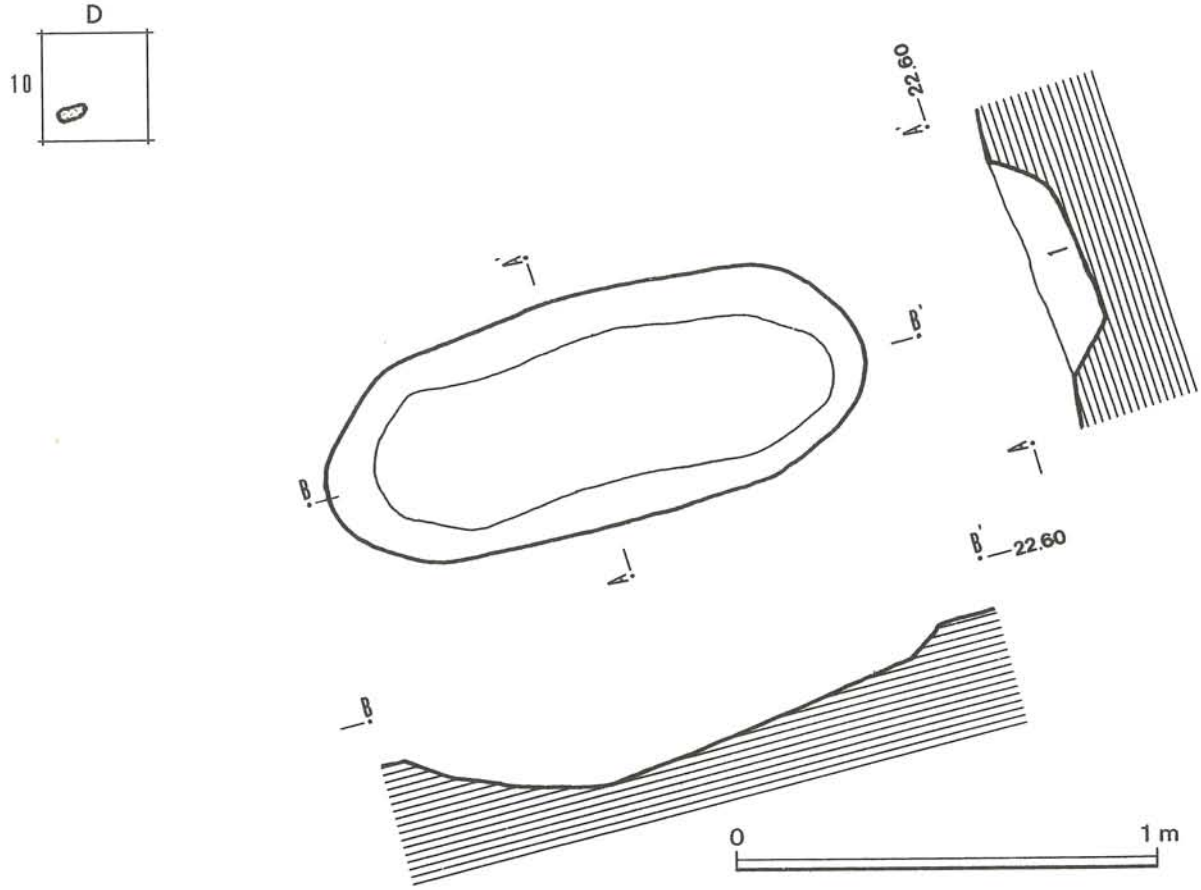
Ｅ－14グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 126cm、最大幅92cm、深さは最深部が17cmと浅く、長軸の方向はN-77°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が１層で、締りも粘性も弱く、径 0.5～４cmの円礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－44　第12号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－45　第13号土坑の平面および断面図

第12号土坑

Ｂ－10グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ97cm、最大幅56cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-24°-E を指している。断面形状は浅いため定かではないが、丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～８cm大の礫を多く含み、炭化物・焼土粒を少量含んでいる。

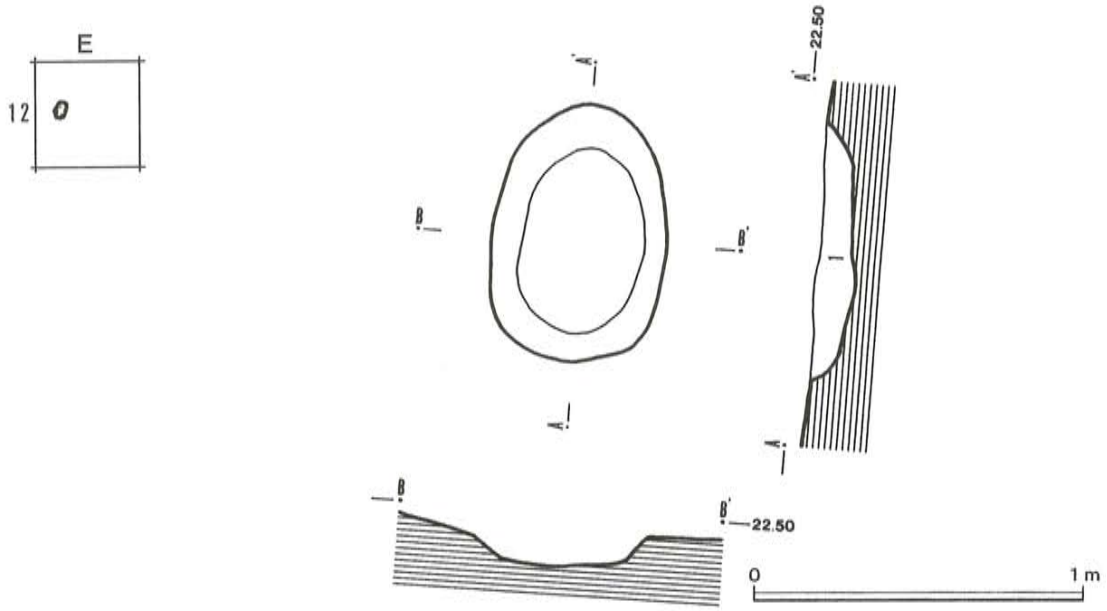
遺物は覆土の上位から土器の細片が１点出土したが、時代を推定できるものではなかった。

第13号土坑

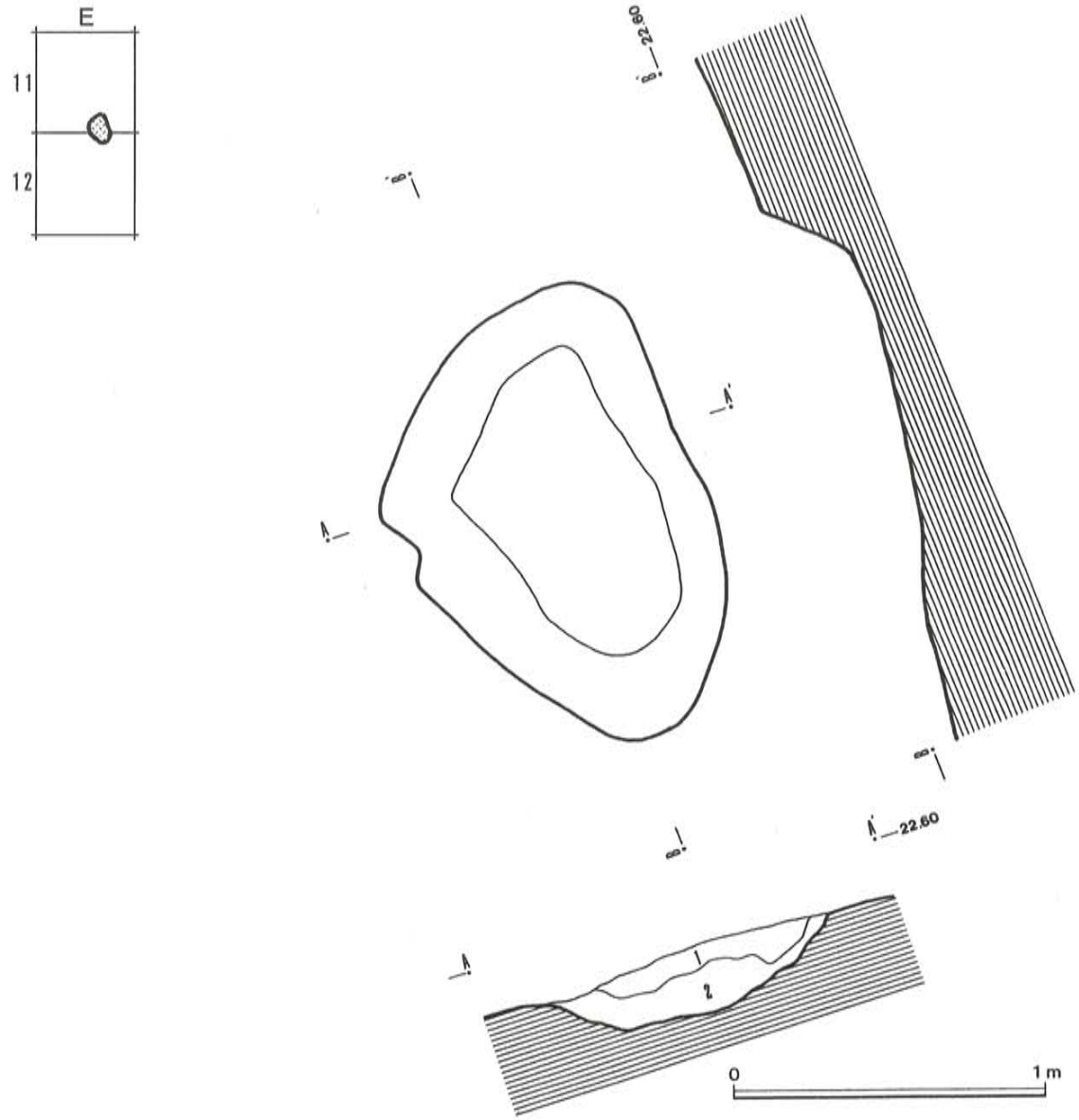
Ｄ－10グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ 131cm、最大幅55cm、深さは最深部が18cmと浅く、長軸の方向はN-74°-E を指している。断面形状は浅いため定かではないが、上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～３cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－46　第14号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－47　第15号土坑の平面および断面図

第14号土坑

Ｅ－12グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ79cm、最大幅55cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN－５°－Ｅ を指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～10cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。

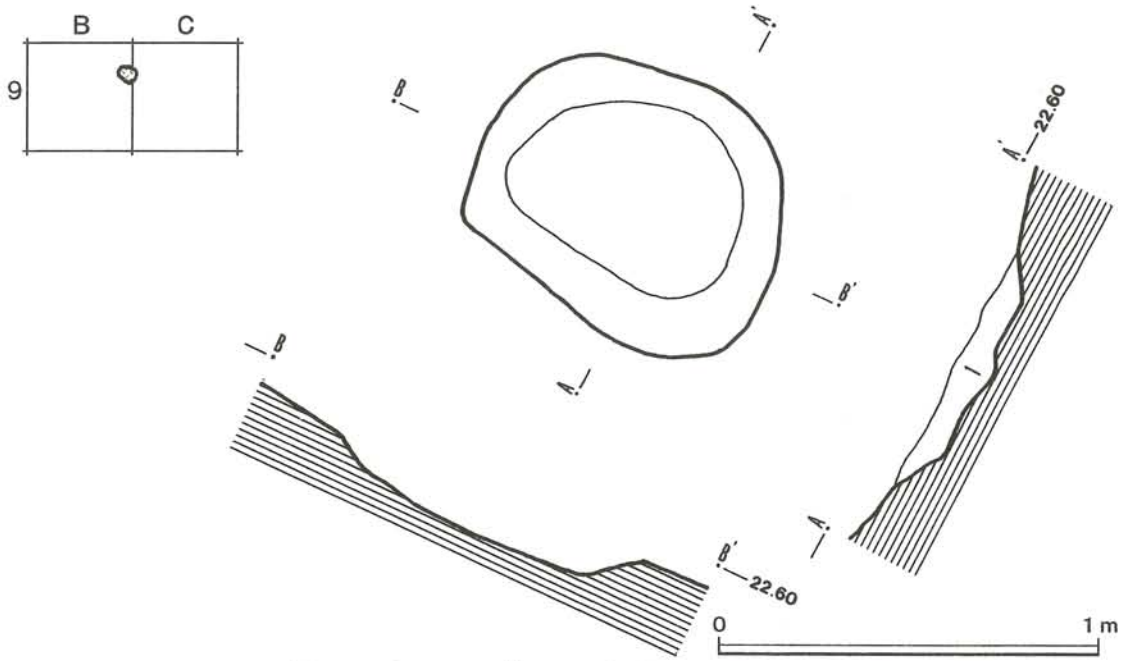
遺物は確認されなかった。

第15号土坑

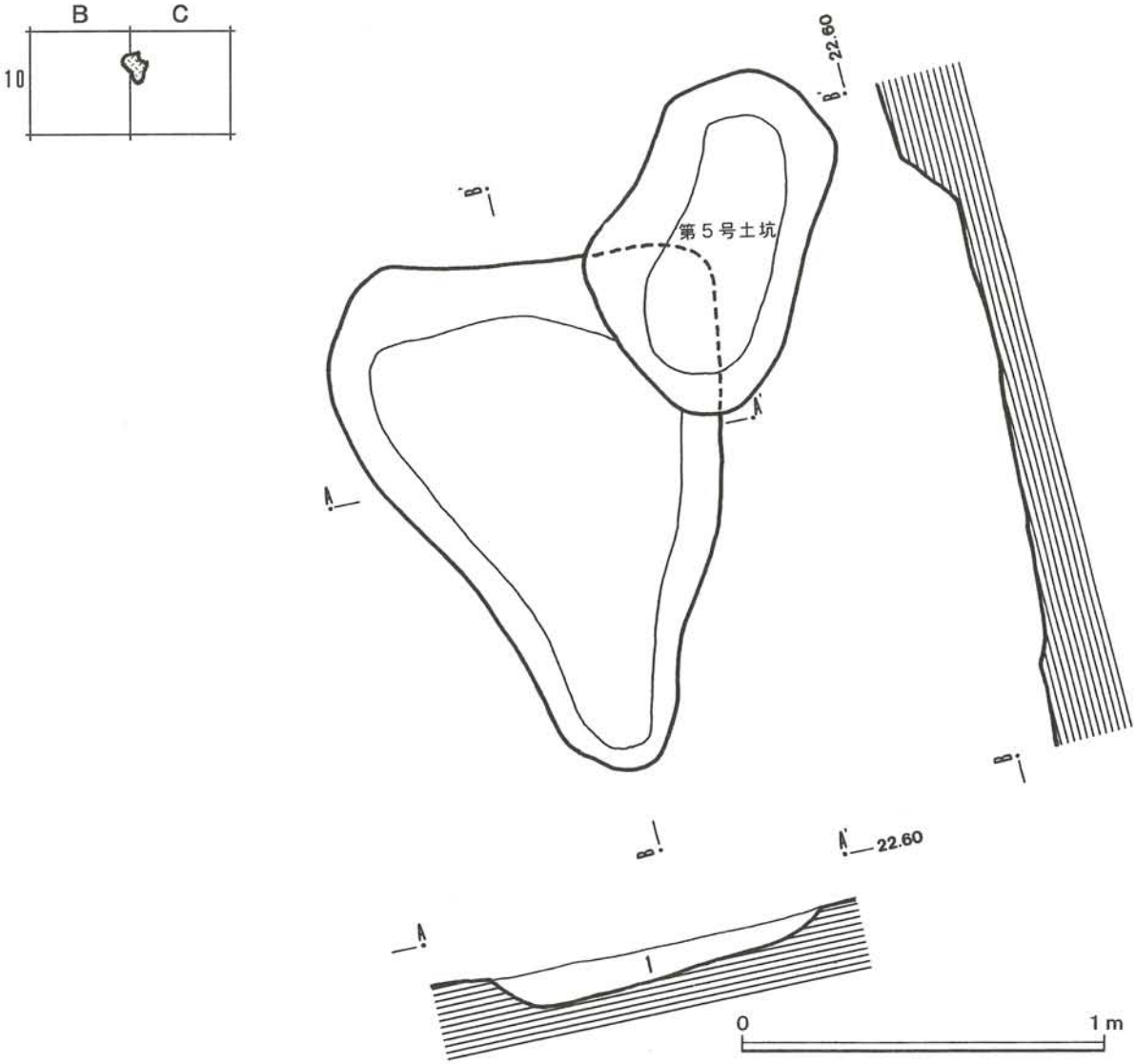
Ｅ－11～12グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 142cm、最大幅98cm、深さは最深部が23cmあり、長軸の方向はN-29°-W を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りは強く、粘性は弱い。径１～12cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5～４cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－48　第16号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－49　第17号土坑の平面および断面図

第16号土坑

Ｂ－９～Ｃ－９グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長さ85cm、最大幅70cm、深さは最深部が11cmと浅く、長軸の方向はN-60°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が１層で、締りも粘性もやや弱く、径 0.5～５cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。

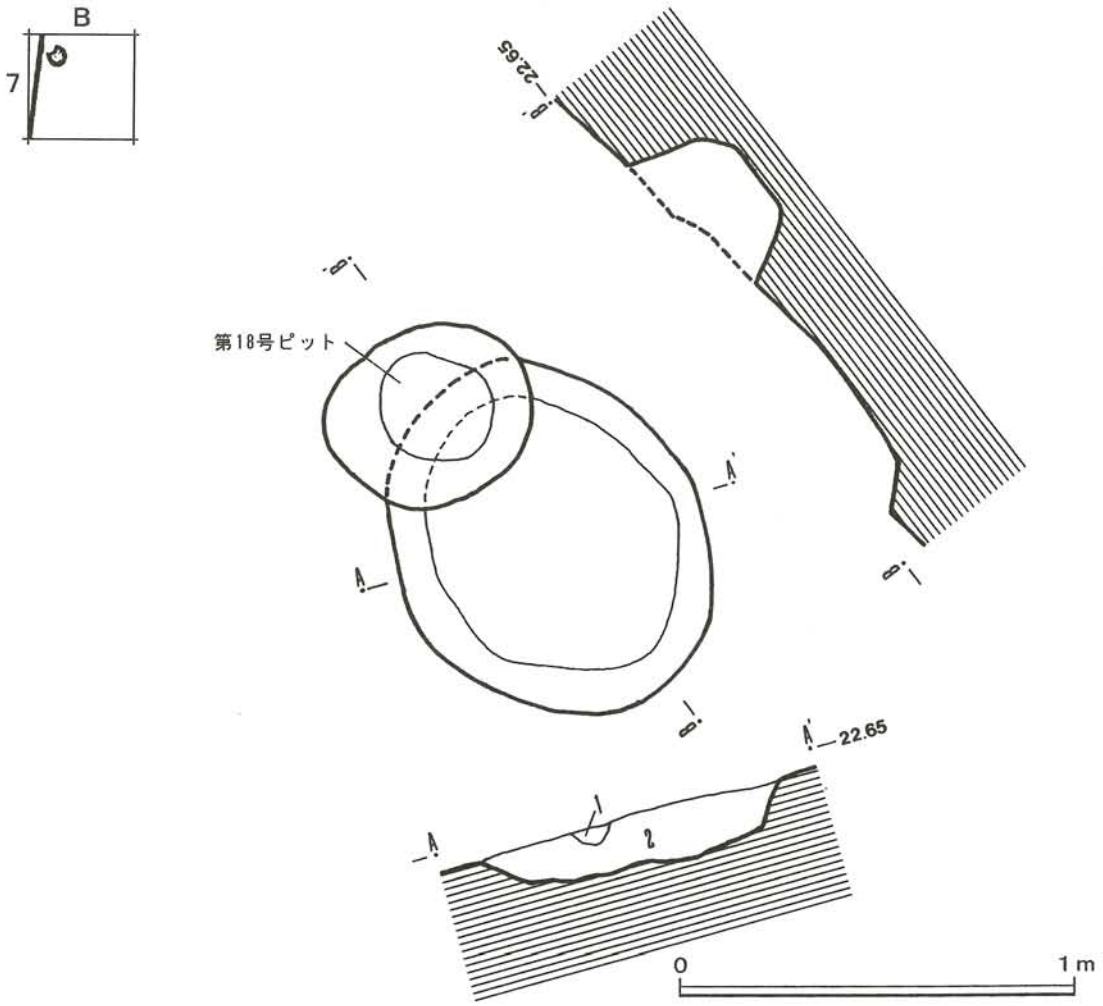
遺物は確認されなかった。

第17号土坑

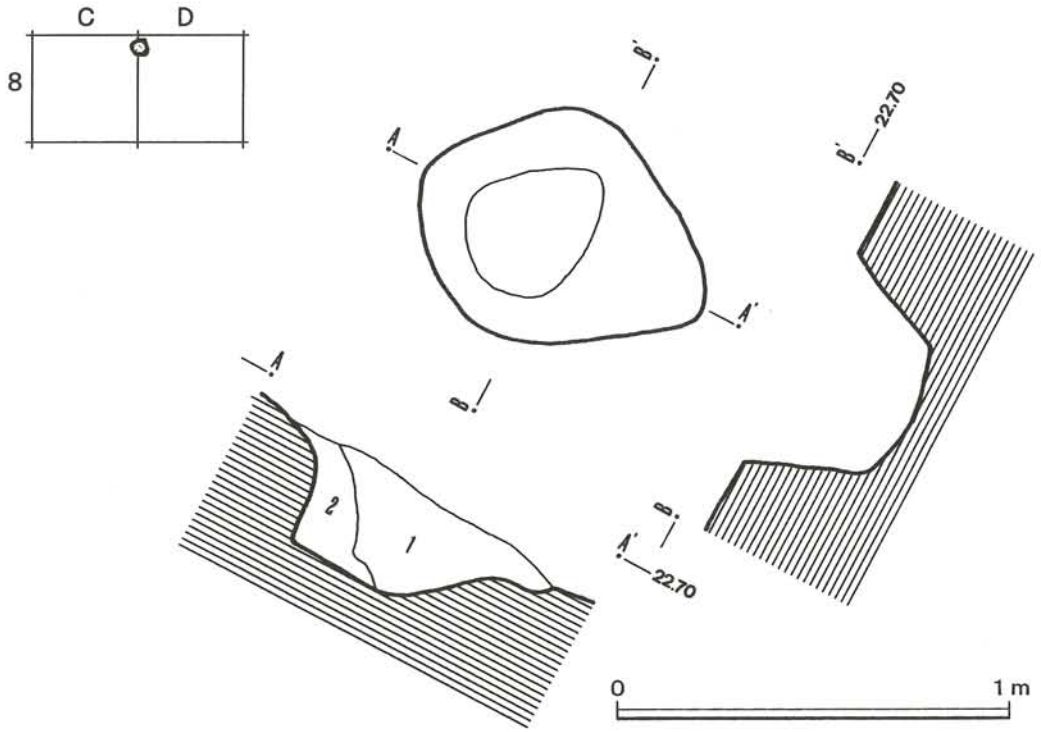
Ｂ－10～Ｃ－10グリッド内に位置し、北東部を第５号土坑に切られているが平面形状は隅丸三角形と思われる。長さ 144cm、最大幅 106cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-16°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が１層で締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－50　第18号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－51　第19号土坑の平面および断面図

第18号土坑

Ｂ－７グリッド内に位置し、北西部を第18号ピットに切られているが平面形状は楕円形と思われる。長さは推定で95cm、最大幅78cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸の方向はN-38°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は２層に分けられ、第１層は黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。炭化物を少量含んでいる。第２層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径２～３cm大の礫を少量含んでいる。

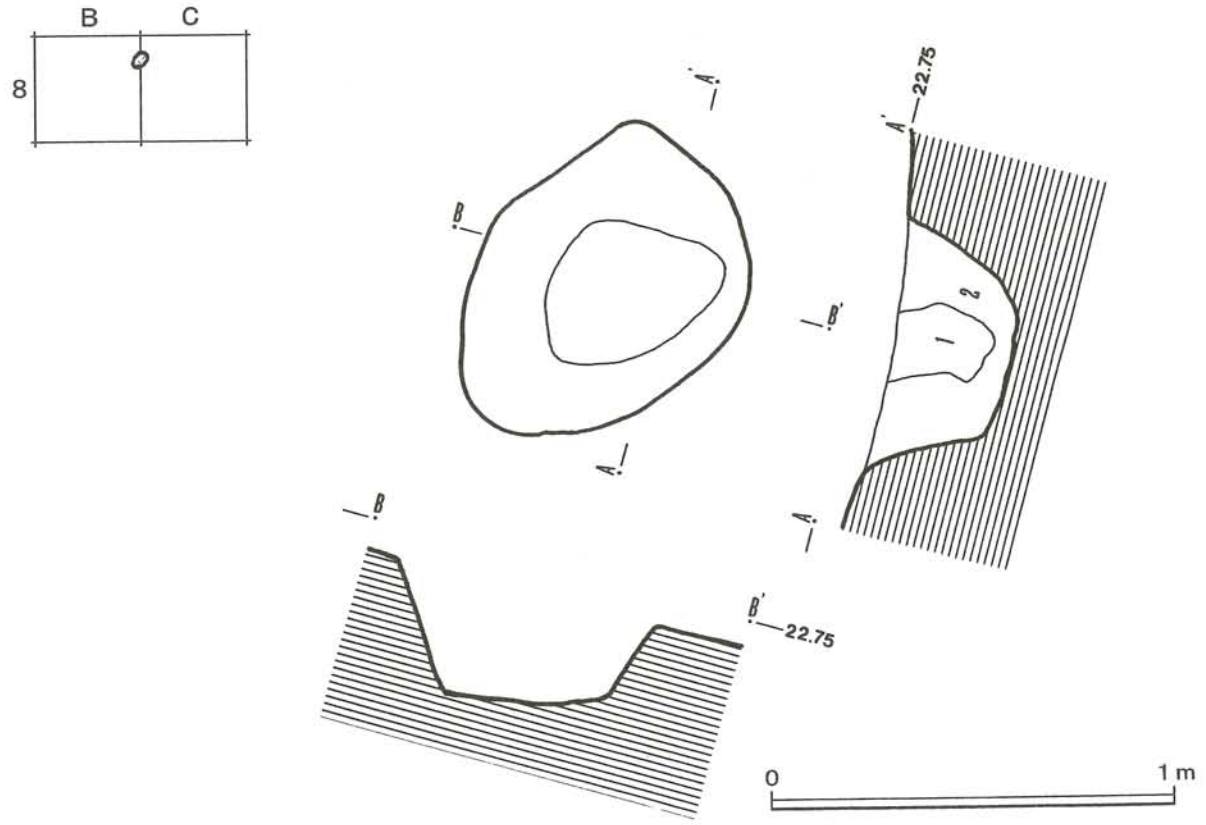
遺物は確認されなかった。

第19号土坑

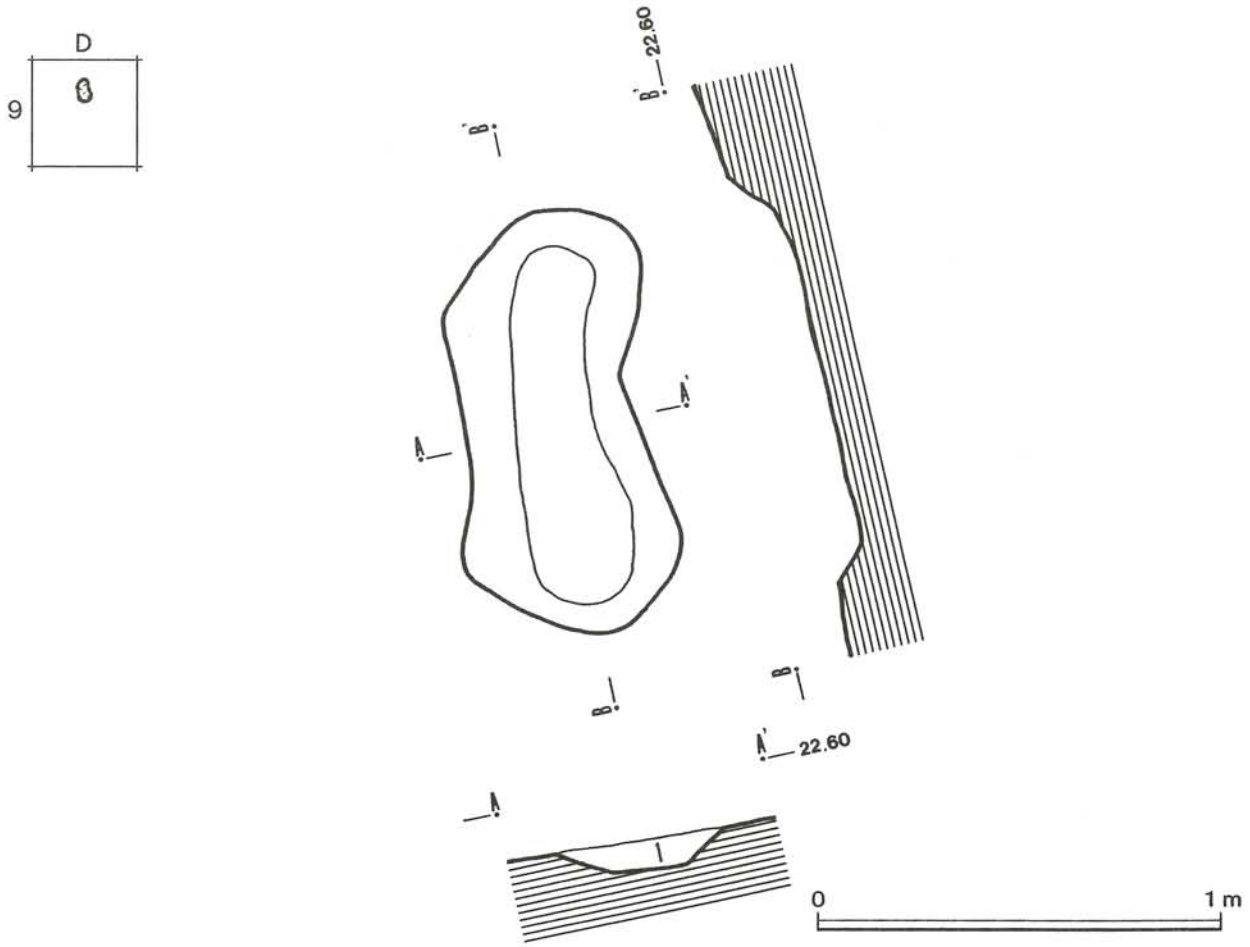
Ｃ－８～Ｄ－８グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径79cm、短径62cm、深さは最深部が29cmあり、長軸の方向はN-63°-W を指している。断面形状は上にやや開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強く、径３～８cm大の礫を多く含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。第２層は黄褐色土で締り弱く、粘性強い。径２～３cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－52　第20号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－53　第21号土坑の平面および断面図

第20号土坑

Ｂ－８～Ｃ－８グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径83cm、短径61cm、深さは最深部が30cmあり、長軸の方向はN-51°-E を指している。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径２～３cm大の礫を少量含み、黄灰色土のブロックをやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径２～４cm大の礫を少量含んでいる。

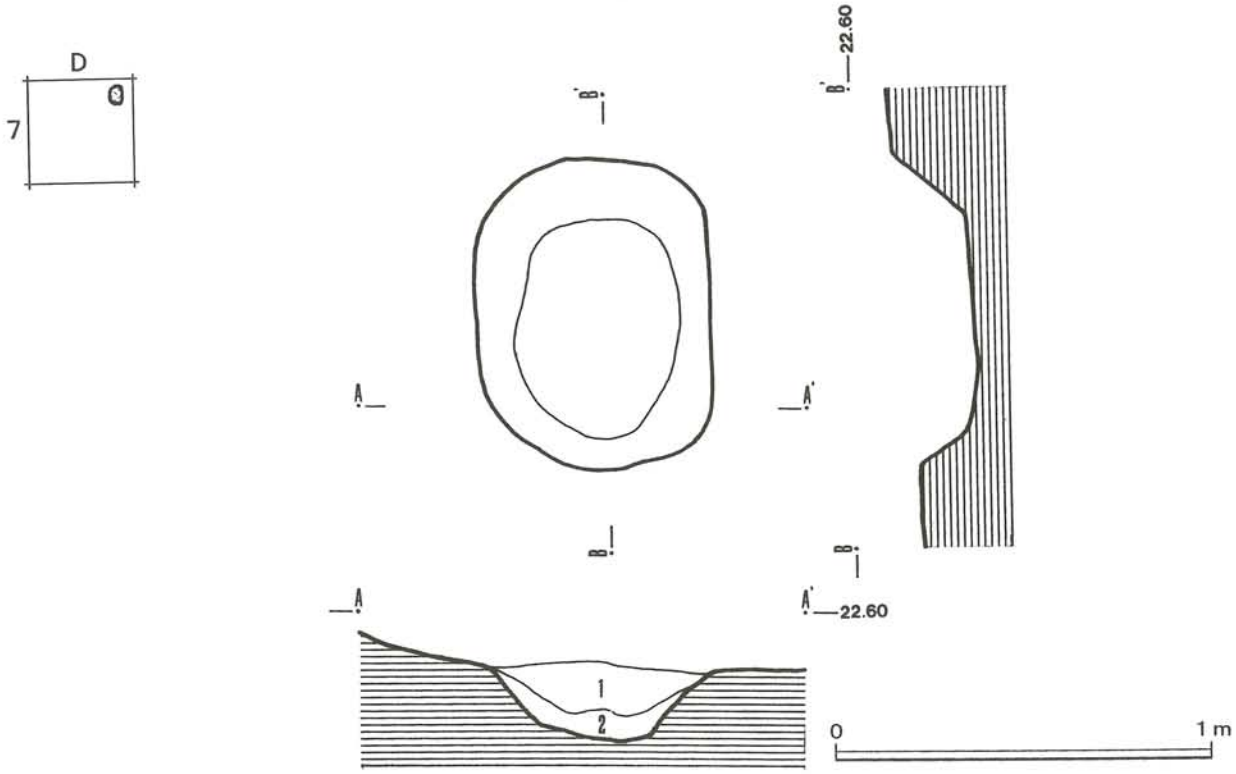
遺物は確認されなかった。

第21号土坑

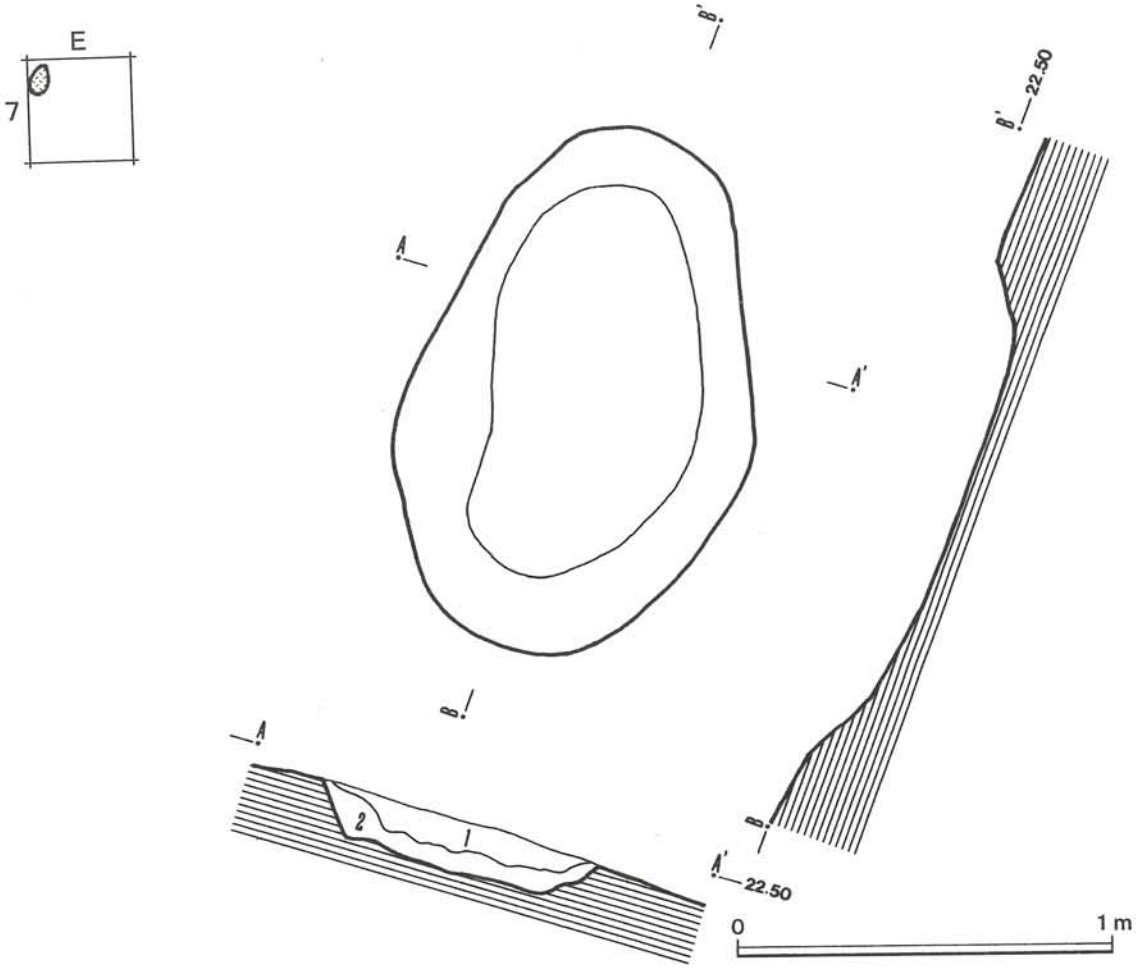
Ｄ－９グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 106cm、最大幅53cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-7°-E を指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒色土が１層で、締りも粘性もやや弱く、径 0.5～８cm大の礫を含み、炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－54　第22号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－55　第23号土坑の平面および断面図

第22号土坑

Ｄ－７グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ82㎝、最大幅62㎝、深さは最深部が20㎝あり、長軸の方向はN－2°－W を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5～８㎝大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径 0.5 ～４㎝大の礫をやや多く含んでいる。

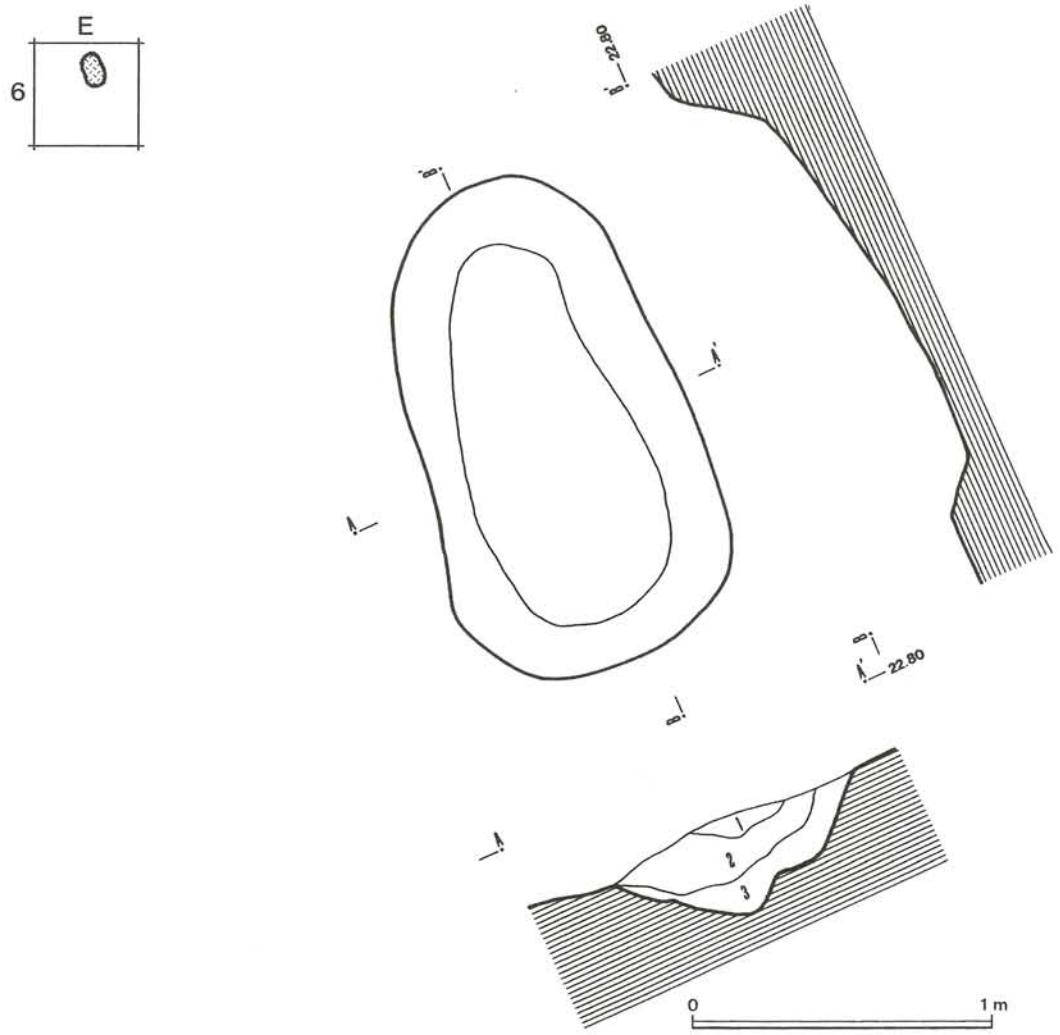
遺物は確認されなかった。

第23号土坑

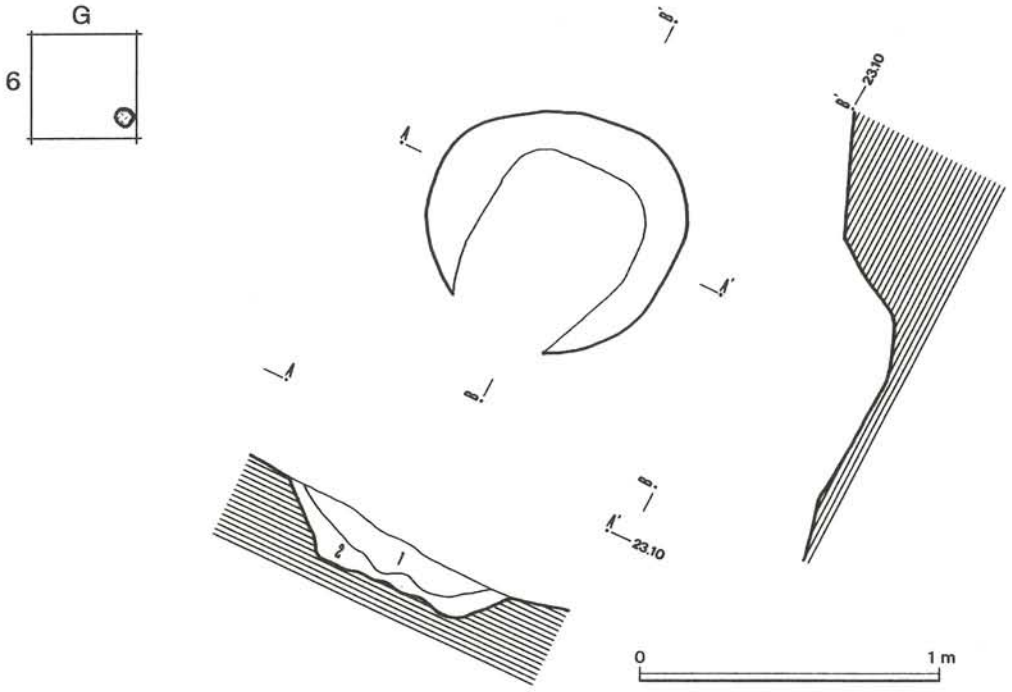
Ｅ－７グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 142㎝、最大幅92㎝、深さは最深部が15㎝と浅く、長軸の方向はN-21°－E を指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～10㎝大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径１～６㎝大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－４－56　第24号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－57　第25号土坑の平面および断面図

第24号土坑

Ｅ－６グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ 164cm、最大幅97cm、深さは最深部が34cmあり、長軸の方向はN-24°-W を指している。断面形状は丸底のＶ字形を呈し、東側には深さが20cm程度の小さな段がみられる。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径１～３cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は黒褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5～４cm大の礫を少量含んでいる。第３層は暗黄褐色土で締りも粘性も強く、径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。

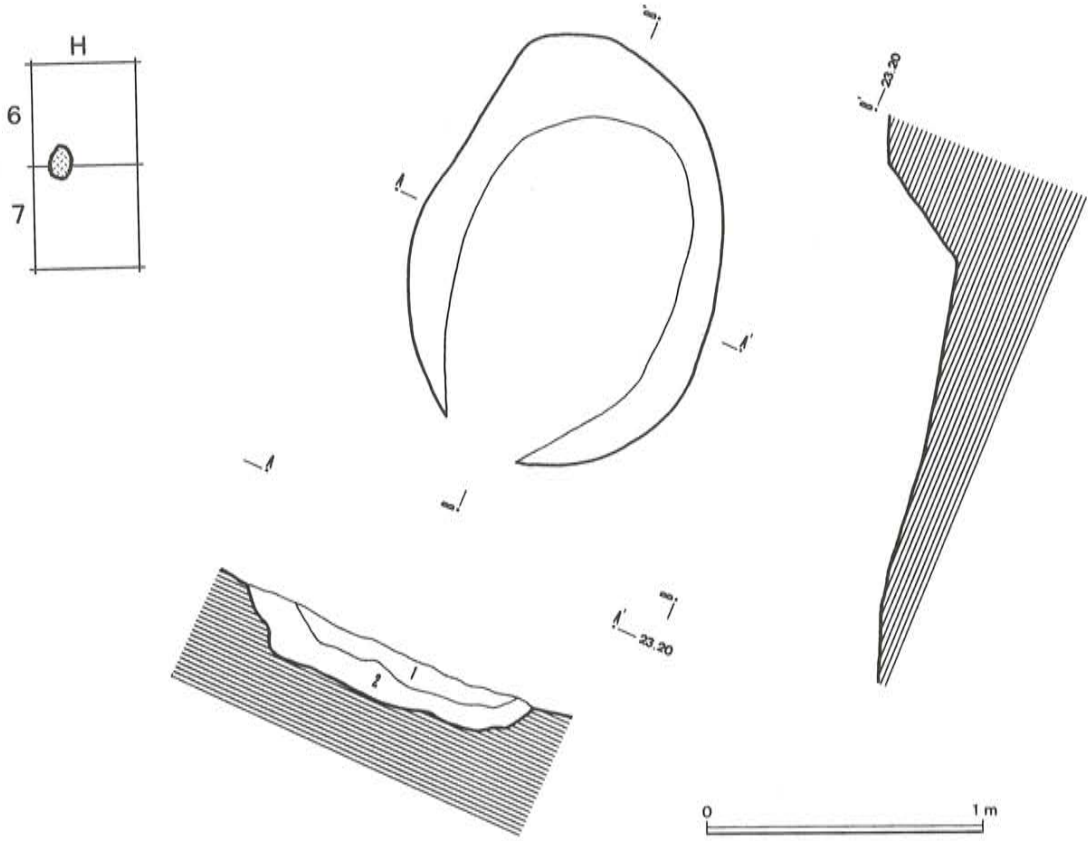
遺物は確認されなかった。

第25号土坑

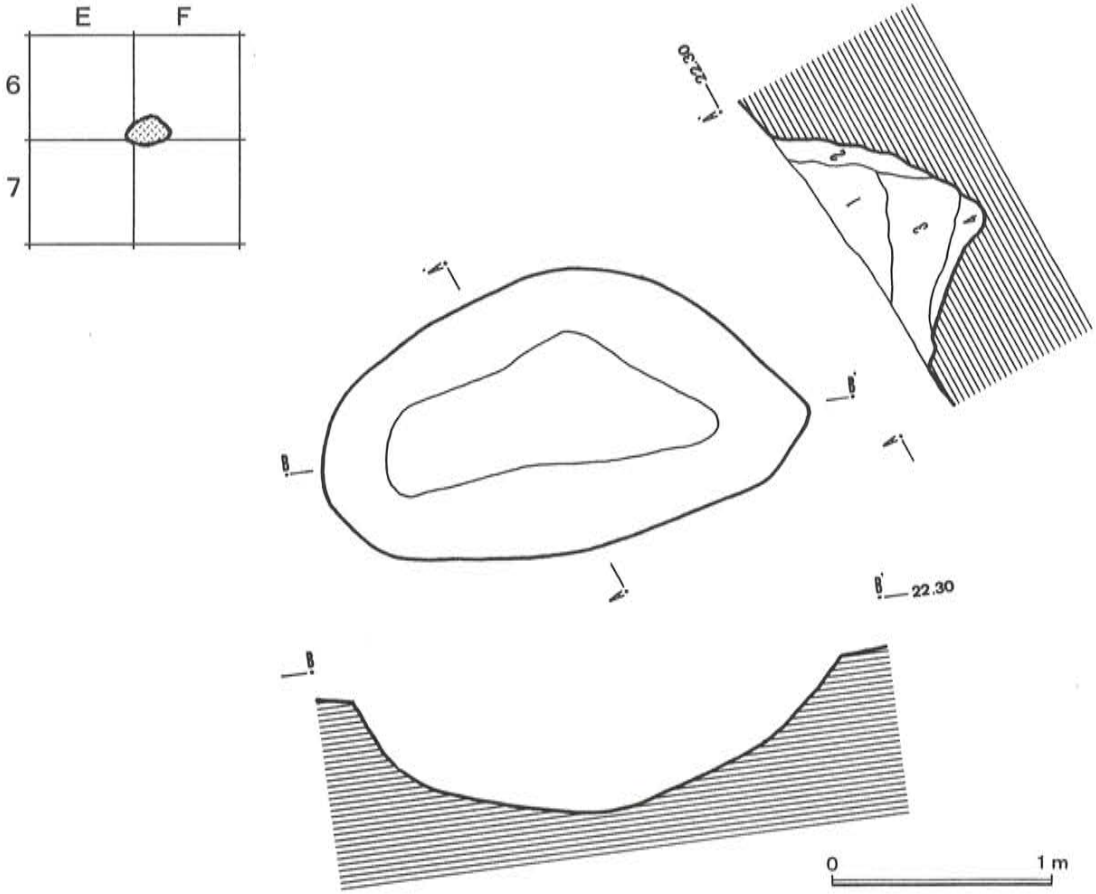
Ｇ－６グリッド内に位置し、南向きの斜面上にあるために南西部が削平されている。平面形状は円形と思われる。長径84cm、短径80cm、深さは最深部が19cmあり、長軸の方向はN-64°-W を指している。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.3～８cm大の礫を多く含み、黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りはやや弱く粘性はやや強い。径 0.3～６cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－58　第26号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－59　第27号土坑の平面および断面図

第26号土坑

Ｈ－６～７グリッド内に位置し、南向きの斜面上にあるために南西部が削平されている。平面形状は楕円形で、長さ 155cm、最大幅 111cm、深さは最深部が28cmあり、長軸の方向はN-12°-E を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.3～５cm大の礫と黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第２層は黄褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。

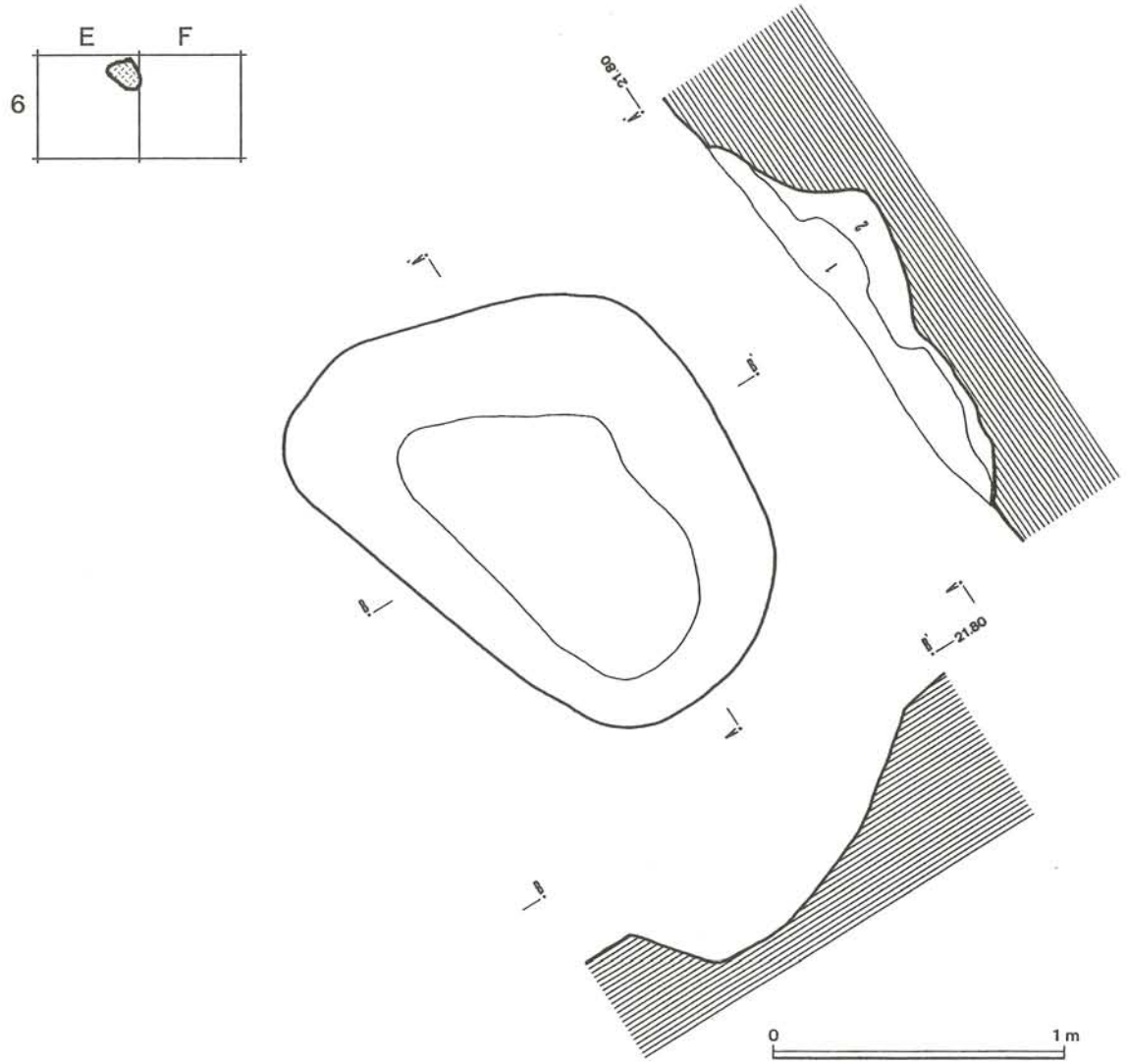
遺物は確認されなかった。

第27号土坑

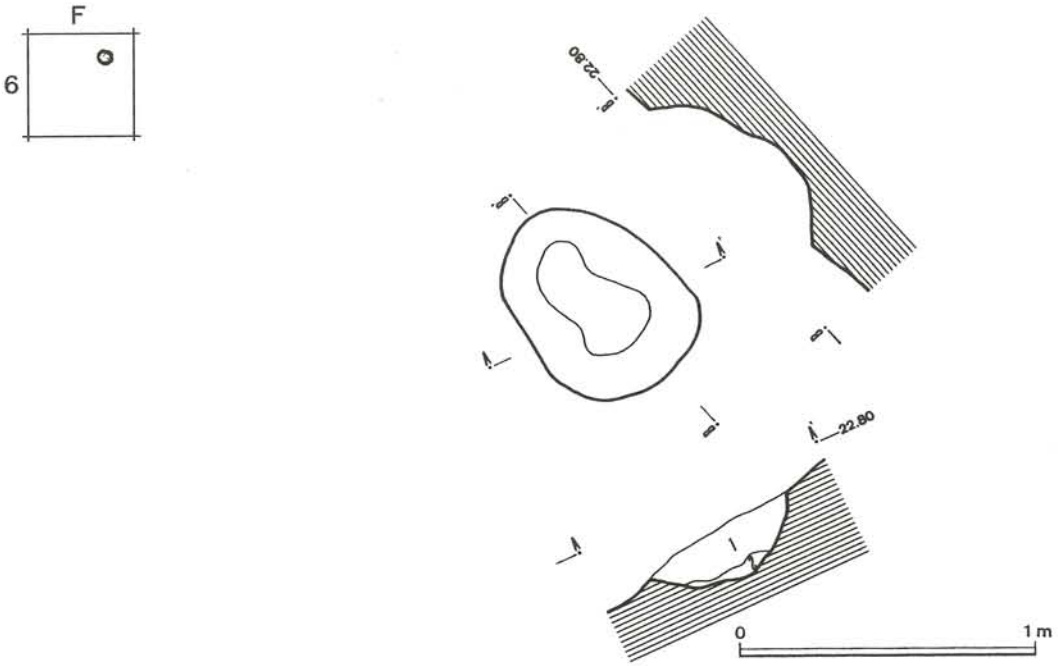
Ｅ～Ｆ－６～７グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ219cm、最大幅122cm、深さは最深部が60cmと深く、長軸の方向はN-83°-E を指している。断面形状はＶ字形を呈している。

覆土は４層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。第２層は黒褐色土で締りも粘性も強く、径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。第３層は黒褐色土で締りも粘性も強く、径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。第４層は暗褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5～３cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は土坑の壁面から土師器の細片が１点出土している。



図Ⅳ－３－60　第28号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－61　第29号土坑の平面および断面図

第28号土坑

Ｅ－６～Ｆ－６グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ147cm、最大幅122cm、深さは最深部が34cmあり、長軸の方向はN-52°-W を指している。断面形状は丸底状を呈し、南側には深さが20cmの段がみられる。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性は強い。径１～３cm大の礫を多く含んでいる。第２層は暗褐色土で締りも粘性も強く、径１～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

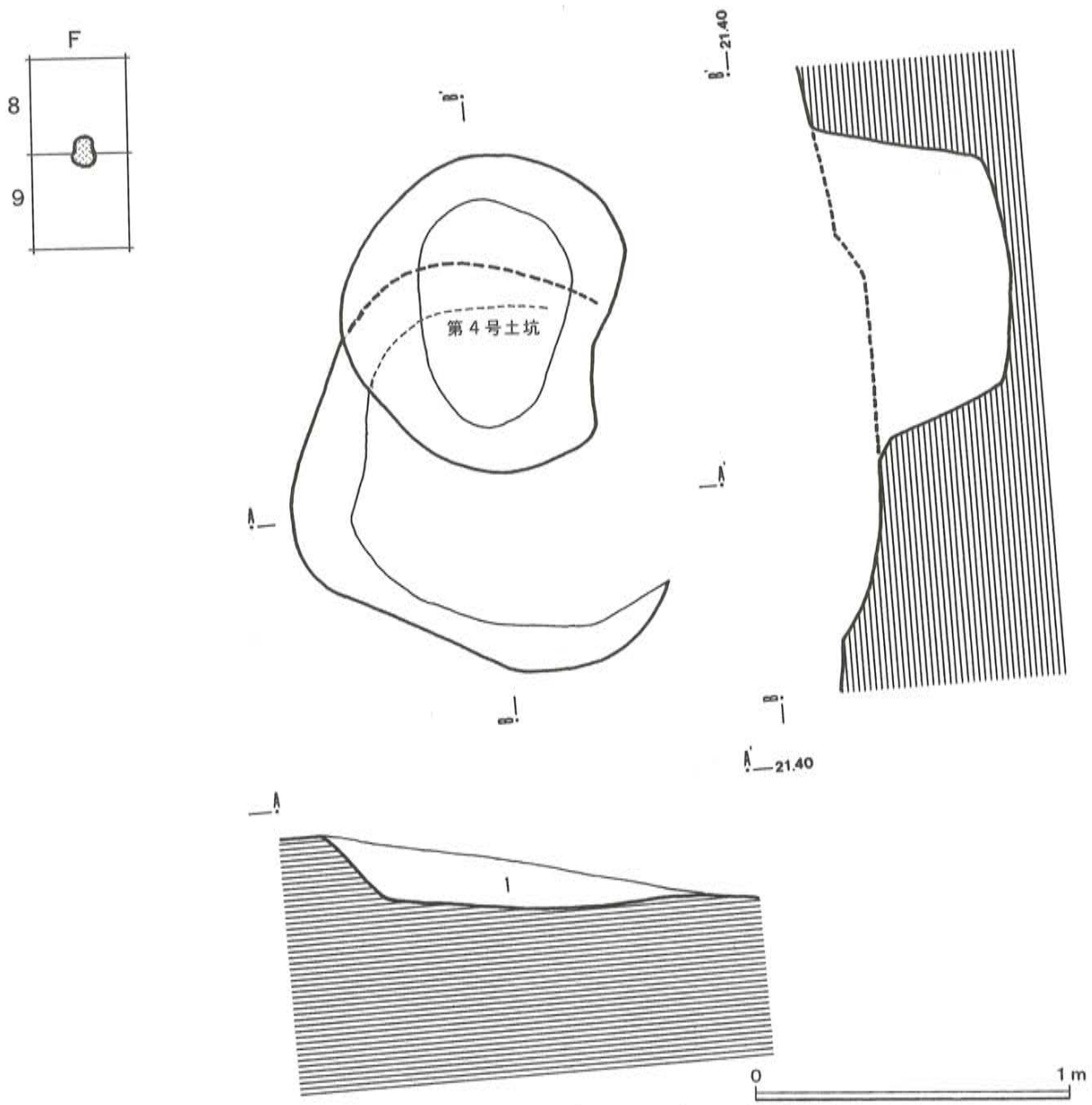
遺物は確認されなかった。

第29号土坑

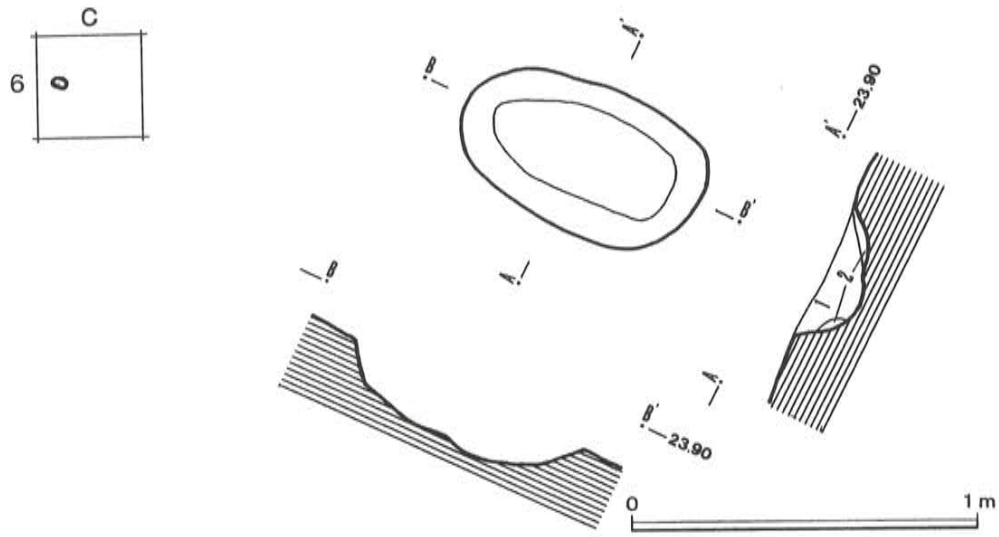
Ｆ－６グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ71cm、最大幅55cm、深さは最深部が19cmと浅く、長軸の方向はN-42°-W を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径 0.5～６cm大の礫と黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第２層は黄褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5～２cm大の礫を少量含み、黄褐色土の小さなブロックを多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－62　第30号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－63　第31号土坑の平面および断面図

第30号土坑

Ｆ－８～９グリッド内に位置し、東側は削平され、北側は第４号土壙墓によって切られている。平面形状は不整円形と思われ、長さは推定で140㎝、幅も推定で120㎝、深さは最深部が18㎝と浅い。断面形状は定かではないが底面は東側に緩やかに傾斜し、皿状を呈している。

覆土は黒色土が１層で締りも粘性もやや弱く、径 0.5～２㎝大の礫を少量含んでいる。

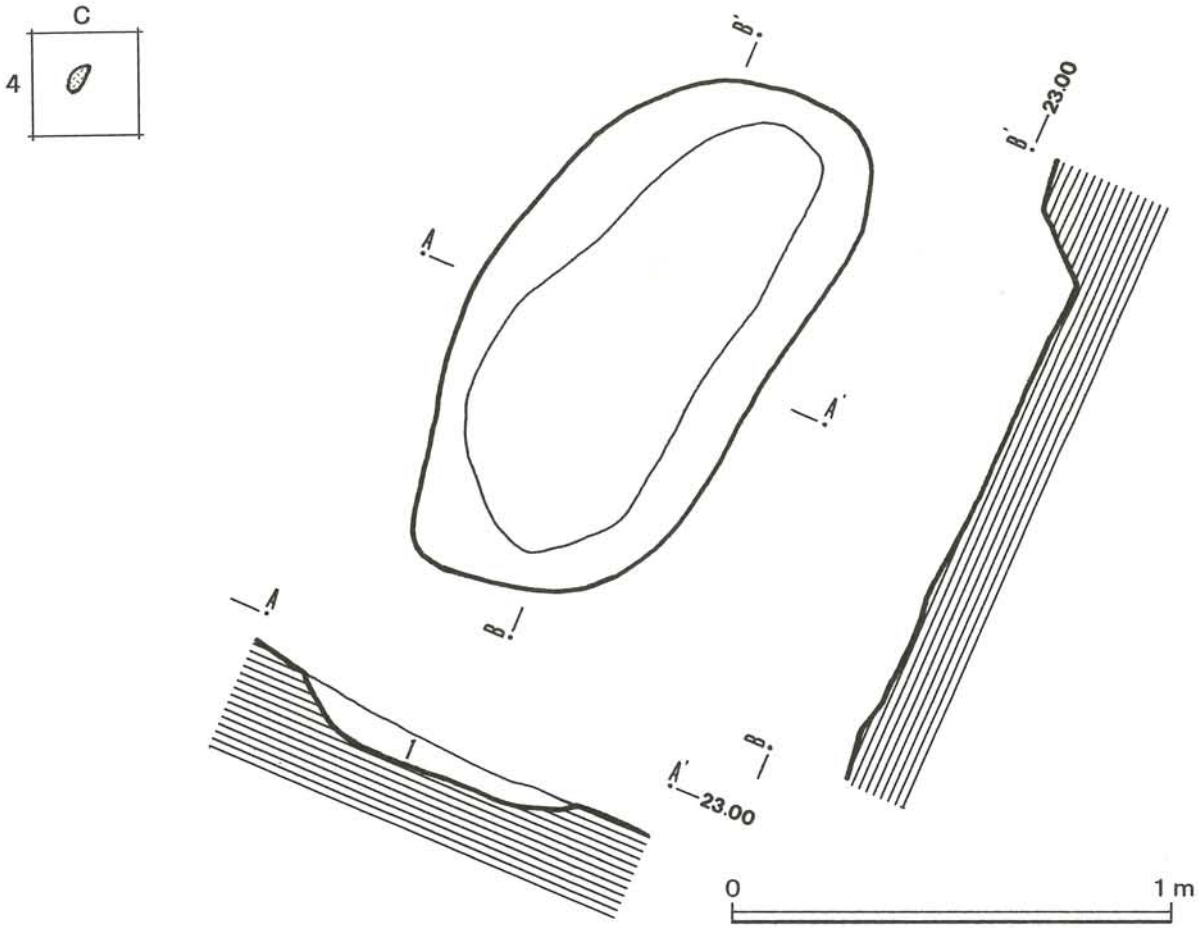
遺物は確認されなかった。

第31号土坑

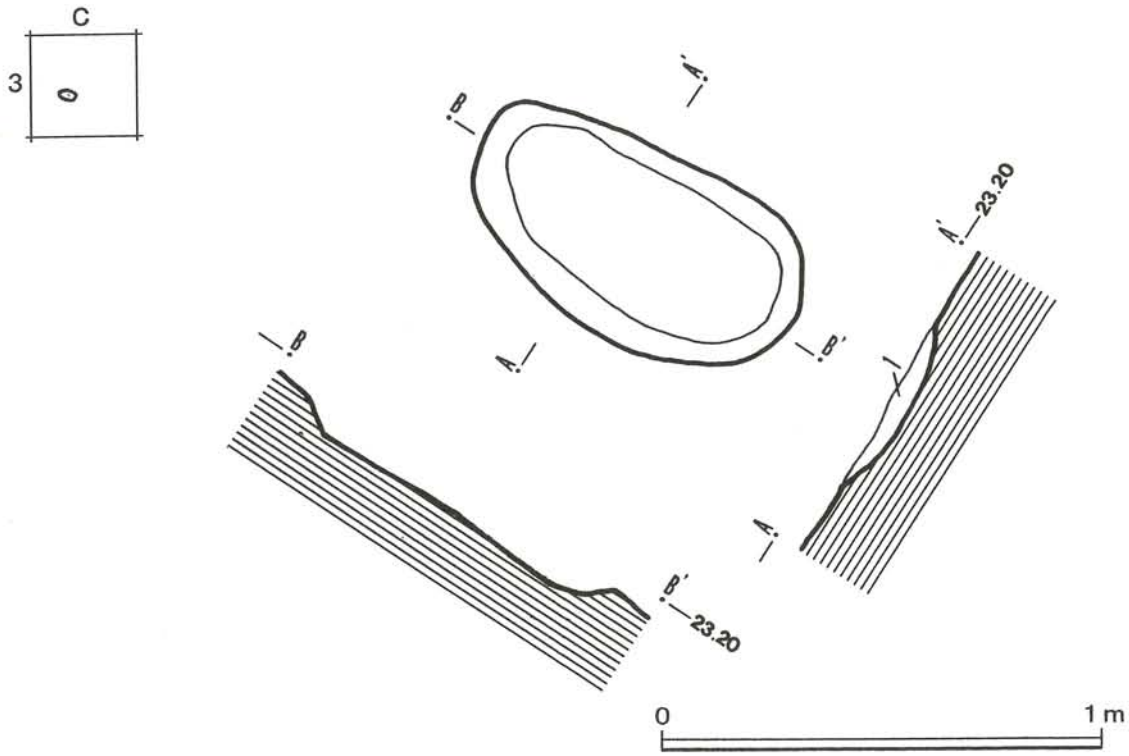
Ｃ－６グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ72㎝、最大幅43㎝、深さは最深部が16㎝と浅く、長軸の方向はN-65°-W を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～２㎝大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で、締りは強く、粘性はやや弱い。径 0.5～２㎝大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－64　第32号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－65　第33号土坑の平面および断面図

第32号土坑

Ｃ－４グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 135cm、最大幅69cm、深さは最深部が13cmと浅く、長軸の方向はN-27°-E を指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。

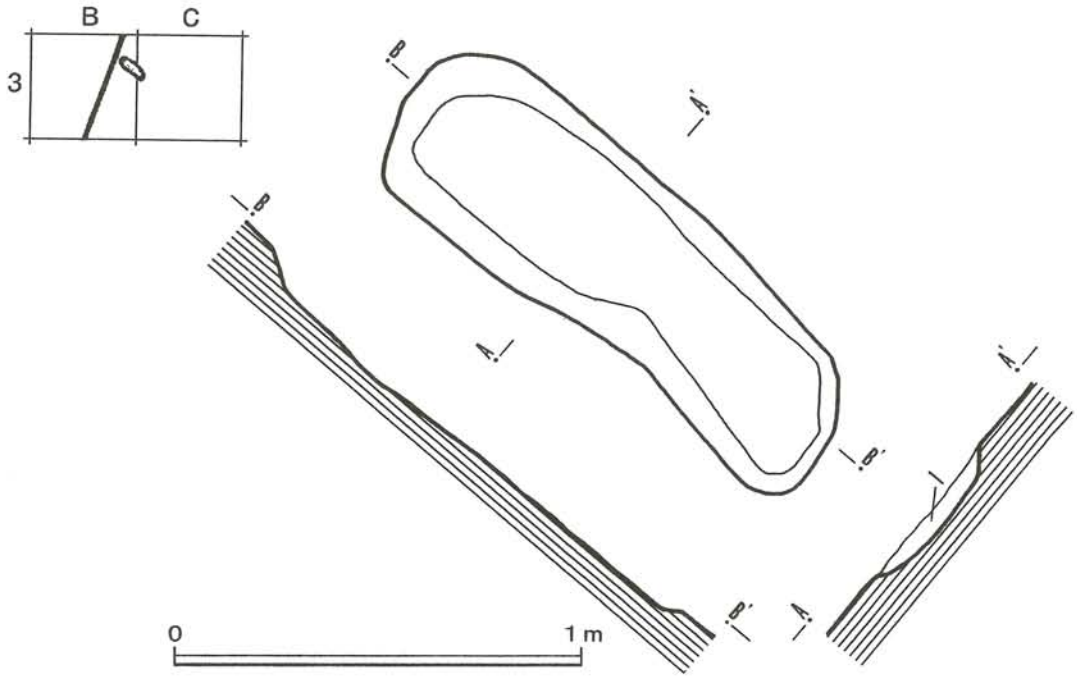
遺物は確認されなかった。

第33号土坑

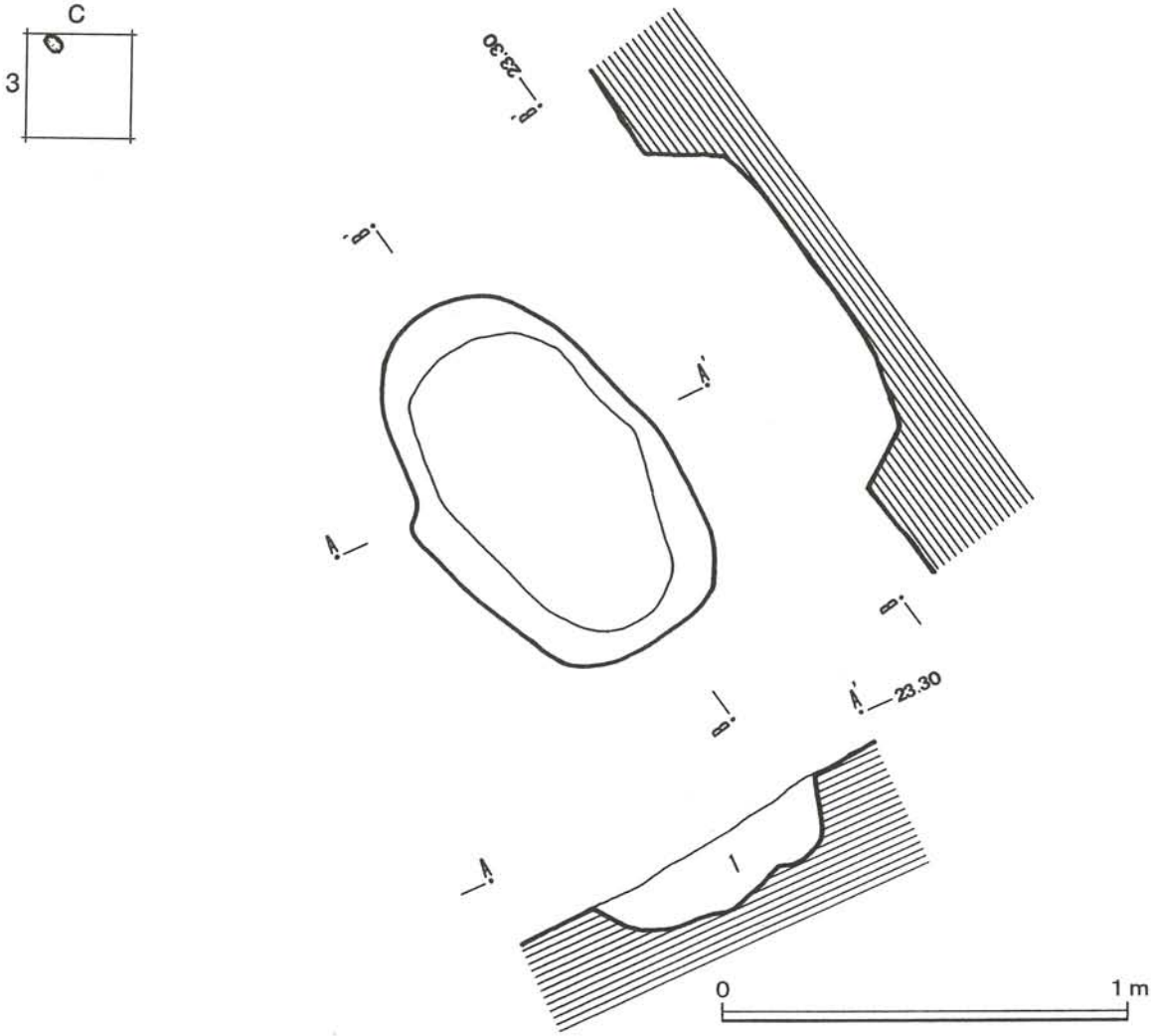
Ｃ－３グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ82cm、最大幅44cm、深さは最深部が６cmと浅く、長軸の方向はN-59°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径１cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－66　第34号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－67　第35号土坑の平面および断面図

第34号土坑

Ｂ－３～Ｃ－３グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、長さ 134cm、最大幅45cm、深さは最深部が６cmと浅く、長軸の方向はN-49°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。黄褐色土のブロック・炭化物を少量含んでいる。

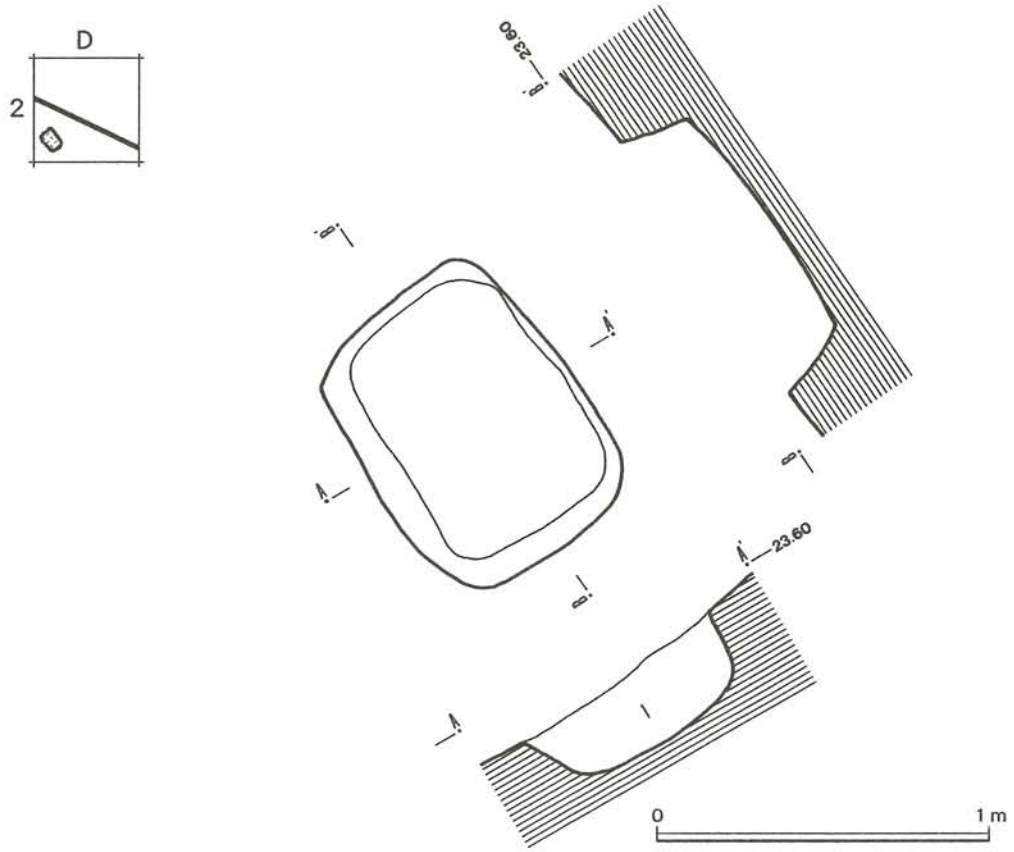
遺物は確認されなかった。

第35号土坑

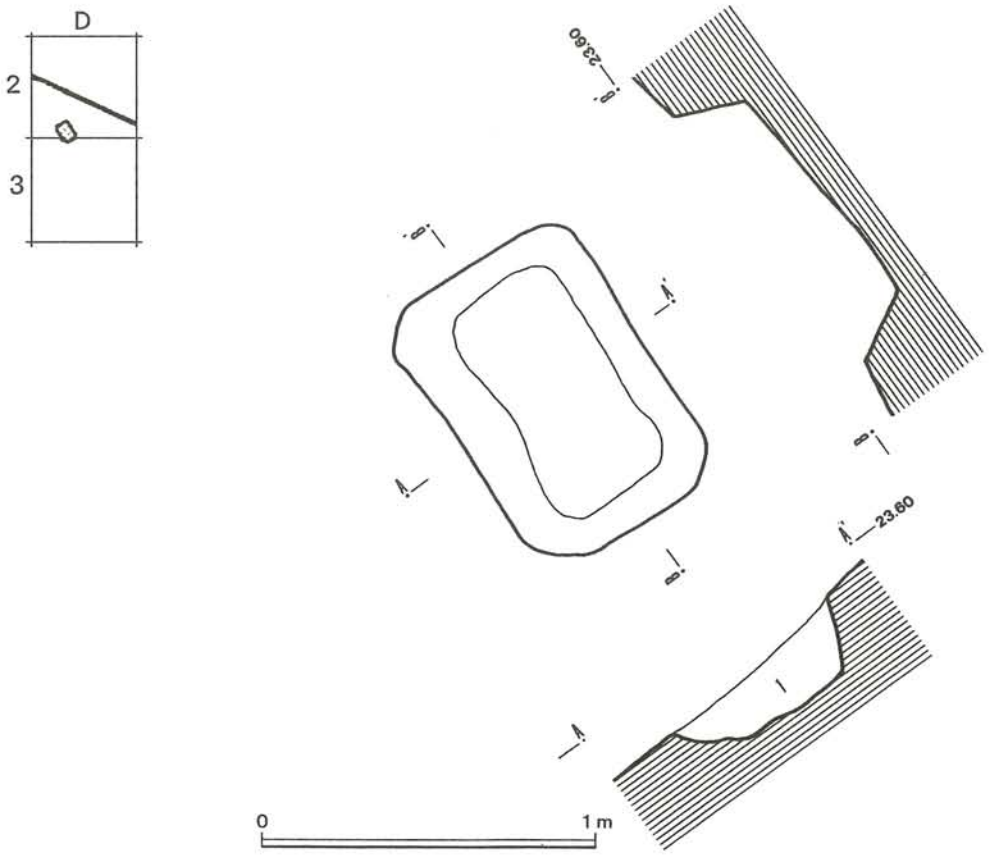
Ｃ－３グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ99cm、最大幅63cm、深さは最深部が21cmあり、長軸の方向はN-36°-W を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

覆土は黒褐色土が１層で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径１～４cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－68　第36号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－69　第37号土坑の平面および断面図

第36号土坑

Ｄ－２グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、長さ91cm、最大幅69cm、深さは最深部が25cmあり、長軸の方向はN-35°-W を指している。断面形状はＵ字形を呈しているが、南西側の壁面はやや緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が１層で、締りも粘性も弱く、黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

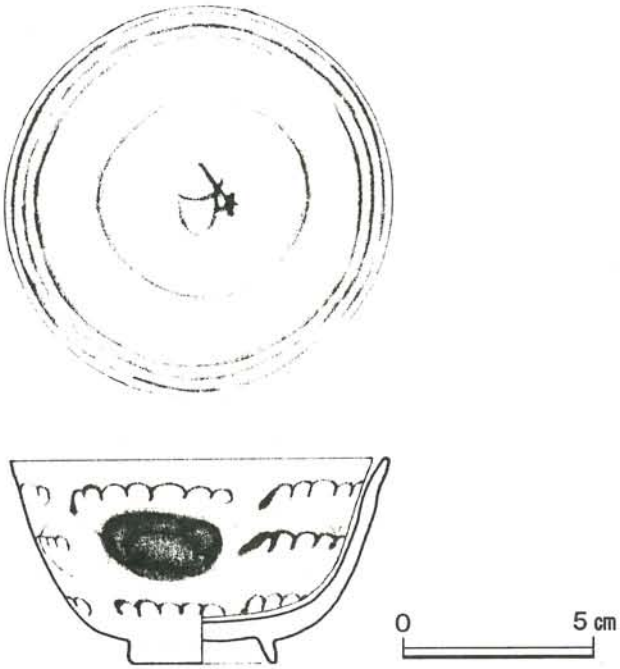
遺物は底面と覆土の下位から土器の細片が２点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。

第37号土坑

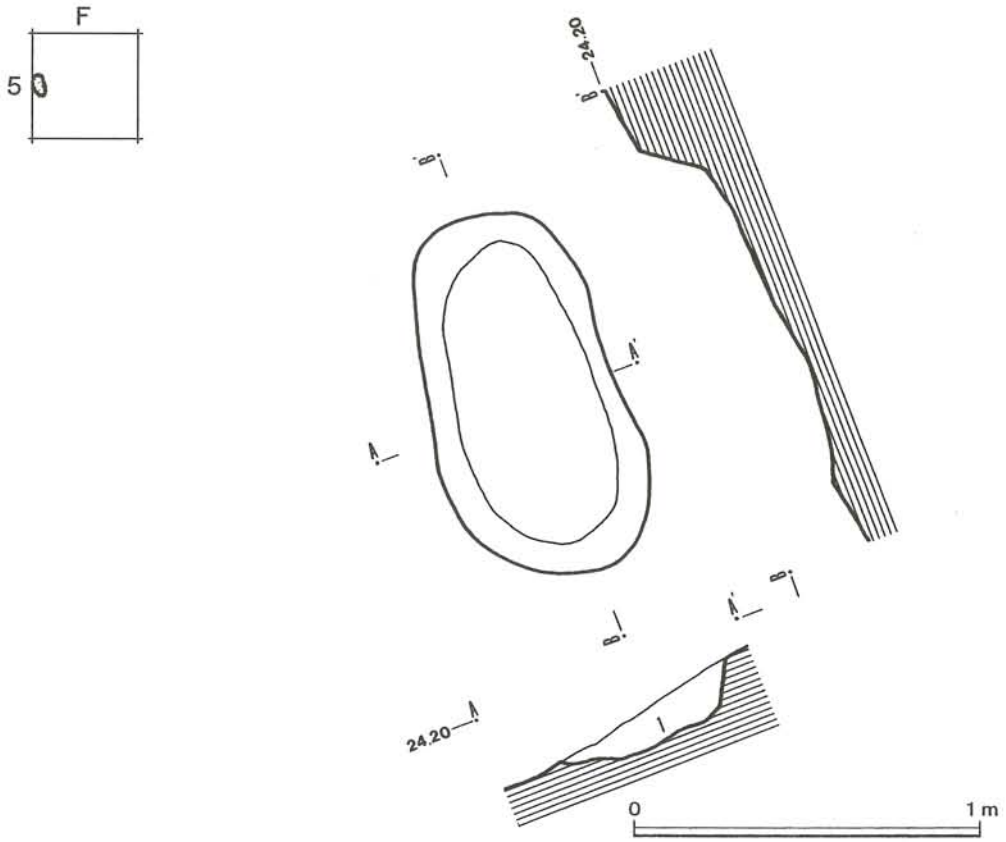
Ｄ－２～３グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、長さ93cm、最大幅64cm、深さは最深部が23cmあり、長軸の方向はN-38°-W を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈しているが、南西側の壁面はやや緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が１層で、締りも粘性も弱く、黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

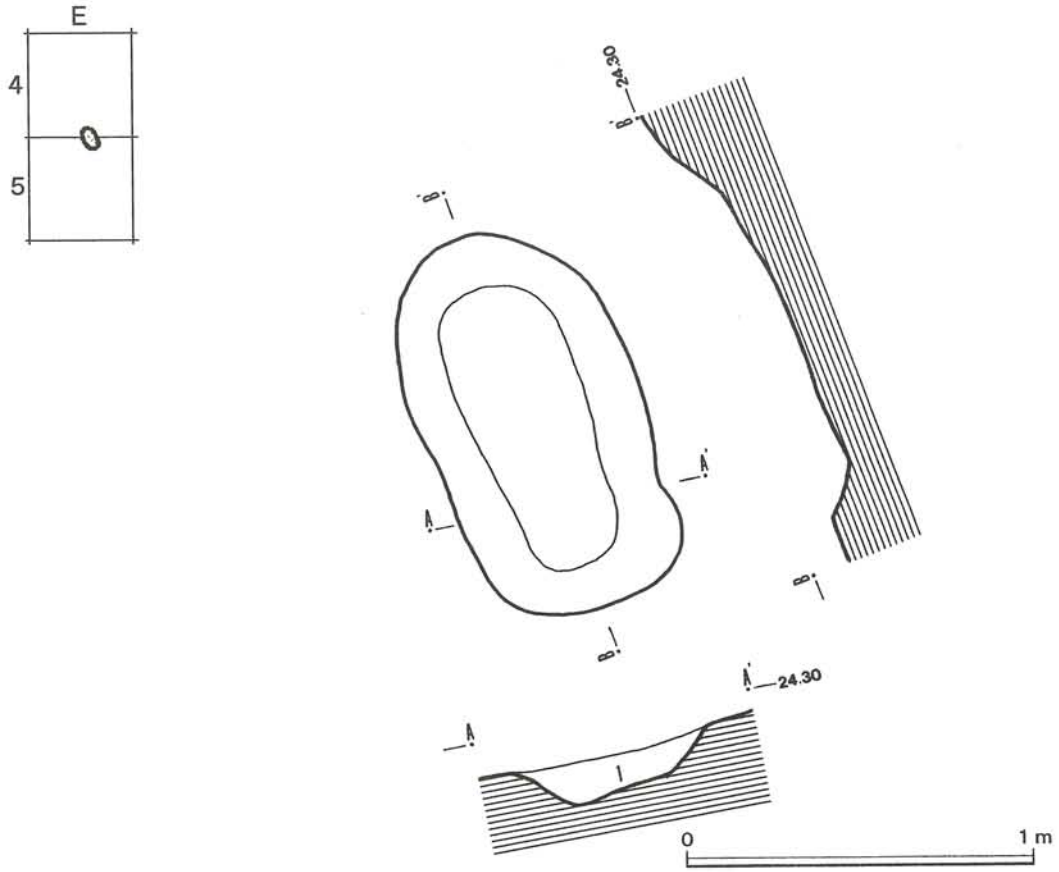
遺物は覆土の下位で南西側の壁面から陶器(遺物No.219) が１点出土している。



図Ⅳ－３－70　第37号土坑から出土した陶器(遺物No.219)



図Ⅳ－３－71　第38号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－72　第39号土坑の平面および断面図

第38号土坑

Ｆ－５グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ 104cm、最大幅58cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸の方向はN-22°-W を指している。南西方向に削平されているため断面形状は定かではないが、上に広く開くＵ字形を呈していると思われる。

覆土は暗褐色土が１層で、締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5～８cm大の礫を含み、炭化物を少量含んでいる。

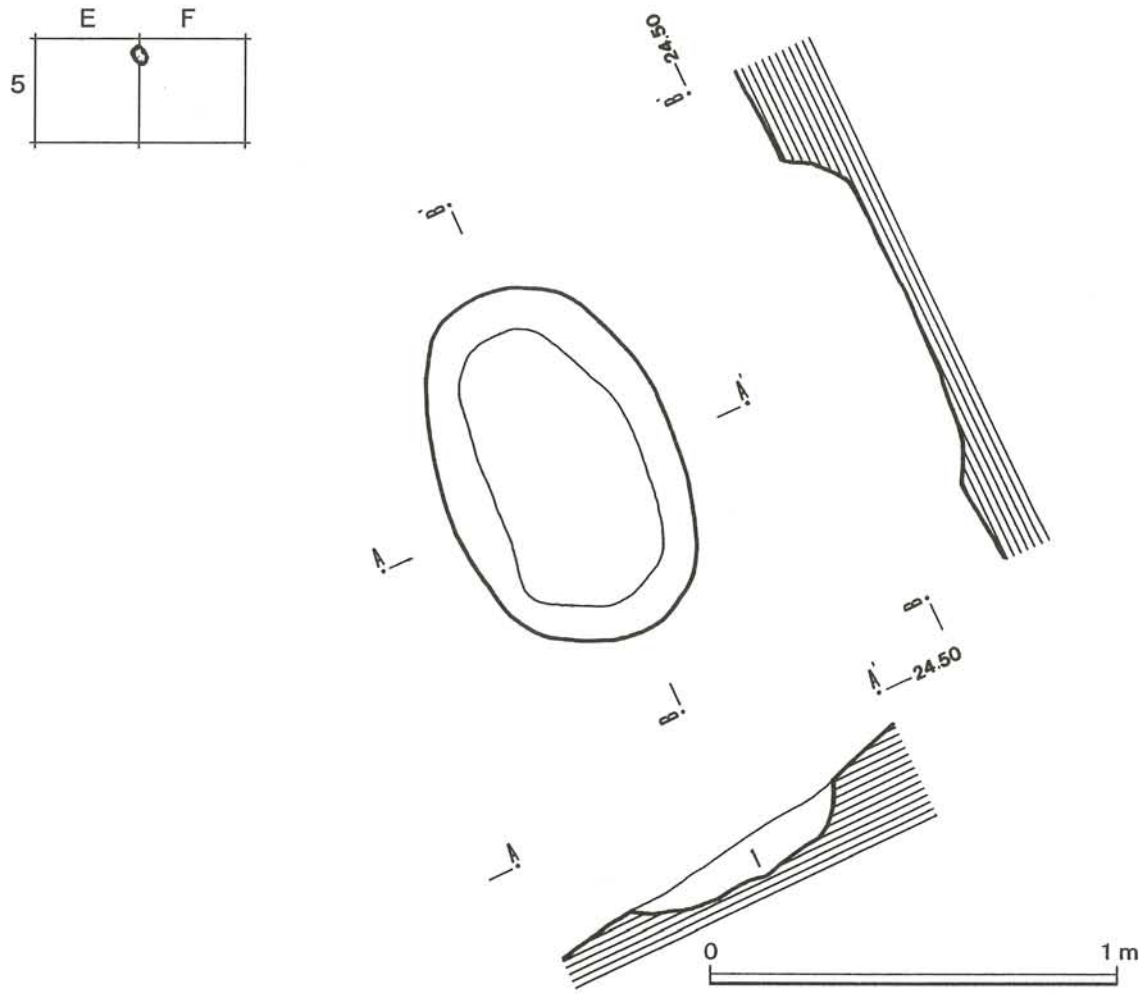
遺物は確認されなかった。

第39号土坑

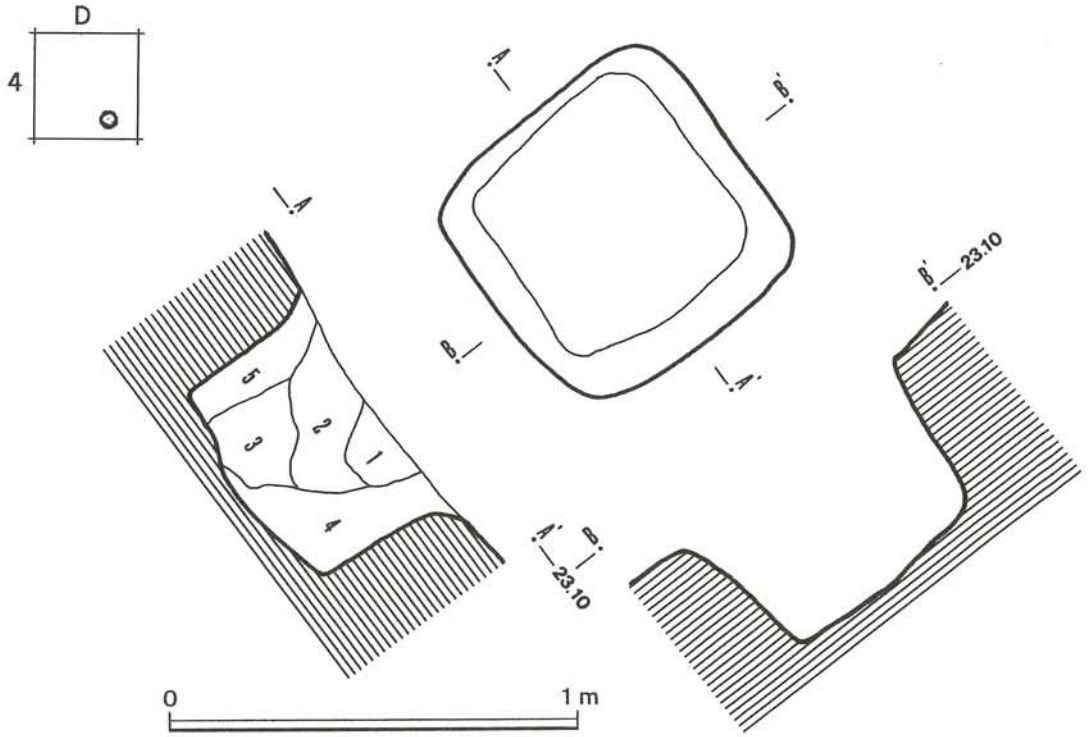
Ｅ－４～５グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ 113cm、最大幅64cm、深さは最深部が13cmと浅く、長軸の方向はN-20°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、上に広く開くＵ字形を呈していると思われる。

覆土は暗褐色土が１層で、締りも粘性はやや強く、径 0.5～４cm大の礫を含んでいる。

遺物は底面近くから土器の細片が２点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。



図Ⅳ－３－73　第40号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－74　第41号土坑の平面および断面図

第40号土坑

Ｅ－５～Ｆ－５グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ92cm、最大幅59cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-26°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は暗褐色土が１層で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。

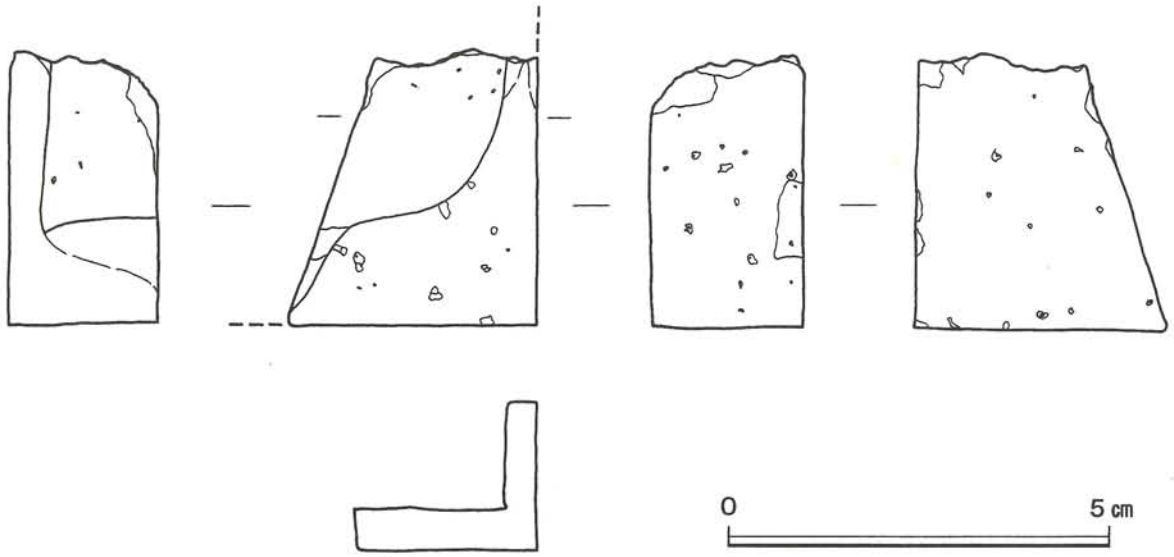
遺物は確認されなかった。

第41号土坑

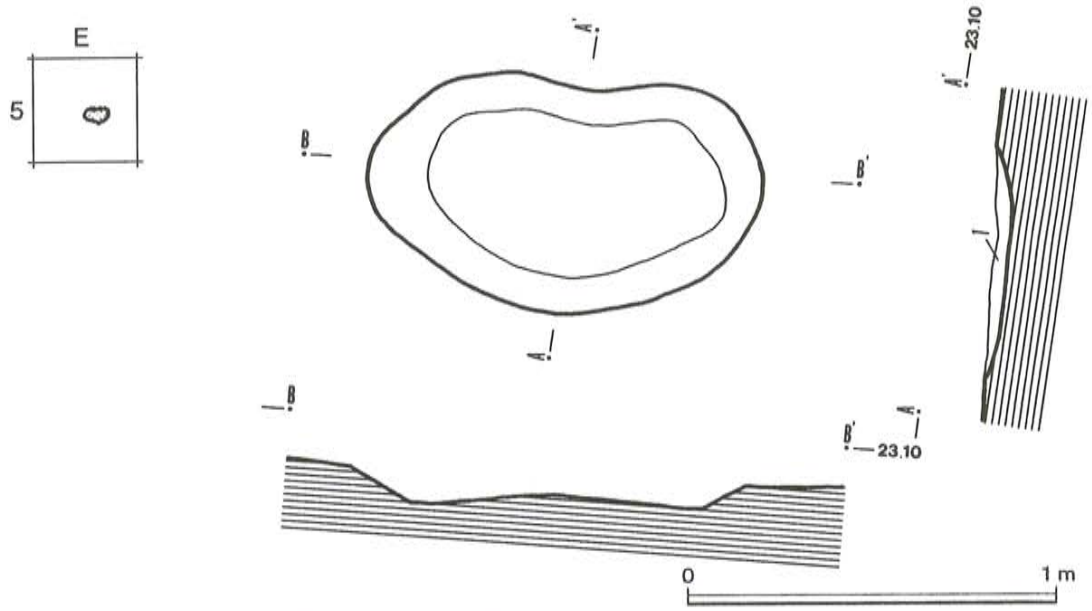
Ｄ－４グリッド内に位置し、平面形状は隅丸正方形で、長さ70cm、幅70cm、深さは最深部が40cmと深い。断面形状はＵ字形を呈している。

覆土は５層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。第２層は暗褐色土で、締りも粘性もやや弱い。黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。第３層は暗黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。黄褐色土のブロックを多く含んでいる。第４層は暗黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。黄褐色土の小さなブロックを多く含んでいる。第５層は黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。暗褐色土の小さなブロックを多く含んでいる。

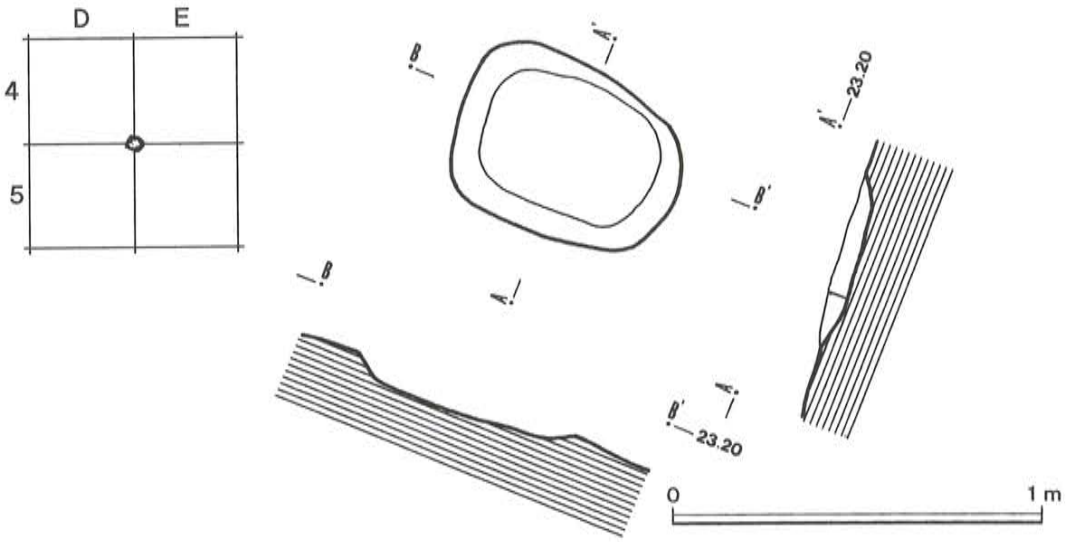
遺物は覆土中(第２層)から石製品の破片(遺物No.221) が１点出土しているが、品種・用途などは不明である。



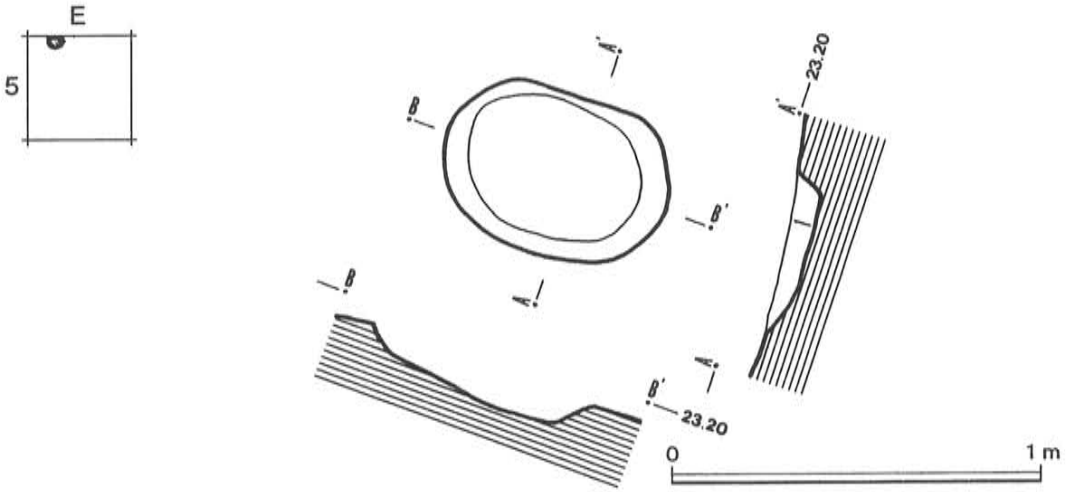
図Ⅳ－３－75　第41号土坑から出土した石製品の破片(遺物No.221)



図Ⅳ－３－76　第42号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－77　第43号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－78　第44号土坑の平面および断面図

第42号土坑

Ｅ－５グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 106cm、最大幅63cm、深さは最深部が９cmと浅く、長軸の方向はN-86°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性はやや弱い。径１～４cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第43号土坑

Ｄ－４～５、Ｅ－４～５グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ63cm、最大幅48cm、深さは最深部が６cmと浅く、長軸の方向はN-68°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒色土が１層で、締りはやや強く、粘性はやや弱い。径２cm大の礫を少量含んでいる。

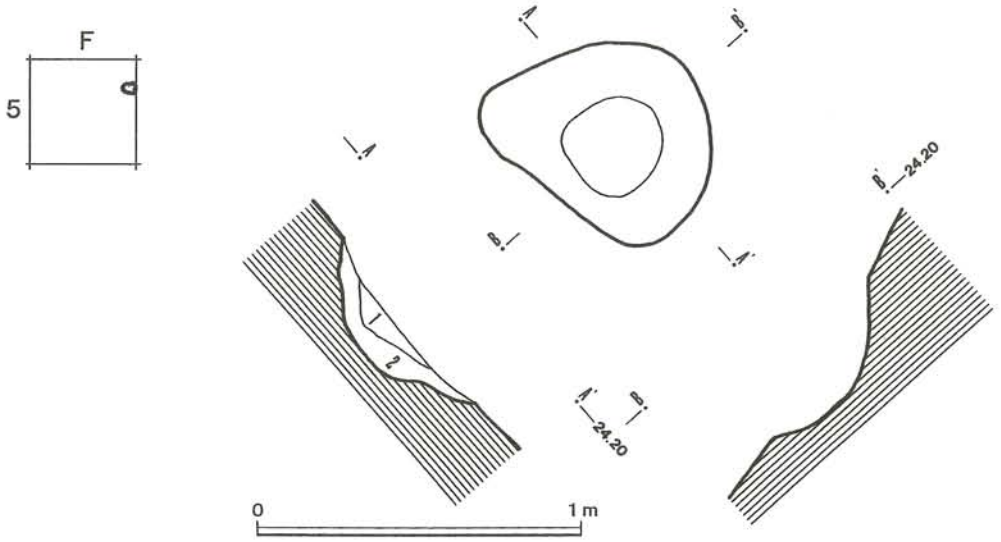
遺物は確認されなかった。

第44号土坑

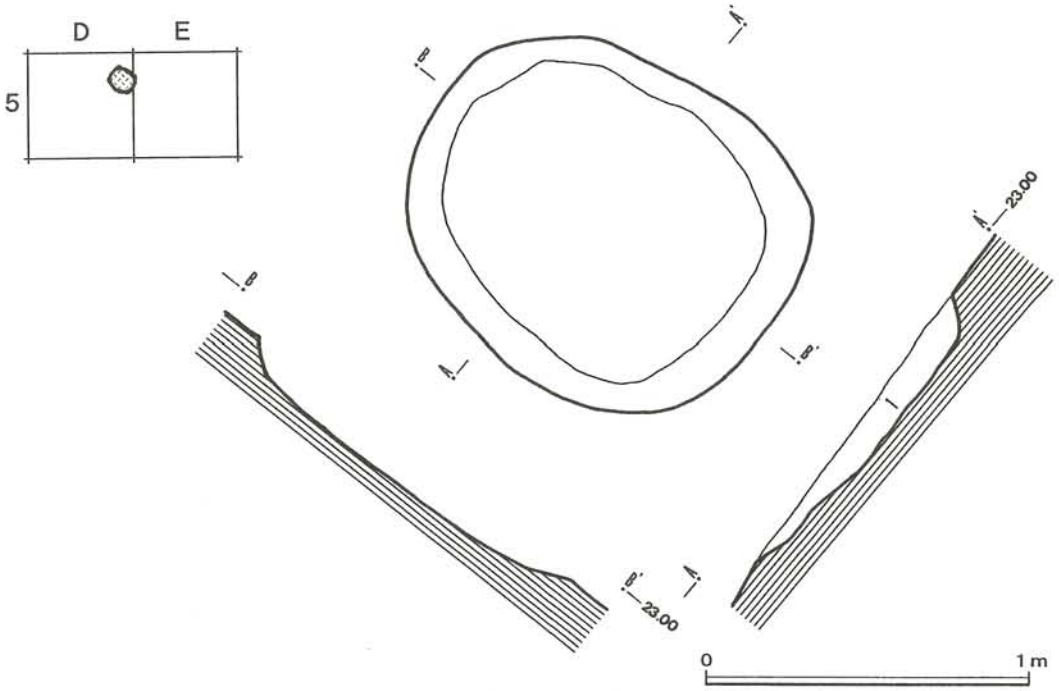
Ｅ－５グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ63cm、最大幅45cm、深さは最深部が10cmと浅く、長軸の方向はN-70°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒色土が１層で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径１～４cm大の礫を少量含んでいる。

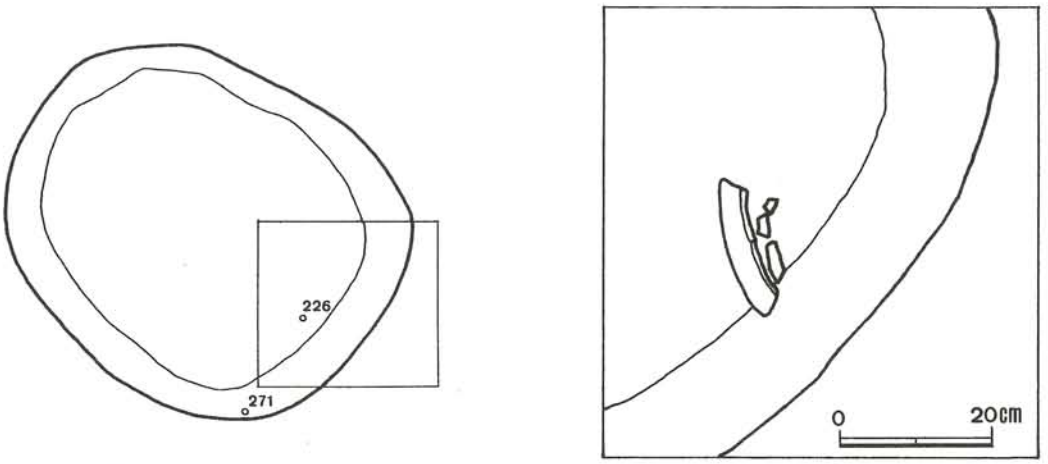
遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－79　第45号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－80　第46号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－81　第46号土坑の遺物（遺物No.226）の出土状況図

第45号土坑

Ｆ－５グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径73cm、短径60cm、深さは最深部が14cmと浅く、長軸の方向はN-78°-W を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で、締りは強く、粘性はやや弱い。径 0.5～５cm大の礫と黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第46号土坑

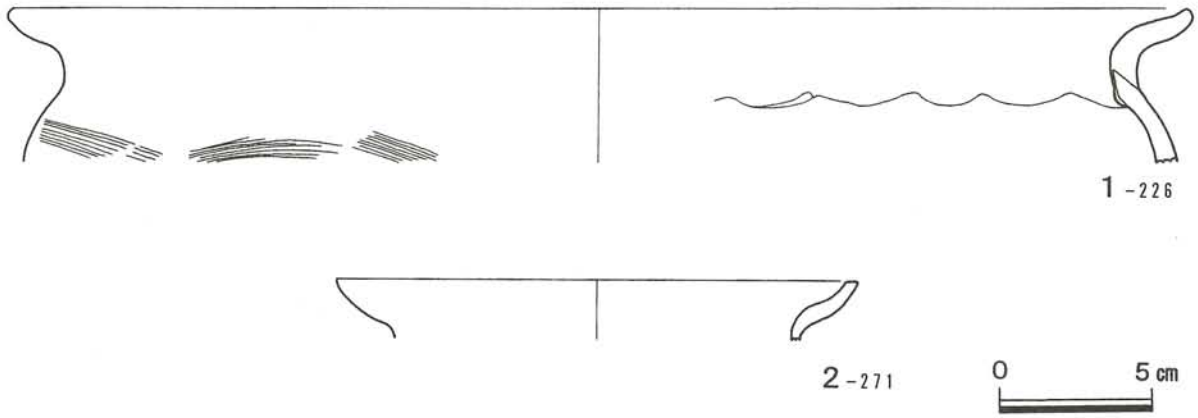
Ｄ－５～Ｅ－５グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ 123cm、最大幅 105cm、深さは最深部が10cmと浅く、長軸の方向はN-53°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が１層で締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5～８cm大の礫を少量含んでいる。

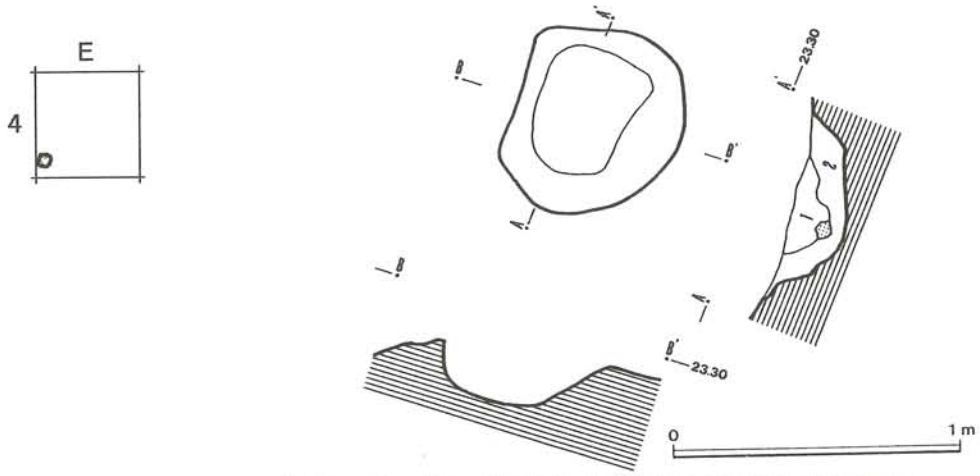
遺物は底面に近い覆土から土師器の口縁部の破片(遺物No.226、遺物No.271)が２点出土している。

１(遺物No.226) は甕型土器の口縁部から頸部にかけての破片で、推定口径が39cmある。頸部は「く」の字形に屈曲し、内面は接合により肥厚している。内・外面ともに横ナデ調整が施され、外面には黒斑状にススが付着している。

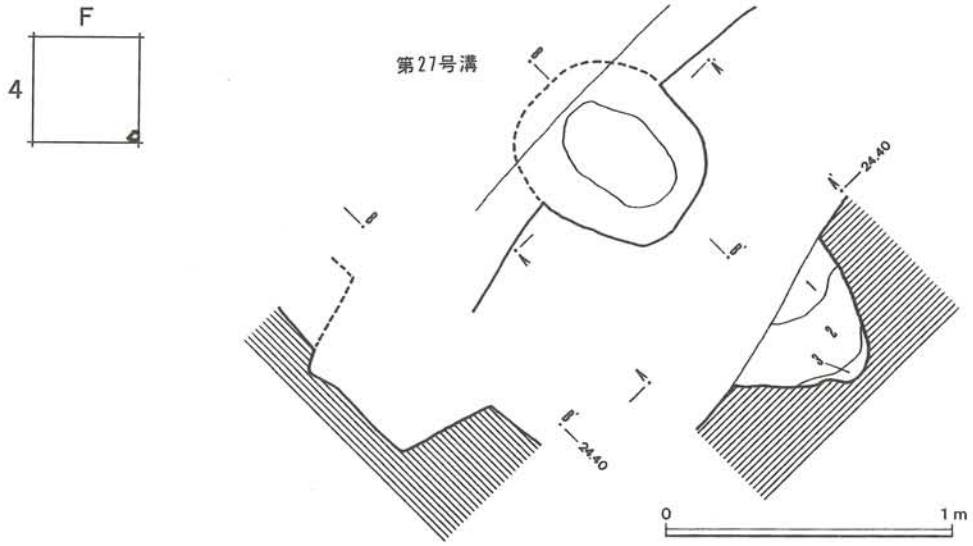
２(遺物No.271) も甕型土器の口縁部から頸部にかけての破片で、推定口径が17.2cmある。頸部は僅かに内湾しながら屈曲している。内・外面ともに刷毛目と横ナデ調整が施されている。



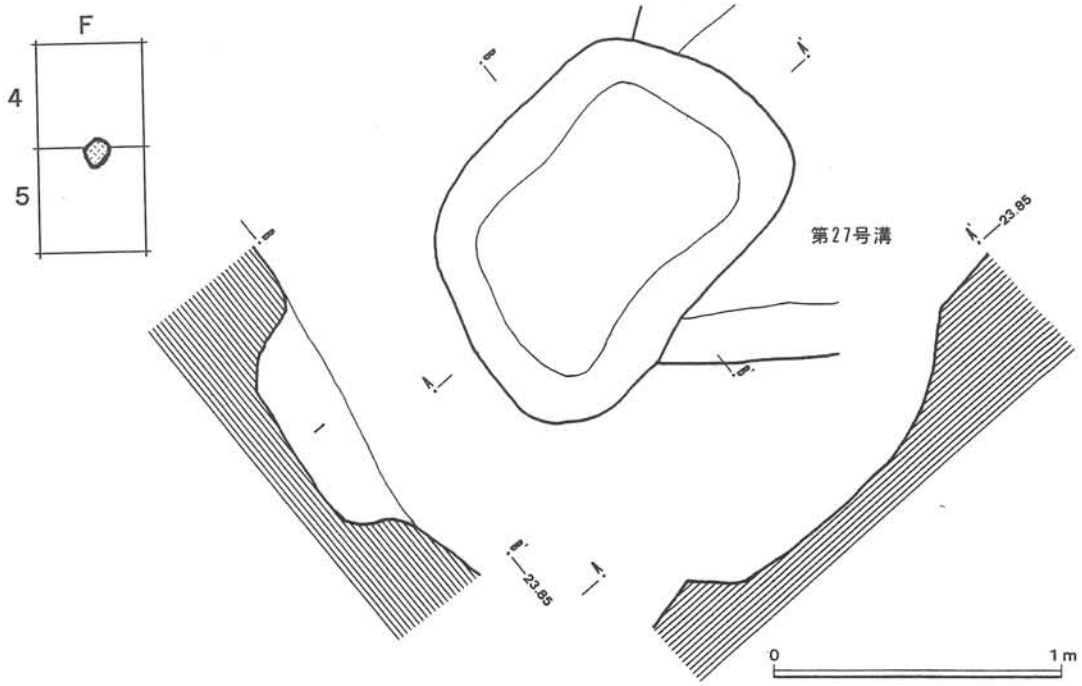
図Ⅳ－３－82　第46号土坑から出土した土師器の口縁部(遺物No.226・No.271)



図Ⅳ－３－83　第47号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－84　第48号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－85　第49号土坑の平面および断面図

第47号土坑

Ｅ－４グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径68cm、短径58cmで、深さは最深部が19cmあり、長軸の方向はN-25°-E を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径１cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径１～４cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第48号土坑

Ｆ－４グリッド内に位置し、北西部を第27号溝によって切られているが平面形状は楕円形と思われる。長さは推定で70cm、最大幅57cm、深さは最深部が37cmあり、長軸の方向はN-46°-W を指している。断面形状はＶ字形を呈している。

覆土は３層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りも粘性もやや弱く、径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～７cm大の礫を少量含んでいる。第３層は黄褐色土で締りも粘性も弱く、径 0.5～１cm大の礫を少量含んでいる。

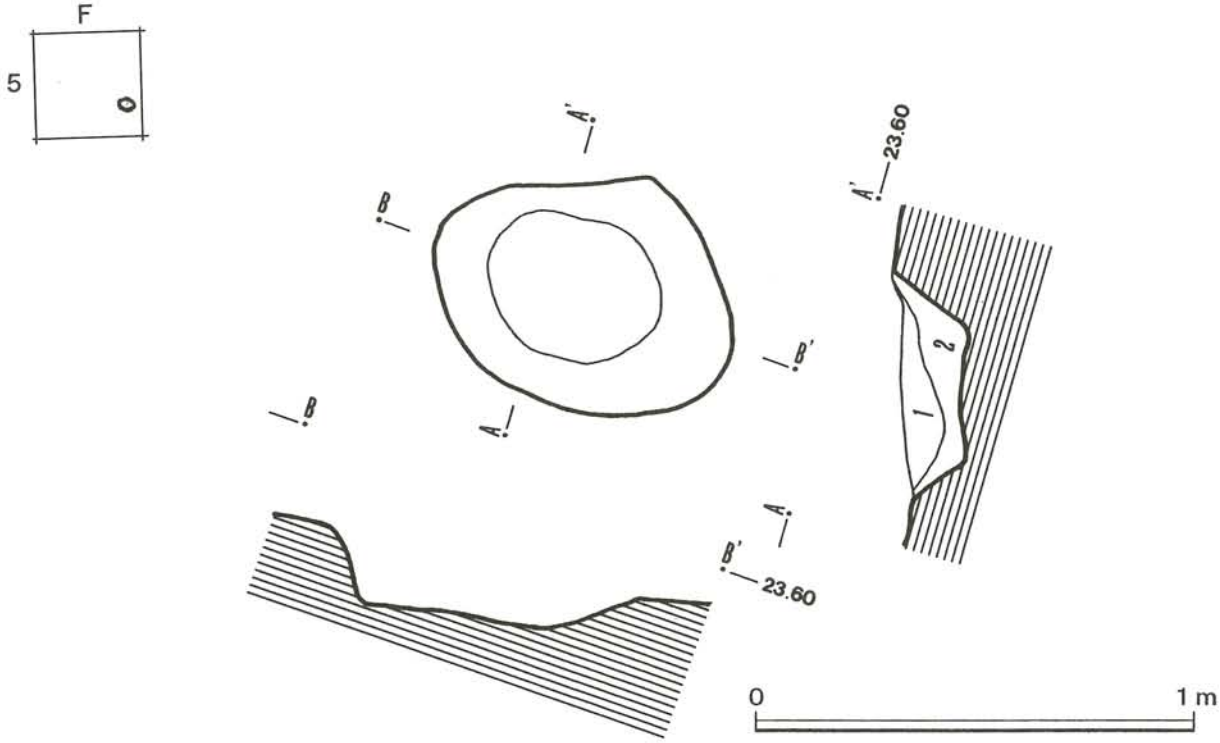
遺物は確認されなかった。

第49号土坑

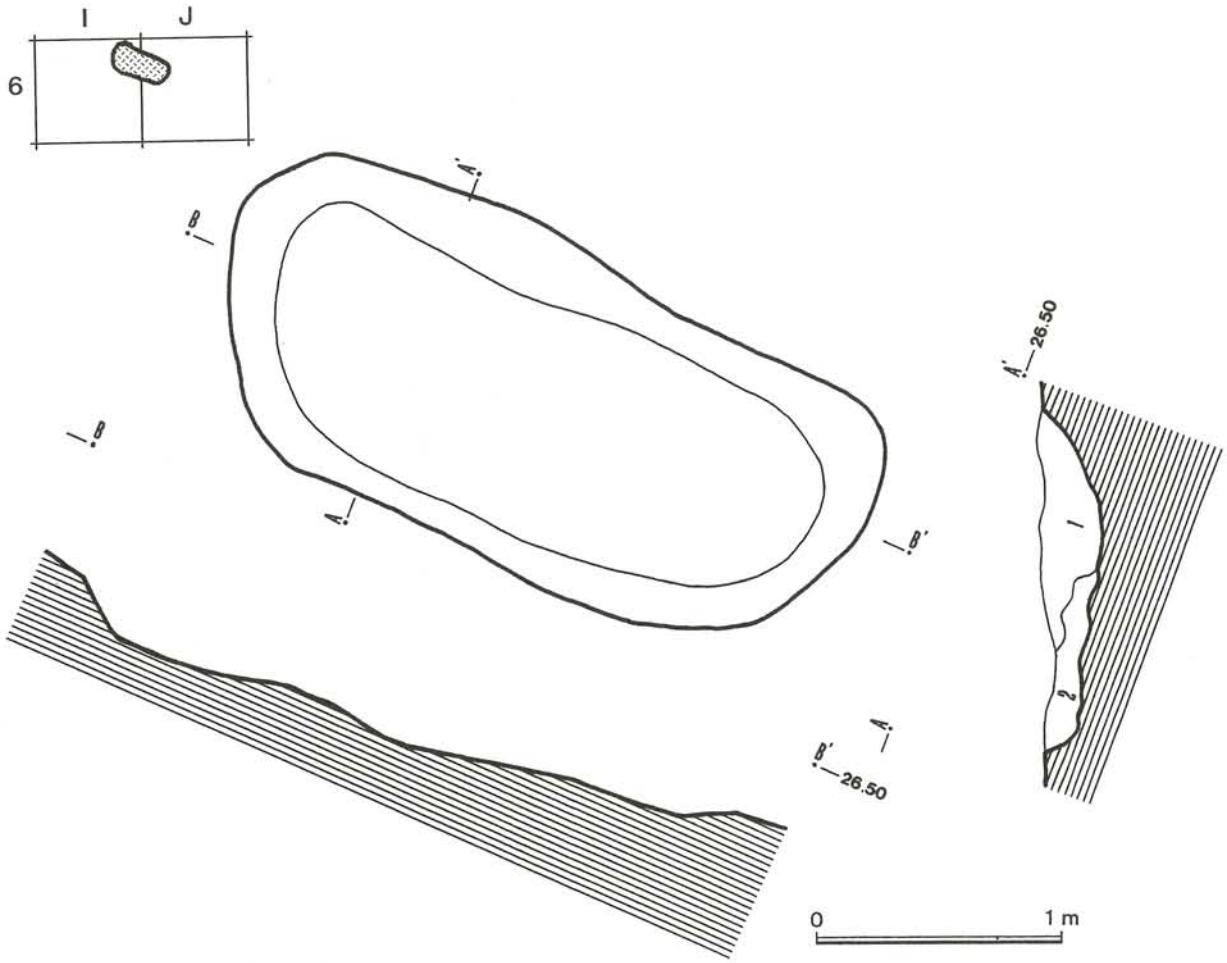
Ｆ－４～５グリッド内に位置し、北東部分が第27号溝(第２号方形周溝墓の東溝)の南西部を切っている。平面形状は不整楕円形で、長さ 130cm、最大幅97cm、深さは最深部が26cmあり、長軸の方向はN-48°-E を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～３cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－86　第50号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－87　第51号土坑の平面および断面図

第50号土坑

Ｆ－５グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ72cm、最大幅57cm、深さは最深部が16cmと浅く、長軸の方向はN-70°-W を指している。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.3～２cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りも粘性も弱い。径 0.3～３cm大の礫を少量含んでいる。

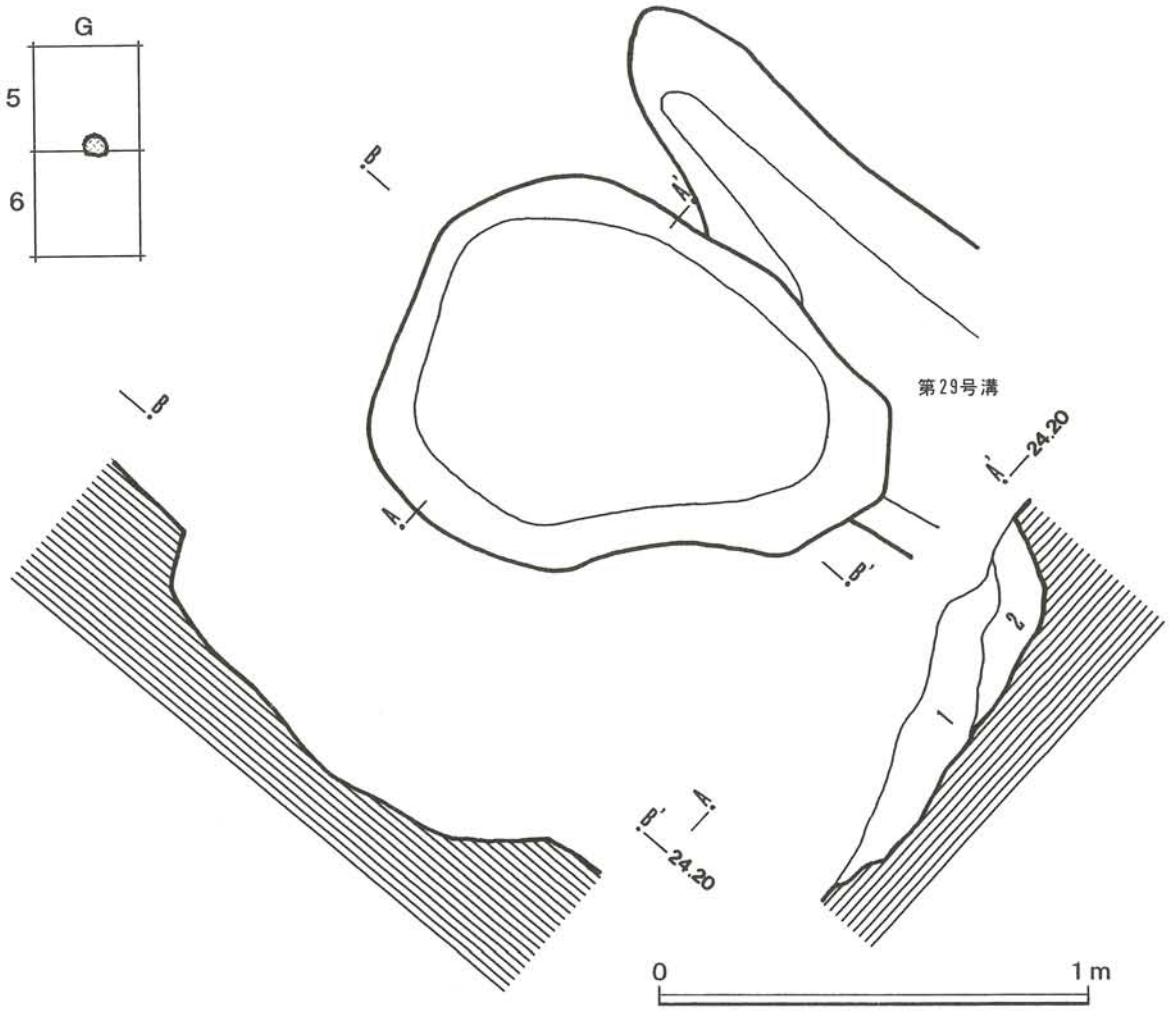
遺物は確認されなかった。

第51号土坑

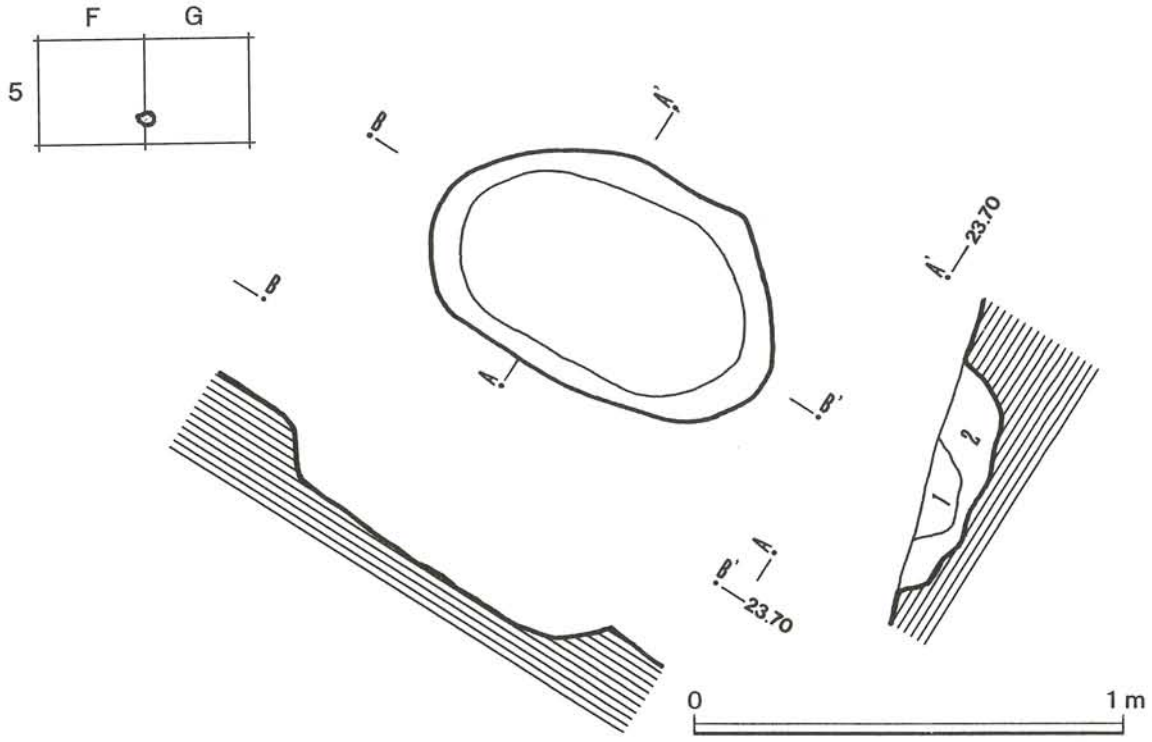
Ｉ～Ｊ－６グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ 277cm、最大幅 130cm、深さは最深部が27cmあり、長軸の方向はN-67°-W を指している。断面形状は丸底状を呈しており、底面は南西側に緩やかに下がっている。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りも粘性も弱く、径 0.3～10cm大の礫を多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－88　第52号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－89　第53号土坑の平面および断面図

第52号土坑

Ｇ－５～６グリッド内に位置し、東側は第29号溝を切っている。平面形状は不整楕円形で、長さ 119cm、最大幅90cm、深さは最深部が22cmあり、長軸の方向はN-67°-W を指している。断面形状は丸底状を呈しているが、底面は南西側に緩やかに下がっている。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りも粘性も弱く、径 0.5～５cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～１cm大の礫をやや多く含んでいる。

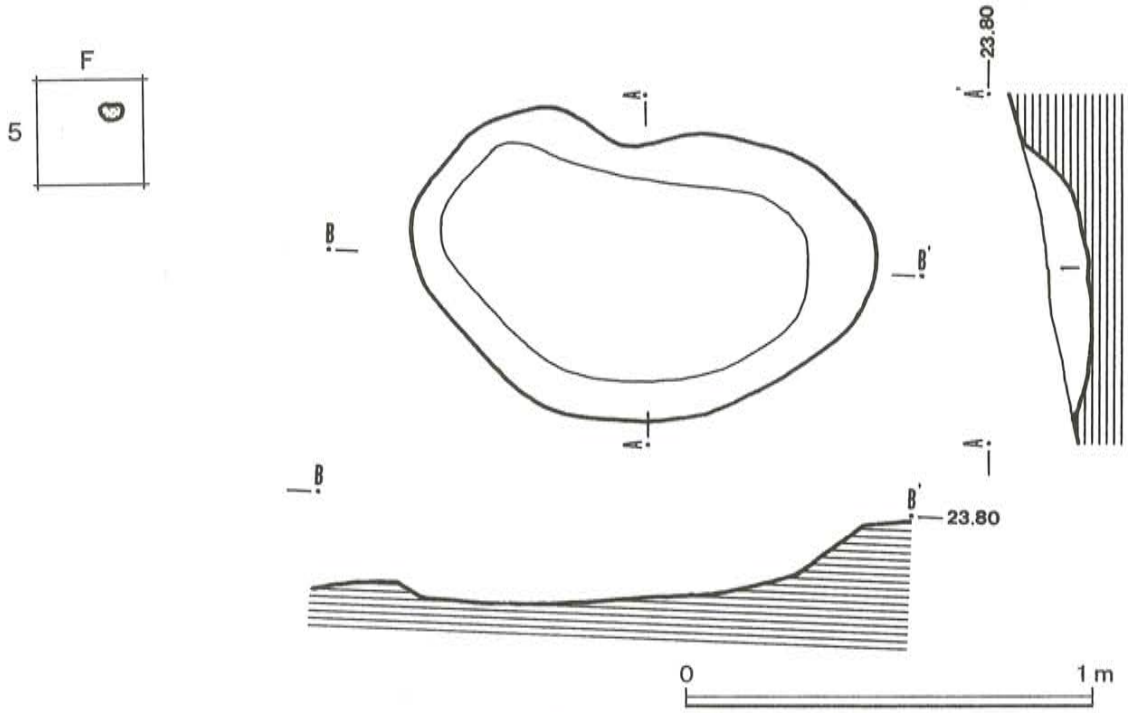
遺物は確認されなかった。

第53号土坑

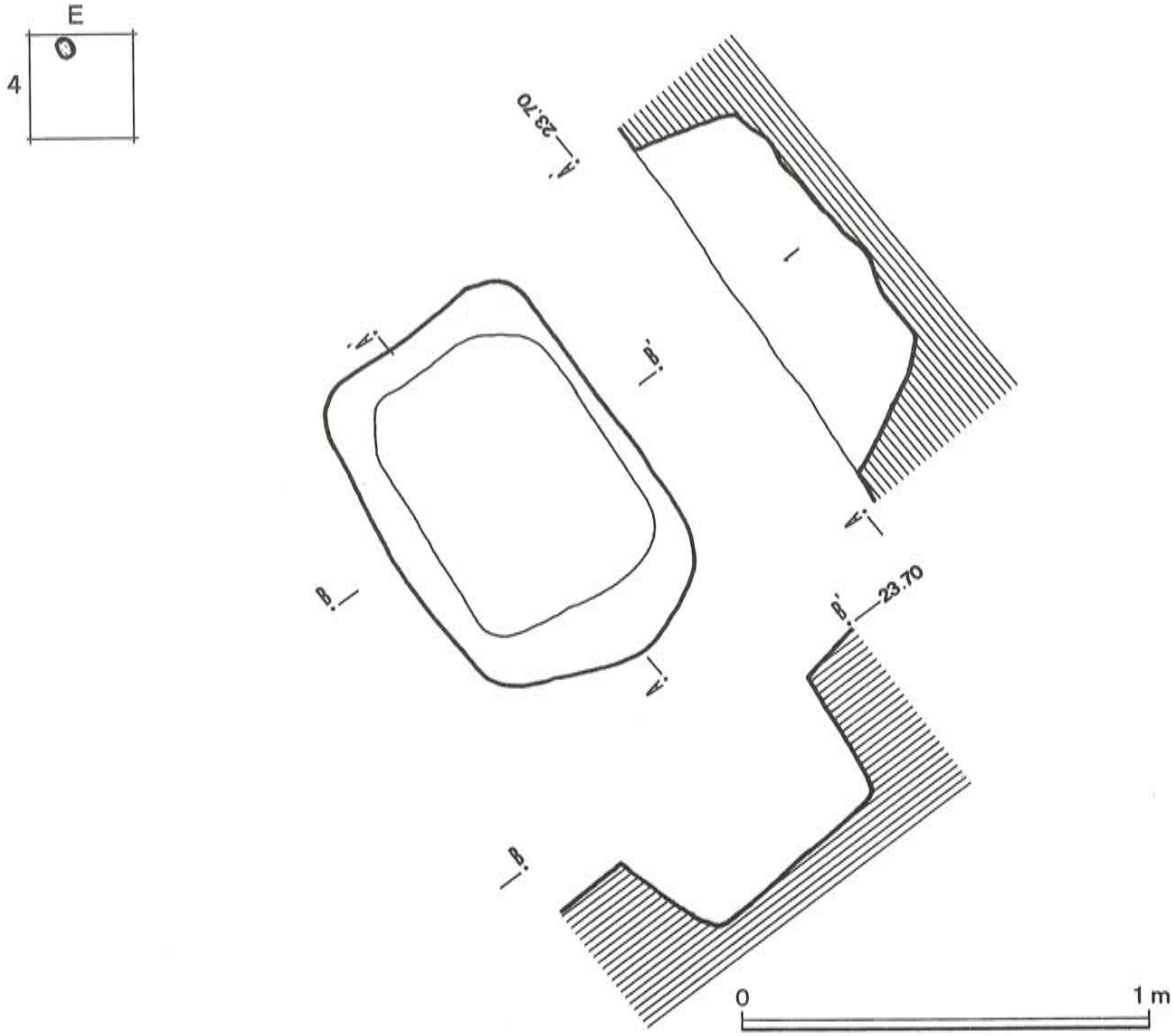
Ｆ－５～Ｇ－５グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ86cm、最大幅55cm、深さは最深部が14cmと浅く、長軸の方向はN-57°-W を指している。断面形状は浅いため定かでないが上に開くＵ字形を呈していると思われる。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～５cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～１cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－90　第54号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－91　第55号土坑の平面および断面図

第54号土坑

Ｆ－５グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ 115cm、最大幅72cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はほぼ東西に近いN-87°-W を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.3～３cm大の礫をやや多く含んでいる。

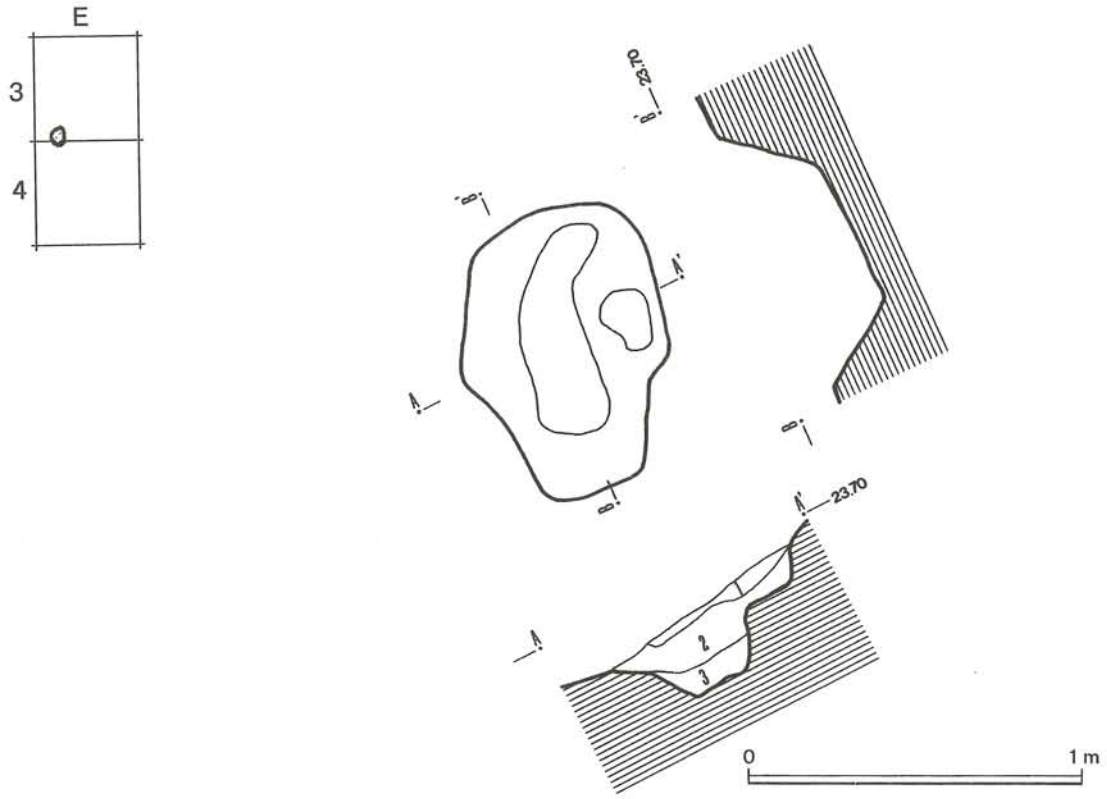
遺物は底面に近い覆土中から土器の細片が１点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。

第55号土坑

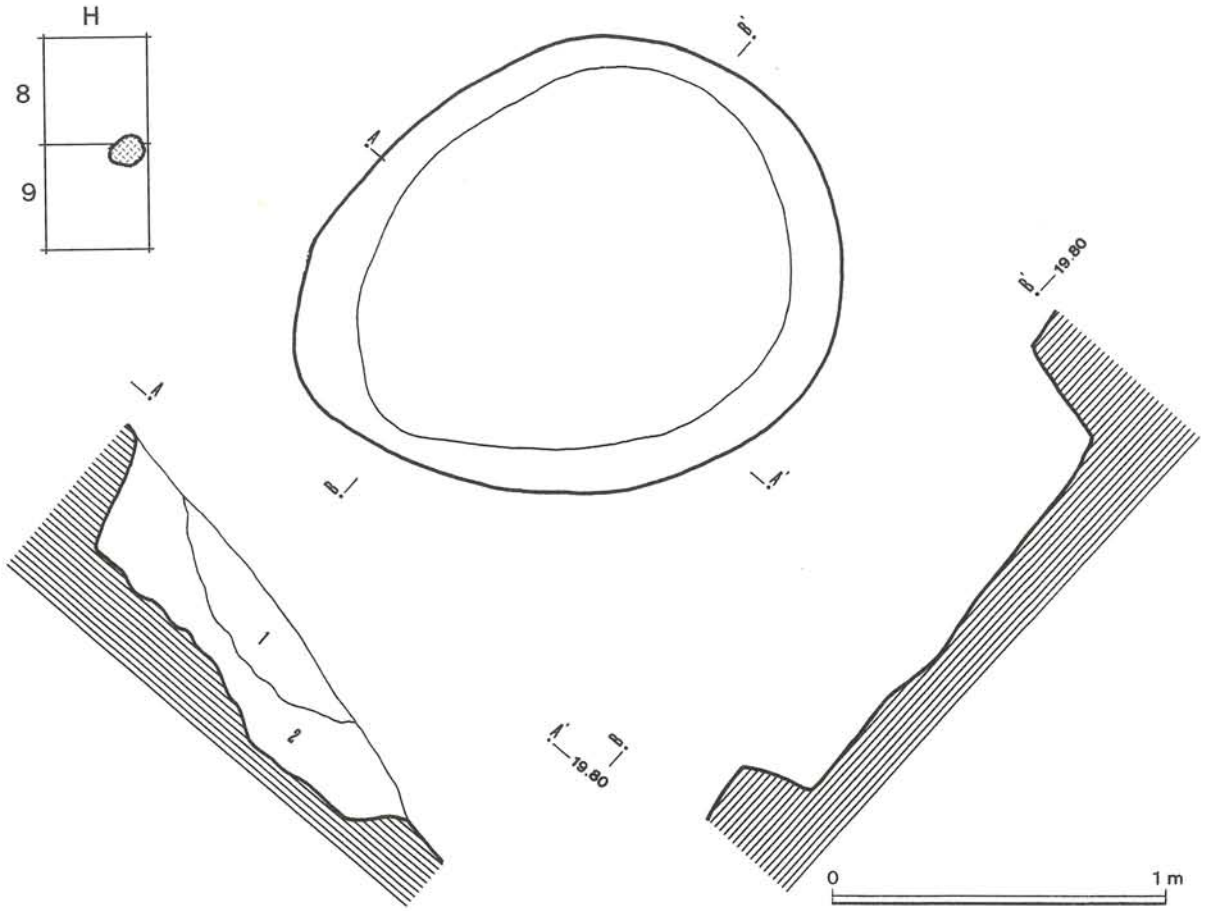
Ｅ－４グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、長さ96cm、最大幅65cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-36°-W を指している。断面形状はＵ字形を呈している。

覆土は暗褐色土が１層で締りも粘性も弱く、径 0.3～３cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－92　第56号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－93　第57号土坑の平面および断面図

第56号土坑

Ｅ－３～４グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ87cm、最大幅63cm、深さは最深部が25cmあり、長軸の方向はN-5°-W を指している。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈し、東側には深さ10cmほどの小段がみられる。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りは弱く、粘性はやや強い。径 0.5～１cm大の礫を少量含んでいる。第３層は暗褐色土で、締りも粘性も弱く、径 0.5～２cm大の礫と黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

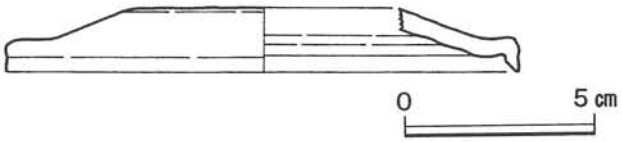
遺物は確認されなかった。

第57号土坑

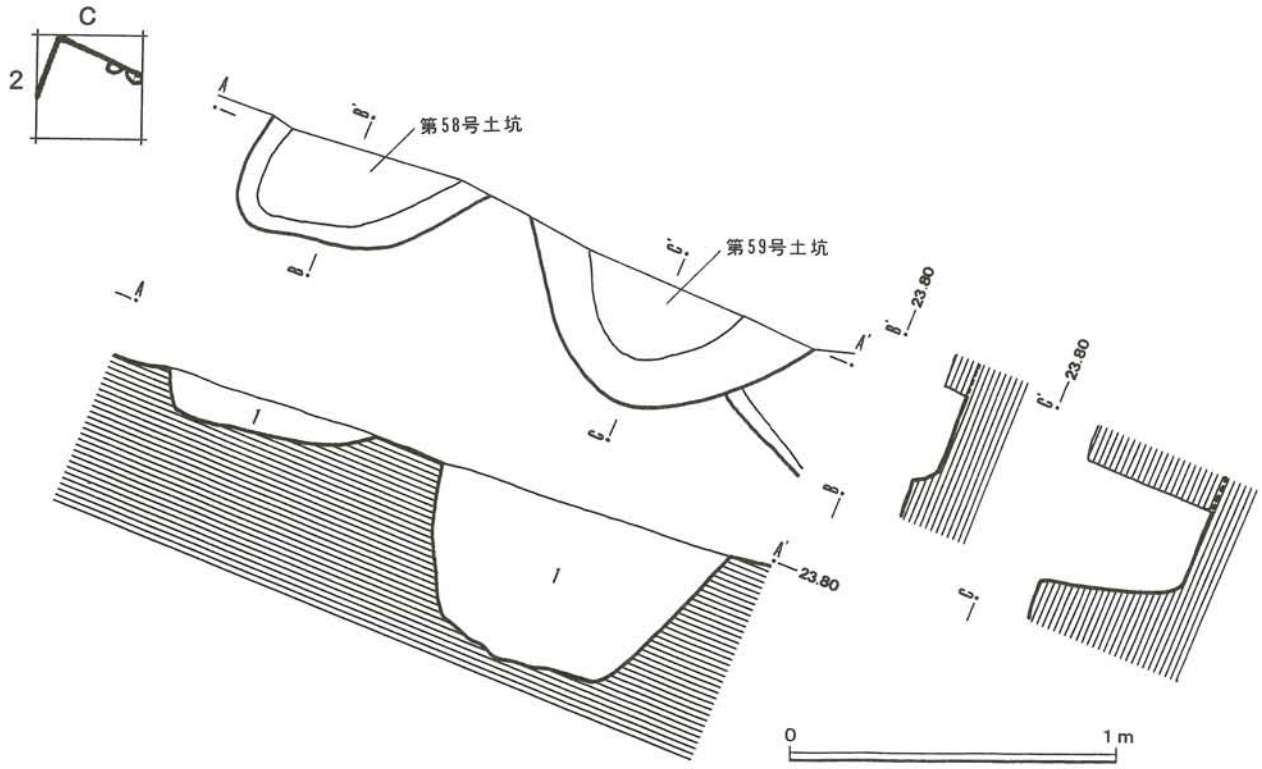
Ｈ－８～９グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ 168cm、最大幅 134cm、深さは最深部が33cmあり、長軸の方向はN-71°-E を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.3～４cm大の礫・炭化物・焼土粒を少量含んでいる。第２層は暗褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5～12cm大の礫をやや多く含んでいる。

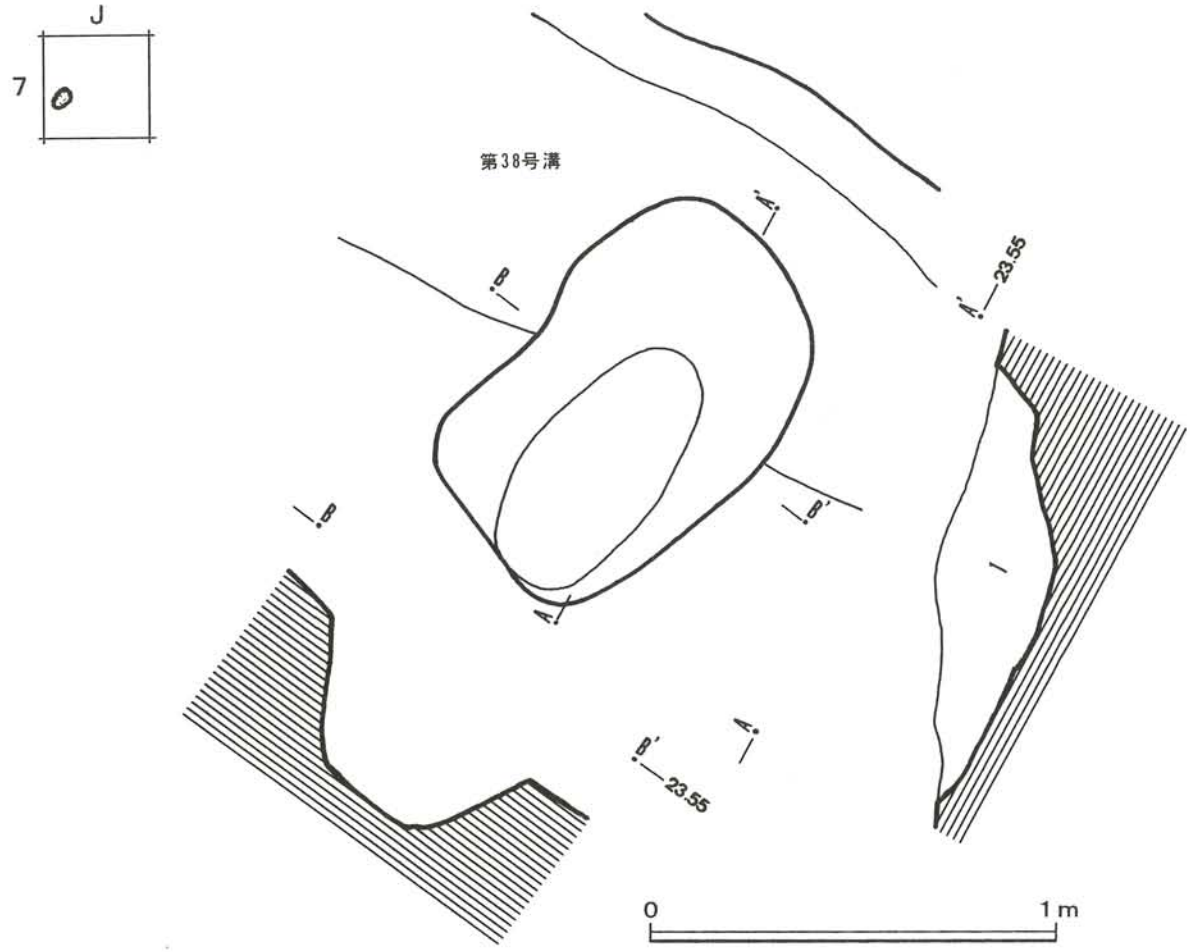
遺物は底面に近い覆土から陶質土器の蓋部の破片(遺物No.434) が出土している他、土師器の細片が３点出土した。



図Ⅳ－３－94　第57号土坑から出土した陶質土器の蓋部(遺物No.434)



図Ⅳ－３－95　第58・59号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－96　第60号土坑の平面および断面図

第58号土坑

Ｃ－２グリッド内に位置し、北側が調査区外に拡がっているため規模および形状は明確ではないが、確認されている幅は67cm、深さは最深部が13cmあり、断面形状は丸底状を呈している。

覆土は黒色土が１層で、締りも粘性も弱く、径１～２cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックを含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第59号土坑

Ｃ－２～Ｄ－２グリッド内に位置し、東側で第70号土坑を切っている。北側が調査区外に拡がっているため規模および形状は明確ではないが、確認されている幅は90cm、深さは最深部が34cmあり、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

覆土は黒色土が１層で、締りも粘性も弱く、径１～８cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックを含んでいる。

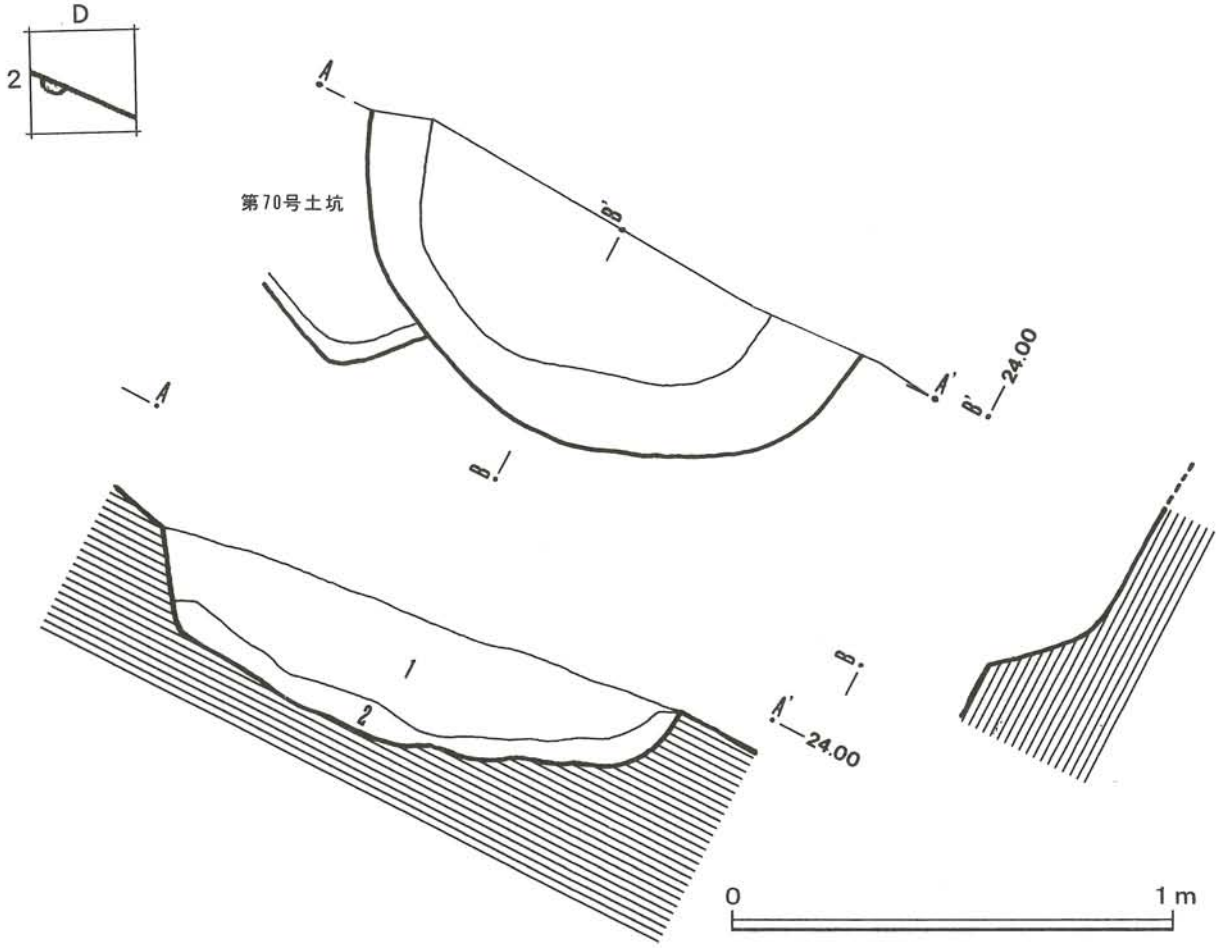
遺物は確認されなかった。

第60号土坑

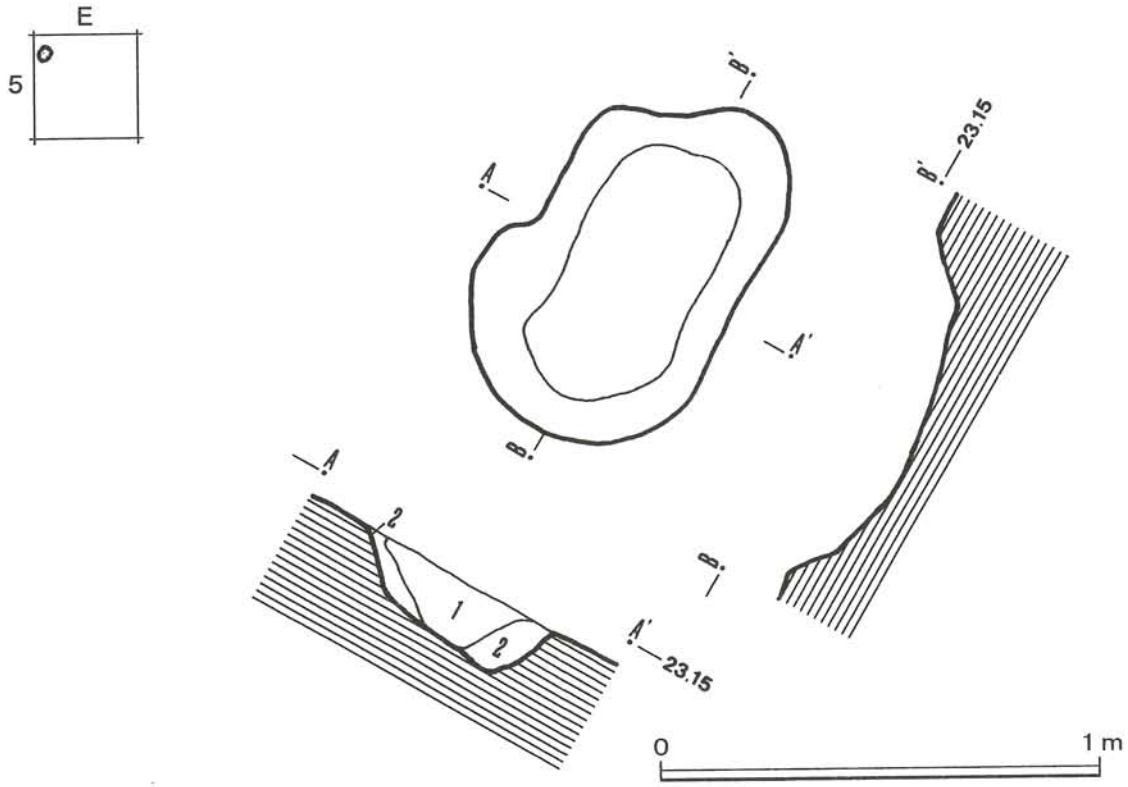
Ｊ－７グリッド内に位置し、斜面に沿って南西側を削平されており、北側が第28号溝の南部を切っている。平面形状は不整楕円形で、長さ 101cm、最大幅67cm、深さは最深部が28cmあり、長軸の方向はN-40°-E を指している。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は暗黄褐色土が１層で、締りも粘性もやや弱く、径 0.5～４cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－97　第61号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－98　第62号土坑の平面および断面図

第61号土坑

Ｄ－２グリッド内に位置し、西側は第70号土坑を切っている。北側が調査区外に拡がっているため規模および形状は明確ではないが、平面形状は円形と思われる。確認された幅は 125cm、深さは最深部が30cmあり、断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径１～10cm大の礫を少量含んでいる。第２層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径１～４cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。

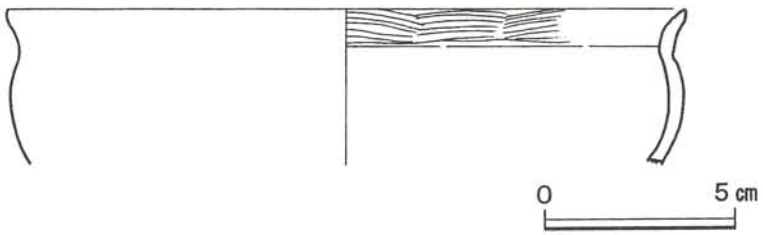
第62号土坑

Ｅ－５グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ85cm、最大幅52cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸の方向はN-29°-E を指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

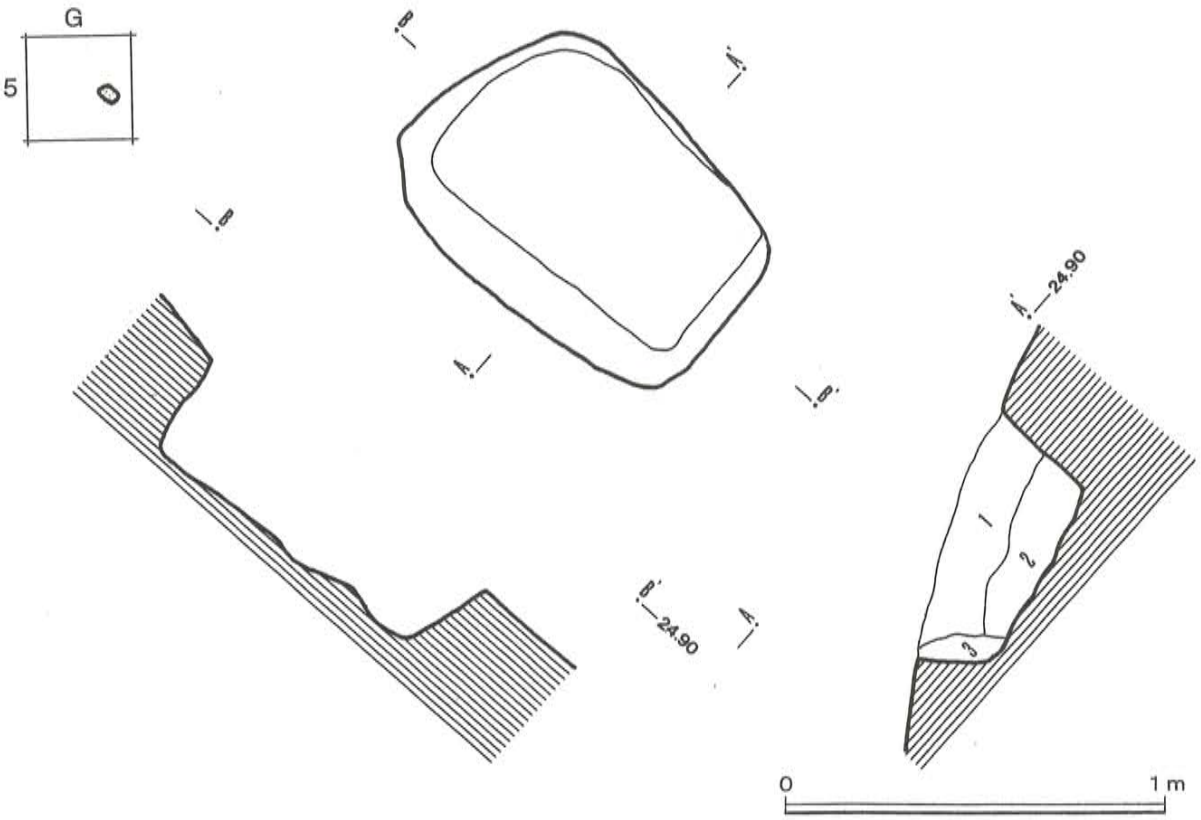
覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～３cm大の礫を少量含み、炭化物・焼土粒を含んでいる。第２層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～３cm大の礫を含み、炭化物・焼土粒を少量含んでいる。

遺物は覆土(第１層)下位から土師器の口縁部の破片(遺物No.462) が出土したほか、細片が８点出土している。

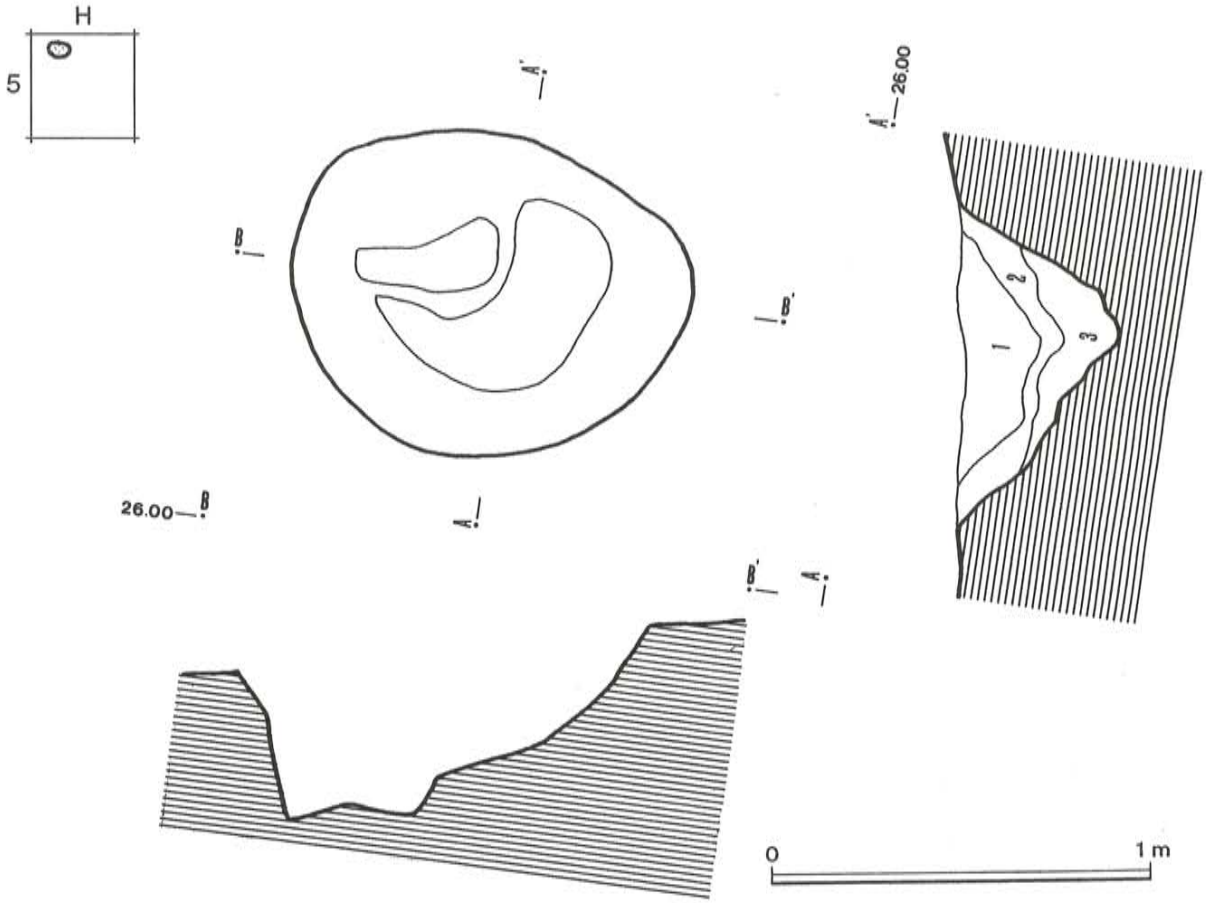
甕型土器の口縁部の破片(遺物No.462) は、頸部が屈曲しながら外反し、外面は横ナデ調整が、内面は刷毛目とナデ調整が施されている。推定口径は18.0cmを測る。



図Ⅳ－３－99　第62号土坑から出土した土師器の口縁部(遺物No.462)



図Ⅳ－３－100　第63号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－101　第64号土坑の平面および断面図

第63号土坑

Ｇ－５グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、長さ95cm、最大幅68cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-48°-W を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈しており、底面は南西側に緩やかに傾斜している。

覆土は３層に分けられ、第１層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.3～５cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.3～２cm大の礫をやや多く含んでいる。第３層は暗黄褐色土で、締りも粘性もやや弱い。

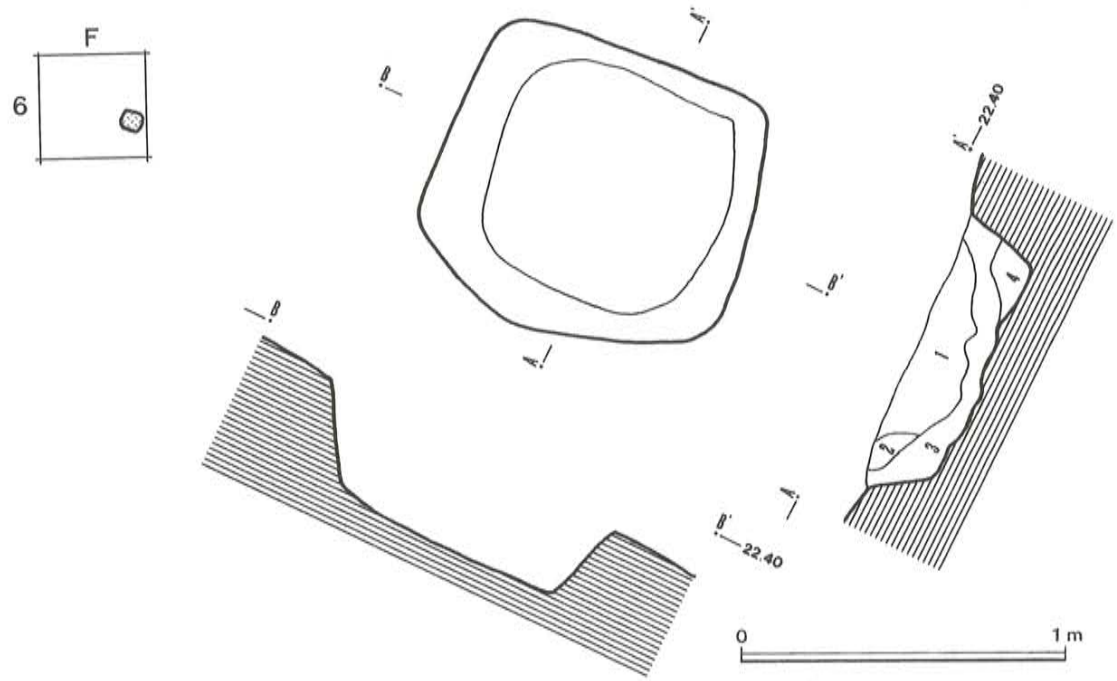
遺物は確認されなかった。

第64号土坑

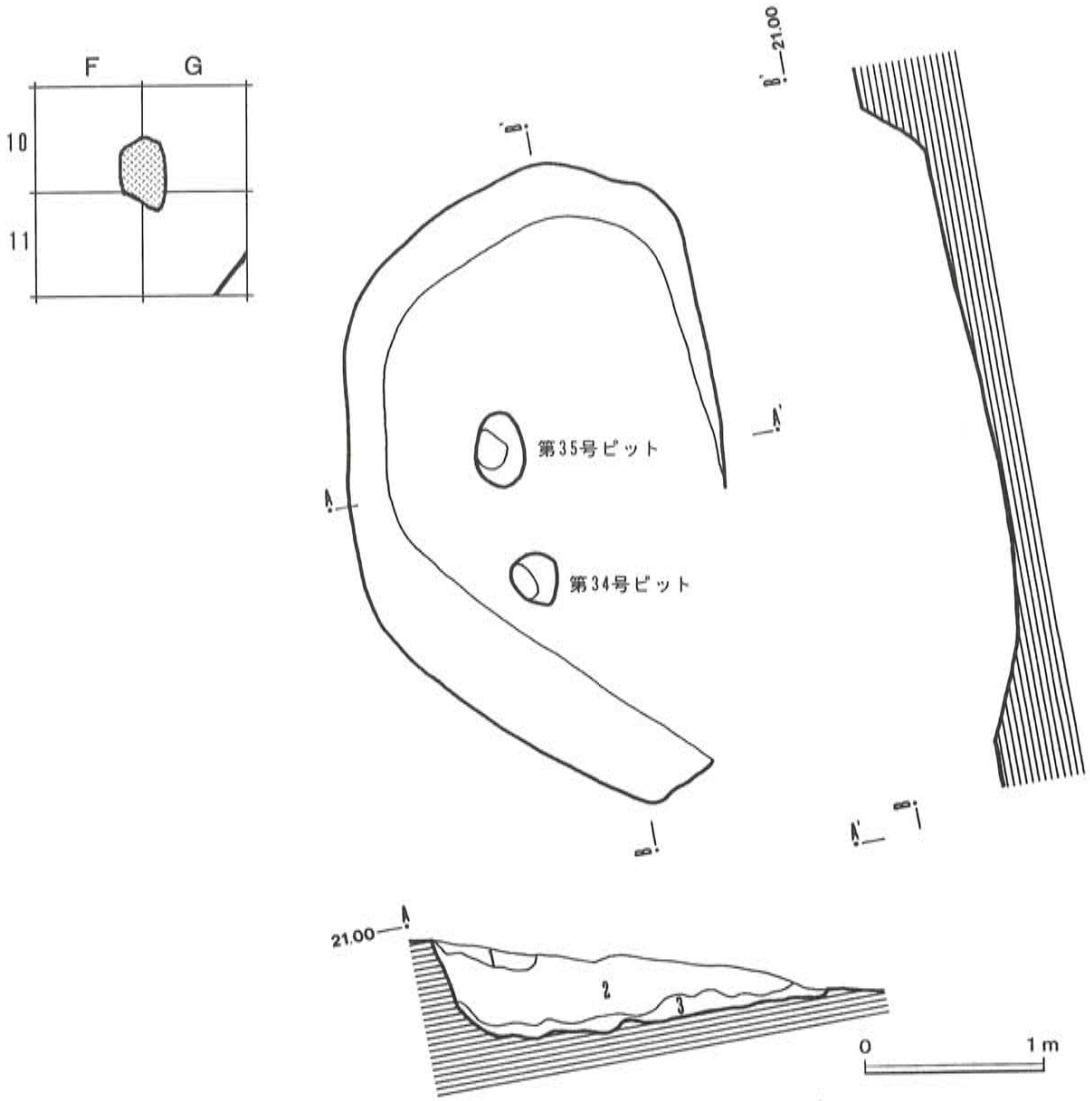
Ｈ－５グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ 106cm、最大幅86cm、深さは最深部が42cmと深く、長軸の方向はN-82°-W を指している。断面形状はＶ字形を呈し、東側に深さ20cm程の段がみられる。

覆土は３層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径 0.3～４cm大の礫を多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.3 ～５cm大の礫をやや多く含んでいる。第３層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－102　第65号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－103　第66号土坑の平面および断面図

第65号土坑

Ｆ－６グリッド内に位置し、平面形状は隅丸正方形で、長さ98cm、最大幅90cm、深さは最深部が30cmあり、断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

覆土は４層に分けられ、第１層は黒褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.5～６cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～６cm大の礫を多く含んでいる。第３層は暗黄褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径 0.5～10cm大の礫を多く含んでいる。第４層も暗黄褐色土で、締りも粘性もやや弱く第３層と同じように見えるが、含んでいる礫の大きさが径 0.5～２cm大で第３層と異なりを見せている。

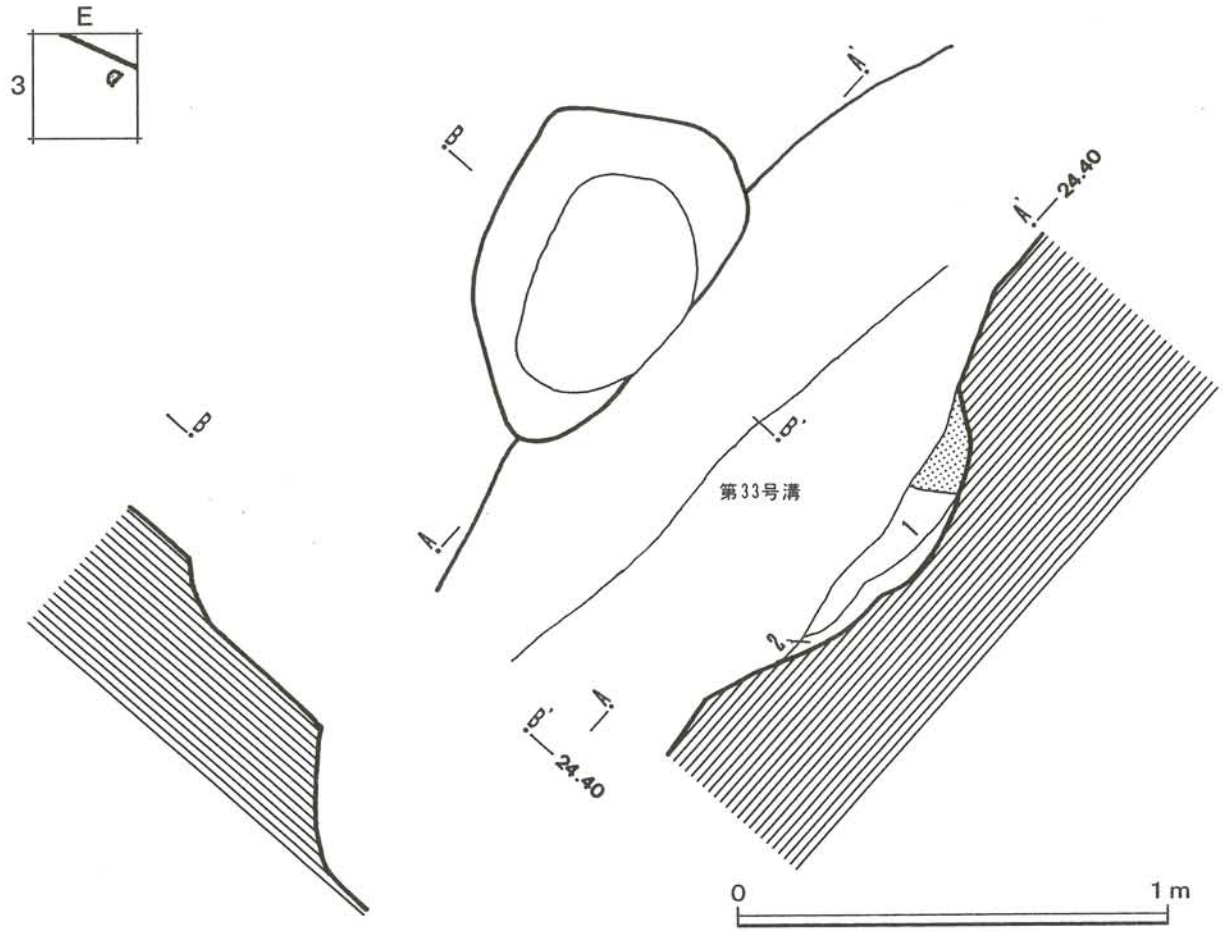
遺物は確認されなかった。

第66号土坑

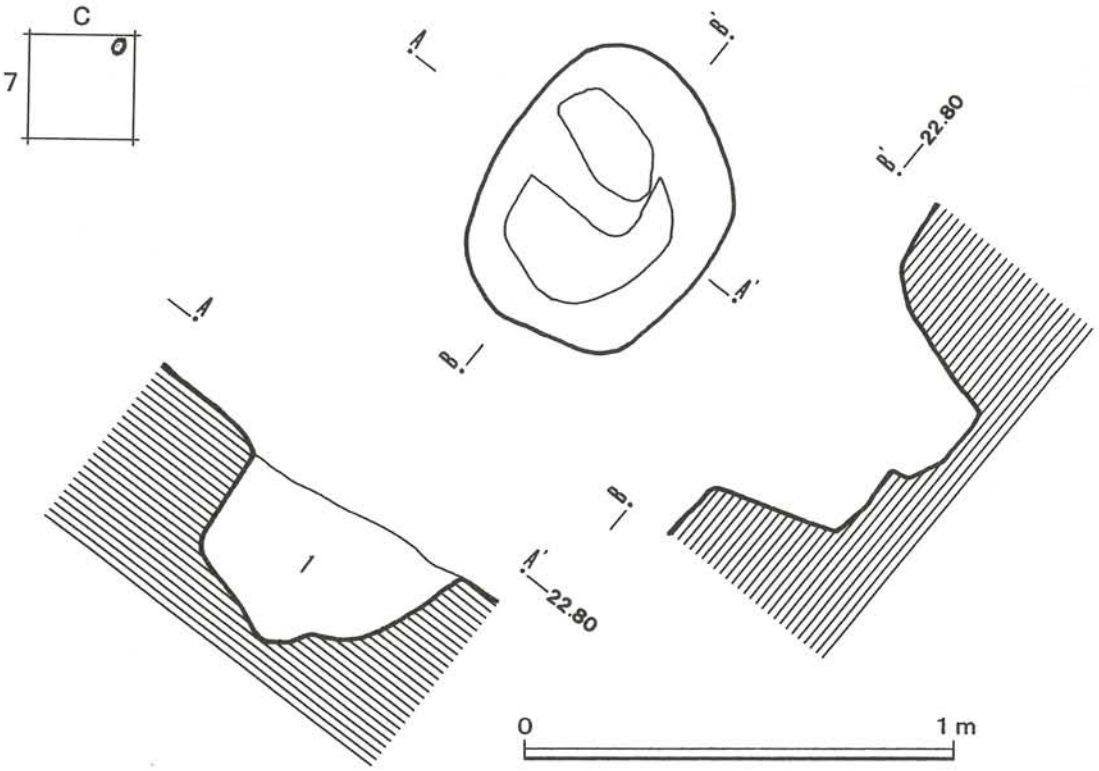
Ｆ－10～11～Ｇ－10～11グリッド内に位置し、東南側は斜面に沿って削平されている。また、中央部は第34・35号ピットにより切られている。平面形状は不整楕円形と思われ、長さ 368cm、最大幅 214cm、深さは最深部が52cmあり、長軸の方向はN-70°-W を指している。断面形状はおそらくＵ字形を呈していたと思われる。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径 0.3～１cm大の礫を多く含んでいる。第２層は黒色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5～20cm大の礫をやや多く含んでいる。第３層は暗褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5～15cm大の礫を含んでいる。

遺物は覆土の中位から土器の細片が３点出土したが、時代を確定できるものではなかった。



図Ⅳ－３－104　第67号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－105　第68号土坑の平面および断面図

第67号土坑

Ｅ－３グリッド内に位置し、南東部は第33号溝により切られている。平面形状は不整楕円形と思われ、長さは推定80cm、最大幅53cm、深さは最深部が13cmと浅い。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。第２層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5cm大の礫と黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

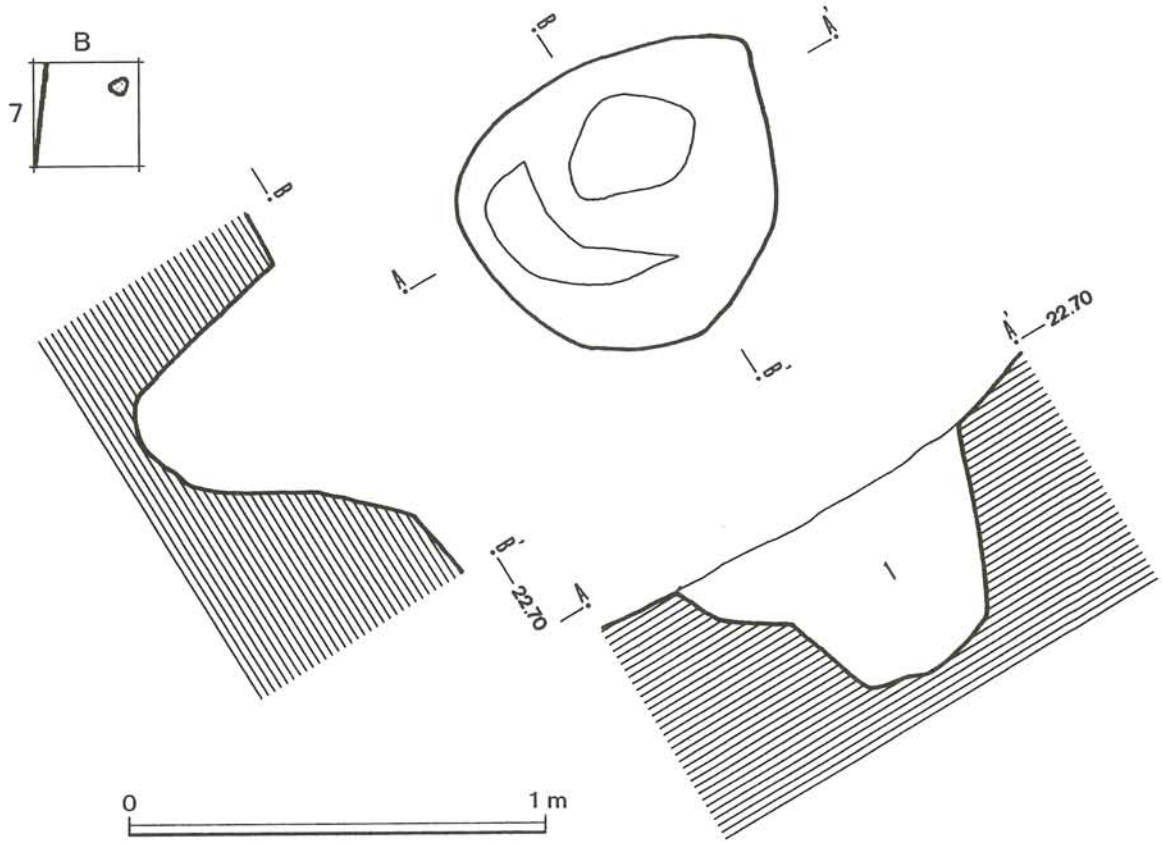
遺物は確認されなかった。

第68号土坑

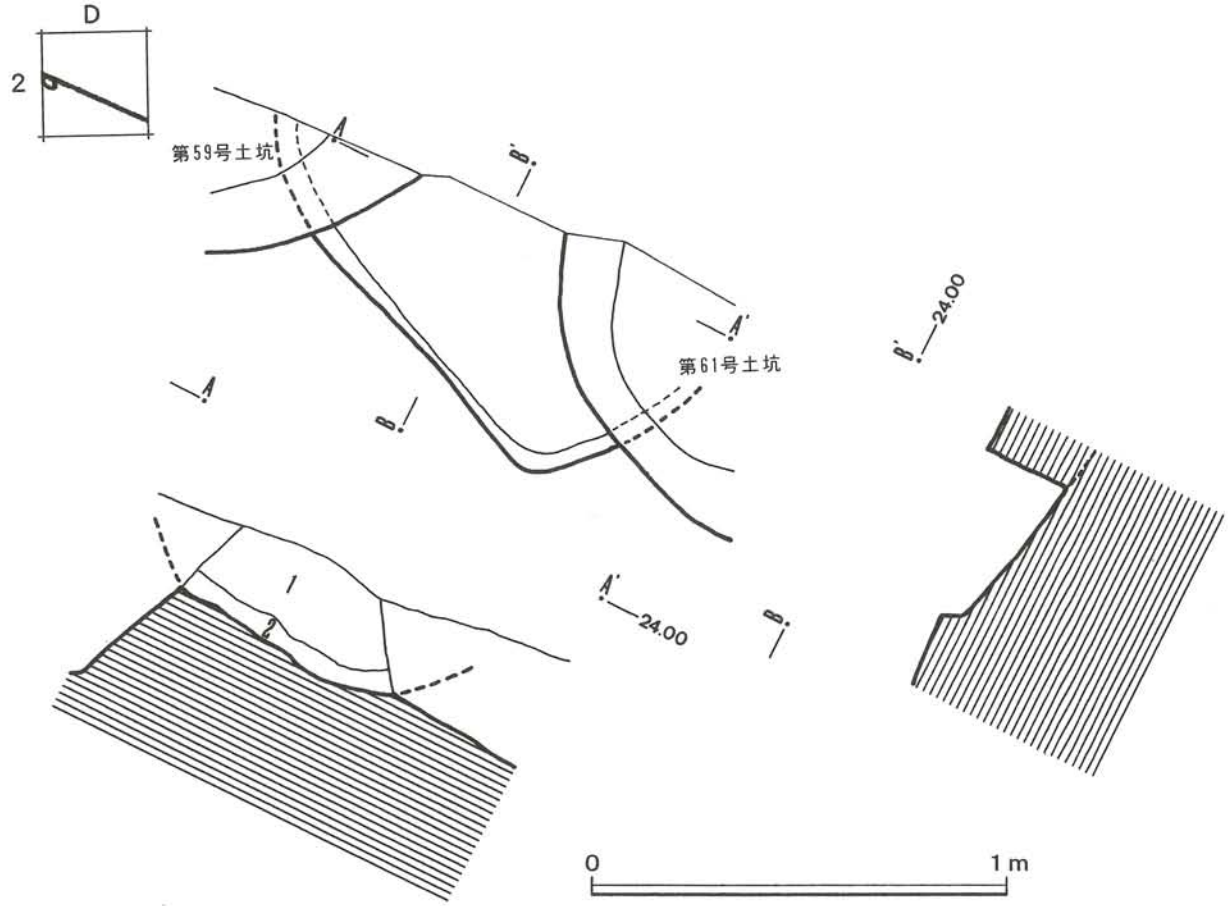
Ｃ－７グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径68cm、短径55cm、深さは最深部が38cmあり、長軸の方向はN-37°-E を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈しており、南側に深さ30cmの段がみられる。

覆土は暗褐色土が１層で締りは強く、粘性は弱い。径１～４cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－106　第69号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－107　第70号土坑の平面および断面図

第69号土坑

Ｂ－７グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径83cm、短径72cm、深さは最深部が49cmあり、長軸の方向はN-39°-E を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈しており、南西側に深さ10cmの段がみられる。

覆土は黒褐色土が１層で、締りも粘性も弱く、径１～５cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックを多く含んでいる。

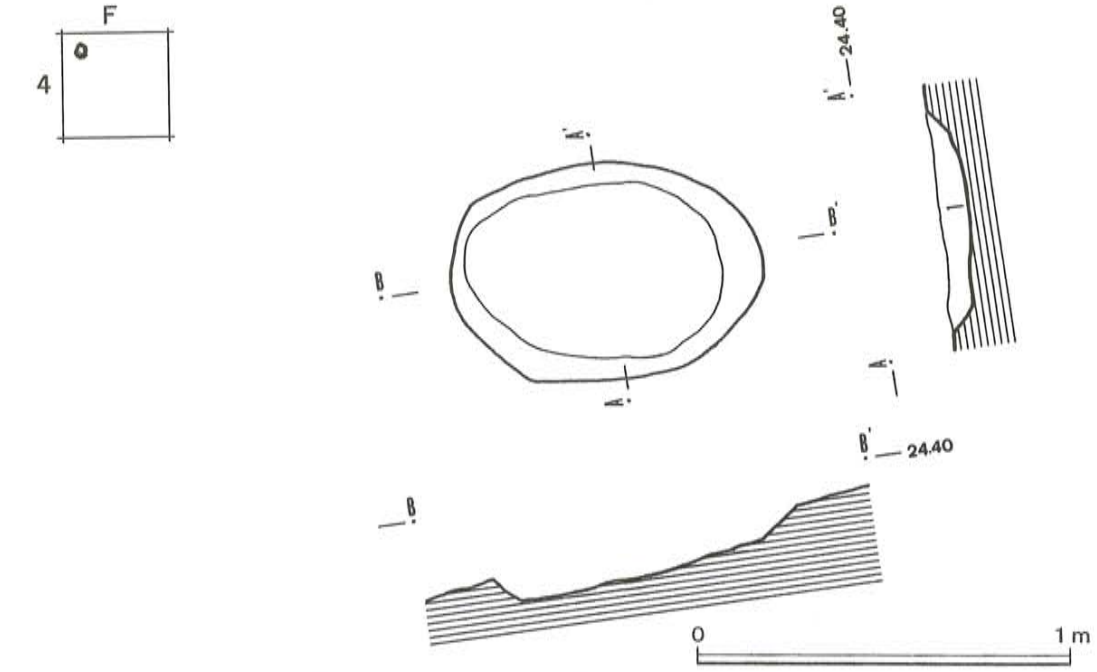
遺物は確認されなかった。

第70号土坑

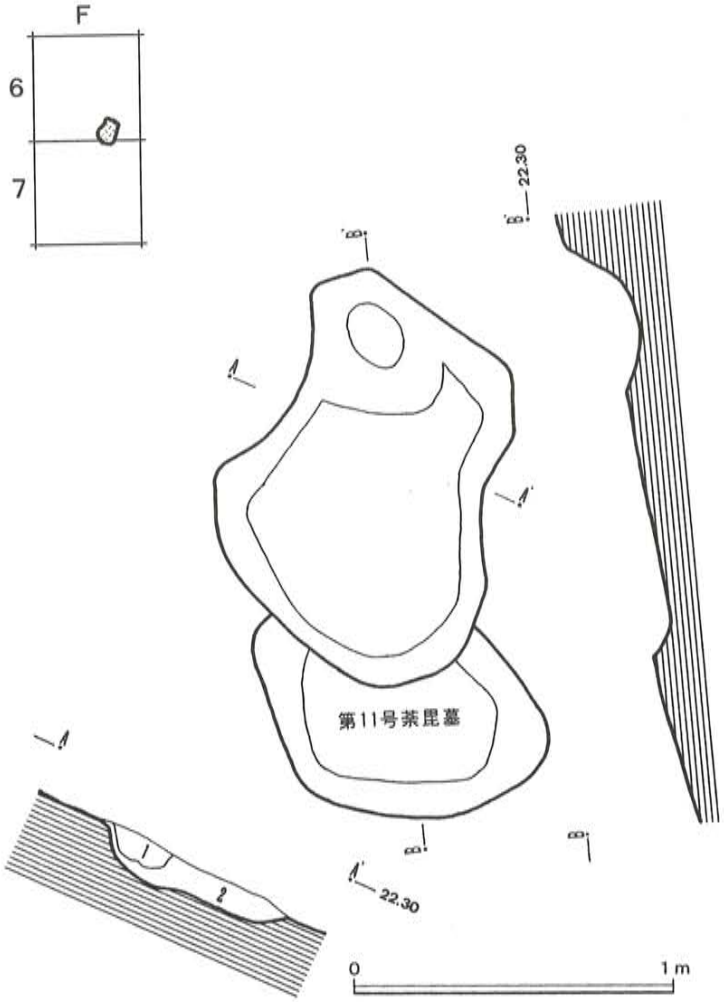
Ｄ－２グリッド内に位置し、北側が調査区外に拡がっており、西側は第59号土坑、東側は第61号土坑に切られているため規模および形状は明確ではないが、確認された深さは最深部が24cmある。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.5～３cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。黄褐色土の粒子を含んでいる。

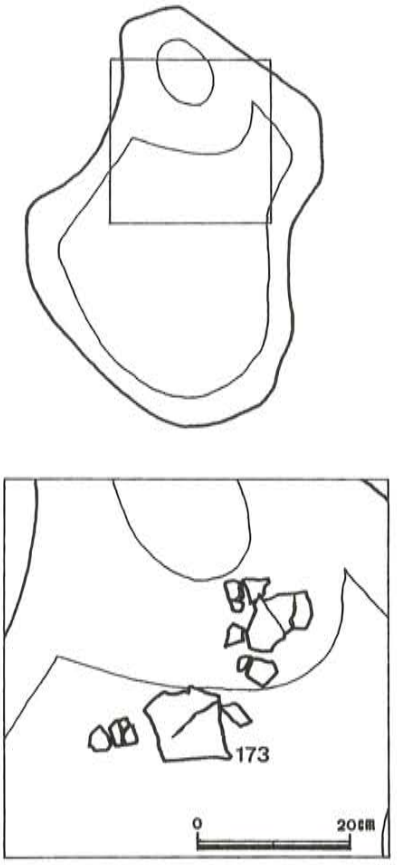
遺物は確認されなかった。



図Ⅳ－３－108　第71号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－109　第72号土坑の平面および断面図



図Ⅳ－３－110　第72号土坑の遺物出土状況図

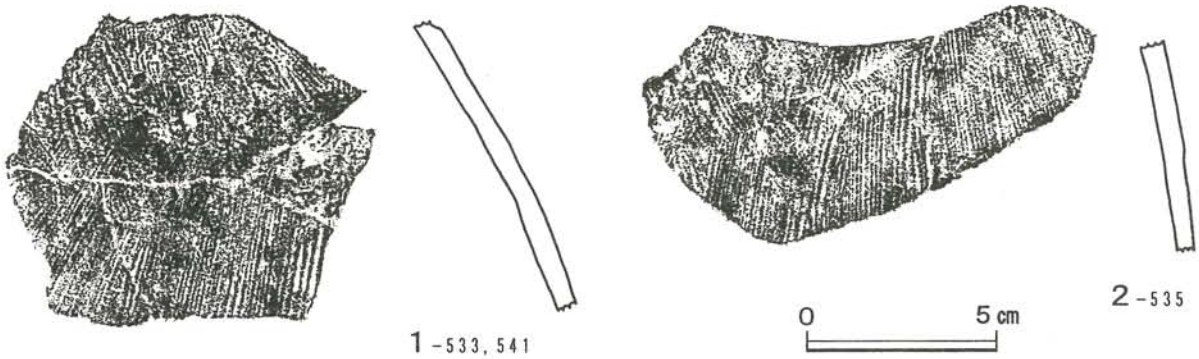
第71号土坑

Ｆ－４グリッド内で、第２号方形周溝墓の主体部の西側に隣接している。平面形状は楕円形で、長さ81cm、最大幅56cm、深さは最深部が９cmと浅く、長軸はN-84°-E を指している。断面形状は浅いため定かではないがやや丸底状を呈している。

覆土は暗赤褐色土が１層で、締りも粘性もやや弱く、径１～２cm大の礫を少量含み、焼土のブロックと焼土粒を多く含んでいる。

遺物は覆土中に土師器の破片が散在して出土している。

１（遺物No.533、No.541）と２（遺物No.535）は土師器の胴部の破片で、体部の外面は斜位のハケメ調整が格子状に施されている。内面は横位のハケメ調整が目立っている。胎土には金雲母が含まれている。



図Ⅳ－３－111　第71号土坑から出土した遺物

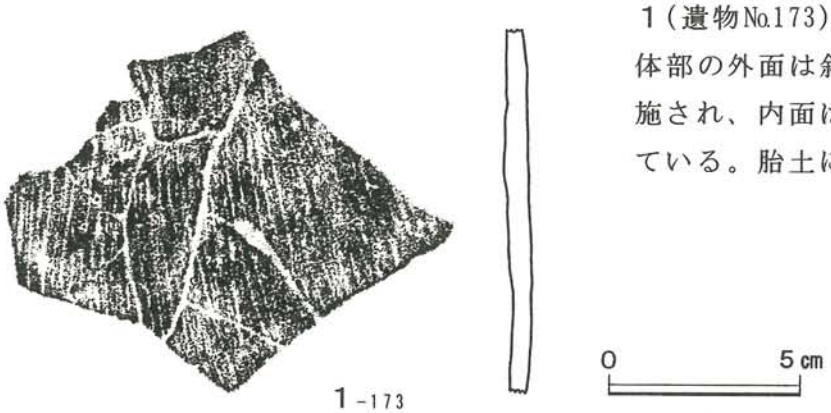
第72号土坑

第８号茶毘墓の東側約５ｍのＦ－６グリッド内に位置し、第11号茶毘墓を切っている。平面形状はの不整楕円形で、長さ 130cm、最大幅93cm、深さは最深部が16cmと浅い。長軸はN-7°-W とほぼ南北を指している。断面形状は浅いため定かではないが、丸底状を呈し、北側に凹みがある。

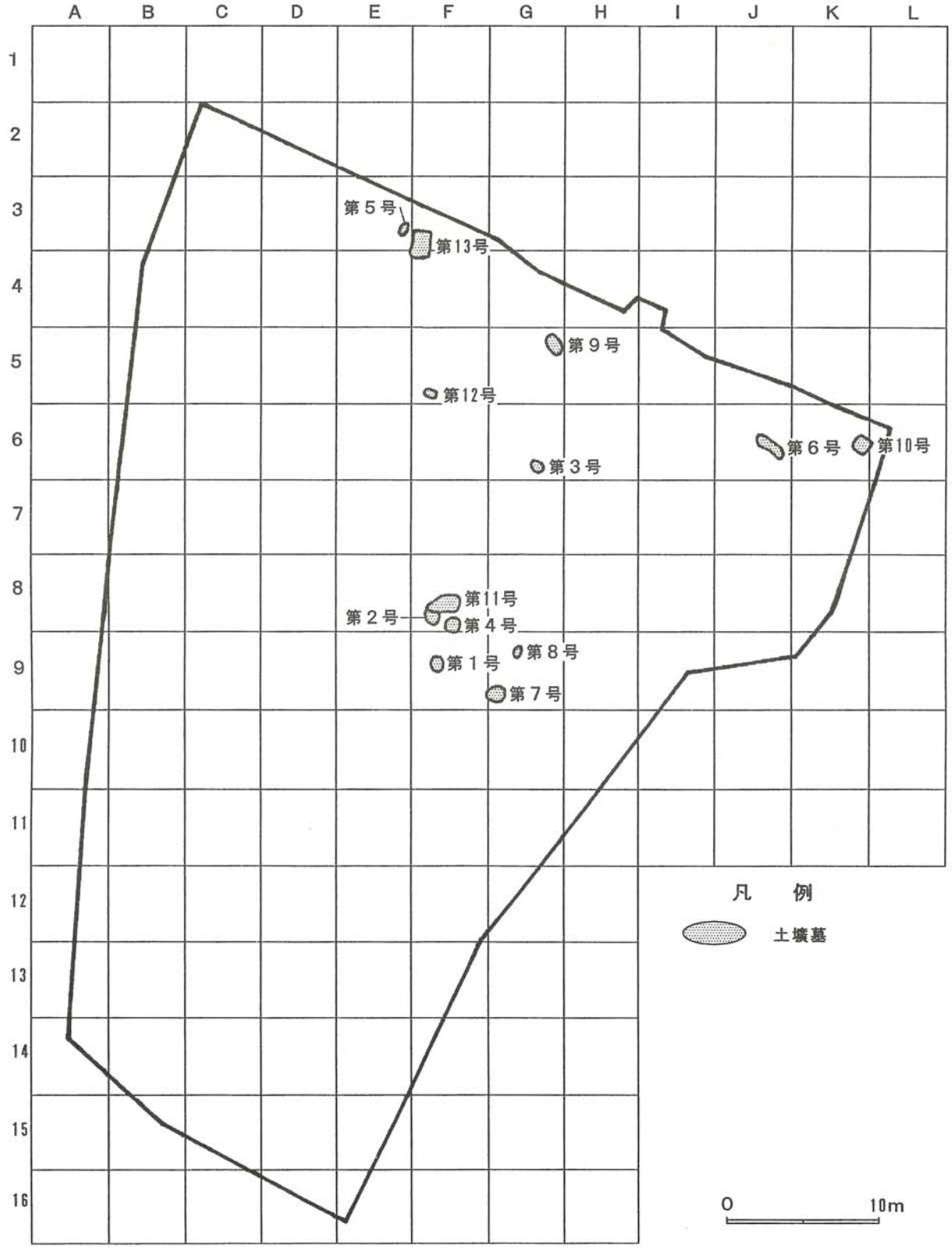
覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径１～３cm大の礫を少量含み、焼土粒をブロック状に含んでいる。第２層は暗赤褐色土で、締りも粘性も弱く、径１～２cm大の礫を少量含み、焼土粒を多く含んでいる。

遺物は覆土中に土師器の破片が散在して出土している。

１（遺物No.173）は土師器の胴部の破片で、体部の外面は斜位のハケメ調整が格子状に施され、内面は横位のハケメ調整が目立っている。胎土には金雲母が含まれている。



図Ⅳ－３－112　第72号土坑から出土した遺物



図Ⅳ－３－113　土壙墓の分布図

３．土壙墓と遺物

土壙墓の分布は黒ボク土が堆積している谷部を挟んで南側の斜面上位に位置する第１・２・４・７・８・11号土壙墓の６基と北側斜面に位置する第３・５・９・12・13号土壙墓の５基および同じく北側斜面の東端に位置する第６・10号土壙墓の２基の３グループに大別できる。また、これらの土壙墓はいずれも斜面に立地することが特徴の一つで、これは茶毘墓の多くが平坦部に立地することと対照的である。

土壙墓は13基が確認されたが、このうち、他の遺構と切り合い関係にあるのは第２・４・５号土壙墓で、いずれも土坑あるいは溝をそれぞれ切っている。

土壙墓の平面形状で区分すると円形・不整円形が２基(約15％)、楕円形・不整楕円形が９基(約70％)、隅丸長方形が２基(約15％)である。規模は長径が75～234cmで平均が約129cm、短径は55～ 139cmで平均が約89cm、深さは最深部が15～59cmで平均が約38cmを測る。長軸の方向はほぼ南北を指すものが３基あるが、全体として一定していない。

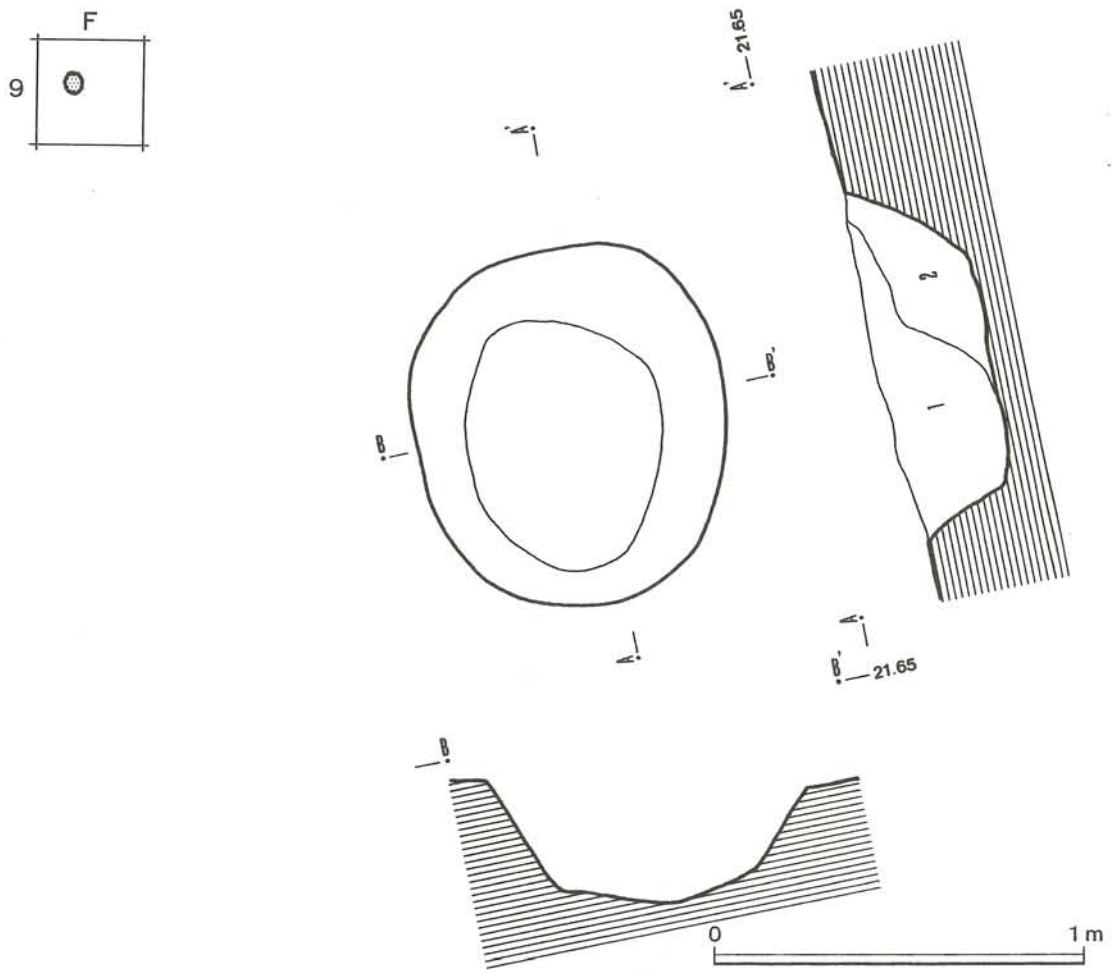
出土遺物は供献品としての土器が最も多く、ほかに銭貨・鉄釘・人骨片が出土している。

土器は第１・２・４・５・７・８・９・11・12・13号土壙墓で出土しており、なかでも「かわらけ」の数が最も多く、第２・４・５・７・８・９・12号土壙墓で出土している。「かわらけ」には“ロクロ成形”により作られた土器と“手捏ね成形”により作られた土器の２種類があり、原則として一つの遺構からはどちらかの１種類が出土するのが特徴である。また、第１号土壙墓より丸碗が、第11号土壙墓より絵付けの陶器が、第13号土壙墓より土師器片がそれぞれ出土している。

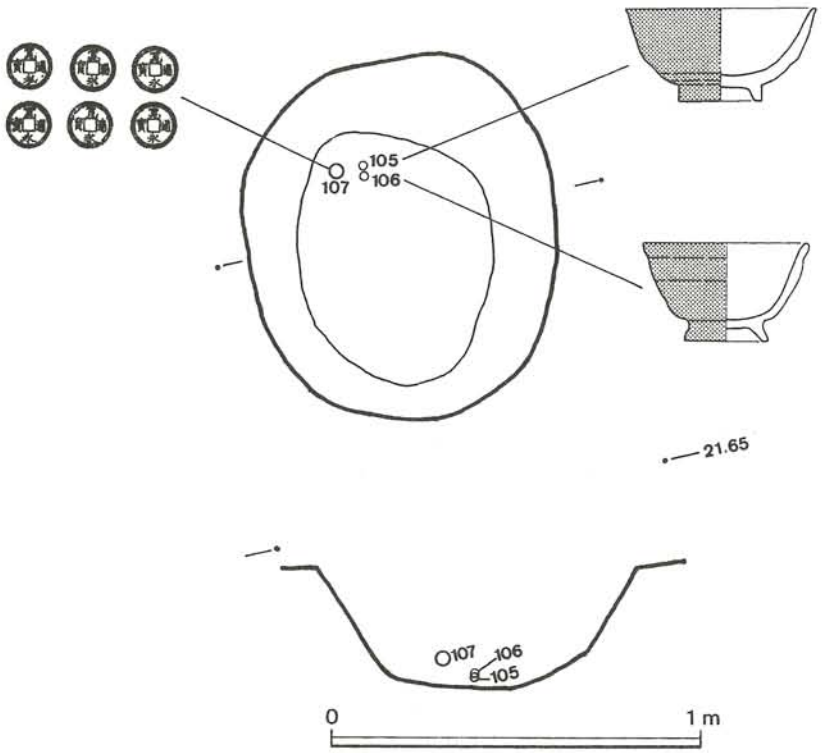
銭貨は第１・２・３・５・９号土壙墓より計22枚出土した。これらはいわゆる六道銭で、この六道銭の原則である６枚が揃って出土したのは第１・２・９号土壙墓である。銭貨の種類は「寛永通寶」が13枚と最も多く、このうち背面に「文」の文字がある新寛永通寶が７枚ある。「元豊通寶」は第２号土壙墓より２枚出土した。なお、種類の確認が出来ないものが７枚ある。

鉄製品は第４号土壙墓より釘が１点出土している。

人骨は第４・６・７・10号土壙墓より 124点が出土したが、それらは原形をとどめるものがなく、骨片・骨粉の状態で出土している。このうち、第６号土壙墓からは頭蓋・下顎骨・歯・頚骨・肋骨・大腿骨などがまとまって出土している。



図Ⅳ－３－114　第１号土壙墓の平面および断面図



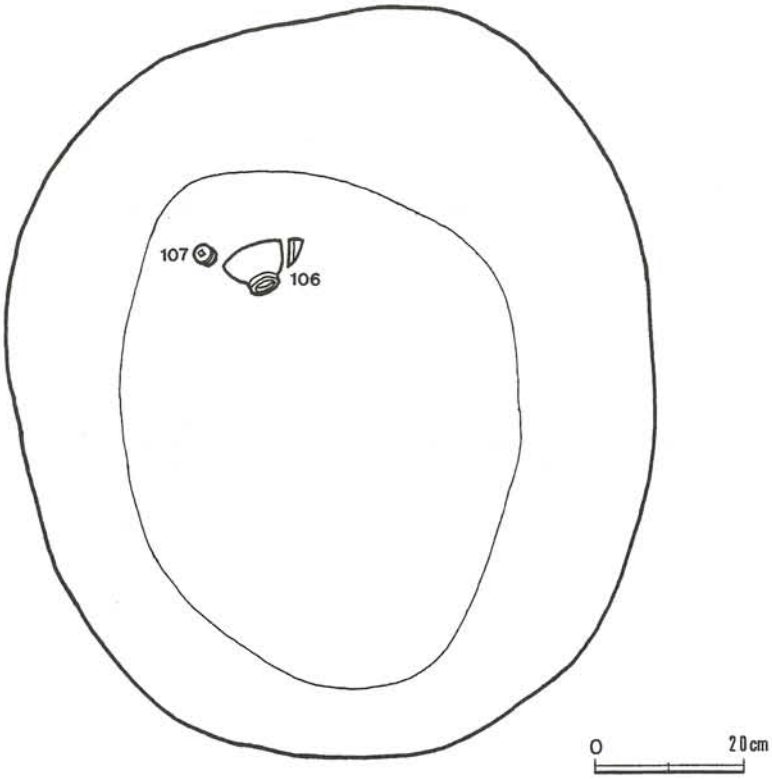
図Ⅳ－３－115　第１号土壙墓の遺物分布図

第１号土壙墓

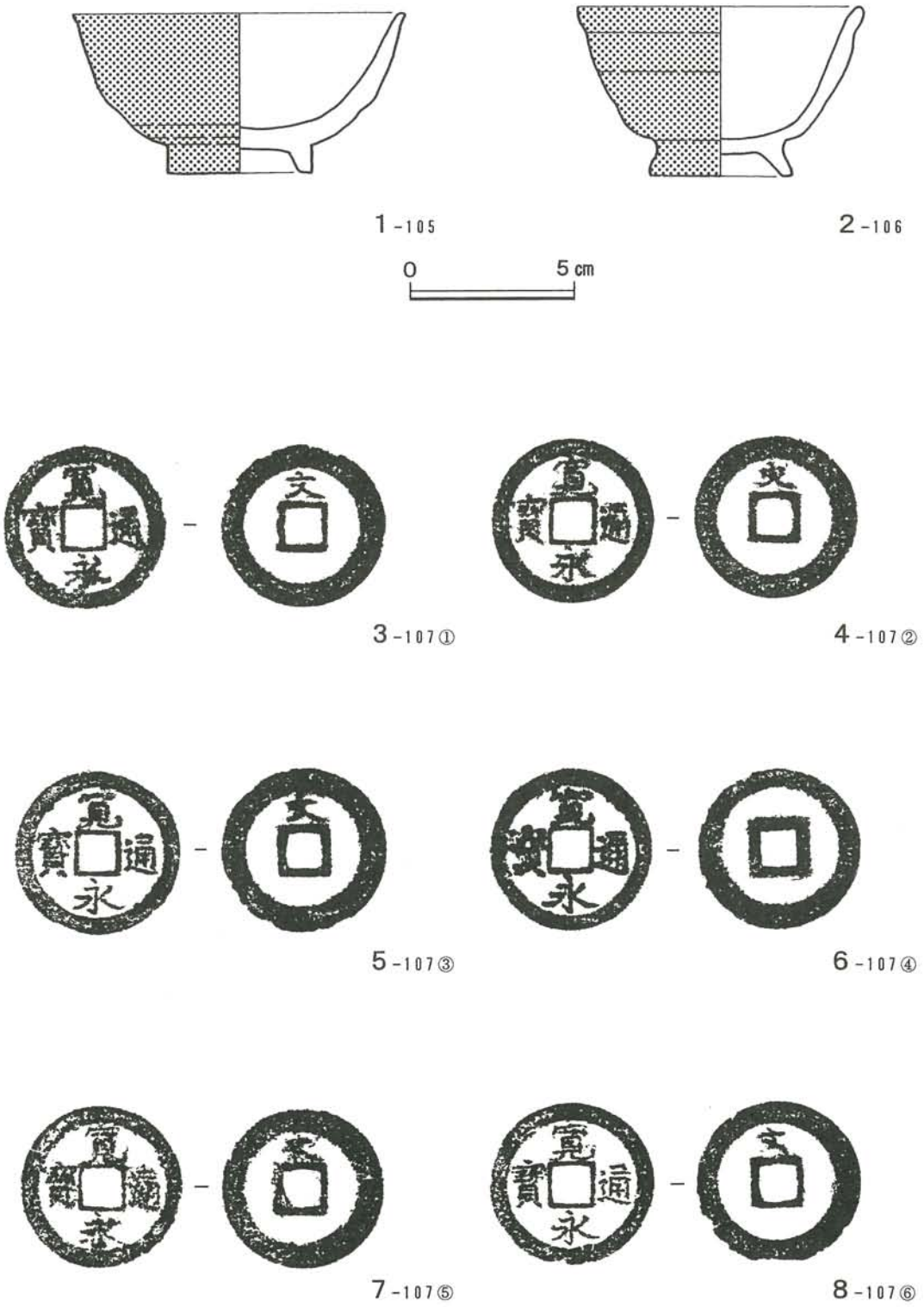
Ｆ－９グリッド内で黒ボク土が堆積する谷部に面した南側斜面に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径99cm、短径89cm、深さは最深部が32cmある。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径 0.5～30cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りも粘性も弱く、径 0.5～５cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は釉が施された陶質の丸碗が２点と６枚が重なった銭貨が、土壙の底面付近より並ぶように出土している。人骨は確認されなかった。



図Ⅳ－３－116　第１号土壙墓の遺物出土状況図



図Ⅳ－３－117　第１号土壙墓から出土した遺物
１～２：陶質の丸碗、３～８：銭貨「寛永通寶」

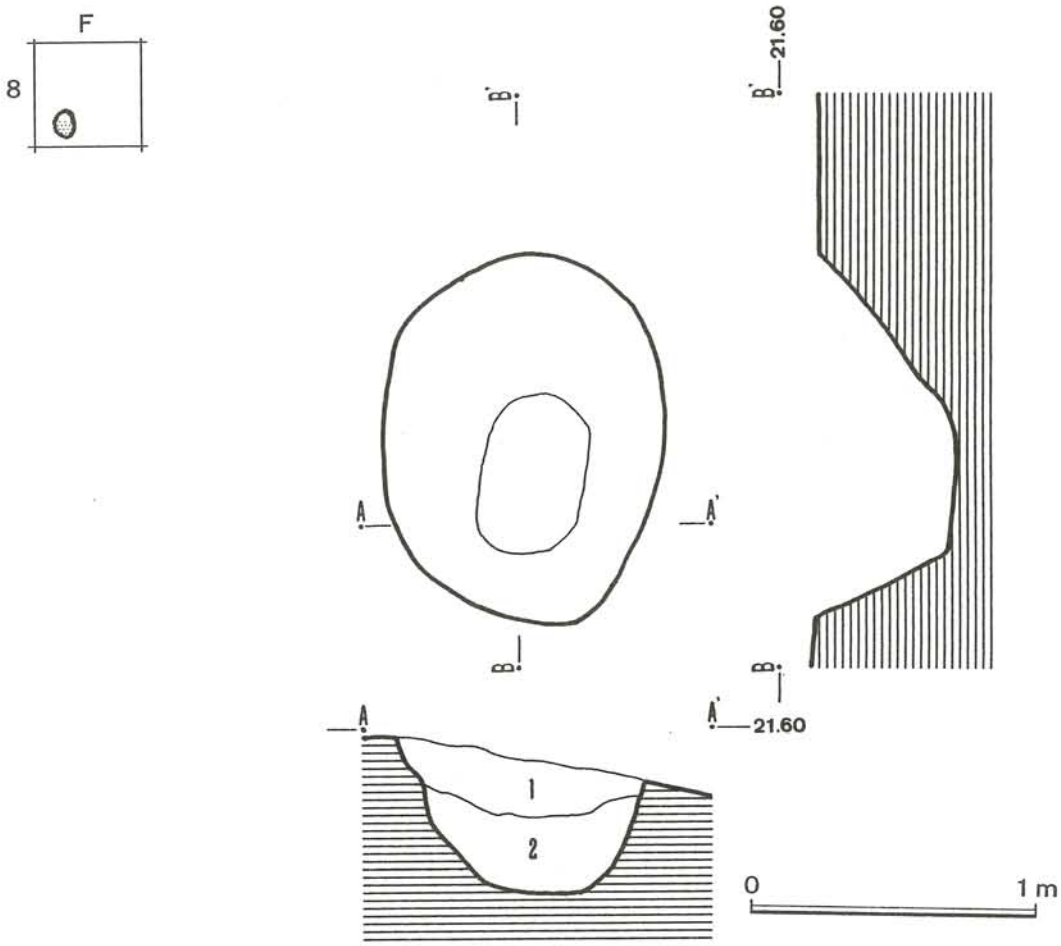
１（遺物№105）は釉が施された陶質の丸碗で、口径 8.8cm、底径 2.2cm、器高 5.2cmを測る。体部の外面の下半にヘラ削りが施され、暗茶褐色の素地の内・外面の上半に暗緑褐色の釉が施されている。

２（遺物№106）も釉が施された陶質の丸碗で、口径10.2cm、底径 4.4cm、器高 4.9cmを測る。体部の外面の下半はヘラ削り、内面は回転のナデ調整が施されている。素地は茶褐色で、内・外面に暗黄褐色の釉が施されている。

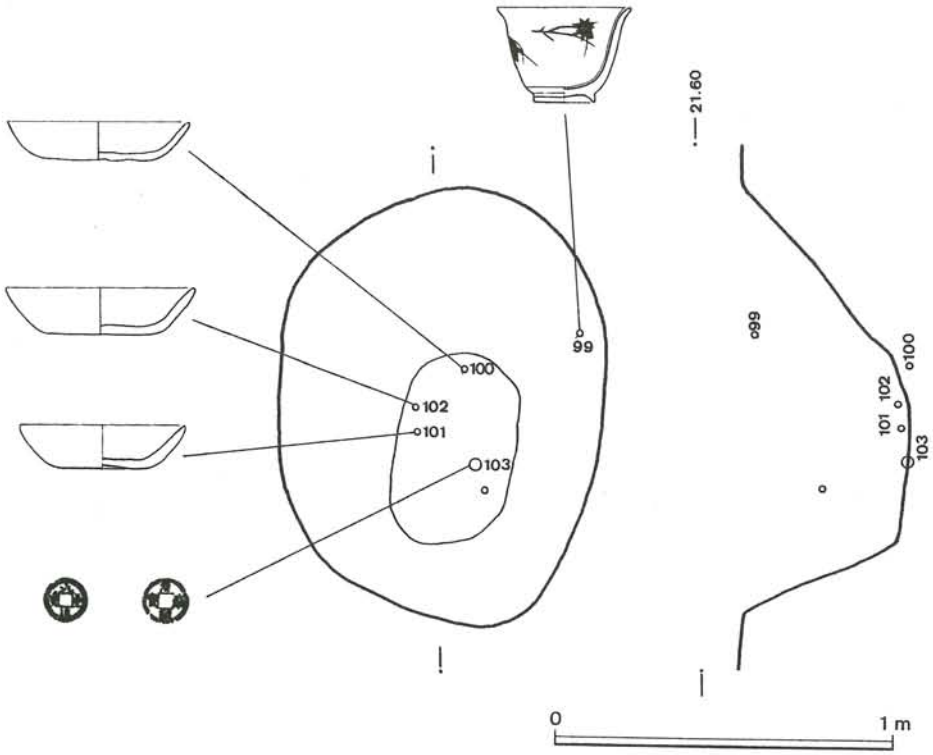
３～８（遺物№107-①～⑥）は銭貨「寛永通寶」で、その内５枚は背面に「文」の文字がある新寛永通寶である。これらの銭貨は、いわゆる六道銭と考えられ、６枚が重なって出土している。

銭　貨　の　計　測　値

遺物№	種　類	径(mm)	重量(g)	備　考
107-①	寛永通寶	25.0	3.50	背面に「文」の文字がある
107-②	寛永通寶	25.2	2.67	背面に「文」の文字がある
107-③	寛永通寶	25.0	3.88	背面に「文」の文字がある
107-④	寛永通寶	24.7	3.35	
107-⑤	寛永通寶	25.0	3.14	背面に「文」の文字がある
107-⑥	寛永通寶	25.0	2.97	背面に「文」の文字がある



図Ⅳ－３－118　第２号土壙墓の平面および断面図



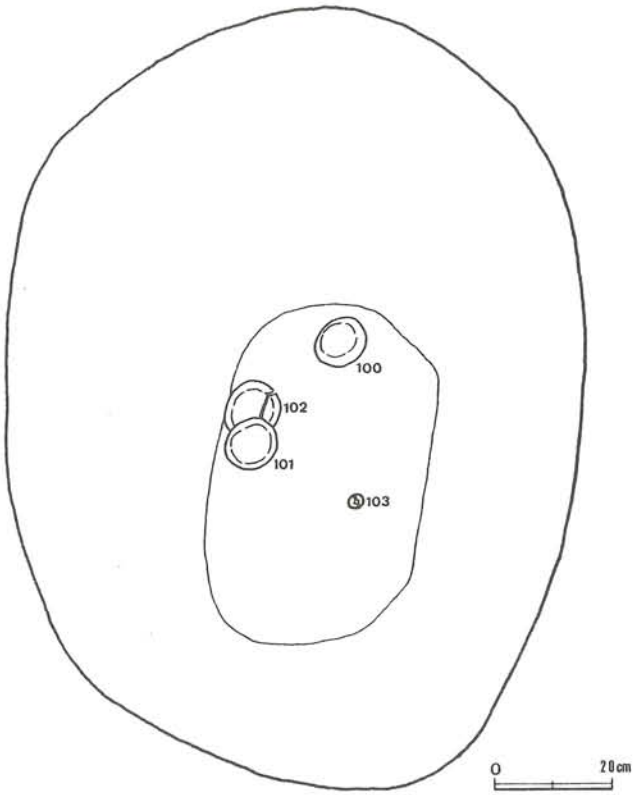
図Ⅳ－３－119　第２号土壙墓の遺物分布図

第２号土壙墓

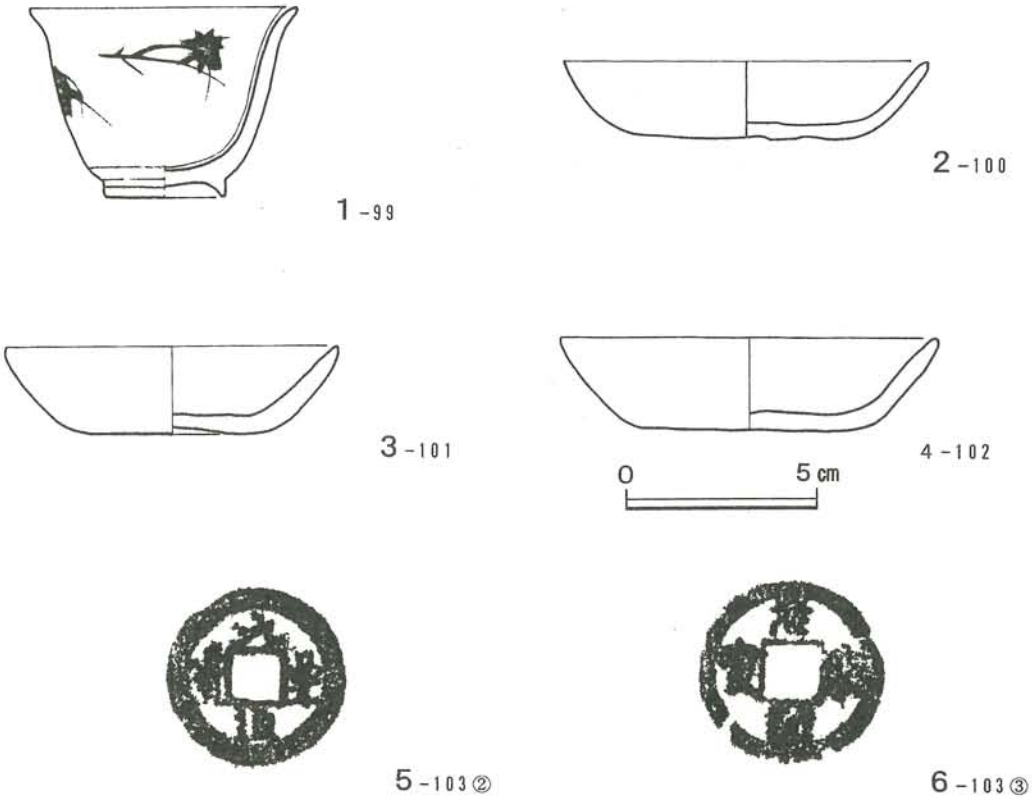
Ｆ－８グリッド内で、第１号土壙墓の北約３ｍに位置し、北側部分は第11号土壙墓を切っている。平面形状は楕円形で、長径 126cm、短径97cm、深さは最深部が47cmとやや深く、長軸はN-9°-E とほぼ北を指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈しており、南壁の立ち上がりは北壁と比べて急である。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径 0.5～12cm大の礫をやや多く含むほかに、骨の細片を少量含んでいる。第２層は暗茶褐色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径 0.5～20cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は覆土の上部から染付の猪口が、底面付近からは「かわらけ」が重なるように出土し、「かわらけ」と並ぶように銭貨が出土している。



図Ⅳ－３－120　第２号土壙墓の遺物出土状況図



図Ⅳ－３－121　第２号土壙墓から出土した遺物

１：染付、２～４：かわらけ、５・６：銭貨「元豊通寶」

１(遺物No.99)は染付の猪口で、口径７cm、器高５cm、底径 3.1cmを測り、松葉に紅葉の絵が描かれている。

２(遺物No.100) は手捏ね成形の「かわらけ」で、体部の内・外面に横ナデ調整が、底部は平底で外面はヘラ削り調整が施されている。

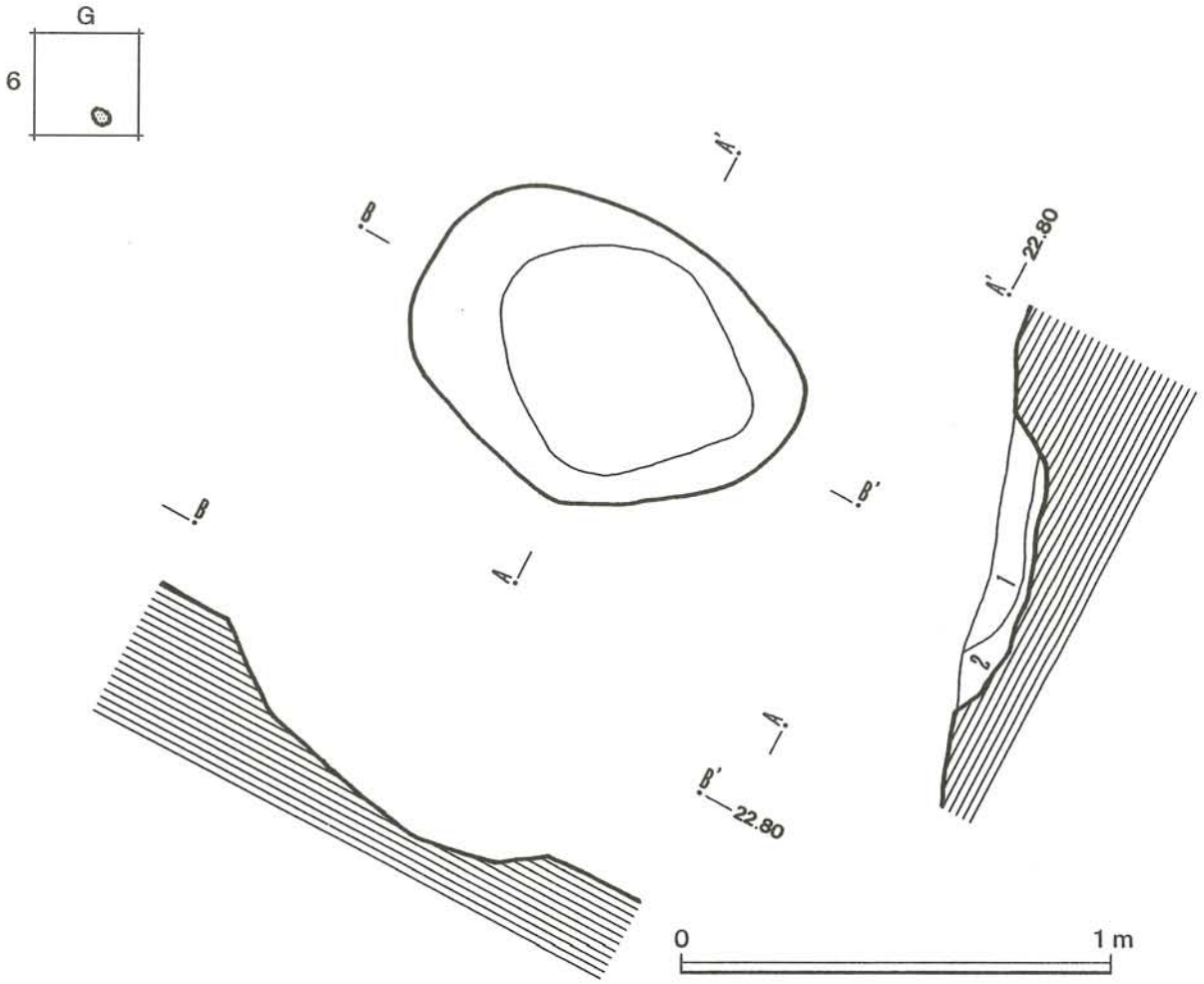
３(遺物No.101) も手捏ね成形の「かわらけ」で底部に僅かに凸面がみられ、体部の内・外面にナデ調整が、底部の外面にはやや粗いナデ調整が施されている。

４(遺物No.102) も手捏ね成形の「かわらけ」で、３(遺物No.101) と同様の形態・調整がみられる。胎土に金雲母が含まれるのが特徴である。

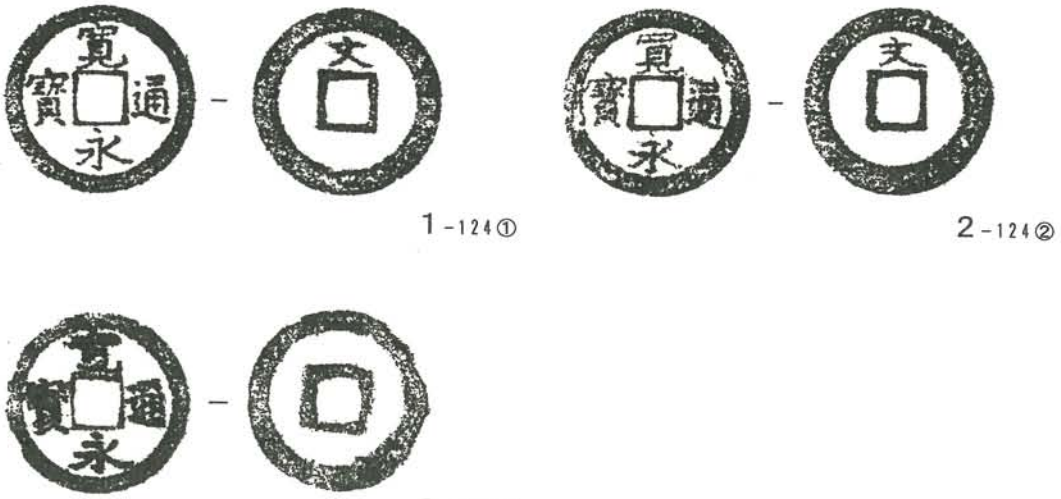
５・６(遺物No.103) は銭貨「元豊通寶」で、６枚のうち３枚は熔着し、ほかの１枚も表面が腐食して文字を読み取ることができない状態である。

銭　貨　の　計　測　値

遺物No.	種　類	径(mm)	重量(g)	備　考
103-①	□□□□	23.2	2.67	表面が腐食
103-②	元豊通寶	24.3	2.67	
103-③	元□□寶	24.4	2.21	
103-④	□□□□	23.7	7.22	３枚が熔着、表面が腐食



図Ⅳ－３－122　第３号土壙墓の平面および断面図



図Ⅳ－３－123　第３号土壙墓から出土した遺物

１～３：銭貨

第３号土壙墓

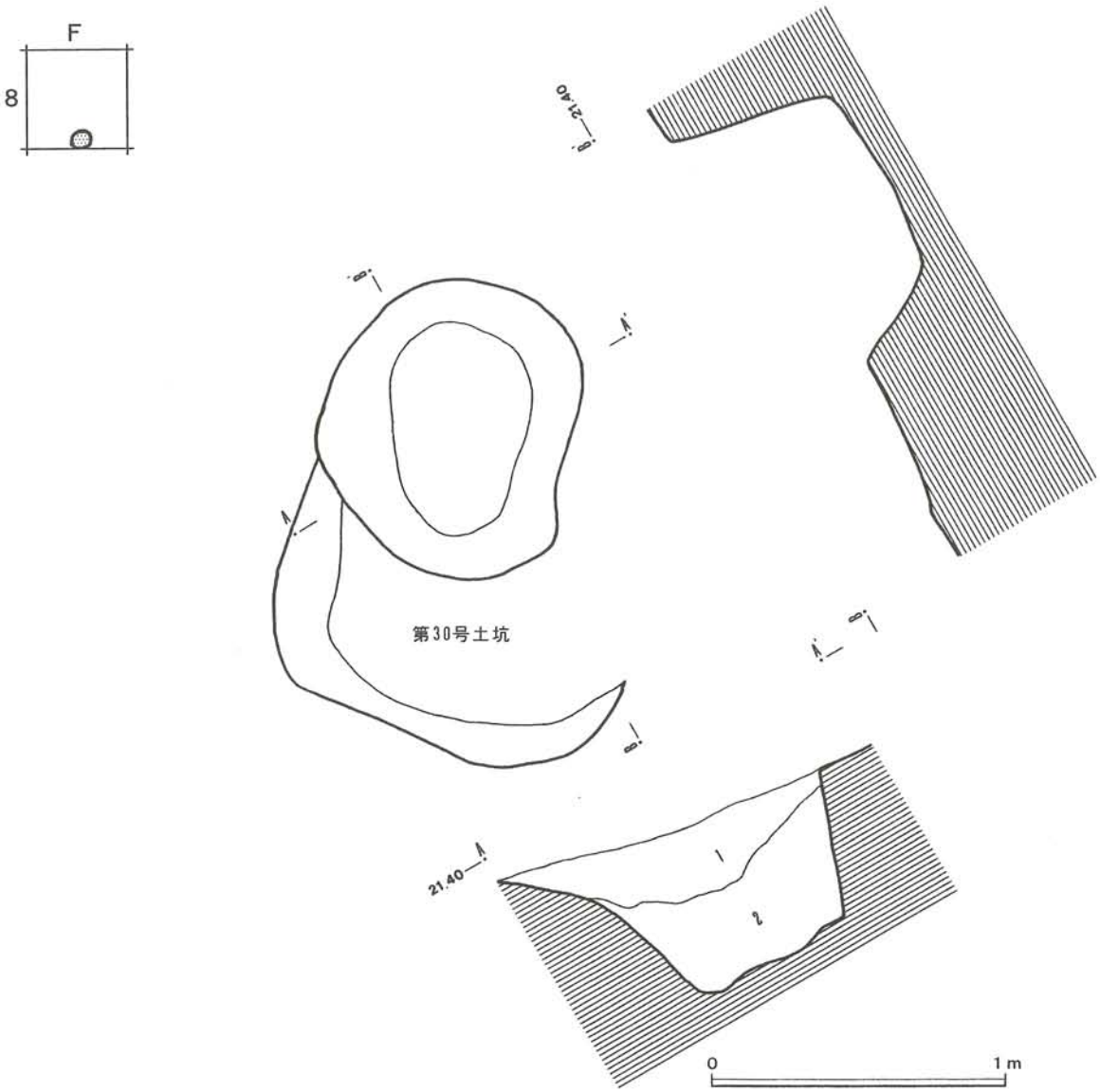
Ｇ－６グリッド内で、調査区北側の南向き斜面の中位に位置し、平面形状は楕円形で、長径94cm、短径70cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸はN-77°-W を指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は丸底状を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5～１cm大の礫を少量含んでいる。

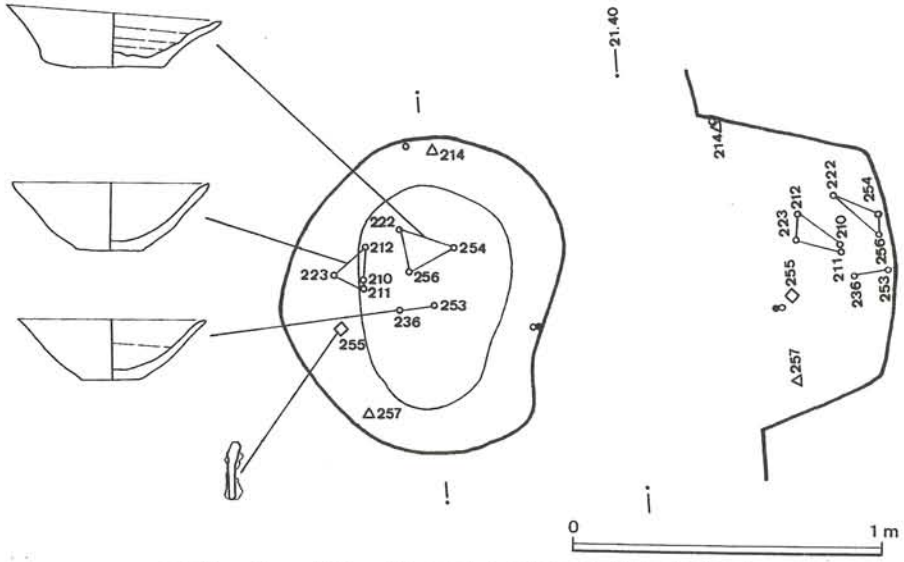
遺物は土壙内中央部の底面付近より銭貨「寛永通寶」(遺物No.124-①～③)が３枚重なるように出土している。この内の２枚は背面に「文」の字のある新寛永通寶である。

銭　貨　の　計　測　値

遺物No.	種　類	径(mm)	重量(g)	備　考
124-①	寛永通寶	25.0	3.18	背面に「文」の文字がある
124-②	寛永通寶	25.0	3.24	背面に「文」の文字がある
124-③	寛永通寶	24.3	2.46	



図Ⅳ－３－124　第４号土壙墓の平面および断面図



図Ⅳ－３－125　第４号土壙墓の遺物分布図

第４号土壙墓

Ｆ－８グリッド内で、第２号土壙墓の東方約２ｍに位置し、第30号土坑の北側部分を切っている。平面形状は不整楕円形で、長径 101cm、短径87cm、深さは最深部が59cmと深く、長軸はほぼ南北を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で、締りは強く、粘性はやや弱い。径 0.5～２cm大の礫と黄色土の小さなブロックを少量含んでいる。

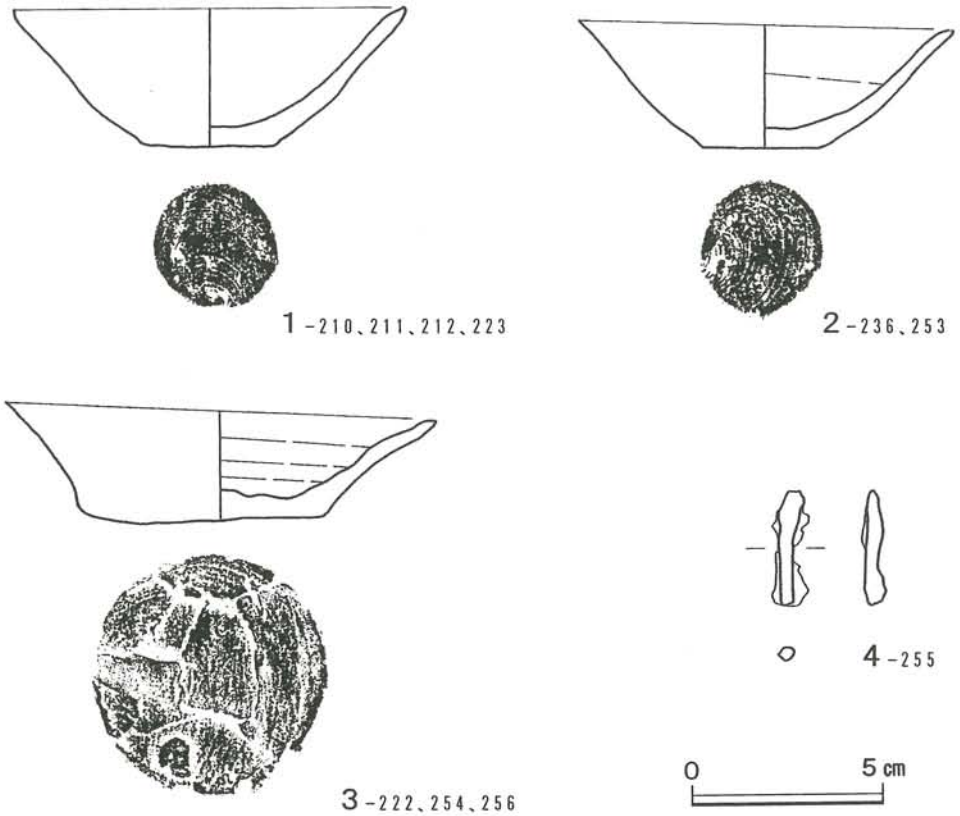
遺物は覆土の中位から底面にかけて「かわらけ」が３個体分、覆土の中位から鉄釘が１本、覆土の中位から上位にかけて頚骨(遺物No.214)や腓骨(遺物No.257)と思われる人骨片が出土している。

１(遺物No.210、No.211、No.212、No.223) はロクロ成形の「かわらけ」で、体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面は底部から体部にかけてヘラ削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

２(遺物No.236、No.253) もロクロ成形の「かわらけ」で形態・調整とも１と同一である。この２個体は土壙中央部の底面付近から出土している。

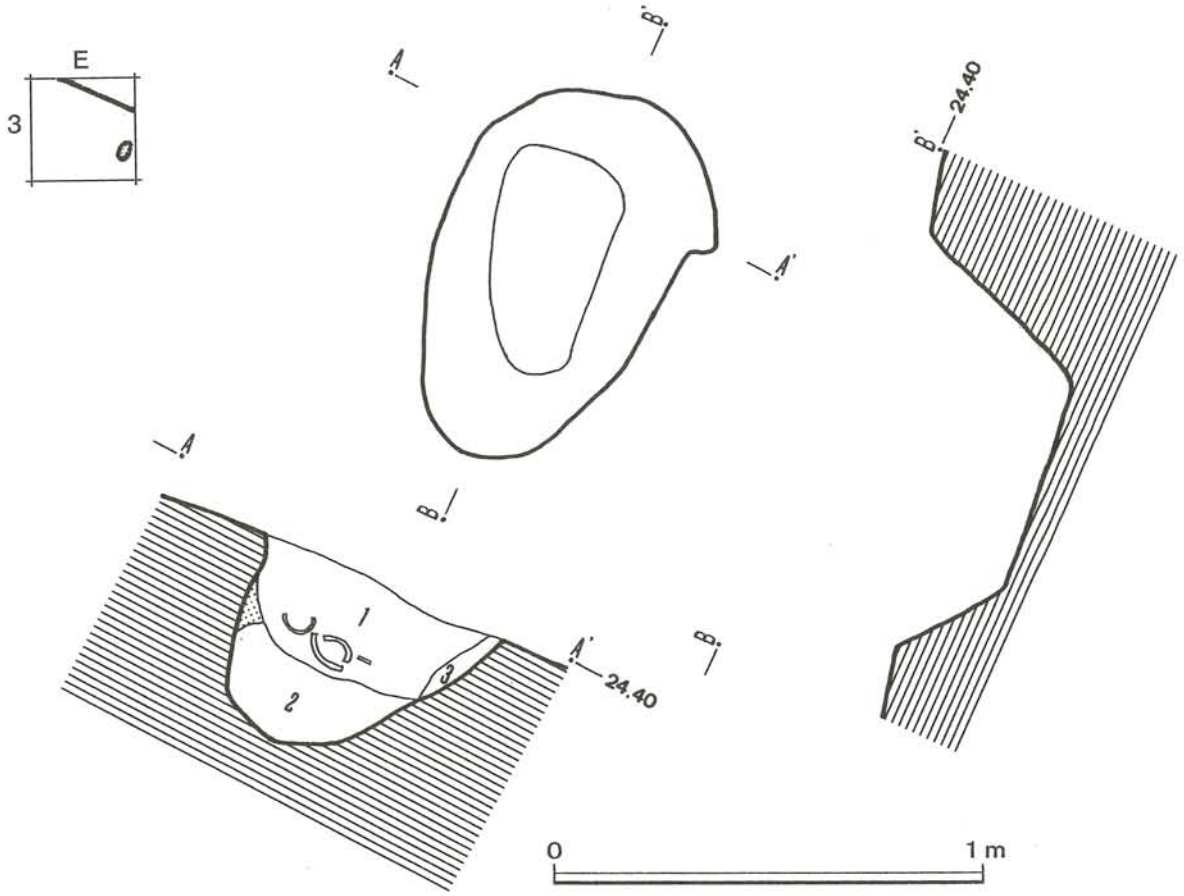
３(遺物No.222、No.254、No.256) もロクロ成形の「かわらけ」で、１と２に比べて底径が大きい以外は、調整方法など同一である。

４(遺物No.255) は鉄製の釘で、頭部と先端部が欠損した状態で出土している。

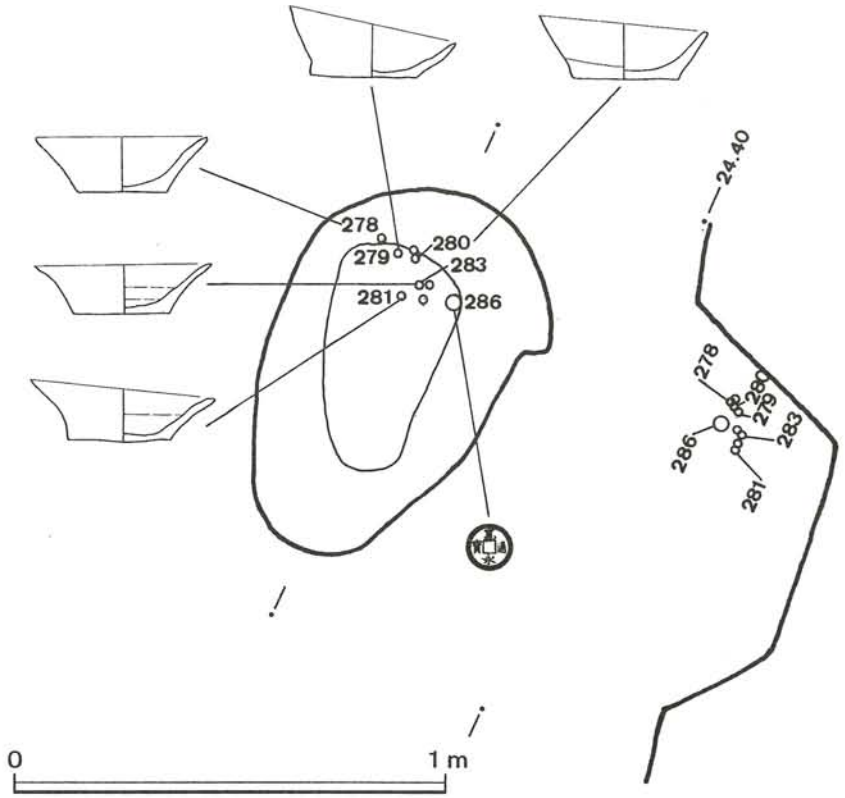


図Ⅳ－３－126　第４号土壙墓から出土した遺物

１～３：かわらけ、４：鉄釘



図Ⅳ－３－127　第５号土壙墓の平面および断面図



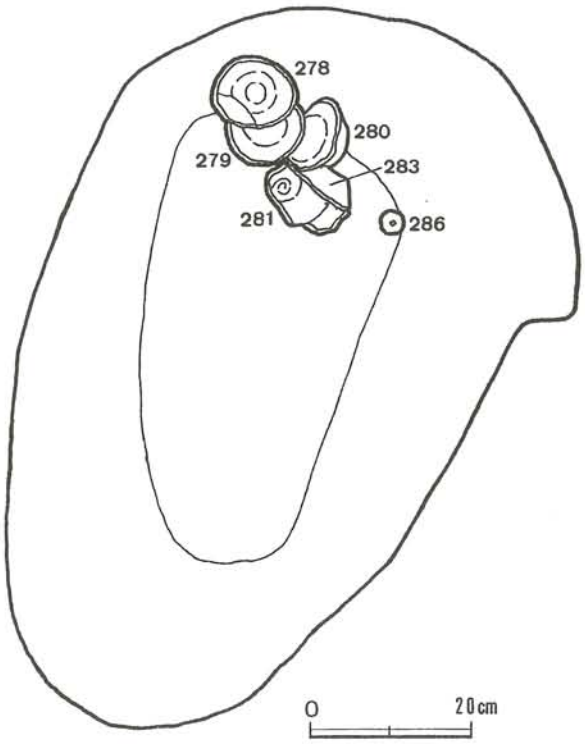
図Ⅳ－３－128　第５号土壙墓の遺物分布図

第５号土壙墓

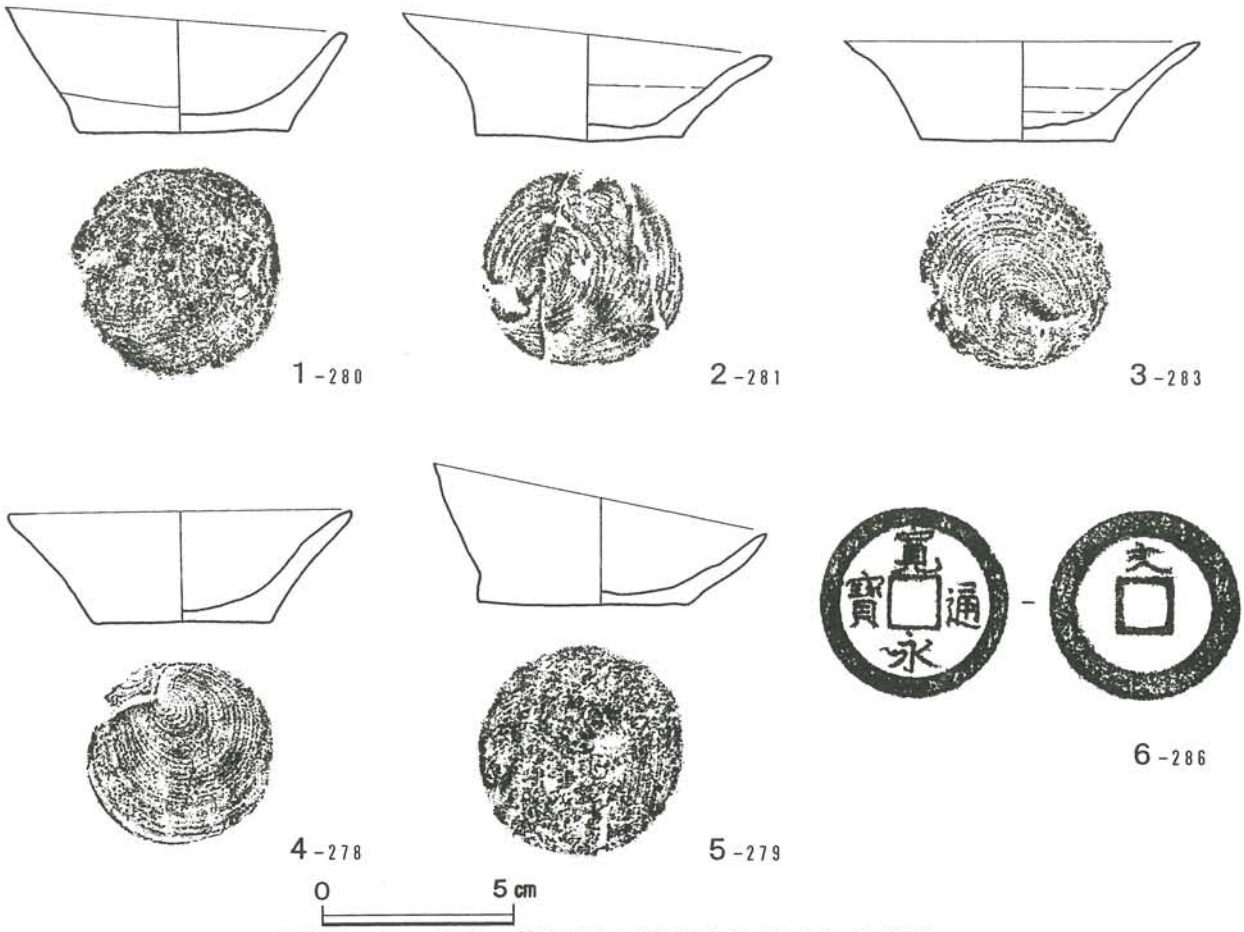
Ｅ－３グリッド内に位置し、第２号方形周溝墓の東溝(第33号溝)を切っている。平面形状は不整楕円形で、長径89cm、短径58cm、深さは最深部が44cmとやや深く、長軸はN-19°-E を指している。断面形状は丸底で上に開くU字形を呈している。

覆土は３層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りも粘性もやや弱く、径 0.5～４cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5～２cm大の礫を少量含んでいる。第３層は暗黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は土壙の中央から北側にかけての覆土第１層の底面より、土器は重なるように、銭貨は土器に隣接して出土している。



図Ⅳ－３－129　第５号土壙墓の遺物出土状況図



図Ⅳ－３－130　第５号土壙墓から出土した遺物

１（遺物No.280）はロクロ成形の「かわらけ」で、底径が小さく、体部の外面はヘラ削り、内面は底部から体部にかけてヘラ削り（右回転）をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

２（遺物No.281）と３（遺物No.283）もロクロ成形の「かわらけ」で形態・調整ともに１と同一である。

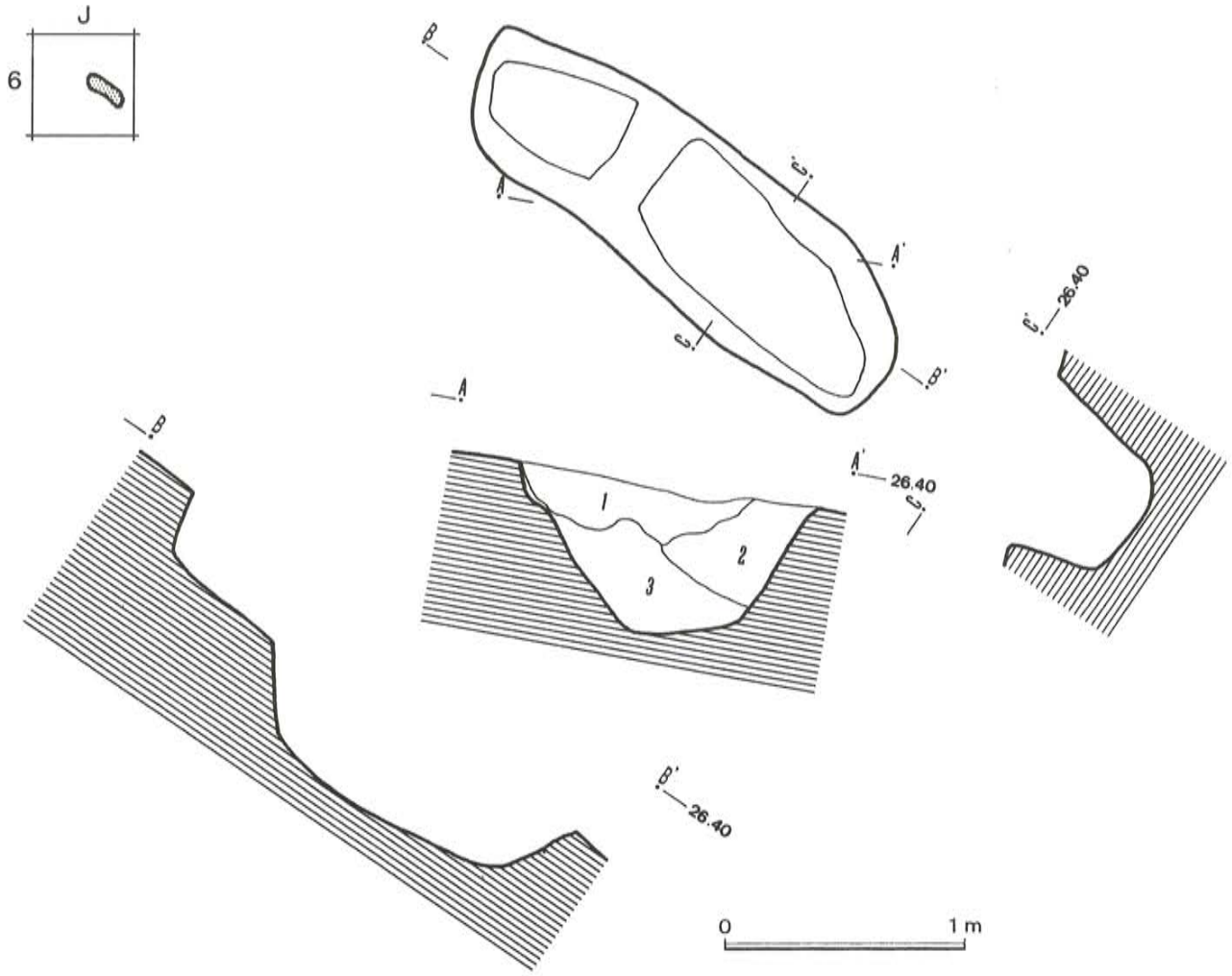
４（遺物No.278）もロクロ成形の「かわらけ」で、底径が小さい以外は他のかわらけと同一である。

５（遺物No.279）もロクロ成形の「かわらけ」であるが、口縁部にかけての立ち上がりに相違が見られる。底部は静止糸切りをした後にナデ調整を施したようである。

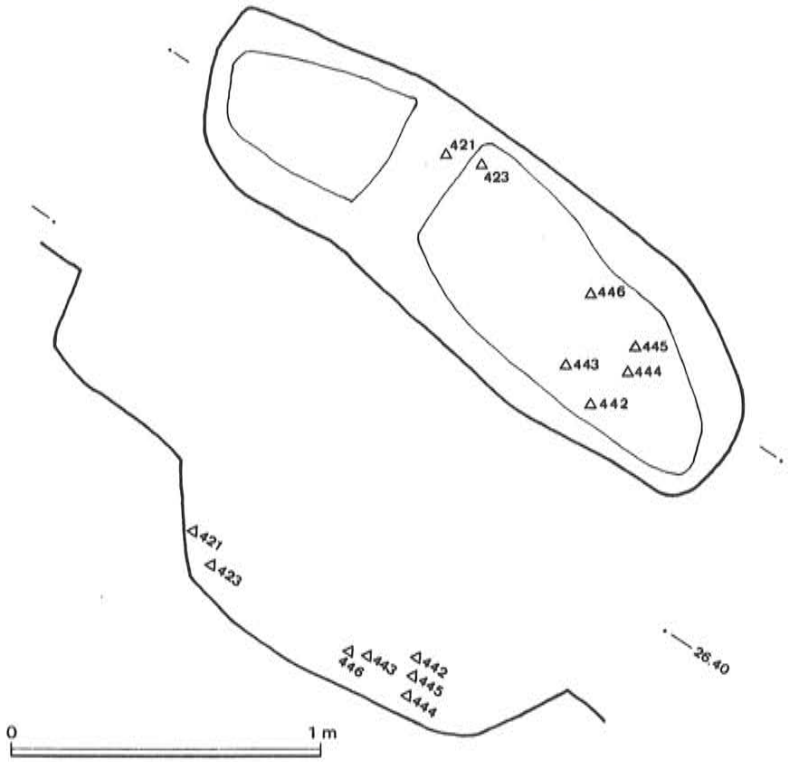
６（遺物No.286）は銭貨「寛永通寶」で、背面に「文」の文字がある新寛永通寶である。

銭　貨　の　計　測　値

遺物No.	種　類	径（mm）	重量（g）	備　考
286	寛永通寶	25.3	3.02	背面に「文」の文字がある



図Ⅳ－３－131　第６号土壙墓の平面および断面図



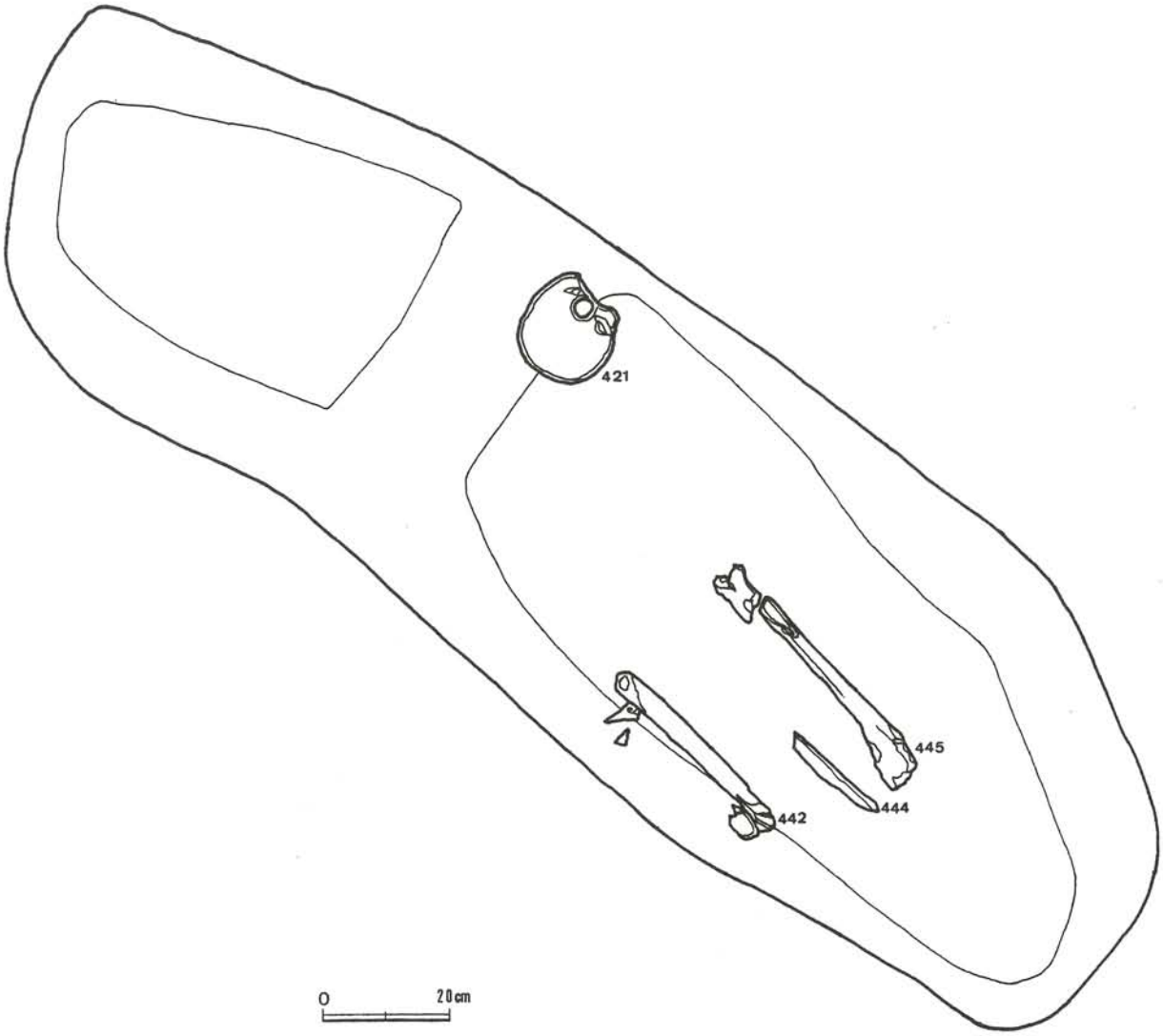
図Ⅳ－３－132　第６号土壙墓の遺物分布図

第６号土壙墓

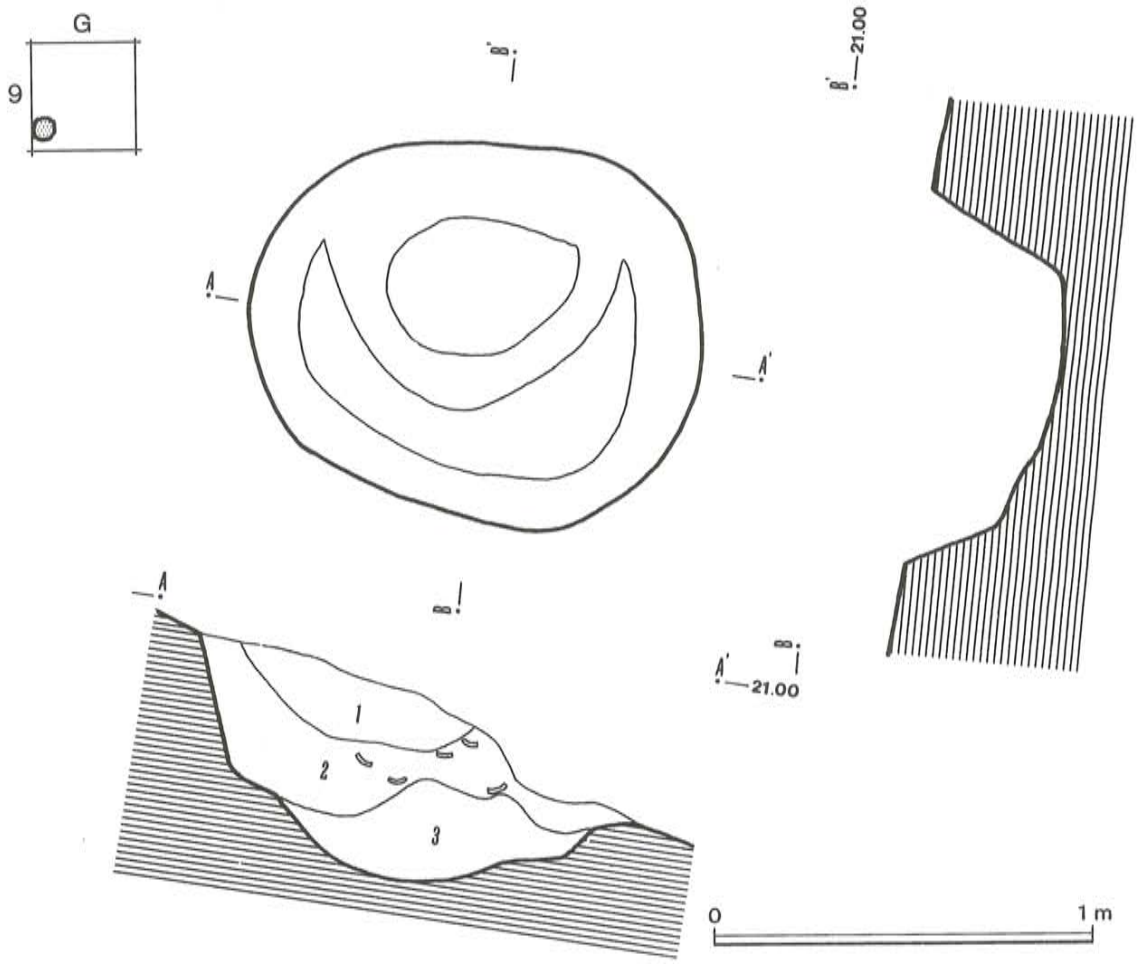
Ｊ－６グリッド内で北東の急斜面の上位に位置し、平面形状は細長い隅丸長方形で、長径 210cm、短径66cm、深さは最深部が58cmとやや深く、長軸はN-52°-W を指している。断面形状はＵ字形を呈しており、北西側に深さ24cmほどの段がある。

覆土は３層に分けられ、第１層は暗褐色で、締りも粘性も弱く、径 0.3～７cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径 0.3～10cm大の礫をやや多く含んでいる。第３層は暗黄褐色土で、締りは弱く、粘性はやや弱い。径 0.3～８cm大の礫を多く含んでいる。

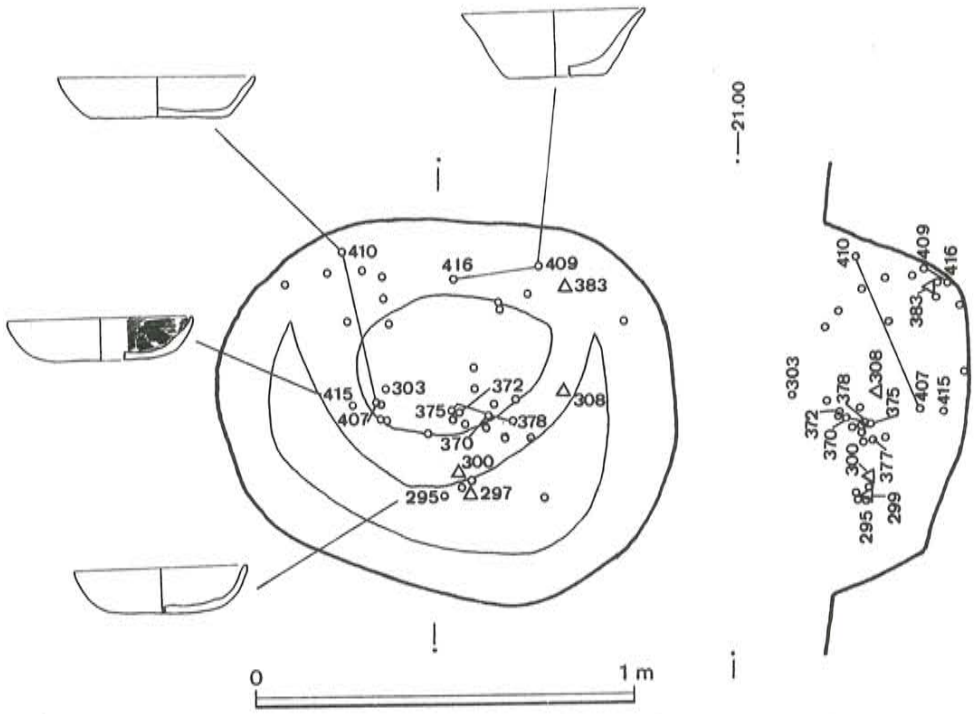
遺物は人骨片のみで、大臼歯３本、小臼歯１本、門歯１本を含む頭蓋骨(遺物No.421)、頚椎、肋骨(遺物No.423)、脛骨(遺物No.443、No.444)、大腿骨(遺物No.442、No.445) など 108点が出土している。これらの人骨片は土壙の深い部分の北西側から頭蓋骨、頚椎、肋骨などが、中央から南東側にかけての底面付近のから脛骨、大腿骨などが出土している状況からみて、おそらく屈葬と思われる。



図Ⅳ－３－133　第６号土壙墓の遺物出土状況図



図Ⅳ－３－134　第７号土壙墓の平面および断面図



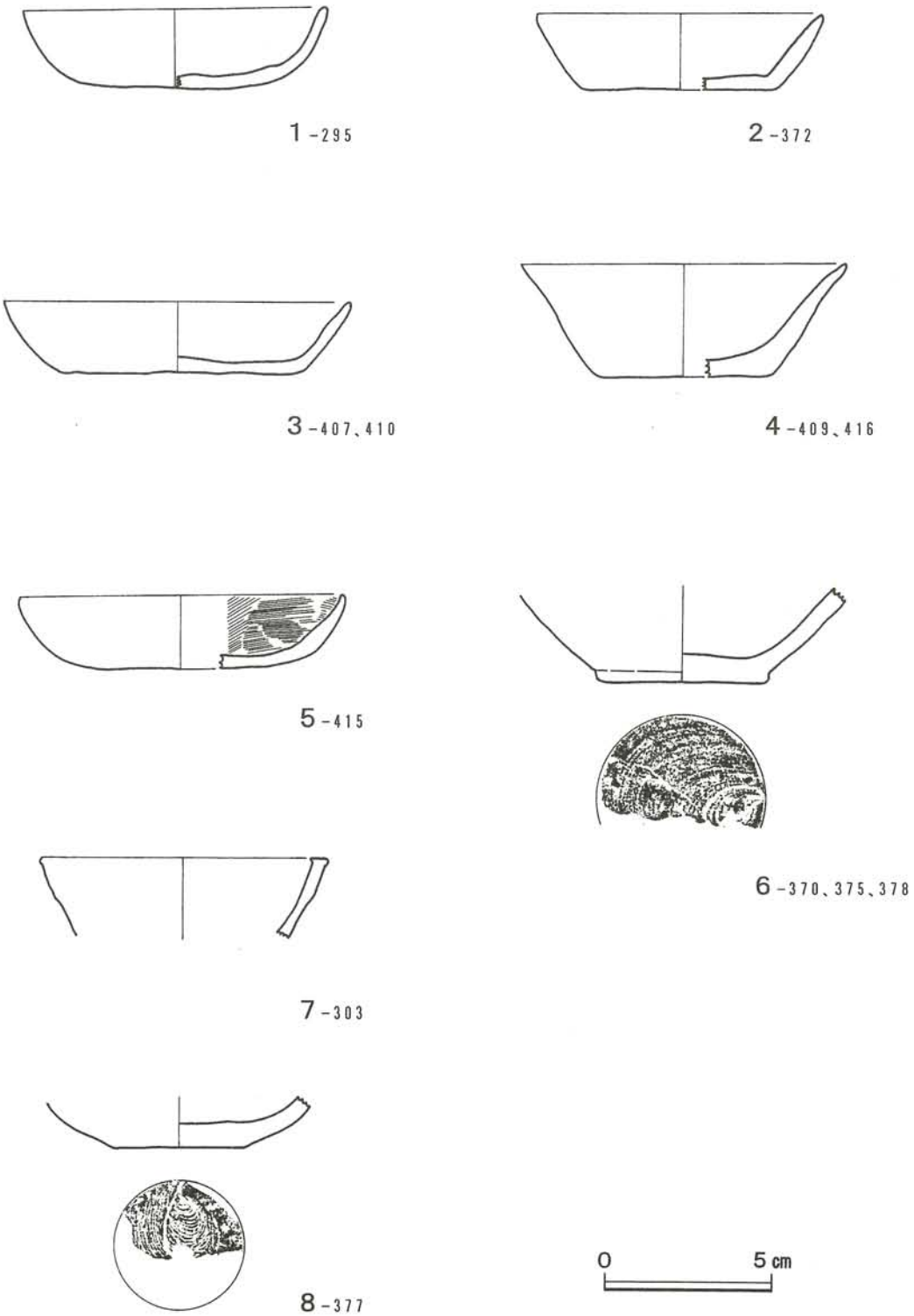
図Ⅳ－３－135　第７号土壙墓の遺物分布図

第７号土壙墓

Ｇ－９グリッド内で、第１号土壙墓の東南側約５ｍに位置し、平面形状は楕円形で、長径 120cm、短径は 101cm、深さは最深部が50cmとやや深く、長軸はN-82°-W を指している。断面形状は丸底で上に開くＵ字形を呈しており、南側を巡るように小さな段がある。

覆土は３層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は強い。径 0.5～８cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。第２層は黒褐色土で締りも粘性もやや弱く、径 0.5～８cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。第３層は暗褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径 0.5～15cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は北側壁面の底面に近い部分と中央部の中位から「かわらけ」をはじめ、施釉陶質土器が散在するように出土し、人骨片は頚骨・腓骨・肋骨(遺物No.299、No.300、No.308、No.383)など12点が出土している。



図Ⅳ－３－136　第７号土壙墓から出土した遺物
１～６：かわらけ、７～８：釉が施された陶質土器

１(遺物No.295) は手捏ね成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、体部の外面はヘラ削りの後に横ナデ調整が施され、内面は底部から体部にかけてヘラ削りの後に横ナデ調整が施されている。底部は平底で粗いナデ調整が施されている。

２(遺物No.372)も手捏ね成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、体部の外面は磨滅のため詳細は不明であるが、内面は横ナデ調整が施されている。底部は平底でナデ調整が施されている。

３(遺物No.407、No.410) も手捏ね成形の「かわらけ」で、体部の外面はナデ調整が施され、内面はヘラ削りの後にナデ調整が施されている。底部は平底でナデ調整が施される。

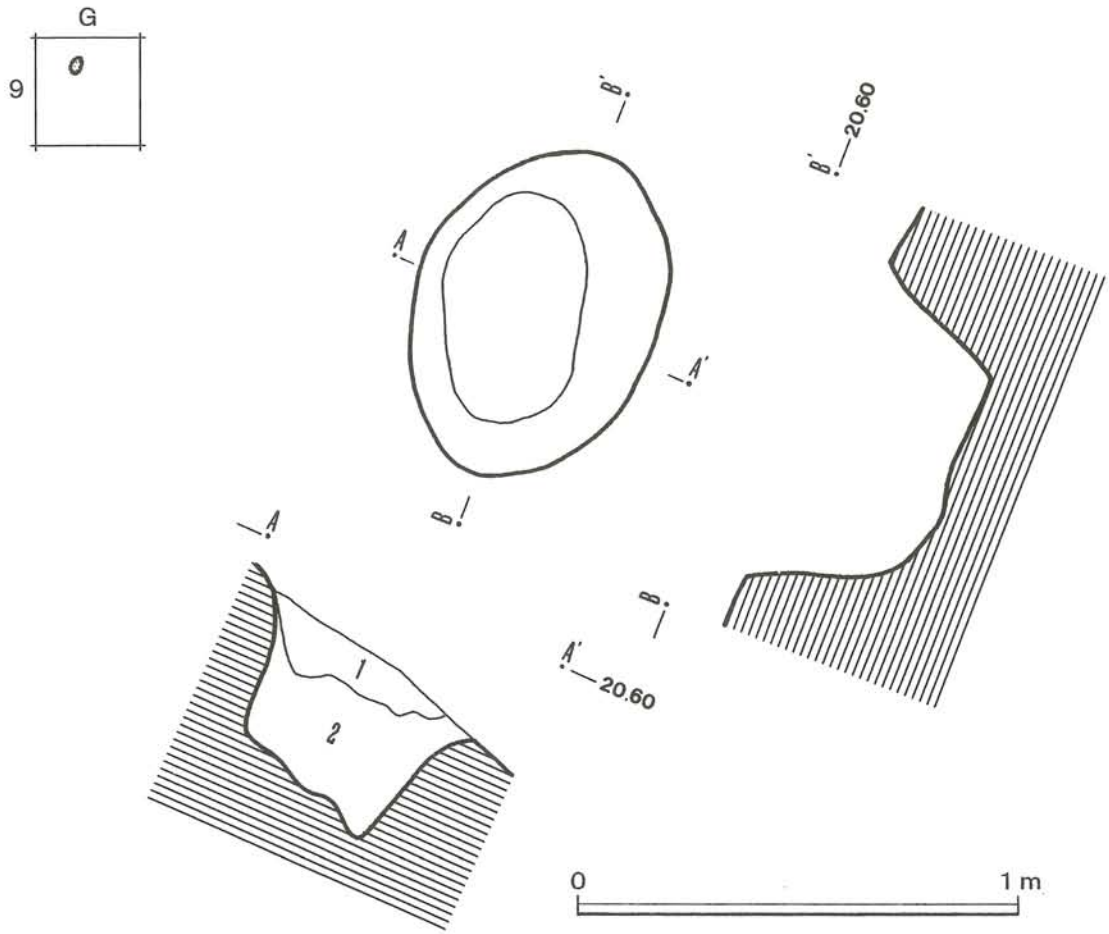
４(遺物No.409、No.416) も手捏ね成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、体部の外面はハケメ調整が施され、内面はナデ調整が施されている。底部は平底でヘラ削りが施されている。

５(遺物No.415) も手捏ね成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、体部の外面は横ナデ調整が施され、内面はやや粗いハケメ調整が施されている。底部は平底でナデ調整が施されている。

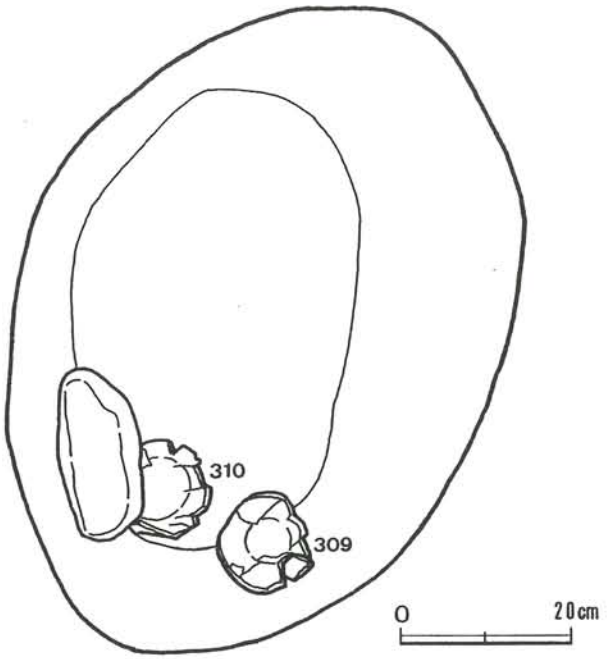
６(遺物No.370、No.375、No.378) ロクロ成形の「かわらけ」の底部から体部にかけての破片で、体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面は底部から体部にかけてヘラ削り(右回転)した後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。胎土に金雲母が含まれている。

７(遺物No.303) は釉が施された陶質土器の口縁部で、口径が 8.6cmを測り、僅かに内彎しながら立ち上がっている。口唇部の内外に稜を有し、内・外面ともにナデ調整をした後に茶褐色の釉が施されている。素地は暗橙褐色である。

８(遺物No.377) も釉が施された陶質土器の底部から体部にかけての破片で、体部の内・外面ともに回転のナデ調整をした後に乳白色の釉が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。素地は淡赤褐色である。



図Ⅳ－３－137　第８号土壙墓の平面および断面図



図Ⅳ－３－138　第８号土壙墓の遺物出土状況図

第８号土壙墓

Ｇ－９グリッド内で、第７号土壙墓の北側約３ｍに位置し、平面形状は楕円形で、長径78cm、短径55cm、深さは最深部が36cmあり、長軸はN-22°-E を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

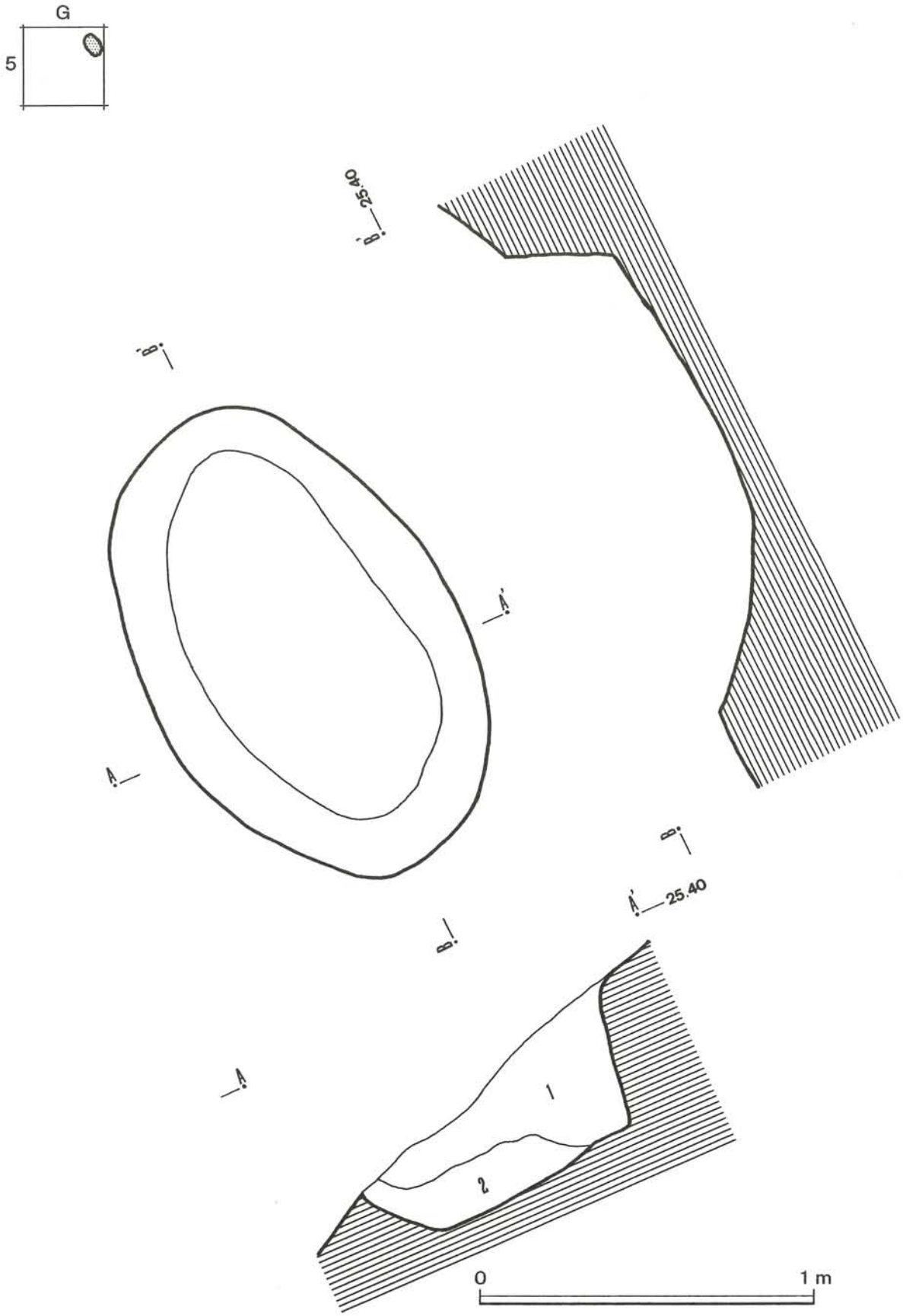
覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.5～３cm大の礫を少量含んでいる。第２層は黒褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径 0.5～５cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は土壙の南側の第１層の底面付近から「かわらけ」が２点並んで出土している。

１（遺物No.309）は手捏ね成形の「かわらけ」で、体部の外面は横ナデ調整が施され、内面はやや粗いハケメ調整とナデ調整が施されている。底部は平底でナデ調整が施されている。胎土に金雲母が含まれている。

２（遺物No.310）も手捏ね成形の「かわらけ」で、形態・調整・胎土とも１と同一である。

図Ⅳ－３－139　第８号土壙墓から出土した遺物
１・２：かわらけ



図Ⅳ－３－140　第９号土壙墓の平面および断面図

第９号土壙墓

Ｇ－５グリッド内で、第３号方形周溝墓内の南向き斜面に位置し、平面形状は楕円形で、長径 150cm、短径96cm、深さは最深部が41cmあり、長軸はN-27°-W を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈しており、南西側の壁面は北東側の壁面に比べて緩やかに立ち上がっている。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径 0.5～３cm大の礫をやや多く含むほかに、炭化物と黄褐色土の粒を少量含んでいる。第２層は暗黒褐色土で、締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5～２cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。

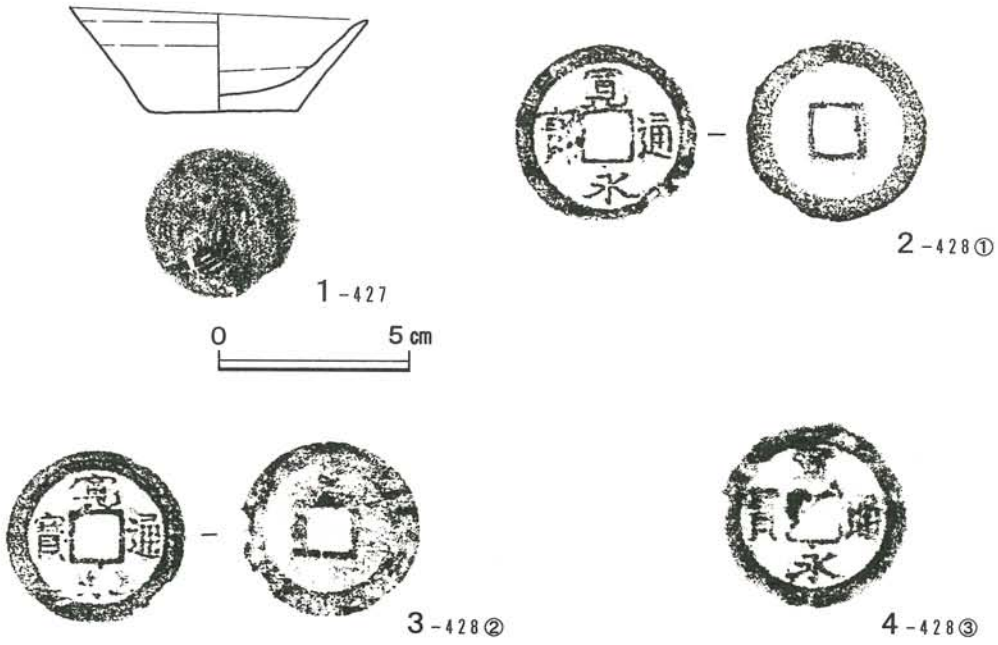
遺物は北側の壁に近い覆土から「かわらけ」が１点、中央部よりやや北側の土壙の底面に近いところから銭貨が６枚重なって出土している。

１（遺物№427）はロクロ成形の「かわらけ」で、体部の外面はヘラ削りにナデ調整が施され、内面は回転のナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

２～４（遺物№428-①～③）は銭貨「寛永通寶」で、これ以外の３枚は熔着し表面が腐食しているため文字の判読は出来ない状態である。

銭　貨　の　計　測　値

遺物No.	種　類	径(mm)	重量(g)	備　考
428-①	寛永通寶	24.3	2.53	
428-②	寛永通寶	23.5	1.38	
428-③	寛永通寶	25.0	3.11	
428-④	□□□□	26.8	9.72	３枚が熔着、表面が腐食



図Ⅳ－３－141　第９号土壙墓から出土した遺物

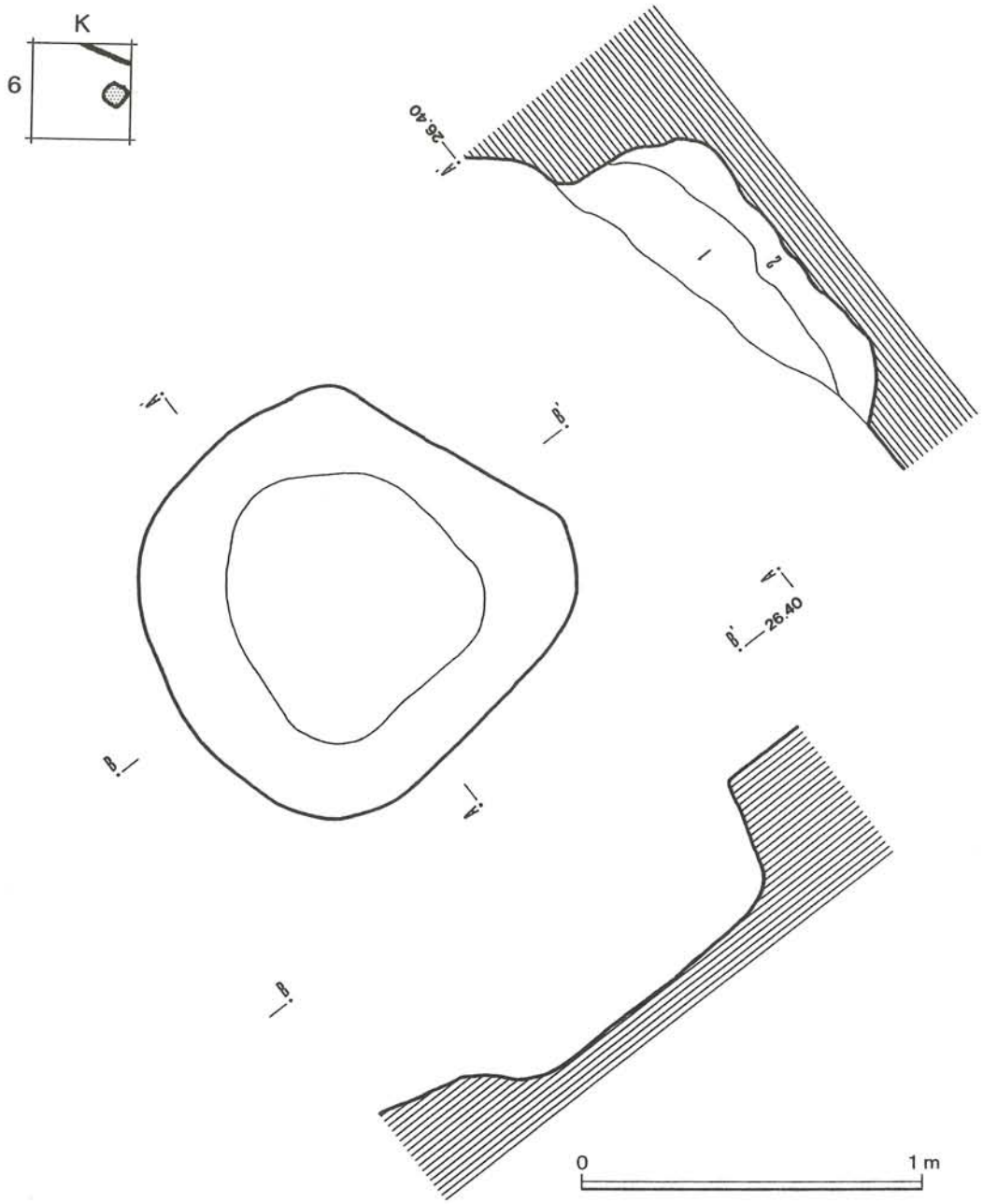
１：かわらけ、２～４：銭貨「寛永通寶」

第10号土壙墓

Ｋ－６グリッド内で、南向き斜面の上位にある第６号土壙墓から東へ約５ｍに位置し、平面形状は不整円形で、長径 129cm、短径126cm、深さは最深部が36cmあり、長軸は東西を指している。断面形状はＵ字形を呈しているが、南側の壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で、締りはやや弱く、粘性は弱い。径 0.3～10cm大の礫を多く含んでいる。第２層は暗茶褐色土で、締りはやや弱く、粘性は弱い。径 0.3～７cm大の礫を多く含み、骨粉をやや多く含んでいる。

遺物は粉状の骨(遺物No.556) が土壙の中央部よりやや北側の底面から出土している。



図Ⅳ－３－142　第10号土壙墓の平面および断面図

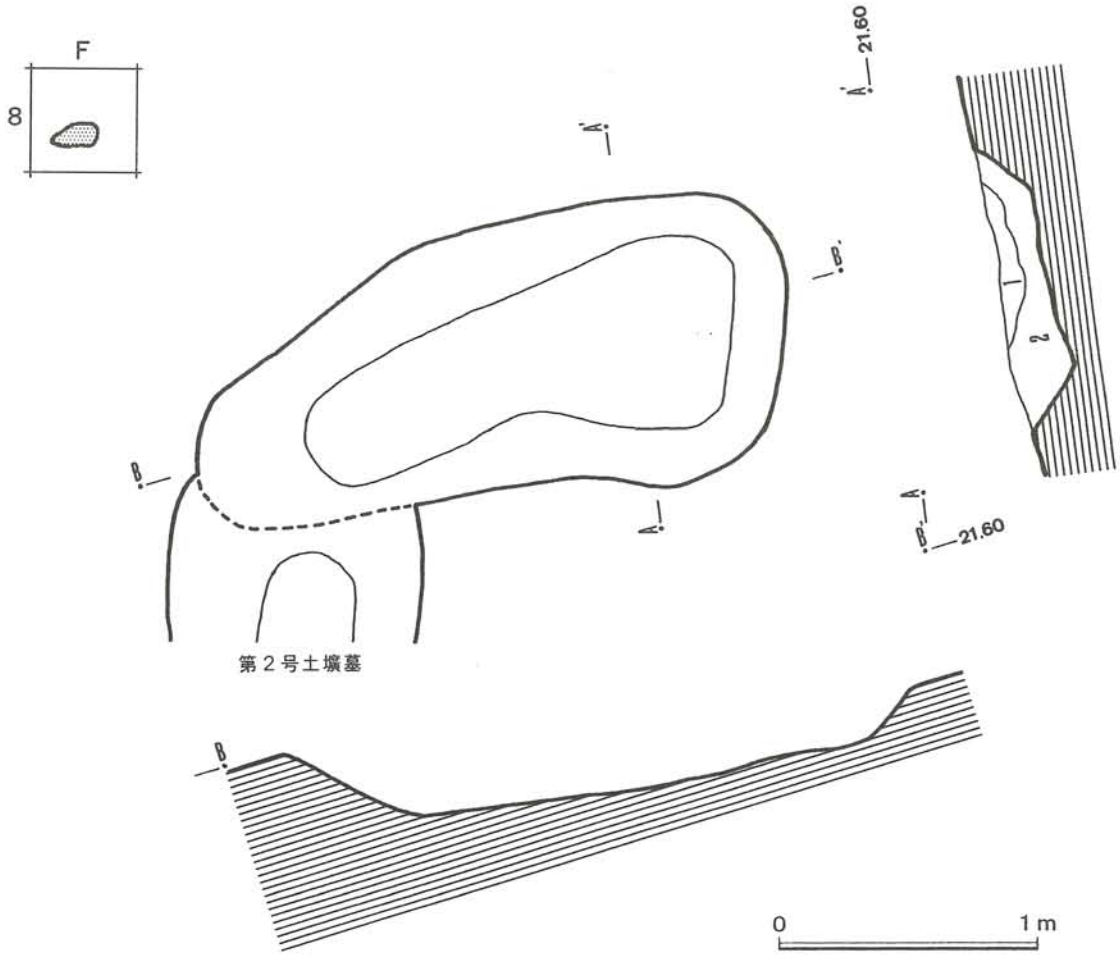
第11号土壙墓

Ｆ－８グリッド内で、第３号土壙墓の西約７ｍに位置し、西側を第２号土壙墓に切られている。平面形状は不整楕円形で、長径 234cm、短径 111cm、深さは最深部が28cmあり、長軸はN-73°-E を指している。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.5～６cm大の礫をやや多く含んでいる。第２層は暗茶褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径１～８cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は土壙内の南壁付近より土器片が１点出土している。

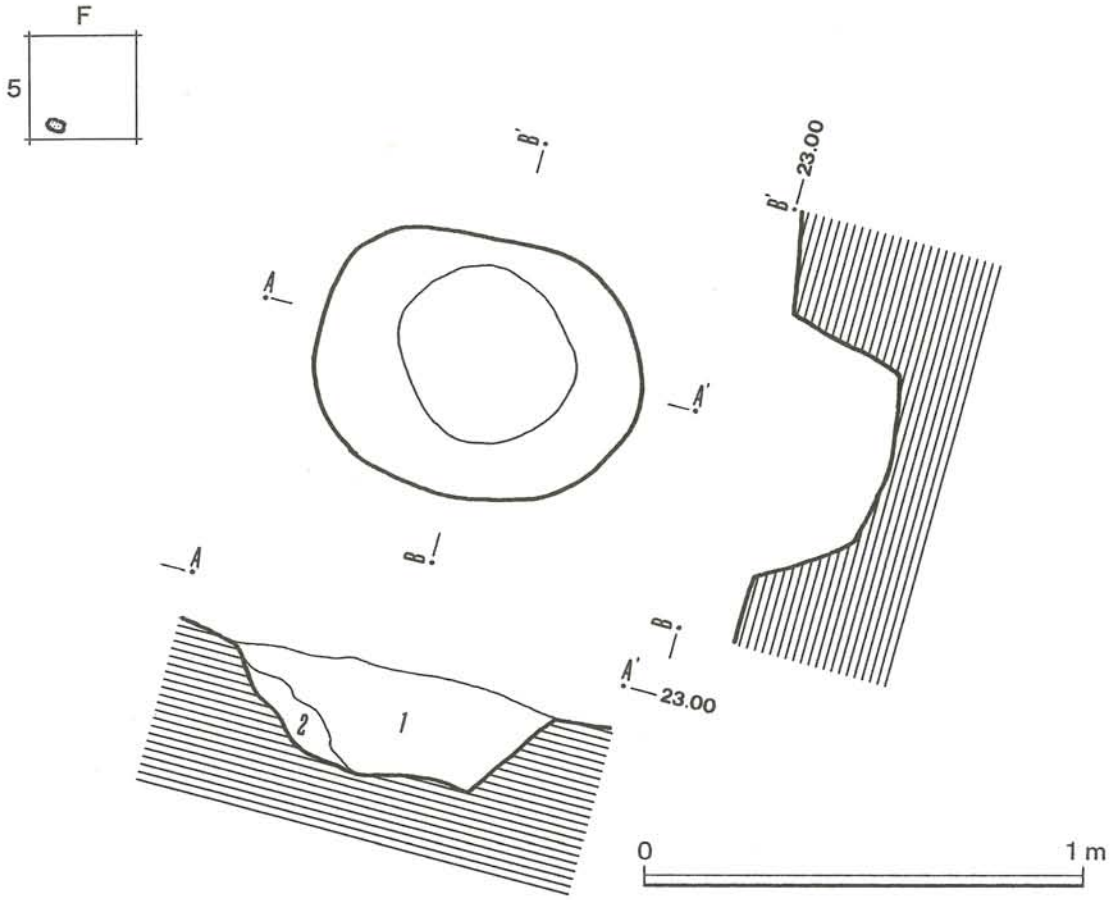
１（遺物No.127）は陶質の皿形土器の口縁部の破片で、推定口径10.8cm、器高 1.8cm、推定底径6.8cmを測り、内・外面ともに回転の丁寧なナデ調整が施されている。



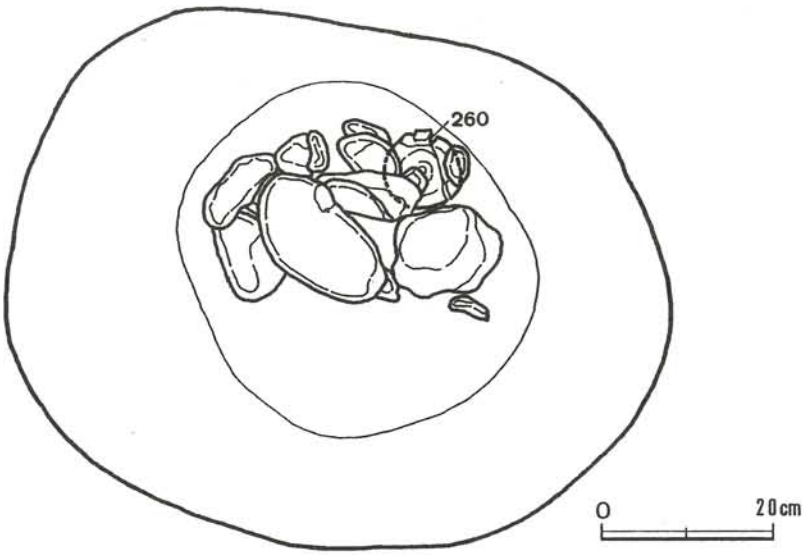
図Ⅳ－３－143　第11号土壙墓の平面および断面図

図Ⅳ－３－144　第11号土壙墓から出土した遺物

１：陶質の皿形土器



図Ⅳ－３－145　第12号土壙墓の平面および断面図



図Ⅳ－３－146　第12号土壙墓の遺物出土状況図

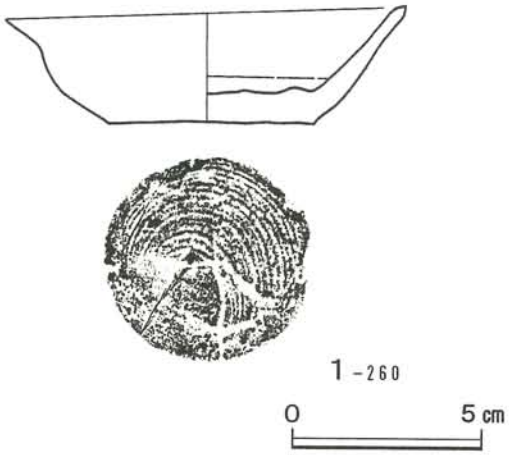
第12号土壙墓

Ｆ－５グリッド内で、第９号土壙墓の西約５ｍに位置し、平面形状は楕円形で、長径75cm、短径60cm、深さは最深部が25cmあり、長軸はN-77°-W を指している。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈しているが、北側の壁面は急に立ち上がっている。

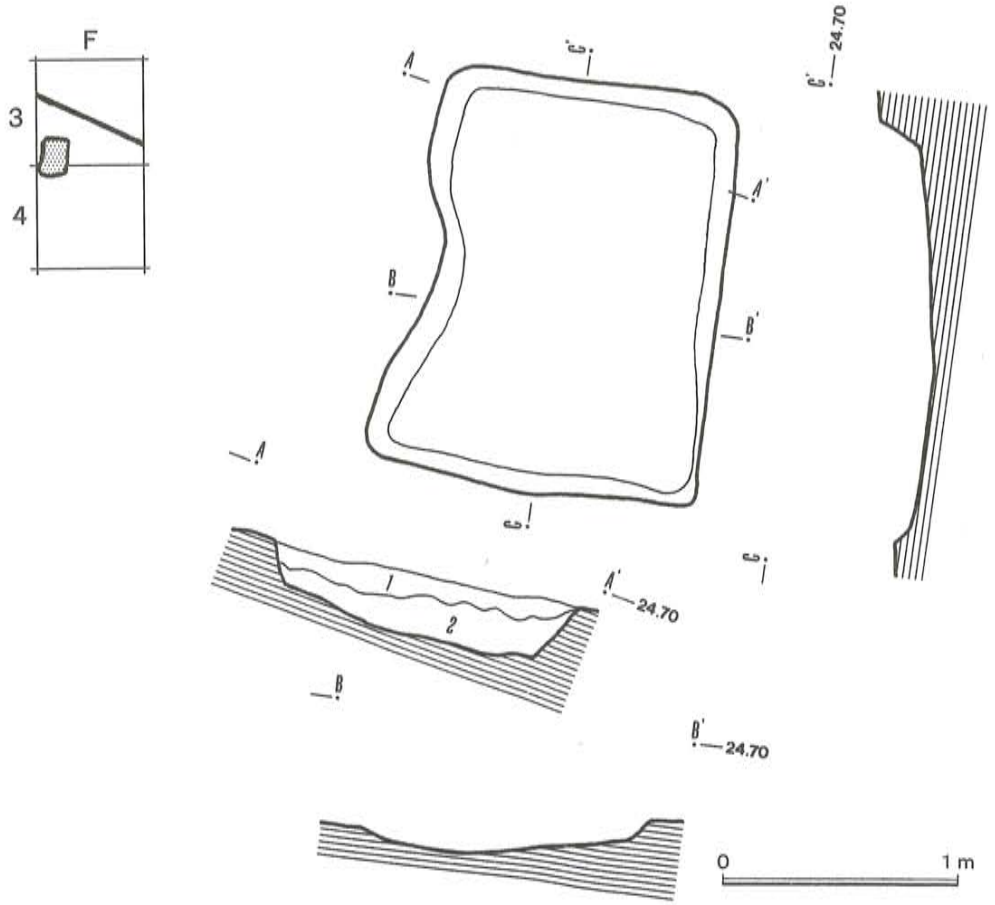
覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径 0.5～20cm大の礫を多く含んでいる。第２層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径 0.5～４cm大の礫と黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

土壙の北側の底面付近には、10～15cm大の礫が敷石状に並んでおり、これらの礫の下の土壙底面より「かわらけ」が１点出土している。

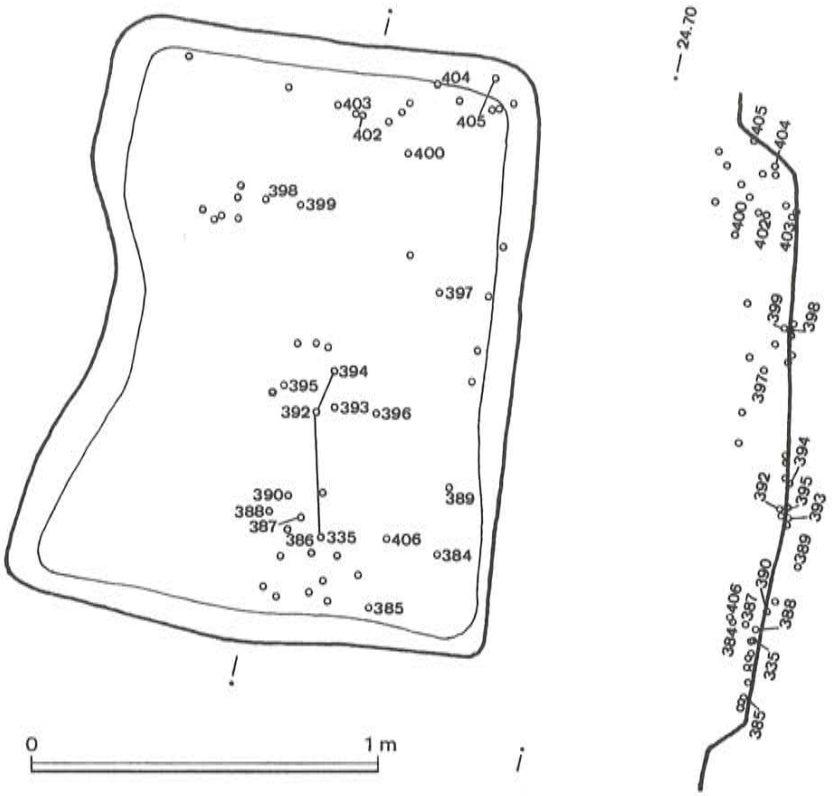
１（遺物No.260）はロクロ成形の「かわらけ」で、口径 7.0cm、器高 5.0cm、底径 3.1cm を測り、平底で、立ち上がりが口縁部にかけて大きく外反するのが特徴である。底部には回転糸切りの痕が残っている。



図Ⅳ－３－147　第12号土壙墓から出土した遺物
１：かわらけ



図Ⅳ－３－148　第13号土壙墓の平面および断面図



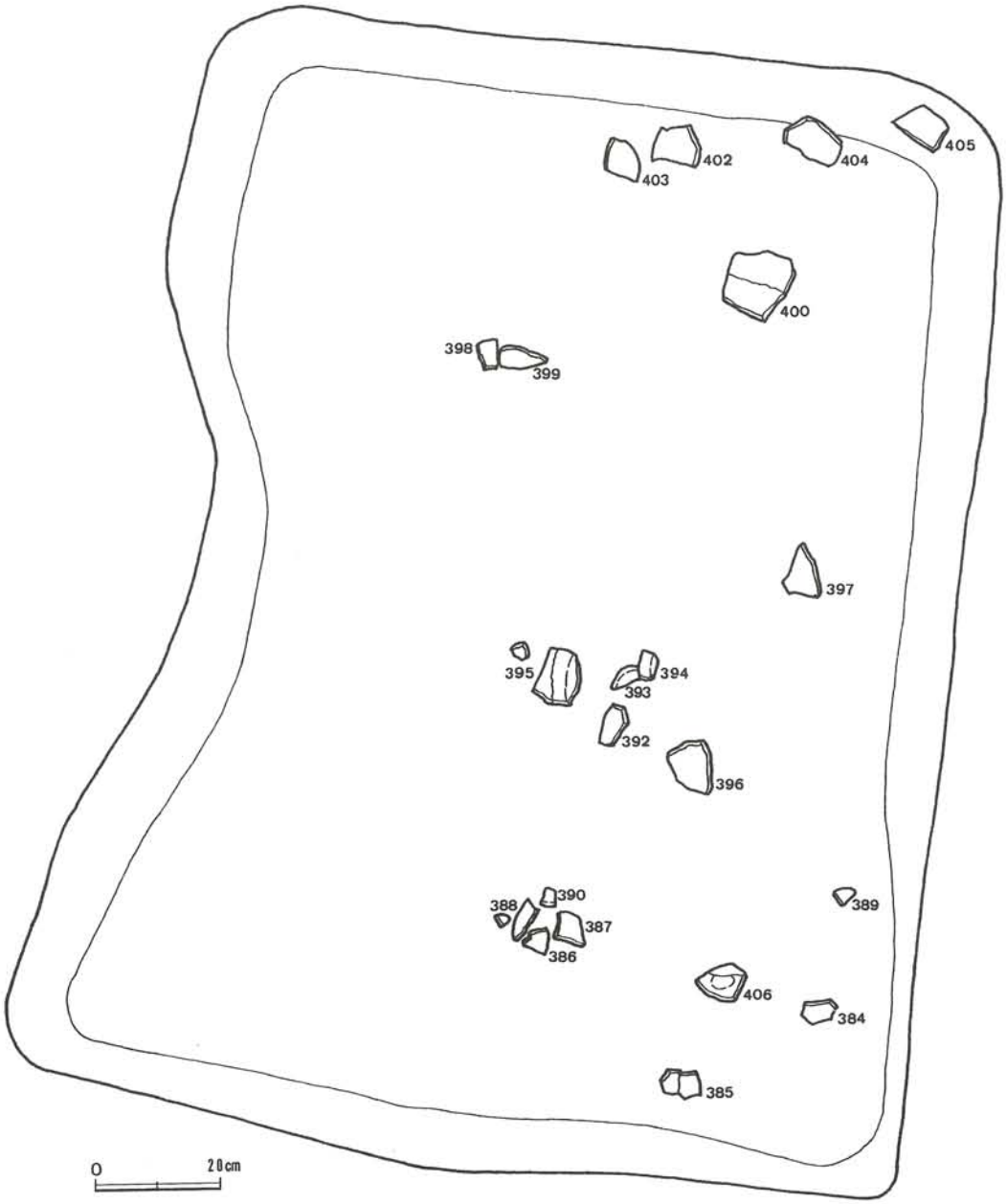
図Ⅳ－３－149　第13号土壙墓の遺物分布図

第13号土壙墓

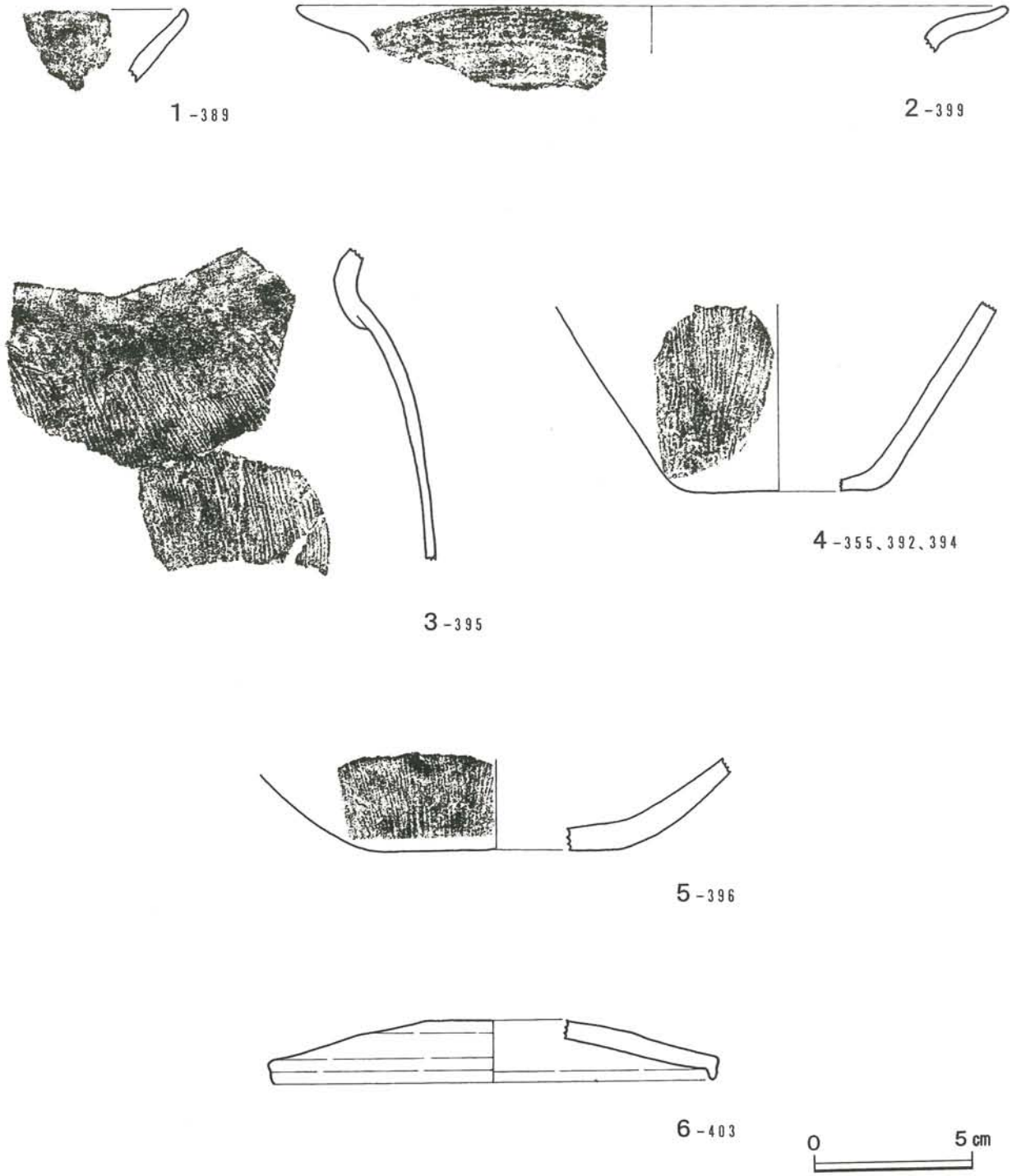
Ｆ－３～４グリッド内で、第２号方形周溝墓の東溝と第５号土壙墓の東隣に位置し、平面形状は西側の壁の中央部がやや内側に入り込んでいるが、ほぼ隅丸長方形で、長径 174 cm、短径 139cm、深さは最深部で26cmあり、長軸はN-8°-E を指している。断面形状は上に広く開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.3～４cm大の礫を少量含んでいる。第２層は暗茶褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.3～５cm大の礫・焼土粒・木炭粒をやや多く含んでいる。

遺物は土壙の底面付近より点在するように、土師器と須恵器の破片が出土している。



図Ⅳ－３－150　第13号土壙墓の遺物出土状況図



図Ⅳ－３－151　第13号土壙墓から出土した遺物

１・２：土師器の口縁部、３：土師器の体部、４・５：土師器の底部、６：須恵器の蓋

土師器の破片は色調が茶褐色系が多くみられる。

１（遺物№389）は口縁部の破片で、ほぼ直線的に開きながら立ち上がり、内・外面ともに丁寧な横ナデ調整が施されている。胎土に雲母を含んでいる。

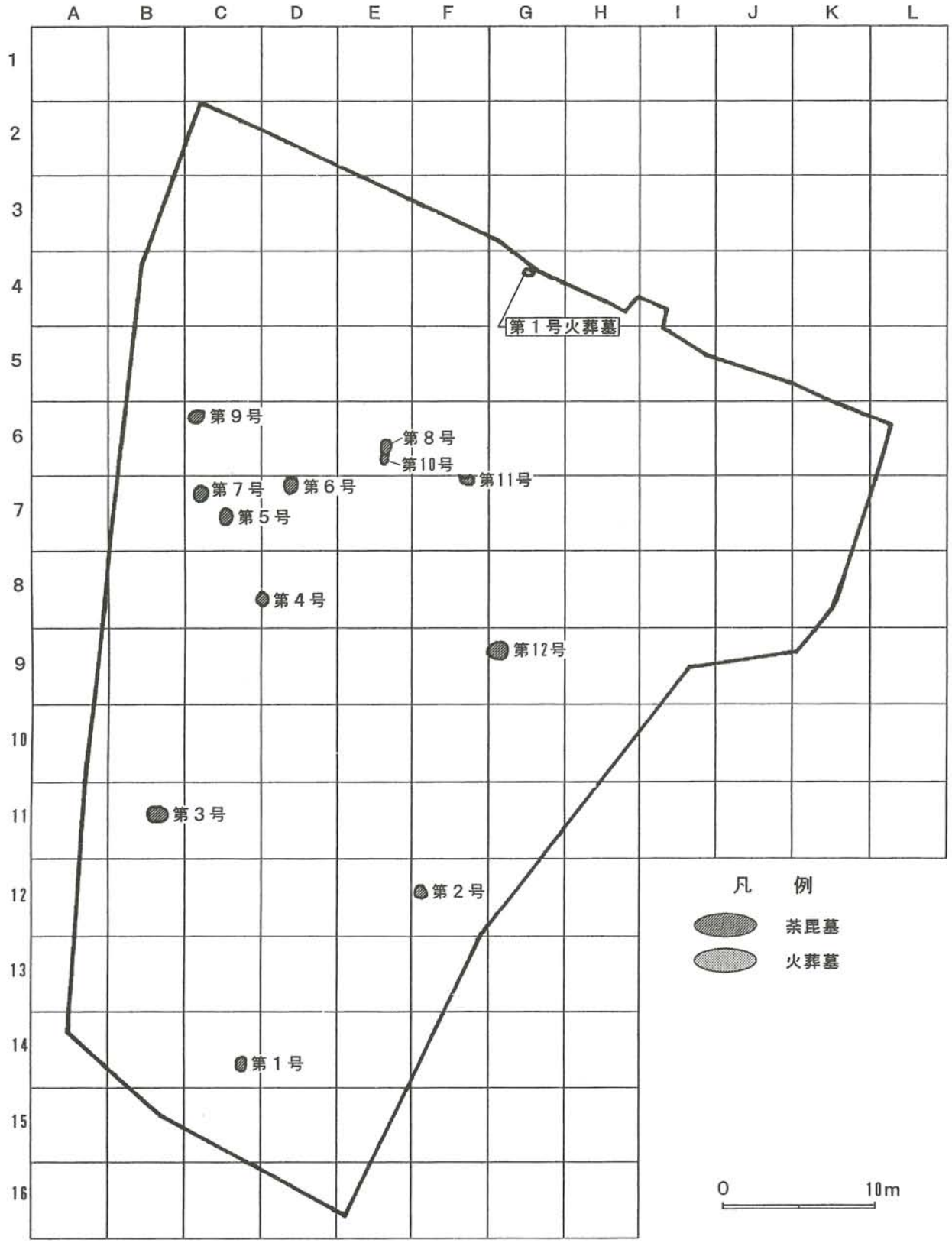
２（遺物№399）は口縁部の破片で、屈曲部を有し、強く開きながら立ち上がり、外面はヘラ削りをした後にナデ調整を施し、内面は横ナデ調整が施されている。胎土に雲母を含んでいる。

３（遺物№395）は胴部上半から頚部にかけての破片で、緩やかに内彎し、頚部に屈曲部を有して開きながら立ち上がっている。屈曲部の内面には段があり肥厚している。体部の外面は縦位から斜位のハケメ調整が施され、頚部には横ナデ調整が、また内面は横ナデ調整が施されている。胎土に金雲母を含んでいる。

４（遺物№335、№392、№394）は底部から体部にかけての破片で、底部は平底を呈し、直線的に開きながら立ち上がっている。体部の外面は縦位のハケメ調整が全体に施され、内面はナデ調整が施されている。胎土に金雲母を含んでいる。

５（遺物№396）は底部から体部にかけての破片で、底部は平底を呈し、強く開きながら立ち上がり、体部の外面は縦位のハケメ調整が施され、内面はナデ調整が施されている。胎土に雲母を含んでいる。

６（遺物№403）は須恵器の蓋杯の蓋部の破片で、肩部に緩やかな稜を有し、端部が屈曲してから直下している。天井部の外面はヘラ削りが施され、肩部から口縁部にかけては回転のナデ調整が施されている。また、内面は回転のナデ調整が施されている。色調は暗青灰色である。



図Ⅳ－３－152　荼毘墓・火葬墓の分布図

４．荼毘墓と遺物

荼毘墓の分布状況は調査区南側の平坦部に単独で分布する第１～３号の３基と中央部に分布する９基に分けられる。さらに中央部の９基は東側の第８・10～12号の４基と西側の第４～７・９号の５基にそれぞれ分布がまとまる。

荼毘墓が立地する地形は平坦面もしくは傾斜面との変換点が多く、なかでも東側の４基は黒ボク土の堆積する谷部の斜面と平坦部との変換点に位置している。

荼毘墓の規模は、長径が90～ 134cmで平均が約 106cm、短径が45～ 122cmで平均が約80cm、深さが７～30cmで平均が約20cmある。平面形状は円形・不整円形が６基、楕円形・不整楕円形が６基と半々に分かれる。長軸の方向はほぼ南北を指すものが６基、ほぼ東西を指すものが３基ある。

荼毘墓の特徴として挙げられることは、焚焼処理の痕跡と思われる炭化材・木炭粒、焼土ブロック・焼土粒が覆土の中に含まれること。また、白色系の焼骨粉が含まれるものとそうでないものに分かれる。さらに、土壙の底面から壁面にかけては焼火痕が認められ、焼土化した状況が認められることである。

遺物は供献品としての土器が多いが、なかでも、ロクロ成形の「かわらけ」と手捏ね成形の「かわらけ」が最も多く出土し、次に銭貨で「寛永通寶」が多くを占めるが、「元豊通寶」もみられる。銭貨の中には熱による変形や数枚が熔着した状態で出土するものもある。その他に鉄製の釘なども多く出土している。

人骨は覆土の中に骨粉として含まれる以外に、小さな骨片として出土しており、原型をとどめるものは数少ないが、頭頂骨・鎖骨・肋骨・大腿骨などが出土している。

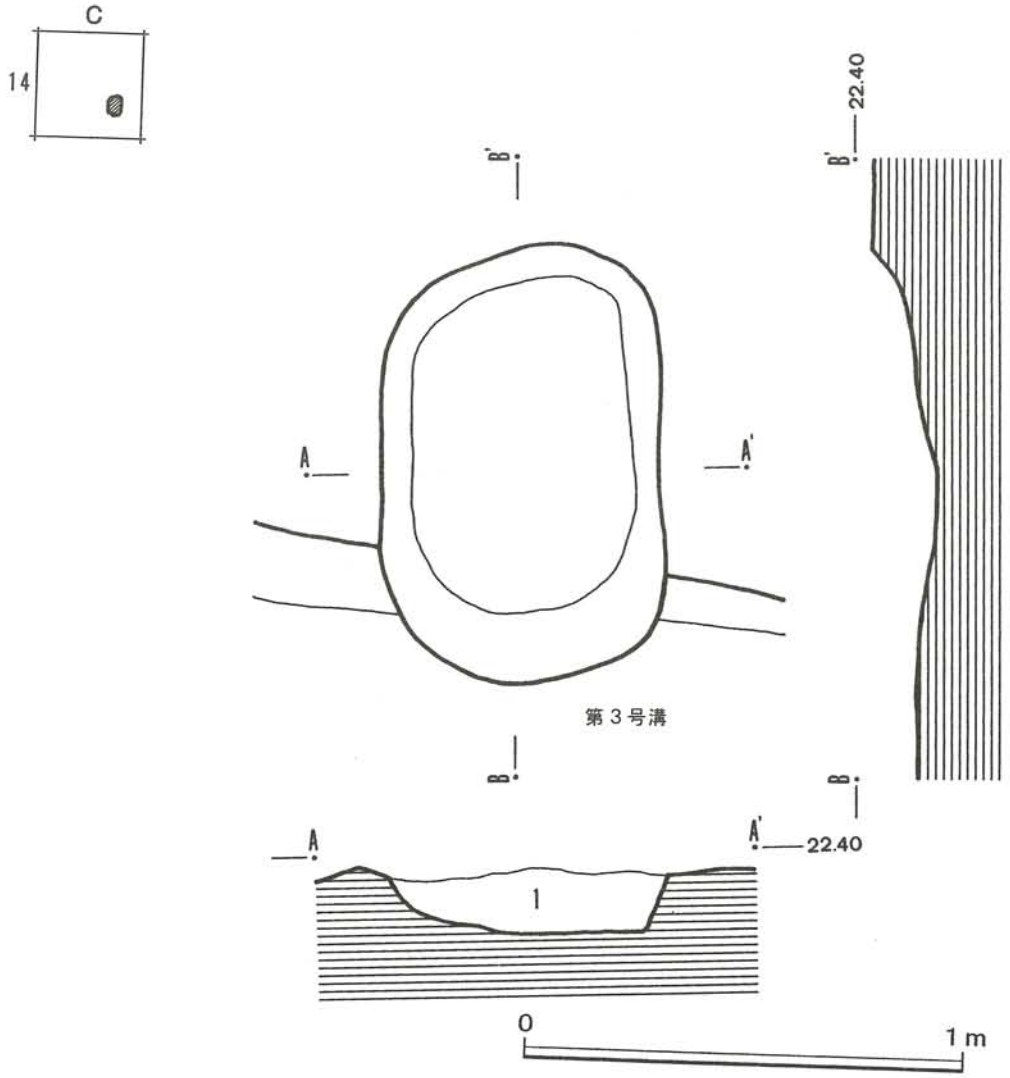
第１号荼毘墓

Ｃ－14グリッド内で、調査区の最南部に位置し、第３号溝を切っている。平面形状は楕円形で、長径 100cm、短径65cm、深さは最深部で15cmとやや浅く、長軸は南北を指している。断面形状は丸底状を呈しているが東側の壁の立上りは急である。

覆土は暗褐色土の１層で、締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～２cm大の礫をやや多く含んでいる。

底面に近い覆土は木炭粒や焼土粒を多く含み、壁面に焼火痕が顕著に認められる。また、焼けた人骨の細粒が覆土の中に少量含まれている。

骨粉以外の遺物は出土していない。



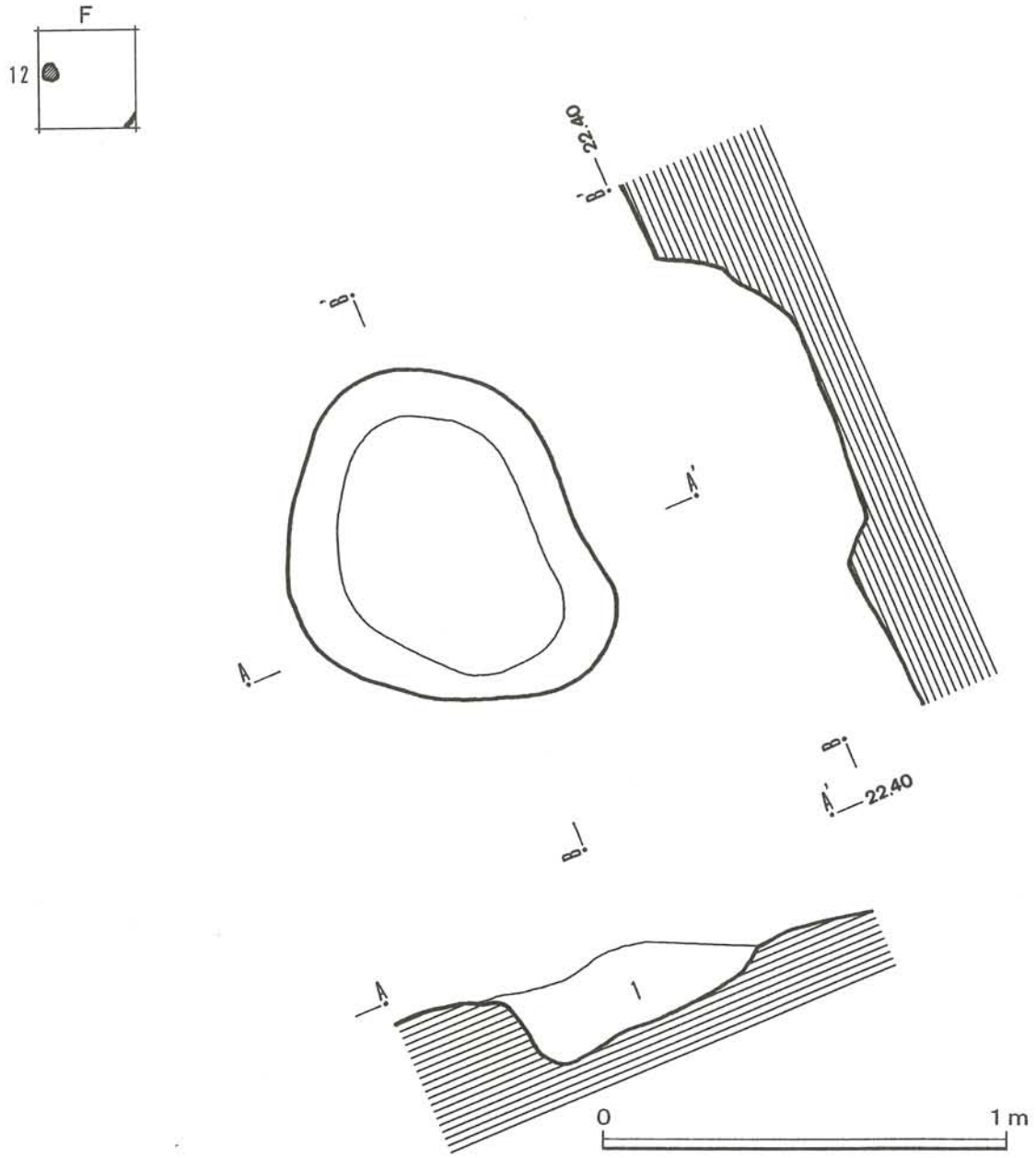
図Ⅳ－３－153　第１号荼毘墓の平面および断面図

第２号荼毘墓

Ｆ－12グリッド内で、調査区南東側の第１号方形周溝墓内に位置し、平面形状は不整円形で、長径91cm、短径76cm、深さは最深部で20cmあり、長軸の方向はN-41°-W を指している。断面形状は北東側が削平されているため定かではないが、おそらくＵ字形を呈すると思われる。

覆土は暗褐色土が１層で、締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～14cm大の礫と炭化物や骨の細粒をやや多く含んでいる。

底面から西壁面にかけてはっきりとした焼火痕が認められる。底面付近には煤の付着した扁平の玉石(遺物No.12)があり、棺座石として利用されたかとも思われる。



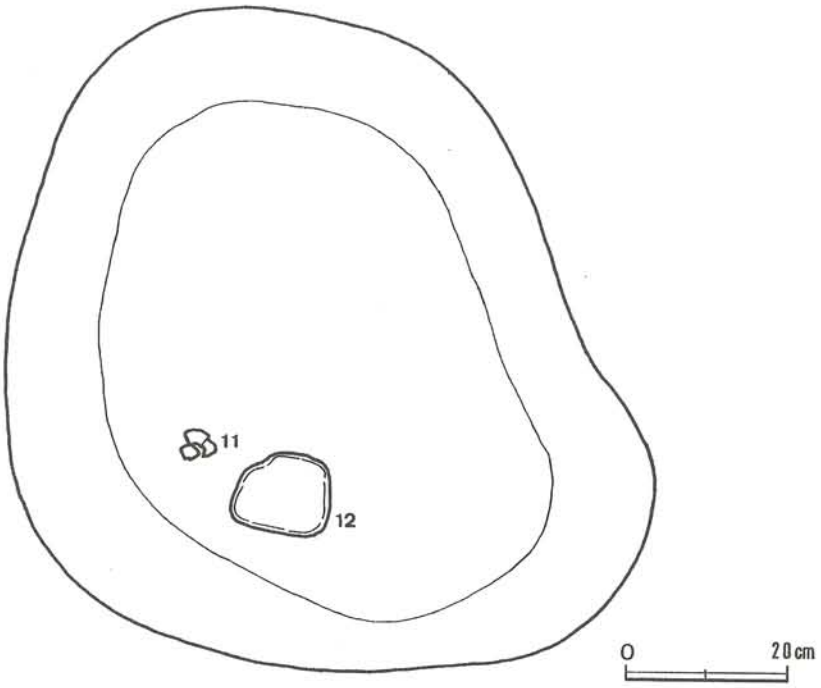
図Ⅳ－３－154　第２号荼毘墓の平面および断面図

遺物は底面に近いところから銭貨が５枚ほぼ重なるように出土し、土壙の中央部の底面から、肋骨や尺骨？(遺物№10)などの人骨片が３点出土している。

銭貨は破損や磨滅のために文字が判読できるのは３枚で、１(遺物№11-②) は「通」から「開元通寶」、２(遺物№11-③) は「開」と「通」の２文字から「開元通寶」、３(遺物№11-④) は「元」と「寶」の２文字から「元豊通寶」と思われる。

銭　貨　の　計　測　値

遺物№	種　類	径(mm)	重量(g)	備　考
11-①	□□□□	24.4	1.84	一部欠損、表面腐食で不明
11-②	□通□□	24.0	1.00	一部欠損、「開元通寶」か
11-③	開通□□	測定不能	1.84	1/2欠損、「開元通寶」か
11-④	元□□寶	測定不能	1.06	1/2欠損、「元豊通寶」か
11-⑤	□□□□	測定不能	0.65	3/4欠損、表面腐食で不明



図Ⅳ－３－155　第２号荼毘墓の遺物出土状況図

図Ⅳ－３－156　第２号荼毘墓から出土した遺物

１～３：銭貨

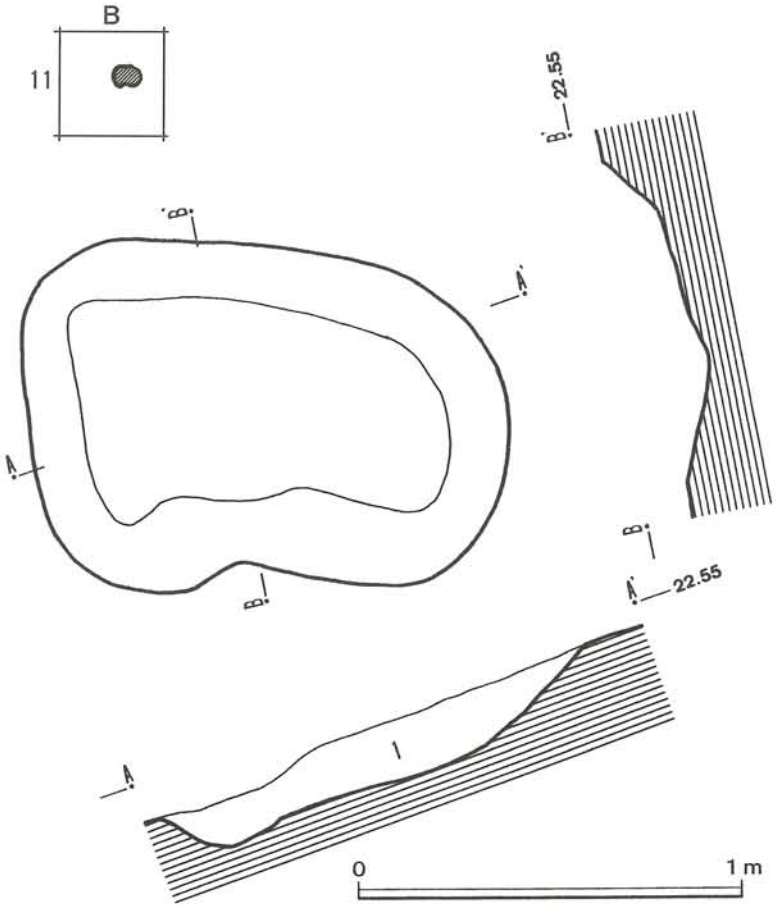
第３号茶毘墓

Ｂ－11グリッド内で、調査区の南西部に位置し、平面形状は不整楕円形で、長径 126cm、短径91cm、深さは最深部で15cmと浅く、長軸の方向はN-86°-W とほぼ東西を指している。断面形状は浅いため定かではないが、上に広く開くＵ字形を呈していると思われる。

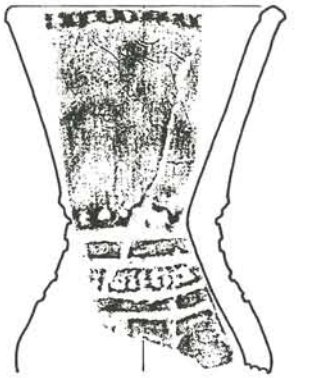
覆土は暗褐色土が１層で、締りも粘性も弱く、径 0.5～７cm大の礫を多く含み、炭化物と骨粉を少量含んでいる。

遺物は土壙中央部の覆土の上位から土器片が４点(同一個体)出土しているが、茶毘墓に伴う遺物ではなく、外からの流入物と考えられる。

１(遺物No.16、No.27、No.31、No.32) は細長首の壺形土器の口縁部から頚部にかけての破片で、頚部に緩やかな屈曲部を有し、直線的に開きながら立ち上がっている。口唇部に棒状の施具によるキザミがあり、頚部には７条の連続した刺突紋と沈線が交互に上位から下位にかけて施紋されている。体部の外面全体には磨き調整が施されている。弥生時代中期後半に属する土器と思われる。



図Ⅳ－３－157　第３号茶毘墓の平面および断面図

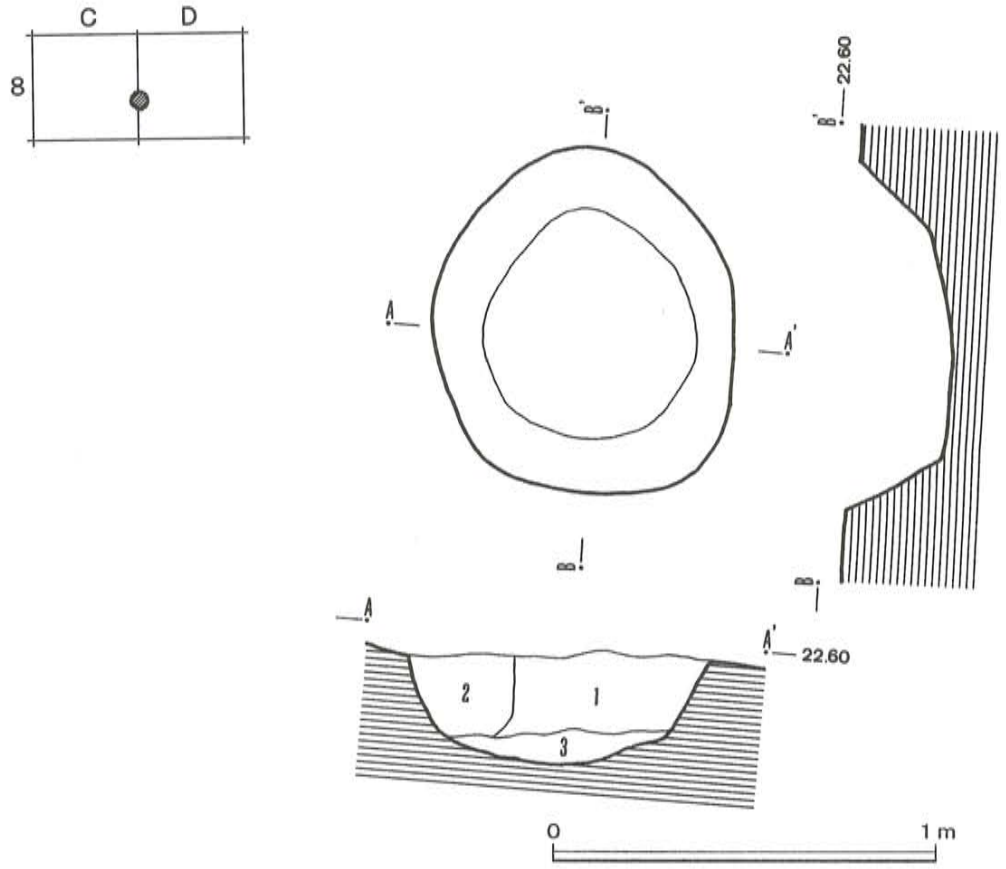


１-16、27、31、32

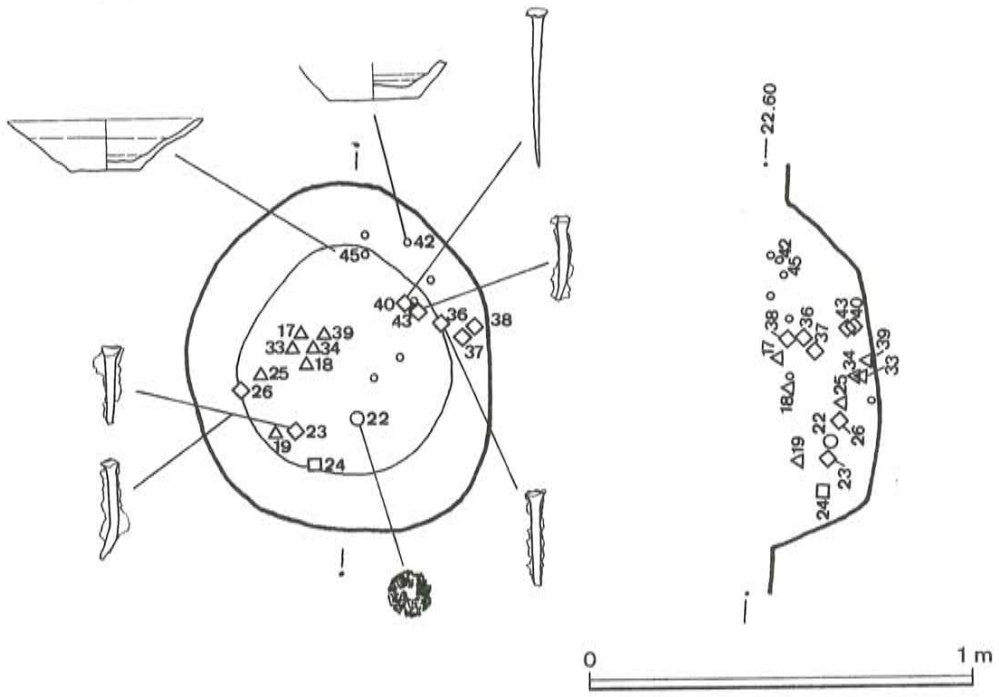
0　5cm

図Ⅳ－３－158　第３号茶毘墓から出土した遺物

１：壺形土器の口縁部



図Ⅳ－３－159　第４号荼毘墓の平面および断面図



図Ⅳ－３－160　第４号荼毘墓の遺物分布図

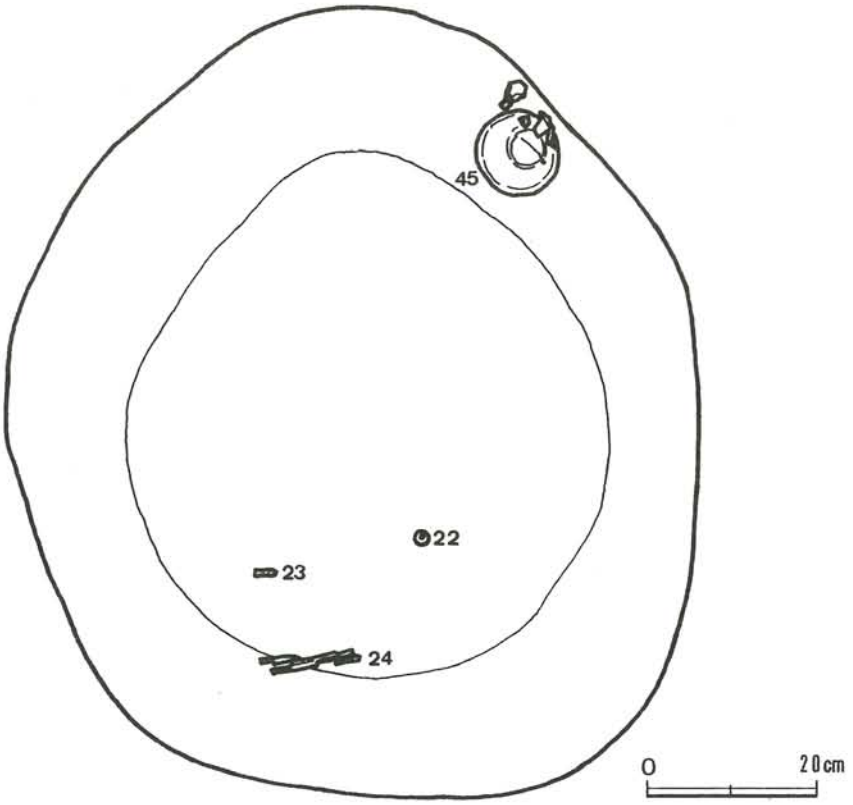
第４号茶毘墓

Ｃ～Ｄ－８グリッド内で、調査区中央部の茶毘墓が集中する南に位置している。平面形状はほぼ円形で、長径90cm、短径82cm、深さは最深部で29cmあり、長軸はＮ－３°－Ｅ を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は３層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径１～５cm大の礫をやや多く含み、炭化物や骨の細粒を多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りも粘性もともにやや弱く、径１～20cm大の礫を多く含んでいる。第３層は赤茶褐色土で、締りも粘性も強く、焼土のブロックを多く含んでいる。土壙の北壁面に焼火痕が認められる。

遺物は土壙の北壁付近より土器が、中央部よりやや南側で銭貨が、東北側の壁付近と南東側の壁付近の２ヵ所に集中して鉄釘が、南壁付近より笊状に編まれた竹製品の一部（遺物No.24）が、中央部より東側よりに人骨片がまとまって出土している。

なお、人骨片は大腿骨(遺物No.17、No.25、No.39)・尺骨？(遺物No.18)・肩胛骨(遺物No.19)・鎖骨(遺物No.33)・頭頂骨(遺物No.34)など22点が出土している。



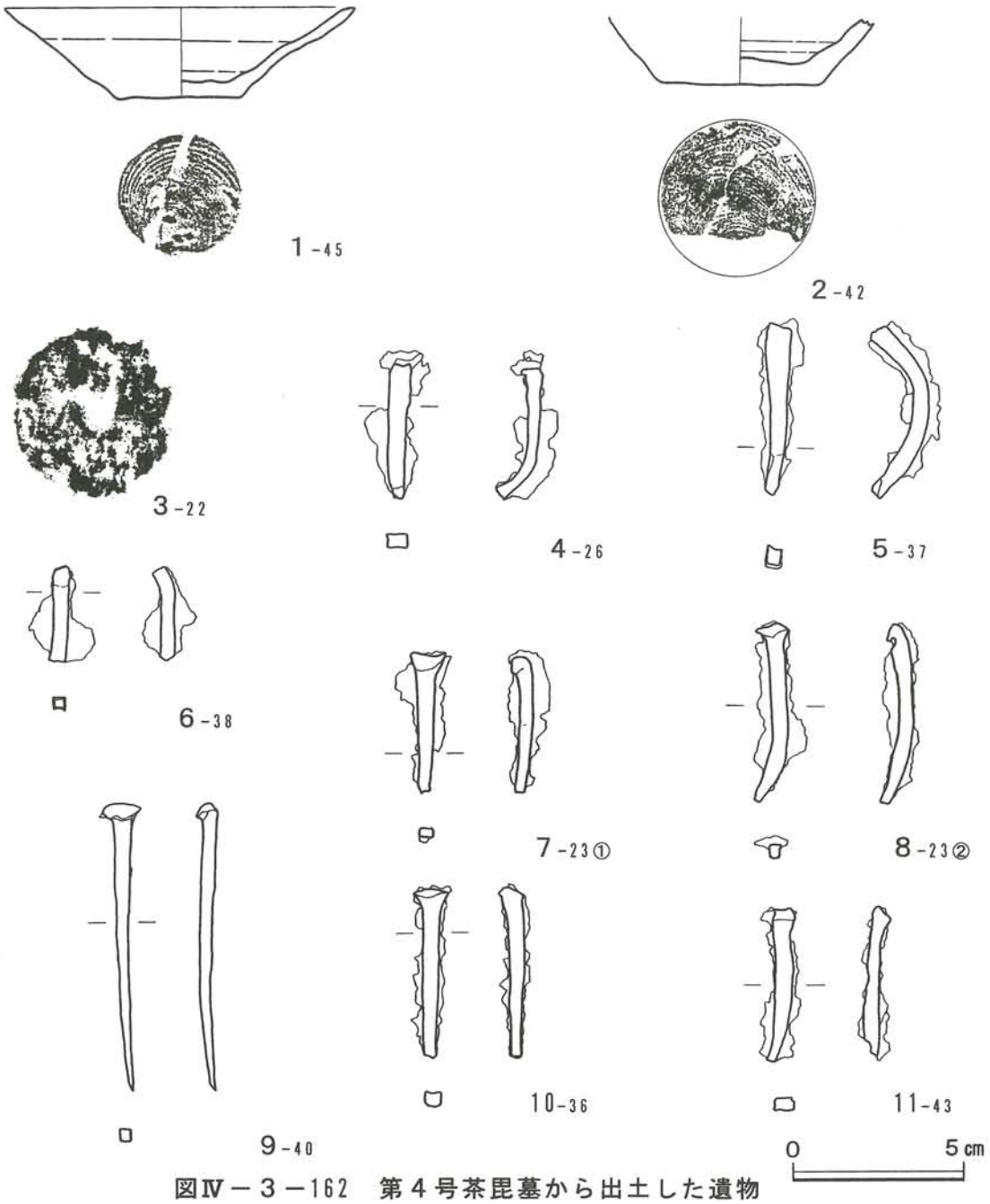
図Ⅳ－３－161　第４号茶毘墓の遺物出土状況図

１(遺物No.45) はロクロ成形の「かわらけ」で、体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面は底から体部にかけてヘラ削り(右回転)した後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

２(遺物No.42) はロクロ成形の「かわらけ」の底部から体部にかけての破片で、１と同様の調整が施されている。底部も同様に平底で回転糸切りの痕が残っている。

３(遺物No.22) は銭貨で、６枚が熔着し分離が不能であり、しかも表面が腐食しているため詳細は不明であるが、いわゆる六道銭である。径が22.4mm、重量が16.60ｇある。

４～11(遺物No.23①②、No.26、No.36、No.37、No.38、No.40、No.43) は鉄釘で、10(遺物No.40)が鋼鉄製である以外は７本とも先端部が欠損し錆が著しい。



図Ⅳ－３－162　第４号荼毘墓から出土した遺物
１・２：かわらけ、３：銭貨(実物大)、４～11：鉄釘

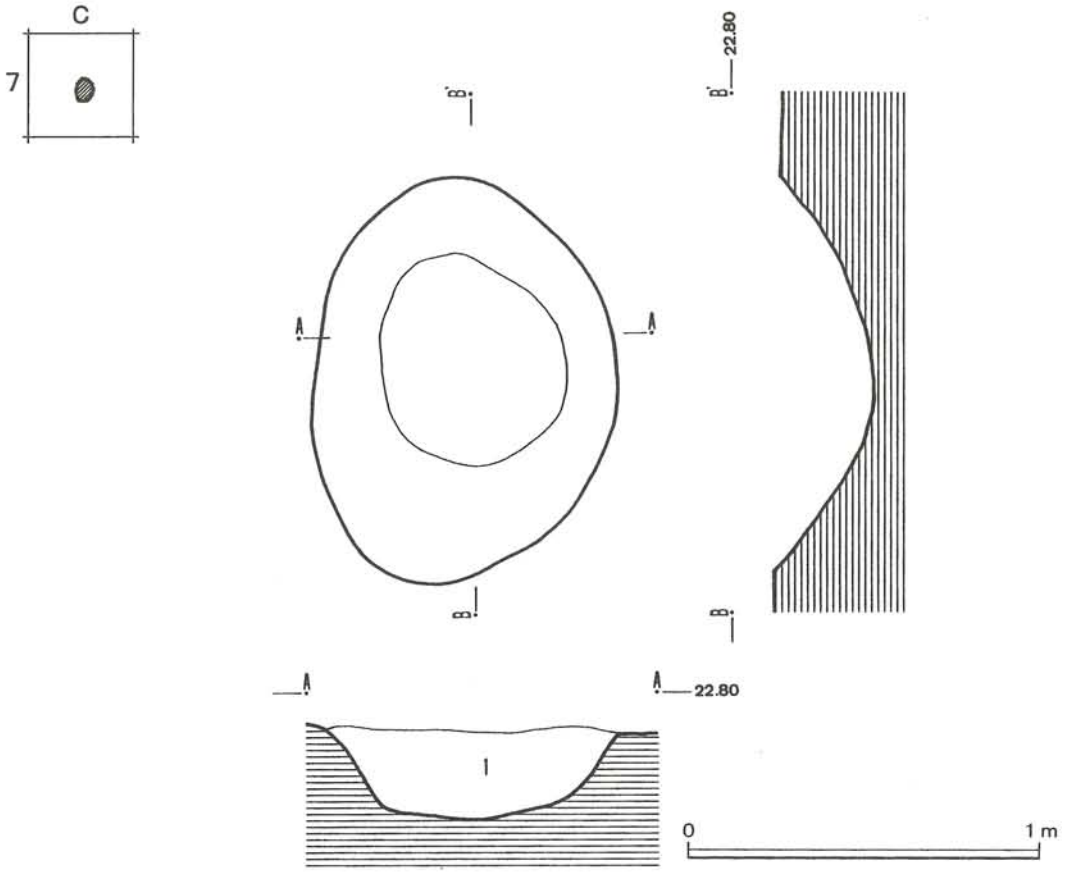
第５号茶毘墓

Ｃ－７グリッド内で、第４号茶毘墓の北約５ｍに位置する。平面形状は楕円形で、長径116cm、短径86cm、深さは最深部で27cmあり、長軸の方向はＮ－８°－Ｅ を指している。断面形状は丸底状を呈している。

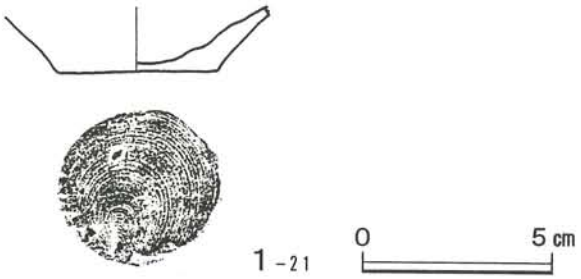
覆土は黒色土が１層で締りは強く、粘性はやや弱い。径７～10cm大の砂岩質の礫を多く含み、炭化物もやや多く含んでいる。土壙の壁面に焼火痕が明瞭に認められる。

遺物は覆土の上位から土器片が出土している。

１(遺物No.21)はロクロ成形の「かわらけ」の底部から体部にかけての破片で、体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面は底部から体部にかけてヘラ削り(右回転)した後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

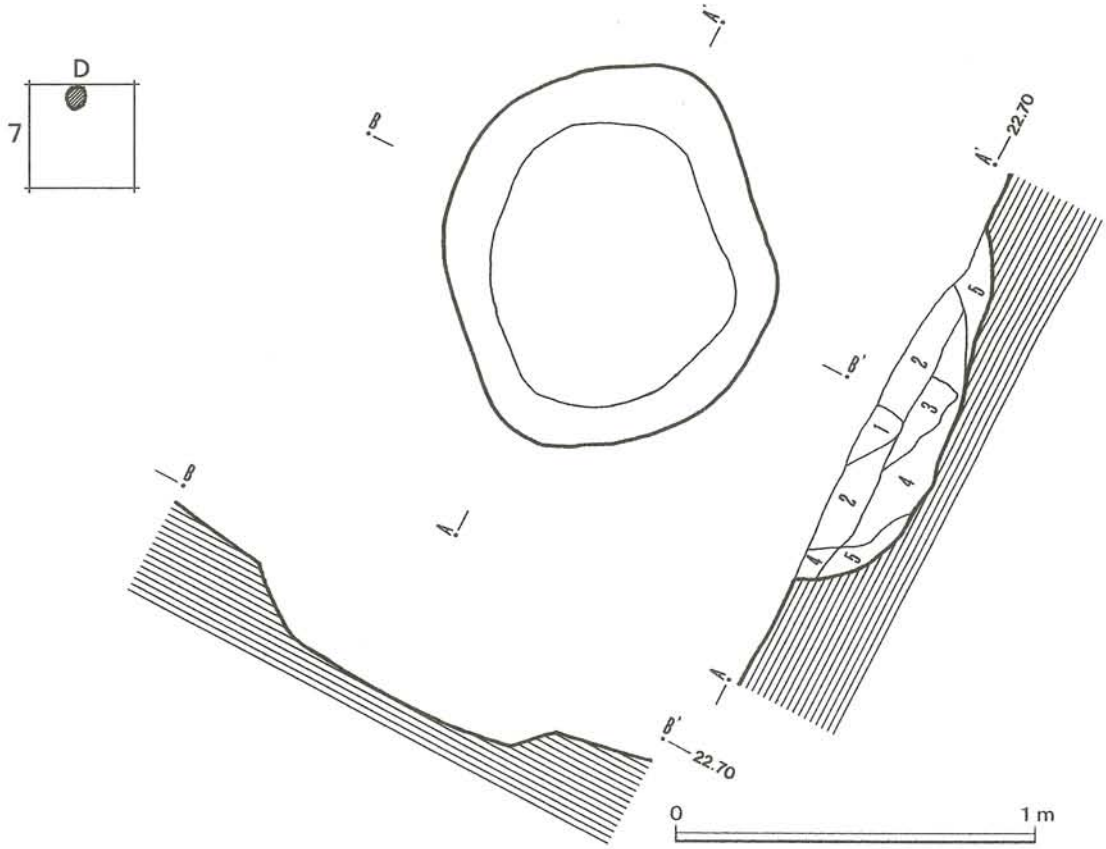


図Ⅳ－３－163　第５号茶毘墓の平面および断面図

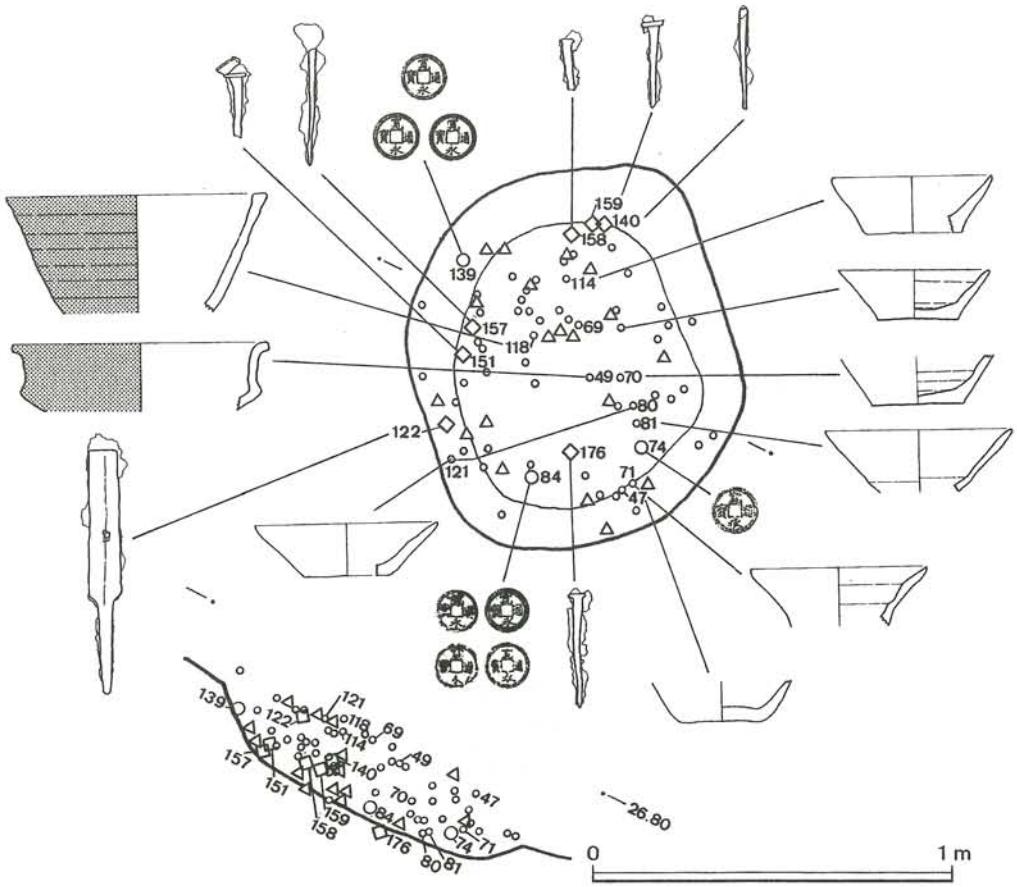


図Ⅳ－３－164　第５号茶毘墓から出土した遺物

１：かわらけ



図Ⅳ－３－165　第６号荼毘墓の平面および断面図



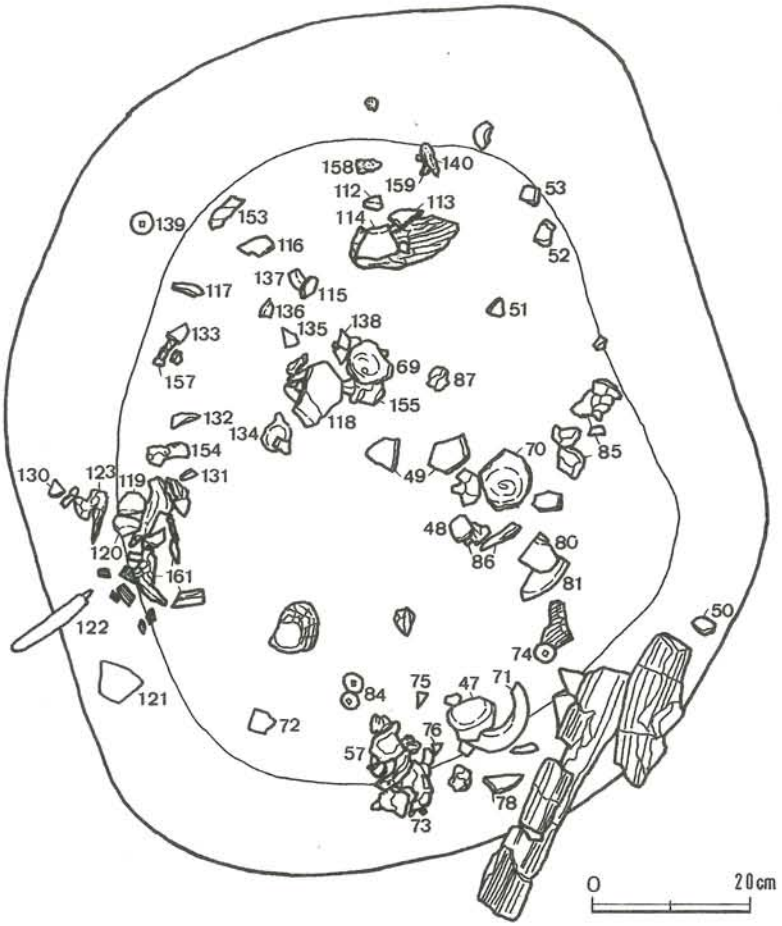
図Ⅳ－３－166　第６号荼毘墓の遺物分布図

第６号荼毘墓

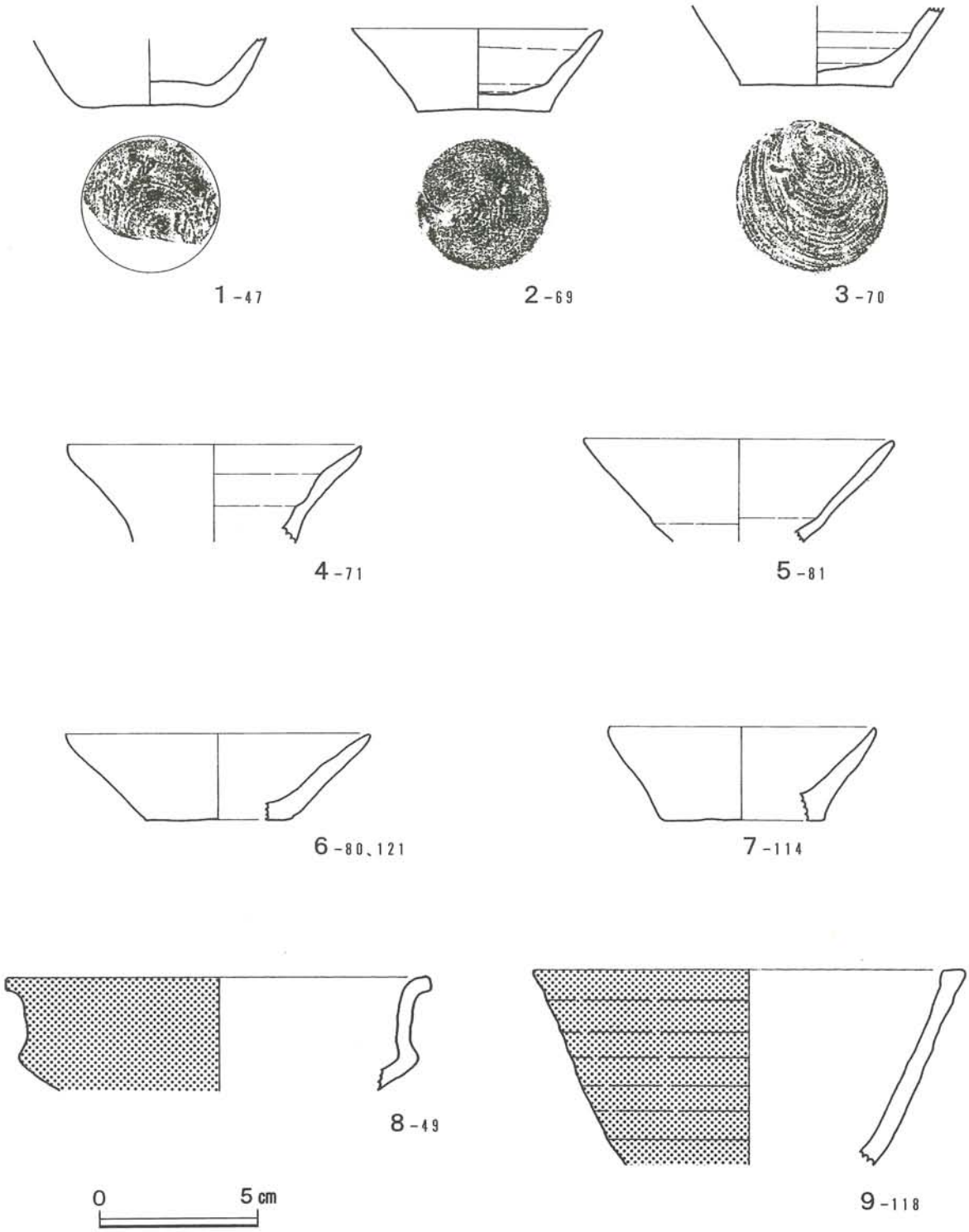
Ｄ－７グリッド内で、第５号土壙墓の北東約５ｍに位置する。平面形状は不整円形で、長径 111cm、短径95cm、深さは最深部で25cmあり、長軸の方向はN-29°-E を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は５層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りは弱く、粘性は強い。径３～７cm大の礫を少量含んでいる。第２層は黒褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径 0.5～７cm大の礫を少量含み、炭化物や骨の細粒をやや多く含んでいる。第３層は暗褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径１～７cm大の礫を少量含み、炭化物・木炭粒・骨の細粒をやや多く含んでいる。第４層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径１cm大の礫を少量含んでいる。焼土粒・炭化物・木炭粒・骨の細粒をやや多く含んでいる。第５層は暗赤褐色土で締りはやや弱く、粘性は強い。径４cm大の礫を少量含むほか、焼土粒を多く含み、炭化物・木炭粒・骨の細粒をやや多含んでいる。また、炭化材が南壁と北壁付近の底面よりまとまって出土している。

遺物は土壙の底面付近から３(遺物No.70)と４(遺物No.71)の「かわらけ」が出土し、その他の「かわらけ」は覆土中に点在して出土したほか、土壙中央部の覆土中より施釉陶質土器の香炉の破片が２点出土し、北から西にかけての壁面付近から鉄製品が、土壙内全体の底面付近から覆土中に点在するように人骨片が、底面付近から銭貨がそれぞれ出土している。人骨片は総点数で115点あり、頭頂骨・頚骨・鎖骨・肋骨・大腿骨が出土している。



図Ⅳ－３－167　第６号荼毘墓の遺物出土状況図



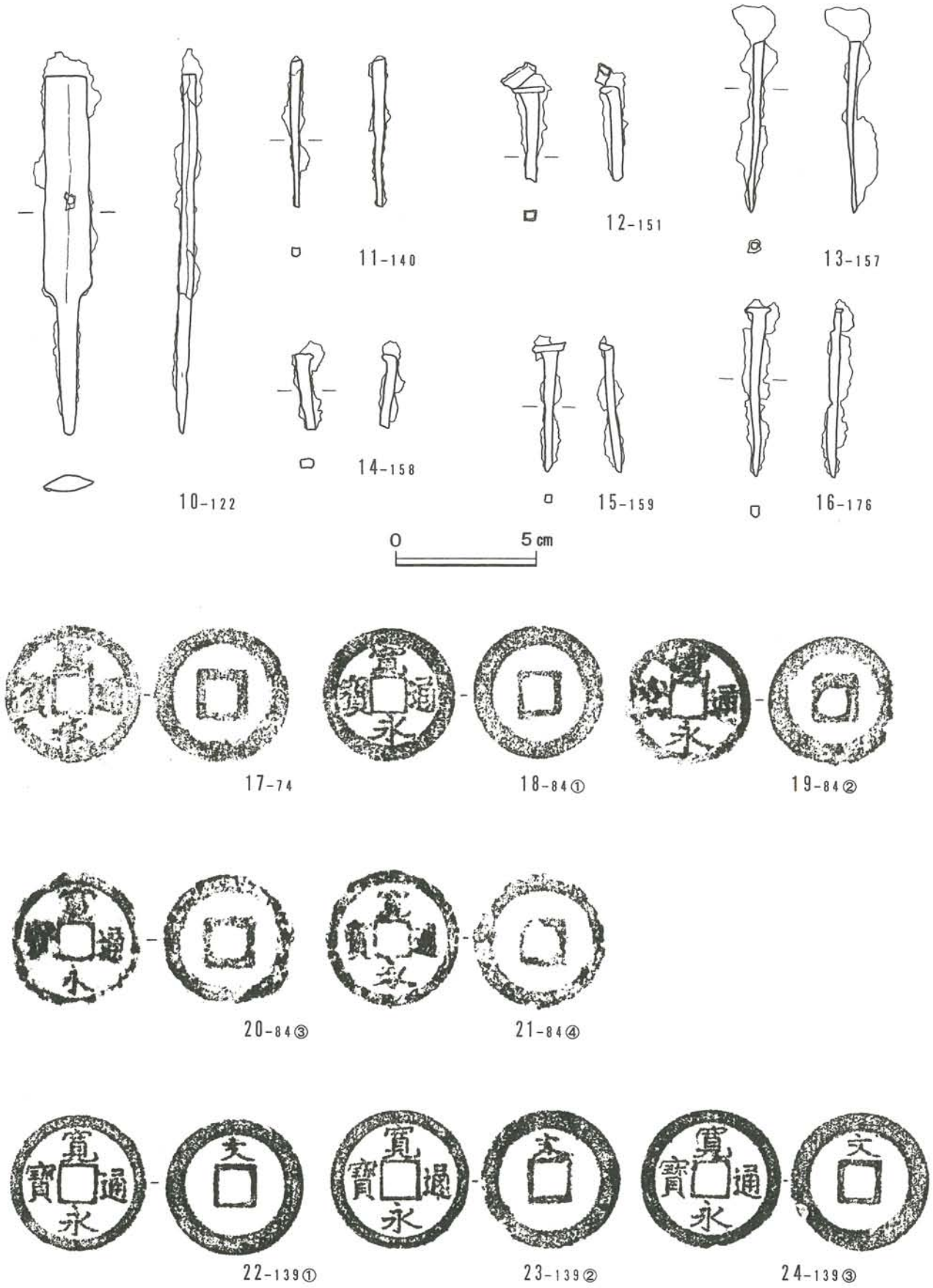
図Ⅳ－３－168　第６号茶毘墓から出土した遺物（１）
１～７：かわらけ、８・９：施釉陶器

１～５（遺物No.47、遺物No.69、遺物No.70、遺物No.71、遺物No.81）はロクロ成形の「かわらけ」の破片で、この内４（遺物No.71）と５（遺物No.81）の２点は底部を欠くが、ともに共通した特徴を持っている。底部は僅かに凸状がみられるものも含みほとんどが平底を呈し、体部の外面は回転ナデ調整を施し、内面はヘラ削り（右回転）した後にナデ調整が施されている。底部は回転糸切りの痕が残っている。

６（遺物No.80、No.121）と７（遺物No.114）はロクロ成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、体部の内・外面ともにナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

８（遺物No.49）は淡緑色の釉を施された香炉の口縁部から体部にかけての破片である。

９（遺物No.118）も淡緑色の釉を施された香炉の口縁部から体部にかけての破片である。



図Ⅳ－３－169　第６号茶毘墓から出土した遺物（２）

10：鉄剣、11～16：鉄釘、17～24：銭貨「寛永通寶」

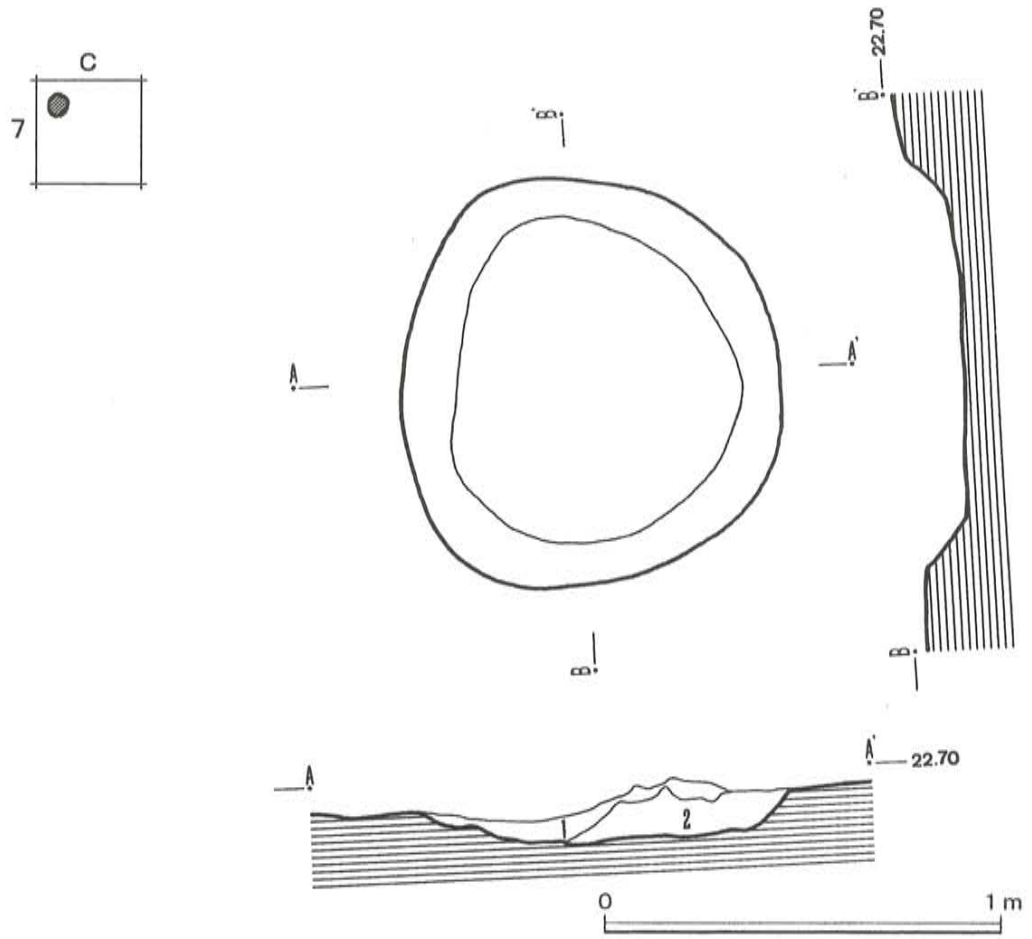
10(遺物No.122) は先端部が欠損した小型の鉄剣と思われる。土壙の西壁付近より出土した。

11～16(遺物No.140、遺物No.151、遺物No.157、遺物No.158、遺物No.159、遺物No.176)は鉄釘で、13(遺物No.157)と16(遺物No.176)の２点がほぼ完形で出土した以外は先端部が欠損している。これらは北から西にかけての壁面付近から出土している。

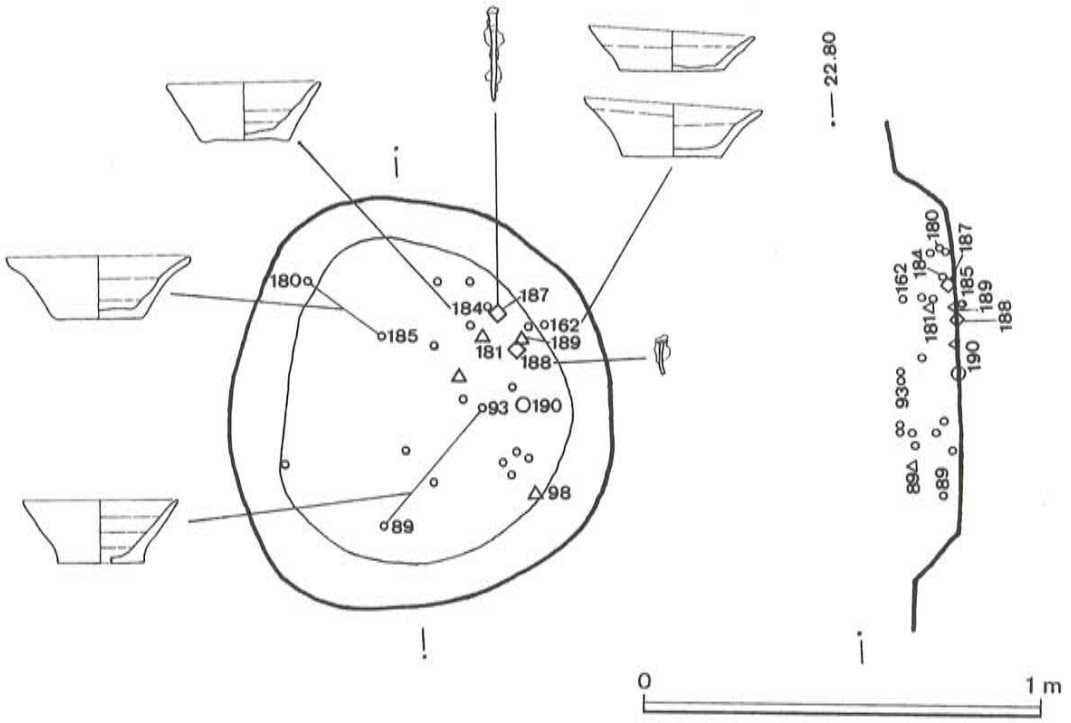
17～24(遺物No.74、遺物No.84-①～④、遺物No.139-①～③) は銭貨「寛永通寶」で、８枚の内３枚は背面に「文」の文字がある新寛永通寶である。

銭　貨　の　計　測　値

遺物No.	種　類	径(mm)	重量(g)	備　考
74	寛永通寶	24.5	2.47	
84-①	寛永通寶	23.5	3.04	
84-②	寛永通寶	23.2	3.29	
84-③	寛永通寶	24.2	2.54	
84-④	寛永通寶	24.0	2.77	
139-①	寛永通寶	24.7	3.88	背面に「文」の文字がある
139-②	寛永通寶	25.0	2.82	背面に「文」の文字がある
139-③	寛永通寶	25.0	2.88	背面に「文」の文字がある



図Ⅳ－３－170　第７号茶毘墓の平面および断面図



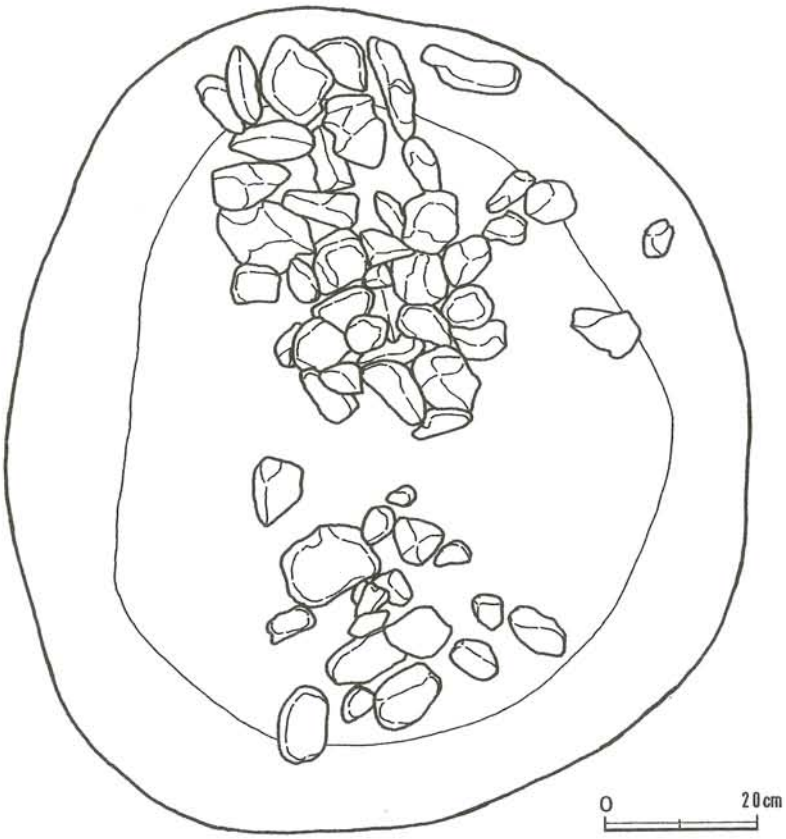
図Ⅳ－３－171　第７号茶毘墓の遺物分布図

第７号荼毘墓

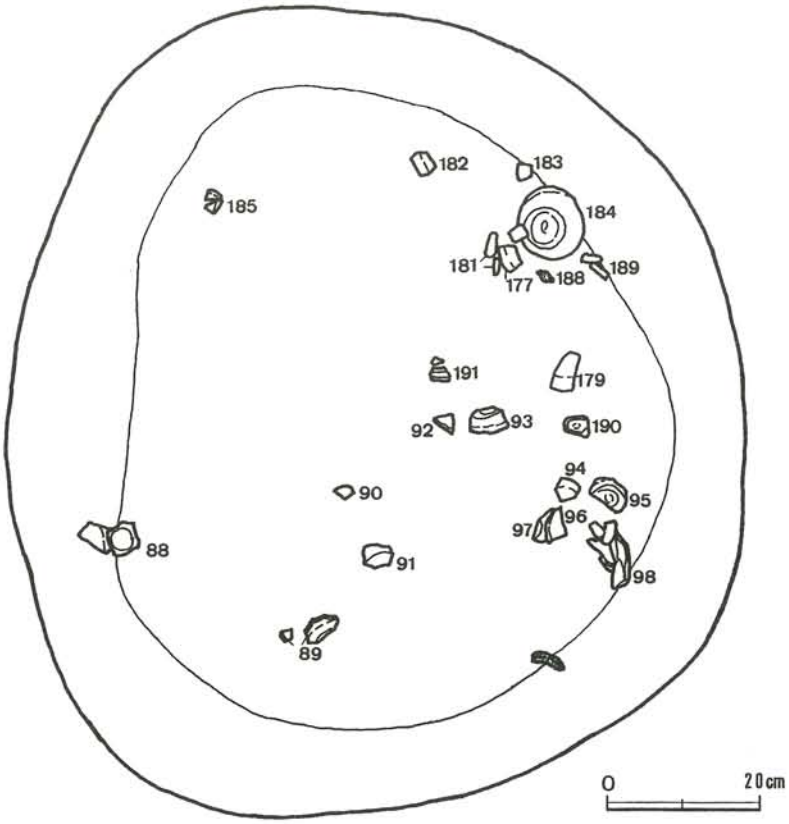
Ｃ－７グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径 103cm、短径95cm、深さは最深部で19cmあり、長軸の方向はN-23°-W を指している。断面形状は浅いので定かではないが上に広く開くＵ字形を呈すると思われる。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径 0.3～２cmの礫をやや多く含み、炭化物もやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.5～12cmの礫をやや多く含み、炭化物もやや多く含んでいる。底部全面に焼火痕が明瞭に認められる。底部には礫を敷石状に並べてあり、その表面が赤褐色化している。

遺物は「かわらけ」が５点、銭貨が１枚（遺物No.190）、鉄釘が２本、人骨片が７点出土している。銭貨は破損し表面が腐食しているため文字の判読は困難である。人骨片は、鎖骨(遺物No.98)・肋骨(遺物No.181、No.189) など７点が出土している。これらの遺物は土壙内の中央部より東側に集中して出土している。



図Ⅳ－３－172　第７号茶毘墓底部の礫の出土状況図



図Ⅳ－３－173　第７号茶毘墓の遺物出土状況図

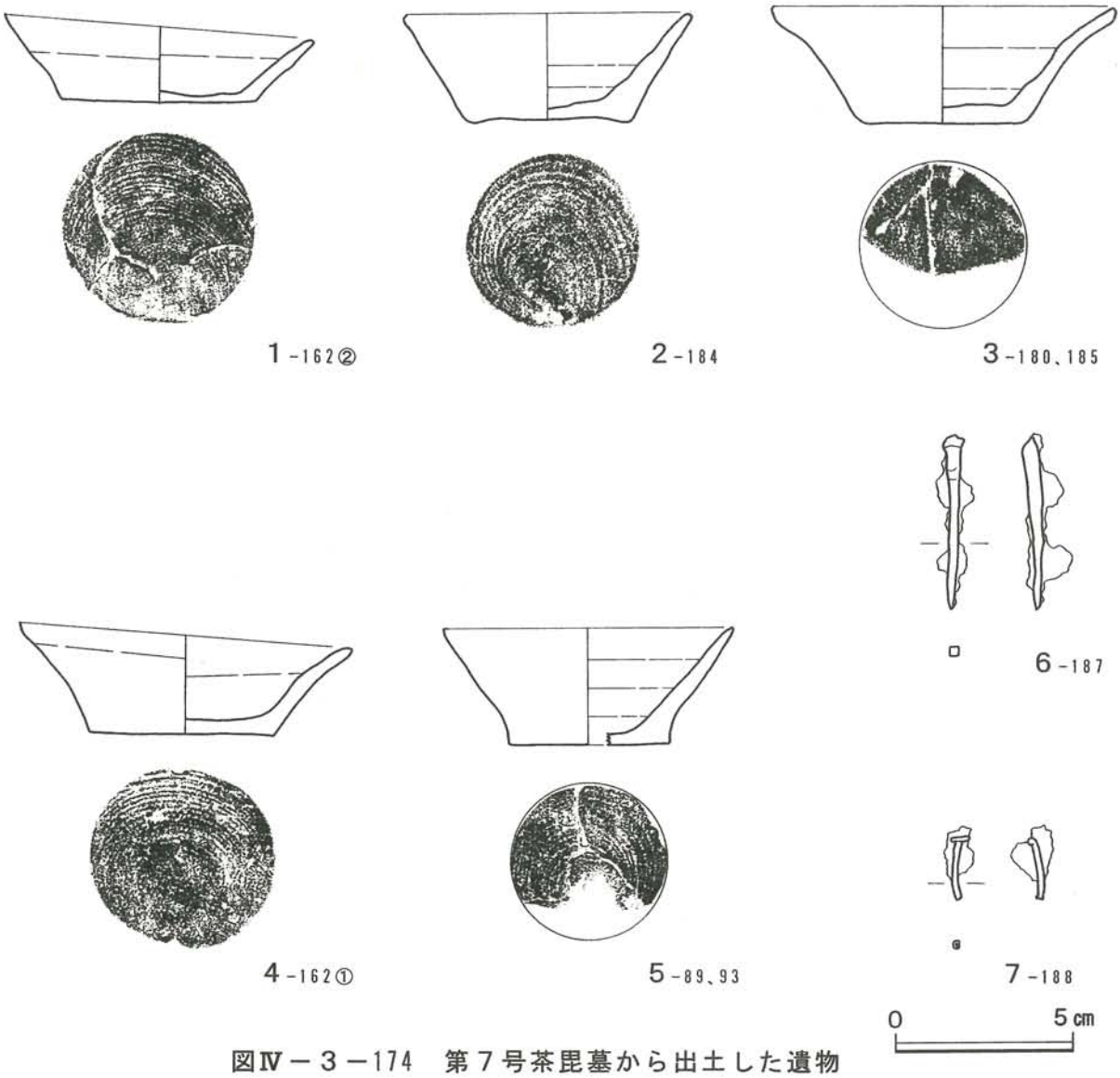
１（遺物No.162②）はロクロ成形の「かわらけ」で、体部の内・外面はヘラ削り（右回転）をした後にナデ調整を施している。底部は僅かに凸状を呈する平底で、回転糸切りの痕が残っている。

２（遺物No.184）と３（遺物No.180、No.185）もロクロ成形の「かわらけ」で、形態も調整方法もともに１（遺物No.162②）とほぼ同一である。

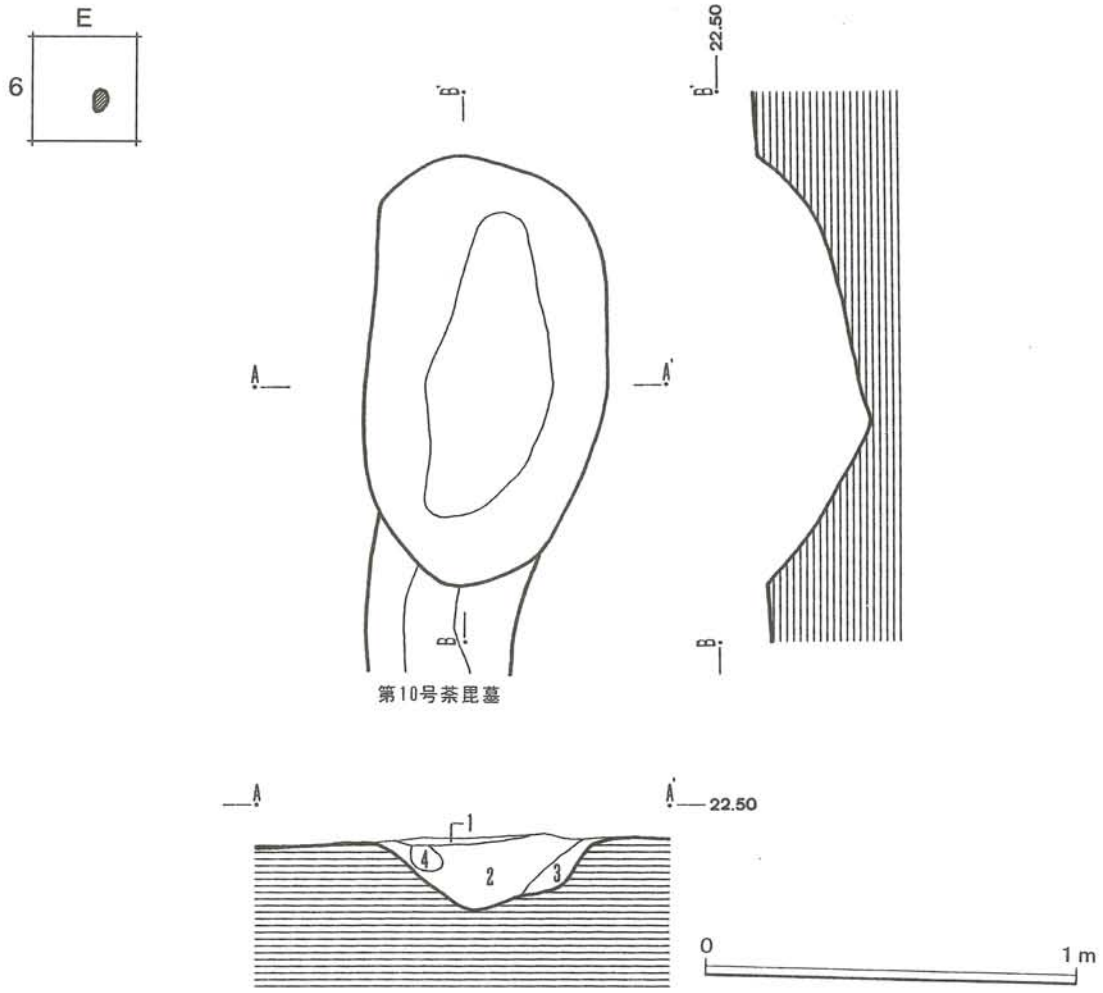
４（遺物No.162①）もロクロ成形の「かわらけ」であるが、底部からの立ち上がりが緩やかに外反しながら開く形態に、ほかの「かわらけ」との差が認められる。しかし、調整方法は１（遺物No.162②）とほぼ同一である。

５（遺物No.89、No.93）はロクロ成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片であるが、形態も調整方法も４（遺物No.162－１）とほぼ同一である。

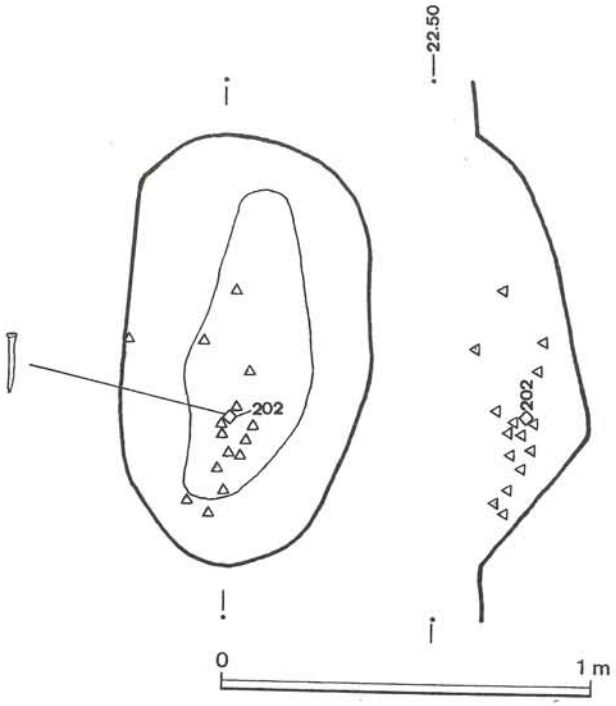
６（遺物No.187）は鉄釘でほぼ完形であるが、７（遺物No.188）の鉄釘は先端部が破損している。



図Ⅳ－３－174　第７号荼毘墓から出土した遺物
１～５：かわらけ、６・７：鉄釘



図Ⅳ－３－175　第８号荼毘墓の平面および断面図



図Ⅳ－３－176　第８号荼毘墓の遺物分布図

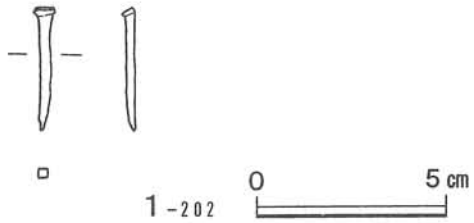
第８号茶毘墓

Ｅ－６グリッド内で、第６号茶毘墓の東約６ｍに位置し、南側の第10号茶毘墓を切っている。平面形状は不整楕円形で、長径 113cm、短径65cm、深さは最深部で30cmあり、長軸の方向はほぼ南北のＮ－９－'Ｅ を指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は４層に分けられ、第１層は黒褐色土で、締りも粘性も弱い。第２層は暗赤褐色土で、締りも粘性も共に弱く、径 0.5～６cm大の礫をやや多く含み、炭化物や赤色・黄橙色の焼土粒を多く含んでいる。第３層も暗赤褐色土であるが、第２層に比べ焼土粒の含有量が少ない。第４層も暗赤褐色土であるが、締りがやや強く、焼土のブロックをやや多く含んでいるところが第２・３層と異なる点である。

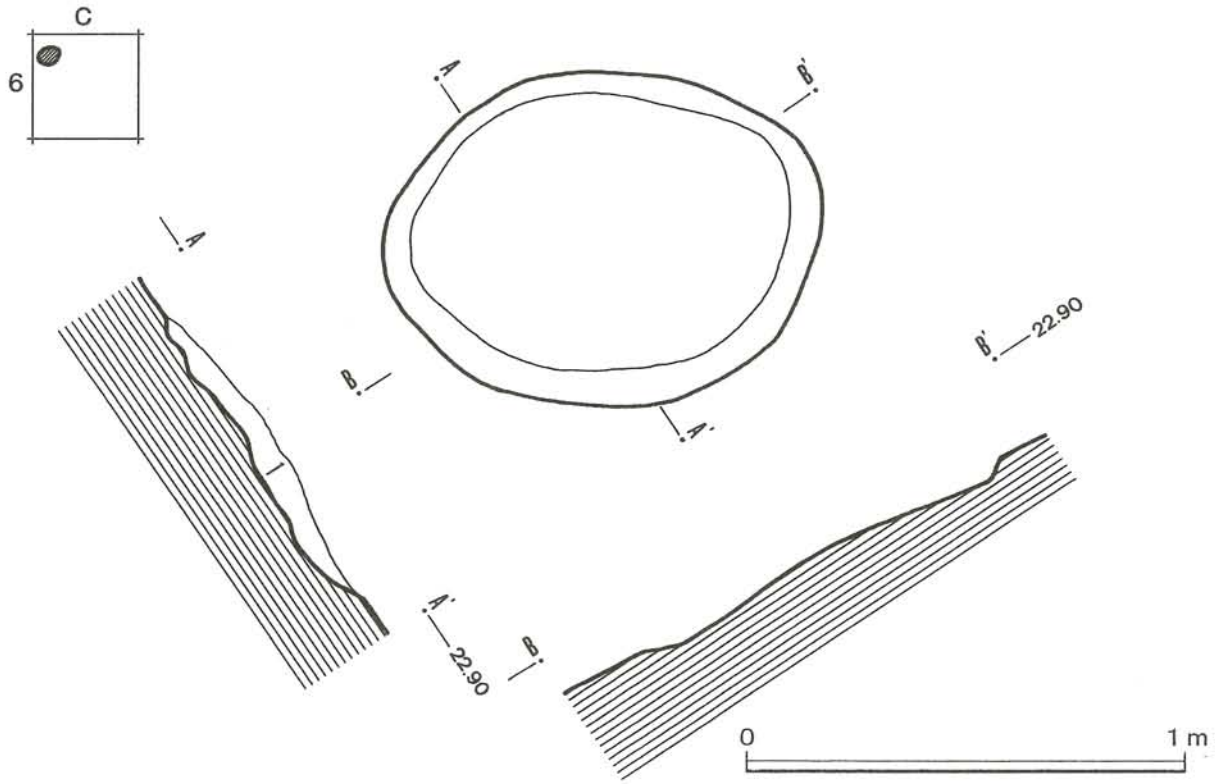
遺物は中央部より南側にかけての覆土から鉄釘が１本と、頭頂骨・鎖骨・尺骨・大腿骨などの人骨片が20点出土している。

１（遺物№202）は鋼鉄製の釘で、ほぼ完形である。

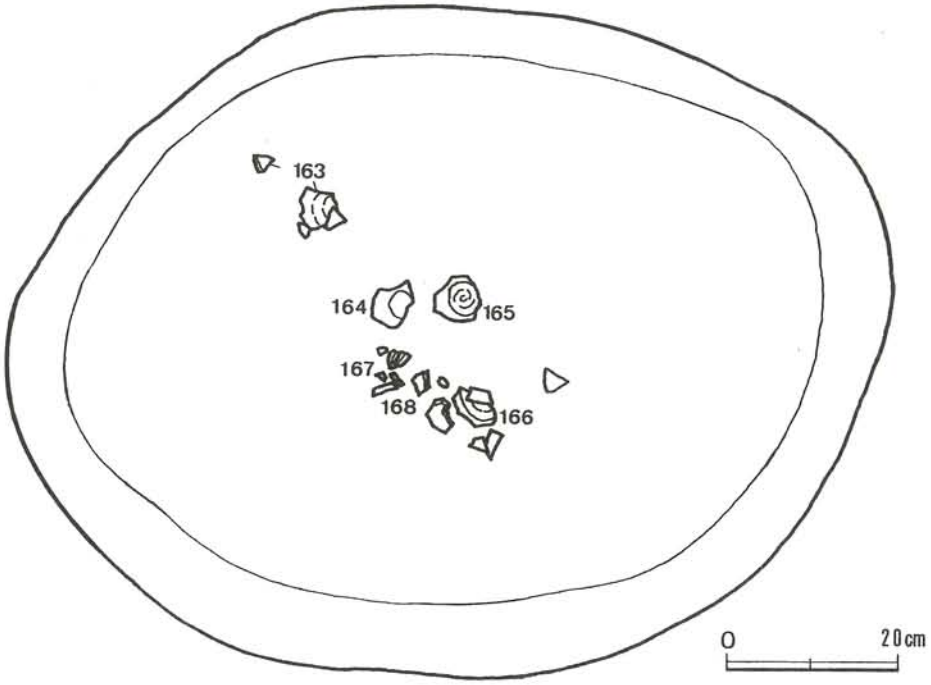


図Ⅳ－３－177　第８号茶毘墓から出土した遺物

１：鉄釘



図Ⅳ－３－178　第９号茶毘墓の平面および断面図



図Ⅳ－３－179　第９号茶毘墓の遺物出土状況図

第９号茶毘墓

Ｃ－６グリッド内で、第７号茶毘墓の北方約５ｍに位置し、平面形状は楕円形で、長径101cm、短径78cm、深さは最深部で７cmと浅く、長軸の方向はN-80°-E を指している。断面形状は浅いため定かでない。

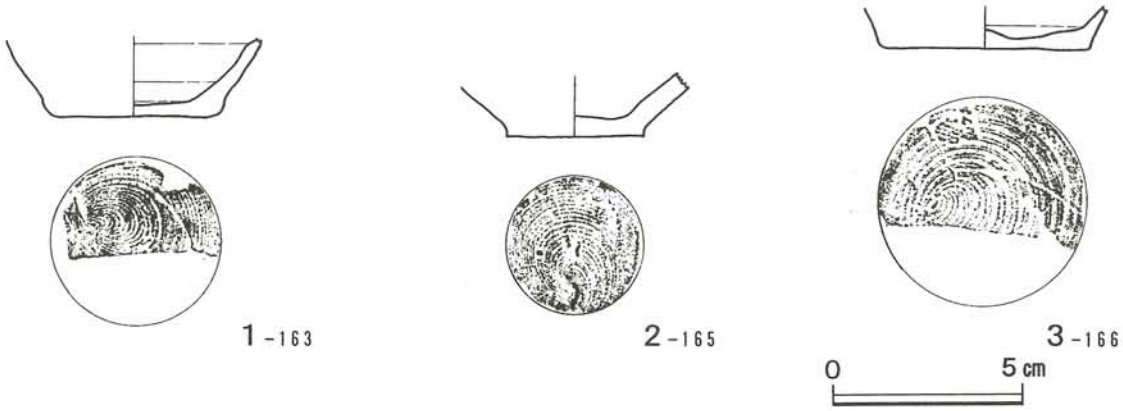
覆土は暗褐色土が１層で、締りは強く、粘性はやや弱い。径１～５cm大の礫を少量含んでいる。炭化物・焼土粒をやや多く含み、地山の中に堆積している礫を土壙の底面とし、僅かな掘込みを残す茶毘墓である。

遺物は土壙の中央部の覆土中から土器が点在して出土している。

１(遺物No.163) はロクロ成形の「かわらけ」の底部から体部にかけての破片で、底部の脇に張りを有する。体部の内・外面にヘラ削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

２(遺物No.165) もロクロ成形の「かわらけ」の底部から体部にかけて破片で、形態は１と同様である。体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面は底部から体部にかけてヘラ削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

３(遺物No.166) もロクロ成形の「かわらけ」の底部の破片で、調整方法は１・２と同様である。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。



図Ⅳ－３－180　第９号茶毘墓から出土した遺物
１～３：かわらけ

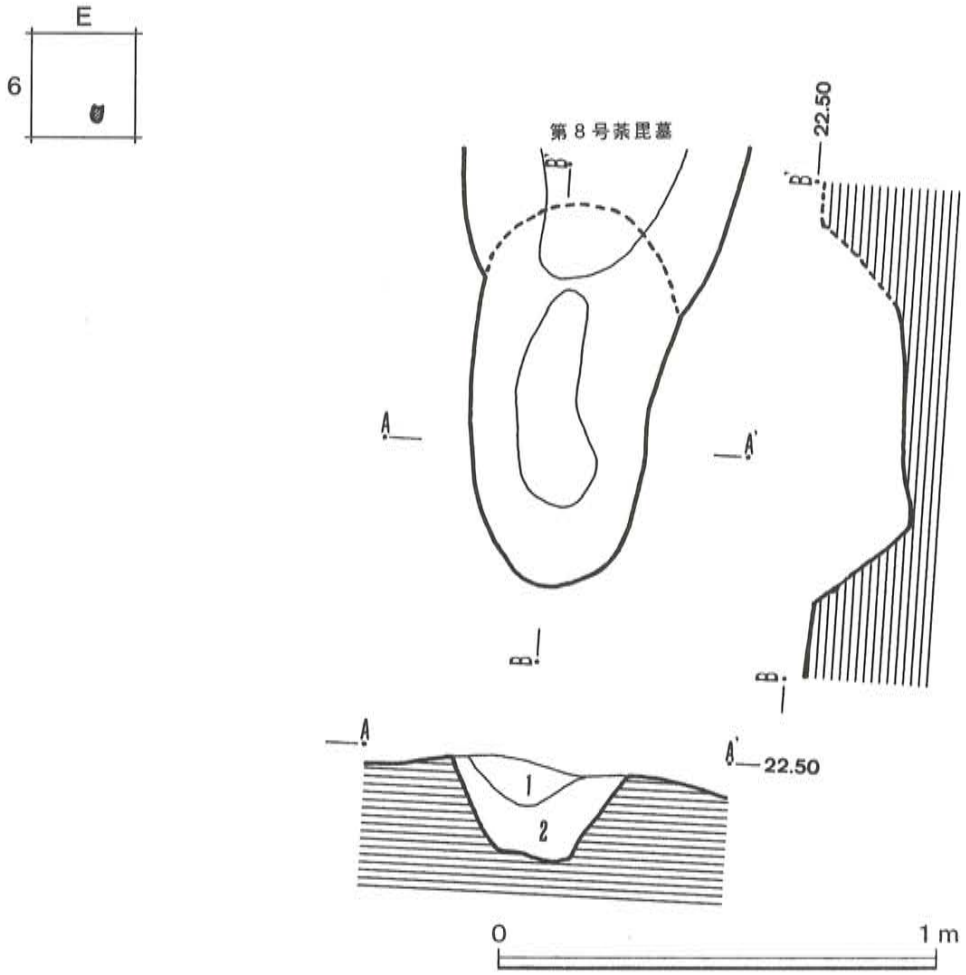
第10号茶毘墓

Ｅ－６グリッド内に位置し、北側は第８号茶毘墓によって切られている。平面形状は楕円形で、長径は推定で87cm、短径45cm、深さは最深部で22cmあり、長軸の方向はＮ－３°－Ｅとほぼ南北を指している。断面形状は上に開くＵ字形を呈している。

覆土は２層に分けられ、第１層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5～３cm大の礫をやや多く含み、炭化物・焼土粒を多く含んでいる。第２層は暗褐色土で、締りは弱く、粘性はやや強い。径１～５cm大の礫をやや多く含み、焼土粒を少量含んでいる。

遺物は錆のひどい銭貨(鉄銭、遺物No.272)が１枚、南側の壁面近くから出土しているほかに、中央部の覆土の上位から人骨片(遺物No.276、No.277)が２点出土している。

鉄銭(遺物No.272) は径が25.0mm、重量が3.30ｇあるが、表面が錆ているため文字を判読することができない状態である。



図Ⅳ－３－181　第10号茶毘墓の平面および断面図

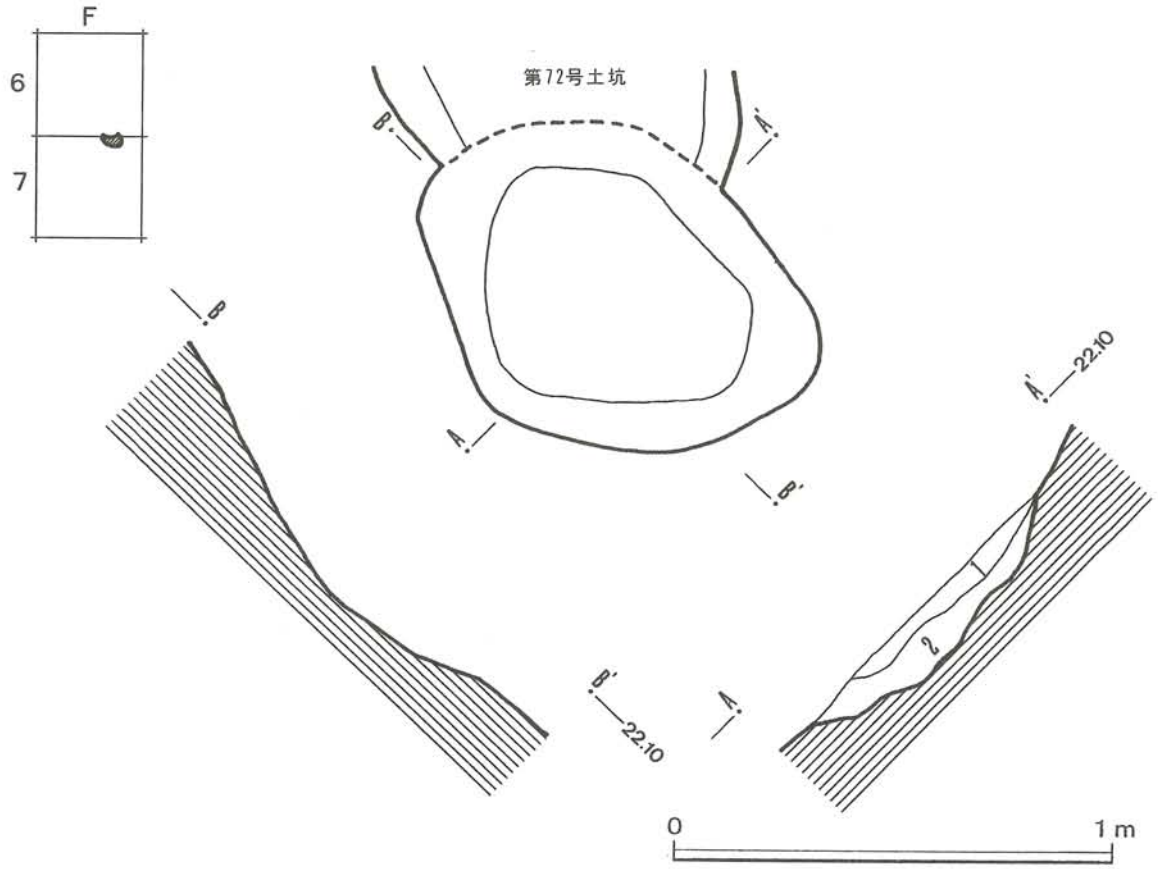
第11号荼毘墓

Ｅ－６～７グリッド内に位置する。第72号土坑によって北側を切られている。平面形状は不整円形で、長径は推定で98cm、短径70cm、深さは12cmと浅く、長軸の方向はN-65°-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、丸底状を呈している。

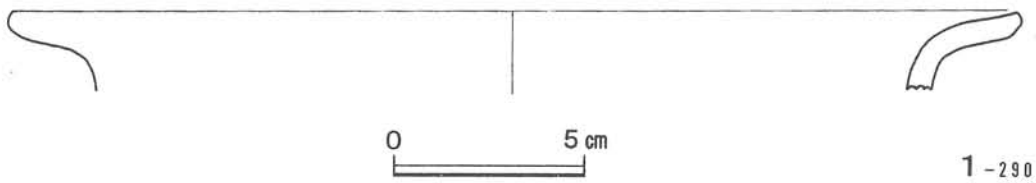
覆土は２層に分けられ、第１層は暗赤褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～４cm大の礫を含み、焼土粒をやや多く含んでいる。第２層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～4cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は東側の覆土の上位より土器片が３点と、覆土の中位より欠損した銭貨「開元通寶(遺物No.292)」 が１枚出土している。

１(遺物No.290) は甕形土器の口縁部の破片で、くの字の屈曲部を有し、開きながら立ち上がっている。外から流入したものと思われる。

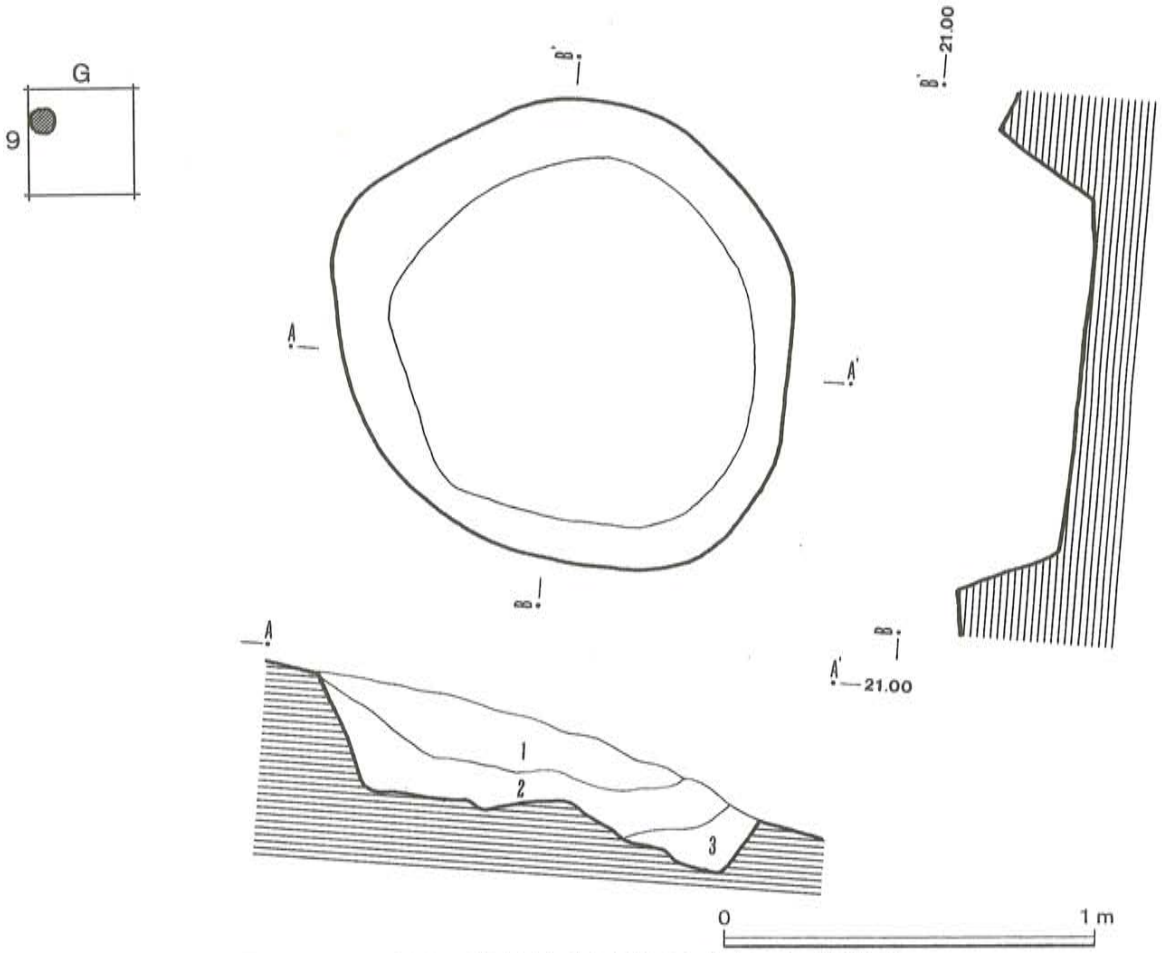


図Ⅳ－３－182　第11号荼毘墓の平面および断面図

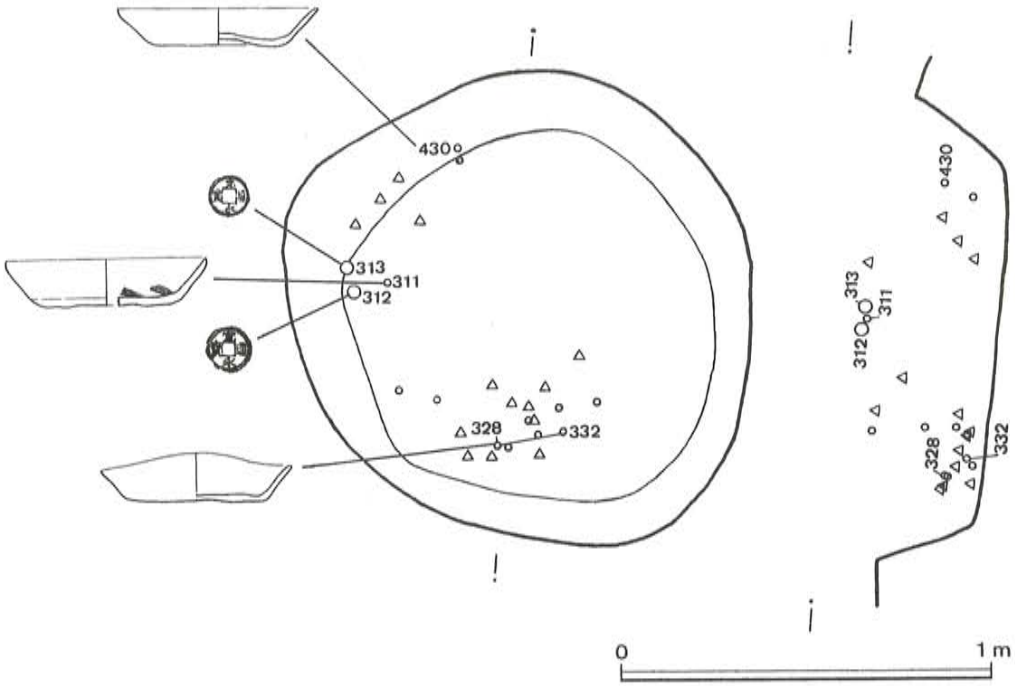


図Ⅳ－３－183　第11号荼毘墓から出土した遺物

１：甕型土器の口縁部



図Ⅳ－３－184　第12号茶毘墓の平面および断面図



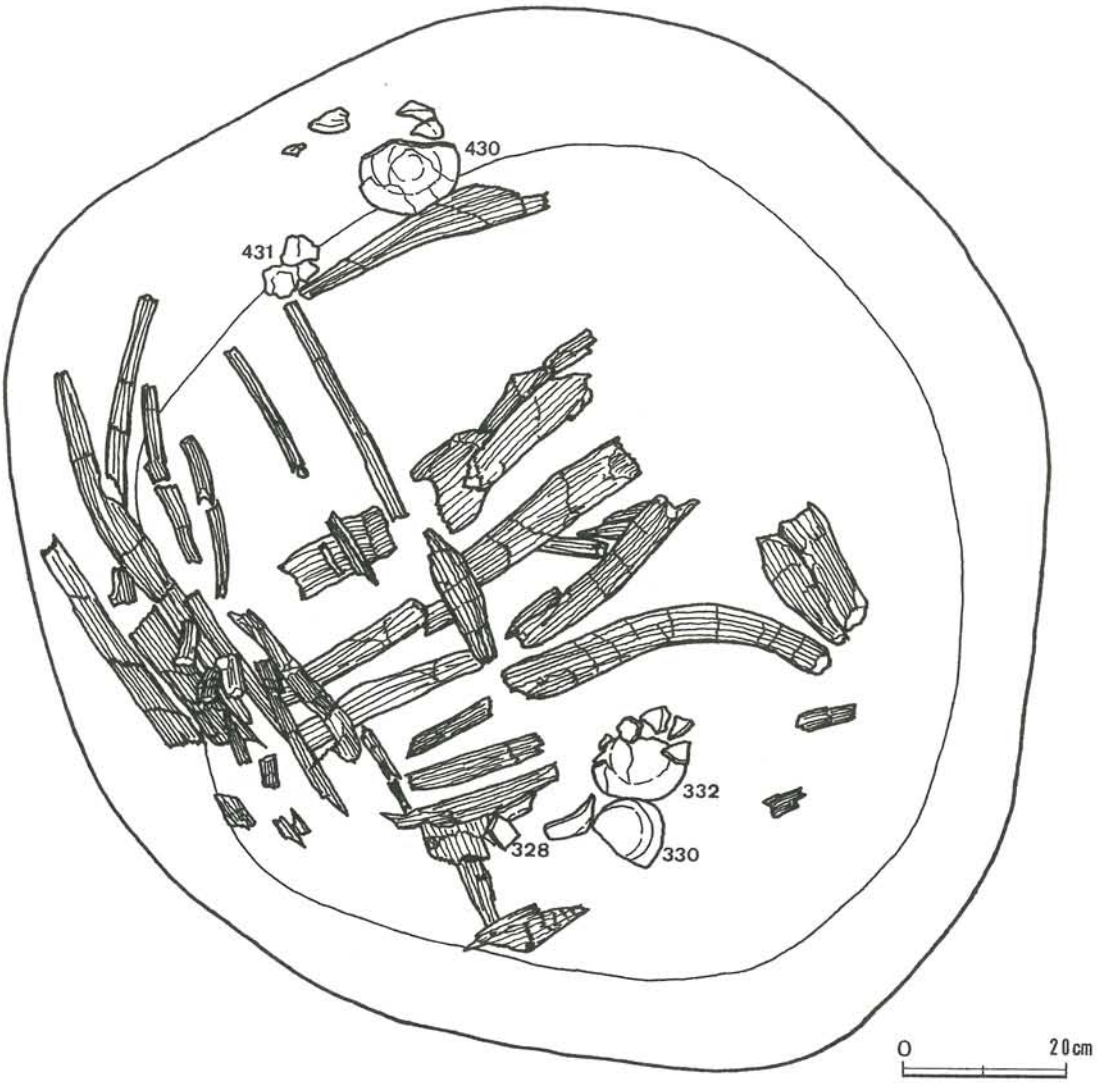
図Ⅳ－３－185　第12号茶毘墓の遺物分布図

第12号茶毘墓

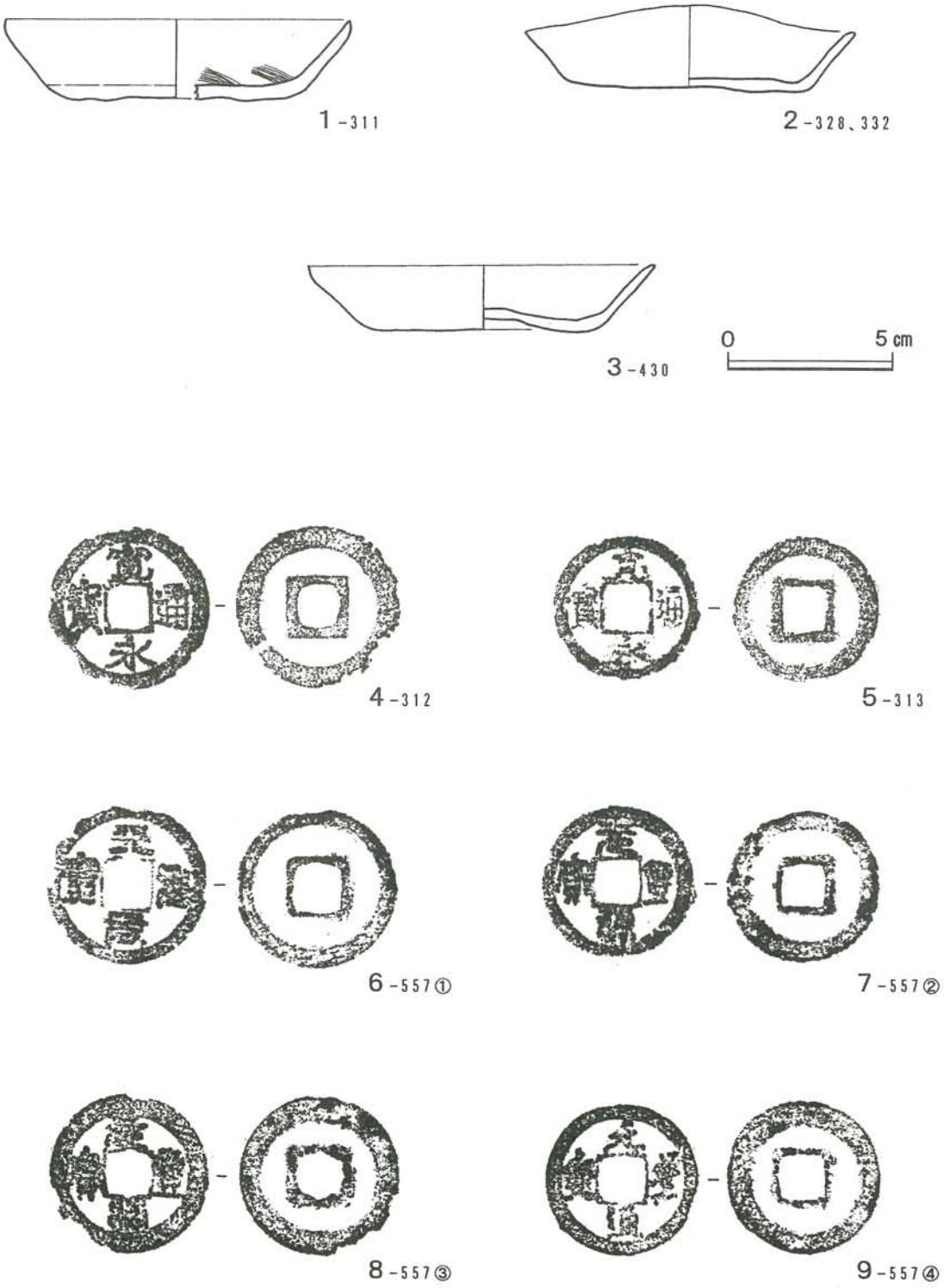
Ｇ－９グリッド内で、黒ボク土が堆積した谷部の斜面上位に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径 134cm、短軸 122cm、深さは最深部で30cmとやや深く、長軸の方向はN-58°-Wを指している。断面形状は底面に多少の凹凸がみられるが、上に開くＵ字形を呈している。

覆土は３層に分けられ、第１層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径 0.5～６cm大の礫をやや多く含み、炭化物・焼土粒をやや多く含んでいる。第２層は明黒色土で締りも粘性も弱く、径２～４cm大の礫を少量含んでいる。第３層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径 0.5～３cm大の礫をやや多く含んでいる。底面より多くの炭化材が出土している。

遺物は西側の覆土上位と南側の底面に近いところから土器が、西壁に近い覆土の上位と南側に集中する炭化材の中から銭貨が、土壙内の北西壁付近と南側の２ヵ所に集中して頭骨・鎖骨・尺骨・大腿骨などの人骨片41点が出土している。



図Ⅳ－３－186　第12号茶毘墓の遺物出土状況図



図Ⅳ－３－187　第12号荼毘墓から出土した遺物
１～３：かわらけ、４・５：銭貨「寛永通寶」、６～９：銭貨「元豊通寶」

１（遺物№311）は手捏ね成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、内・外面ともに横ナデ調整が施されている。底部は平底でヘラ削り調整が施されている。

２（遺物№328、№332）は手捏ね成形の「かわらけ」で、体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面はヘラ削りをした後に回転ナデ調整が施されている。底部は平底である。

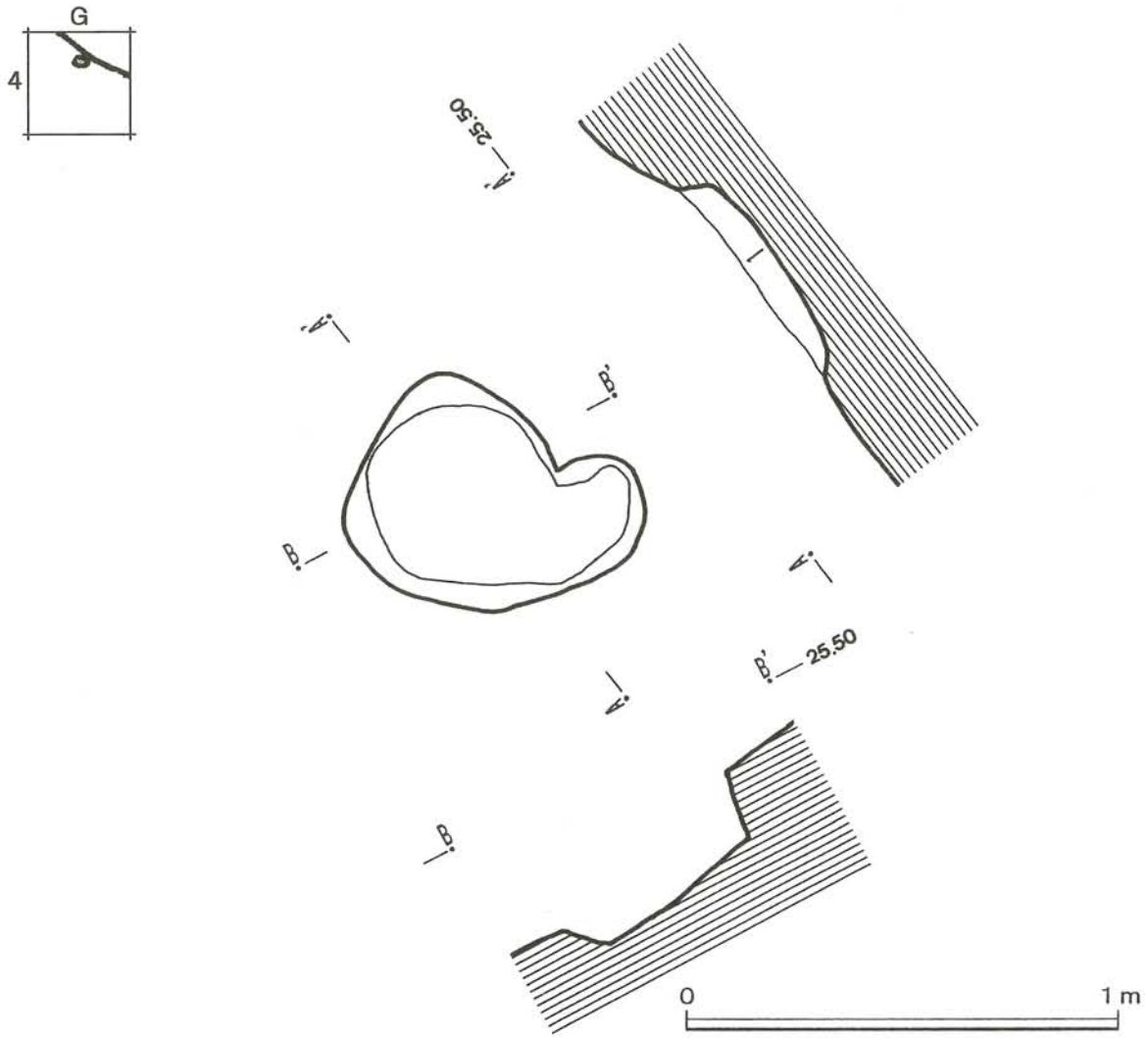
３（遺物№430）も手捏ね成形の「かわらけ」で、調整方法は２と同一である。底部は凸状をなしている。

４（遺物№312）と５（遺物№313）は銭貨「寛永通寶」で西壁に近い覆土の上位より出土したものである。

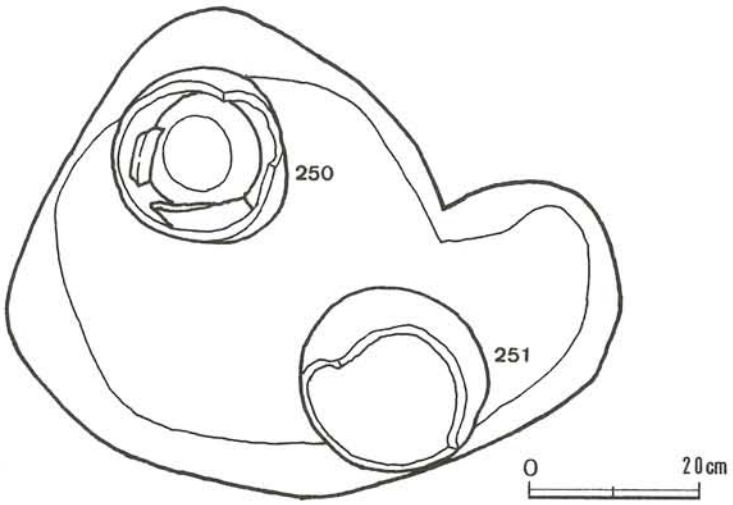
６～９（遺物№557-①～④）は銭貨「元豊通寶」で、６枚出土した内の４枚である。９（遺物№557-④）は２枚が熔着している。これらは南側の炭化材の中から挟まった状態で出土したものである。

銭　貨　の　計　測　値

遺物№	種　類	径(mm)	重量(g)	備　考
312	寛永通寶	25.0	2.52	
313	寛永通寶	22.8	2.28	
557-①	元豊通寶	24.5	2.27	
557-②	元豊通寶	23.4	2.49	
557-③	元豊通寶	24.5	3.07	
557-④	元豊通寶	23.4	6.61	２枚熔着、裏面の径24.0mm
557-⑤	□□□□	22.7	1.45	表面が腐食で文字が不明



図Ⅳ－３－188　第１号火葬墓の平面および断面図



図Ⅳ－３－189　第１号火葬墓の遺物出土状況図

５．火葬墓と遺物

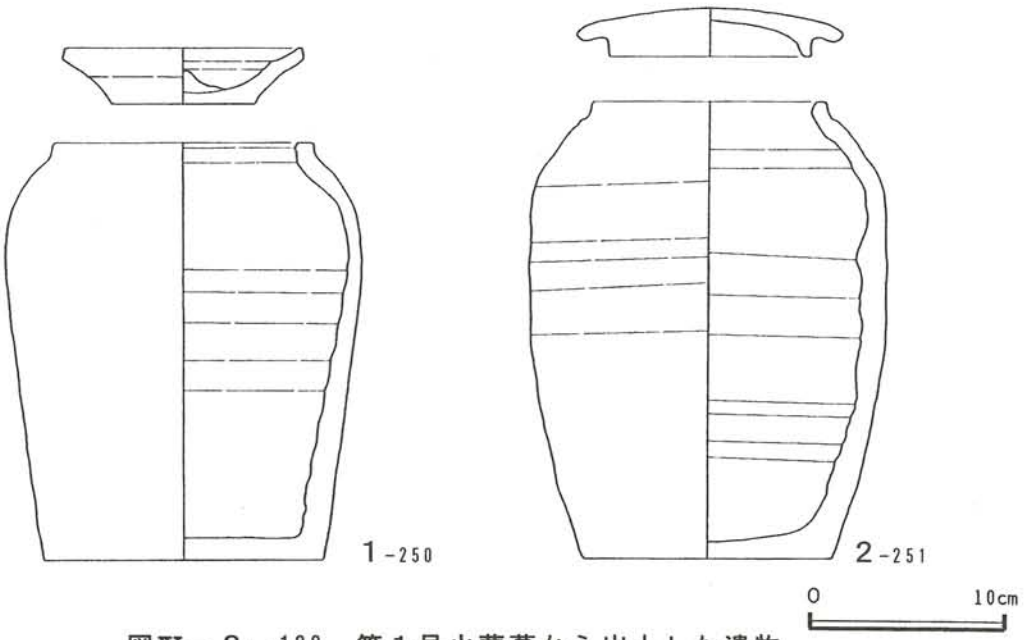
第１号火葬墓

Ｇ－４グリッド内で、調査区最北の南向き斜面の上位にある第２号方形周溝墓内に位置する。表土を除去している途中で、蔵骨器が露出した状態で確認された。地山に土壙が浅く残っており、確認された部分の長さ70cm、幅55cm、深さは最深部が15cmある。平面形状は不整円形を呈している。

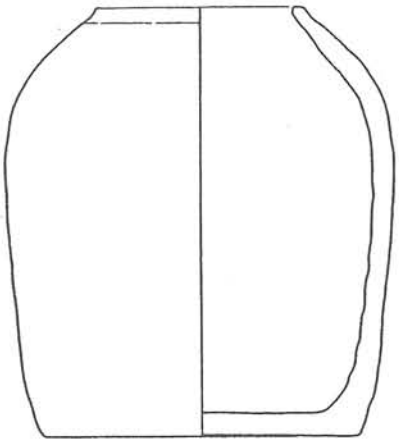
１（遺物№250）は蓋付の壺形蔵骨器で、口径12.6cm、底径14.8cm、体部の最大径18.7cm、器高22.0cmを測る。蓋部は口径12.8cm、底径 7.6cm、器高 2.9cmを測り、共に素焼きである。蓋部の形態は皿状を呈しており、内側に粘土紐を張り付けたつまみがある。蔵骨器内には焚焼処理された焼骨片（総重量1,550g）が入った状態で出土している。

２（遺物№251）は蓋付の壺形蔵骨器で、口径12.8cm、底径13.2cm、体部の最大径18.9cm、器高24.2cmを測る。蓋部は口径14.0cm、底径10.7cm、器高 2.6cmを測り、共に素焼きである。蔵骨器内には焚焼処理された焼骨片（総重量1,350g）が入った状態で出土している。

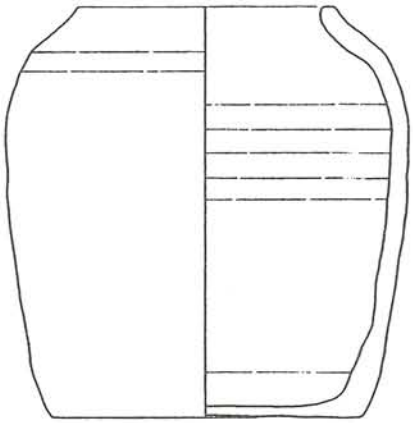
これらの蔵骨器は形態が異なるが、土壙の底面を同じくし、隣接して出土していること、追葬の痕跡がないことから同時に埋葬されたと思われる。なお、土壙内からは供献品などは出土していない。



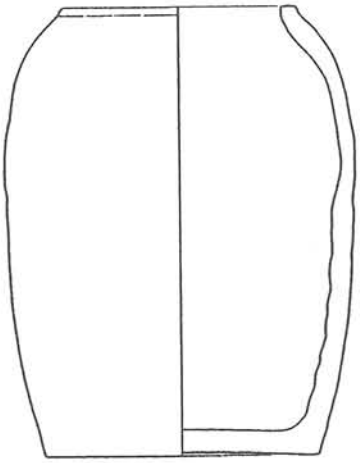
図Ⅳ－３－190　第１号火葬墓から出土した遺物
１・２：蔵骨器



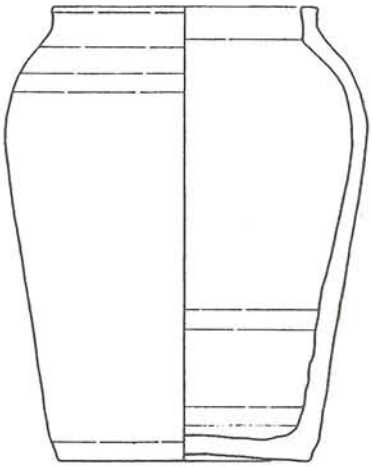
1-558



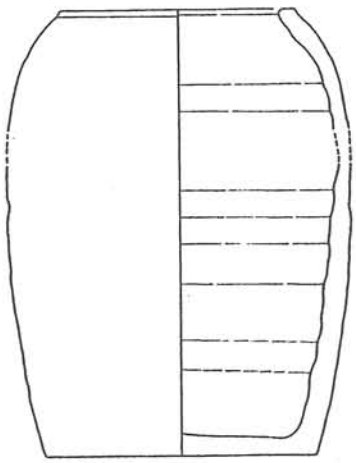
2-559



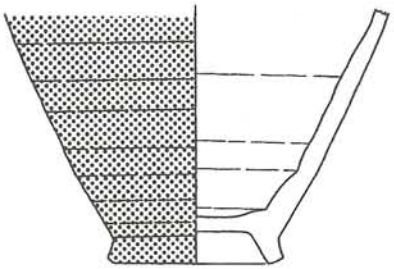
3-560



4-561



5-562



6-577

0　10cm

図Ⅳ－４－１　表土層から出土した遺物（１）

１～６：蔵骨器

第４節　表土層から出土した遺物

表土の除去作業時に採集された遺物として、素焼きの壺型蔵骨器が５点と陶質の蔵骨器片が１点、「かわらけ」が３点、組合せ五輪塔が１基と一石五輪塔が２基、銭貨が12枚あげられる。

１．蔵骨器

１（遺物No.558）は素焼きの壺型蔵骨器で、器高が22.3cm、口縁部の径が11.2cm、底部の径が16.7cm、最大径が20.4cmあり、底部から体部上半まで緩やかに開きながら、ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部に向かって内湾している。外面にはヘラ削りの痕が残っており、やや粗い器面調整がみられる。また、内面にも粗い器面調整がみられる。なお、底部の外面にナデ調整などはみられない。

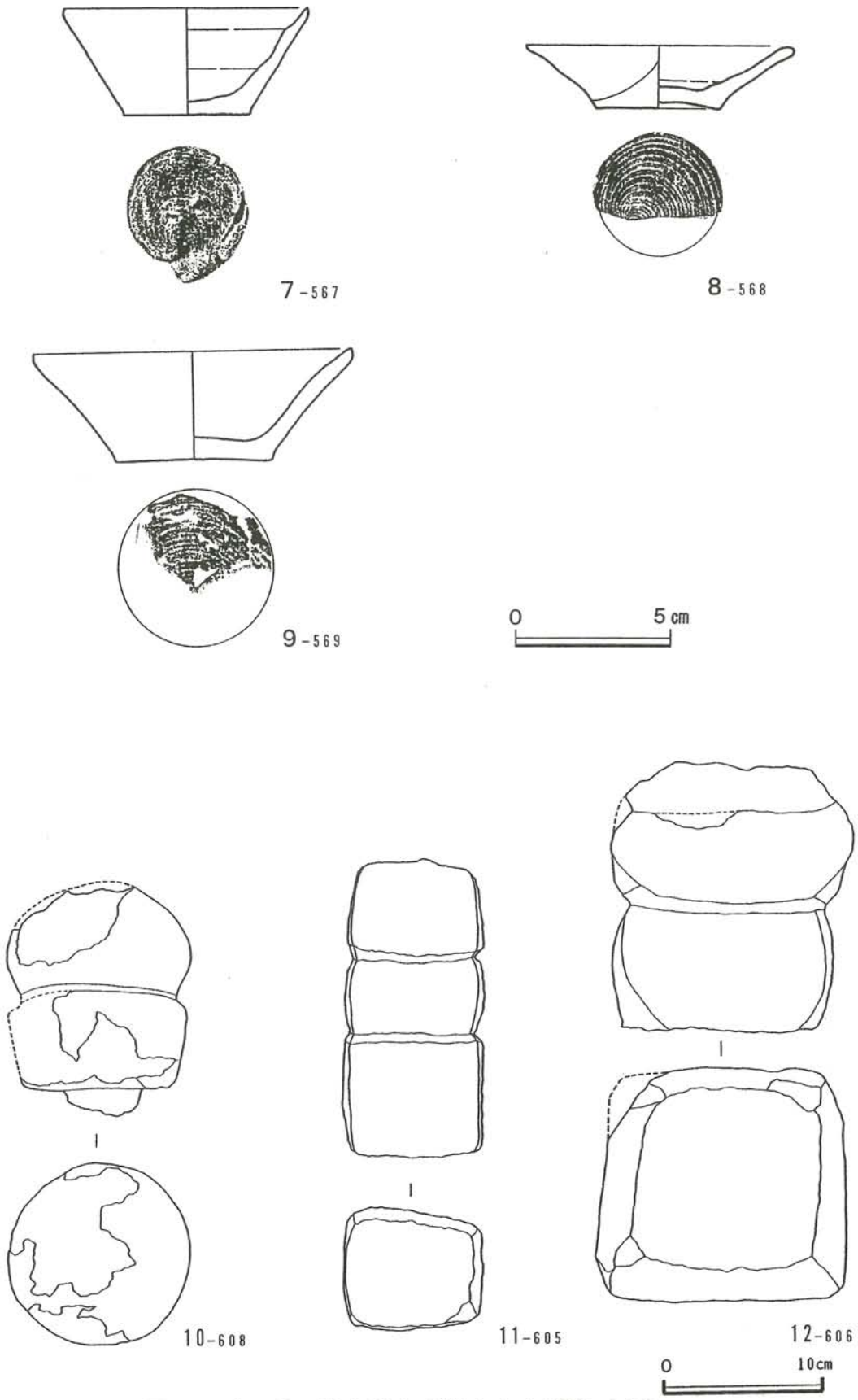
２（遺物No.559）も素焼きの壺型蔵骨器で、器高が21.3cm、口縁部の径は推定で13.5cm、底部の径が16.2cm、最大径は体部の上半で21.2cmあり、底部から体部上半まで緩やかに開きながら、ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部に向かって内湾している。外面にはヘラ削りの痕が残っており、やや粗い器面調整がみられる。また、内面にも粗い器面調整がみられる。なお、底部の外面にナデ調整などはみられない。

３（遺物No.560）も素焼きの壺型蔵骨器で、器高が推定で23.7cm、口縁部の径が12.4cm、底部径が14.4cm、最大径が体部上半で18.4cmあり、底部から体部上半の最大径部まで開きながら直線的に立ち上がり、口縁部に向かって内湾している。底部にわずかなヘラ削りがみられ、十分な調整はなされていないが、外面はよく器面調整がされている。内面も上部の２/３までは良く調整されているが、下部の１/３は調整の粗さが残っている。底部の外面も器面調整が丁寧に施されている。

４（遺物No.561）も素焼きの壺型蔵骨器で、器高が24.0cm、口縁部の径が14.0cm、底部径が13.3cm、最大径が体部上半で19.0cmあり、底部から体部上半の最大径部まで開きながら直線的に立ち上がり、内湾しながら口縁部に達し、口縁部は垂直に立ち上がっている。底部から上１cmほどにヘラ削りがみられるが、十分な調整はされていない。外面はよく器面調整がされている。内面も上部の２/３までは良く調整されているが、下部の１/３は調整の粗さが残っている。底部の外面も器面調整が丁寧に施されている。

５（遺物No.562）も素焼きの壺型蔵骨器で、器高が推定で23.4cm、口縁部の径が12.2cm、底部径が14.2cm、最大径が体部上半で17.9cmあり、底部から胴部上半の最大径部まで開きながら直線的に立ち上がり、口縁部に向かって内湾している。底部にわずかなヘラ削りがみられ、十分な調整がなされていないが、外面はよく器面調整がされている。内面も上部の２/３までは良く調整されているが、下部の１/３は調整の粗さが残っている。底部の外面も器面調整が丁寧に施されている。

６（遺物No.577）は陶質の蔵骨器の底部から体部にかけての破片で、現存部の高さ13.5cm、このうち高台の高さ 1.7cm、底部径が14.2cmあり、灰色の素地に淡黄色の釉が施されている。体部の外面と高台の内面はヘラ削りがみられ、体部の内面と底部の外面はナデ調整が施されている。



図Ⅳ－４－２　表土層から出土した遺物（２）

７～９：かわらけ、10～12：五輪塔

２．かわらけ

７(遺物No.567) はロクロ成形の「かわらけ」で、口径 8.0cm、器高 3.4cm、底径 3.9cmあり、底部から直線的に開きながら立ち上がっている。体部の外面は回転ナデ調整が施され、内面はヘラ削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。焼成は良好で、色調は淡黄茶褐色を呈し、胎土に砂粒と赤色粒を含んでいる。

８(遺物No.568) もロクロ成形の「かわらけ」で、口径10.4cm、器高 3.5cm、底径 5.0cmあり、底部から僅かに外反し、開きながら立ち上がっている。体部の外面は回転ナデ調整が施され、内面はヘラ削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。焼成は良好で、色調は淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒と赤色粒を含んでいる。また、底部から口縁部にかけての外面にススが付着している。

９(遺物No.569) もロクロ成形の「かわらけ」の底部から口縁部にかけての破片で、推定口径 8.7cm、器高 1.9cm、底径 4.1cmあり、13・14とは異なり口唇部がわずかに肥厚している。体部は直線的に開きながら立上り口縁部で外傾している。体部の内・外面ともにヘラ削りをした後にナデ調整が施されている。底部はややくぼんでいるが回転糸切りの痕が残っている。焼成は良好で、色調は淡橙灰褐色を呈し、胎土は精整され密である。

３．五輪塔

10(遺物No.608) は組合せ五輪塔の空輪と風輪が一石からなる部分で、風化による破損が甚だしく、無銘である。最大径は11.8cm、高さは14.4cmある。

11(遺物No.605) は一石五輪塔の火・水・地輪の部分で、ほぼ方形の柱状を呈しているが、地輪の方形以外は明瞭な型どりは認められない。無銘である。水輪部の最大幅は 9.0cm、残存部の高さは19.0cmある。

12(遺物No.606) も一石五輪塔で、火輪と水輪の部分が残存しており、それぞれ円と方形を型どっていると思われるが、明瞭ではない。無銘である。最大幅は15.0cm、残存部の高さは17.2cmある。

13-595

14-596

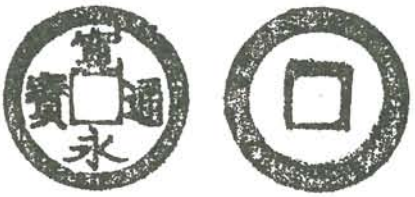
15-597

16-598

17-599

18-600

19-603



20-604

図Ⅳ－４－２　表土層から出土した遺物（３）
13～20：銭貨

４．銭貨

銭貨は表土層から12枚が出土したが、いずれも表面が腐食したり、一部が欠損したりしているため、詳細の不明なものが多い。

銭　貨　の　計　測　値

遺物No.	種　類	出土地点	径(mm)	重量(g)	備　　考
593	□□□□	Ｆ４表土	29.1	4.99	鉄銭、錆で文字が不明
594	□□□□	Ｆ４表土	測定不能	11.65	鉄銭、錆で文字が不明
595	□樂通寶	Ｆ８表土	24.8	2.06	一部欠損、「永樂通寶」
596	元□通寶	Ｆ８表土	24.7	2.26	一部欠損、「元豊通寶」
597	元□通寶	Ｆ８表土	24.6	2.08	一部欠損、「元豊通寶」
598	寛永通寶	Ｆ８表土	23.6	1.43	一部欠損
599	□永通寶	Ｆ８表土	23.5	1.40	一部欠損、「寛永通寶」
600	熙□元寶	Ｆ８表土	24.6	1.72	一部欠損、「熙寧元寶」
601	□□□□	Ｆ８表土	22.5	1.63	一部欠損、腐食で文字が不明
602	□□□□	Ｆ８表土	測定不能	0.84	3/4欠損、腐食で文字が不明
603	寛永通寶	Ｆ９表土	20.2	1.02	一部欠損
604	寛永通寶	Ｆ９表土	24.6	3.65	

「寛永通寶」以外の「永樂通寶」「元豊通寶」「熙寧元寶」はいずれも渡来銭である。

第Ⅴ章　調査の成果と課題

向山遺跡は岡津丘陵と呼ばれる低地性の段丘の南端部に位置するが、茶畑などに利用されていたため、遺跡の基盤となる砂礫層の上部はかなり削平されており、いわゆる包含層が存在しない遺跡である。

今回の調査の結果、溝状遺構が43条(方形周溝墓３基の溝９条を含む)、穴状遺構は柱穴状遺構が46基(このうち掘立柱建物跡の８基を含む)、土坑が72基、土壙墓が13基、荼毘墓が12基、火葬墓が１基の計144基で、合計187基の遺構が確認された。

１．溝状遺構の状況

① 方形周溝墓

溝状遺構のうち方形周溝墓として捉えることができるのは、調査区の南側中央部の中央に１基と北側中央部に隣接した２基の計３基である。

第１号方形周溝墓は北溝(第17号溝)、西溝(第16号溝)、南溝(第９号溝)からなり、東溝が削平されて存在せず、主体部も確認されなかった。遺物は西溝から土器の細片が覆土中から１点出土したが、時代を確定できるものではなかった。

第２号方形周溝墓は西溝(第33号溝)、南溝(第24号溝)、東溝(第27号溝)および主体部と考えられる土壙と封土の一部が確認された。なお、北溝は調査区外に位置すると推定される。西溝と東溝の覆土の上位から土器の細片が出土しているが、時代を確定できるものではなかった。また、主体部と考えられる土壙の遺物は覆土中に流入したと思われる土器の破片が１点出土しているだけで、主体部の年代を確定できる遺物ではない。

また、主体部と考えられる土壙から南西部にかけて、厚さ20～30cmほどの封土と思われる暗褐色～暗黄褐色土の盛土が分布しており、その中から弥生時代後期の土器片などが88点出土している。

第３号方形周溝墓は、西溝(第26号溝)、南溝(第25号溝)、東溝(第30号溝) が確認されているが、北溝は調査区外に位置すると推定される。主体部も封土も確認されなかったが、南溝の底面から弥生時代中期後半の土器が出土している。

以上のように方形周溝墓は、全体に開墾等で地層の上部がかなり削平されており、全体がどのような形状でどの程度の規模であったかを正確に捉えることは出来ず、しかも第１号と第３号方形周溝墓は主体部も確認されなかった。ただし、第３号方形周溝墓は南溝の底面から出土している土器から弥生時代中期後半の方形周溝墓と推定され、第２号方形周溝墓は封土の中から弥生時代後期の土器片が出土していることから、それよりやや後の時期の方形周溝墓と推定される。

② 溝状遺構

方形周溝墓を構成する溝以外の34条の溝状遺構は、調査区の南側の平坦部と北側斜面に分布しているが、平坦部に比較的多く分布している。平坦部に分布している溝は長軸方向が南北を指している溝が多くみられ、北側斜面に分布している溝は長軸方向が東西を指している溝が多くみられる。平面形状では隅丸長方形が多く、平均的な大きさは長さ 314cm、最大幅81cm、深さは最深部で25cmある。しかし、溝内から遺物が確認されたのは第１・４・８・10・14・20・22・31・34・39号溝の10条で、そのうち、第１・４・８・10・14・20

・31号溝から出土した遺物はいずれも土器の細片で、時代を確定できるものではない。また、土壙墓に近い第22号溝の第１層からは欠損した銭貨「寛永通寶」が１点出土しているが、流入したもので溝の時代を確定するものではなかった。なお、方形周溝墓の近くに位置する第34号溝からは弥生土器の破片が、第39号溝からは土師器の破片がそれぞれ出土している。

以上のように、方形周溝墓の近くに位置する第34号溝と第39号溝以外の溝状遺構からはほとんど遺物が出土しておらず、時代や性格を確定するのは困難である。

２．穴状遺構の状況

① 柱穴状遺構

平面形状がほぼ円形のいわゆる柱穴状(ピット)を呈する遺構で、調査区の南側平坦部と中央西側平坦部、北側斜面の中央部に分布しており、確認された46基の平均的な大きさは長径が50cm、短径は41cm、深さは21cmである。そのうち第１号ピットから第８号ピットは、ピットの配置などによって２間×２間の掘立柱建物跡が想定された。建物跡は南北 360～370cm、東西 380～ 390cmの方形のプランをなし、第１～６号ピットの６本が主柱、第７・８号ピットの２本が棟持柱と推定される。その他、直線的にならんで確認されたピット列が11例ある。しかし、柱穴状遺構からは遺物が確認されたのは、第２・６・11・20・28・29・32・34・35号ピットの僅か９基で、そのうち第２・６・11・20・28・34・35号ピットから出土した遺物はいずれも土器の細片で、時代を確定できるものではない。また、第29号ピットで出土した土師器の破片と第32号ピットで出土した土師器の破片はいずれも覆土の上位からの出土であり、ピットの時代や性格を確定できるものではない。

② 土坑

地山を掘り込んだ穴状遺構で、調査区内の全域に分布しており72基が確認された。平面形状でみると、楕円形・不整楕円形を呈するものがが37基で約51％を占めているが、長軸の方向や規模などに統一性はみられない。円形・不整円形を呈するは15基で約21％を占めているが、規模や深さに統一性はみられない。遺物が確認された土坑は第４・12・27・36・37・39・41・46・54・57・62・66・71・72号土坑の14基あるが、このうち第４・12・36・39・54・66号土坑から出土した遺物はほとんどが土器の細片で、土坑が掘られた時代や性格を確定できるものではなかった。なお、第27・46・62・71・72号土坑からは土師器の破片が、第37号と第57号土坑からは陶質土器の破片が、第41号土坑からは品種・用途などが不明な石製品の破片がそれぞれ出土しているが、遺構の時代や性格を確定できるものではなかった。

第72号土坑の覆土から土師器の破片が出土しているが、この土坑は第２号方形周溝墓内に位置し、深さも最深部で16cmと浅く覆土も単純で、しかも銭貨「開元通寶」が出土している第11号茶毘墓を切っていることから、第72号土坑の覆土から出土している土師器の破片は土坑の年代を決定する遺物ではなく、外部から流入したものと解釈できる。これは第11号茶毘墓の覆土の上位に外から流入したものと思われる甕形土器の口縁部の破片などが３点含まれていることからも判断できる。

③ 土壙墓

穴状遺構のうち、覆土の中に炭化物を含み、供献物としてのいわゆる「かわらけ」や銭

貨などが出土するもので、第６号土壙墓のように供献物がなく人骨片だけが出土しているものもある。なお、第13号土壙墓は他の土壙墓とは異なり、供献物がなく出土した遺物も土師器片と須恵器片であることから土壙墓ではなく土坑として扱うべきかもしれないが、覆土の中に炭化物や焼土粒を含んでいたため、一応土壙墓として扱った。

土壙墓の分布は谷部を挟んで南側の斜面上位に位置する第１・２・４・７・８・11号土壙墓の６基と北側斜面に位置する第３・５・９・12・13号土壙墓の５基および同じく北側斜面の東端に位置する第６・10号土壙墓の２基の３グループに大別できる。また、これらの土壙墓はいずれも斜面に立地することが特徴の一つで、これは茶毘墓の多くが平坦部に立地することとは対照的である。

土壙墓は13基が確認されている。平面形状で区分すると楕円形・不整楕円形が９基、円形・不整円形が２基、隅丸長方形が２基で楕円形・不整楕円形が多い。長軸の方向はほぼ南北を指すものが３基あるが、全体として一定していない。

表Ⅴ－２－１　土壙墓一覧表

No.	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	平面形状	長さ 長径	幅 短径	深さ	長軸の方向	出土遺物	備考
1	Ｆ９	円形	99	89	32	N-18°-E	陶質丸碗２点、銭貨「寛永通寶」６枚	
2	Ｆ８	楕円形	126	97	47	N- 9°-E	染付猪口１点、手捏ね成形の「かわらけ」３点、銭貨「元豊通寶」６枚	11号土壙墓を切る
3	Ｇ６	楕円形	94	70	15	N-77°-W	銭貨「寛永通寶」３枚	
4	Ｆ８	不整楕円形	101	87	59	ＮＳ	ロクロ成形の「かわらけ」３点、鉄釘１本、人骨片２点	30号土坑を切る
5	Ｅ３	不整楕円形	89	58	44	N-19°-E	ロクロ成形の「かわらけ」４点、銭貨「寛永通寶」１枚	
6	Ｊ６	隅丸長方形	210	66	58	N-52°-W	人骨片のみ	
7	Ｇ９	楕円形	120	101	50	N-82°-W	手捏ね成形の「かわらけ」５点とロクロ成形の「かわらけ」１点、施釉陶質土器片２点、人骨片12点	
8	Ｇ９	楕円形	78	55	36	N-22°-E	手捏ね成形の「かわらけ」２点	
9	Ｇ５	楕円形	150	96	41	N-27°-W	ロクロ成形の「かわらけ」１点、銭貨「寛永通寶」６枚	
10	Ｋ６	不整円形	129	126	36	ＥＷ	粉状の骨のみ	
11	Ｆ８	不整楕円形	234	111	28	N-73°-E	陶質皿形土器片１点	
12	Ｆ５	楕円形	75	60	25	N-77°-W	ロクロ成形の「かわらけ」１点	
13	F3･4	隅丸長方形	174	139	26	N- 8°-E	土師器片、須恵器片	

供献物としての「かわらけ」は第２・４・５・７・８・９・12号土壙墓で出土している。このうちロクロ成形による「かわらけ」が第４・５・７・９・12号土壙墓から、手捏ね成形による「かわらけ」が第２・７・８・12号土壙墓から出土している。第７号土壙墓を除き一つの遺構からロクロ成形か手捏ね成形のどちらかが出土するのが特徴である。これは荼毘墓でも同じである。また、「かわらけ」以外の供献物として第１号土壙墓より丸碗が、第２号土壙墓より染付土器の猪口が、第11号土壙墓より絵付けの陶器がそれぞれ出土している。

銭貨は第１・２・３・５・９号土壙墓より計22枚が出土した。これらはいわゆる六道銭で、この六道銭の原則である６枚が揃って出土したのは第１・２・９号土壙墓である。銭貨の種類は「寛永通寶」が13枚と最も多く、このうち背面に「文」の文字がある新寛永通寶が７枚ある。「元豊通寶」は第２号土壙墓より２枚出土した。なお、種類の確認が出来ないものが７枚ある。

「寛永通寶」は江戸時代の寛永３年(1626)から明治２年(1869)まで使用されていた銭貨で、背面に「文」の文字がある新寛永通寶は寛文８年(1668)以降に鋳造され使用された銭貨である。「元豊通寶」は中国からの渡来銭で、鋳造の始めは北宋時代の元豊元年(1078)である。寛文10年(1670)に渡来銭の使用禁止令が出るまで通貨として使用されていた銭貨である。

鉄釘は第４号土壙墓より１点出土したのみである。また、人骨片は第４・６・７・10号土壙墓より 124点が出土したが、それらは原形をとどめるものがなく、骨片・骨粉の状態で出土している。

以上のように出土した遺物から推察して、第13号土壙墓以外は近世の庶民の土葬墓と考えられる。なお、第13号土壙墓は第２号方形周溝墓の封土を切っていることや土壙の底面から出土した遺物などから推察して、古墳時代の土壙墓と考えられる。

④ 荼毘墓

この報告書で「荼毘墓」と呼称した遺構は土壙内で遺骸を荼毘に付し、そのまま埋葬したと考えられる遺構で、その特徴として、焚焼処理の痕跡と思われる炭化材・木炭粒、焼土ブロック・焼土粒が覆土の中に含まれ、その多くは層を形成していること。また、白色系の焼骨粉が含まれること。さらに、土壙の底面から壁面にかけて焼火痕が認められ、焼土化した状況が認められることである。

荼毘墓は12基が確認され、調査区南側の平坦部に単独で分布する第１～３号の３基と調査区の中央部に９基が分布している。荼毘墓が立地する地形は平坦面もしくは傾斜面との変換点が多く、なかでも東側の４基は黒ボク土の堆積する谷部の斜面と平坦部との変換点に位置している。

荼毘墓の平均的な規模は、長径が約 106cm、短径が約80cm、深さが約20cmである。平面形状は円形・不整円形が６基、楕円形・不整楕円形が６基と半々に分かれる。長軸の方向はほぼ南北を指すものが６基、ほぼ東西を指すものが３基ある。

供献物としての「かわらけ」は第４・５・６・７・９・12号荼毘墓で出土している。このうちロクロ成形による「かわらけ」が第４・５・６・７・９号荼毘墓から出土しており、手捏ね成形による「かわらけ」が出土したのは第12号荼毘墓だけである。

表Ⅴ－２－２　荼毘墓一覧表

No.	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	平面形状	長さ長径	幅短径	深さ	長軸の方向	出土遺物	備考
1	C14	楕円形	100	65	15	ＮＳ	粉状の骨のみ	
2	F12	不整円形	91	76	20	N-41°-W	煤の付着した扁平の玉石１点、銭貨「開元通寶」「元豊通寶」５枚、人骨片３点	
3	B11	不整楕円形	126	91	15	N-86°-W	細長首の壺形土器の破片４点(同一個体)	
4	C･D8	円形	90	82	29	N- 3°-E	ロクロ成形の「かわらけ」２点、銭貨６枚、鉄釘８本、笊状に編まれた竹製品の一部、人骨片22点	
5	C７	楕円形	116	86	27	N- 8°-E	ロクロ成形の「かわらけ」１点	
6	D７	不整円形	111	95	25	N-29°-E	ロクロ成形の「かわらけ」の破片６点、施釉香炉の破片２点、小型の鉄剣片１点、鉄釘６点、銭貨「寛永通寶」８枚、人骨片 115点、	
7	C７	円形	103	95	19	N-23°-W	ロクロ成形の「かわらけ」５点、銭貨１枚、鉄釘２本、人骨片７点	
8	E６	不整楕円形	113	65	30	N- 9°-E	鉄釘１本、人骨片20点	
9	C６	楕円形	101	78	7	N-80°-E	ロクロ成形の「かわらけ」の破片３点	
10	E６	楕円形	(87)	45	22	E- 3°-E	銭貨１枚、人骨片２点	
11	F6･7	不整円形	98	70	12	N-65°-W	甕形土器の口縁部の破片３点、銭貨「開元通寶」１枚	
12	G９	円形	134	122	30	N-58°-W	手捏ね成形の「かわらけ」の破片３点、銭貨「寛永通寶」２枚と「元豊通寶」６枚、人骨片41点	

また、「かわらけ」以外の供献物として第６号荼毘墓より淡緑色の釉を施した香炉の破片が２点出土している。なお、第３号荼毘墓から出土した細長首の壷型土器の破片と第11号荼毘墓から出土した甕形土器の口縁部の破片は荼毘墓に伴う遺物ではなく外からの流入物と考えられる。

銭貨は第２・４・６・７・10・11・12号荼毘墓より計29枚が出土した。銭貨の中には熱により変形したり数枚が熔着した状態で出土するものもあり、荼毘墓より出土する銭貨の

特徴といえる。これらの銭貨は土壙墓から出土しているものと同じ六道銭で、銭貨の種類は「寛永通寶」が多くを占めるが、「元豊通寶」や「開元通寶」もみられる。「開元通寶」も中国からの渡来銭である。

鉄釘は第４・６・７・８号荼毘墓より出土しており、なかでも第４号荼毘墓からは８本出土している。

人骨片は第１・２・４・６・７・８・10・12号荼毘墓より出土しているが、それらは覆土の中に骨粉として含まれる以外に、小さな白色の細片として出土しており、原型をとどめるものは数少ないが、頭頂骨・鎖骨・肋骨・大腿骨など部分的に判明できるものもある。

また、特殊な遺物として第２号荼毘墓より煤の付着した扁平の玉石が１点、第４号荼毘墓より笊状に編まれた竹製品の一部、第６号荼毘墓より小型の鉄剣片が１点出土している。

以上のように出土した遺物から推察して、これらの荼毘墓は近世の庶民の墓と考えられる。なお、徳川八代将軍吉宗の治世当時、享保年間(1716～1736)に「人を葬る時、六道銭とて銭六文を棺中に入てうづむ事を厳に停止せらる(享保正記、享保記)」（『有徳院殿御実紀附録巻四』）とあり、六道銭の副葬を禁止している。この制度が徹底して行われていたのであれば、六道銭が出土する墓は享保年間(1716～1736)より古い時期のものである可能性は高い。

⑤ 火葬墓

火葬墓とは遺骸を火葬してから蔵骨器に納め、その蔵骨器を土坑に埋葬した遺構で、表土の除去作業中に蔵骨器が露出した状態で１基確認された。表土層から地山層を少し掘り込んでおり、地山に土壙が浅く残っている。蔵骨器は素焼きで蓋付の壺形蔵骨器が２点で、器内には焚焼処理された白色の焼骨片が入った状態で出土している。

これらの蔵骨器は形態が異なるが、土壙の底面を同じくし、隣接して出土していること、追葬の痕跡がないことから同時に埋葬されたと思われる。なお、土壙内からは供献品などが出土していないため、この遺構が構築された確かな時代を推定することは困難である。

３．調査の成果と課題

今回の調査の結果、向山遺跡は弥生時代中期後半から古墳時代にかけてと近世の墳墓が混在する遺跡であることが判明した。また、表土の除去作業時に採集された遺物の中に、素焼きの壺型蔵骨器が５点と陶質の蔵骨器片が１点、供献品と考えられるロクロ成形の「かわらけ」が３点、墓標・供養のために建立された組合せ五輪塔の空輪と風輪が一石からなる部分が１点と一石五輪塔の火・水・地輪の部分と火輪と水輪の部分の２点、六道銭と考えられる「寛永通寶」をはじめ「永樂通寶」「元豊通寶」「熙寧元寶」などの渡来銭が12枚あり、この遺跡が墳墓地として存在していたことを裏付けている。

特に、13基の土葬墓と12基の荼毘墓はこの遺跡を特徴付ける遺構で、出土した遺物により江戸時代の墓であることは確かであり、被葬者は供献品(副葬品)の貧弱さから見て庶民であろうという想像はつくが、遺体を無処理のまま埋葬する土壙墓と焚焼処理をした後そのまま埋葬する荼毘墓との違いはなにに起因するものであるのか？　また、埋葬された場所の違い（土壙墓はいずれも斜面に立地するが、荼毘墓の多くは平坦部に立地する）は何か？　など種々の問題は今後の詳細な検討と事例調査によって解明すべき課題といえる。

付表１　土器観察表

土器観察表には　番号　遺構　法量　器種・形態　調整方法　胎土　焼成　色調　備考の順に記載したが、その記載方法は以下の通りである。

・番号

番号は遺物番号で、発掘時に記録した順番に付してある。

・遺構

遺構は遺物が出土した遺構名または出土した位置を記載した。

・法量

口縁部の径(口径)、器高、底部の径(底径)についての計測値で、単位はcmである。ただし、推定値は(　)に、計測が不可能なものは「－」で示してある。

・器種・形態

器種は明確なものだけ記載し、形態は特徴的なものだけを記載した。

・調整方法

調整方法・施紋方法の特徴的なものを記載した。(R)は右回転、(L)は左回転を示す。

・胎土

砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒などが含まれているものについて記載した。なお、砂粒などを微・少量またはほとんど含まないものについては「精製」と記載した。

・焼成

「良好」「やや良好」の２段階で表現した。

・色調

「新版標準土色帖」を判断の参考とした。

・備考

接合情報や型式などを記載した。

土器観察表1

番号	遺構	法量(cm)			器種・器形	製作技法	胎土	焼成	色調	部位	備考
		口径	器高	底径							
16	3号茶毘墓	7.4	—	—	壺形土器、細長頸	口唇部に刻み、頸部に連続刺突紋と沈線紋 ヘラ磨き	精製	良好	淡黄褐色	口縁・頸部	27・31・32と接合
21	5号茶毘墓	—	—	4.2	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄茶褐色	胴・底部	
42	4号茶毘墓	—	—	4.6	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	赤色粒	良好	淡黄褐色	胴・底部	黒斑状にススが付着
45	4号茶毘墓	10.3	2.8	3.6	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡橙灰褐色	完形	
47	6号茶毘墓	—	—	4.4	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	砂粒	やや良	淡茶褐色	胴・底部	
49-1	6号茶毘墓	(13.6)	—	—	陶器香炉	施釉	精製	良好	釉;淡緑色	口縁部	
69	6号茶毘墓	(8.0)	2.6	4.2	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	橙色	口縁・底部	
70	6号茶毘墓	—	—	4.6	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡赤褐色	胴・底部	
71	6号茶毘墓	(9.4)	—	—	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄褐色	口縁・胴部	
80	6号茶毘墓	(9.8)	2.7	(4.6)	かわらけ	ロクロ成形 ナデ調整	精製	良好	淡赤褐色	口縁・底部	121と接合
81	6号茶毘墓	(10.0)	—	—	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄褐色	口縁・胴部	
89	7号茶毘墓	(8.4)	3.3	(4.4)	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	黄茶褐色	口縁・胴部	93と接合
99	2号土壙墓	7.0	5.0	3.1	染付猪口	紅葉紋の絵付	—	良好	乳白色	完形	
100	2号土壙墓	9.6	2.0	6.4	かわらけ	手捏ね成形 ナデ調整	砂粒 金雲母	良好	淡橙褐色	完形	
101	2号土壙墓	8.8	2.2	5.2	かわらけ	手捏ね成形 ナデ調整 底部内面に指頭痕	砂粒 金雲母	良好	淡黄褐色	完形	
102	2号土壙墓	10.0	2.4	3.5	かわらけ	手捏ね成形 ナデ調整 底部内面に指頭痕	砂粒 金雲母	良好	淡茶褐色	完形	
105	1号土壙墓	8.8	5.2	2.2	陶器丸碗	内面全体と外面上半部に施釉	砂粒 雲母	良好	釉;暗緑褐色	完形	
106	1号土壙墓	10.2	4.9	4.4	陶器丸碗	内外面に施釉	砂粒 黒色粒	良好	釉;淡黄褐色	完形	
108	39号溝	—	—	—	緩やかに外反	内面に竹管紋状の連続刺突紋	砂粒 赤色粒	良好	暗灰褐色	胴部	
109	39号溝	—	—	8.0	直線的に大きく開く	内外面にナデ調整	砂粒 雲母	良好	淡橙褐色	底部	
110	39号溝	—	—	—	緩やかに内彎	外面は粗いハケメ 内面はナデ調整	砂粒 雲母	良好	橙褐色	胴部	

土器観察表2

番号	遺構	法量(cm)			器種・器形	製作技法	胎土	焼成	色調	部位	備考
		口径	器高	底径							
114	6号茶毘墓	(8.6)	3.0	(5.2)	かわらけ	ナデ調整	精製	良好	暗黄茶褐色	口縁・底部	
118	6号茶毘墓	(13.8)	—	—	陶器香炉	外面の下部は無施釉	精製	良好	釉;淡緑色	口縁・底部	
127	11号土壙墓	(10.8)	1.5	(6.8)	陶器坏	回転ナデ調整	精製	良好	明赤茶褐色	口縁・底部	施釉前の素地
162-1	7号茶毘墓	9.5	4.1	5.2	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	橙色	完形	
162-2	7号茶毘墓	8.8	3.0	5.5	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	橙色	完形	
163	9号茶毘墓	—	—	4.6	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄赤褐色	胴・底部	
165	9号茶毘墓	—	—	3.6	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡赤褐色	胴・底部	
166	9号茶毘墓	—	—	5.6	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄赤褐色	底部	
173	14号茶毘墓	—	—	—	直線的に立ち上がる	外面は粗いハケメ 内面はナデ調整	砂粒 金雲母	良好	淡赤褐色	胴部	
180	7号茶毘墓	(9.8)	3.3	(4.8)	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄褐色	口縁・底部	185と接合
184	7号茶毘墓	8.2	3.0	4.6	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	黒色粒 赤色粒	良好	淡黄褐色	完形	
210	4号土壙墓	10.4	3.6	3.2	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	砂粒 赤色粒	良好	淡黄褐色	完形	211・212・223と接合
219	37号土坑	10.0	5.4	3.8	陶器丸碗	絵付	—	良好	乳白色	完形	
222	4号土壙墓	11.4	3.2	6.6	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄灰褐色	完形	254・256と接合
226	46号土坑	(39.0)	—	—	甕形土器 頸部は「く」の字に屈曲	頸部内面は接合により肥厚、内外面ともに横ナデ調整	砂粒 金雲母	良好	茶褐色	口縁部	外面に黒斑状のススが付着
230	29号柱穴	(19.8)	—	—	口唇部内側に段	ナデ調整	砂粒	良好	茶褐色	口縁部	
231	29号柱穴	—	—	—	僅かに内彎	外面はハケメ調整、内面はナデ調整	砂粒 雲母	良好	暗茶褐色	胴部	
234	封土	—	—	—	直線的に立ち上がる	連続刺突紋と沈線紋を斜位に施紋	砂粒 石英	良好	茶褐色	胴部	
236	4号土壙墓	10.0	3.3	3.2	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡橙灰褐色	完形	253と接合
250	1号火葬墓	12.6	22.0	14.8	壺形蔵骨器 最大径が肩部、蓋に摘	素焼き 輪積み痕が顕著	砂粒	良好	橙色	ほぼ完形	
251	1号火葬墓	12.8	24.2	13.2	壺形蔵骨器 最大径が肩部	素焼き 輪積み痕が顕著	砂粒	良好	橙色	ほぼ完形	

土器観察表3

番号	遺構	法量(cm)			器種・器形	製作技法	胎土	焼成	色調	部位	備考
		口径	器高	底径							
259	25号溝	(15.6)	(14.5)	5.5	高杯、脚部が受口壺の口縁に類似	脚部に連続刺突紋(円孔)を3段横位に施紋	砂粒 石英	良好	橙色	ほぼ完形	
260	12号土壙墓	10.5	3.1	5.5	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	砂粒 赤色粒	良好	橙色	完形	
271	46号土坑	(17.2)	−	−	甕形土器、屈曲部を有し、僅かに内彎	内外面にハケメと横位のナデ調整	砂粒 雲母	良好	茶褐色	口縁部	
278	5号土壙墓	9.2	2.9	4.8	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	黒色粒	良好	淡橙褐色	完形	
279	5号土壙墓	(8.7)	(3.3)	5.5	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	橙色	ほぼ完形	
280	5号土壙墓	9.0	3.4	5.6	かわらけ やや歪み有り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	橙色	完形	
281	5号土壙墓	(9.8)	(3.3)	5.4	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄灰色	完形	
283	5号土壙墓	9.4	2.7	5.1	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄灰褐色	完形	
288	32号柱穴	−	−	−	ほぼ直線的に立ち上がる	器面全体に縦位のハケメ 内面はナデ調整	砂粒 石英 雲母	良好	暗黄褐色	胴部	
290	11号茶毘墓	(26.8)	−	−	甕形土器、「く」の字に屈曲	横ナデ調整	砂粒 金雲母	良好	淡赤褐色	口縁部	
295	7号土壙墓	(9.4)	2.5	(5.4)	かわらけ	手捏ね成形 底部外面は粗い横ナデ調整	砂粒 黒色粒	良好	淡赤褐色	口縁・底部	
303	7号土壙墓	(8.6)	−	−	陶器、僅かに内彎気味	施釉、ナデ調整	精製	良好	釉;赤茶褐色	口縁部	
309	8号土壙墓	11.2	2.2	7.2	かわらけ	手捏ね成形 ナデ・ハケメ調整	砂粒 金雲母	良好	淡黄褐色	完形	
310	8号土壙墓	11.6	2.3	8.4	かわらけ	手捏ね成形 ナデ・ハケメ調整	砂粒 金雲母	良好	淡黄赤褐色	完形	
311	12号茶毘墓	(10.6)	2.4	(7.6)	かわらけ	手捏ね成形 ナデ、ハケメ調整	黒色粒 赤色粒	良好	淡黄褐色	口縁・底部	
328	12号茶毘墓	9.6	2.4	7.6	かわらけ	手捏ね成形 外面はナデ、内面はヘラ削り後ナデ調整	精製	良好	淡黄茶褐色	完形	全体にススが付着 329・330・332と接合
335	13号土壙墓	−	−	6.6	直線的に開く	ナデ・ハケメ調整	砂粒 雲母	良好	暗茶褐色	胴・底部	392・394と接合
370	7号土壙墓	−	−	5.0	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	砂粒 金雲母	良好	暗茶褐色	底部	黒斑状にススが付着、375・378と接合

土器観察表４

番号	遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	器種・器形	製作技法	胎土	焼成	色調	部位	備考
372	７号土壙墓	(8.6)	(2.3)	5.8	かわらけ	手捏ね成形 摩滅のため詳細不明	砂粒 赤色粒	良好	淡黄茶褐色	口縁・底部	
377	７号土壙墓	－	－	4.0	陶器、緩やかに内彎	施釉 回転ナデ調整	精製	良好	釉;乳白色	底部	
389	13号土壙墓	－	－	－	直線的に開く	内外面に横ナデ調整、丁寧な器面調整	砂粒 雲母	良好	茶褐色	口縁部	
395	13号土壙墓	－	－	－	土師器、屈曲部を有し、内面は肥厚	外面にハケメ調整、内に面ナデ調整、指頭痕が有る	砂粒 金雲母	良好	淡赤褐色	頸・胴部	外面にススが付着
396	13号土壙墓	－	－	(8.2)	緩やかに内彎し、強く開く	胴部外面に縦位のハケメ調整	砂粒 金雲母	良好	淡赤褐色	胴・底部	
399	13号土壙墓	(23.0)	－	－	甕形土器、屈曲部を有し、強く開く	外面はヘラ削り後横ナデ、内面は横ナデ調整	砂粒 金雲母	良好	暗茶褐色	口縁部	
403	13号土壙墓	－	－	(14.2)	須恵器坏蓋、端部が屈曲し直立	天井部の外面ヘラ削り 肩部ナデ調整	精製	良好	暗灰褐色	蓋部	
407	７号土壙墓	10.5	2.1	7.5	かわらけ	手捏ね成形 ナデ調整	赤色粒 黒色粒	良好	淡黄赤褐色	完形	410と接合
409	７号土壙墓	(9.8)	3.4	(4.8)	かわらけ	ロクロ成形 ナデ・ハケメ調整	赤色粒	良好	淡橙褐色	口縁・底部	416と接合
415	７号土壙墓	(10.0)	2.2	(5.0)	かわらけ	手捏ね成形、ナデ・ハケメ調整、指頭痕が有る	赤色粒	良好	暗褐色	口縁・底部	
422	34号溝	10.6	(24.3)	－	弥生土器、細長頸の壺形土器、最大径が胴部の下半	頸部に凹線紋２本と円形紋、胴部は綾杉状の条痕紋	砂粒 赤色粒	良好	淡橙褐色	頸・胴部	中期の須和田式土器と同型
427	９号土壙墓	7.9	2.8	4.0	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	橙色	完形	
430	12号茶毘墓	10.0	2.4	6.6	かわらけ 凸状底部	手捏ね成形 底部は無調整	砂粒 石英	良好	橙色	完形	
434	57号土坑	(13.6)	1.7	(7.2)	須恵器坏蓋、端部が屈曲し直立	ヘラ削りとナデ調整、僅かに自然釉	砂粒	良好	暗灰褐色	蓋部	
449	33号溝	－	－	－	僅かに外反気味に強く開く	突帯状紋を２段に施紋	砂粒 石英	良好	暗茶褐色	胴部	
450	34号柱穴	－	－	－	陶器、僅かに外反し開く	施釉、内面はナデ調整、外面は回転ナデ調整	黒色粒 石英	良好	乳白色 釉;緑色	口縁部	
451	34号柱穴	－	－	12.2	須恵器高台付坏、底部が高台より突出	底部外は面ヘラ削り、内面はヘラ削り後ナデ調整	黒色粒	良好	暗青灰色	底部	
459	主体部	－	－	－	緩やかに内彎	摩滅のため不明	砂粒 長石	良好	暗茶褐色	胴部	

土器観察表５

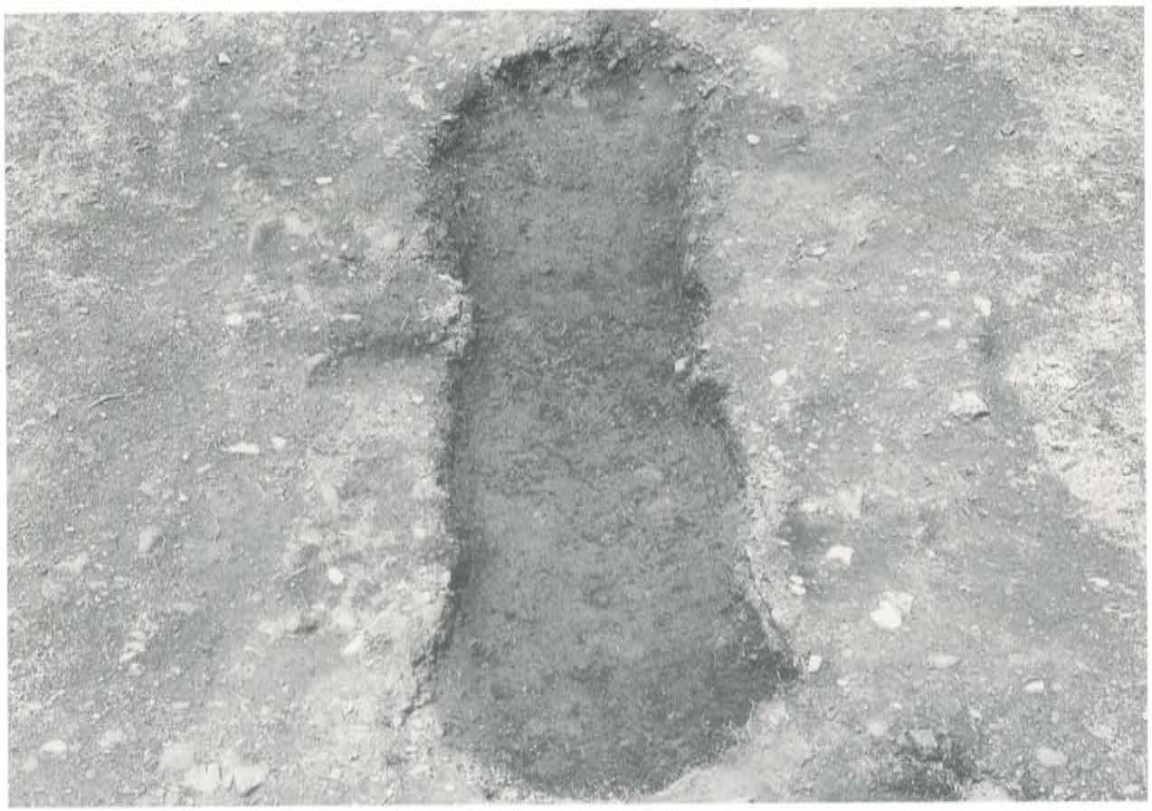
番号	遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	器種・器形	製作技法	胎土	焼成	色調	部位	備考
462	62号土坑	(18.0)	－	－	甕形土器、頸部が屈曲し外反	外面は横ナデ調整、内面はハケメとナデ調整	砂粒 金雲母	良好	淡茶褐色	口縁部	
465	封土	－	－	－	僅かに外反気味に立ち上がる	横位に２段の連続刺突紋	砂粒 石英	良好	暗褐色	胴部	
513	封土	(11.8)	－	－	僅かに外反気味に強く開く	内外面にナデ調整、指頭痕が有る	砂粒 石英	良好	赤茶褐色	口縁部	
522	封土	－	－	－	ほぼ直線的に立ち上がる	横位に２段の連続刺突紋	砂粒 雲母	良好	淡黄褐色	胴部	
530	封土	－	－	－	僅かな屈曲部を有し、直線的に開く	内外面に粗いヘラ調整	砂粒 石英	良好	暗黄褐色	胴部	
533	13号茶毘墓	－	－	－	ほぼ直線的に内傾	外面はハケメ調整、内面はハケメ後ナデ調整	砂粒 金雲母	良好	橙褐色	胴部	541と接合
535	13号茶毘墓	－	－	－	ほぼ直線的に内傾	外面はハケメ調整、内面はハケメ後ナデ調整	砂粒 金雲母	良好	淡茶褐色	胴部	黒斑状にススが付着
549	封土	－	－	－	内面に稜	押し引き気味の連続刺突紋を羽状に施紋	砂粒	良好	黒褐色	胴部	
552	北側壁面	－	－	－	弥生土器、壺形土器、緩やかに内傾	連続押し引きによるキャタピラ紋	砂粒 赤色粒	良好	橙褐色	頸・胴部	弥生時代中期の嶺田式土器
553	封土	－	－	－	ほぼ直線的に内傾	外面はハケメ後ナデ調整、内面はヘラ調整とナデ調整	砂粒 石英	やや良	暗褐色	胴部	
558	表土	11.2	22.3	16.7	壺形蔵骨器	素焼き 輪積み痕が顕著	赤色粒	良好	暗橙褐色	一個体	
559	表土	(13.5)	21.3	16.2	壺形蔵骨器	素焼き 輪積み痕が顕著	砂粒	良好	暗橙褐色	一個体	
560	表土	12.4	(23.7)	14.4	壺形蔵骨器	素焼き 輪積み痕が顕著	砂粒	良好	暗橙褐色	一個体	
561	表土	14.0	24.0	13.3	壺形蔵骨器	素焼き 輪積み痕が顕著	赤色粒	良好	暗橙褐色	一個体	
562	表土	12.2	23.4	14.2	壺形蔵骨器	素焼き 輪積み痕が顕著	砂粒	良好	暗橙褐色	一個体	
567	表土	10.4	3.5	5.0	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡茶褐色	口縁・底部	ススが付着
568	表土	8.0	3.4	3.9	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄茶褐色	口縁・底部	
569	表土	(8.0)	3.4	3.9	かわらけ やや凸状の底部	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡橙灰褐色	口縁・底部	
577	表土	－	－	9.2	陶器蔵骨器	施釉 ヘラ削り、ナデ調整	精製	良好	素地;灰色 釉;淡黄色	胴・底部	

付表２　鉄釘計測表

遺物番号	出土遺構	法量				備考
		(cm)			(g)	
		長さ	幅	厚さ	重さ	
255	４号土壙墓	3.0	0.6	0.4	1.2	頭部および先端部欠損
23-①	４号茶毘墓	4.2	1.0	0.6	4.9	先端部欠損
23-②	４号茶毘墓	5.4	1.0	0.5	6.0	先端部欠損
26	４号茶毘墓	4.0	0.7	0.4	7.2	先端部欠損
36	４号茶毘墓	5.1	0.8	0.5	3.6	先端部欠損
37	４号茶毘墓	5.6	0.7	0.6	8.8	先端部欠損
38	４号茶毘墓	2.8	0.5	0.4	3.7	頭部および先端部欠損
40	４号茶毘墓	8.5	1.1	0.6	6.2	完形
43	４号茶毘墓	4.6	1.0	0.8	4.3	先端部欠損
140	６号茶毘墓	5.5	0.4	0.4	2.7	先端部欠損
151-①	６号茶毘墓	3.4	1.3	0.7	4.3	先端部欠損
151-②	６号茶毘墓	1.2	0.5	0.3	－	頭部および先端部欠損
157	６号茶毘墓	7.7	0.4	0.3	7.5	ほぼ完形
158	６号茶毘墓	2.7	0.7	0.5	2.4	先端部欠損
159	６号茶毘墓	4.7	1.2	0.4	2.7	先端部欠損
176	６号茶毘墓	6.2	0.9	0.4	4.9	ほぼ完形
187	７号茶毘墓	5.2	0.5	0.4	3.2	ほぼ完形
188	７号茶毘墓	1.4	0.3	0.2	1.2	先端部欠損
202	８号茶毘墓	3.3	0.6	0.3	1.2	完形

写　真　図　版

1．遺跡の全景（南方上空から撮影）



2．第８号溝完掘状況（東方から）

3．第16号溝完掘状況（南方から）

4．第36号溝完掘状況(西方から)

5．第27号土坑完掘状況(南方から)

6．第35号土坑完掘状況(西方から)

7．第36・37号土坑完掘状況(南西方から)

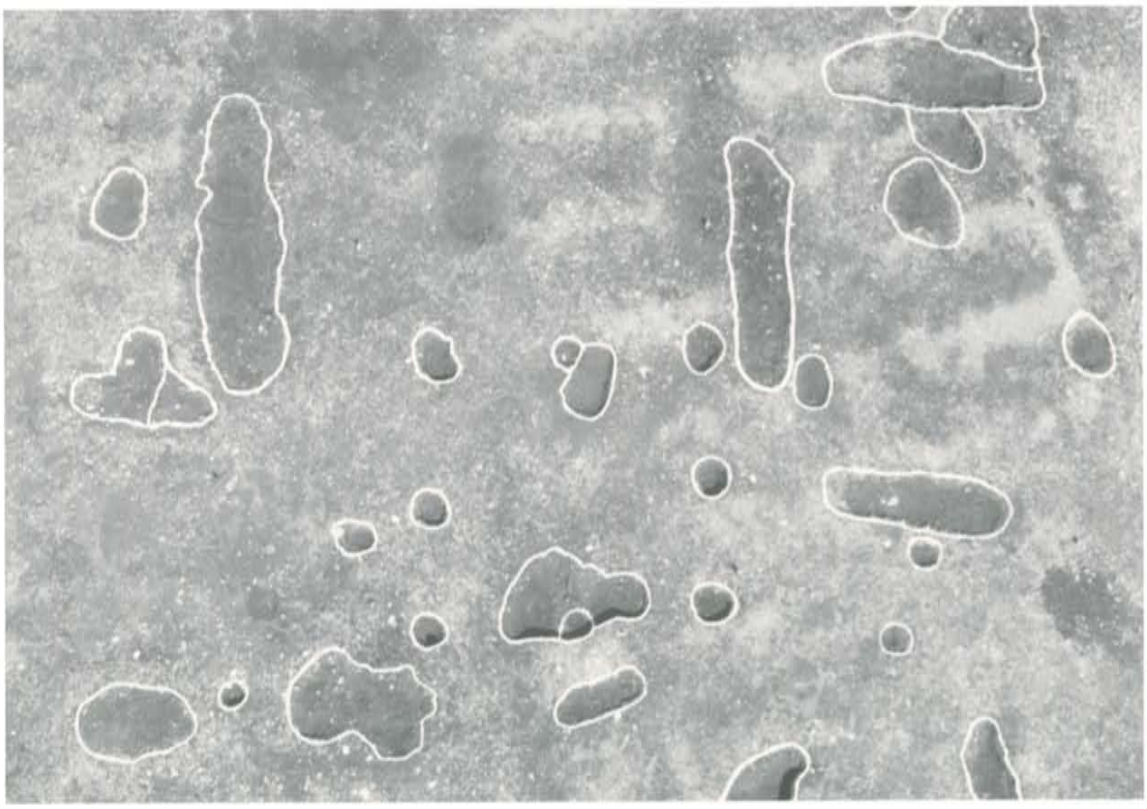
8．第１号方形周溝墓完掘状況（西方から）

9．第２号方形周溝墓完掘状況（南方から）

10. 第2号方形周溝墓主体部完掘状況(南方から)

11. 第3号方形周溝墓完掘状況(南方から)

12．第３号方形周溝墓南溝遺物出土状況



13．第１号掘立柱建物跡完掘状況(南方から)

14．第２号土壙墓完掘状況(北方から)

15．第２号土壙墓遺物出土状況

16．第４号土壙墓完掘状況(南方から)

17．第４号土壙墓遺物出土状況

18．第５号土壙墓完掘状況(南方から)

19．第５号土壙墓遺物出土状況

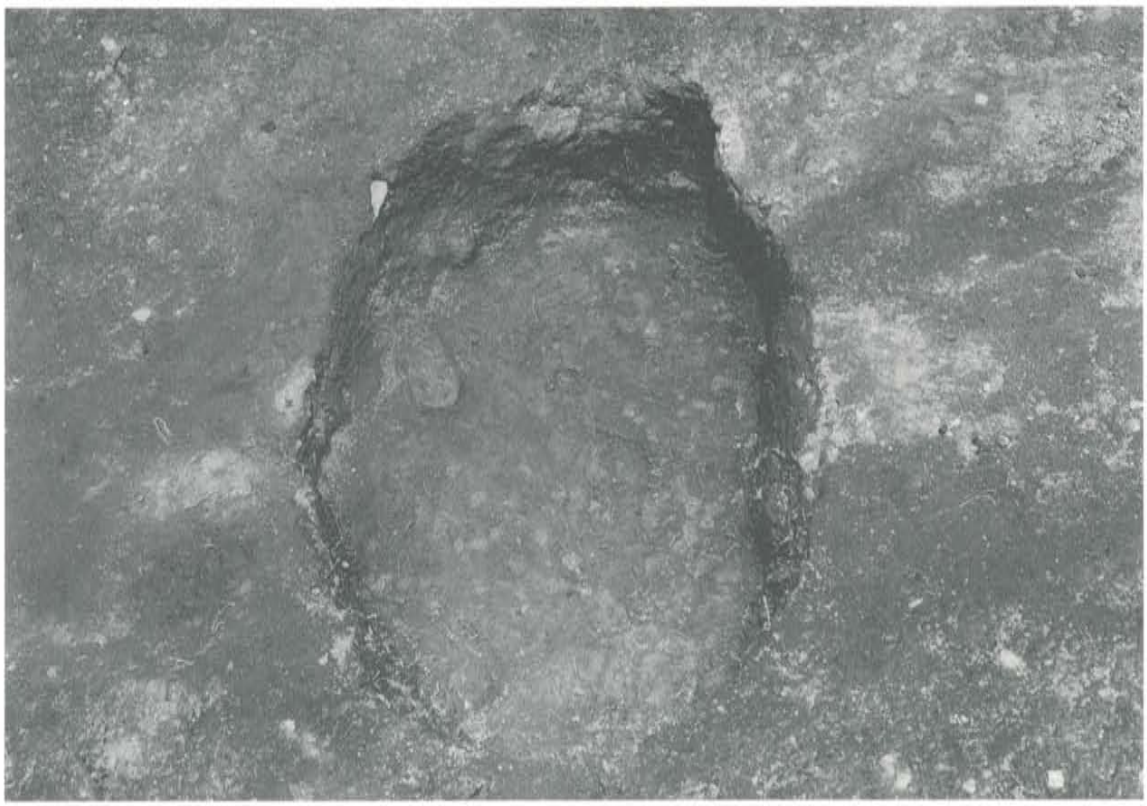
20. 第6号土壙墓完掘状況(東方から)

21. 第6号土壙墓遺物出土状況

22．第７号土壙墓完掘状況(西方から)

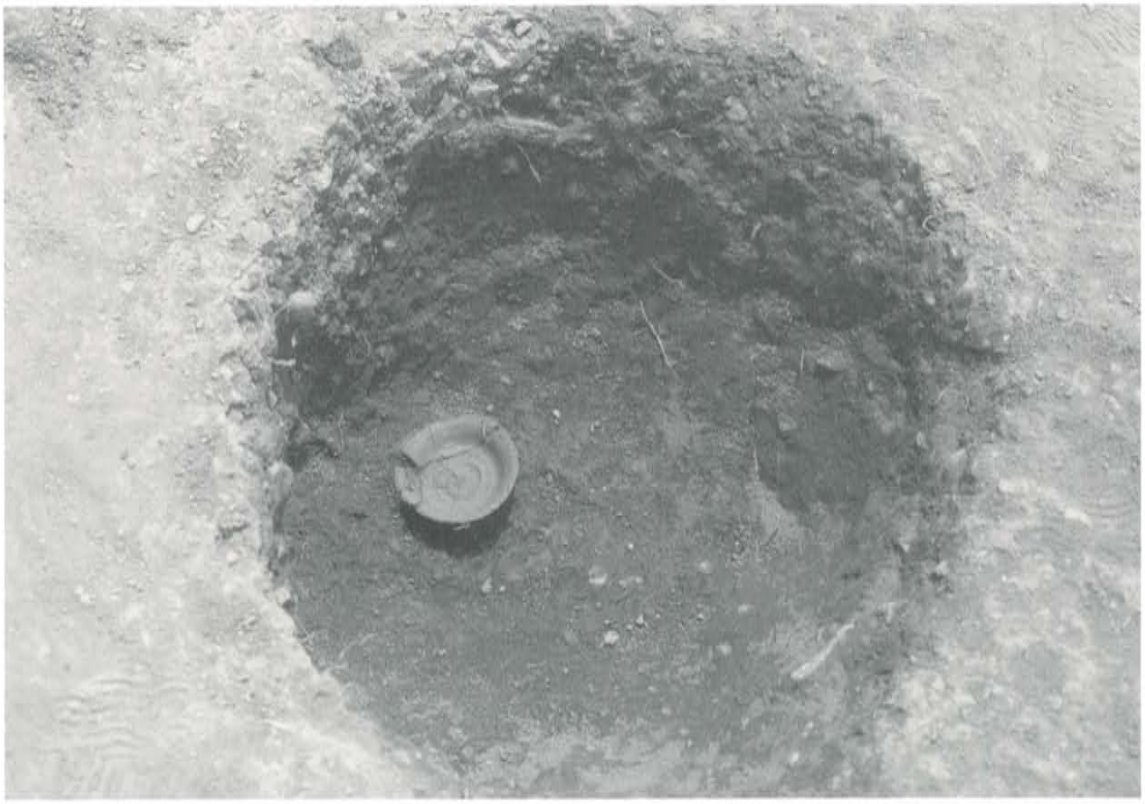
23．第７号土壙墓遺物出土状況

24．第８号土壙墓完掘状況（東方から）



25．第９号土壙墓完掘状況（東方から）

26. 第12号土壙墓完掘状況(東方から)



27. 第12号土壙墓遺物出土状況

28．第13号土壙墓完掘状況(南方から)

29．第13号土壙墓遺物出土状況

30．第２号荼毘墓完掘状況（東方から）

31．第４号荼毘墓完掘状況（北方から）

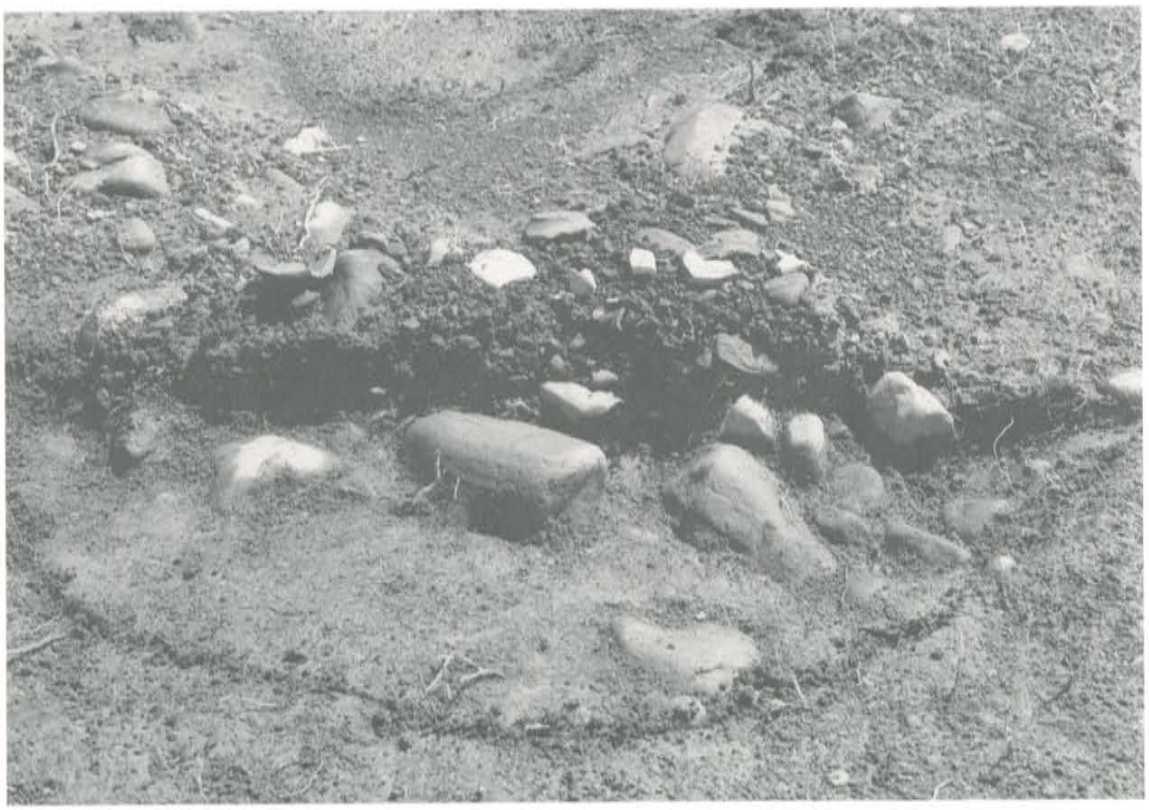
32. 第6号荼毘墓完掘状況(南方から)

33. 第6号荼毘墓遺物出土状況

34．第７号荼毘墓完掘状況(南方から)

35．第７号荼毘墓遺物出土状況

36. 第９号荼毘墓完掘状況(南方から)

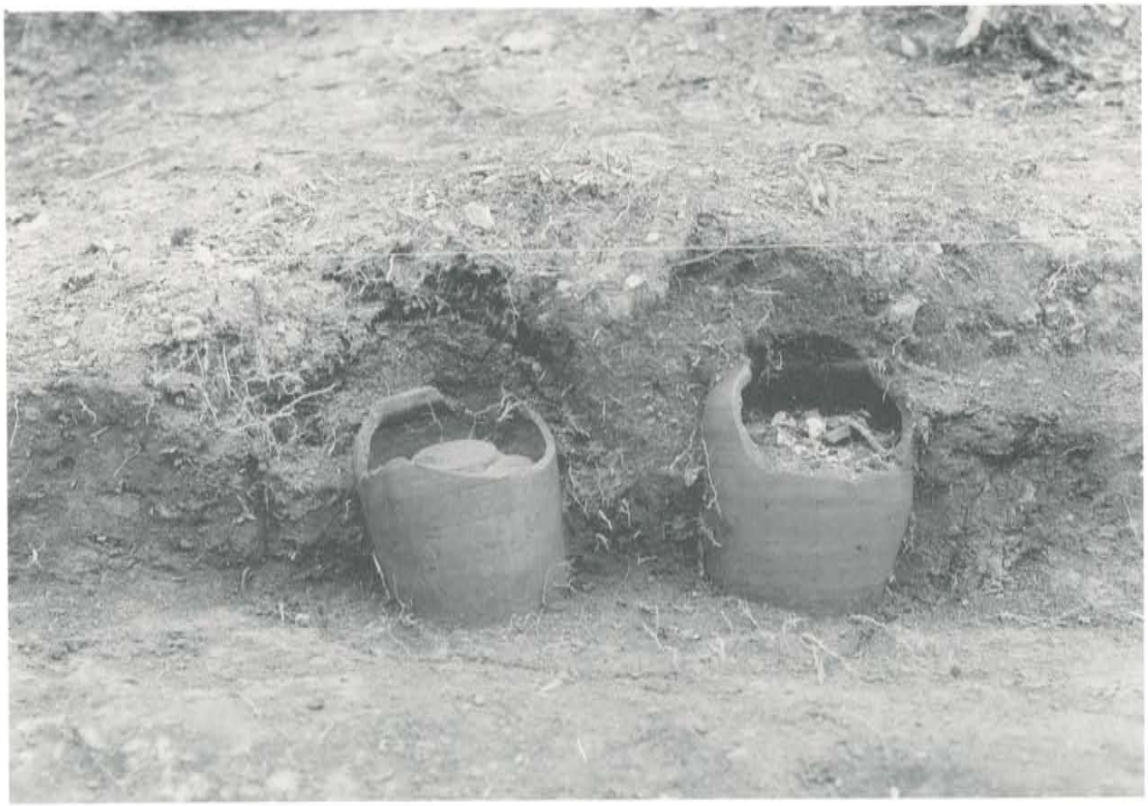


37. 第９号荼毘墓遺物出土状況

38．第12号荼毘墓完掘状況(東方から)

39．第12号荼毘墓遺物出土状況

40．第１号火葬墓完掘状況(東方から)



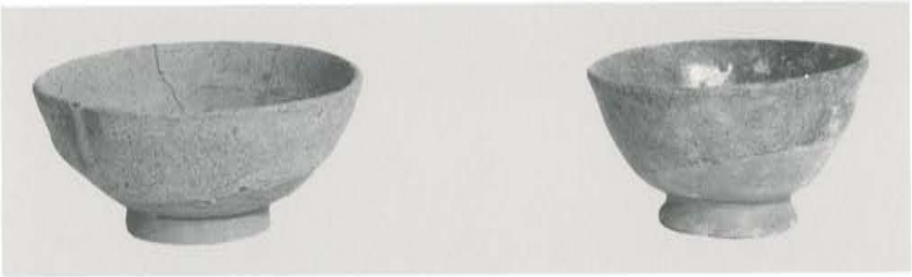
41．第１号火葬墓の遺物出土状況

42．第３号方形周溝墓出土遺物
１：弥生土器

43．第35号溝出土遺物
１：弥生土器

44．第37号土坑出土遺物
１：染付土器

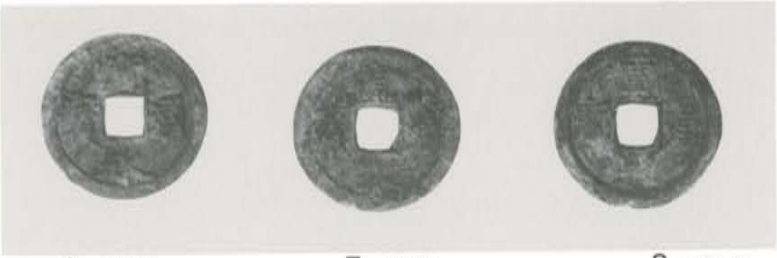
45．第41号土坑出土遺物
１：石製品



1-105　　2-106

3-107①　　4-107②　　5-107③

46．第１号土壙墓出土遺物（１）
１・２：陶質の丸碗　３～５：銭貨「寛永通寶」



6-107④　7-107⑤　8-107⑥

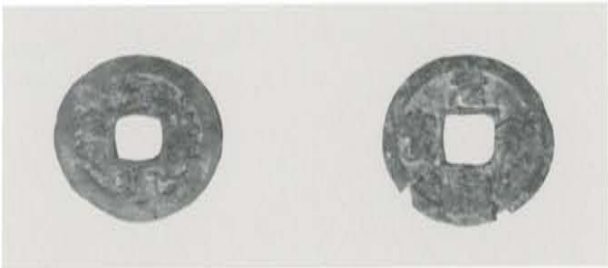
47．第１号土壙墓出土遺物（２）

６～８：銭貨「寛永通寶」

1-99

2-100　3-101

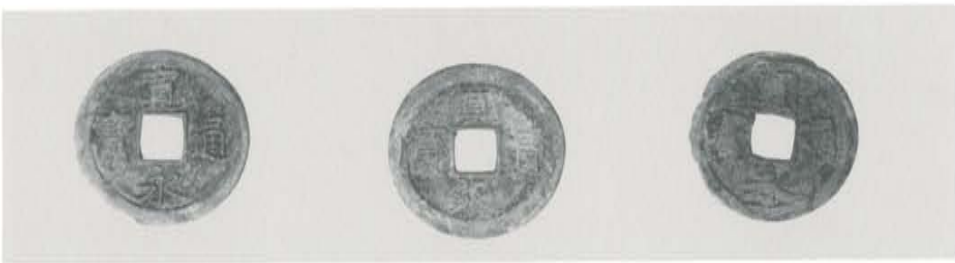
4-104



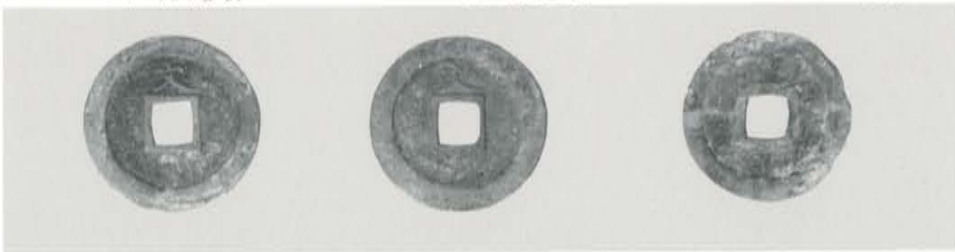
5-103②　6-103③

48．第２号土壙墓出土遺物

１：染付土器　２～４：かわらけ　５・６：銭貨「寛永通寶」



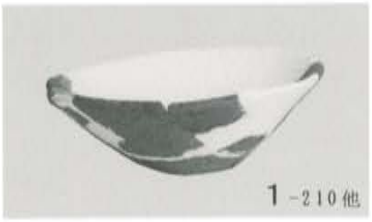
1-124①表　2-124②表　3-124③表



4-124①裏　5-124②裏　6-124③裏

49．第３号土壙墓出土遺物

１～６：銭貨「寛永通寶」

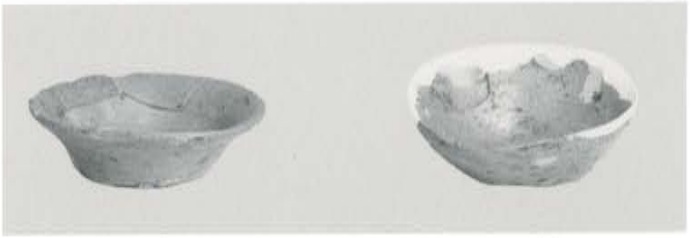

1-210他

2-236他　3-222他

50．第４号土壙墓出土遺物

１～３：かわらけ

1-280　2-281　3-283


4-278　5-279

6-286

51．第５号土壙墓出土遺物

１～５：かわらけ　６：銭貨「寛永通寶」

1-421他

2

3

4

5

6

52．第６号土壙墓出土遺物

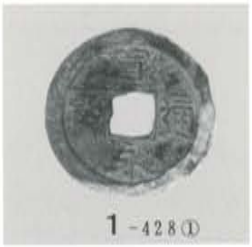
１：頭蓋骨、大腿骨　２～６：歯

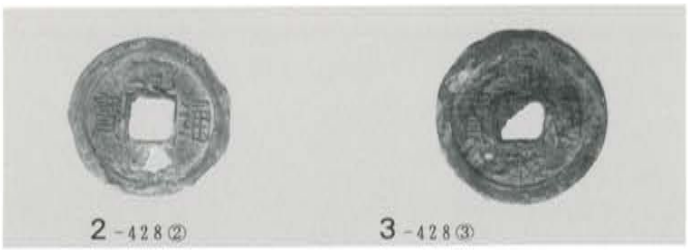
53．第７号土壙墓出土遺物

１～３：かわらけ

54．第８号土壙墓出土遺物

１・２：かわらけ





55．第９号土壙墓出土遺物

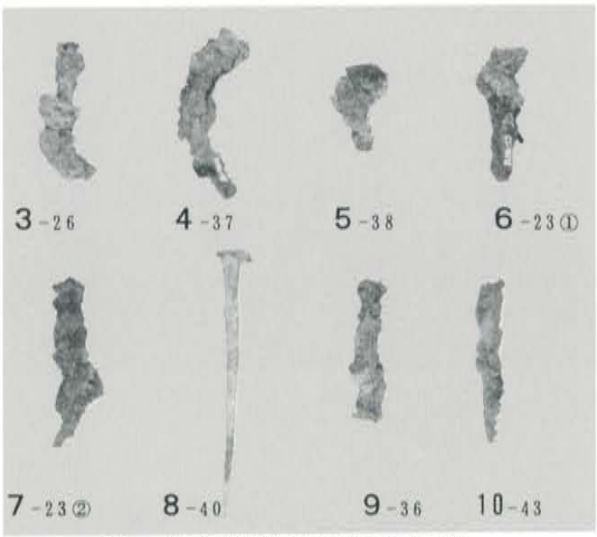
１～３：銭貨「寛永通寶」

56．第12号土壙墓出土遺物

１：かわらけ

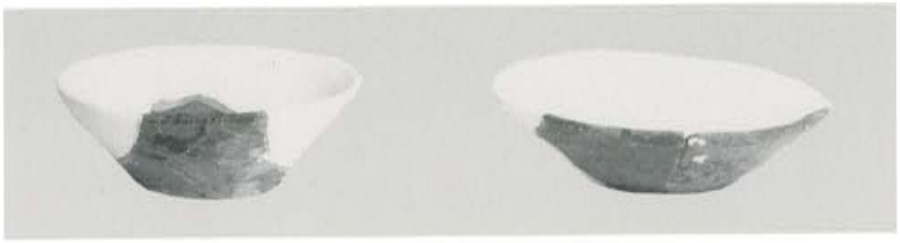
57．第３号荼毘墓出土遺物

１：弥生土器

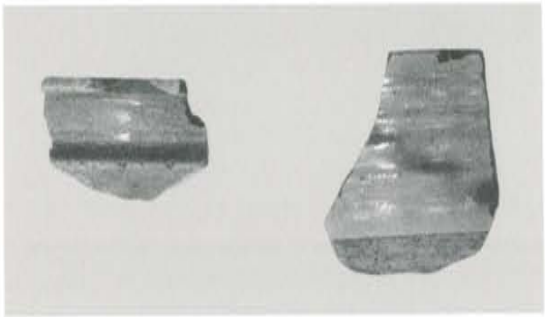


58．第４号荼毘墓出土遺物

１・２：かわらけ　３～10：鉄釘

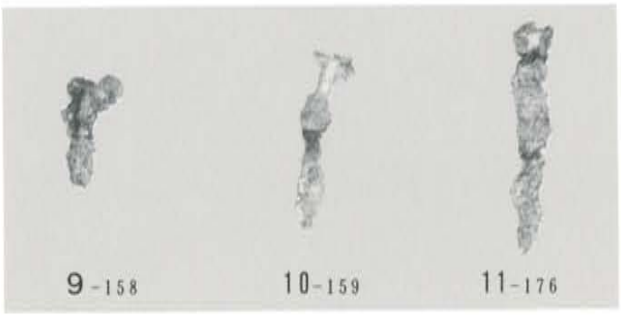


1-69　　2-70

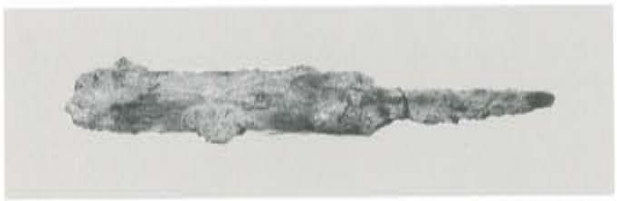


3-49　　4-118

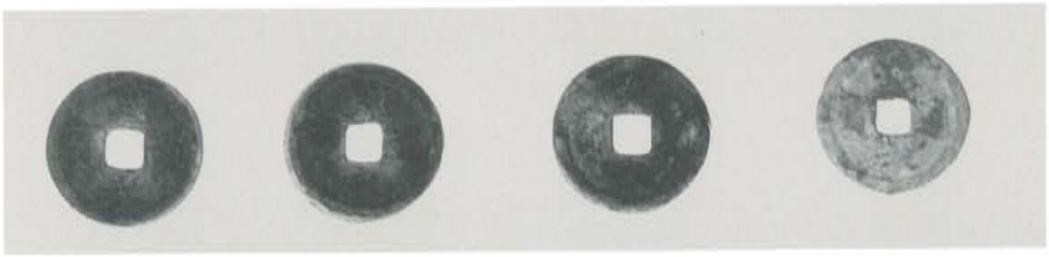
6-140　　7-151　　8-157



9-158　　10-159　　11-176



5-122



12-74　　13-84①　　14-84②　　15-84③

16-84④　　17-139①　　18-139②　　19-139③

59. 第6号荼毘墓出土遺物

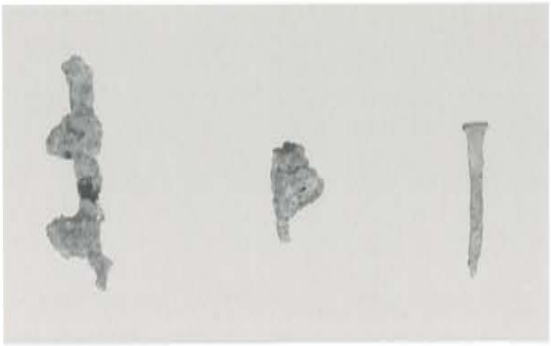
1・2：かわらけ　3・4：施釉陶器　5：鉄剣

6～11：鉄釘　12～19：銭貨「寛永通寶」

1-162②　2-184　3-180・185

4-162①

5-87・93

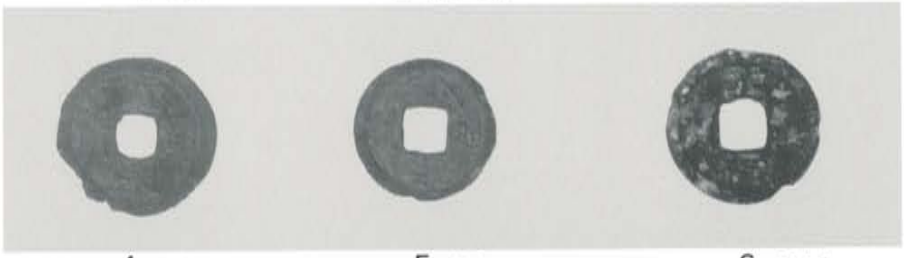


6-187　7-188　8-202

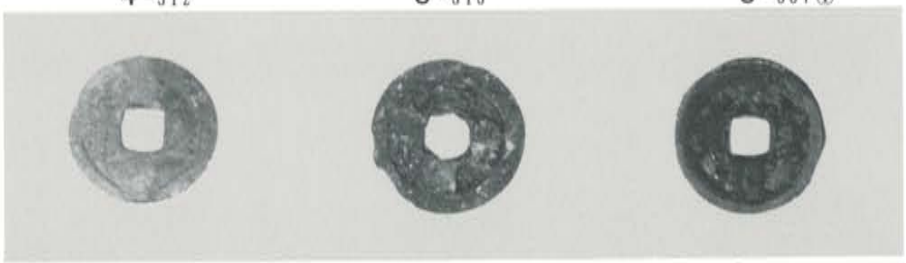
60. 第7号荼毘墓出土遺物

1～5：かわらけ　6～8：鉄剣

1-311　2-328・332　3-430



4-312　5-313　6-557①



7-557②　8-557③　9-557④

61. 第12号荼毘墓出土遺物

1～3：かわらけ　4・5：銭貨「寛永通寶」　6～9：銭貨「元豊通寶」

1-250

2-251

62．第１号火葬墓出土遺物

１～２：蔵骨器

1-558

2-559

3-560

4-561

63．表土層からの出土遺物（１）

１～４：蔵骨器

5-562

6-557

7-187　8-188　9-202

10-608

11-605

12-606

64. 表土層からの出土遺物(2)

5～6：蔵骨器　7～9：かわらけ　10～12：五輪塔

平成６年３月31日　発行

静岡県掛川市

向山遺跡発掘調査の記録

編集：静岡人類史研究所
発行：掛川市教育委員会
株式会社川島デベロップ
静岡人類史研究所
印刷：有限会社文書サービス